THE CENTRAL REVIEW

中央公論

秋期特輯號

第四十五年　第十號　第五百十三號

葉亀雄・大宅壯一

【實業印刷篇】東京[illegible]局長 石井光次郎。東京[illegible]部長 七海又三郎。[illegible]部長 久野[illegible]。外四氏。

雜誌チャーナリズム・全六十四項目

【總論篇】中央公論社長嶋中雄作。改造社長 山本實彥。廣津和郎。高田保。山田清三郎。外八氏。

【編輯篇】博文館編輯局長 森下雨村。新潮編輯主任 中村武羅夫。モダン日本編輯 菅忠雄。婦女界社長 都河龍。外十六氏。

【記事篇】佐々弘雄。寺島一夫。佐々木茂索。柳田國男。新居格。大宅壯一。馬場恒吾。來間恭。外十八氏。

【經營篇】講談社支配人 赤石喜平。文藝春秋社專務 鈴木氏亨。外數氏。

出版チャーナリズム・全四十項目

【總論篇】平凡社長 下中彌三郎。木村毅。外三氏。

【出版經營篇】新潮社長 佐藤義亮。アルス社長 北原鐵雄。改造社支配人 山本重彥。外十二氏。

一枚の新聞、一冊の書籍を讀む程ならば、どうしてヂャーナリズムに無關心でゐられよう。社會、思想、美術、文藝宗教、教育、ありとあらゆる問題の解剖もこの本質を知る事なしには不可能だ。現代は正にヂャーナリズムの世界である。この職業に志す人々は素よりいづれの智的分野に於て活動するにもヂャーナリズムに關する知識の有無、利用不利用は實生活に測り知られざる影響をもつ。本講座によつて一九三〇年の義務教育たり、必須科目たるヂャーナリズムの知識を獲得することは刻下の新生活戰術である。

上記の[illegible]を[illegible]チャーナルン[illegible]つたる[illegible]人生の[illegible]物語は諸君を[illegible]し、[illegible]し、[illegible]せしめるであらう。

本講座批評の一部

緒方竹虎 本講座が日本の新聞の進展を正しくする上に、良友となり、批判者となり、敵國とならんことを一新聞人として切望する。

嶋中雄作 本講座は現代の尖端的出版であり、一九三〇年日本の一大ドキュメントである。

中村武羅夫 これこそ現代社會に取つて必須的勢力たるヂャーナリズムに對する研究であり、ヂャーナリズムに携る人々を養成する大學だ。

▲原稿募集
（詳細は内容見本を今すぐ見よ）

▲九月下旬豫約募集開始
（同時に實物は店頭に!!）

東京市京橋區楓町八 梅田ビル
株式會社 内外社
電話京橋(56)六三七七番
振替東京七六八四九番

猶太人ジュス

革命的大衆文學の世界王座

フオイヒトワンゲル著・谷譲次譯

果して!!熱讀絶讚遂に六十五版を突破す!

「ジュス」一巻現れてアマゾンの如く悠々とヒマラヤの如く巍然と、群小讀物を一蹴して今し大衆文藝の王座に就く。身分賤しく智慧豐かなる絶世の美男彼ジュスを廻つて狂亂痴愚の限りを盡す皇帝貴族騎士美姫妖婦僧侶の一大レビュウ。雄大艶麗古今に比なく、肉臭咽ぶ許りのエロチシズムと華かなる反逆兒の面影、新しきスリルは毎頁に滿つ!!

ジュスを用心しろ!!

こんな言葉が流行り出したカフエで、ダンスホールで、盛り場の一隅で或は又ビルデイングの片隅で、例へば、こんな風に……

「踊りに一ぱいつきあはないか?」

「ホッホ、大さう、くらしむきがよろしいやうですな。」と、横合から、一人がいとも輕く、

「おい、ジュスを用心しろ!」

或は又退社後の化粧室で、

「あら、あなたのヴァニチイ・ケイス、とてもすてき、こんなのはないわ。」

「フフ、ヤに風向きがいゝわね。」と、第三者のダッチ・カットが、いともかろやかにそして朗らかに

「だから、ジュスを用心しろッてんぢやアないの。」等々等々。

定價一圓五十錢　四六判七百頁送料十二錢

東京驛前丸ビル　振替東京三四番

中央公論社發行

◆「俺の村」生活素描……寺島彦市…一八七
◆實を結ばぬ勞働……御崎津多雄…一九〇

江木翼論……馬場恒吾



秋[illegible]

安田靫彦筆

◇中井賢藏氏新著◇

—『高尚な理論を極めて平易に説き一々納得さす』—

好評激甚

日本婦人のゆくて

四六判最上製美本
全壹册四百頁箱入

正價金貳圓
送料十八錢

太平洋時代は來た世界の耳目は東洋にそゝがれ日本が其焦點にあることは誰か拒まう。然るに我國の女性や如何に！『闇雲に塞されつゝも東嶺月兎を待詫ぶ』姿こそ我國婦人の現狀ではあるまいか。そこに本書がある。本書は娘として妻として母として將又社會人としての婦人の道を照明せるもの・肺肝の字・熱血の句・高遠の眞理を簡明に說き讀者をして一々『おゝそうだ』と納得せしめずにはおかぬ明書である乞ふ一本を購ふてこれを事實に徴せしめよ。

目次

第一婦人問題：囚はれた男尊女卑の觀念：婦人の解放は必然の歸趨：女權の確立と經濟的進出：極端な職業の進出は家庭を破壞する：家庭の破壞防止策：婦人の經濟的領域：經濟國難に直面して婦人に檄す：**第二女性の道行**：動物に現れた男性本能：動物に現はれた女性本能：女性の天分：獨立婦人の涙：**第三結婚**：結婚の目標：結婚制度の變遷と現代結婚の批判：理想としての戀愛結婚：現實としての協約結婚：**第四主婦に求む**：素顔よりも身嗜み：笑顔に勝る化粧なし：笑顔は健康と愛から：愛と健康の外に智の光：**第五胎教**：胎教の必要：姙婦の望ましき情感：**第六母と子**：子への愛：子への苦しみ：子への歡び：**第七母性禮讃**：**第八母性愛**：**第九産兒とその制限**：産兒に就て：産兒制限に就て：**第十家庭の教養に就て**：其必要：其目標：其方法：**第十一むすび**：

山名正太郎著 思潮文獻 **日本自殺情死紀** 自殺情死三千年史：遺書及絶筆集：自殺家印象錄自殺論等なり （三版） 正價金貳圓 送料十八錢

岡田稔著 西鶴 **日本永代藏詳解** 西鶴町人物最初の作で金を描いて深刻を極めたり唯一の註釋書 （最新刊） 金貳圓八拾錢 送料十八錢

有ヶ谷靜堂著 **支那書道史概說** 時代的系統的に沿革を述べ書家を月旦し作品を批評したものである （大好評） 金五圓八拾錢 送料廿七錢

大關增次郎著 **カント研究** 近世哲學史上に巨木の如く聳立つカント哲學大系を思惟開展の順に詳述せり （三版） 金七圓八拾錢 送料廿七錢

日高瓊々彦著 **國家に及ぼす宗教の害毒** 全宗教を否定せる大論文一讀快を叫ぶべき痛快書 （三版） 金壹圓八拾錢 送料十二錢

滋賀貞著 **世界大戰史概說** 情味に富んだ筆を以て簡明に大觀を叙し挿畫地圖も亦豐富である。 （最新刊） 金貳圓八拾錢 送料十八錢

東京市神田區一ツ橋通町三　**大同館發行**　振替貯金口座東京八七貳番

國民生活の保障に對する財源

――(卷頭言)――

日本國民の一人々々が國富全體に對して例外なく各々一千八百圓の持分を有すると云ふ一應之を想定して――然らば何人も他の同胞の利益と幸福とを犠牲とすることなくしてはそれ以上の巨富を擁有することは出來ぬ筈だ。

國民の一人が獨り暴富を享有することに就ては過去に於て之を糾明する種々の學說が唱へられた。而して今日そのすべての謬說なることは既に極めて明白となつた。

之れからの問題は――或は今日の問題と云つてもいゝ――は如何にして各人に夫れ〳〵其正當なる持分を保障するかに在る。斯うした具體的の問題になると解決がなか〳〵むつかしい。一千八百圓と云ふ額からしてが正しい計算なりや否やも疑はしい。併し計算がむつかしいと云つても、然うした持分の儼存する事には一點の疑もあり得ない。正確のところが判らなければ姑く宜い加減の所できめて置いてもよからう。それにしても各人に同額の持分を又は其の享樂を保障すると云ふは少くとも技術的に不可能に近い。そこで已むを得ずんば失業傷害・疾病・老癈保險の極めて綿密完備なる施設にでも賴らうか。本來の企圖から謂つて斯の如きは九牛の一毛に過ぎない、それだけ其の施設は極めて綿密完備なることを必要とする。不完全なものを申譯的に拵へて之で滿足しろと云ふのは横着なる官僚の言ひ草である。

すると財源をどうすると云ふ問題が起る。國防の充實だ産業の保護獎勵だと國庫の歳出は膨脹する一方である、加之昨今の不景氣で租稅其他の收入の見積りは遠慮なく外づれる。之れも緊縮だ彼れも繰延べだと云ふ際何處に新しい財源を見出し得る餘地があるか。ふだんでも社會事業に關する施設は政治家諸君に依つて事實大に輕蔑虐待されて居つた。況んや今日の如き財政難の時代に於てをや。

併し之は今の政治家の考だ。國民大衆は之とは全く違つた見解を有つて居る。彼等は、各人に正當なる持分を保障する方面は技術的に困難だとしても、同胞を犠牲にすることに依つて正當なる持分以上を擁する者に、假令それは一時的にでなくとも、其の餘分の富を吐き出させることは、何等の面倒もなく出來ることだと信じて居る。技術的にどうするかは學者の間にも自ら定論あり茲に細說するを略するが、政治家にして少しく社會的正義に目ざめ少しく傳統に抗爭するの勇氣を振へば、斯んな事は譯もなく出來るやうに私も思ふ。

何れにしても「我々は一人々々正當の持分を有する、同胞を犠牲にして獨りが餘分の巨富を擁するは許し難い」とする大衆の常識の、今や漸く廣く強く根を張りつゝあることは、時節柄頗る注目すべき現象である。

中央公論



第四十五年第十號
十月號
第五百十三號

マルクス勞働價値說の擁護

櫛田民藏

目次

一、價値論爭の意義
二、「マルクス價値論の價値論」を讀む
三、商品交換における價値の必然性
四、商品交換における使用價値捨象の必然性
五、複雜勞働と價値法則
六、勞働の生產物にあらざるものの商品形態と價値法則
七、マルクス批判者の批判

一、價値論爭の意義

「改造」八月號には、「勞働價値說は支持し得らるゝや」と題する九州大學教授高田保馬氏の論文であり、マルクス勞働價値說の批判である。要は次の四點にある。一、互に交換せらるゝ諸商品には共通なる要素を必要としない、二、之を必要とするマルクスの論證は不備不完全である、三、マルクスはその價値法則から勞働生產物にあらざるものが價格をもつ所以を說明しない、四、複雜勞働の單純勞働への還元に關するマルクス說及び之が解說者の諸說皆誤りである云々。私のこの一篇は、教授のかの論文を問題とする。

何故問題とするか。かの論文を讀まれた人々の知られるであらう如く、また私が以下順を追ふて論證する如く、教授の主張は、商品の價値は生產からでなく交換から、そして結局に於いて消費から生ずると云ふにある。教授は自から他のマルクス批評と異なることを言明せられるに拘らず、この主要點において共通する。

經濟學の特殊目的は、價格及び利潤の說明にあり、而してマルクスの勞働價値說は、これらの諸現象を歷史的に特殊な形態をとれる物質的生產の基礎において把握する。マルクスにおいては、價格及び利潤は、價値及び剩餘價値の現象形態であり、價値及び剩餘價値は結局において生產に支出せられた人間勞働に歸着する。マルクス批評家は之を拒否するために努力しつゝあるが、之を拒否することは畢竟利潤が剩餘勞働にもとづくものでないと云ふことを理由づけるためである。價値論爭と云へば一見極めて抽象的でどうでもよい事のやうであるが、やはり現代の鬪爭から離れたものでない。

マルクス批判者の常套手段は、現に行はるゝ生產方法の歷史的特質を無視するによつて之を一般化することだ。かくて資本の生產は單に商品の生產となり、商品の生產は單に生產物の生產となる。かくて商品は單に生產物又は自然物となり、貨幣は單に交換の方便となり、資本は單に蓄積せられた物たるに過ぎないものとなる。つまり奴隸は黑色人種だと云ふや

うなものだ。こゝに一定の生產方法に特殊な社會關係は無視せられ、資本家的生產が人類永久の生產方法たらしめられる。

かくて商品は自然物又は生產物であり單に使用價値であるから、商品の價値は物の分量と人間の欲望との關係に依つて定まり、生產に支出せる勞働と關係するところなく、また價値表示としての貨幣も從つてまた價格も、從つてまた利潤も人間勞働と何ら關係をもたぬことになる。しかも商品としての生產物と單なる自然物又は單なる生產物とは、その自然形態のまゝでは區別せられず、區別は通常それが價格をもつか否かに係るが、商品が何故價格をもつかは貨幣の考察を前提し、貨幣の必然性は商品の性質に關する分析を前提して始めて理解せられるものであるから、商品をもつて單に使用價値として規定することは、商品を單なる生產物より區別するマルクス說よりもより俗耳に入り易いのである。

吾々は、商品の使用價値を否定するどころか、それなしには概して生活なく、それこそ人間生活の基礎事實たることを認める。それにも拘らず、吾々は商品が商品としての本質は物の使用價値にあるのでなく、それの生產に支出せられた人間勞働にあり、商品は使用價値たると同時に價値たることを主張する。論爭はそこから展開せられる。問題は剩餘價値の出所に關する前提に係るがゆゑに、批判者にしてもしこの點をくつがへし得れば、利潤が剩餘勞働に胚胎すると云ふことが否定し得られ、從つて利潤の按分形態としての利子企業利潤商業利潤及び地代の出所を暗らまし得る。マルクス批判者がこゝに最も力こぶを入れる所以である。

使用價値は捨象できない、複雜勞働の單純勞働への還元は不可能である、生產物にあらざるものは如何にして價格をもつか、等勞働價値說に對する常套的な批難は畢竟批評家の意識すると否とに拘らずつまり利潤辯護論となる。吾々は之と爭はねばならぬ。

二、「マルクス價値論の價値論」を讀む

本題に入る前、私はこゝにマルクス體系における再生産問題について、しかも一國の前提の下において理解せらるべき再生産の表式、平均利潤の表式及び差額地代等につき一二頁のうちにかゝるものを言はねばならぬハメにおかれてゐる。これは讀者が資本論全卷の通讀者であると前提することであり、また或る意味ではマルクス批判者と反批判者が互にマルクスの語句を押し問答して徒らに人を煙にまくと云つた感がないでもない。しかし高田教授の注文に應ずるためには已むを得ない。

私がこゝに本題とする「改造」誌上教授の論文の始めに云ふ。

『勞働價値論の立場自體に立ちて、それから生ずる當然の理論的歸結を追求し、この歸結が勞働價値說に認められてゐる種々なる事實と、ならびに勞働價値說の構成分子をなしてゐるある命題と一致し得るか否かを見ると云ふ仕方における吟味である。私は之を內在的批判と稱した。(中略)。之を承認することはマルクス價値論、從つてその濟經理論を根底から否認することになるはづであるが、マルクス主義陣營から何らの批評及び駁論を聞くことを得ざるは甚だ遺憾とするところである』(「改造」四七頁)。

更に論文の結末に云ふ。『私は一たび價値法則自體が是認せられるとする。而して、次に資本の利潤率平均の傾向を認める。さうするならば、價値法則と生產價格の學說の間に直ちに矛盾ありと云ひ得べきものでなからう。私にはこの調和をうち立てることが可能であらうかと思はれる。(中略)、とに角、私は一應この點マルクスの立場を承認して、たゞそれから來る必然の結論を考へたい。』(同上、七六、下)つゞいて云ふ。『マルクスの立場を承認して、それから來る結果を考察して』見ると、第一には資本家的『再生產は、不可能となり』、第二には、『個々の價格はその價値から無限に離れ』、從つて『生產物價格の總體がその價値總體に等しいと云ふマルクスの立場が根本から破壞せられ』、第三に『價値法則における平均原理

が肯定せられるときは、その差額地代の説は凡て成立しない」と。その理由に至つてはこゝには一言半句もない。價値法則と再生産の表式、價値法則と平均利潤及び地代の問題について、マルクスの誤謬と云ふことが約半頁のうちに斷言せられてゐる。たゞ『經濟論叢第三十卷第一號』における氏の論文がそこに指示せられてあり、『私の批判の根本は内在的部分にある。それ故に私見に對する批評を下さんとせらるゝ人にまづこの内在的批評の部分を破壞して、超越的批評に及ばれんことを希望する』(同上、七七頁)と述べられてゐる。

かう話をもちかけられては、反批判者は否やでも經濟論叢所載『マルクス價値論の價値論』約五十頁を讀んでかゝらねばならぬ。併しこの部分における教授の批判は極めて明瞭である。

第一の再生産の表式に關する批判は、單に社會總資本の問題である所のものを個人資本のそれにすり換へるに依て成立つ。各種生産部門間における均衡條件を示すところのかの再生産の表式は、それによつて現實の市場關係の内的關聯を明かにすることを目的とするものであり、生産資料及び消費資料の二大部門間の關係は社會總資本の問題として提起せられ、また兩者の交換は價値交換たることが假定せられてゐる。然るに、批判者はかの表式を以て個人資本のそれとすりかへ、價値交換に代ゆるに生産價格の交換を以てする。かくて二大部門の均衡條件は得られず再生産は單純再生産でも擴張再生産でも共に不可能だと結論してゐるのである。かゝる批判はかの表式に關する理解を缺く。それは現實の關係から抽象せられたものであるが、併し、勞働生産物の總價値又は社會資本の生産物の價値を問題とする限り、生産價格と價値とを區別する必要なくまた區別すべきでない。これマルクスにとりてはその價値法則の當然の歸結である。

第二、價値と生産價格に關する批判は、教授の場合には問題にさへなり得ない。何となれば教授は前記の如く既に價値と生産價格との調和の可能を承認せられるからである。マルクスと異なる意味においての「調和」だと云はれるかも知れないが、この場合教授の批判は自から「内在批判」と稱し、マルクスの價値法則を一應承認してそれより生ずる歸結に誤

調和なきや否やを吟味することだと云ふ以上、問題は單に價値法則ではなくマルクスの價値法則と平均利潤との調和にかゝる。マルクスの價値法則と平均利潤との調和は價値の總額は生產價格の總額に等しいと云ふより以外にない。自ら之を承認しながら、この點に關するマルクス批判とは何の意味か不可解である。問題にならぬと云ふ所以だ。

尤も假りに教授が「頗る氣がかり」とせられるボルトキイウイッチの「マルクス體系における價値計算と價格計算」と類似の立場にあるとしても（序に云ふ、教授は右氏が教授と同じことを書いてゐやしないかを氣にせられ「この想定の事實でないことを祈る」と云つてゐられるが、私は教授の書いたものを教授の說として受入れる。安心せられよ）批判はやはり當つてゐない。マルクスが示した平均利潤の表式は問題に不必要な繁雜を避け、各生產部門において剩餘價値率も資本の回轉も凡て同じと假定する外、商品の費用價格はその商品の生產に消費せられた生產手段の價値に等しいと假定せられてゐる。教授はこの點を問題とし、費用價格としての資本を生產價格において買入れたものとして計算し、價値と價格との「無限の離反」を指摘しやうとする。その示された數式は、資本の有機的構成の最も高いものであり、從つてそこでは生產價格は常に價値以上であり、しかも資本が何囘囘轉せられても價値には變化ないものとして計算し、かくて如何に價値と生產價格とが離反するかを見よと云ふ。だがマルクスの假定は、個々の商品についてではない。原料や機械や勞働力やその他資本に入りこむ個々の商品の價格は或は價値以下であり以下であるが、一產業の資本としてはこの差異は互に相殺せられ大體において（こゝに差異の生ずることはマルクス自から認むるところ）價格の總計は價値の總計に等しく、しかも一產業部門の資本でなく社會總資本を問題とする限りこの差異は生產價格相互の相殺によつて無視し得るものとなる。

價値と價格從つてまた價格の一形態としての生產價格との差異は現在の事實である。問題はこの事實に拘らず價値法則の行はるゝ所以を明かにすることであり、それに對するマルクスの答は社會資本を問題とする限り、價値の總計は生產價格の總計に等しいと云ふことである。これによつて利潤の出所が明かにせられる。平均利潤は社會の剩餘價値が各種生產

部門間の競爭を通じ資本に比例して分配せられたものに過ぎない。

第三、價値法則と差額地代に關する批判は單に誤讀に立脚するものでないか。教授の說によれば、マルクスは地代論において競爭は虛僞の社會的價値を作り出すと云つてゐるが、これは剩餘價値に非らざる社會的價値の存在を認むるものであり、從つて生產價格の總額は價値の總額に等しいと云ふ價値法則支配の根據をマルクス自から破壞するものだと云ふ。

生產價格の總額＝價値總額と云ふことは、產業の特殊利潤が凡て平均利潤に參加することを前提する。もし有利な生產條件における生產者の特殊利潤が何らかの制限により平均利潤に轉化せられないならば、そこには超過利潤が成立する。差額地代はその一揚合である。差額地代が剩餘價値の一部分たることは、一定條件の下に發生する工業の特殊利潤と異なるところがない。差額地代あるところにおいては、市場價値は生產價格總計より大であり、利潤總額＝剩餘價値の代りに平均利潤＋地代＝餘剩價値となる。それは同じ剩餘分配の計算の變更に過ぎないものであり、特殊生產部門における商品の價値は、その商品の全量を生產するために必要な勞働の分量に依つて定まる（或は平均勞働と云つても社會的に必要な勞働と云つても同じ）と云ふ法則は勿論妥當するのみならず、この法則の下においてかゝる分配の變更が發生するのである。

資本論第三卷第二部二〇〇頁（エンゲルス版）における『これ卽ち資本家的生產方法の基礎の上に競爭を媒介として遂行せられるところの市場價値による規定である。これは虛僞の社會的價値を產む』と云ふ一文中『虛僞の社會的價値』(einen falschen sozialen Wert)は『剩餘價値に非らざる價値』と云ふ意味では毫もなく、むしろ反對だ。剩餘價値の一部でありながら、それでないやうな外觀をもつところの社會的價値と云ふ意味だ。同種產業部門における競爭は（一物一價の法則)、價格を價値に一致せしめる。この場合、その生產條件を異にするに從つてそれぐ〵異なつた特殊利潤が發生する。有利な生產條件にある生產者は、同じ生產價格で賣つて尙ほ超過利潤（平均利潤を超ゆる特殊利潤）を得る。農業においては土地

附加價値にしてこの剩餘價値は地主に歸する。それは市場の競爭による平均利潤形成に與かり得ないものである、ことは、ちようど剩餘價値の存在を前提する。分配するものが存在して始めて分配は既定される。しかし資本家は此において、これは生産價格（費用價格＋平均利潤）が生産費であるから、地代として地主に歸する超過利潤は有利な生産條件に、從つてまた勞賃の利潤に對する比較的低下に關係なく、恰かも市場の競爭によつて産み出された價値たる外觀を呈する。

剩餘價値なきところには、土地使用料はあつても如何なる地代もあり得ない。不利な生産條件における生産費によつて市場價値が決定せられるならば、有利な條件におけるものには、第一に剩餘價値に相當する生産物の剩餘ができ、第二に從來資本の補償として充當せられた部分が剩餘生産物として浮くわけである。それらは共に差額地代として地主に歸する。農産物の價格騰貴によつて浮いたこの第二の剩餘部分は特に競爭から産み出されたかに思はしめるが、競爭が生産物を從つてまたそれに對象化せられた價値を産むわけはない。しかし、競爭の外觀に因はるゝものにとりては、この場合剩餘價値無しに地代が發生すると云ふ幻想を發生せしめるのである。

之を要するに三つの論點ともに批判の對象が理解されてゐない。經濟論叢所載『マルクス價値論における價値論』一篇は教授自から『内在的批判』と銘うつたものであつた。しかし『内在的批判』において批判の對象が理解せられてゐないものならば、換言すればもしマルクスから如何にして誤謬を見つけやうと云ふことが先に立つならば、それは『内在』でなくて始めから『外在』であつたことになる。

三、商品交換に於ける價値の必然性

『改造』所載の論文は、教授自から『外在的批判』と銘うつてゐる。『他の立場からの吟味』だと云ふことであり、教授自身の立場から『マルクス價値說の論證の仕方を分析吟味する』ことだと云ふ。それなら批判の規準として『他の立場』と

しての教授自身の立場が豫め十分明示せらるべきだらうと思ふが、それが全論のうちから探し求めて始めて得られる底のものであつたのは遺憾である。そしてこゝでも問題は批判の對象に係る。いくら『外在』だからと云つても有を無とし無を有とするならば批判は學問的には成り立たない。

マルクスの勞働價値説は、價値一般ではなく、資本家社會をふくめ商品生産に特殊な價値に關する。財の使用價値は、それが人間勞働の生産物たると否とを問はずまた社會の生産方法の如何に關せず存在する。それはあらゆる社會を通じて人間生活の物質的基礎であり、使用價値を作る勞働としての生産力發展のうちに人類社會の諸關係の全發展が求められる。だが商品の交換價値なるものは、私生産者社會即ち生産が分業と私有財産の下に行はるゝ社會でなければあり得ない。商品交換の特質、從つてまた交換價値の内實は何であるか。答、やはり商品の生産に支出せる人間勞働である。では何故に人間勞働は交換價値の内實であるか。答、私生産者社會における生産物所有の關係は、本來それの生産に支出せる人間勞働以外に成立ち得ないから。では如何なる過程によつて人間勞働は價値となるか。答、他の商品と關係するによつて『使用價値が捨象』せられるから。それは、どう云ふ形で表はれるか。答、交換者は交換に際し豫め『價値表示』をすると云ふ事實によつて。この最後の價値表示なる事實は商品所有者の希望目的の表示であり、それは未だ實現せられず、從つて觀念的過程だ。かゝる觀念的過程を物質的生活過程即ち社會的生産の反映として説明するところにマルクスの基礎理論がある。

私の信ずるところでは、これが教授の引用せられた資本論冒頭における商品分析に關するマルクスの文句の意味するところだ。そこには教授の問題とせられる商品交換においては、共通物としての價値尺度は何故必然であるか、またその共通物たる尺度單位は何故に如何にして勞働でなければならないかと云ふことが語られてゐる。しかるに教授に從へば、マルクスはそれをどこにも答へてゐないと云ふ。即ち教授は云ふ。

マルクスは『交換せらるゝ二種類の商品において同量の共通なるものゝ存することを説き、次にこの共通物が抽象的なる人間勞働の凝

お、體化せられたる勞働であることを[illegible]
[illegible]る勞働[illegible]
ことを主張してゐるにとゞまる」（『改造』八月號、八四頁下段）

だが、教授がマルクスを責めるためマルクスを引用してゐるその詞のうちに既に答がふくまれてゐるといふ。教授はマルクスが『共通物が抽象的な人間勞働の凝結、體化せられた勞働であること』を說いてゐると云ふ。人間勞働の凝結、體化せられた勞働とは、私生產者社會を前提してのことだ。それは勞働時間としての物の存在又は物としての勞働時間の存在（「人格の物化」又は「物の人格化」）を意味し、人間勞働が價値としての社會的存在樣式である。物の中に現實に勞働時間がふくまれてるなど云ふことでない。古今如何なる化學者も商品の中に勞働時間を發見したことはない（マルクス）。それは生產物が一定の社會的關係の下においてとるところの社會的資格である。生產物がかゝる『資格』を得るためには、換言すれば生產物が商品として『人間勞働の體化結晶』たるためには、第一には商品が人間勞働の生產物たること、第二に一の商品は必ずや他の諸商品と一定の割合において交換せられ得ることを條件とする。

商品の交換は程度の大小こそあれ必ずや分業の一定の發達を豫想する。而して私有關係は分業發展の結果である。尤も分業如何に發展しても生產が意識的に統制せられるならば商品交換はない。それ故に、マルクスが商品の本質を以て人間勞働の體化結晶として規定するときは、既に分業と私生產を前提する。この前提の下における交換は、共通物（價値の尺度單位）を必然とし、その共通物は必然に生產に支出せる人間勞働でなければならないと云ふのがマルクスの主張である。たゞ單に商品は凡て人間勞働の生產物だから勞働は價値の尺度（共通物）だと云ふのではない。後者はリカルド說であつてマルクス說の全部ではない。後者においては價値を作る勞働と使用價値を作る勞働とは區別せられてない。

教授はマルクスの價値規定をくり返へされるに拘らずこの點理解を缺く。それ故に商品交換における共通物の必然性及

び共通物が人間勞働たることを否定するのだ。交換が私生産者の交換であるならば、教授の所謂「サンタ派の數學の原理」はどうあろうとも交換者相互が平等の尺度單位を必要とすることは證明を要しない、商品社會における貨幣の存在はこの一切を證明して餘りある。貨幣は何であり、何故にまた如何にして生成するかを追求するならば、必ずや當面の問題に到達するが、こゝでは貨幣をぬきにした商品交換の問題である。

私生産者社會は、分業において、及び分業の結果の個人的占有によつて互に分離獨立化せしめられてゐるが、その同じ事實によつて生活の維持擴張のためには、必然にその生産物を交換しなければならぬ。從つて、私生産者の生産物は、互に他人の需要を目的とし、他人に讓渡し得らるべきものである。しかもそれは個々人の私有物である。それ故にそれは自分のものであり乍ら自分のものでない。自分のものたることと私有物たることは、元來それの生産に勞働を支出したと云ふ事實のうちに存在する。それは分業即ち特殊な生産的活動の結果であり、この結果を得るために勞働を支出したことが本來占有の基礎條件である。一見それと矛盾する種々なる財産形態の發展はこの基礎の上に說明し得られる。だが、個々人の生産物にしてもし讓渡し得られざるもの、卽ち社會の使用價値でないならば、それの生産に支出せる勞働は無意義となる。何となれば、それは既に他人の需要目的に生産せられ生産者自身に用なきものであるからである。それ故生産物が社會の需要に應ずることを條件としてそれの生産に支出せられた勞働は占有又は私有の本質を構成する。これ卽ちマルクスの所謂抽象的一般勞働であり私生産社會に特殊なものとしての社會的勞働の概念である。それは使用價値の捨象によつて成り立ち、本來個々人が生産に支出した勞働の對象化されたものに外ならない。勞働することは卽ち生産であり、生産は勞働力の支出を伴ふ。これ如何なる社會にも共通する事實だ。しかし私生産者としては商品の生産における人間勞働の支出と云ふ共通な事實以外に相互の關係を取結ぶ方法はない。誤解せられる勿れ、私生産者としてはと云ふのだ、人間相互の種々なる關係を形成するものがそれ以外に無いと云ふのでない。私生産者として人間はたゞ商品所有者としてのみ關係するので

あつてその他(資料において同樣)ないし商品は使用對象は人間的欲望の對象であるが、人と人とのあひだの交換過程においては、後にも述ぶる如く問題は使用價値でなくて價値だ。それ故にも生産者社會の人々相互の關係は生産における人間勞働の支出と云ふ如何なる社會にも共通な事實が實に同時にこの社會の特殊な關係を構成するのである。それは單に人々の意識のうちに成立つのでなくて生産のうちに客觀的に成立つ。そこに價値の現實性があり、價値意識は之を反映するに過ぎない。

教授が引用せられた資本論冒頭の小麥と鐵との設例は、商品交換に關係する諸問題を萌芽的にふくむものであり、就中右に述べたところの事實を語る。それは小麥と鐵だから現に分業を前提し(數十の生産部門と見ても問題に變りなし)、從つてまた鐵及び小麥に對應する人間の特殊な欲望の存在をも前提する。それらは互に交換せられ得るものであるから商品であり、從つて私生産物であり、それ故にまた共通物の必要をも意味する。かくてマルクスの分析がこの共通物は小麥でも鐵でもなくそれらの生産に支出せられた人間勞働だと云ふとき、私生産者社會の特殊な關係は人間勞働のうちに成立つことを意味する。だが如何なる社會においてもそうだと云ふのではない。『この兩者(小麥と鐵)の各々が交換價値たる限りかやうな第三者に還元し得るものでなくてはならぬ』(マルクス)(高田教授の譯文に從ふ)

しかるに教授はかの設例を次の如く讀む。

『單位量のAの交換價値はX量だけのBであると云ふことは、たゞ次の事實を意味するにとゞまる。市場におけるAの提供者はその單位量と引きかへに、Xを獲得することが出來る(Bの提供者の立場から云へば、まさにこれと逆のことが云はるべきである)。Aの提供者とBの提供者とのかゝる勢力の關係(傍點――筆者)のみがそこに示されてゐるに過ぎぬ』(同上、四九頁、下段)『X量の貨幣もY量の絹もZ量の金も相等しとせられる、相等しとせられるのはそれが互に交換せられること、卽ちX量の貨幣がY量の絹に對して交換能力をもつと云ふことに外ならぬ。彼等の間に求め得らるべき外見上の共通物は、AもBもCに對して交換し得らるゝ能力をもつと云ふことだ

けである而してこれはAとCとが又BとCとが交換せられると云ふ事に外ならぬ。交換能力以外の何ものの存在をも保證せぬ。而もそこに、異なれる商品には同量の共通物が存在すると云ふ。この論證に役立ち得る何ものかがあるか』（同上五一頁上段）。

これに依れば、マルクスの設例は、商品の需要供給の關係を示すにとゞまり、従つて價値はたゞ單に交換價値以外にないことを證明するものだと云ふ。これ商品價値の否定であり、理由はかの設例からマルクスの云ふやうなことは讀み出し得ないと云ふだけである。價値とは物に對象化せられた人間勞働である。重ねて云ふが、それは現に物のうちに勞働時間がふくまれてるなど云ふことでなく、一定の社會關係の下で物が受くるところの資格だ。それは超感覺的だ。しかし例へば汽車の中などであなたに始めて會つた人は、あなたが九大教授だと云ふことを眼で判かりやうが無い。それでもあなたが九大教授たることは厳然たる事實だ。陸海軍將校などは他所行はたいがい正服を着けてるから眼で判かる。それは店頭の諸商品に正札がついてるのと一見似た現象であるが、『正札』は價格の問題でそれ自體價値でない。商品は何故正札又は價格をもつか、これ價値問題であり、も早や『眼』の限りに非らず、自分の眼に直接見えないからと云つて特殊な事物の存在を一般に否定するのは早計でないか。マルクスはかの設例から價値を觀念的に讀み出してはゐない。價値がそれ自身を表はすところの現象の分析からそこに到達し、かくてそこから現象を説明する。然るに教授は需給關係を分析なしに受取ることによつて價値の存在を否定する。商品價値の現實性を否定する限り、價値が交換價値以外にないのは當然である。しかも、交換價値とは『交換能力』のことだと云はれるからそれは交換比率に外ならない。そこで教授が如何なる立場に陥るかを見よ。教授に從へば『x量の商品Aの價値はy量の商品Bであり、反對にy量の商品Bの價値はx量の商品Aだと云ふとになる。そこで例へば、物價の騰貴又は下落は貨幣價値の下落又は騰貴であり、貨幣價値の騰貴又は下落は商品價格の下落又は騰貴だと云ふことになる。何故に商品價格が騰貴するかと云へば、貨幣價値が下落したからであると云へ、何故に貨幣價値は下落したかと云へば、商品價格が騰貴したからだと云はねばならぬ。これは $A=B$, $\therefore B=A$, $\therefore A=A$,

ロー」と云ふことの外何ごとも意味しない、たゞ需要供給である。それは一定の價格は一定の[illegible]と云ふだけだ。經濟學の目的は價格及び利潤の說明にある。單に價格は價格であり利潤は利潤であると云ふ經濟學には滿足出來ない。マルクス說においては商品の價格は、當該商品の生產に支出せる人間勞働をそれと形態を異にする他の商品種類を以て表はしたものであり、利潤は資本家社會における剩餘勞働の貨幣表象である。マルクスにおいては交換の比率が定まるものが何であるかが問題であり、そしてその解答は人間勞働である。然るに教授においては比率が何で定まるかは問題でない。かくして吾々は、經濟學の歷史においてマルクス以前どころか、正統派以前に、第十七世紀におひやられる。

個々の論點に移る。商品交換における共通物否定の理由として第一に擧げられたことは、交換價値又は價格は價値に變化なき場合にも需給關係によつて變化するからと云ふことである。即ち教授は云ふ。

『需要の變動(同一需要價格における需要數量の變化)供給數量の變動(同一供給價格における供給數量の變化)は容易に交換比例を變化せしめる。若し一定の交換比例の存在するところ、二つの財に同量なる共通物が含まれてゐるものならば、この共通物に何らの變化なくして交換比例のみの變化が如何にして可能なるか』(同上五〇頁上下段)

これがマルクス價値論の完全なる誤解に立脚することは資本論の初めをほんの少し讀んだだけで判かる。マルクスは價値と交換價値又は價格とが常に一致するなど云ふことはどこにも書いてない。むしろ『價格と價値との大さの間における量的不一致』は『價格形態そのものに內在してゐるのであり、』『これは盲目的に作用する無規則性の平均法則としてのみ規則が貫徹されうるところの、一の生產方法に對する適當なる形態たらしめる』(岩波文庫資本論第一冊一六一頁)と云つてゐる。もし價値法則にして價値と價格との一致を豫定するものであるならば、價値論上の問題と云ふものは概してない。價値と價格との不一致に拘らず一定の法則の行はるゝ所以が問題となるのだ。

共通物否定の第二の論證は、價値と交換價値との一致する場合にも共通物の存在は認められず、認め得られるものはた

ゞ交換價値又は『交換能力』に外ならないと云ふことである。卽ち次の如く云ふ。

『交換價値を動揺する交換比例には價格の平均として、所謂盲目的に作用する平均としてのみ自己を貫徹するものとして考を進める。卽ち、商品の價格は不斷に變動する。しかし一定期間に亙り之を全體として見れば、平均的な價格又は交換比例がある。これ交換價値としてそれの存立するところ、共通なる第三者の認めらるべき必然性の如何なるものであるかも考へる』(同上、五〇頁下段)

『X量の靴墨もY量の金も相等しとせられる。相等しとせられるのはそれが互に交換せられること、卽X量の靴墨がY量の絹に對して交換能力をもつと云ふことに外ならぬ。(中略)畢竟そこに外見上ありと見らるゝ共通物は交換能力乃至交換價値そのものにして、これ以外の何物でもあり得ない。從つて同量の共通物がAB何れの商品にも存立するところに交換が行はれるのではなくして、交換の行はるゝことそのことがかゝる共通物として(若しくは共通物の表現として)見ゆるのである。』(同上、五一頁)

教授は商品の需給が平均し、價値と價格とが一致する場合において、この價格の高さがかくあるのは、例へば布一反は一圓でなく二圓であるのは何故かと云ふ問題を自づから出してゐる。この假定の下では價格の高さはもはや商品の需要供給の關係からは說明し得られない。敢てしやうとすれば循環論に終るばかりである。これが答は、當該産業部門において生産せらるゝ商品の總量を生産するに必要な勞働量に求むる外ない。ところが教授は却つて循環論を選ぶ。卽ち教授に從へば、X量の靴墨とY量の絹との需給平均するときは、X量の靴墨の價値はY量の絹であると云へ、Y量の絹の價値はと問へばX量の靴墨だと云ふ。吾々は、何故如何にしてX量の靴墨がY量の絹であるかを問題とする。しかるに答はかくてたゞ循環論あるのみ。

最後に教授の第三の論點はAとBとの共通物は、AとBとにふくまるゝ人間勞働でなくて、AとBとがともに第三者Cと交換されると云ふこと、(同上五一頁、上參照)卽ちX量の靴墨がZ量の金と交換せられ、Y量の絹も同じくZ量の金と交換せられるから、Z量の金はAとBとに共通するものであり、A及びBの同一商品Cに對する交換比率が一外見上の共

通約であり、マルクスのかの設例にはそれ以外のものをも同じく持つてゐ、而してそれは決して第三[illegible]にいへる[illegible]はないと云ふのである。こゝでたしかなことはたゞ外見上の共通性にと云ふことだけである。Aの一定量がBの一定量と交換し得られることは、それらが共にCの一定量と交換せられるからだと云ふことは、まづ貨幣があるから諸商品は互に交換せられると云ふ主張になる。だが、A及びBの一定量が互に交換せられる理由を第三者Cに求めたからと云つて問題は一歩も進展しない。それなら、A及びBはその第三者Cと何故交換せられるか。交換能力をもつからと云ふのがその答だ。これはやがて貨幣は貨幣だと云ふ主張になる。かくて問題はたゞ堂々廻りに過ぎないのに拘らず、教授は早や結論を急ぐ。曰く

『交換のなすところ平等がある、AとBと交換せられるところ、二者は平等に取扱はれる。しかし、それは平等をまちて交換あることを示すのではない。本來の平等なくして而も交換さへ行はれるならば、そこに二者が平等に取扱はれる。平等に取扱はれると云ふことは、交換せられる交換能力をもつと云ふだけのことである』と(同上、五二頁上段)

平等があるから交換があるのでなく、交換があるから平等があると云ふのがその全主張だ。そしてこゝに平等とは交換價値のことであり、交換價値は一の商品と他の商品との交換比率であり、苟くも商品が一定の比率において交換せられる限り、そこに平等關係が成立すると云ふのである。資本論においては、第一に使用價値と價値とが區別せられ、第二に價値が價値の實體と價値とに區別せられ、第三に價値と交換價値とが區別せられてゐる。價値の實體は人間勞働であり、價値とは物に對象化せられた勞働時間であり、交換價値とは、一商品の價値をそれと形態を異にする他の商品を以て表現したものだ。これらの區別は、交換の發展の各モーメントに依據し、理論的でありまた歷史的である。しかるに、いま教授においては、交換價値のみが價値あり、價値の平等性とは交換能力に外ならない。しかも『交換能力』は既に交換を前提すること教授の言によつて明かだ。價値なくして交換なきと同じく交換なしに交換價値なく、從つてまた人間勞働が物に體化

結晶せられて價値となると云ふ事實もない。之意味において交換は勞働が價値たる條件である。この意味において交換なしに價値はない。しかし交換はたゞ人間勞働に對象化せられた勞働又は社會的勞働としての特殊な形態を與ふるのみであつて、價値及び價値の大さを與ふるものでない。それは生産において與へられる。交換價値は價値の現象形態であり、畢竟生産に支出した人間勞働の物的表現である。交換なしに價値なしと云ふことは商品は交換可能のものたることを條件として價値をもつと云ふことに外ならない。既に實現せられた交換價値ではない。而して今問題は交換價値は何故か、換言すれば一商品がそれと形態を異にする他の諸商品と一定の割合において交換せられるのは何故かである。交換せられたからだと云つては答にならぬ。『交換能力』があるからだと云つても同様である。何となれば『交換能力』は既に交換を前提し交換の結果だからである。

こゝにおいて、教授の全主張は、小麥若干量が鐵若干量と互に等しとせられると云ふ方程式からは何ものも讀み出してはいけない、それはたゞそう云ふ事實だ、理由はないのだと云ふに歸する。しかし經濟學ではその理由が問題でないか。教授がこの無問題と云ふ非難からのがれる唯一の途は、交換價値から使用價値に移ることである。所謂第三者Cを持ちこんでも問題に變りなく、その第三者CがA及びBと交換されるかと云ふ問題が殘るとすれば、兩者に共通な價値を否定する限り、それらが互に使用價値だからと云ふより外ない。こゝにおいて教授の價値即交換價値は、結局價値即使用價値とならざるを得ない。事實教授はそう云つてゐる。元來價値即交換價値説は效用説を基礎とし生産物の受授と商品の交換とを同一視し商品交換に特有な問題を無視する。教授がマルクスにおける『使用價値の捨象』と云ふ詞を非難する所以である。

四、商品交換における使用價値捨象の必然性

マルクスにおける「使用價値の捨象」とは、商品所有者が交換過程に入るに先だつて捨象しておかねばならないところの理論的準備と解してよからう。それは貨幣なき交換においては、商品は價値表示として一般的等價を必要とする交換においては價格表示として現はれる。一商品の價値を表示する他の商品または貨幣の機能は、全く觀念的であり單なる意識過程である。商品交換における使用價値の捨象の必然を否認するところのマルクス批判者はこの過程を否認する。意識的人間はその行動に際し豫め一定の理想目的をもつが、それは一定の社會的關係の下において必然に與へられる。いま之をこゝに特殊な問題として考ふるに商品所有者が交換に先立つて觀念的に値だんをつけることは既に特定な社會關係としての貨幣の存在を前提す、貨幣なき場合には既に一商品と並んで他の諸商品が一定の社會關係として存在する。價値表示又は價値賦與なる事實は既にそれによつて規定せられる。貨幣がなくて價格のあらう筈なく他の商品なくて一の商品はあり得ない。この場合『他の商品』又は貨幣の機能は全く觀念的であり、小麥の價値を表示するに、小麥若干量は鐵何噸又は何圓何十錢と呼んでも現在手許に鐵や金を持たないでできる。たゞ店頭の諸商品に正札をぶらさげてもよい、大道で大聲を發して何圓何十錢と呼んでもよい。それは商品所有者にとつて使用價値でなくそれ故にまた賣り物であり、且つ若干の値だんで賣ることを(貨幣なき場合は他の商品の若干に對して交換すること)意思表示するものであるから、乃ち使用價値の捨象である。この意圖が果してその通り實現せられるや否やは、自分の側における同じ商品所有者との關係及び商品の讓受人又は買手との關係に係り、現實の交換過程が之を決定するのであるが、交換に先立つてこの事實あることは否定し得ない。マルクスの立場は意識が存在を定むるものでなく反對に存在が意識を定むること、結局において物質的生產諸力が決定的であることを主張するものであるが、毫も個々人の意識的活動を無視するものでなく、むしろ、個々人が歷史を作ること、そして意識を定むる社會的存在は個々人の一定の意識的活動の總體の結果だと云ふのである。今、價格賦與なる事實は商品所有者が一定の社會關係の下において與へられた理想目的の表現である。而してその內容は使用價値に

あるのでなく價値の實現にあるが故に、商品を使用價値視點においてでなく必然に價値視點において見る。これ使用價値捨象の全意義である。

然るに、マルクス批判者は、商品交換を歴史的特殊性において把握しないから、商品所有者の意思が商品によつて定められるものであることを信ぜず、商品は常に使用價値視點において考察せらるゝものと假定する。それ故にまた事實上の交換に先行する商品所有者たちの特殊な意識目的を無視するのである。かくて、一の使用價値と他の使用價値が交換せられ又は一の使用價値に對して貨幣が支拂はれると云ふ、かくて特殊な社會關係が無視せらる。かくて貨幣論上においては、商品は價格なしに貨幣は價値なしに交換に入ることゝなり、商品の價格はたゞ貨幣の數量によつて定まると云ふ觀念的價格論を成立せしめる。そこでは特定な生産關係の下に規定せらるゝ人間の特殊な意識目的でなく、人間一般としての意識目的が勝手な振舞をすることになり、マルクスの命題とは正に逆行する。

さてこれより使用價値捨象の問題について教授の批判をきいて見やう。教授は云ふ。

『ある物が所有者によりて商品として持ち出さるゝのは不用なるが故であると云ふことから、使用價値が抽象せられてゐると云ふことが云ひ得らるゝならば、この商品の需要者、新たなる獲得者によりて勞働生産物たることが抽象せられてゐることから勞働生産物たる性質もまた抽象せられてゐると何故に云はれ得ないか。需要者にとりては、需要する商品が自から所有せざる使用價値である限り、天から降つて來るものであつても百日の勞働生産物であつてもそは問ふところでない』(同上、五八下――五九上)

一の生産物がその所有者に有用であるならば、それは他人に讓渡し得ないものであるから、始めから商品たり得ず、その商品に對する需要もあり得ない。それが需要せらるゝのは、他人に有用であつてもその所有者に有用でないからである。また既に所有者に有用でないものが他人にも有用でないならば、商品として生産されたものでももちろん商品たり得ない。一生産物が商品であることは、必ずや所有者に需要なく、それ故に他人に讓渡し得られることを條件とする。これ『使用

價値抽象」の意義である。然るに、いま我々は、商品は他人に使用價値であり、從つて需要せられるが故に、使用價値の捨象はあり得ないと云ふ。商品はその所有者に使用價値でなく、他人に需要せられ、從つて他人に讓渡し得られるからこそ所有者にとりて使用價値は捨象せられ得る。

商品の讓渡しは交互的である。一商品需要者又は讓受人はこれをロハで需要し、又は讓受けることはできない。必ずや一定の對價を供給し又は讓渡さなければならぬ。この意味において需要者はまた供給者であり、讓受人はまた讓渡人でもある。貨幣をぬいて考ふれば、讓受人が對價として提供するものは同じく商品である。それは自分に使用價値でないからこそ、換言すれば自分に不用なればこそ對價として提供し得る。從つてこゝでも使用價値は捨象せられる。而してもし讓受人の提供するものが商品でなく貨幣だとすれば、そこには『賣買』があり、買手の提供するものは特殊な使用價値ではなく價値の獨立な實體としての貨幣である。買手の需要するものは賣手の供給する商品の使用價値であり、買手は貨幣の供給によつて之を取得し得る。賣手の需要するものは、買手の供給する貨幣であり、賣手は特殊な使用價値と同時に供給するところの價値の供給によつて之を取得し得る。從つて買手にとつての使用價値の實現は賣手にとつては價値の實現である。

教授は、買手の需要は他人の所持する使用價値に存在しそれが勞働生産物なりや否やを問はないと云ふ。だが、買手は必ずねだんをきくだろう。ねだんをきくとは、無意識ではあるが事實は、それが價値なりや否や、また價値として幾何の價値かを問ふことである。しかも買手は現に對價として勞働生産物としての商品又は貨幣を提供する。自分が價値物を阿賭物を提供しながら受取るものについて、問題が使用價値だけに限られるわけなく、他人の所有物がロハで得られるものならとも角、でない限りそうした事はあり得ない。買手が對價を提供すると云ふ事が之を證明してゐる。或は云ふであろう、それは特殊な使用價値に對して支拂ふのだと。だが買手が對價を提供するのは、既に商品が交換價値又は價格として一定の値だんが表示せられてゐるからでないか。使用價値を表示するものでないことは、それが賣手に使用價値でないに

よつて明白だ。しからば何を表示してゐるか。買手の目的が生產に支出した人間勞働の實現にありとすれば、それは價値以外の何ものでもない。買手の目的はもし買手が消費者なれば使用價値にある。しかし買手は値だんが低ければより多くを、高ければより少く買ふだらう。その値だんなるものは一商品の價値が之と形態を異にする他の商品體により又は貨幣によつて表示せられたものであるから、そこには既に使用價値は捨象せられてゐる。交換過程における使用價値の捨象を否認するものは、價値視點における商品の考察を無視するものであり、やがてそれは貨幣の價値尺度としての機能を無視するに至る。從つてそれは商品は交換價値又は價格無しに流通に入ると云ふ獨斷に陷る。この獨斷は貨幣論上所謂數量說の前提である。

教授が交換過程における使用價値の捨象に反對する第二の理由は使用價値の質の捨象はその量の捨象たり得ないと云ふことである。教授は云ふ。

『使用價値としては何よりも異なれる質であるにせよ、異なれる量であることが否定せられてゐるわけではない。交換價値として商品が量であり、使用價値は量たり得ずと云ふならば共通物として取扱はるゝものは使用價値でない、使用價値が無視せられてゐると云へる。併し使用價値は量でもあり得る。』(同上、五七頁)

物が使用價値としての存在は、他の使用價値から區別せられた獨自な存在であり、それ故にまたそれ自體獨自な單位をもつ。白米一五キロ、鐵一貫、布一反、金一匁等々これである。いま、使用價値の捨象はこれら品質上の差異を同一單位に引き直し、換言すればそれらを比較し得べきものたらしめ、從つてまた單に量差の存在に過ぎないものたらしめる。商品のこの存在樣式においては、商品の使用價値は單に白米として又は鐵としてもつところの質的量でなく、商品が商品としてもつところの質的量である。それ〲の使用價値は、『價値の擔ひ手』(Träger des Wertes)となる。單に白米一五キロでなく、白米一五キロ三圓と云ひ、單に鐵十貫でなく、鐵十貫五圓と云ふのは既に使用價値の捨象である。そこでは米や鐵

の使用價値は貨幣の「渡し手」たる役目をもつ。そこでは、貨幣の使用價値たる交換價値の體現者としての一定量の價値に引き直される。問は金の一定量であり、貨幣としてには人間勞働の體化であれ、價値の獨立な實體である。しかるに教授に從へば、商品が貨幣に換算されても、分量としての使用價値が存在するなら使用價値は捨象せられないと云ふ。問題は消費過程ではなく交換過程であるのに、どう云ふ意味か十分判然しない。白米一キロが二十錢なるとき一五キロは三圓でなくたゞ一五キロだと云ふのであるか。進んで教授の云ふところをきいて見やう。

「交換關係の内部にありて、一の使用價値が他の使用價値と同樣にみなされる――使用價値の實差の抽象が行はれると云ふことは、その量の抽象もまた行はれると云ふことの證據にはならぬはづである。適當なる比例において存立することそのことが使用價値の量差を外にして如何にして考へ得られるか。」（同上、五七頁下）

これによれば、白米一五キロが鐵十貫に等しいと云ふことは、一五キロ又は十貫と云ふ異なつた使用價値の量差を度外視しては考へられぬと云ふ。白米と鐵とが使用價値を異にすればこそ交換せられる。しかし使用價値の差異は交換の動因である。商品交換においては等一の單位を必然とするが、使用價値はこの單位たり得ない。吾々は白米と鐵とが同じく人間勞働の產物として商品であり、それ故にまた同一の單位例へば圓、ポンド、ドルと云ふやうに價格の標準に引直し得られ、從つて白米一五キロと鐵一噸が等しいと云ふ。然るに、教授においては、白米一五キロと鐵一噸とはかゝる量差を有するが故に互に交換せられると云ふ。かくて教授は自說を要約して云ふ。「簡單に所信を述べる。（中略）私共は一着の衣服と一箱の菓子とを比較しその一を選擇する、これは質を異にするにもせよ、異なれる量だからであると」（同上、五九下）それなら私も簡單に疑問を述べる。教授は牛一頭が金十匁であるとき、教授は牛は金より大きく且つ重いから常に金をとらないで牛をとるかと。

第二の問題はマルクスは商品は使用價値でなければ價値でないと云つてゐるから、使用價値はまた商品の價値の大きさを

決定する一要素でなければならぬ、もしそうでないとならば勞働もまた價値決定の要素たり得ないと云ふにある。教授云ふ。

『商品の交換價値は明かにその使用價値を度外視すると云ふ、有用性なきもの、間に交換價値は成立しないはづではないか。交換價値の大きさと有用性とが必然的關係に立たずと云ふならば(傍點筆者)交換價値と勞働生産物たる性質も亦然りと云ひうる』(同上、五七頁下)

商品が價値であるためにはそれが社會の使用價値でなければならないと云ふことは商品價値の品質に關する一規定であるが、それによつて商品價値及びそれの分量は一分子だも與へられない。或る商品AがBにもCにもDにも其他等々に對し交換せられ從つて使用價値であるからと云つて、商品Aの價値量は增加するだらうか、それなら貨幣商品金は凡ての諸商品と交換せられる絕對的商品であるからその價値量も亦た絕對無限でなければならぬ。しかしそんな事實はない。貨幣は品質的には總ての商品と交換せられ得るが故に絕對的商品であるが、その價値量は他の諸商品と同じく生産に必要な勞働によつて定まり、毫も絕對無限でない。一商品Aが他の商品B、C、D、等々と交換せられ得る範圍の擴大に從ひ、商品Aが受くるところの社會的性質は商品の交換性である。價値及び價値の大さは交換によつては與へられない。交換者の一方の利得は必ずや他方の損失に立脚する。一商品の交換價値の騰貴又は下落は之と交換せられるもの、價値下落又は騰貴に外ならない　A＝BでなくてA＝2Bとすれば、Aの側がより多くのものと交換せられるが、それは同時にBの側がより少ないものと交換されることを意味する。兩者の合計は依然變化しない。一般的恐慌においては支拂のために諸商品が捨値で賣られる。捨値であつてもいやしくも賣買せられる以上、社會の使用價値であり價値である。賣手は損をするが、買手は利益する。それは商品自體の價値がより少なき對價において甲の手から乙の手に移つただけであり、それによつて價値の一分子だも增減せられない。今六日の東朝經濟面『こぼれだね』に云ふ。

「キャベツが大玉三個で二錢とか、なすび[illegible]
お百姓が苦心して作つた野菜が市場に出ても[illegible]
にこの大根勝手にお持ち歸り下さい」といふ立札を樹てたといふ。ところがキャベツが大玉二錢にすぎず、二[illegible]十錢でも、と
も作も貧買があれば、お百姓には大損害でも消費者は儲けたので、社會的には價値の増減はないことになる。大根[illegible]のやう
に『タダより安く』に「この大根勝手にお持ち歸り下さい」となつては貧買でなく贈與であり、一般に經濟問題としての價値
問題もない。

五、複雜勞働と價値法則

商品價値の必然性及びその一側面としての使用價値捨象の必然性を否定するならば、複雜勞働の單純勞働への還元の不可能と云ふことがマルクス批判者の日程に上らざるを得ない。問題は一般に複雜勞働は單純勞働に還元し得るか、或は資本家社會ではそれが如何にして還元せられ得るかと云ふことにあるが、一般的な意味においても、現に工場内部の經驗はそれの可能を示してゐるし、また社會主義的統制經濟の下においては單純勞働が直接に貨幣の役割を果たし得る。だがここで教授の問題とせられるのは、後の意味であり、即ち現に資本家社會ではマルクスの主張する如き事實ありや、事實だとすればそれは如何にして行はれ得るかと云ふにある。教授の批判を要約すれば、次の二點に歸する。第一、マルクスは複雜勞働が單純勞働に還元せられると云つてゐるだけで、何らの論證も與へてない、第二、マルクスのこの主張のうちには價値論上の循環論がふくまれると云ふことこれである。果してそうであるか、吾々はこの點に關するマルクスの全文を見やう。

『商品價値なるものは、たゞ單なる人間の勞働(menschliche Arbeit schlechthin)を、人間勞働一般の支出(Verausgabung

menschlicher Arbeit überhaupt)を表示してゐる。いまブルジョア社會を見るに、そこでは將軍や銀行家が或る大きな役割を演じ、それに反してたゞの人は極めてみすぼらしき役割を演じてゐるのであるが、こゝに吾々の問題とする人間勞働についても、事情は同じである。人間勞働とは、特殊な發達をとげてゐないあらゆる普通の人間が、平均的にその生きた有機體のうちに有つてゐるところの單純なる勞働力の支出である。單純なる平均勞働(die einfache Durchschnittsarbeit)そのものは異つた國々と異なつた文化時代とでは、もちろんその性質を變ずるが、しかしある特定の社會では與へられてゐる複雜勞働(komplizierte Arbeit)は自乘せられた、また倍加された單純勞働と看做され、從つて複雜勞働のより小なる分量は單純勞働のより大なる分量に等しくなる。かゝる換算——還元——が絶えず行はれてゐることは、經驗が示す。ある商品は複雜勞働の生産物であるとしても、その價値は、その商品を單純勞働の生産物と同樣のものたらしめ、從つてまたそれ自身は單純勞働の一定分量を表示するにすぎない。種々なる勞働がその度量單位としての單純勞働に換算せられる種々なる比例は(傍點は筆者)生産者の背後における或る社會的過程によつて確定せられ、且つそれゆえに、それは彼等にとり慣習によつて與へられたるもののなるかに見える。以下の叙述においては簡單化のために、吾々はあらゆる種類の勞働力を直接に單純なる勞働力と看做すが、かくするによつて吾々はたゞ換算の勞を省くにすぎない」(河上、宮川二氏譯、資本論第一分冊。五一——五二頁)

こゝに一、價値とは人間勞働一般の支出である、二、單純な平均勞働は時代により異なるが一定の時代では一定である、三、複雜勞働は社會的に單純勞働の倍加と看做される、四、複雜勞働の單純勞働への換算の比率は競爭によつて定められると云ふことが示されてゐる。吾々の注意に値することは、問題が第一に價値視點において解決せられてゐることである。複雜勞働はそれが單に使用價値を作るものとしては、單純勞働に還元せられない。しかしそれが商品を作るものとしては常に單純勞働に還元せられたゞ分量上の差異あるに過ぎないものとなる。複雜勞働例へば寶石細工師によつて加工せられ

た複合的または高級勞働に生ずる[illegible]の[illegible]、[illegible]に[illegible]

て同じ單位に還元せられる。こゝに貨幣は價値尺度として機能する。すなはち[illegible]

過程においても、高級勞働は常に社會的な平均勞働に、例へば、一日分の高級勞働は二日分の單純勞働に還元されねばならぬ。もし有名な經濟學者たちがこの「勝手な主張」に反抗するならば、吾々は彼等をもつて目あれども見ざるものとなすことができよう。彼等にとつて理論上の細工と思はれるところのものは、單に世界のあらゆる國々で日々繰り返されてゐる手續に過ぎぬ。多種多様を極むる諸商品の價値は、到るところにおいて一様に貨幣で、すなはち一定量の金または銀で表現される。たゞこのことだけで、すでにこれらの價値によつて表示されてゐる種々なる勞働の種類は、種々なる割合において、一個同一なる種類の普通の勞働の、金または銀を生産する勞働の、一定量に還元される」（河上宮川二氏譯『資本論』第二分冊三五〇頁）と。その註に云ふ、「價値の尺度としての勞働について語るときにはそれは必然的に一定種類の勞働を意味する。……他の種類の勞働のこの勞働に對する割合は容易に確定されると（『經濟學概論』ロンドン、一八二一年、二二、二三頁）

いま寶石細工師が寶石を賣つて得た貨幣をもつて米を買へば、貨幣は流通手段として機能するが、間接には寶石と米とが交換されるのである。交換の割合を決定するものが單純な勞働であることは、既に貨幣を價値尺度とするによつて明かであり、そこでは特殊な使用價値は既に捨象せられる。教授は、商品交換の一契機として使用價値の捨象と云ふ事實を否定するが故に、從つて貨幣の價値尺度としての機能をも無視する（貨幣をぬいて考へても問題は異なるところはない）。教授は價値表示又は價値賦與の過程を自から意識し得ないと云ふ代りにマルクスはたゞ主張すると云はれるに過ぎない。

次にマルクスはそこに換算の比率が競爭によつて決定せられることに言及し、「種々なる勞働がその度量單位としての單純勞働に換算せられる種々なる比例は、生産者の背後における或る社會的過程（競爭のこと——筆者）によつて確定せられる」と云つてゐる。寶石細工師も米の生産者もその生産物が商品たる限り、一定の貨幣量として價格の大きさを表示する。

しかし市場においては、價格はそのまゝ實現せられない。それは個々の生産者の希望を表はしたものに外ならない。この希望が如何に實現せられるかは、寶石工の側においては、他の寶石工との競爭により、米の生産者の側においては、他の米の生産者との競爭により制約せられる。教授の說によれば、複雜勞働の單純勞働への換算は勞働轉換の自由によりてのみ可能であるが、この『轉換の自由は極度まで制限せらるゝ』が故に不可能だと云ふ。（「改造」、七一、下——七二、上參照）。併し、異なれる商品が互に交換せられ得ると云ふ事實、換言すれば價値表示又は價値賦與、更に換言すれば交換者が交換に入るに先立ち行はるゝところの使用價値捨象の過程が既にそれらが同一の單位に、人間勞働一般に還元せられることを示すものであり、この前提の下において交換の比率が問題となるのである。それ故にマルクスは xWA＝yWB と云ふ方程式が成立つためには既にA＝Bを前提すると云つてゐる。

諸商品が互に交換し得られるものであり、價値として互に分量上の差異あるに過ぎないものである限り、この比率の事實上の決定はたゞ交換双方の側における競爭に依つて行はれる。競爭によつて成立するものは時々の生産力の發達に適應する社會的な必要勞働時間である。これは個々の競爭者の總體の結果として現はれ豫め知るを得ず、またそれ自體としては意識せられない。交換當事者はたゞ價格によつて之を意識する。例へば寶石工の複雜勞働が一般に單純勞働に還元せられたと云ふことは寶石が貨幣に代つたと云ふことにより、自己の複雜勞働が幾倍の單純勞働に還元せられたかは貨幣量即ち價格の高さによつて意識せられる。マルクスが『經驗が之を示す』と云ふのはこの意味である。貨幣をぬいて考へても同じである。その場合には『等價形態』の側に立つ商品が貨幣の役割を果たす。複雜勞働の生産物としての商品と單純勞働の生産物としての商品との直接交換において一方が他方でその價値表示をすることが還元の可能性を示すものであり、現實にそれが交換せらるればそれで還元せられ、その交換比率は双方の側における競爭によつて定まる。

教授はマルクスの立言を以て獨斷であり單なる主張であると云ふが、その何れに獨斷あるか。たゞマルクスはこの競爭

による比率決定の問題を省略したまでゝある、それはこの場合價値の問題に[illegible]る問題の本質にかゝはり無きが故である　關係するものはむしろ大體技でないが、教授は云ふ、

「ABの交換比例は(その各の單位の中に體化せられてゐる勞働 a b のそれ〳〵の數量によつて定まる。この數量の比例によりて相ららるるか、ABの交換比例によりて。これではすべてが一つの循環において動いてゐる。交換比例(從ひて價格もそうであると言てあるが)は勞働の比率によりて定まる。勞働量の比率は交換比例において定まる。これだけの理論の形式ならば、勞働量と云ふのに何をおき替へても矛盾なく主張し得らるゝてあらう」と(同上、六七、上)

マルクスは商品の價値はそれの生産に社會的に必要な勞働で定まると云つてゐるが、商品の交換價値又は價格が常に價値の指數だとは何處にも云つてゐない。むしろ反對だ。價格は商品に對象化されてゐる勞働の貨幣名である。だから、商品とその商品の價格の稱呼となつてゐる貨幣量との等價關係を云々するは總じて或る商品の相對的價値表現はつねに二つの商品の等價關係の表現であると云ふのと同樣に、一の同義反復である。しかし商品の價値の大さの指數としての價値はその商品と貨幣との交換比率の比數であるとしても、それと逆に商品と貨幣との交換比率の指數が必然的に商品の價値の大きさの指數であるといふことにはならぬ」と(資本論第二分册河上宮川二氏譯一六〇頁)。交換價値を論ずる際之を價値の指數として取扱つたのは、單に問題を單純化するために外ならぬ。しかも、價値が「交換比例において現はれる」と云ふことを「交換比例によつて定まる」と解するは亂暴でないか。

複雜勞働の還元を一般に價値視點において見ることを拒否する教授は、進んで資本家生産の下における複雜勞働の問題を提起する。この點に關するマルクスの注意は、前論に異なるところが無い。曰く、「さきに注意して置いたやうに、資本家の占有する勞働が簡單な社會的な平均勞働であるか、あるひは複雜な勞働——高度の比重を有する勞働であるかは、價値增殖過程にとつて全くどうでもよいことである。社會的な平均勞働に對して高級な複雜な勞働たる效力を有する勞働は

より多くの修業費がそのうちに入り込むところの、その生産にはより多くの勞働時間が費され從つて勞働力に比しより大なる價値を有するところの、ある勞働力の發揮である。それゆゑに勞働力の價値が大であれば、そはまた發揮されて高級の勞働となり、同一の時間内に比較的大なる價値に對象化されるのである。だが紡績勞働と寶石細工勞働との等級が如何やうであらうとも、寶石細工師がそれによつて剩餘價値を創造する附加的の勞働部分と質的には毫も分つところがない。』(同上資本論第三分册、三五〇頁)

教授が論難するヒルファデイング說はマルクス說の一解說に過ぎないが、之に對するの非難は要するに價値と勞働力の價値との混同に立脚する。教授は云ふ。

『複雜勞働の形式に費用を要する。しかしこれだけのことから知り得られることは、複雜勞働力の價値が單純勞働力のそれよりもこの費用だけ多いと云ふことである。それ以上のたしかなことは何ことも云へるはづがない』(同上、七〇頁上)

ヒルフアデイングは、明かに、『熟練者の勞働は、價値(これは高い勞賃となつて現はれる)を移植するのみならず、またそれ獨自の價値形成力をも移植する』と云つてゐる。こゝに『獨自の價値形成力』の移植は、特殊な剩餘勞働の支出を意味する、この剩餘勞働は、自分の勞賃を作る勞働と質的に異なるものでないから、熟練者の勞賃としての必要勞働時間がより高い勞賃となつて現はれるならば、その剩餘勞働時間もまたより高い剩餘價値として現はれざるを得ない。しかるに教授は之を解して『ヒルファデイングの解釋によれば、複雜勞働の生産物の價値はこの勞働支出のものである複雜勞働力の形成のため特別の費用だけの價値に單純勞働の生産物だけの價値を加へたものに等しいはづである』(七二頁下)と云ふ。これによれば、複雜勞働の生産物の價値は『費用の價値』に『單純勞働の生産物の價値』を加へたものに過ぎない。それなら熟練勞働者は、自分の勞賃を生産するに必要な勞働時間は複合勞働として機能し、剩餘勞働時間は單純勞働として機能すると云はねばならぬ。さやうな事のあり得ないのは明白である。

違ひ、教授と云ふところのできない

「學問をつけることによりて複雜な勞働力を養成することは何人にもできることではない、唯或る能力、ある天性において大きくすぐれた能力を有するもののみがこれをなしとげる。從つて、複雜勞働として支出せられるものゝうちには、費用としてつけられない複雜勞働には必ずにこの優秀なる能力の作用と云ふものがあるわけである」と（同上）

これ教授が複雜勞働の單純勞働化を拒否する主たる理由である。人間の材能には教育に依つて作り得るものと否らざるものとあるわけであつて後者は即ち「天賦の才能」だと云ふ。いま、人間の歷史的行爲から獨立な天才について考へる道もない。またその材能を發揮しない天才は社會に使用價値なく、その發揮は少なくとも腦や神經を使ふに相違あるまいから、やはり一の勞働であると思ふが、とも角教授がこれによつて意味するところは、複雜勞働の生產物にはかゝる天賦の才能がはたらいてゐるから、かゝる生產物の購買者は之を充分評價しなければならないし、またしてゐる筈だと云ふのである。しかも教授は、こゝにかゝる複雜勞働が資本家に雇はれてゐる場合を問題としてゐるのであるから、つまり複雜勞働力の高級な勞役はそれの再生產に必要な勞働の分量によつて定まるものでなくて、天賦の才能を作ふ勞働力が資本家に與ふる效用によつて定まると云ふに歸する。教授は嘆じて云ふ、「如何に高級なる勞働に對しても教養のための費用を除けば、僅かに衣食の費を償ふだけである。如何に高級なる勞働といへどもそれ以上を支拂はるゝことはあり得ない。如何に高級なる勞働の提供者も云々」と。これはヒルファディングが「天賦の才能」を評價してゐないと云ふ事に對する非難である。天賦の才能が目立つやうな商品、天才が表はれる仕事と云ふやうなものは、多く大產業の商品ではあるまいから、特に教授が天才天才と天才を高調する限り、高級な消費目的たる特殊な使用物又は特に醫師、辯護士、學者、文士、藝術家及び音樂家などの勤務を意味するだらう。そして教授の意は、思ふに、これらのもの、勞働力の價値は生產に支用した人間勞働で定まるものでなくてその使用消費から說明せらるべきだと云ふのであらう。そして特に教授がそれを問題とす

るのは勤勞又は給付が勞働生産物と並んで資本家社會の富を構成すると思惟するためであらう。その天賦の能力が單純勞働に還元せられ得ないと云ふ主張を見れば、特殊な勤勞の生産者が物財の生産者に比して優逸することを意味するかの如く、しかしそれが價値をもつと云ふ見解から見れば、これらが富の生産に寄與する點において同樣に取扱はれ得べきことを主張するかの如くである。

勤勞又は勞務提供者の增加は資本家的生産發展の一特徴であり、それはこの生産方法が手工業をぶち倒して全生産を支配するに至つたことを意味する。發展せる資本家社會は直接に商品を生産する賃勞働に對して勞務提供者の增加を特徴とする。勞務の提供者も賃勞働者もその勞働力は共に商品であり價値法則の支配を受ける。しかし前者はその買手のために現實な又は想像上の使用價値を作り、後者はその買手のために商品を作る。從つて前者は、買手のために價値を作るものでなくむしろたゞ買手から價値を受取るに過ぎない。尤も勞務そのものが資本家にとつて直接に商品であり、又は勞務の提供者がそれによつて資本家的商品の生産に參加するならば、本來の賃勞働と同じく資本家のために利潤を作るものであり資本家社會の富を作るものであるが、單に資本家の使用人として資本家のために使用價値を作り又は資本家の使用價値としての勤勞を提供するに過ぎないならば、それは價値を作るものでない。況んや剩餘價値おや。それらは、むしろ資本家が賃勞働の搾取にもとづく利潤によつて、(從つて賃勞働の剩餘勞働によつて)支拂はれ養はるゝものである。「ブルジョアは元來極めて節約的ではあるが、資本の卽ち勞働者の生産性の增大するに從つて封建時代の人の從者制度を模倣する。工場に關する最近(一八六一年)の報告によれば、聯合王國の本來的の工場に使用せられる人員(管理者をふくむ)の總數は七七五、五三四人にすぎない。反之、イングランドだけで婦人雇人の數は一〇〇萬に及ぶ。工場主は女工の不拂の勞働の一部分で彼等の姉妹を下婢として又彼等の兄弟を馬丁として、又彼等の從兄弟を兵士又は巡査として、彼の個人的勞務に用ゐるために、女工を十二時間工場で搾るとは何と云ふ美はしい制度であるか……」(マルクス全集第八册三二七――八頁)

こゝに於て資本家は[illegible]に十人、[illegible]
もつたものである。

これ等の者は、俸給又は手當等々を受けるが、資本家的富としての商品價値を作るものでなく、むしろそれを消費する。資本家が高い講演料を拂つて一席マルクス批判をきいたとすれば、講演者はマルクス批判と云ふ勤勞を賣つて講演料をせしめるわけである。聽いた資本家は或は慰められるだらう、或は何かの種になるだらう。しかしこれで現に富をふやす筈はなく金をもうける筈はなく、むしろ利潤の一部を支出したのである。この場合講演料が講演者の天賦の才能のゆゑに格別高いと云ふことが、資本家の富をそれだけ高めるわけはない。しかし教授の說のやうに交換からそして結局使用消費から價値が發生するものとすれば、この講演者は資本家たちのために『無形の財』を作つて資本家の富をふやすものであり、しかもその特殊な「天賦の才能」のゆゑに講演料が高いほど富の生産により多く寄與することになる。だが、例へば一席のマルクス批判で講演料五十圓、單純な賃勞働者の賃銀一日二圓、それから資本家が搾取する利潤及地代五〇パーセント、一圓とすれば、資本家は講演者に一回五十圓を支拂ふためには一時に五十人の賃勞働者を要する。もし講演者の代りに月三百圓の妾をおくとすれば一時に三百人の賃勞働者を搾取しなければならぬ。そしてこの妾は賃勞働者一ヶ月の賃銀より五倍多くの手當を受けるが故に五倍多く富の生産に寄與するものと云はねばならぬ。(マルクス『剩餘價値學說史』第一卷に改造社版マルクス全集第八册、三四一頁參照)

六、勞働の生産物に非らざるものゝ商品形態と價値法則

「天賦の才能」に次ぎ問題となるのは、勞働の生産物に非らざるものが價格をもつ所以、及び之と價値法則との關係である。商品は勞働の生産物に限られず、現に勞働生産物にあらざる幾多の事物が商品として賣買せられてゐるのに、マル

クス及びマルクス亞流は何故商品を勞働生產物に限るか、また非勞働生產物が價格をもつ所以は、果して勞働價値說によつて說明し得るか。これ教授がこの點に關するマルクス批判の要領である。

マルクスはその經濟論を何故勞働生產物たる商品をもつて始めたか。非難の第一點はこの點を顧みないからである。マルクスの研究の對象は資本家社會だ。資本家社會の富は、凡て商品形態をとり、商品世界はまづ物的對象物としての商品及び商品としての勞働力及び諸々の勤勞に分たれ得る。前者のうちには人間勞働の生產物の外自然生の森林、地中の鑛物、水中の魚類の如き生產し得るものと、土地及び落流の如き生產し得ざるものとをふくむ。森林、鑛物、魚類の如きは之をさい伐し採掘し漁撈する等人間勞働を加ふる事によつて始めて社會の使用價値となり從つてまた價値をもつのであるから、商品としての自然物の中、こゝに問題となるは、生產し得ざる生產手段としての土地である。しかし土地が商品として價格をもつことは資本的生產の一定の發展を、從つてまた勞働生產物の一般的商品化を前提する。而して、資本制存立の條件たる商品、第二類としての人間勞働力及び勤勞の生產は、物的商品の消費を前提する。一切の人間生活の基礎は勞働すること、即ち物質的生產にある。資本家社會は、商品としての勞働力なしに成立しないが、それには商品生產の一定の發達を前提し、從つて理論的にも歷史的にも、資本家社會では物財としての諸商品中、基礎的であり支配的なものは勞働生產物としての商品である。

もちろん物財としての人間勞働の生產物にあらざるもの、例へば奴隷は機械よりもより早やく商品であり、娼婦は或種の藥品よりもより早やく商品であるであらう。けれども、支配的社會形態としての資本家社會の研究には、總じて事物商品化の歷史的先後は問題でない。假令、或るものが歷史的年代順序においてより早やく商品化したものであつても、資本家社會において支配的なものが物財としての商品及び勞働力たる限り、その他のものは之を前提して意義あるものあり、それと無關係に考察し得ない。これマルクスが、價値及び利潤を前提して地代及び土地價格を問題とした所以である。

資本論第三卷の始めに、商品生產が一般に發達し[illegible]〔同上〕としてこれ[illegible]資本家的[illegible]して現れ[illegible]
態容を示すことによつて資本家的社會の機構を展示するものであり、利潤率平均化の法則[illegible]資本家的生
產、信用制度平均利潤その他所謂の諸形態は第一卷の前提の下に展開せらるべきである。マルクスの體系においてはそれら
のものが資本論第一卷において取扱はるべきものでない。

教授の批判の第二點はかうである。

『交換價値の成立は、交換せられるものが勞働生產物たると又はたらざるを問はず、權利又は人間そのものたるとを問はず、それらの間に實現せられる』（同上、五七頁）『今日の資本家社會を見る。賣買總額の少なからざる部分は――權利土地の如き――勞働生產物にあらざるものである。この現實における商品の少なからざる部分を商品の範圍以外に推しやることが果して許し得らるべきか。私はこの點に關して對立的立場から主張をきかねばならぬ』と（同上、六三頁）

「對立的立場からの主張」の一斑は既に述べた。そしてマルクスは、人間勞働の生產物でないものは價値がないと云つてゐるが、價値なきものは商品形態をもたないとは云はぬ。むしろ資本家的の生產の發展は、資本家的生產方法の支配するところにおいては人間勞働の生產物としての物財が一般に商品形態をとるばかりでなく、生產者の勞働力が商品たることを必要とし、更に有形無形の勤勞が商品であり、否地上一切のもの、權利能力は愚か名譽信義友情に至るまで金錢化せられて幻想的に商品形態をとる。マルクスは云ふ、『價格形態はたゞに價値の大きさと價格との間における、すなはち價値の大きさとそれ自身の貨幣表現との間における量的不一致の可能性を許すばかりでなく、それはまた或る質的矛盾をも宿せ得るのであり、かくて貨幣はたとひ諸商品の價格形態たるにすぎざるものとはいへ、價格は總じて價値の表現たることを廢止するに至る場合がある。何らの商品でもない種々なるもの、例へば、良心、名譽、等々は、これが所有者により貨幣に對して賣りものにされ、かくしてそれらの價格により商品形態をとることができる。だから或物は、價値をもつことな

くして形式的に價格をもちうる。この場合價格表現は數學における或種の量のやうに想像的なものである。他方において想像的な價格形態、例へば何等の人間勞働もそれに對象化されてゐないが故に何らの價値ももつてゐない、未開地の價格は、ある現實的な價格關係または、それから派生した關係を隱蔽することがあり得る』と（河上、宮川二氏譯、資本論第二分册、一六二）

商品形態の發展は卽ち價値法則の發展を意味するものであるが、それはまた法則自體の止揚たり得る、しかしこの法則自體の止揚としての非勞働生産物が價格をもつに至る所以は、それ故にまた商品の價値法則を前提すること無くしては說明し得られない。しかるに敎授は云ふ。

『價値なきものゝ賣買は如何にして可能なるか、商品を勞働生産物に限局して而も價値なきものゝ如何にして商品たり得るかは（そのある特殊なものを除いて云へば）何ら說明せられるところはない。いづこにかゝる說明をさがし求むべきか。寡聞の私はこれを知らぬ。これらの現象は價値法則を明かにした後說明し得られずに殘つてゐる』（同上、六五、上）

これによれば『土地』『權利』及び『人』の如き非勞働生産物たる商品と價値法則との關係がマルクスによつて說明されてないと云ふ。

マルクスは地代論において土地價格に論及してゐないか。マルクスは、貨幣資本のうちに『權利』卽ち株式公債等の價格について書いてゐないか。尤も敎授はこの誰でも知つてることを知らぬ筈がないからその意は恐らくマルクスが競爭及び株式資本等につき他の範疇と同じく獨立な一篇を遺してゐない、つまり資本論は未完成だと云ふのであらう。それは獨立の一篇として書かれてない。けれどもそれを仕上げる方法は與へられてあり、しかも敎授がこゝに問題とせられる價値法則一般との關係に關する限りにおいては資本論で充分ではないか。資本論にかいてないと云ふことはマルクスをしゆるものである。

た地代、[illegible]
若額地代）が發生せしめる。土地[illegible]場合には一[illegible]、土地價格は[illegible]
土地價格は資本化せられた地代であり、それは通常、その時々の利率によつて地代を還元したものである。[illegible]は
價株式その他の有價證券のことであらう。單に紙券としてかゝる證券の無價値なことは云ふまでもないが、それが賣買せられるのは利子附證券だからである。株式價格は當該企業の配當及びその時々の利子率に依つて、公債價格は時々の利子率によつて決定せられる。これら土地株式及び公債價格は利子率の變動によりまた需給關係により不斷に變動し、現實の地代又は資本價値から隔離し、幻想的な價格をもつ。しかも或種の株式は所謂「泡沫」であつて現實資本なく、公債に至つては鐵道公債の如き生產的なものを除き多くの場合不生產的であり、物財は既に消費せられて無いのであり、たゞ租税收入を引當とする國家の保證があるだけである。けれどもこの不絕に動搖する『上層建築』は價値法則の支配を免れ得るものではない。土地價格の源泉たる地代は超過利潤としての剩餘價値の一部であり、株式價格の源泉たる配當は一の企業利潤として同じく剩餘價値の一部であり、公債の最終擔保たる租税は資本所得又は勞働所得に發源し、結局剩餘價値又は價値の勞賃部分の一部に外ならない。また土地價格及び有價證券價格を支配する他の要素たる利子は企業利潤と共に平均利潤を構成するものであり、同じく價値法則の支配下にある。一々の外化過程が討究せらるべきであるが、しかし問題の歸するところは、社會が事實上生產に支出せる勞働の分量にある。總じて擬制資本なるものは、個人資本家の資本家的計算により一倍は二倍となり、二倍は三倍となり、現實の物的關係から隔離せられ幻想的な資本を代表するものとなると云へ、本來物質的基礎なしに成立し存在しない。現に確實な株式の背後には拂込資本卽ち現實に機能する資本があり、既に消費せられて何らの物財をも代表しない公債も、租税がそして結局全產業が保證に立つ。而して一般に利子付資本の存在は、產業資本及び信用制度の一定の發展を前提し、結局において規則的に利潤があげられてゐること、從つて勞働の搾取が規則的

に且つ平和に行はれることを條件とする。もしこの條件にして一旦根本的に攪亂せられるならば、資本のあるところ利子あり、利子のあるところ資本ありと云ふ固定觀念は動搖すると共に事物の眞實の關係が明白となる。

最後に教授によつて土地及び權利と並べられた『人間』なるものは何を意味するか。勞働力は價値をもち從つて價格をもつが、人間それ自體は今日では通常賣買されないから、こゝに人間の價格なるものは勞賃を資本化したところの勞働者の『資本價値』を意味するのであるまいか。もしそうだとすれば、マルクスが指示した如き或る比較文化統計學者の云ふやうなことであらう。曰く、『勞働者は資本價値をもつてゐる。この資本價値は、彼が年々得る賃銀の貨幣價値をば利子收益と看做すことによつて、見出される。若し一日の平均賃銀を四パーセントで資本化したとすれば、農業上の成年男子勞働者一人の平均價値はドイツ系オーストリアにおいては一千五百ターレル、プロイセンにおいても一千五百ターレル、イギリス一千七百五十ターレル、フランスにおいては二千ターレル、中部ロシアにおいては七百五十ターレルとなる』。（フオン・レーデン著『比較文化統計』ベルリン一八四八年一三四頁）。マルクスの批判に云ふ。『ところが、こゝにこの無思考な表象と不愉快にも割斷する二つの事情がある。一つは勞働者は利子を受けるため勞働しなければならないと云ふこと、もう一つは、勞働力の資本價値は讓渡しによつて貨幣となり得ないと云ふことである。』と（高畠氏譯資本論第三卷下、一三四頁）更に云ふ、『利子附資本なるものは總じてあらゆる錯覺諸形態の生みの母であり、銀行業者の表象においては、債務が商品となり得るが、國債においては一のマイナスが資本となる。（中略）勞賃は利子として解せられ、從つて勞働力なるものは利子をもたらす資本と解せられる。（中略）資本制的表象樣式の錯覺はこゝにおいてその絕頂に達する』と（資本論同上）

七、マルクス批判者の批判

教授においては、一、商品交換における價値法則の必然性が理解せられない、二、從つてまた價値法則一般の意義が不明である、三、それ故に我々が勞働の單純なる生產物として把握せられ得ない、四、商品價値法則一般に屬する諸點を明かにして一見之と矛盾する特殊現象が說明せらるべきに拘らず、教授はまた特殊な現象の故に、我々に價値法則一般を否認せられるから、從つてまた勞働生產物に非らざるものゝ商品形態と價値法則との內的關聯を拒否する。

かくて教授の積極的主張は、一、交換があるから價値があるのでその反對ではない。而して交換は諸生產物の「交換能力」の作用である。二、交換は勞働を捨象するも使用價値を捨象し得ない。交換において支配的なものは買手の地位であり、態度であると云へる。その態度はまさしく、商品を使用價値として見る」（改造、五九、同）「交換せられる二商品において共通する同量のものがあればそれは使用價値である」（同上、六〇、下）

教授においては、價値とは使用價價のことであり、價格を支配するものは消費者の購買力である。これ需給說である。吾々はこれに對して價格は何でありどこから來ると問ふ。價格は貨幣の一定量であり、そして消費者の所得からと答へられるだらう。しかし、貨幣とは何か、貨幣の一定量としての消費者の所得とは何か。價値に關する教授の主張から判斷すれば貨幣は一般に好愛せられる便利な商品だと云ふ外ない。だがそれは、或る商品は便利な商品たるが故に商品所有者達が天氣晴朗なる一日之を貨幣として使用することを盟約するによつて發生すると云つたことにならないか。それで滿足できるだらうか。貨幣は單に流通手段でない。その流通手段たる以前において價値尺度であり、價値尺度及び流通手段の統一物としては貨幣は金である。金は人間勞働の生產物でありそれ自身價値ある物體である。金の貨幣形態は交換過程の結果であるが、交換過程は金に價値を賦與しない。貨幣の價値はそれの生產に支出せる人間勞働以外にない。

勞賃、利子、企業利潤、商業利潤及び地代、これが所得の態容であり、貨幣の一定量として表はされる。それは何處から來るか。教授に從へば「競爭の充分なる作用は剩餘價値を消滅せしめる」（同上、七六、上）と云ふ。して見れば、剩餘

價値なるものは競爭の不完全に立脚する。商品の賣手及び買手の市場における相互の競爭において一方に依頼する程度の大なるものが常に生産費以上の價格を支拂ふことになり、しかもそれは常に消費者側の犠牲において行はれる。消費者が支拂ふこの生産費以上の價格が即ち剰餘價値(否、剰餘價格)だと云ふことになる。勞働者もこの場合消費者である。だから剰餘價格としての資本家の利潤の一部は、勞賃の一部を奪ふことによつて成立つことになる。だが賣手であつたものは買手になり、買手であつたものは賣手となる。賣手として得たところのものを買手として失ふとしたならばどこにも剰餘價格はない筈だ。しかるに、資本家の掌中には、年々歳々巨額の利潤が蓄積せられる。それは何處から來るか。教授の説では、消費者が支拂ふ購買力としての國民所得以外にはない筈だ。吾々はいまそれが何に由來するかを問ふのだ。マルクスの勞働價値説においては、それは勞働者が勞賃としての必要勞働時間以上の勞働としての剰餘勞働にもとづき、詳言すれば、剰餘勞働が利子企業利潤商業利潤及び地代に分割せられると云ふのだ。國民所得の限界をなすものは、生産に支出せる人間勞働である。勞働價値説を否定する教授はむろんこれを否定する。否、之を否定せんがために勞働價値説を否定する。これを否定して如何なる答ありや。恐らくは、産業利潤は資本家が任意につけ加へる割増しだと云ふより外あるまい。假りに利子企業利潤及地代等は皆割増しだとすれば、一方的な割増しは結局强力を伴ふであらう。武裝による割増し、これが唯一の答であらう。だが如何に武裝せる割増しでも無い袖は振られぬ。如何に武裝しても奪ふ對象物が無くて何を奪ふか。奪ふことは奪はれるものゝ存在を前提する。貨幣が天から降つて來ない限り、貨幣所得に對する一方的な割増强制は貨幣所得の大さによつて限定せられる。それは何處から來るかと吾々は問ふのだ。

教授に從へば『今日は經濟學は一轉機を劃してゐる、所謂自からを實現しゆくものは絶對的に平均的なものでなくして限界的のものである。』(同上、七六、上)と云ふことであるが、これは、今日は獨占資本の時代で自由競爭と云ふものがないから自由競爭にもとづく經濟學は一轉機を劃すると云ふ意か。競爭が獨占から發生したやうに獨占は競爭の結果であり、

競爭をいふなら、獨占資本の時代だといふことに競爭が消滅しない。生產が獨占生產者の支配にあるのでない、[illegible]でない。獨占價格には價値法則は妥當しない。しかし獨占價格は他の商品の生產者の利潤の一部を奪ふことによつて成立する。しからば、他の生產者の利潤が一獨占生產者の獨占價格の限界であり、それが剩餘勞働に該當する限り、獨占價格は價値法則の支配から免れない。生活資料に獨占價格が成立すれば勞賃は騰貴し、利潤率は低下し、各種生產部門間の比例に變化を惹き起すだらうが、一商品の獨占價格の限界は他の商品生產者の利潤にあるといふ事實に變りはない。勞賃にして騰貴せず、從つてそれが價値以下に低下するときは、一の獨占價格は他の生產者の利潤の一部及び勞賃の一部から來たものである。それは剩餘勞働の一部と必要勞働の一部を奪ふことによつて成立する。獨占價格も生產に支出せる勞働に胚胎し天から降つては來るものでない。

之を要するに教授の「外在的批判」の規準としての價値卽交換價値又は使用價値說は成り立たない。もう一つの問題が殘つてゐる。批判の誤謬は批判の對象を理解せられないためであること上述の如くであるが、しかし教授は何故にかく批判の對象に理解なきか。それを明かにすることなくては反批判は全きを得ないのであるが、これは從來教授の學問に親しみある者にして始めて克くするところである。私には不向きである。私はこゝにたゞ教授の「內在的批判」をふくめた外在的批判」における批判の對象が如何に教授の理解せらるゝものと相違するかといふ、主として技術的な點を示して筆を擱く。

勞農黨の發展的解消

河上　肇

私は勞農黨の結成以來、今日に至るまで、まだ一度も勞農黨について筆を執つたことはない。それは、黨內の意見が充分に定まらぬうちに先き走りして、累を勞農黨に及ぼさんことを虞れたためである。またたとひ筆を執るにしても、私は『勞働農民新聞』または『社會問題研究』を選んだであらう。しかるに拘らず、急にこの一文を草して之を本誌に寄せたのは、小岩井氏等の論文が掲載されるであらうことを豫め承知したからである。今度の問題については、小岩井氏等と一度も直接の討論をなす機會を得なかつた。徹底的な討論を經ることなしに、先づ分裂的な行動を企てることは、徹底的な討論が用ひられずに早くも妥協が行はれる場合と同じやうに、階級的立場からは非難さるべきであらうと考へるが、今更致方もない。かういふ場所で、かういふ形で、いきなり双方の主張を載せ合ふことは、決して最上の策ではないと考へるが、事態はこれを餘儀なくしたのである。なほ言ふまでもないことだが、私が以下敍述するところは、純粹に私一個人の私見である。その中には、勞農黨の內部においてまだ討論ずみとなつてゐない事項も自然に含まれてゐると考へるので、特に以上のことを斷つておく。

一、勞農政黨が一般的に否認される理由

勞農黨は謂はゆる「勞農政黨」の一種である。しかるに勞農政黨なるものは、勞働者および農民の大衆動員の組織形態として、本來は決して好ましきものではない。諸國における階級鬪爭の實踐は、か〻る勞農政黨が最も容易に小ブルヂョア的政黨に――從つて勞働者農民の解放に對する妨害物に――轉化し易

きものであることを、すでに充分に證明してゐる。それゆゑにそれはコミンテルンによつて一般的に否認されてゐる。それは何時如何なる場合にも階級的に正しきものでありうると云ふ風に考ふべきでないのは勿論のこと、それが階級的立場から是認されうるのは、極めて特殊な諸條件のもとにおいて、單に一時的な例外的な存在に過ぎざるものとして、極めて注意深く指導されゆく場合に限られるのである。吾々は勞農黨の存在價値を論じる場合に、先づはつきりと以上のことを考慮に入れて掛からねばならぬと信じる。それゆゑ私は、勞農政黨が何故一般的に否認されるかの理由を、より立ち入つて考察しよう。

一九二八年（一昨年）九月、コミンテルン第六回世界大會で採用された或るテーゼの中には、注意すべき次の言葉がある。

『×××者は、現存せる農民運動に××的性質を賦與するため、常に努力せねばならぬ。………農民大衆の間において、ならびにプロレタリアートの間において、吾々は、プロレタリアートと農民との闘爭同盟のために精力的なプロパガンダを行はねばならぬ。特別な「勞農政黨」は、或る時期においては如何にそれが××的な性質をもちえようとも、實に餘りにもやす〳〵と通常の小ブルヂョア的政黨に轉化しうるものであるから、かゝる政黨を組織することは勸めるべきでない。………

『勞働者大衆および農民大衆の闘爭同盟は、××的農民組合（または委員會）および勞働組合の代表者の・注意深く準備され且つ定期的に會合するところの・共同の協議會または會議に、そを見出しうる。………』

なほ右のテーゼの草案起草者たりしクーシネンは、會議の席上において次の如く述べてゐる。

『ソヴエートがまだ組織されえない段階においては、ロシア××におけるソヴエートが二月から十月までの期間に成し遂げたやうな仕事は、何によつて成し遂げらるべきであるか？………これは運動の準備段階における大衆獲得の組織形態に關する一つの問題である。ただにプロレタリアートのみでなく、更にまた農民について、その廣汎な大衆を動員するための組織形態としては、どんなものが問題になり得るか？………疑ひもなく勞働組合および農民組合は、運動の準備段階における大衆の動員に關する實際上最も重要な組織形態と看做することができるが、しかしその外にもつと違つた組織形態が、この目的のために問題となりえないだらうか？………若干の同志たちは、暫くの間、「勞農政黨」を斯かる組織形態の補充として考へてゐた。だが今日吾々が以前よりも明瞭に考へてゐることは、かゝる形態は、特に植民地および半植民地では、勸めることができないと云ふことである。勞農政黨は餘りにもやす〳〵と小ブルヂョア的政黨に轉化し、××主義者の影響から放れて、最も廣汎な勞役大衆と××主義者との接觸を助けるため殆んど役に立たぬものとなりうるのである。かゝる政黨をもつて本當の××黨に代位せしめようとすることは、絶對的に誤謬である。』

勞農政黨が何故一般的に否認されてゐるかの理由は、以上の

[illegible]的に成し遂げうる諸條件は、[illegible]いえない。このことは何人も否定はしないだらう。だが、そのことから直ちに、勞働者黨以外の政黨を作ることは如何なる場合にも誤謬だと云ふことが、必然的に結論されうるのではない。もちろん、勞農政黨をもつて勞働者黨に代位せしめんとすることは、絶對的に誤謬である。だが問題は、前衛黨のことにあるのではない。廣汎なる勞働者大衆および農民大衆の動員組織としての勞農政黨、これが吾々の問題なのだ。ところで斯かる意味のものとしての勞農政黨になると、それを作ることが疑ひもなく絶對的に誤謬だと云ふほどに、問題は自明ではないのだ。たゞ斯かる組織形態はこれを「勸めることができない」と云ふことが、『以前よりもより明瞭に』なつたがために、一昨年のコミンテルン大會において、そのやうに規定されたに過ぎぬ。

しからば何故勞農政黨は「勸めるべきでない」とされるのか？それは、かゝる勞農政黨は、たとひ或る時期には如何に戰鬪的なものでありえても、實に餘りにも容易に小ブルヂョア的政黨に轉化しうるからだ。この場合、合法非合法といふことが本來の問題ではないのだ。國によつては、前衛黨としての勞働者黨が立派に合法的存在を保つてゐるが、しかし場合によつては、[illegible]その組織上の[illegible]ではない。

二、吾々が勞農政黨の一時的な存在を必要とする理由

勞農政黨が一般的に好ましき組織形態でないことは、以上述べた通りである。吾々は多年にわたる諸國のプロレタリアートの鬪爭の實踐から經驗的に歸納された以上の如き一般的結論を尊重することにおいて、決して人後に落ちるものではない。それにも拘らず、何故吾々が、たしかに勞農政黨の一種にすぎない勞農黨を結成して今日に及んでゐるかと云へば、現在の瞬間における諸條件が本格的な定石的な組織形態を採ることを不可能ならしめてゐるからである。

そのことを明かにするためには、運動の全領野にわたる原則的な組織構成は如何なるものであるかを、はつきりと頭に浮べねばならぬ。それは、前に引用したコミンテルンのテーゼからも知られる如く、次の如くであらねばならぬ。

（一）前衛黨——一切の被壓迫民衆を解放するといふ偉大なる歷史的使命を負うた勞働者階級の選ばれたる前衛鬪士の組織せ

る・鐵の如き訓練のもとにある・勞働者黨。

（二）大衆組織――前衛黨は廣汎なる勞働者農民大衆を盡く黨員として自己の組織内に包容することはできぬ。廣汎なる勞働者農民大衆が盡く前衛闘士となると云ふが如きことは、考ふべからざることであるから。しかしながら、前衛黨は、大衆から孤立してゐては、言ひ換へれば、それ自身の單獨な力のみをもつてしては、その歴史的使命を果すことができない。それは廣汎なる大衆の信頼をかち取り、その使命を果すために廣汎なる大衆を自己の指導のもとに動員しうる能力と組織とを有たねばならぬ。前衛黨が大衆化せねばならぬと云ふのは、その意味である。だから前衛黨は如何に大衆化しても、廣汎なる大衆は常にその組織外にはみ出てゐるのであり、從つてこれら廣汎なる大衆を如何に組織すべきかの問題が殘る。日本の如き、農民が人口の大多數を占めてゐる國柄においては、勞働者と農民とを緊密に同盟せしめることが、勞働者黨にとつて特に重要な任務となる。かゝる理由から、勞働者および農民の大衆の動員組織が、前衛黨としての勞働者黨の外に、ぜひ必要とされてくるのである。そしてそれらの組織は、次の二つから成り立つ。

（イ）勞働組合および農民組合――これは最も重要な大衆組織である。そしてその組織および活動に關する最高の指導は、本格的狀勢のもとにおいては、もちろん勞働者黨の把握するところである。

（ロ）勞農闘爭同盟――その實體を成すものは、勞働組合または農民組合に組織されてゐる勞働者農民の廣汎なる大衆である。（但し資本主義制のもとにおいては、組織率の最も大なる國柄においても、勞働者の總てが勞働組合に組織されると云ふわけにゆかない。殊に組織率の低いフランスでは、革命的組合と改良主義的組合とに組織されてゐる者が各々五十萬人で、それは全勞働者の一〇パアセントにすぎない。日本の組織率は更にそれよりも低く、組織勞働者の數は僅かに三十三萬人、組織率は六・七パアセントにすぎない。）そしてこの勞農闘爭同盟の機關となるものは、勞働組合および農民組合の代表者の共同的な協議會である。前項に掲げた勞働組合および農民組合は本來勞働者および農民のための別々の經濟的團體であるが、勞農闘爭同盟は勞働者および農民の共同の政治的團結である。それは政治的機能をもつものであるから。もしそれ自身が獨立の政治的指導部をもてば、一個の獨立した勞農政黨となるのであるが、本格的に勞働者黨の指導のもとに立つかぎり、それは獨立の政黨とはなりえない。

左翼の全運動が定石通りに行はれれば、各種の組織形態およ

[illegible]門における日本の民衆[illegible]條件は、吾々の見るところによれば、右の如き定石通りの進み方は不可能ならしめてゐる。そのことの根本的原因は、各運動の指導的頭腦たる前衛黨が、打ち續く彈壓のために、その活動を充分に伸ばしえざる狀態にある、と云ふことである。このことは必然的に到る所において種々の混亂と變則的狀態とを產まずにはおかない。そして吾が勞農黨も、か〻る狀勢に餘儀なくされたところの、一般的公式からの一時的な且つ不可避的な例外に外ならぬのである。それはもちろん一の變則的存在である。吾々はそのことを百も承知してゐる。だが、勞農鬪爭同盟の維持、確立、發展のために活動することは、吾々の一日もゆるがせにしえざる問題であり、しかも斯かる同盟の確立のための運動は、現在のところ暫く勞農政黨といふ變則的な組織形態を採つて進むより外により善き方法はない、――斯樣に吾々は確信してゐるのである。吾々の認識を責任ある態度をもつて否認せんとする者は、吾々に向つてより善き方法を示す義務を負ふべきだが、現に何人もそれを示しえてゐないではないか。

勞農黨結成以前には、それは勞農同盟の名において存在してゐた。しかしこの勞農同盟は、――私自身も僅かな程度において[illegible]――吾々の[illegible]果しえざるに至[illegible]、民衆に對する中心的な指導をすら失つてしまつてゐたのである。吾々の見るところによれば、かういふ狀勢が、嘗て勞農同盟のもとに組織されてゐた吾々を驅つて、今日の勞農黨を結成せしめるに至つたものである。それは、本來の勞農鬪爭同盟としては、未だ極めて不充分な實體と歪められた姿とをもつてゐるに相違ないが、その志すところは、勞農鬪爭同盟としての本來の機能を可能なかぎりにおいて成し遂げんとするにある。そのことは從來勞農黨の公けにした諸種の文書にも明白に現はれてゐる。私は今、勞農黨をか〻るものとして觀察しようとするのである。

三、勞農黨の特殊性

勞農黨は、本來ならば一個獨立の政黨として存在すべからざるものが、已むをえず一時か〻るものとして存在するに至つたのであるから、それは、その誕生の日から、自分を變則的な存在であると意識してゐる。そのことの必然的な結果は、勞農黨は政黨としての自分自身が辯證法的に止揚せられる日の一日も速に來らんことを自ら希望しつ〻、存在してゐると云ふことであ

る。こゝに政黨としての勞農黨の特殊性があるのであり、かゝる特殊性の明白なる認識のもとに、吾々の同志は固く手を握つて勞農黨の旗の下に戰つてゐるのである。この特殊性からは必然的に種々なる規定が生まれるが、こゝにはまづ他の諸政黨との區別を明かにしよう。

勞農黨が前衛黨と異なることは言ふまでもない。それは前衛黨に代位しうるものでもなく、また前衛黨に轉化しうるものでもない。かゝる可能性が絶對に封じられてゐることは、勿論のことである。(以前の勞農同盟も發展的に解消さるべきものと規定されてゐたが、しかしその意味は、勞農同盟によつて動員されてゐる大衆を前衛黨に吸收しつくすと云ふ意味であつた。だが、かくの如きは、大衆動員組織としての勞農鬪爭同盟にとつては、不可能であると信じる。――なほ序ながら一言しておく。今日、勞農黨は前衛黨の擴大強化のために役立たないと云つて非難する者があるが、前衛黨なるものは勞農黨の如きものが産み出しうるやうな、そんなつまらないものではない。また勞農黨が前衛黨の擴大強化のための有力な妨害物になつてゐるといふ非難もあるが、前衛黨といふものは、勞農黨が有力に邪魔をしうるやうな、そんな弱々しいものでもない。)

勞農黨は前衛黨と全く異なると同時に、その組織形態からいへば、勞農政黨の一種であるといふ限りにおいて、社會民や全國大衆黨と異なるところはない。たゞそれらの諸黨と黨とを分かつ點は、前に述べたる勞農黨の特殊性（すなはち政黨としての自己を止揚せんとする豫定を内包してゐる點）である。勞農黨がもし此の特殊性を失ふかまたは他黨が同じやうに斯かる特殊性を有つに至るかすれば、勞農黨と他の勞農政黨との區別は始めて無くなるであらう。

吾々は以上の如き特殊性を見失ふことを、勞農政黨第一主義と名づける。この勞農政黨第一主義からは、種々なる誤謬が派生するが、我が勞農黨は極力それらの誤謬を排除することをもつて其の特色たらしめんとしてゐるのである。もし勞農黨が假に勞農政黨第一主義に陷つたとすれば、如何なる結果を生じるか？　勞農黨を飽くまで政黨として擴大強化しようとする傾向は、その一つである。このことは人々をして、勞働者農民のための眞實の政黨は原則としては勞働者黨の外にありえないと云ふことを忘れしめ、社民、大衆の諸黨との對立において、勞農黨こそは眞實の無産黨であると云ふが如き言辭を發せしめうる。しかも實際のところは、この勞農黨第一主義は勞農黨の特殊性の忘却から生まれるのであるから、正にそれゆゑに、それは當然に勞農黨と社民、大衆諸黨との間における眞實の區別を

曖昧ならしめる。從つて口には勞農黨こそが眞の無產政黨であると言ひながら、然らばどこに勞農黨と社民、大衆黨との區別があるかと問へば、他黨にはダラ幹が多いとか、勞農黨は最も左翼的であるとか云ふ類の答しかなしえない。（大阪の一角に發生した勞農黨即時解體論者は、最近まで勞農黨に屬してゐながら、勞農黨のこの特殊性を意識してゐなかつたやうな言辭を用ひてゐる。すなはち、勞農黨にもダラ幹がゐる。どこに社民黨や大衆黨との區別があるか、と云ふ風に非難したり、勞農黨は『左翼面をすればするほど、その左翼的言辭の故をもつて、大衆を欺瞞する』と宣言したりしてゐる。）實際のところ、もし勞農黨が本質的に社民黨や大衆黨と異なつてゐず、また異なろうと意識してゐないならば、それは既に社會民主主義の政黨として固定してゐるのである。然らば比較的にダラ幹が少いとか、最も左翼的であるとか云ふことは、勞農黨を左翼社會民主主義の政黨として誂へ向きのものたらしめるだけで、それ以外の何物ともなしえない。吾々はそれゆゑに、上に述べたるが如き意味の勞農黨第一主義の萌芽がもし黨內に現はれたならば、絕えず忌憚なく之に向つて嚴重なる批判をなすことが、勞農黨員としての義務であると信じてゐる。もちろん吾々は、自己の分擔せる當面の事業を過大に評價することなしには、その事業に全力を傾注しえざる傾向を[illegible]、一面[illegible]必要なことと考へてゐる。[illegible]他人評價に陷りつゝあることは、必ずしも深く咎めるには足らぬけれども、しかし勞農黨はそれ自身が一の過渡的存在であるがゆゑに、自己の過重評價は特に警戒せねばならぬ。勞農黨は從來も特にその點を注意して來たし、今後も絕えず之を注意するであらう。

勞農黨の特殊的な存在理由を明かにするためには、勞働組合運動における合同型（雜種型）の組合を思ひ浮べることが便利であらう。勞働組合が產業別線に沿うて組織さるべきであることは、何人も爭ひはしない。だが、新たに未組織を組織する場合には、一時的な過渡的な組織として合同型の組合をもつことが、便利であり必要である。このこともまた何人も爭ひはしないであらう。しかし合同型の組合は飽くまで變則的な組合である。だからそれは無條件的にそれ自身の擴大を圖るべきではない。一方では絕えず未組織勞働者を組織して自分の組合員としながら、他方ではその組合員を絕えず產業別線に沿うて整理することにより、これを合同組合から分離獨立させて行かねばならぬ。それゆゑ、それは一方では絕えず新たなる組合員を吸收しながら、他方では絕えずその組合員を叩き出すべき運命にあ

る。そしてそれが充分に斯かる訓練を意識し忠實に其の使命を果すかぎりにおいては、それは變則的な存在であるにも拘らず、未組織の組織のため缺くべからざる存在として、意識ある組織者の全幅的努力を買ふに値するであらう。しかし全般に亙る組織が確立し、産業別への整理が實現されるに從うて、合同型の組合は次第に自分自身を止揚しなければならぬ。こゝに止揚とは發展的な解消を意味する。それは機械的な解體と根本的に異なる。自分の組織した組合員を産業別に整理することによつて自分自身を無くするのは、發展的解消である。この場合には、組織された組合員が再び未組織狀態に分散させられるのではなく、一段高度の組織へ編制替へさせられるのである。そこには單なる瓦解が行はれるのではなく、一の發展が實現されるのである。これと異なり、合同型の組合が單なる解散を行つたとすれば、それは組織の破壞であつて、組織の發展を意味するものではない。(合同型の組合といふものが將來どうせ無くなるやうなものであれば、おれはそんな組合のために本氣で仕事する氣になれないと云ふ人があれば、それは組合を自分の私有財産として作り上げようとしてゐるのだ。そんな人間を吾々は今相手として議論してゐるのではない。)

吾々が勞農黨の解消を問題とするのは、勞農黨を辯證法的に止揚せんことを問題とするのである。大まかに云へば、以上述べたる合同型の組合の發展的解消と同じ範疇に屬する解消、それが勞農黨に課せられてゐる解消であるべき筈だ。

變則的な存在である合同型の組合は、場合によつては組織上若干の誤謬を犯す傾向をもちうるであらう。だがそのために原則論を振り廻して直ちに組合の解體を實踐に移すものがあつたならば、そのものは無責任なる破壞者となるの外なからう。

四、政黨としての勞農黨

勞農黨は發展的に解消さるべきであると云ふ意味は、本格的な勞農鬪爭同盟に發展することによつて政黨たる性質を解除すべしと云ふ意味である。すなはちそれは、本格的な勞農鬪爭同盟としての一面を發展せしめるにつれて、獨立の政黨としての他の一面を失はせしめねばならぬと云ふのである。私は先づ勞農黨から解消さるべき方面——すなはち政黨としての勞農黨——について述べよう。

勞農政黨をもつて眞實の前衛黨に代位せしめんとするが如きは、『絕對的に誤謬』である。このことは昨年八月發表された『新勞農黨樹立の提案書』にも、明白に規定されてゐたと記憶する。勞農政黨は勞働者階級と農民階級といふ二つの異なつた階

級の大衆を構成要素としてゐるが、かゝるものが全運動の指導の任務に耐へうるものでないことは、最初から極めて明白であり。吾々はそのことを百も承知してゐる。それは、自分自身を解放するために他の一切の被搾取民衆をも同時に解放するといふ偉大なる歴史的使命をもつた勞働者階級といふ一つの階級の前衛闘士が鐵の如き訓練のもとに組織してゐる前衛黨と、根本的に異なる。かゝるものが前衛黨に代位すべきものでもなく、また之に代位しうるほどの何等の組織も何等の實力も有つてはゐない。

だから、たとひ前衛黨が一時的には全運動に對し充分なる指導をなしえざる瞬間があらうとも、それはそのまゝに放置さるべきであつて、勞農政黨が横合から一時これを代行せんとするが如き意圖をもつべきでは斷じてない。もし左様なことを企てたならば、それは最惡なる社會民主主義の政黨たる役割を演じるに至るであらう。何故なれば、それは口先きだけで革命的言辭を弄するだけのものに終つてしまふから。そして實行力を伴はざる革命的言辭の單なる宣傳は、實行力のなきものに實行力があるかの如き粉飾を與へることにより、大衆に欺瞞的な幻想を呼び起す以外には何等の役割をも演じないであらうから。

だから勞農黨は、自分自身の力の限界を自覺し、常に謙遜であらねばならぬ。すなはち、その取り行ふ政治的機能は、勞農闘爭同盟として自らを發展せしめるために必要なかぎりの範圍に限定されねばならぬ。前衛黨の指導が[illegible]らざる限りにおいては、それ〴〵の分野において[illegible]の政治的指導が行はれる。それは不可避的のことだ。だがその指導は嚴密にこの不可避的な範圍に局限されてゐなければならぬ。

勞農黨は、自らを勞農闘爭同盟として發展せしめるための自己の闘爭を進めるため必要な限りにおいてのみ、一定の限定した政黨的機能をもつ。しからば、勞農黨は、以上の如き闘爭を進めるために、具體的には如何なることをその任務となすか？勞農闘爭同盟の實體を形成する勞働者および農民の大衆は、それ〴〵勞働組合、農民組合に組織されてゐなければならぬとの見地から、それは何よりも先づ勞働組合および農民組合の擴大強化のために働かねばならぬ。だから勞農黨は、結黨當時その綱領の第二に、「我黨は勞働組合、農民組合の擴大強化を重要任務となす」と規定してゐる。吾々は勞農黨が今日までこの任務——この重要任務——を充分に果して來たとは、決して思はない。勞農黨は不幸にして結黨匆々總選擧に當面した。そして選擧戰なるものは、概してそれに値する以上の精力を吸收することが普通であるから、結成匆々の勞農黨が直ちに斷乎たる選擧戰を行ふことは相當考へものであつたかも知れないが、當時は時

虎の勢ひ之を放棄することを爲し得なかつた。その自然の成行として、勞農黨はその結成の第一日から專心その主要精力を組合の擴大強化のために傾倒することから妨げられた。しかしその後の傾向は、――もちろん地方によつて種々の差異があるが、――全國的平均的に見れば、勞農黨は次第に自己の重要任務に對する自覺を呼び起し、すでに着々實踐上の效果を擧げつゝある。――何はともあれ、勞農黨は自分を勞農闘爭同盟として發展せしめんとするものであるから、自らの發展のために必要とする限りにおいて一定の政治的任務を有つが、しかしそれ以上に出でんとするものでもなく、またそれ以上に出でんとすることは誤謬であらう。

だから、本來、政黨としての勞農黨の政治的活動に過大の望みを屬することは、誤謬である。勞農黨の眞實の使命に確信をもつものは、このことを大膽率直に認識して出發すべきである。しかるに、もし何人かが之に過大の望みを屬してゐたならば、その人は當然失望すべき運命におかれてある。吾々の見るところによれば、解放運動は極めて困難なる闘爭であるがゆゑに、吾々はあらゆる闘爭形態を殘る隈なく利用せねばならず、またあらゆる闘爭力を剩す所なく利用せねばならぬ。それゆゑ吾々は勞農黨の政治的活動に過大の望みを屬するものではないが、それかと云つて、大阪の諸君の主張する如く、それは無力であると云ふの故をもつて、直ちに之を解體すべしと云ふ結論は生まれないと考へる。もしそれが自己の限定されたる政治的活動を行ふにすら無力であると云ふのなら、黨員としての義務はこれをより有力ならしめることに存するであらう。如何なるものも其の萌芽においては比較的無力である。前衞黨ですら一朝一夕に有力なものとなりうるものではない。もし一ケ年未滿の成績が無力を證明したと云ふ理由で、これを解體すべしと云ふ主張が成り立つならば、如何なる組織もみなその萌芽のうちに解體を餘儀なくされるであらう。

以上述べたる如く、勞農黨は、前衞黨と異なり、自己の分擔に屬する或る局限された限界内において、一定の政治的機能をもちうるに過ぎない。ところで、そんなことなら、それは組合だけの力でやつて行けはしないか、かういふ疑問が生じるであらう。だが、組合は、勞働組合と農民組合とに分れてをり、そして今日のところ、これら双方の組合を連絡すべき恒常的の組織は全くない。もちろん勞働組合も農民組合も自ら政治的活動を爲しうるのであり、あるひは自發的に勞農組合共同の政治的活動を展開しうるに至るかも知れない。だが、勞働組合に對しては、その政治的活動を阻止するための反動的な勞働組合法案なるものが、すでに濱口内閣によつて用意されてゐる。それはブルヂョアジーの必要に應じ、いつ議會を通過するかも知れな

い。その時には、聯合としての合法的な政治活動は殆んど不可能とならう。組合單一主義により、大衆組織としてはたゞ組合のみを認め、今一つの組織たる勞働闘爭同盟を無用とすることは、斷じて誤謬である。吾々は、農民の間において、ならびにプロレタリアートの間において、プロレタリアートと農民との闘爭同盟のために精力的なプロパガンダを行はねばならぬ」のだ。特に農民が人口の多數を占めてゐる我國においては、以上の義務が一日も忘られてはならぬ。勞農黨を破壞すべしとなす諸君は、現在の瞬間において、果して他の如何なる組織を通してこの義務を實現せんとするのであるか？

五、勞農黨と組合

勞農黨が自らを勞農闘爭同盟として發展せしめんとしてをり、從つて勞働組合および農民組合の擴大強化をその重要任務としてをる以上、勞農黨と勞農組合との間には極めて密接な關聯が存在せねばならぬ。そのためには、勞農黨としては、特に次の諸點を注意すべきであらうと、吾々は考へる。

勞農黨は、原則としては、その黨員を出來得るかぎり勞働組合または勞農組合に再編成すべきであらう。（このことは結黨當時の方針のなかに明記されゐたと記憶する。）かくて勞農黨はその發展の過程において勞農組合と殆んど何等の組織的分離をなさぬこととなるであらう。吾々は日本においては、[illegible]勞働組合との關係が行はれた。例へば、[illegible]アにおいては、勞働組合といふ大衆組織と極めて[illegible]タリア黨に轉形されたために、[illegible]は長い間、[illegible]では今日でもなほ、勞働組合と前衛黨との間に何等組織上の分離が行はれてゐないといふことだ。かういふことが前衛黨としては組織上の缺陷であることは言ふまでもないが、しかしそれと逆に、前衛黨とは全くその性質を異にする勞農黨は、出來うるかぎり、勞農組合と融合すべきであらう。何故なれば、勞農黨が自己の目標とする勞農闘爭同盟は、勞農組合に組織されたる勞農大衆をその主たる實體となすべきであるから。

政黨支持の問題に關する見解の相違のために、組合の混亂または分裂を來たした例は、これまで少からずあるが、これは如何なる立場から見るも甚しき誤謬である。殊に勞農黨は、勞農組合の擴大強化をその重要任務としてゐるのであるから、勞農黨のために組合を騷がせたり弱めたり分裂させたりすることは、その自殺に等しい。だから勞農黨は、たとひ自分の援助のもとに一定の組合を作つたからとて、その組合に向つて勞農黨支持を強要してはならぬし、現に強要して來てもゐない。（勞農黨は選擧のための政黨ではないから、自分の作つた組合が自分を支持しないからと云つて、たいした問題にする必要はないの

だ。)組合を勞農黨の指導下にくゝりつけようとすることは、勞農黨自身の排斥するところである。勞農黨は、勞農黨支持組合の擴大强化を重要任務とするのでなく、一般的に勞働組合および農民組合の擴大强化を重要任務とするのである。

從つて勞農黨にとつては、未組織勞働者および未組織農民の勞働組合および農民組合への組織といふこと、簡單にいへば、未組織の組織といふことが、その中心の問題となる。これを勞働組合について見れば、約九三パアセントの勞働者は、まだ勞働組合に組織されてゐない。だから未組織の組織といふことが現在の我國にとつて極めて重要な仕事であると云ふことは、すでにプロフィンテルンの規定したところでもあり、今日何人も爭ふものはない。たとひ右翼組合が今日比較的には如何に優勢であらうとも、左翼がもし自分の手で急速に未組織を組織したならば、左翼組合は間もなく壓倒的な勢力とならう。勞農黨はこの事業のために、正しき方法においてその全力を盡さんとしてゐるのであり、僅かな月日の間にも、地方によつては既に顯著な實績を擧げてゐる。此の如きは、吾々が勞農同盟の名のもとに動員されてゐた時代には、夢想することすら爲し得なかつたところである。もちろん未組織の組織といふことが現在の瞬間において如何に重大な意義をもつかを悟らぬ人々は、吾々と政治的見解を異にするの故をもつて、吾々の組織運動を妨害することを最上の革命的行爲であるかの如く考へ、その大半の力を吾々の進路を妨げるために用ひた。このために、吾々自身もまた、無益なる精力の消費を餘儀なくされたことも少くない。だが、これらの人々も、レーニンの指導下にあつたボルシェヴィーキが、革命前も、革命中も、革命後も、前後二十五年を通じ曾て一度たりとも組合を分裂せしめなかつた實踐から教訓を吸み取るに至らば、やがて吾々とその力を共にするに至るであらうことを、吾々は希望し且つ期待してゐる。

もし勞農黨にして以上の如く進み行くならば、勞農黨と勞農組合との利害の衝突は起りえないであらう。もちろん勞農黨は、勞働者および農民大衆の全國的結成を目標とするものであるから、勞農黨のために働くといふことと、或る一組合のために働くといふこととの間には、仕事の衝突がありうるであらう。だがそれは、全體と部分との衝突であるから、適宜に處理されゆくであらう。

六、勞農黨の解消過程

勞農黨は、勞農鬪爭同盟としての領域内における政治的指導の任務を取るにすぎないが、しかしこの領域における斯かる任務も、前衛黨の確立につれて解除されるのであり、解除されねばならぬのである。かくて勞農黨は、前衛黨の確立につれて、

政綱と[illegible]を解消すること。

しからば勞農黨の爭鬪同盟としての實質はどうなるか？　勞農鬪爭同盟の實體は、すでに述べたやうに、勞働組合および農民組合に組織されてゐる。勞農黨が政黨として自己を解消したからと云つて、この基礎的組織が解體されるのでもなく、これら諸組織の同盟のために必要な諸機關が破壞されるのでもない。「勞農黨の組織方針が誤謬なく確立されてゐたなら、このことは鬪爭實體の上に何等の動搖を生ぜしめることなくして實現されるであらう。」かくて勞農鬪爭同盟は、前衞黨の指導のもとに、その本格的な組織を確立することになる。勞農黨がもし自己を辯證法的に止揚することに成效しえたならば、事態はおそらく以上の如く進行すべきであらう。

もちろん事態は、もし之を自然の成行に放任したならば、決して以上の如く圓滑に進行するものと保證されてはゐない。だから之を小ブルヂョア的政黨に固定せしめまいとすれば、最初からその組織方針および活動方針の上に、前記の如き意味における解消を意識的に計畫するための嚴密なる注意、用心深き考慮が用ひられねばならぬ。そして絶えず斯かる注意のもとに、黨が小ブルヂョア的政黨に固定することを防げるために鬪ふことは、すべての黨員の任務である。マルクス主義者は、如何に反動的な組織の中へでも入り込んで、敵の利用のために結成さ[illegible]

[illegible]

[illegible]

組合は、それに[illegible]

もし勞農黨が今後においても健全に發展するならば、そこには勞農黨の解消と擴大とが並び行はれるかに見えるであらう。一は政黨としての勞農黨の解消である。このことは恐らく徐々に行はれるであらうが、その際注意すべきことは、勞農黨としては次第に解消されつゝあるにも拘らず、勞農黨といふ看板は最後の瞬間まで元のまゝに揭げられてゐる、と云ふことである。勞農黨の政黨としての資格はたとひ月々に消えゆくとしても、勞農黨の看板はそれに應じて一寸づゝおろして行けると云ふ譯のものではない。そこでもし勞農黨が組合の組織に着々成效してゆくとすれば、それらの組合または組合員の或るものは全く勞農黨と關係を絶つに至るとしても、なほ勞農黨に止まるものが自然に增加してゆくであらう。もしまた勞農黨の援助のもとに出來た組合が殆んど殘らず勞農黨を支持してゆくものとすれば、勞農黨の看板のもとに結成される大衆は次第に增加してゆくであらう。だから、勞農黨の看板が元のまゝに揭げられてゐるかぎり、――その看板で包まれてゐる內容は絶えず變化してゐるにしても、――それは外形的には勞農黨の擴大として現象するであらう。しかしそれは、實際には政黨としての勞農黨の

擴大ではなく、勞農黨の名のもとにおける勞農鬪爭同盟の實體の擴大である。

假に比喩をもつて以上の關係を說明すれば、母胎內における胎兒の發育の如きものである。胎兒は發育するにつれて、次第に胎兒たる資格を解消し、それと同時に獨立の個體たる資格を具備する。その意味において、胎兒の發育は胎兒としてのそれ自身を止揚することから成り立つ。だが、それは消えて無くなるのでないのは勿論、胎兒が母胎から分離する瞬間までは、外部からは胎兒の成長としか見えない。だから胎兒の成育過程は、その解消の過程であると同時にその擴大の過程である。勞農黨の將來を論じる場合に、もし吾々が以上の如き辯證法を心得てゐなかつたならば、或る場合には、そこに一の矛盾があるかの如く見え、また或る場合には、双方とも同じことを考へてゐながら、一方は解消論者として、他方は擴大論者として、互に對立してゐるかの如く感じうるでもあらう。

吾々は以上の如き意味においての發展的解消論者である。しかるに大阪の諸君の解消論は、機械的な破壞的な解消論である。一つの比喩をもつて吾々の見解との相違を示せば、吾々は米粒を土地に蒔き、發芽過程を通じて之を稻に轉化せんとするに反し、大阪の諸君は之を石で碎かうとするのである。月の滿ちるを待つて安産により胎兒をなくしようと云ふのではなく、これを流産せしめようと云ふのである。そんなことを今更に躊躇するのなら、吾々は何のために如何なる決意をもつて勞農黨を結成したかの意味が、全く分らなくなるであらう。レーニンは嘗て言つた、「行動を開始する前に須らく一切の利害を秤量せよ、然る後大なる決意をもつて之を敢行せよ、行動中の躊躇は一の裏切に等しい。」勞農黨結成當時吾々は一切の利害を秤量した筈だ。そして吾々は、吾々の自ら行はんとする事業が必ずや種々なる非難と中傷を蒙るであらうし、吾々の前途には非常に複雜な困難な仕事が横たはつてゐることを、既に充分覺悟の前でその第一歩を踏み出した筈だ。吾々は吾々の企てた仕事が無條件的に最善の仕事であると主張する者ではないが、しかし吾々は、單に吾々の意圖では如何ともすることの出來ない種々なる具體的諸條件に制約されてゐる者として、その最善を竭さんがため、同志と共に新黨樹立の盟を立てたものだ。私はこの際昨日まで自分たちの企てて來た事業を直ちに破壞するの行動に出づる能はざるは勿論、獨り靜に同志と分れて陣營を退くことすら、一の階級的犯罪と考へざるを得ない。

【附記】以上私は現在自分の考へてゐるまゝを一應筆にした。討論の結果、他日もし自己の誤謬を發見するに至らば、その際私はこれを清算するため何等の躊躇をもなさぬであらうことを、玆に附記しておく。

現在農村は何處へ行く

高橋龜吉

一、農村窮乏問題の鳥瞰

現下の農村窮乏は、かつての自給自足時代に於ける飢饉の惨状に劣らない。なる程、収穫の量は普通――又はそれ以上――に在る。だが、農産物價の暴落のために、農民の受取る代金は前年の二分の一又は三分の一以下だ。しかもその前年の値段そのものは近年に於ける位のものが多かつた。然るに、支出すべき金は、前年と全く變らないものが多く、多少減じたるものと雖も、農産物價の下落に比せば、その何割に過ぎぬ。今日の農村窮乏は、資本主義的な農村飢饉そのものだと云ふことに、何處に異議を挾むところがあらうぞ。見よ、粒々辛苦して働いた農民の手に残るものは喰込と借金の増大だけである。否、此際借金で此の難局を乗越し得れば未だよい。ところが大多數の農民は、已に過去の窮乏で背負切れる以上の借金を負つてる。それが、今度の資本主義的農業飢饉のために、利子すらも拂ふ餘裕がなくなつたのだ。どうして新に金を貸して呉れる銀行や資本家や地主があらうぞ。かゝる窮状の秋に於て、萬一にも、租税公租、地代、借金等を期限通りに取立てられんか、農民は、次の農業活動に必要な、種子代、肥料代、及び家族の食料代迄も失ふことになる。

云ふ迄もなく、かくては、我が農村は愈々急テンポの荒廢だ。こゝに於て、いま、我が農村對策として最も肝要なことは、先づ緊急處置として、今日の資本主義飢饉に由り破産状態に陥れる農民（遊食の地主を除く、以下同じ）に、應急的救濟施設をなすと共に、根本策として、農業生産を今日の農産物價にても引合ふ點にまで低下せしめる手段を、急速に實行せねば

ならない。――乃至は又農產物價の方を、今日の生產費で引合ふ點にまで引上げるか、又は兩者双方から步み寄らすかして、兎に角、農產物價と其の生產費（從業農民に相當の生活程度を保證する勞銀を基礎とせる）との均衡を急速に回復せしめねばならぬ。

加ふるに、農村は、資本主義の行詰的恐慌のために、從來の如く、その過剩勞力を都市に流出して消化することも、農閑期勞力を賃勞働に利用することも出來ざるに至れるのみならず、歸農の名に於て、都市の失業者までも、厘詰め式に收容せしめられつゝある。斯様にして、土地過少、勞力過剩、仕事不足のために、農村の窮乏は更に加速度化されてゐる。現下の農村窮乏を打破するためには、之に對しても、效果的な應急的施設と根本的施設とを實行せねばならぬ。

然らば、その方向は何處だ！　現內閣のやりつゝある對策は果して農民をその目的地へ達せしめるものであるか否か？！

二、農村收入の飢饉的激減

農家收入の飢饉的激減は、農家經濟のあらゆる方面から襲ひ來つた。單に米（いまの端境で割合に高いが新米が穫れる頃の値段は已に暴落してゐること後述の如し）、繭等の主要產物のみならず、麥、蔬菜、果實、林產品、副業產物等あらゆる產品は暴落し、且つ、農家收入の激減は、子弟姊妹の出稼勞銀收入、農閑期の同上、等の減滅にまで波及してゐる。加之、農家唯一の資產であり、金融上の擔保品である田畑、山林の價格は暴落して、此の側面からも、金融的壓迫が加重せられてゐるのである。

先づ、農家收入激減の筆頭は繭（農產合計の約一六%五）だ。例へば春繭相場は、第一表の如く、一貫につき昨年は約七圓五十錢なりしものが、今年は四圓前後（因に昨年春繭生產費は一貫六圓九十九錢一厘だつた）で、實に昨年の約半額だ。

（一）春繭相場及掛目比較表

	白繭 相場	白繭 掛目	黃繭 相場	黃繭 掛目
大正一一	一一、二六	一〇一	一一、〇七	九八
一二	一一、六二	一〇七	一一、三八	一〇三
一三	七、五〇	六九	七、二一	六六
一四	一一、三三	一〇二	一一、一四	九九
昭和元	九、三四	八四	九、〇三	八〇
二	七、一三	七四	七、〇一	六二
三	六、九〇	六二	六、六〇	五八
四	七、五八	六七	七、四一	六五
五	四、〇四	三六・二	三、八二	三四・〇

[illegible]	二、五四〇	二、[illegible]	二、[illegible]七[illegible]	二、一[illegible]	
同　上	四六[illegible]七	四[illegible]	四八[illegible]	四[illegible]七	

（備考）　昭和四年までは農林省調べの外國輸出の平均相場。

これだけで、養蠶地方は已にスッカリ參つて了つてゐるのに、初秋蠶繭價は更に暴落してゐる。例へば、昨年のそれは、最高九圓六錢、平均六圓三十五錢を示したが、今年のそれは、多くは二圓内外で、甚しきは一圓臺を割るものすらある慘狀だ（因に昨年夏及初秋繭の生産費は六圓四錢乃至八錢だつた）。即ち、昨年に比し大體に三分の一の相場に過ぎない。而して春繭と夏秋繭との生産額は約同額である。從つて、今年の養蠶家收入は平均して昨年のよりも五割八分餘の激減に當るわけだ。顧るに昭和三年の繭産金額は五億五千百六十餘萬圓である。その五割八分の減收は實に三億二千圓である。

次に暴落の甚しいのは、蔬菜、果實の類だ。例へば、東京神田市場の標準相場は左の如く、前年に比しすべて、六七割以上の慘落だ。

		本年	前年同期
沖繩甘藷（一貫目）	五月末	七錢	三三錢
同上東京近郊産（十四貫）	七月末	七〇	三、〇〇
胡瓜東京近郊産（七十封度の一籠）	六月中旬	五〇	一、八五
茄子（大略三百乃至五百個入一籠）	七月中旬	一、七二	五、〇〇

[illegible]（一貫）　七月上旬　七五〇　一、[illegible]

更に之を[illegible]七月[illegible]物[illegible]七月[illegible]

價指數について見るに、前年同期に比し大體に五割内外から七割方の暴落を示せるのみならず、實に、馬鈴薯、玉葱、蓮根、果物の如きは、歐洲戰前市價を下廻り、就中、前二者の如き戰前の半額以下に落ちてゐる。

	馬鈴薯	玉葱	蓮根	其他野菜	果物	切干
本年七月	三六	四八	七[illegible]	一三九	九八	一〇五
前年七月	七四	一〇八	三六八	二五五	一五四	一八六
下落率	四八%六	五五%六	七六%五	四五%五	三六%三	四三%六

以上は、其間に於て、鐵道運賃、中間商人所得等、殆んど從來と變らざる費用をも包含せる東京市の小賣相場だ。從つて、産地に於ける農民の手取りは、右よりも、更に〱激落せるものと云はねばならぬ。例へば大阪府泉南郡では玉葱出盛期の値段、昨年は一貫十七八錢なりしに對し今年は僅か五錢にて其の暴落七割餘であり（大阪朝日八月十三日）、又、和歌山有田の柑橘は立木のまゝの見越取引が昨年七八圓なりしものが本年は二圓乃至三圓五十錢にて半減以下である（大阪朝日八月十六日）。

而して、此の鐵道運賃の不減のため、東京市場の市價よりも、産地相場の暴落の方が更に大なりと云ふことは、以下に述べる穀類、其他農産品、米についても等しく考へねばならぬ點で

つて、後述の如く、此際に於ける農村窮乏打破對策の一として鐵道運賃の低減を必要とせる所以を語るものだ。

扨て、次は雜穀類の暴落であるが、いま之を日本銀行調べの東京卸賣相場指數(明治三十三年を一〇〇とす)について、本年六月末のそれを見るに左の如くである(但し小麥は七月末分)。

	大麥	裸麥	小麥	大豆	小豆
本年六月	一一六	一〇七	一〇〇	一二三	一九〇
前年六月	一五〇	一三〇	一三九	一六七	二六八
同上下落率	二二%六	二〇%四	二七%〇	二六%四	二九%〇

斯くの如き農家經濟の收入激減は又、その他の農產物、例へば林產品(木材、苗木、木炭、椎茸等々)、茶、疊表の如きから、木管、下駄表等々凡百の農家副業品にまで及んでゐるのである。

いま、これ等の農產品が、我が農業經濟上、如何なる位地を占めてゐるかを見るに、左の如く、實に、全農產額三十三億餘の過半(昭和三年)を占めてゐる。以て、その打擊が如何に甚大なるかを容易に窺ひ得るであらう。

(二) 日本農產品價格及其內容表 (農林省調)

種類	昭和二年	同上百分比	昭和三年	同上百分比
米	千圓 一、一六四、三一七	% 五一・九二	千圓 六三三、〇〇九	% 四八・九三
麥類	一七九、一一九	八・〇九	一七〇、七〇五	八・一一
食用農產物	一三七、七一四	六・一七	一三九、二一七	六・七五
蔬菜及花卉	一四八、九三八	七・一三	一五六、一一〇	七・一七
果實	二七、八八三	一・二四	二八、〇八四	一・四一
工藝農產物	一一一、一六七	五・一六	一一七、一六七	五・五三
茶	二一、二一四	〇・九	二一、六三三	〇・九八
林野產物	一二八、〇八〇	二・八	一二八、四六九	四・一五
綠肥用作物	一七、九九七	〇・九	二一、〇九三	〇・九四
合計	二、二三九、一一七	九九・九三	二、一三七、一七六	一〇〇・〇〇

此間に於て、我が農產の他の一半を占むる米の相場が、今日迄のところ、以上の諸農產の如く激落してゐるたい。否、七八月の當限相場の如きは、前年よりも尠からず高値にあること別揭第三表の如くである。

(三) 東京期米相場表

	六月 當限	六月 先限	七月 當限	七月 先限	八月 當限	八月 先限
昭和三年	圓 三〇、一六	圓 三一、三三	圓 二九、四七	圓 二九、五四	圓 三〇、八一	圓 三一、九九
四年	二九、九五	三〇、九六	二八、二九	二七、八四	二八、八八	二八、八八
五年	二七、九九	二七、三三	二九、〇八	二八、三八	*二一、七五	*二六、六五

(備考) 五年八月は八月二十一日の一定値段 而して、翌二十二日の前場相場では、當限三十圓臺に落ち、先限は二十五圓臺に暴落した。

併しながら、米價暴落に因る農家收入の減少は、今年、新米收穫後に於て我が農家を襲ふ形勢にある。現に、八月に於ける當限と先限との相場の開きは、前年の[illegible]なるに對し今年は實に五圓十錢であることを表示の通りだ。之れは云ふ迄もなく、端境期の市場在米不足（政府が八月一日現在で三百二十餘萬石――前年よりも五十五萬五千餘石增の多額を所有しながら、大地主の利益のために、端境期品薄懸念で暮騰せるにも拘らず賣出さないからだ。尤も其後賣出したが僅か百萬石で蔑視られた）のため、八九月に於ける目先きの米のみ著騰して、新米の已に出廻る十月以後は米價暴落と見てゐる反映だ。かくて、新米出盛期に於ては、天災なき限り、此の分では米は一石東京で二十二三圓台を現出し、地方產地では二十圓を割るに至る形勢だ。此の際に於て、夏秋兩相場も已述の如く暴落の事情に在る。來る秋こそは、全國の農民が、愈々、その收入激減の總決算を、嫌でも應でも、強制せられる時であるのだ。

而して、以上の如き農產品の暴落は、必然に、田畑、山林等の唯一の農家資產價格を暴落せしめた。那須博士の計算に由れば、全國の田畑價格二百五十八億七千九百萬圓だ。その二割下落は（實際賣却せんとすれば更に〳〵下値でなくては買手はない）五十一億七千六百萬圓の損失だ。然るに、今日の資本家的金融は[illegible]かくて[illegible]落し、[illegible]ざるを得ない。現に、去る六月[illegible]農家の信用も頗る激減のため、勸業銀行が農家依頼の申込み大部分を拒絶せることを報じてゐる。

のみならず、農家は又、農業以外の收入に於ても激減の厄を蒙つてゐる。その第一は、政府の緊縮政策に由る事業の中止、及び一般財界不況のため、農閑期に於ける賃仕事を失ふに至つたことだ。その第二は、一般財界不況のために、子や弟妹等が工場其他に出稼ぎすることを封ぜられたことだ。その第三は從來已に都市に於て賃銀勞働、月給取、中小商工業等に從事せるものが、失業して所謂「歸農」するもの多く、かくて農村はそれ等失業者の掃捨場にせられてゐることだ。云ふ迄もなく、それ等失業者の生活は、已に困憊の極に在る農村の負擔となるのだ。斯樣にして、いま、我が農村は、その窮乏のドン底に於て、人口過剩のために、働くべき仕事なき半失業狀態に陷つてゐるのだ。

昔は、稼ぐに追つく貧乏なしと云つた。而して、農民は如何に困つても都市失業者の如く、働かんとしても働き口なしと云ふが如き悲哀は無いものだと考へられた。然るに、いまや、我

が農村はその「働く機會」さへも半分は奪はれてゐるのだ。而して、折角働いても、其の生産物の賣價は生産費を遙かに切込んで、農民の手には喰込と借金とが殘るばかりなのだ。

三、農産品暴落の原因と前途

以上の如き農産市價の暴落は、一時的現象か恒久的現象か。若し、前者ならば目先の農家の窮乏を、應急的に救濟すればよい。若し後者ならば、更に進んで今日の低廉なる農産市價で以て引合ふところにまで農業生産費を低下せしめる根本策をとらねばならぬ。

思ふに、今日の我が農産品暴落の原因は世界的のものと內國的のものとあるが、その多くは、一時的のものではなくて、恒久的性質のものであること左の如くである。

（第一）　世界的原因に由るもの

(1)歐洲戰中、戰後、歐洲、並に露國等の農産主産地は荒廢し、就中後者は革命の結果その輸出を封鎖した。この結果世界の農産（就中穀類）は供給不足に陷り穀價騰貴せる結果、之に刺戟せられて濠洲、北米洲、南米洲等に耕地が著增した。然るに最近に至り、歐洲の産額は漸く復舊し、且つ、勞農露國の輸出力は著しく增大して來た。こゝに、世界は穀類の一大供給增に襲はれるに至つた。之れ、小麥其の他穀類暴落の主因だ。

(2)人造絹絲異常の發達は、從來の纖維原料の外に、「レーヨン」なる新種の纖維原料（しかもそれは農産でなくて工業的製品だ）の一大供給となり、ために、纖維原料は全體的に一大供給過剩に襲はれるに至つた。之れ今日、生絲の外、綿も羊毛類も暴落せる主因だ。

(3)以上の外、此間農業技術も著しく進歩發展した。且つ、空中窒素事業の成功に基く肥料界の革命あり、こゝに、一定面積からの收穫率は一般に少からず增大した。就中、砂糖、ゴム、繭、等々はそれが顯著だ。

(4)斯く、農業生産方面は各種の側面から增大した。にも拘らず、消費の方面は、歐洲戰爭以降、却つて、大衆の收入は減少した。こゝに、農産品は一般的に一大供給過剩となり、市價は底拔け的に暴落するに至つたのである。

以上の如き世界的原因に基因する我が農産品の暴落は、専ら生絲、麥類（從つて間接に米價を壓迫するに至る）を主とする。而して、この下落は、前記の如く一時的のものではなくて、可なり恒久的だ。就中、前者の生絲の暴落は最も恒久的性質のものだ。

(二) [illegible]に由るもの

(1) 米穀[illegible]解禁[illegible]
寄価等に[illegible]一割[illegible]下落し、[illegible]け直接間接に外国農産品の圧迫を受けた。加之、舊平価解禁と財政事業中止とのために内地財界が一大不景気となり、一般の購買力を激減せしめ、この方面からも、比較的供給過剰の圧迫で農産品を暴落せしめた。繭、米、果實、等々の暴落の如きは後者の代表的のものだ。

(2) 資本家負擔の農村への轉嫁

(a) 政府及資本家がその收入減を避けるため、代りに抵抗力の弱い農産品を低落さした。

(b) 同じく勞働階級に轉嫁せられたものが、需要減となつて農産品價を圧迫した。

(c) 農村の政治的勢力弱きために政策上農民が犠牲に供せられしに由るもの。

一體、今回の如く、世界的不景氣の上に、舊平價解禁の打撃を受け、物價の暴落せる場合に於ては、政府及資本家も亦物價又は其他の料率等を低下せしむべきである。然るに、政府及び資本家は極力之に反對する。斯くて此際殆んど屋宅も「引下」を行はないものがザラである。例へば鐵道運賃、煙草、鹽、瓦[illegible]
[illegible]
[illegible]の引下を[illegible]要求する。然るに、その原料及材料で中でも、工業家品は、或は獨占又はカルテル、或は生産制限等に由つて極力其の價下の強要に抵抗するが、農民には、いきのところその團結力もなく、又賣止め、生産制限等を支へて行く資力も無い。加ふるに、「前貸」其他で資本家のために金融的に縛られてゐる。斯様にして、農民はその抵抗力最も弱きがために、資本家の尻拭をさせられるのである。一體攻撃は抵抗力の最も弱い點に集中せられるのが戰ひの有ゆる場合の原則だ。以上の如き場合、資本家が他の方面に於ける原料及材料其他の値下を斷念して、その合計の値下げを抵抗力の最も弱い農産品に強要して來るのは必然だ。例へば、生絲市價の暴落に對抗するがためには、製絲工場の減資、繭及生絲輸送費の低下、電力石炭等の燃料費の低下、税金公課の低下、借入金元利の輕減、仲買手數料、輸出高利金率等の低下等々に全力を擧ぐれば、原料繭價の暴落は今日よりも遙かに輕微で濟む筈だ。然るに、その方面の「引下」は面倒で困難故(即ち引下に反對する抵抗力が強いから)、その代りに、所要の支出の低減を抵抗力の最も弱い繭價に主として背

負はすのである。而して資本家は云ふ、生產費がこれだけ懸るから(生產費の方を減ずる手段を取らずに)、原料をこれ以上に買ふと損になると……。

斯樣なことは又、勞働賃銀に對しても行はれる。一體ならば家賃、電燈、瓦斯、水道料、食料品(その中で下らないのはいまだ農產品以外の食料品だ)電車賃、煙草其他日用品を下げ、生活費がそれだけ下つたら勞働賃銀を下げるのが順序だ。然るに、前記家賃其他の生活費を引下げる方は抵抗力が强いから、その方は抛つておいて先づ勞働賃銀を下げ乃至は人員を整理する。そこで、勞働者は致方なしに生活程度を引下げ、消費を減少する。蔬菜、果實、等々の暴落の主因の一つは之れだ。若し、反對に家賃、瓦斯電燈料、電車賃、煙草等々を先づ低減せんか、勞働者は從來の如く蔬菜、果實等を消費するが故に、その下落率は遙かに僅少ですむわけだ。

他に比し農產の暴落が特に甚しきいま一つの根因は、農民の政治勢力が弱少だ(自覺と團結力がないから)からだ。かくて、例へば、製絲家と銀行家とを救濟するために、去る三月政府は三千萬圓の生絲補償をやつた。しかし、その結果は二十萬梱の生絲の滯貨を殖らし、其後の生絲市價を壓迫して今日の繭の暴落の主因の一つをなしてゐる。又、政府が三百二十五萬石の米を持つて賣らないため、此の端境期に米が暴騰した。しかし端境期の米價騰貴で儲けるのは商人と大地主のみで、中小農民の多くは何れも今は高い米を買入れて食つてゐる。だから、眞に農民大多數の利益のために米價を維持せんとするならば、政府は此端境期に手持在米を全部賣出して、その暴騰を抑へ、かくて、その資金を以て新米出廻期の米價崩落を支へるために、新米をそれだけ買入れるべきだ。然るに、政府は大地主と商人との勢力に抑されて、端境期に僅か百萬石しか賣らない。從つて來る新米出盛期の暴落を支へ得る資力は、全部賣出した場合の三分の一しか無いわけだ。その結果は云ふ迄もなく、農民大衆の收入に最も影響ある新穀値段を、それだけ暴落せしめるのである。

以上は極く最近に於ける二三の實例だが、この外、保護政策に於て、財政的支出に由る各種の施設に於て、運賃政策に於て、金融政策に於て、農業は常に工鑛商に比し差別的待遇を受け、ために、農產品の下落、農家收入の激減を强ひられてゐるのである。現に、最近海運業が悲境に沈むや政府は直ちに之を救濟すべく一年五百萬圓(二ヶ年繼續)の補助金を與へる計畫を樹てゝゐる。理由は貿易外受取勘定を増さんためだと云ふ。だが、我が輸出貿易の五割近くを占むる農家蠶業が破滅に瀕し

[illegible]

[illegible]

(4)國民生活程度の整理

最近の農産品暴落の原因中には、國民の生活程度の整理に基くものが又、少からぬ部分を占めてゐる。從來の或る一部階級の豪奢贅澤な生活は、到底、現在の日本經濟力の許さぬところだ。最近までは、それでも、借金政策で之を續けて來たが、いまは其破綻が來て、嫌でも應でも之を整理せざるを得ざるに至つた。斯樣な意味の農産品暴落は、一部の贅澤な農産品蔬菜及び果實等の上に特に著しく襲つてゐる。

(5)極めて一時的の原因に由る暴落

前年高く賣れたために蔬菜類の栽培過多。尤も、その理由の中には、麥其他の暴落で、之を避けるために蔬菜栽培に轉じ、かくして、期せずして供給過剰となつたと云ふが如き稍々恒久的性質のものもあるが……。

以上に由り明かなる如く、最近の農産物暴落原因の多くは恒久的性質のもので、一時的性質のものは比較的に僅少である。勢ひ、問題は、此の農産物價暴落に對應するだけの「農業生産費」の低下が、果して出來てゐるか否か、乃至は近く之を低下せしめ得る見込があるか否か、而して、それの實行手段は果し

[illegible]

四、[illegible]

農産物價が如何に暴落しても、之に[illegible]て、その生産費が之に[illegible]る農家の支出が激減すれば問題ではない。然るに、農家の支出は、左の如く、その大部分は減少せざるのみならず、却つて、借金税金等の負擔の如きは實質的に増大してゐる。又、支出が或る程度まで減少せる分子も多少無きに非ざるも、その低下の度合は農産物價の暴落に比し到底比較にならない。

(第一) 支出の殆んど絶對的に不減のもの

(1)税金、公課並に借金の元利

(2)子女子弟の教育費並に新聞雜誌代等

(3)農産原價中の地代（失業者歸農のため土地爭奪で上つてゐる地方すらある）鐵道運賃、郵便電信電話料

(4)生活費中の煙草、鹽、電燈、味噌、醬油、酢、酒、豆腐等々

(5)醫療、賣藥、産婆、等々

(第二) 多少低減したるもの

(1)肥料、農具、養蠶具等の或もの

(2)衣料及び魚類（だがいまそれ等を買ふ力が缺乏）等々

即ち、前敍の如き農産物價の暴落其他の農家收入の激減に反し、農家支出の大部分は殆んど減少してはゐないことが誰にも分る。否、借金（帝國農會最近の調査に由れば、全國農家負債五十億圓、一戸當り借金九百圓）及び租税公課の負擔は、今日の農産物價暴落の目から見れば、從前に比し却つて三四割から二倍にも増大してゐるわけだ。しかも、いま租税公課が、農家經濟上如何に大なる負擔であるかを見るに別掲第三表の如くである。

（三）農家經濟と租税公課並に借金

	農家總收入	農業經費	差引農家所得（A）	家計費	（B）諸負擔	Aに對しBの%
自作農	二、六三〇円	一、二〇九円	一、四二一円	一、三二〇円	二八五・四〇円	二〇・一%
自小作農	二、三四〇	一、一四五	一、一九五	一、〇九二	六七・四一	六・三
小作農	二、一七五	一、一八八	九八七	八八九	二二・四三	二・三
平均	二、四〇二	一、一八三	一、二一九	一、一一七	七九・二六	七・二

（備考）農林省農務局昭和二年度農家經濟調査に據る。

農家の租税及公課負擔の實相は最もよく自作農に現はれてゐるが（小作地は土地課税が小作料となる）、別表に出ると、それが家計費の一割餘に達してゐる。その他の場合は表を一覽せられよ。而して、小作農の場合は、その支拂小作料は農業經營中の三五％三三の巨額を占めてゐるのだ。

五、窮乏の農村は何處へ行く

斯く、農村の收入は激減せるにも拘らず、その經費と支出とは殆んど減少してゐない。しかも農産物價の慘落は多分に恒久的性質のものなること已述の通りなるにも拘らず、いまのところ、この對策が殆んど實行されてゐない。加ふるに我が農家の多くは、過去幾年に亙る「不引合」のために多くの借金を背負つてゐる。現狀のまゝでは、我が農村は結局何處へ行く外に致方がないか。

第一に現はれる注目すべき現象は、租税公課の負擔力の消滅だ。その結果は、町村及び縣其他農村自治機關の財政的破綻だ。已に、主要養蠶地方其他に於ては、小學教員及び役場吏員の給料不拂が頻出し、給料値下が盛行してゐる。否、或地方に於ては、役場、小學校の閉鎖説すら擡頭してゐる。更に「農會」の廢止運動は漸く旺んだ。換言せば、農村の自治機關たる町村及び農會はいまや財政的に破綻して、いまのまゝでは到底從來の如き活動をなし能はざる破局を完全に示してゐる。にも拘らず、中央政府は何等の對策を講じ得ないデクノ棒化して了つてゐる。又、現在は未だ目立たぬが、今年末頃から問題化す惧の多大なるは縣財政の破綻だ。恐らく、今年の地方租税納入は減

なし得ないのが、普通に[illegible]は中[illegible]以上[illegible]租税負擔者には大中農に多きになし、地方租負擔者は特に中小農に多いからだ。斯樣なわけで、町村及び縣債の元利拂不能に陥るもの、續出、風水害、惡疫等の緊急對策、緊急の勸業施設等の不能等、地方自治體の破產荒廢が、いま我が農村の頭上を脅かしてゐるのである。

第二は借金累增に由る農村經濟の破滅だ。已述の如く農家の借金は已に從來に於て四十億圓から五十億圓に達する。然るに、今年に於ける已述の如き農家の損失は、この上に、更に莫大な負債を累加した。だが、前敍の如き農產物價と生產費との關係の下に於ては、農家に借金元利返還の餘地は全然無い。のみならず、生きて行くためには今後愈々、借金を增大さす外に他に途はない。それが如何に高利であり、身を切る如き苛酷な條件であらうと、之に賴る外ないのだ。

顧るに、幕末の農村は、借金のために肥沃の土地の租稅負擔を小にし、之を自己所有の疲地に轉嫁し、以て之を高價に賣つた。その結果は、働いても働いても、その穴埋めの高い貢納のために借金が增大して亡び行つた。いま、我が農村は正にその運命を辿りつゝあるのだ。

第三に、しかし、それでも借金の出來る間は倘はよい。今度[illegible]を貸り[illegible]そうで[illegible]能になるばかりでなく、種子及苗木、肥料、農具、家畜、其他農耕の存續に必要な資金にまで涸渇して借手がなくなる。折角貸與しても貸借權者に持つて行かれる憂の方が甚大だからだ。

かうなると、農家は、急迫せる現在を乘越すためには、將來の田畑の荒廢を顧る遑がない。即ち、肥料其他、土地の生產力を維持するに所要の手當てを省略して、目先きだけの辻褄を合はさんとする。それは、將來の生產力を喰殺して現在の露命を繋ぐことであつて、文字通り農村を荒廢に委することだ。斯樣にして反當りの生產力は加速度的に減退するに至るからだ。現に、其筋の調査に由れば、桑園の如き手入不十分のため生產力著しく減退し、荒廢に瀕するもの、大正十四年に於て、已に全段別の三割七分餘に達してゐたが、今日の狀態では、斯くの如き形勢は、田畑其他の各方面に擴大せざるを得ない。

かゝる狀態に於ては、農村の喰込的破滅への突進は、單に、田畑農具家畜等に限られるものでない。農民の衣食住は、農民の健康を著しく傾むく點にまで「緊縮」せられざるを得なくなる。例へば、住宅は雨風に朽ちても之を修復する餘力はなくて、荒

れるに委せられるであらう。食は營養を保つに必要な點以下に切詰められざるを得なくなる。病氣になつても醫藥營養の手當ては不能になる。衣も亦汗で汚れながらも代りて洗濯するものもなき不衛生に陥らう。子弟の教育費も不足して次の時代の智的發展も犠牲に供せられるであらう。要するに、農村の人的生產力も極度に疲弊し荒廢するに至るのである。

云ふ迄もなく、かゝる事態を放置しておいて、それで永く農民の耐え得るものでない。現に、封建治下の暴力的專制政治の下に於てすらも、かゝる××には蓆旗が立つたではないか。だが假りに、農民に自覺なくして、かゝる狀態の下に泣寢入つたとしたらどうなる。その結果日本農村の生產力は破滅的に減退荒廢する。顧るに、日本の歷史に於て德川の末期位ひ、大小の飢饉や悪疫の流行せし時代は無かつた。その根因は、當時農村極度の疲弊にて、耕地及び農民の生產力は極度に衰弱し、或る程度以上の氣候の悪化に抵抗する力を失つたところに歸する點が多かつたと考へられる（尤も悪疫流行については、此外、海外との交通關係をも見ねばならぬが）。現在のまゝで我が農村を放置するならば、農村は結局そこ迄行く外はないのだ。いまや、再び、我が農村は、幕末の亡國的荒廢にまで脅かされてゐるのである。

六、農村窮乏打破の方向

然らば、以上の如く破滅に瀕せる現在の農村窮乏を打開する途如何。之れを以下に於て詳述する筈であるが、與へられてゐる紙數は已につきてゐるので、以下、その大綱を略記して、その方向を示すに止めるであらう。而して刻下の農村窮乏打開の方策は二樣である。第一は應急策だ。第二は根本策だ。

先づ第一の應急策であるが、いま農村は、前叙の如き事情のために、多大の損失を蒙り、目前に迫つてゐる左の如き資金を、全然又は過半、失つてゐる。

(1) 租税及び公課の納入

(2) 借金、掛買金等の元利の支拂

(3) 次の農耕養蠶等を續けるに必要な種子肥料代等、並に收穫迄に至る或る期間の生活費（勞働賃銀）

(1)及び(3)に對しては、飢饉の場合と同樣に見做して（今度の農村窮乏は經濟的には飢饉と同然同一なること已述の如し）租税の免除、減税、延納の許可等、事情に應じてそれ〴〵の對策を採ると共に、次の農耕養蠶其他の維持繼續に必要な資金は、次の如き方法に由つて之を調達する手段を採ること

(イ) 繭、米の損失に對し、國庫は或る點まで之を補償する

[illegible]

(ハ)　[illegible]配下から、[illegible]には、[illegible]、[illegible]、[illegible]に[illegible]の方法に由つて、無擔保で次の農事に必要な資金を貸付した。政府は預金部資金を無擔保低利で、之を必要とする者全部に貸與すべきである。

(2)の借金及掛買代金の元利支拂については、此際、例へば一ヶ年のモラトリヤムを布き、此間に、後述の如く、農村借金の根本策整理方策を實施すること。（實際には、已に私的モラトリヤムを布いてゐるもの多きこと、已に新聞に屢報されてゐるが如くである）

然るに、いま現内閣の政策を顧るに、こゝに云ふ應急的政策については、何等の對案すらも持つてゐないで之を放置してゐるのである。而して、合法的な税金延納や借金支拂延期の請願運動を、×××を以て××せんとするが如き、惡代官にも似たる對策を採つてゐること周知の如くである。

根本的對策は更に次の三つに大別することが出來る。

(A)　從來の農業の不引合狀態を、再び引合ふやう生産費を低下する。（農産物價下落の原因が已述の如く多くは根本的であるが故に、主として生産費を低下する政策をとるより外、此際農村の窮乏を打破する效果的方策はない）

(B)　[illegible]する政策をとること

(ハ)　[illegible]農村勢力、[illegible]農村勢力に[illegible]を與へる各種農村[illegible]

而して、此際、最も必要な[illegible]的對策は先づ(A)に由つて、已存農業の破産狀態を、極力、急速に喰止めることである。然るに、現内閣は肝腎な此の點について何等の對策を採ることなくして、例の「農村失業救濟のため、預金部資金七千萬圓を融資する案」を、農村窮乏打破唯一の對策として實行せんとしつゝある。だが、此の政府案は、農民自らをして借金に由り、新に耕地改良、山林開發、蠶桑改良、副業等々の事業を行はしめんとするもので、その資金を低利で貸與しようと云ふのだ。だが農民が斯くの如き新しき農村事業を營み得るがためには、先づ、農業そのものが引合ふ狀態に置かれなくては駄目だ。然るに、前述の如く、已存の農業何れもが、已に著しく不引合で巨額の損失のため借金を愈ゝ累加してゐるのだ。これでどうして農民が借金までして新規事業に着手し得ようぞ。若し強いて之をやらすとせば、愈ゝ農民の損失を大にし借金で破滅することを促進するに外ならない。要するに、(A)の對策を拔きにしての政策では町田農相の折角の案も畫に書いた餅以上の價値なき僞瞞政策に過ぎないのである。

そこで、現在に於ける農村窮乏打破の根本政策の基本は、その農業生産費を如何にして低下するかであるが、これにも、その對策に二大別がある。

第一は現在生産費の内容をなす諸分子の原價を極力低下することだ。

第二は農業技術の進歩改良（所謂産業合理化運動だ）に由り生産費を低下することだ。

ところで、今日、政府筋や地主資本家連の主として努力せんとする點は専ら第二のそれであつて、第一のそれには全然手を觸れようともしてゐないと云つて大過ない。さり乍ら、今日、我が農村生産低下する餘地の最も大にして、且つ、その效果の最も急速なるは第一の生産費内容の整理だ。しかも、第一の生産費内容の整理を先づ徹底的に斷行することなくして、第二の技術的改善を如何にやつたところで、その折角の技術改善の收穫は、農民の所得を増大さすこと殆んどなくして、徒らに農民以外の所得を不勞的に肥大せしめるのみだ。

然らば、第一の現在に於ける農業生産費内容の整理とは、如何なる方策であるか。思ふに、その主要點は、農業生産費中の左の諸項目を、此際、徹底的に低下する政策を斷行することである。

(1) 小作料を徹底的に低下すること（そのため若し田畑負擔諸掛を償ひ得ざるに至れば、それ等負擔を低減す）

(2) 農民（實際に農業に從事せる者に限る）の借金を、その農民が十年間の年賦で支拂ひ得る程度にまで元利を輕減する一掃的政策を實行すること。こゝに農民の支拂ひ得る程度とは、農民のために、國民的生活標準の生活を營み、且つ、農業を續けるに所要の資産を控除して、その餘剩で以て支拂ひ得る程度と云ふ意味である。此の借金整理の原則は、現に、政府自らが國際汽船其他に預金部資金を貸付け、その貸付金の整理の場合に採用した原則であつて、又、最近も正金銀行が日本棉花に對して行ひ、一般銀行が其の貸付先に對して採用してゐる原則である。換言せば大資本家の間に於ては已に當然極る借金整理の方法を農民にも適用せよと云ふのである。唯だ、之を「農村窮乏打破の政策」として一掃的に斷行しようとするのであるから、そのために、眞に破産に陥るが如き小債權者（例へば一千圓以下）に對しては、國家は、かつて大銀行を救濟したると同じ理由により、一種の特融法を設けて、之に資金を融通することにすればよい。念のために斷るが、此の借金整理には、不耕作の地主の借金を除外するから、一口の債權がさう巨額に上るもののある筈はないのである。

[illegible]
[illegible]保險品がなくてはならぬ[illegible]に[illegible]必要な資金を。低利で[illegible]供給する。之れは從事[illegible]農業保險を實施すれば危險はない。斯様にして今日高利と高價の掛買に惱む農村經費を大に輕減さす。

(4)農業勞働賃銀、卽ち農民の生活費を低下すること。そのためには、稅金、煙草、鹽、日用必需衣食住工業品、醬油味噌、醫療、産婆、藥價、等々の物價を低下すること。そのためには工鑛業に對する保護關稅の撤去、トラスト、カルテル其他の獨占的物價統制に對し、農民代表の參加等の制度を必要とする。

(5)肥料、農具、主要農産（米、繭等）の國營又は公營に由り、買入代價の低下と消費者迄への販賣費用を少化すること。

(6)鐵道運賃を一般的に引下げ、且つ極力、小包料金の原則（全國均一）を採用する。かくて、單に地理的に大都市及び開港に遠隔であると云ふことのため、近接地に比し、著しく高い運賃を支拂ひ、それだけ、買入れるものは高く、賣るものは安き犧牲を荷ふ地方農村の生産費を低下すると共に、一般農村の運賃負擔（購入品及び賣出品兩方に對する）を輕減する。

(7)農業保險を國營して之を一般的に强制的にやる。但し保險料の三分一は地主、三分一は國家（消費者を代表）、三分一は耕

ある[illegible]
[illegible]それと共に、農業技術の改良が成功すれば、こゝに於いて、我が農村は、今日の對價を以て、豐富に所要の農産物を國民に供給しつゝ、農村の繁榮を維持することが出來るに至るであらう。尤も、農村の[illegible]を更に完全に打開するがためには、右の外、農村の過剰勞力に對し適當の仕事を與へること、農閑期勞力を有價値に利用し得る仕事を現在の農業と組合はさすこと、更には、人造絹絲異常の發展のため、根本的に現在已に行詰りつゝある我が養蠶業に對し、之に代る他の新農村事業を育成すること、等々の對策を必要とする。が、紙數の制限上、それ等については又の機會にゆづるであらう。

現代離婚論

中川善之助

×

「生ける屍」の主人公フエージアは離婚を得んとして苦しみ廻る。裁判官から離婚の原因なき旨を聞かされて失望しながら門を出て來ると、汚らしい男が寄つて來て離婚の簡易な方法を教へる。併しそれは醜業婦と一夜を共にすること、並びにその男が證人となることによつて自から姦通の模造品を造り上げて裁判的承認を掠めとらうと云ふ企らみであつたので、潔白なフエージアは之を拒む。併しこれを拒んだ彼には遂に離婚の方法が全く絶え、彼は止むなく死を裝ふて放浪の生活に入つてしまふ——讀者もしくは觀客は、茲で、何と頑くなな法律よ、と嘆息する。併しそれは現在歐米諸國の大部分を支配して居る法律と殆んど大差はないのだ。

一二年前シカゴだかで八十何歳かの老人が、これも七十歳を越えた老婆を相手にして、十何回目かの離婚訴訟を提起し、しかも再び敗訴して遂に離婚は得られなかつたと外國新聞が報道して居た。けれども離婚判決が得られなかつたからと云つて二人が結婚生活を續ける様になるわけでもないから、つまりはたゞ法律上の離婚名義が得られなかつたといふことに外ならぬことは明らかだ。夫婦が自然に別れて行く事實を法律は何ともすることは出來ないから。

×

尤もこの老夫婦などは少し意地になつて居る様だが、大抵なら相手が姦通したり遺棄したりすれば、こちらも愛情が盡きて別れ話に乘りたくなるといふもの。だから普通の場合には、殊に夫婦が互に別れたいと希ふ場合には、いくら法律が、離婚は法定の原因ある場合に限り、且つ裁判所の判決を以てのみ形成し得るなど〻頑張つて見ても（これが歐米の殆んど全部を支配する現行離婚法だ！）たつた一回の姦通、しかもほんの模擬的な姦通を以て完全に離婚がなし遂げられるのである。そして裁判所もこれを取締らうなど〻は今さら考へて居ないかの様に思はれる。

離婚[illegible]遺棄・虐待・侮辱[illegible]又は重大侮辱[illegible]數個の[illegible]離婚原因[illegible]列舉されてある[illegible]離婚を求められる被告に過失ある場合にだけである（これが法律家に所謂有責主義といふ）。つまり離婚は善き配偶者が悪き配偶者より離すことだ、と考へられて居る。だから「どうも折合が悪い」とか「夫婦愛が全くそれてしまつた」とかいふ事情は理由にならない。過失がなければ離婚なしである。

併し世間は法律より抜け目がなかつた。人々は斯る離婚原因が生じない時に之を作ることを心得て居た。離婚追求者は民法を閉ぢて裁判所へ出掛ける。併しすぐに門をくゞらないでその附近を探し廻る。すると（殊にロンドン・パリ・ベルリンなどの様な大都市なら極めて容易に）彼はそこに、モスクワの裁判所前でフェージアに誘ひをかけた男と同業の男を見付け出せるだらう。離婚原因模造業者である。これに幾らかの金を握らせるがよい。男は忽ちにして姦通を立證する完全な手段を講じてくれるだらう。別に姦通を冒すのでもない。相手の女が出てくるのでもない。男の案内する特約のホテルへ行つて、一人でダブルの部屋へ入り、宿帳に自分ともう一人出鱈目の女名前を記入し、二人分の宿賃を拂ひ、その受領書を貰つて之をかの男に渡せばそれでよい。その男は直ちに他の配偶者の許に行き離婚訴訟を起させ、自分が證人となり、宿帳と受領書を證據として巧みに姦通を立證してくれる。被告はこれらの事實を認諾さへして居ればよい。それだけで、結婚式の翌日でも、離婚判決はかち得られる。

[illegible]意義と[illegible]重要[illegible]因[illegible]等に[illegible]た。その原因が模造するのみである。

「西洋の裁判官は随分おめでたいね」などと早合點してはいけない。裁判官だもの、彼等にだつて姦通が眞か僞かぐらゐ見定めのつかない筈はない。たゞ彼等は判らない様な振をして居るのだ(1)。ドイツに先年設けられた離婚法改正委員會の席上でカールといふ委員は言つた——「離婚判決を言渡す場合の九割までは虚僞の事實を原因として居り、判事も自から欺かれて居ることを充分知悉しながら之をなして居るのだ」と。

×

フランスにはもつと手輕な方法がある。それは一本の手紙で足りる。即ち甚だしく相手の人格を無視した手紙を出せばよい。フランス民法二三一條の「重大侮辱」といふ離婚原因にそれが當て嵌められることに判例上なつて居る。

こゝで一つ妙な注意が要る。それは手紙に書かれた罵詈が眞面目に書かれたものであると離婚原因にならないといふことである。換言すれば、眞に罵らんがために罵つた場合だと、それは侮辱には違ひないが、未だ離婚を許す程に「重大なる」ものではないといふことに解釋される（これは打つた蹴つたといふ場合と同じで、従來の判例では、斯

回に及んで初めて重大侮辱となると解されて居る）。之に反し眞に隠るためではなく、實は離婚を得たいからだといふことが判れば（この遠を暗に匂はせねばならぬ所に辯護士の苦心がある！）物判りのいいフランス判官は直ちに離婚の判決を言渡してくれる。だから本當に侮辱した夫婦は離さないが、「嘘に侮辱した」夫婦なら離婚させてやるといふことにもなる。

×

何故こんな役にも立たない制限を法律が固執するのか。それは後に廻はさう。そして今は昔もこんな制限離婚主義だつたのかを考へて見よう。

クリスト教國では制限時代の前に禁止時代があつた。尤も聖書が「姦淫の故ならで其妻を出すは」と云つたからとて、姦通だけは常に離婚原因として許されたが、その他の理由によつては絶對に「神の合はせ給へるもの人これを離すべからず」とせられた。

中世教會が婚姻事件を管掌するや、トレント宗教會議（一五六三）の宣言した婚姻不解消主義は次第に徹底した。が併し勿論それは教會に於ける婚姻法上に徹底したといふ意味であり、人々が離婚を欲しなくなつたのでもなく、また恐らく夫婦が事實上別れて暮らすことすら如何とも出來得なかつたであらう。その證據には不解消を強調する教會婚姻法自身が「婚姻無效障碍」「未完成婚離婚」「別居制度」などを創めだして居るではないか。

聖書の趣旨に合はないため結婚の障碍となるべき事實あるに[illegible]ず誤つて結ばれた婚姻は本來無效のものである、と僧侶たちは強[illegible]た。從て斯る婚姻を解かせるのは實は離婚ではなくて單に（神の眼から見れば初めより成立し得ざりし）無效不成立の婚姻をそうと宣言することに外ならぬといふのである。

また結婚は「二人のもの一體となる」結合なるが故に、單なる儀式、誓約等にて成立するものではなく、「肉體的連繫（これを教會ではラテン語で copla carnalis と呼び飾つて居た）を俟つて初めて完成すると考へられた。而して未完成婚を解くは離婚ではないと說明せられて居たのである。これが子のない夫婦の離婚に濫用（？）せられたことは勿論である。無子は未完成を推定するとせられた。しかもその反證は判官の出よう如何では殆んど不能に近かつたであらう。

別居といふは離婚をさせずしてたゞ「卓と床とを別かつ」に止めることである。事實は明らかに再婚不能の離婚である。しかも教會は單なる別居は婚姻不可解消のドグマに反せずと附會の說をなした。

凡べては離婚の不可避的出現の前にクリスト教會の悩みぬいた糊塗彌縫に外ならない。

×

クリスト教以前の時代は男子專擅離婚時代である。日本でもクリスト教則がないだけの違ひで他は同じである。男は自由に女を去つた。女は決して男から去ることが出來なかつた。大寶令には離婚の許され

[illegible]
よく見えないい[illegible]口舌とは[illegible]
しかも當だ解消するいか　事實はなく專橫[illegible]た　其の[illegible]にも「家動[illegible]りてとりたる婿の來すなりぬるいとすさまじ」とある。また別の所にも「ある人のいみじう時に逢ひたる人の婿になりて、一月もはかばかしうも來で止みにしかば、すべていみじう云ひ騷ぎ云々」と見えて居る。男は逃ふことさへ止めさへすれば離婚が得られたのだ。

德川時代でも、女は去り狀を貰はぬ限り絶對に妻たる身分を失はないが、男は去り狀を書きさへすればよかつた。理由は何でもよい。家風に合はずでも、都合によりでも、勝手につきでもいい。書きたくなければ決して無理に書かせられることはない。わづかに松ケ岡などの緣切寺が無告の女に味方し「棹で取れぬ去り狀を松で取り」などした位が關の山であつた。女と雖も止むを得ざる際は離婚の出訴をしても差支へがないといふ布令が出たのは實に明治六年のことであつた。(西暦一八七三年)。

×

要するに離婚法の進んで來た過程は、男の專擅を次第に制限し、女の桎梏を次第に解放するに在つた。そして現在の大勢は男女を平等に見て、或る制限された原因によりてのみ裁判を以て離婚を許すといふ狀態である。

この過程の中間に自然法思想と新教運動の影響に成る協議離婚制度[illegible]一七九二年の[illegible]き、人々は第一に協議による離婚を認めた。後一八[illegible]年現行民法の布かれるや協議離婚は依然保存せられた(二[illegible]條)。しかもこの條文が一八八四年に再び廢止せられ、またフランス民法を繼受したイタリア、ベルギー等がこの條文だけを捨てゝ取らず、オーストリア(但しユダア人を省く)もプロシアも協議のみによる離婚を許さゞりしは何故か。曰く、眞に自由なる協議が難しいからである。恰度勞働者と雇主との契約が所謂自由契約でないやうに。

日本の民法が明治三十一年以來三十年を超ゆる年月の間、協議離婚法を掲げて恬然として來たことは、一つにはフランスに先例ありと信じたことと(實は一昔も前に廢止されて居たのだが)二つには何と云つても男子の優越さ強くして女子の地位甚だしく劣つて居たがために外ならない。誰しも少し注意深く周圍の離緣話を觀察して見るがよい。男は實に平然として妻を離別して居る。妻は荷物となつて涙の裡に引きとられる。それでも戶籍には立派に「協議離婚」と記される。泣いたり怒つたり、陰口や惡說やの應酬の中に、日本の夫婦は「自由の協議」を遂げたことになつて居る。言ふまでもなく德するのは男で、損するのは女ばかりだ。

しかもこの羊頭狗肉的の協議離婚が現行民法の基本的離婚形式である。フランス民法は初め協議離婚を認めたときでさへ、これを裁判[illegible]

婚の後へ規定した。日本民法は現行法でも舊民法でも殊更らにこの手本と違へて協議離婚を前に持つて來た。舊民法草案理由書を見ると、フランスでは協議離婚は裁判離婚の補充的役目（即ち離婚原因たる姦通その他の忌はしい事實を表面に暴露しないための便法として）を有つのみだから裁判離婚が基本となるが、日本では慣習上から云つても協議の離婚が本體である、といふ樣なことを述べて居る。しかしフランスでも一八〇三年の民法で初めて裁判離婚が主になつたので一七九二年の勅法では矢張り協議離婚が前におかれてある。だからこれだけの比較からしても、日本民法、殊に舊民法の考へ方が男子の專横なそして女子の奴隷的な狀勢の産物に外ならなかつたと結論して大した妄斷にはならないと云へる。自由契約論で利を得たのが雇主ばかりであつたと同じやうに、協議離婚論で徳をしたのは男子ばかりであつたといつてよい。つまりは美装せる專擅に過ぎなかつた。

×

西洋では女性地位の向上が十九世紀末はやくも協議離婚を撤廢した。それは女子が男子の專横に對し法の楯を以て身を守ることであつた。對等自由に男と協議し得ない身の弱さを知りながら、しかもその弱さを補ふ法の保障を獲得するだけの強さを有つた彼女等であつた。この點に關しては、恐らく日本の女性は協議離婚の正體をも見拔かず、從てそれの廢止を叫ぶだけの雄々しさをも有たなかつたものと考へて大體誤ない。

然るに二十世紀初頭の四半世紀は實に急激の轉變を人の世にもたらした。アメリカは固より、ヨーロッパの女も着々として男に劣らぬ經濟力を獲得して來た。女は最早や男の威武に屈するものではなくなつて來た。少なくも刻々にそうなりつつある。彼女等にも今や男に讓らぬ經濟力が出來て來たからである。

しかも斯る勢は日本だけを除外して行くものではなかつた。日本女性の進出。そしてまた彼女等も男との平等に近づきつつあり、またその水平を念願として來た。

この勢はどう離婚法に反映したか。それは新らしい意味に於ての協議離婚論の唱導である。

今までの女は男から捨てられることをのみ恐れて居た。捨てられさへしなければ彼女は幸福であつた。ノラの惱みが惱みとされ出してからも狀況は急には革まらなかつた。女が物として捨てられることを恐れた時代から、女が弱いながらに人として棄てられることを恐れる時代に移つたに過ぎなかつた。次第に男の專擅離別權の制限せられ來つた歴史がこの間の消息を語つて居る。

最後に人は男女平等に一定の原因ある場合に限り離婚請求をなし得るといふ點にまで到達した。「弱き人」としての女のかち得た最大の珠玉である。が併し、「強き人」たらんとしつつある現代の女性には、最早やそれは壞れた珠玉である。

それと同時に物もしくは弱き人としての女を相手として來た男にとつては制限離婚制が最後に殘された珠玉であつたけれども、今や強き

人と[illegible]、これ[illegible]を得なくなつた。

今や男にも女にも眞の自由な天地が與へられだして來た。然[illegible]も彼女にもそれを望む必要と實力と[illegible]とが現はれて來たからである。人々は再び自然法の思想を思ひ浮べた。何人も自由に結婚し得ると共に、また全く自由に離婚の合意をなし得なければならない、と考へる。そして、其處にのみ眞實道德的な婚姻がある、といふ。

此の點に於て日本は變則的過程を經た。協議離婚は初めから認められて居たのである。併しさうした外形にも拘はらず、人はわが國に於ける社會進化の實質的には全く諸外國と同一であり、たゞ男子が協議離婚の隱れ簑を利用し得た期間が少し長かつたといふに過ぎないことを容易に看取し得るであらう。專擅離婚・裁判離婚・協議離婚といふ順序の定石に於て、日本だけは（協議離婚なる名稱の存否に拘はらず、實質に於ては）その二番手を省略したといふことに外ならない。

×

家系繼續の必要が婚姻道德を支配した時代は過ぎた。「腹は借物」とか「女は三界に家なし」などいふ諺も間もなくその意味を忘れられて了ふことだらう。婚姻が婚姻態として生産的意義を有した時代も去つた。夫婦共稼は增えても、家族生産は絕えて行く。そして女の「就職」としての嫁入も漸く困難になつて來た。アメリカ邊りでも近頃まで食はんがために結婚するといふ言葉があつたけれど、今では食はんがた[illegible]

[illegible]て行けない男も女も多くなつて來る。さうした男女の結合は、これを合はせるために外部的の枠りが役立たなくなると同時に、これが離れようとするとき外部から抑へることも至難の業とならざるを得ないこと[illegible]る當然である。

もしもこの際、不滿の夫婦を無理に結び付けておく外部的の力があるとしたら、それは二人の間の子だけである。子は斯くして新らしい意味で「夫婦の鎹（かすがひ）」となる。時には全く「三界の首枷（くびかせ）」たるに過ぎないかも知れないが、とにかく子は離婚の障碍となる。

しかし、夫婦の離反狀態が子の鎹で喰ひ止められる間は問題でない。勿論道德家は飽くまで子のために離婚の思ひ止まるべきを說くであらう。そこに無理は毛頭ない。けれども法律家は斯る教訓のみを以て滿足しては居られない。子の養育を犧牲にしても別れたいといふ夫婦を考へなければならぬ。しかもそれは必らず出て來るに違ひない。

子は健全な父と母を有つたとき最も幸福であるに定つて居る。もし父母が別れるなら、せめて何れか一方にだけはつけておきたいものである。斯うした考慮が近時の離婚法にも現はれて、離婚後の子の養育は第一に協議を以て定め、第二に裁判を以て定めることになつて居る。茲で子の養育上の幸福と父もしくは母の結婚上の幸福とが衝突することが考へられる。子を奪はれて悲しむ親もあらうし、子を附けられて困る親もあらう。何れにしても離婚論の實踐的問題として子の養育

極めて重大な役割を演ずる。法律家が自由離婚論に怯なる所以は全く茲にある。決して潔癖な道徳説に妄從して居るからではない。またさうであつてはならない。

×

婚姻は分業態である。異性特質の相互享有を旨とする。しかもそれは自由に意欲する人と人との結合に於てのみ達成せられる關係である。自由結婚論の強味は言ふまでもなく此處にあつた。

自由結婚論は日本でも十年前に問題とされたことがあつた。しかしその次には自由離婚論にまで言及する人は極めて稀であつたと記憶する。しかも自由結婚は自由離婚と表裏してのみ全き意味を有ち得る。今やその殘されたる反面がトピックとなりつゝあるのだ。

自由離婚論が在來の制限離婚主義立法の上へ最初に加へる攻撃は、離婚原因擴張の形をとる。そして次第にその數を増し、最後に一括して過失主義離婚法を非難して、破綻主義離婚法を提唱する。

破綻主義離婚原因とは、當事者個人に何等の過失、即ち姦通・遺棄・侮辱・暴行等のことなく、たゞ夫婦の間に外部的に醸成せられた「打ち勝ち難き不和合」のことである。裁判官は之を理由として離婚判決をなし得るが故に、離婚を罰責と見た從來の考へ方に對しては甚だしき原理的變革があるといひ得る。從來とても斯る客觀的破綻を離婚原因とすることが全然考へられなかつた譯ではなく、例へば「不治の精神病」を離婚原因とする國では、そこに既に當事者の主觀的責任なき離婚があり得た譯ではあるけれども、その場合には極端に之を例外とする態度が強く、從て單なる「不和合」を離婚原因とする近時の主には尙は著しく隔つて居たのである。

×

客觀的破綻狀態を離婚原因とする主張は、最早や協議離婚説と紙一枚の開きを有つに過ぎない。或は裁判離婚制の形式に於ける協議離婚だとも云へよう。夫婦の間に別れ話が定まる。之を屆出によつて離婚せしむれば協議離婚となり、これを裁判にかけて超克しがたき不和合として判決して貰ふことにすれば客觀的破綻主義となる。破綻主義は目下ドイツに於て立法途上にある。フランス・イギリスは未だその機に到らないけれども、判例は既に條文の解釋を活用して完全に破綻主義に入つて居る。例へば前述せる「重大侮辱」なる離婚原因の如き、いつか過失主義的色調を見失はれてしまつたかの觀がある。ノールウエー、スウエーデン、デンマーク、チエッコスロヴアキア等いづれも既に破綻主義を採用して居る。

協議離婚は前述の如く、曾てフランス民法にその片鱗を見せ乍ら、忽ち抹殺されて以來殆んどその跡を絶ち、わづかに極東日本と、オーストリア民法が國内のユダヤ人に限り之を許したぐらひのものであつたが、最近世界の大勢は新らしくこの制度を呼び起して來たといつてよい。アメリカにセンセーションを起したリンジーのコムパニオネート論もまた中に協議離婚の主張を収めて居る。

[illegible]關係[illegible]く道德的な[illegible]めた新法[illegible]九二二年）が說明するにあたり「當事者間に實質的連絡の絶え了つた婚姻關係を維持するといふことは道德的に見て許容出來ないといふのが新法の基調たる根本觀念である」となし、又新法こそは婚姻を道德的關係として保持せんとするものであると云つて居る。ヘヴエロック・エリスも言ふ「協議離婚の最も長く行はれる國は、恐らく、最低ではなく、却て最高の道德國であらう」と。眞に欲せられた結婚が純眞であるならば、眞に欲せられざるに至つた婚姻の持續は不純である——これが現代協議自由離婚論の基底である。

×

自由離婚論が徐々に浪漫的だと非難される一方、制限離婚論は餘りに法律萬能的だと非難されることを免れ得ない。法律で離婚を禁ずることが、離婚の事實を少なくすると考へるからだ。如何にも官廳發表の離婚統計には數字が小さくなるであらう。しかしそれは醫者が藥價を高くすることに依て患者を減らしこれによつて病人が少なくなつたと考へるにも等しい。一つの例證をあげよう。

歐米には今日なほ別居制度がある。クリスト教の離婚嫌忌思想が法律を動かした愚策である。或は無理に離婚を抑壓するためにどうしても許さねばならなくなつた彌縫策とも云へよう。從て別居する者は實は離婚せる者に近い。たゞ法律上離婚名義が得られないで居るだけなので[illegible]いてある。[illegible]經過イングランドとウエールスとで一九一〇年に一萬一千六百組、一九一五年に九千五百組ある。この他に治安判事の作制する一種の公正證書で別居をなすものが年二千乃至三千組を下るまいといはれて居る。更らにまた遺棄、逃亡もしくは合意により少しも法律的手續をとらずして事實別居せるものも年二千組以上であると專門家は云つて居る。して見るとこれ等を大體の平均數になほし表示して見ると

10.500……裁判上の別居夫婦數(年平均)
2.500……公正證書に依る別居夫婦數(年平均)
2.000……法律外の別居夫婦數(年平均)
計 15.000(組)＝30.000(人)

即ち毎年一萬五千組の夫婦が別居する。人數にすれば三萬人。しかも毎年たまつて行くが故に假に現在には過去十五年間の別居夫婦が生存して居ると見ると、その合計は四十五萬人に達する。つまりイギリスには常にこの大都會の總人口ぐらゐの男女が、法律上だけ夫婦で事實上は全く單身で暮して居るといふことが出來る。しかしそれだからといつて彼等が法律上・道德上に夫婦の義務を盡して居るとは考へられないし、考へる必要もなからう。生活と法律との完全な矛盾背反である。恐らく彼等のうちのかなりの部分は新らしい夫婦生活を營んで居ることだらう。しかも彼等は新らしい結婚を許されない。何となれば何ほ未だ依として法律上だけは配偶者があるから。法律上の夫は行方も知れない。これでも事實上の夫との間に生れた子は私生子である

一體何を苦んで法律はかゝる結婚の骸を無理に押しつけようとするのか。それは道徳的な關係を保護せずして、不道徳な關係を強ひるものに外ならぬ、と自由離婚論者は叫ぶ。

×

法律家は社會生活機構の外部的秩序技師である。法律の力で離婚が増えたり減つたりするのではない。生活だ。教育だ。素質だ。先日も私の知つた夫婦が生活難のために二人の子供を一人宛に分けて別々に田舍の實家へしばし別れ住むことにしたといふ話を聞いた。これが法律の力でどう出來るものか。

從て法律家は離婚率の增加といふことを恐れない。否、恐れてはならない。法律家はその統計を前にして、たゞ「このために夫婦はより幸福になつたらうか」といふことゝ、「この結果として不幸な子供が出來やしなかつたか」といふことをさへ技術家らしく考へればいいのだ。それ以上のことを法律の力でやらうと考へる瞬間に彼は思想的に一世紀を逆行してしまふ。

現在完全な自由離婚法、卽ち一方の希望によりて直ちに離婚の成立する制度をとつて居るのはロシアだけである。その實績がどうかを私は尚ほ知り得ない。がもしそれが圓滿に行はれて居るとしたら、それはロシアの女と男と同じだけの力があり、且つ子供の社會的養育が完全に行屆いて居るからに違ひない。併し簡單な法律書などで見る所によるとさううまくは行つて居ないらしい。殊に新經濟政策以後さうであらう。

結婚の自由は今日殆んど問題でない。問題は女子と子供の幸福が犠牲にすることなしに離婚の自由が認められ得るやに懸る。自由な結婚が幸福であり、また道徳的であることは大抵の場合に肯かれる。それと同じ様に自由な離婚が凡ての幸福であり、また道徳的であるだらうか。法律家はもつと充分に社會の各部分を點檢してからでなければ James Douglas の樣に

"Make it as cheap and as easy to get out of marriage as it is to get into it.

と言ひ切つてしまふ勇氣を有ち合はさないであらう。

獨占段階に於ける國家企業

小島精一

(1)

國家が産業企業を經營したり、カルテルの統制をしたりすることは決して、目新しい現象ではないが、獨占段階の進むにつれて、それは愈々擴大されてきた。

自由主義の時代には國家は、なるべく産業管理などから遠ざかつてゐるべきもの、やうに考へられ、僅に二、三の例外的な場合だけに、國家企業の存在が認められるに止まつてゐた。

例へば、營利的には採算が立たないから、國家がやらなければ、誰れも着手しないやうな困難な事業とか、內地産業を養成するための模範事業とか、軍事的事業とか、財政收入のための事業とか、獨占的傾向の强い事業とか――大體こんな場合だけで、それも、事實上、極く狹い範圍に限られてゐた。

處が、獨占期が進むにつれて、國家の消極的な態度は漸次積極的な態度へ變つてき、殊に世界大戰以來、國家――及び公共團體企業の範圍は劃期的な擴大をみるやうになつた。

例へば獨逸の工業界における公企業の割合をみるに

	戰前	一九二五年
(1) 鐵道	八三・〇%	九二・二%
(2) 街鐵	五〇・〇	七二・〇(外ニ半官的ノモノ二一%)
(3) 發電	二三・六	七六・八(外ニ半官九・四%)
(4) 石炭	六・九	一〇・一
(5) 褐炭	〇・四	二三・〇
(6) 加里	―	五・六
(7) 製鹽	二一・〇	四〇・七
(8) 鐵礦石	一〇・六	一八・八

(9)	銑鐵	〇・七
(10)	製鉛	三五・一
(11)	アルミニユーム	七四・一
(12)	その他重工業、化學、機械、造船業等……	

右は專ら鐵道及び工業部門的進用だけを列記したのであるが此外にも金融、通信、水道、ガス、河川通路、林野その他廣大の領域に亘つて公營乃至半官企業が擴延されてゐる。

英國では流石に國家直營のものは少いが地方團體の企業になると中々盛んで、その投資額は七億磅に上つてゐる。卽ち

	企業數	資本額（百萬磅）
ガス	……三一七	……六三
電氣	三三八	一二五
街鐵其他	一六八	八二
水道	九七七	一四八
住宅	一、五六八	二一九
雜	七九	二八

此外に地方團體の任命する者が經營する事業が少くない。ドツク、港灣水道その他……。又議會の特別法で設立された特殊企業として次のやうな多數が數へられる。

	企業	總資本（百萬磅）
鐵道	……八七	……一、一五二
街鐵	六七	二〇
ガス	四六五	一〇九
水道	八六	二六
電氣	二二五	六九

英蘭銀行も亦此の中に屬せしむべきであらう。

これらは直營的な公企業ではないが、多かれ少なかれ、公的統制の下に服してゐる。

かくて主として交通及び公益事業的の生産團體だけで、その總資本額は二十七億五千萬磅——若し道路經營をも含ませると實に四十億磅といふ尨大さにさへ上る程だ。

しかも、自由黨の報告（「英國産業の將來」）でさへ、戰後における公企業化の發展を確認し、且つその擴大を望ましきものとして歡迎してゐるのだ。

公企業の擴大は、先進國の大勢的な現象だとみて差支へないだらう。

(2)

ではなぜ、こんな變化が起つたか？

それが、內地産業の育成とか、模範經營とかいつた風な前代的原因によるのでないことは勿論だ。

さうした施設は今では寧ろ確實に消滅しつゝあるのだ。

それには、やはり、獨占資本特有の促進劑がなければならぬ

[illegible]
その過程に[illegible]ば、讀者よりは著者自身がたま
られたい。

そこで、たゞ、要點だけを、簡單に列記して、先きへいそぐことにしよう。

第一に考へられるのは國家財政の膨脹だ。經濟政策的、社會政策的、軍事的、文化的等々の諸施設の擴大は獨占資本の發展——従て、その必然的結果たる帝國主義の發展につれて、先進國の例外なき現象となつた。

しかもそれは大戰後、次の如き劃期的擴大をみつゝある。

主要國經費ノ膨脹

	一九一四年	一九年	二五年	二九年
米國(百萬弗)	七三五	一八、九五二	三、六二一	三、七九八
英國(百萬磅)	一九七	二、五七九	七九六	七四二
佛國(百萬フラン)	一〇、〇六五	五四、一二三	三三、九九〇	四五、三六六
伊太利(百萬リラ)	二、六八八	三三、四五二	一九、八八七	一八、一七六(二八年)
獨逸(百萬マーク)	九、六〇〇	四五、八〇〇	六、七〇八	一〇、〇七六
日本(百萬圓)	六四八	一、一七二	一、五二四	一、六八一

大戰直後には戰時費用の變態的膨脹があつたとしても、安定以後でさへ、戰前に比べれば、實に劃期的な擴大といはねばならぬ。

[illegible]
要する我は[illegible]
だ、要するに、獨占段階に到達して、國家も、最早、產業活動の外的傍觀者たる呑氣な位置に立ち止まることはできなくなり、各方面に亘つて、直接間接に獨占資本の保護と助長との諸施設を行はねばならなくなつたのだ。かの、たへず擴大する社會政策的施設でさへも、實は獨占資本の發展につれて、必然に激化してきた階級的闘爭を緩和し、生產關係をできるだけ圓滑に進展せしめるための不可避的な經費なのだ。

かくて、國家の財政が急テンポで擴大するにつれて、その收入を確保する一つの手段として國家自身產業企業を經營することも亦愈々擴大されねばならぬだらう。

第二に、軍事的要求がある。獨占資本と帝國主義とは必然に國際市場の狭化をひき起し、經濟的闘爭關係を尖鋭化し、結局軍事的解決の必要を切迫ならしめる。

軍事費の法外な膨脹は、なによりも有力に此傾向を立證してゐるものだ。

處が、現代的戰爭は軍器糧食その他廣く、大工業の活動力に依

存してゐるから、國家は、とりわけ重工業、動力、化學工業等の最も緊要な諸部面をば、常に嚴密な統制の下においておかねばならない。

これと關連して考へられねばならぬのは、植民地開拓事業などを國家が經營することだ。

これらは、いづれも帝國主義的進出の必要によつて必然に國家の重要役割りとなつてきたものだ。

勿論、國家は表面の經營者たる位置に立たないこともあるがそんなときでも、必ず、裏面には濃厚な保護と嚴密な統制とを怠ることはないのだから、事實上は國家的事業といつてもさしつかへない程なのだ。

（3）

第三に、産業合理化の要求が考へられねばならぬ。これは特に最近の合理化運動の中に鮮明にあらはれてゐる。

周知の如く、獨占期の合理化は、決して、個別經營内の小さな技術的問題だけではない。一部門全體から始まつて、全産業部門の有效な統制を最も重要な一題目とする。

トラスト化やカルテル化などが熱心に要求されてゐるのはこのためだ。

處が、かゝる統制運動は個別資本の自由に放任されてゐる仲々思ふやうに進捗するものではない。

個別資本の各自の利害は決して、容易に融和するものではないし、中には、相變らず時代遲れの自由競爭說を固執する者なども多いであらうから。

そこで、國家の權力の發動が要求されるやうになる。

そして、國權の强制の下に、いや應なしに全部門的統制と改造とが斷行されるやうになる。

この要求のために、國家は屢々、當該部門の私的企業を全然禁壓し、獨占的な國家トラストを組織することがある。

だが、それは、金融資本の階級的支配が餘程動搖してゐるときか、財界の行き詰りが餘程深刻化したときでもない限り、彼等からは歡迎されない。

それは、なるほど産業の統制を進展せしめはするが、同時に資本家の營利的活動を制肘するから、結局厄介な出過ぎ的行動――民業の壓迫――だといふことになる。

要するに國家は金融資本の統制的活動を援助はするが、それを制肘したり、禁抑したりしてはいけないのだ。

それは又國家企業の管理上の能率が甚だ低劣なものだからといふ名目などでも峻拒される。

そこで、共同的な金融資本は、[illegible]この指導權を自己の手中に把持する方法を案出する。中間・半民的な多くの組織が、かうして發展する。そこでは、國權を背景としながら、實は若干の大金融資本團の統制が進行せしめられるのだ。

（4）

處が、第四に、いはゆる社會化的な要求がある。

少くも歐洲の先進國では、大戰後無產黨の階級的實力は劃期的な發展をとげ、金融資本の獨裁はこの新興勢力から、かなり力強く抑壓をうけねばならぬやうになつた。

大戰直後に國家企業——乃至國家的產業統制が大發展をとげたのは實に、此の新興階級の側から提出された產業社會化の要求に基くものが多いのだ。

例へば獨逸の炭坑、加里、電氣、鐵鋼業等の公的統制、英國の電氣、炭坑等の統制運動等……。

これらは、決して、金融資本の側から、その利益に即して、要求されたものではなく、その意思に反して、その利益と敵對して、强制されたものであつて、こゝらに、いはゆる後期資本主義的特徵がみ出されるものだ。

[illegible]なされ、[illegible]

そして、[illegible]は、最早、產業統制の[illegible]てしまつた。

從て、國家の政策も、强く社會改良的色彩をおびねばならなくなつた。

殊に大戰直後の重大な動搖期には金融資本は支配的位置からずつと後退し、無產者は政權を把握した。

產業の公有——社會化が進んだのは、それからであつて、その後も金融資本の勢力は恢復はしたものゝ、最早、戰前の如き獨裁的勢威を振ふことは出來ないのだ。

だから、國家企業の進出に對しては金融資本は、屢々、强い憤慨的言辭を吐きかけてゐる。

國家は精々見張り番であるべきに、本分を忘れて私的企業の自由を奪はうとしてゐる——などといふのが、彼等のきまりきつた口吻だ。

だが、結局、國家的トラスト・カルテル化過程は大勢としては、進展して行く。

それは、社會的要求の强力な拍車に鞭打たれてゐるのであ

るが、何といつても、最近の世界經濟的狀勢が、各國企業の最も徹底的な超大トラスト・カルテル的結成と國家資本の强力な援助とを緊要とするからである。

その最も興味ある例證は最近の英國だ。

そこでは、周知の如く、勞働黨政府の援助の下に急テンポで國家資本的カルテル化が發展してゐるが、その最も强力な拍車は勿論深刻な世界的恐慌と英國財界の悲慘な沒落的成り行きに外ならぬ。

かうした逼迫的狀勢に强要されて、金融資本もいや應なしに國家的カルテル化に迎合せねばならなくなつたのだし、勞働黨側でも、その社會化的要求を緩和して、金融資本と安協し、ひたすら合理化の進捗を企圖してゐるのだ。

（5）

金融資本と勞働黨との安協――その所產としての國家カルテル・トラスト化の發展に對して、見逃がすことの出來ないのは國家トラスト・カルテルの管理樣式にあらはれた大きな變化である。

此の變化は勿論主として管理技術上の要求に促されたものにはちがひないが、それは金融資本に對する勞働黨の安協の反映だともみられるものだ。

ともかくも、新管理樣式の下では金融資本は、依然としての獨裁的支配權を保持することが至難ではないのだ。

一體、國家企業といへば、經濟界の事情にうとい行政官吏が規則づくめの仕事をやるやうにばかり考へると大まちがひだ。

さういふ舊式な、官僚的經營は、今ではもう明白に時代遲れとして極印づけられてしまつた。

社會化論者にしても、官僚的管理には强い反對意見を持つてゐて、色々有能な新式經營法を研究してをるし、事實また、著しい變化が、その方面で行はれてゐるのだ。

だから、國家企業が擴大したといつても、決して、戰前のやうな官僚的經營がそのまゝ擴大されたのではなくして、實に、その經營の樣式が一變しつゝあるのだ。いはゞ、量的擴大と同時に質的――內容的改善が行はれてゐるのだ。

では、一體どんな內容の變化が生じつゝあるのか？

いかにして公企業の能率は向上されつゝあるのか？

これは勿論、一概に答へられるやうな單純な問題ではないがその根本的な點は、要するに、公企業の實業化――又は會社化に外ならぬ。

從來の官僚的管理で、一體、なにがいけないかといへば、

（イ）實業家的な訓練も素養もないといふこと

（ロ）統制組織が萬事規則づくめで、臨機應變の敏活な果斷が

つき[illegible]ことさ、[illegible]

ここで、[illegible]には、[illegible]の行政官吏ではなくて、なるべく、實際家[illegible]專門家を任命し、その組織も、できるだけ政府機關から獨立した特別團體とし、會計なども一般會計から分離した獨立會計として會社風に整理させ、できるだけ實業會社の長所をとりいれるやうにすることである。

現に獨逸などでは公企業でありながら、外形は全く株式會社の形態をとり、政府はたゞ資本的所有者として、重役の任命と最高監督權とを保留するに止めるといつた風のものが盛んに歡迎されてゐる。英國でも、この問題は喧しく論議されてゐるが大體の方向は獨逸と同じだ。

例へば自由黨の最近の報告をみても、普通の行政官吏が公企業を管理するのは大間違ひだといひ、それには是非專門家本位の特別機關を設けねばならぬことを強く主張してゐる。

そして、此種の特別機關では、

(イ)理事者の任命はあく迄管理者としての專門家的手腕を主眼とし、消費者の利益とか勞働者側の代表等といつたやうな觀點から人選すべきではない。

(ロ)首腦者を名譽職等とすることは能率上絶對に不可である。首腦者ばかりでなく、一般職員にも、實業會社風に充分な報酬[illegible]

(ハ)[illegible]成績を[illegible]せしめねばならぬ。

(ニ)例へば、電氣とか瓦斯とか鐵道とかのやうに地方的に若干の經營單位が分立してゐる場合には、その全國的統括機關を設け、職務に地方的經營者間の能率の比較的批判を行はしめ、相互に競爭心を刺戟する必要がある。

といふやうな點が力説されてゐる。

(6)

管理様式の點で注目すべきは社會化論者の實際的な主張にあらはれてきた大きな變化だ。

彼等も官僚的管理には、反對してゐること前述した通りだがそれでも、最近までは、事實上能率の低い管理様式から脱却出來なかつた。

といふのは、なるほど官僚の統制は廢止しても、他方に、多數の消費者や勞働者の代表を參加させて、尨大な小田原會議風の機關が經營管理に容喙してゐるたゝめに、專門家の敏活な果斷がさまたげられることが多かつたのだ。

處が、大戰後十餘年の經驗と研究とは、このいはゆる民主的自治機關の缺陷を自覺せしめ、最近では、經營管理の問題はおく迄、少數の有能な專門家だけに一任し、消費者や勞働者はたゞ極く根本的な最高政策の決定に參加するだけに止まるやうにせねばならぬと考へられてきた。

即ち、今迄のやうに產業の民主化といふことを、たゞ外面的だけに考へることのまちがひを自覺し、民主化の意味をもつと實質的に把握するやうに變つてきたのだ。

英國の有名なギルヅメンたるコールはいつてゐる――民主制(デモクラシイ)といふことは決して代表制といふことゝ同一義ではない。產業の民主化といふことは決してむやみに各方面の代表者を參加させることではない。いくら消費者や勞働者の代表が產業管理に參加しても、それが必然に產業の能率を低下させ、生產力を衰退させるならば、それは決して、民主化の眞意に適合するものではない。

產業の管理といふことは一つの生活技術の實務であり、從つて人間的精力を、できるだけ節約して物財を有能に產出するのが必要なのだ。

此要件に反する限り無暗な代表制は否認されねばならない。

そして、民主化といふことも結局、全團體員が直接に統治することでもなく、又自己の統治者を自ら選出するといふことでさへもなく、實に、たゞ、その最も適切だと思ふ統治組織を有效に要求し得る手段を持つといふことに外ならぬ。

だから、一般的政策の決定とか、監督とかいふ權能は飽く迄大衆の代表機關に確保されてゐなくてはならぬが、經營上の實際管理などは極く少數の、有能な專門家の獨裁的支配に一任されてゐなければならない。

これは純粹に管理技術の能率上の問題だ！

かういふ考へ方が、コールの今日の實際的な主張であつて、恐らく勞働黨の進路を指示してゐるやうに思はれる。

（7）

國家企業も擴大されたにはちがひないが、實をいへば、國家は昔のやうに個々の企業經營に沒頭するよりは、一部門全體のカルテル的統制の方に劃期的な進出をなしつゝあるのだ。いはゞ、強制カルテル化の時代――國家カルテル化の時代なのだ。

獨逸や英國の社會化等にしても個々の企業は相變らず私的資本の管理に委せておきながら、是を全國的カルテルの仕組みによつて國家的統制の下におかうとするのが最近の傾向なのだ。

かうすれば、國家はなによりも莫大な資金を放出して、私的企業を買ひ上げるやな難關にぶつかることがなく、又個々の企業を有能に管理するといふ面倒な仕事からも免脱されながらも

かく、[illegible]カルテル[illegible]させ、[illegible]ることによつて、[illegible]化することも出來[illegible]場合によつては社會化的效果をおげるともできる譯なのだ。總で。かうした國家的カルテル化の場合でも、いはゆる公的統制は、決して、金融資本の支配を排除するものではない。

それ處か、こゝでも政府は、できるだけ有能な指導的大實業家を招聘して、獨裁的に統制能力を振はしめようとするのが最近の傾向だ。

一例、英國の電力事業の統制——こゝでは個々の發電會社は從來通りの私的企業であるが、その上に地方的の電氣委員會と中央電氣局が公設されて、綜合的統制と合理化的再建を企圖してゐるが、その中心的指導者は遞信省などの官吏ではなくて、有力な專門家である。

他の一例、炭坑業の統制——これも同じやうに、結局若干の大實業家の協同で作成された改造案を政府の權力で强制し、又金融的援助で促進させるに外ならぬ。

第三の例、合理化助成・金融機關——この有名な新設機關も政府の行政官吏が立ち入つた干渉をするのではなくて、英蘭銀行と大銀行團との協同に指導權を一任してあるのだ。

これらの實例で分るやうに結局支配權は若干の指導的大實業家の掌中にあつて、彼等が協同して作成した合理化案に對して政府[illegible]。[illegible]問題である[illegible]。

これでも、[illegible]ならば、根本的[illegible]けを押へて、[illegible]くことはできるかも知れぬが、最近の狀勢では[illegible]にせよ、英國にせよ、その方向への發展は甚だ覺束ないらしい。

（8）

では、日本の狀勢はどうか？　日本は官營企業の規模が甚だ大きい。エコノミストの調査によると、大正十四年末で官業と民業とは次のやうな割合で對立してゐた。

		官業	民業	合計	合計に對する官業の割合
資本（單位千圓）	工業	四五二、九五五	四、九三〇、〇四九	五、三八三、〇〇四	八・四一
	鑛業	一五、三九三	八五八、六四〇	八七四、〇三三	一・七五
	運輸業	二、五〇〇、一五四	一、二六八、六五三	三、七六八、八〇七	六六・五一
	合計	二、九六八、八〇三	七、〇四七、三四一	一〇、〇二五、八四四	二九・六三
從業員（單位人）	工場從業員	一五四、七九八	一、八四九、七〇五	二、〇〇四、五〇三	七・七二
	鑛山從業員	一四、〇三〇	二六五、六七六	二七九、七〇六	五・〇二
	通信運輸業	三五四、一五〇	一二六、七五一	四八〇、九〇一	七三・六九
	合計	五二二、九七八	二、二四二、一三二	二、七六五、一一〇	一八・八八
銀行業（預金高）（單位千圓）		一、四八四、三〇〇	一一、三一一、〇〇八	一二、七九六、三〇九	一一・六〇

生保業(契約高)(單位千圓)　二、〇五三、七七九　四、八〇一、〇四〇　五、八六四、八六九　一六・〇

日本でも財政の膨脹は多くの專賣事業の擴大を促してゐるがとりわけ軍事工業と植民地經營事業の規模が、特別な擴大的役割を演じてゐる。內地產業の育成といふことも長い間重要な役割りの一つではあつたが、それは今では著しく重要さを減じ產業統制の役割りに轉化してきた。昭和年代に入つてから官業の規模は、一層擴大された。

(イ)一例——金融恐慌の際に郵便貯金は一躍して大膨脹をなした。即ち昭和元年末の十二億圓から二年末には十六億圓となり、四年六月末には二十億圓に達した。

(ロ)官營保險も飛躍的發展をとげた。昭和元年には契約高十二億圓、その後も年々二億乃至三億圓宛增加してゐる。

(ハ)此の外に特殊銀行として日銀を始め、臺灣、朝鮮、正金、興業、勸業、北海道及び東洋拓殖等の大銀行がある。特殊銀行貸出高だけでも四十億圓に上つてゐる程だ。

(ニ)金融業以外では、鐵道、通信上の國營、製鐵所、軍器造船工廠、南滿鐵道、諸專賣事業、電氣、ガス、水道等がいづれも厖大な規模のものであり、又、現に旺盛な發展をなしてゐる。これらの外に金融機關の投資を通じて、實に莫大な產業領域への公的統制が行はれてゐる譯だ。

大勢としてみれば、日本の官業は旺盛な擴張的傾向にあるといふことができる。

(9)

處が、從來、屢々官業の廢止——その民營化といふ要求がきかされるのは何を意味するか？　その表面の理由は次の二つだ。

第一は、從來の官營事業が純然たる官僚的經營で、能率上甚だ劣等な成績のものが多かつたのを整理するといふ意味だ。

第二は、從來、內地工業の育成といふ役割りをつとめてきた官業は、最早、存續の意味がなくなつたし、反て不當な民業壓迫となつてゐるといふことだ。

此の二つの理由は一應尤もだ。殊に官業管理の能率が劣等なとは定評だが、是丈で、官業廢止の充分な理由になるかどうかは疑問だ。

(イ)官業の能率が劣等ならば、それを改造したらよくはないか。その改造は前述したやうに不可能事ではないだらう。

(ロ)第二の理由は、恐らく、ヨリ薄弱らしい。といふのは、今日の官業中、たんに模範經營などといふだけの意味しかないものは殆どあるまい。

なによりも、日本の經濟界が、今では著しく獨占的に進んでき、それにつれて、始めはたんに模範經營だつたものも、今では、公的統制の新しい役割を持つやうになつてきたことが考へられねばならぬ。

最近の合理化運動の發展は、日本でも、[illegible]に於ても[illegible]として[illegible]的に[illegible]カルテル網を建設する傾向を[illegible]た事を痛感せしめてゐるのだが、さうなると官業を拂ひ下げるといふよりも寧ろ官業を母體とし、中央指導體として、全部面的な公的統制を企てるといふ方が必至的な要求の樣に思はれる。では、官業拂ひ下げ論は時代錯誤かといへば決してさうではない。といふのは、表面的主張はどうであつてもその實相は決して純然たる民業化運動ではなくて、寧ろ單なる半官半民化運動に過ぎず、要點は官僚統治を廢して、その代りに大金融資本的統治の管理樣式をたてようとするものに外ならないだらうから。

結局、官業整理の產物はといへば新しい「滿鐵」が、いくつか出現するだけで、本質的には、やはり、金融資本と國權との直接の結合を內容とする處の國家的トラスト化乃至國家的カルテル化の劃期的な擴大をとげるにちがひない。現に、政友會にしろ、民政黨にしろ、一方に官業整理を主張すると同時に熱烈な國家資本主義政策をも發展せしめようとしてゐるではないか。

一例——近頃問題となつた遞信省の電話電信民營化(?)運動は恰好な例だ。それは立案者たる中野正剛氏自身公言してゐるやうに決して、いはゆる官業の整理などではなくして、民間の金融資本と結合することによつて、國家的統制事業の大擴張を企圖してゐるものに外ならない。八幡製鐵所の拂ひ下げの如き[illegible]半ト[illegible]されても、たゞ[illegible]必要であり、それには、我國[illegible]財界の整理を促進するの外に途がない」(政府調査會の意見)と斷言してゐるではないか。

(10)

此點では產業合理局の建設は注目されねばならぬ。既にその創立以來國家的カルテル・トラスト運動はおだやかな、前進行動を始めてゐるではないか。

此の合理化局の役割りこそは、政府と大金融資本團とを最も露骨な形式で緊密に結合させ、國家權力の背景の下に大金融資本の全國的統制を發展せしめることに外ならぬ。

恐らく、吾々は遠からずして、電力事業、重工業、造船業、化學工業、羊毛工業等々：の重要部門に强制的カルテル網の建設をみることであらう。

八月七日の都新聞は興味ある記事を掲げてゐる。

それによると合理化局は近く改造されるだらうといふ事だ。その主たる理由は、從來の組織では國家カルテル乃至トラスト化の實際的促進能力が甚だ貧弱で到底時局の要求に順應することができないといふことだ。

それで、有力なる顧問達――彼等は、いづれも大金融資本團の代表者だ――は、此合理局をもつと有力な、實行力のある機關にしやうと、目下しきりに積極的改造化を目論んでゐるといふことだ。

この記事などは合理化局に、なにが期待されてゐるかを、はつきり語るものだと思ふ。

それに、日本の現狀には次の樣な特殊の事情があつて、國家資本的カルテル・トラスト化への要求は現に甚だ緊迫してゐる。

(イ)日本の合理化獨占化過程がまだ〳〵先進國より著しく立ち遅れた狀態にあるから、これを急テンポで發展せしめねばならぬといふこと、

(ロ)それにも拘らず、最近の合理化運動による生産力の擴大が海外市場への大進出を焦眉の急務としてゐる――日本の內地市場が非常に狹隘な事は此進出政策を特に重要ならしめること

(ハ)しかるに、最近の世界經濟の狀勢――殊に深刻な世界恐慌の發展がこの海外進出を至難としてゐるといふこと、

かうした、內外の狀勢は大金融資本の集中的支配力を更に急速に擴大せしめるであらうと共に、金融資本と國權との緊密な結合を強く促進せずにはゐないだらう。

(ニ)又、特に注目すべきは、中小工業の統制である。此の領域では金融資本による直接の統制は甚だ困難だから、現に國家的統制が痛切に要求されており、合理局の最も重要な題目つてゐる程だ。

といつて、こゝでも金融資本は決して排除などされてゐる譯ではない。

興味あるのは現に問題となつてゐる琺瑯鐵器工業の一例だ。此の部門の輸出を獨占してゐる三井物産は何といつてゐるか?――もし、國家の權力で各部門の强制的カルテル化が成立するならば、三井物産は組織化に必要な數百萬の資金を提供するであらう――といつてゐるではないか。

合理局自身には資金がないから、結局、どの部門の統制にも大金融資本の實質上の支配を拒否することはできないのだ。

しかも、日本は先進國とちがつて、無産者階級の勢力がまだ甚だ微弱だから、國家機關の發動による社會化的效果は殆ど問題とならない。

かくて、金融資本は、さし當りは國權を思ふ存分に驅使して巧に獨占利潤の擴大を企圖することができるであらう。

かゝる狀勢では、國家機關の協調は、それによつて金融資本の專橫な行動を制抑するなどといふ代りに、たゞ〳〵産業振興の矛盾の下に金融資本への援助をなすに忙殺されるだらう。

これは、實に必至的な大勢である。

現段階の勞賃論

吉田秀夫

一

純粹なる資本家的社會に於ける勞働力の價値に就いては、吾々はその明瞭なる說明を『資本論』の中に有つてゐる。すなはちかゝる社會に於いては、勞働力も亦一つの商品となるのであるが、この『勞働力の價値は、他の總ての商品の價値と同樣に、この特殊の物品の生產・從つてまた再生產に、必要なる、勞働時間によつて決定される。』（第一卷、改造社版、一四二頁）然るに、この勞働力なるものは生きた個々人の能力としてのみ存在するのであるから、勞働力の再生產に必要なる勞働時間とは、結局、かゝる生きた個々人の生活資料の再生產に必要な勞働時間のことでなければならぬ。だから『勞働力の價値とは、勞働力の所有者の生存維持に必要な生活資料の價値である。』勞働者の家族養育費、及び教育費も、個人としての勞働者が死を免れないものであり、また一定の教育が一定の勞働力の前提である限りに於いて、かゝる勞働力の價値形成の一要素とならねばならぬ。かくの如くして決定された勞働力の價値は、一定の國及び一定の時期について言へば、一定して居るものであり、從つてそこには勞働力の價値の一定の最終限界または最低限界がある。それはすなはち勞働力の所有者の『肉體上に缺くべからざる生活資料の價値』である。勞働力の價値は久しくこの限界に止ることを得ない。

これは前述の如く純粹なる資本家的社會に於いてのことである。併し純粹なる資本家社會がそのまゝの形で存在することはない。またそれと同時に資本主義の發展は決して平坦な道の上にあるのではなく、ジグザグの經路を採るものである。從つて右に述べた勞働力の價値に關する法則も、この資本主義の現實の樣相につれて、種々なる具體的・特殊的な形をとつて現れることゝならねばならぬ。ではそれは、帝國主義の現段階に於いては、如何に現れるであらうか？

資本は盲目的なる自己目的に向つて進む。その本能的なる自己增大

欲は資本蓄積となつて現れる。この資本の發展・資本蓄積の進行は、その途上に於いて幾多の危機を作生したが、而も資本は常にこの危機に打克つて進んで來た。併し周知の如くこれは資本主義の矛盾の根本的克服ではなく、その一時的克服に過ぎず、また同時にその擴張再生産であつた。そして資本のかゝる量的擴大はその質的轉換を齎らさずにはおかなかつた。すなはち自由競爭を本質とせる資本主義は一變して獨裁を特徴とする獨占資本主義の段階に入り込んだのである。

獨占資本主義の時代に至れば資本家的生産方法はその本質たる無政府性が多かれ少かれ計劃性・統制性によつて置きかへられることゝなる。勿論生産の無政府性が全的に排除せられるといふのではない。併しそれが著しく限定されることには疑はない。支配的大産業の間に何等かの形の統制が行はれるに至る時には、それとそれ以外の中小産業との間の對立競爭並びにかゝる統制せられたる企業聯合相互間の對立競爭はより一層激化されるであらうが、併しかゝる統制の行はれる大産業が一國に於いて支配的のものである限り、それは自らの定めたる獨占價格を以て支配的の價格とすることを強要し且つ強行することが出來る。さればこそ獨占資本主義は、自國内に於いては一定の特別利潤を齎らすところの・生産價格を遙かに超過する・特別價格を定め、それによつて外國市場爭奪戰の爲めのダンピングの素地を作り得るのである。併しかゝる獨占資本は單に自己と對立する獨占資本並びに中小資本のみをその克服の對象とするものではない。それはまた勞働者階級をもその克服の對象とする。そしてそれが爲めには、獨占資本はを獨占的組織を最も有效に利用することが出來る。獨占資本の組織的力は、自由競爭の時代に於けるそれよりも、遙かに強大である。從つてそれが勞働者階級と對立し鬪爭する力は著しく強化されてゐる。それは計劃的・統制的に、一國の標準的勞賃水準を決定することが出來る。そしてそれに抗する勞働者階級を組織的に斷壓することが出來る。獨占資本主義に必然的に作生する國家資本主義トラストの形成はこのことを一層容易ならしめる。だがかくいふことは、勞賃額は獨占資本によつて著しく低減せしめられた、といふことを意味するものではない。獨占資本はその帝國主義的國外進出を國民的要望に轉換し且つまた勞働者階級の反撥力を緩和する爲めに、勞賃の或程度の引上を行つた。だから統計の上から見れば勞賃は騰貴して行つたやうに見える。併し勞賃は決してこの統計に對し比例的に騰貴したのではない。成程勞賃は數字的には騰貴してゐるに違ひないが、吾々はそれと共に特別利潤や國家の輸出奬勵金や産業助成金や補助金などの全系列の資本家の收得の出所を考慮に入れなければならない。一見した所勞働者は騰貴せる勞賃を得て居り、資本家は單に一定の貨幣額を買つてゐるだけで、萬事は平穩の樣に見える。併し貨幣は一定の價値表象である限りに於いてのみ意味を有つてゐる。そして價値は決して單なる資本からは生れて來ない。それは勞働によつてのみ生産される。また生産せられない價値が分配される筈は決してない。だから獨占資本の得る特別

賃銀に[illegible]その實質價値、謂ゆる實質賃銀に於て[illegible]
生產せられたるものゝ[illegible]
て勞賃の[illegible]文字通り一致することによつて、生產せられた價値
に對する勞働者の分け前がそれに比例して增加してゐると推斷する如
きは、最も誤れる結論と云はなければならない。

これはまた他の事實よりしても知ることが出來る。獨占資本が獨占資本である限り、それは國外市場に於ける競爭が最大の關心事であらう。國内に於いては獨占資本の獨制が一應樹立せられ獨占價格が成立してゐるのであるから、競爭は既に少なからざる程度に排除されてゐる筈である。然るに國外市場に於ける競爭の素地としてそれは既に國内市場に於いて獨占價格を有つてゐる。かくて獨占資本は、その競爭戰に於いて有利な地位を占めんが爲めに、より發達せる生產力を積極的に利用し、かくて價値を低下せしめることによつて價格の低下を計る必要は、著しく減少した。すなはち獨占資本の成立は資本家が不變資本部分に手をつけることの必要を著しく減少せしめたのである。然るに資本主義の發展に伴ふ歐洲大戰は、著しく廣大なる規模に於いて富を破壞し、かくて資本は著しく減少せしめられた。こゝに不變資本を更新し增大することは著しく困難となりまた不可能とすらなつた。すなはち資本家が不變資本部分に手をつけることの可能が著しく減少せられたのである。資本家的生產は、それが餘剩價値の爲めのものである限り、自己を擴大しそして利潤を獲得しなければならぬ。然るに[illegible]
[illegible]
[illegible]可變資本部分に手をつけ[illegible]
[illegible]的となり、勞賃・勞働者に因つての資本の[illegible]必然的とならなければならぬ。では帝國主義の第一期に於いて主として獨・米資本主義によつて採用され、第二期に於いて日・英資本主義によつて採用されんとする合理化とは、如何なるものであらうか？ そしてそれは勞賃の上に如何なる影響を有つものであらうか？

二

產業合理化とは勿論產業を合理的にすることである。併し產業が合理的であるとは、資本家的社會に於いては、餘剩價値がより多く得られることの謂であり、合理性の判斷の標準は餘剩價値の量である。人の知る如くに、資本家的生產は價値の爲めの――餘剩價値の爲めの――生產である。その目的とするところは、一定量の資本を以て、出來得る限り多くの餘剩生產物を、若しくは餘剩價値を、生產することに歸着する。それには不變資本が可變資本に比して、より速かに增加することが、または出來るだけ少ない可變資本を以て出來るだけ多くの不變資本が動かされることが、必要である。かゝることは、資本主義の發展の途上に於いて、その形式に差異こそあれ、何時如何なる場合でも資本がそれを追求した主要目的であつた。その意味では產業合理化も

また、それが『資本家的』産業合理化である限り、この主要線を外れるものではない、だが單にかゝるものとしてのみ合理化を把握することは、疑ひもなく誤謬である。單に誤謬であるだけではない、それは惡意に滿ちたる事實の歪曲でさへあると言はなければならぬ。

若し吾々が合理化を以て、單に餘剩價値を多からしめんが爲めの手段であると解するならば、それは全く平凡な事實に歸し去つて了ふ。それが若し事實であるならば、合理化なるものは、資本主義が存在する限り何時如何なる社會にも存在することゝなり、歐洲大戰に伴ふ資本主義の平衡の大規模の破壞以後に、主要資本主義諸國のスローガンとなり、またならねばならなかつた所の合理化の、歴史性・特殊性は、總て抹殺されて了ふことゝなる。併し乍らかゝることは、多くの人により、或ひは意識的に或ひは無意識的に度外視されてゐる。例へば商工大臣俵孫一氏は、合理化を以て、『動力の利用增進、規格統一および單純化、管理經營方法の改善、試驗研究機關の整備連絡、販賣組織および運輸組織の改善、國産品の愛用奬勵、貿易の振興、産業金融の改善、企業の統制等こと〳〵く』(エコノミスト、第八年、七號、一五頁)を含むものとしてゐる。(何と盛り澤山な合理化!)これでは合理化の歴史的意義は總て沒却されて了はねばならぬ。だが吾々は、少し考へれば、この何でもかんでもの羅列の中に、眞實の核心を見出すことが出來やう。吾々は先づこの羅列表の中から、『試驗研究機關の整備連絡』であるとか、『貿易の振興』であるとか云つた類の、何も今更始つたものではない・事新らしく騷ぎ立てる程のことのない・事項を除き去う。かうした月並な事項を一切除き去つて後、殘つたものゝみについて考へるにその間にも亦先後の關係がある。すなはち『企業の統制』は『規格統一および單純化』の前提條件であり、そしてその後者は結局勞働強度の增進=搾取の强化の爲めであり、『動力の利用增進』と云ふが如きは勞働の强化に伴ふ生産手段の不生産的消耗の減少に外ならない。かくの如く、産業合理化の眞實の核心は勞働强度の增進にあるのであり、その他一切の事項はこれに對し副次的・第二次的の關係に立つに過ぎないものである。かく把握してはじめて、何故に例へば『試驗研究機關の整備連絡』といふが如き古くさいことが、事新らしそうに叫ばれねばならぬのかが明らかとなる。それは勞働の强化を計るべき方策の『試驗研究機關』なのだ。實に『資本家自身および資本家的論者は、無論合理化』といふ概念の下に、企業の利潤を高むるに適するに過ぎない・生産および分配の・凡ゆる可能な・再組織の過程を擧げる。例へば中間商の排除、不變資本の節約(但しこれはすべてゞはない)、生産の基準化、典型化、標準化、等々。併しこれ等のものは、皆本來の意義における資本家的合理化ではないのであつて、既に古くから、もつと適當な別の名稱で知られてゐる他の諸範疇に屬するものである。本來の意義における資本家的合理化は、勞働過程を、一定の計劃に從ひ、ほしいまゝに搾取せんとする一定の目的を以て、再組織することである。』(クーシネン、國際情勢とコミンテルンの任務、竹田薫氏譯、

[illegible]

[illegible]て來る。蓋し勞働日のかゝる短縮によつて生産力の發展と生産條件の節約との上に與へられた絶大の刺戟は、同時にまた、同一の時間に於ける勞働支出の増大を、勞働力の緊張の増進を、勞働時間の氣孔塡充の濃密化を、換言すれば勞働密度の増進を、短縮された勞働日の内部に於いてゞなければ達し得られぬやうな程度を以て、勞働者の上に強制することになる。即ち與へられたる時間の内部には、より多量の勞働が緊縮されることになるのであつて、かゝる勞働の緊縮は今や、それ自身値する所のものとして、換言すれば、より大なる勞働量として、計算に入るのである。かくして「外延的の大いさ」としての勞働時間の尺度の外に、尚ほ勞働時間の密度の尺度といふものが現れて來る。今やより濃密なる十時間勞働日の中には、より粗放なる十二時間勞働日に於けると等量の・又はより多量の・勞働（換言すれば支出された勞働力）が含まれることになる。即ちより濃密なる一時間の生産物の中には、より粗放なる一時間五分の一の生産物に於けると等量の・又はより多量の・價値が含まれる譯である。』（第一卷、改造社版、三九一頁）

從つてそれは全く生産力の發達とは異るものである。『勞働の能率が増進するといふことは、同一の時間により多量の勞働が支出されるとい[illegible]

[illegible]せるため、個々の生産物の價値は低下することになる。かゝる[illegible]の場合には、[illegible]てその價値にも變化がない』（資本論、同上、五〇八―九頁）かくの如く、兩者は相互に全く異るものである。そして合理化の中心的努力の向けられてある所は疑ひもなくこの能率増進、勞働の強化である。だが、かくいふことは、資本家的合理化に於いては生産力の發達は起らない、といふ意味ではない。生産力の發達はもとより起る。だがそれが核心でないだけだ。だから生産力の發達の起ることも起らないこともある、たゞそれが起るのは勞働の強化の前提としてに過ぎない。これに反して資本家的合理化に於いては、勞働の強化は必ず起る。だからそれが本質的なのだ。過去に於いては資本家は發達せる生産力を積極的に利用した。そしてかくして生産物の價値を引下げることによつて資本家同志の間の競爭戰に於いて有利なる地歩を占めんとしたのだ。だが今日に於いては事態はこれと異る。より進んだ生産力を利用せんが爲めには資本家は、その資本のうち不變資本部分に手をつけなければならぬ。然るに今日に於いては、既に述べたる如くに資本家が不變資本部分に手をつけることの困難は著しく増大し、或ひはその不可能に[illegible]

達してゐる。だから彼等は積極的に且つ意識的に可變資本部分へと向つて來た、そうせざるを得なくなつたのだ。その結果は必然的に勞働の強化となつて現れる。資本家が新技術を採用し生産力を發達せしめるのは、唯かゝる結果が最も有效に收穫せられる時に限られる。そして勞働の強化が強行せられて居るに過ぎない限り、生産物の價値は決して低落しない。だが生産物の價値低落は、最早、今日の資本家が相互の競爭戰に於いて第一にとらんとする武器ではない。彼等にとつては價値が不變であることは最早何でもないことになる。假令價値が騰貴しても構はぬのだ。蓋し今日資本家にとつては價値の高の如何は最早それ程重要ではなく、唯幾ばくの價値が自己にコストするかゞ問題なのだから。生産力はかくてその發達を抑壓される。資本主義の進歩的なる側面が脱落する。

吾々は、かくの如き歴史性・特殊性を有する・勞働強度へ向つての・意識的なる資本攻勢を以て資本家的産業合理化の本質であるとする。かくの如き狹き合理化の解釋は、勿論、資本家の側の贊同を得ないであらう。だが斯る見解に贊せざるものは資本家の側のみではないやうだ。例へば有澤廣已・阿部勇兩氏の共著になる『産業合理化』には次の如くある。

『元來今日産業界の合言葉となつてゐる合理化を、勞働の速度、勞働の強度の問題と解して居るものが甚だ多い。巨大なる生産機構、複雑なる勞働過程、有機的なる勞働組織、この問題は既に過去のものである。現在はスピードの時代である。工場はスピードを中心に統一體として構成組織されねばならぬ。これこそが合理化の神髓である、と説くのが合理化の常識である。だがこれはヴアルガの指摘してゐるやうに、正しい見解ではない。』(五一—二頁)

だからこそ兩氏は『ヴアルガと共に「合理化といふのは古い現象に對する新しい言葉である」ことを確認しやうと思』はれたり(八頁)、又『ヴアルガと共に「流通部面の合理化を二箇條、生産部面の合理化を三箇條列擧したりして居られる(二二頁)。スピードがどうしたとか云ふのはどこのモダン・ボーイか知らないが、兎に角、兩氏が勞働の強度のみを擧げることを排し、また合理化を以て『古い現象に對する新らしい言葉』として居られる事だけは明かである。吾々は、資本家的合理化の歴史性・特殊性は一體どこへ行つたのだ、などと訊ねるの非禮を控えやう。唯兩氏と商工大臣俵孫一氏との暗合に感嘆の聲を放つて止むべきである。

三

かくの如くに今日に於いては、資本家が積極的に發達せる生産力を採用することの困難・不可能は著しく増大して居り、從つて彼等が不變資本部分に手をつけることによつてその低落せる利潤を引き上げんとすることの困難・不可能は著しく増大してゐる爲めに、資本家は寧ろ不變資本部分よりも可變資本部分にその利潤率引上の源泉を見出さう

[illegible]である。[illegible]

[illegible]に[illegible]長さ、[illegible]切下げ、[illegible]由か、または勞働の強度增進かの、何れか一またはそれ以上によらなければならない。かゝる手段の中その第一と第二とは、勞働者階級の力の以前よりも強大となつた今日に於いて、また更に[illegible]國民の名に於いて産業の振興を計らねばならぬ今日に於いて、いさゝか好ましくない方法である。（それが全然行はれぬといふ意ではない。むしろすきさへあればそれは強行される。）そして第三の發達せる生産力の採用も亦上述の理由によつて利潤率引上の爲めの主要努力の方向とすることは出來ない。然るに第四の方法は、表面上勞働時間と勞賃とに影響なくして強行することが出來、また時には前者の短縮と後者の引上とが不可避となることすらある爲めに、資本家にとり最もよい方法でなければならぬ。そしてかゝるものこそが、その凡ゆる粉飾を除き去つた合理化の本質である。ではかゝる合理化は、勞賃從つてまた勞働者階級の上に如何なる影響を有つであらうか？

何より明かなのは、それが必然的に、一方に於いては勞賃の低落を齎らすと共に、他方に於いては廣汎なる失業者大衆を文字通りに生産から叩き出すことである。

勞働の強度增進は必然的に勞賃の低落・切下となる。既に述べた如くに、『勞働の能率が增進するといふことは（すなはち強度增進は——筆者）同一の時間により多量の勞働が支出されるといふことである。され[illegible]

[illegible]これ多くの[illegible]同じくより多くの[illegible]されるのだ。[illegible]落しない。反對に同一勞働時間により多くの價値が生産されてゐるのであるから、假令必要勞働量が同一に止らうとも、剰餘勞働量は増加せられたことになり、必要勞働時間は相對的に短縮されたことになる。即ちとりも直さず搾取率の強化である。[illegible]合理化そのものには反對しないが勞賃の低落には反對するといふ主張ほど、滑稽な主張はない。若し勞賃が低落しないで停止的であるならば、勞賃は低落してゐるのだ。

だがこれに對しては、勞賃は寧ろ積極的に騰貴してゐる、と主張して、單に勞賃の表だけではなく所謂實質勞賃の表までも引合に出すものがある。だが實質勞賃を引合に出すことは甚だ危險なことでなければならぬ。蓋しそれは使用價値の問題だからだ。勞働者にとつては米、味噌、等々の使用價値の手取りが幾ばくであるといふことよりも自分自身の生産したものについて幾ばくの分前を得るかゞ、問題である筈である。資本家は價値の上から見た利潤の高さを陰蔽し辯護するが爲めに、勞働者の得る米、味噌、等々の使用價値の量を以てする。だが價値と使用價値とを比較することは疑ひもなく欺瞞である。だから實質勞賃を擧げることは本質的には非本質的な方法である。唯實質勞賃

ですらない且つ』といふが如き場合に於いてのみ、それは勞働者階級の用ひ得るものとなるに過ぎぬ。併し乍らかゝる方法を用ひることによつて勞働者の生活水準の上昇を結論することは一般に行はれてゐる所である。そしてかゝることはマルクス主義者の中に於いてすら見ることが出來る。（例へばヴァルガ『安定後に於ける資本主義沒落期の經濟』）。だがかゝる見解は、廣汎なる失業者大衆の存在といふ事實を計算に入れない點に於いて、第一に批判を免れざるものである。蓋し勞働者階級の生活水準といふ場合には、單に就業勞働者だけではなく失業者をも含めて判定せられなければならないからである。人の知る如くに今日の資本主義世界には、大約米國七〇〇萬、ドイツ三五〇萬、英國二〇〇萬、日本一六〇萬、イタリイ八〇萬といふが如き、巨大なる失業群が存在し、且つ不斷に増加しつゝある。勞働者の生活水準と言ふ場合には單に就業勞働者だけではなくかゝる巨大なる失業群のそれをも計算に入れなければならない。だから假に就業勞働者が手にしてゐる米・味噌等々がそこばくの増加を遂げたといふことが、それだけで勞働者階級の生活水準の上昇を證明するものとは斷じてない。啻にそれだけではない。『勞働力の價値の最終限界となり最低限界となるものは、すなはち勞働力の保持者たる人間をしてその生命行程を更新し得せしめる爲めに日々供給せねばならぬ商品量の價値である。換言すれば、彼れの肉體上に缺く可からざる生活資料の價値である。勞働力の價格がこの最低限界まで低落したとすれば、それは即ち勞働力の價値以下に低落した譯である』（『資本論』同上一四四頁）然るに今日に於いては、利潤率の引上の爲めの努力は勞賃をこの限界に壓迫してゐるのであり、そして後に述べる如く失業大群の存在がかゝる傾向の永續とより以上の發展とを可能ならしめてゐるのである。特に合理化の十分に行はれてゐる所では（例へばフォード工場の如き）この『最低限界』が既に『最低』ではなくなり、勞賃は勞働者の勞働力の日々の再生産をすら保證し得ないものとなり、廢人勞働者の生産面からの不斷の脱落さへ招來する傾向を惹起してゐる。だからクージネンはヴァルガの見解を次の如く批判する、——

『私は同志ヴァアルガに問はう、勞賃の勞働力の價値以下への低落は、勞働者の生活水準の低下を意味するか否か？　私は生活水準の低下であると考へる。……正にこの勞賃が勞働の價値以下へ低落するといふことこそは疑ひもなく資本家的合理化によつて最も普通に起ることである。同志ヴァルガは生活水準といふことを最も狹い意味に於ける「實質勞賃」といふ言葉と同じ意味に解し、それだけでおしまひである彼が、勞働者の「實質勞賃」は資本家的合理化によつて上昇するのであり低落することはないと主張するのを、正しいと假定して見やうそんなことは決してないのであるが、併しそうであると假定して見ても、それは實際に於いて勞賃が勞働力の價値以下に低下しないといふことの證據になるのであるか？』（一五五頁）

これと關聯して、ヴァルガがかゝる主張をマルクスを典據として擁

[illegible]に對する[illegible]
た。マルクスは不休の資本の作用さへ[illegible]ことを證明するに足る何等かの文意をマルクスから見出し得るかも知れないが」（一八頁）といふ、斬然なる暗突を記憶すべきである。蓋しこれはヴァルガのこの點に對する一矢である許りではなく、合理化の中に何でも構はずぶち込んで而もそれを『資本論』からの引用で防備し樣とする者に對する一矢でもあるから。（此際有澤・阿部兩氏の前揭書を想起すべきである。）

だがこれにも增して重大な合理化の結果は膨大なる失業群の形成である。

勞働の强度が增進した時には、例へば九時間又は十時間の勞働時間の中に、以前の十五時間又はそれ以上の勞働量が支出される。だから同一勞働時間の中に以前よりもより多くの價値と使用價値とが生產されなければならぬ。だが併し資本家的生產は單なる使用價値の爲めの生產ではなく、價値の爲めの・而も實に餘剩價値の爲めの・生產である。だから資本家の努力は單なる使用價値の量の照當に向けられることはなく、之に反しより小なる使用價値をしてより大なる餘剩價値の擔當者たらしめることに向はねばならぬ。嘗ては餘剩價値率の低落は生產される使用價値の絕對量の增大によつて補はれた。だが今日では使用價値量の絕對的增加は資本家的生產自らが劃した限界と衝突するに至つたのだ。かくて資本家の努力は最早不變資本部分に向ひ得ず、意識[illegible]
[illegible]ない。[illegible]
資本家的合理化は[illegible]ないのだ。否むしろ、資本家はきさへあれば勞働時間の延長をすら劃策し强行する。かくて失業からの勞働者の大量的叩き出しは必然的に合理化に同伴しなければならぬ。こゝに膨大なる失業群が形成される。

かゝる失業群が合理化の進展につれて益々增大すべきは理の當然である。合理化が資本主義の相對的安定を齎らした時に於いてすら、その最尖端に立つ米・獨に於いてもなほ、失業者はその增加を續けた。況んや沒落資本主義の第三期に於いては、このことは一層の理由を以て眞實でなければならぬ。

この著大なる・不斷に增加しつゝある・失業群は、就業勞働者の側に影響を有たずにはおかぬ。その不斷の壓迫は、無際限に大なる勞働者の補充池となることによつて、勞賃を絕えず勞働力の價値以下に保つことを可能ならしめ、同時にまた搾取の强化に基く駿人勞働者の生產面からの不斷の脫落を可能ならしめる。レニンは既に一九一三年にテイラア・システムに就いて次の如く言つた、

『賃銀奴隷の汗の滴りに、神經及びエネルギイを、三倍もの速さで搾り出す。勿論それだけ早く死ぬのだ。だが、門の外にはいくらも代りが待つてゐる』（『旗の下に』一九年、十一月號、四三頁より）

このことは資本家的合理化について全面的に眞實である。失業群に

廢人勞働者の補缺な供給すべき巨大なる貯水池である。だが併し、最も注意すべきことは、今日の膨大なる失業群が『産業豫備軍』ではないことである。勿論今日の失業群も亦『資本』の必要に備へる『豫備軍』であらう。だが本來の産業豫備軍は、資本主義のジグザグの發展につれて、或ひは吸收され或ひは吐出されるものである、資本主義の相對的安定の際にすら増加し續ける失業群――それは産業豫備軍であらう筈はない。今日の失業群はもはや絶對的な・固着した・失業群である。それは廢人勞働者の地位を補充する以外に資本にとり絶對に不要の失業群である。それは國家と資本家とが投げるパン屑で露命をつなぐ・文字通り死に直面した・失業群なのだ。

沒落の資本主義はなほ勞働の強度に向つて突撃を續けるであらう。合理化に立遲れた日・英に於いてそれは殊に然るであらう。そしてこのことは、失業群をより大ならしめることによつて、又もその勢を助長されるであらう。勿論勞働の強度增進にも限界はある。だがそれは資本家的合理化によつて遙か低くまで追ひやられて了ふのだ。かくて勞賃は勞働の價値以下に不斷に押し下げられてゐること・なる。このことはまた、熟練勞働者と不熟練勞働者との接近といふ・重大な結果を、隨伴する。合理化に隨伴する規格化・單純化は、熟練勞働者に不熟練勞働者が代位することを可能ならしめるのであるが、このことは兩者の地位を接近せしめ、兩者の間の勞賃の差を次第に減少せしめる結果となる。かくて勞働貴族の經濟的基礎が動搖して來る。

更に資本家の側に於ける低廉なる勞働の必要と、生産行程の單純化とは、女子勞働者數を著しく增加せしめることゝなる。そしてこれも亦男子就業勞働者の側に影響を有たずにはおかないのだ。卽ちまたも男子勞働者の搾取率の強化！

かくの如くして現段階に於いては、勞賃は、一部就業勞働者の勞賃の數字が如何樣であらうとも、――例へばフォード工場の勞働者が數字の上で一日何弗の勞賃を得やうとも――その生産せるものに對し幾何の分け前を得るかといふ意味に於いて、著しく低落して居り、且つなほ低落せんとしてゐる。そしてそれは啻に勞働力の價値だけではなく、その最低限界をすら下廻らんとしてゐる。吾々がこの現段階に於ける就業勞働者の勞賃の著しき低落を一方に於いて觀ると共に、他方に於いてわづかに資本家と國家との投げ與へるパン屑で其日々々を送る膨大なる失業群の存在を觀る時に、吾々はそれだけで旣に、この資本家的生産方法が最早その凡ゆる進歩的側面を失つて了つたことを發見せざるを得ないであらう。勞賃の問題は結局勞働者階級の問題である。さればまたかゝる勞賃に關する諸傾向は、勞働者階級の左翼的發展を必然ならしめることによつて、新時代の幕を擧げずにはおかぬであらう。

美人畫論

高橋誠一郎

一

中央公論社の雨宮氏が、焦し殺されさうな八月の或日、蝉の聲に埋められた大磯の山莊を訪れて、「美人畫論」を書けと云ふ。私が此の頃、浮世繪、殊に東錦繪の類をぽつぽつ買ひ集めて居ることを、何處からか、傳へ聞いての上の註文である。唯だ浮世繪師描く美人畫を少しばかり所藏してゐると云ふだけで、繪畫と云ふものを正式に研究したこともなければ、又、研究しようとも思つてゐない私に、しかつべらしい「美人畫論」などが書ける譯のものではない。然し其の邊の消息に如才のない雨宮氏は「……論といひましても、別に論文の意味ではありません。至極輕い意味の所謂「論」であります。」と早速に附言せられた。即ち氏の註文は、美人畫論といふよりも、寧ろ美人畫漫論とか、美人畫漫談といふものにあるらしい。我れ等が多く之を聽かんことを切望し希願する東西の大蒐集家の多くが、默して談らざる時、浮世繪を考證する學者や、浮世繪を歌ふ詩人の著作の傍らに、乏しい一小蒐集家の稚い文字の存在も或ひは許さる可きであるかも知れない。

從つて私の書く「美人畫論」若しくは「美人畫漫談」は、極めて狹い範圍の美人畫に關するものであることを、豫め御承知願ひたい。即ち其れは我が日本の浮世繪、殊に「東錦繪」と稱せらるゝ浮世繪版畫が現るゝに至つた後の美人畫に就いて物語るものに過ぎないと云ふことである。

二

「道行浮世ノ奥ト道俱成」とか「浮世若衆」、「[illegible]」と云ふ

せられた定めなき人の世は、洵に封建割據、兵連禍結の時代に在つては、うきふししげき假の世であつた。然るに兵馬倥偬の世の中から、集權的な政府が現れて、人は平和の春を樂むを得るに至つた時、英雄的な時代は次第に享樂的な社會に變つて行つた。彼れ等の女性觀も亦、英雄的から享樂的に移つて行つた。英雄的な時代の男女兩性觀は、恰度ニーチェの言ふが如く、「男子は戰ふが爲めに練へられ、女子は男士を産むが爲めに育てらる可きもの」と云ふに在つた。然るに享樂的な時代に入ると共に、人は正當なる結婚よりも、不正當なる戀愛に興味を持つことが次第に大と爲つた。夙にエフェソスの抑揚格の諷判詩人ヒポーナックスの歌へるが如く、「汝が汝の妻を享樂するは、汝の生涯を通じて僅かに二日あるのみである。彼の女の結婚式の日と、彼の女の葬式の日とが是れである」と云ふような頽廢的思想が益々增長した。遊里は賑ひ、娼家は榮えた。「其生若浮兮、其死若流」人生をして眞に生き甲斐あらしむるものは、狹斜の巷の陶醉であつた。娼婦は往々にして崇敬の標的と爲つた。大和繪の流れを傳へて、今樣風俗を寫すことを旨とした所謂「浮世繪師」は總て主として青樓の美女を描くに至つた。浮世繪は實に「おやま繪」即ち遊女繪であつた。

而して平和の打ち續くに連れて「町人も樂みと云ふことを知る時節」と爲り、一般庶民も低級ながら藝術の一端を鑑賞するの餘裕を有するに至つた時、浮世繪は又、木版畫と爲つて、營利的生産の目的物の一と爲つた。浮世繪は大衆を目當とする商品と化した。木版畫は又、墨摺、丹繪、紅繪、(漆繪)、紅摺、錦繪の順序を經て發達した。錦繪は明和二年に、江戸の人で、兩國米澤町に住んでゐたとも、又、神田白壁町の戸主であつたとも傳へられてゐる鈴木春信の天才によつて完成せられたものである。吾妻錦繪の美人を說く者は、先づ春信——殊に明和期の春信(即ち主として紅摺を用して居つた寶暦時代の春信に對して云ふ)から始めなければならぬ。

三

春信は紫式部、松風村雨などの古代美女から、當世風の人妻、娘、腰の女、茶汲女、藝子、若衆、子供など、かなりに廣い範圍から、其の人物畫の題材を取つてはゐるが、全體から云つて、彼れの最も多く描いてゐるものは遊女ではあるまいかと思ふ。春信の好んで畫いた美人に、笠森稻荷地内の水茶屋、鍵屋のお仙、淺草觀音堂裏の揚枝店、本柳屋のお藤などのあることは何人も知る所である。(太田南畝の『飴賣土平傳』中のお仙お藤優劣論にヒントを得て、此の兩美人を取扱つた脚本に高安

日高氏は「若葉十字」がある。これ等で兩人に、淺草地内の大和茶屋、蔦屋のお芳を加へて、當時江戸は三美人と稱したと云ふことである）又、堺屋のお袖の帶に猫のじやれてゐる衣料の美しい繪も私の記憶に殘つてゐる。然しながら、私は數多い彼れの美人畫の中で、最も優美、溫雅にして、且つ端麗な容姿を具へた美人を遊女において看出す。而して其の反對に、最もだらけた肉感的な風俗を若い人妻に見る。彼れによつて描き出された遊女は、往々、觀世音菩薩の如き崇高さを以つて吾人に臨む、私は今茲に私の所藏品中の一葉を拔く。（第一圖）。版畫商人などは、此の繪を以つて、圖柄が堅た過ぎると云ふ。然し私は斯うした繪にこそ、春信の妙味が一番多く認められるように思ふ。第二圖は遊びに身が入つて寢やうともしない男の子を無理に蚊帳の中に引き入れようとする若い母親の圖である。私は斯うし



第一圖

たもの、殊に、雪景[illegible]は浮世繪[illegible]に思ふ。多數の男子に喜び迎へられる、遊女の生活中には、却つて已に妙覺の果に近づけるものある可く、之れに反して、其の肉感の滿足を全然一人の夫のみに依賴させてゐる貞淑なる人妻には、却つて肉の香の強く發散しつゝあるものが多い。

肉の香の高い美人畫を描くにおいては、彼れ以後に於いて、餘りに其の人が多過ぎる。私は、彼れの美人畫においては、寧ろ菩薩低眉の趣を味ひたい。從つて私は彼れの版畫に於いては、唯だ素直に描いた美人畫に最も強い愛著を持つ。妙に意匠を凝したり、變にふざけたものには感心しないのが多い。深草の少將見立の傘をすぼめた頭巾の男が、小町に擬せられた美人の窓下の雪にうつくまつてゐる大形中判の繪や、傘片手に青柳の下に佇む小野道

風見立の美人や、黄石公に見立てられた橋上の銀鞍白馬の若衆に、張良もどきの若い娘が、裾もほら〳〵蛇籠の上に素足で立つて、扇子を手渡さうとしてゐる二枚續や、「源氏匂ひぶし」の看板を立てた本柳屋の店先きで「いてう娘」のお藤に戯れてゐる惠比壽、女の袖を引く布袋、新造に女郎の衣裳を着せて貰つてゐる毘沙門、瀨川菊之丞といちやついてゐる辨才天（松葉屋内染之助に擬するものか）、女の足袋を脱がしてゐる壽老人、三つ蒲團の上で、女に三味線を彈かして淨瑠璃の稽古をしてゐる福祿壽、大勢の美人に胴上げをされてゐる大黑天などを描いた「七福神」の揃物などが、市場に現れた時には、私はそれほどほしいとは思はなかつた。「浮世美人寄花」の中、山城屋内初糸を萩に寄せた一枚などは、頗る風情に富んだものであると見てゐるうちに、床の間に懸けた畫中の猿猴が、細長い手を出して、床に置いた戀文を捉んでゐるので嫌になつた。寧ろ、ふざけた所のないだけに、此のシリーズの中では、藤に寄せた松坂屋内野風などの方がいゝかもしれない。傾城が軸物の中の達磨に吸ひつけ煙草をしてゐる圖や、雷鳴に耳を覆ふ婦人の上に、雷神が艶書と太鼓の撥を落してゐる繪なども歡興を削ぐ。殊更らに催情的效果をあげようとしてゐるものゝ如きも、私には何となく春信にふさはしくないやうに思はれる。「水仙花」と題して、白い膝頭を露出させた女が炬燵蒲團から突き出した男の足を、つてゐる圖や、「風」と題する歌の下に、大風の爲めに内股までも、吹き捲くられてゐる少女の中版畫や、風呂桶に片足を高く入れてゐる全裸體の女を蝦蟇か何かが下から見上げてゐる柱繪などは以つての外であると思ふ。母か姉か、若い女の裾を引いて白い脛を露出せしめてゐる子供の畫も不快だ。

春信は「浮世繪類考」に「一生歌舞伎役者の繪をかゝずして曰く、我れは大和繪師なり、何ぞ河原者の形を畫くに堪へんやと、其の志斯くの如し」云々と傳へられてゐるが（而も彼れの柱繪に「虛無僧も編笠をとる寒さ哉」と誤字澤山に題した薪水坂東彦三郎の虛無僧に扮した姿を描いたものなど、何枚かの役者繪の傳存してゐることは周知の事實である）、役者繪を畫くことの是非は姑く措くとして、私は私だけの氣持ちから云へば、春信が數多い春畫を描き殘して居ることを非常に悲しく思ふ。私は、何も、道德家的な態度で、春閨祕戲の畫を排斥するのではない。あの端麗な美人を我れ等の眼前に彷彿させて、一種嚴肅な氣持ちをさへ起さして呉れる我が春信なればこそ、私は斯く云ふのである。後の幾多の版畫家中には、こんな淫蕩的な錦繪を畫く位なら、いつそ春畫ばかり畫いて居つたらよからうと考へられる者すら多いのである。

私は[illegible]唯一の極致とする一部人士の說を受け容れることが出來ない。内田魯庵氏は其の近著「廣重」の中に於いて、浮世繪に於ける畫題の中心が美人、殊に淫靡な美人であり、又、其の極致が春畫であつたことを述べ、而して廣重は美人に往かずして、風景に赴いたが、彼れは頗る淫蕩的なる態度を以つて風景に對せるものであつて、彼れの風景畫は、風景其の者を對象とせる春畫であるとも稱し得ると說いて居られる。固より此の眞摯なる廣重研究家の言には聽く可きものがあるであらうが、浮世繪の極致が春畫であり、而して廣重の風景畫が、風景を取扱つた春畫であると云ふ論には、今の私には充分に了解することの出來ぬものがある。廣重の風景畫のことは姑く措くとして、錦繪初期の美人畫家、少くとも春信は「生殖器を中心とする」ことのない婦人を描くことが出來たやうである。彼れは[illegible]、[illegible]るもの、而して、[illegible]らざるもの、存在を認めて居つたやうである。



第二圖

私は極く摺りの美しい、極く保存の良い春信の春畫を見せられる毎に、常に「是れが春畫でなければならぬ」と嘆ぜざるを得ない。山水畫の屏風を立て廻した眞紅の蒲團の上に後朝の別れを惜む男女が居る。あゝ、この美しい男が裸體でないならばと思ふ。清い流には菖蒲の花が美しく咲いて、椽先の水盤には三ツ尾の金魚が泳いでゐる。女の上體は素肌に着た薄ものを通して匂やかに透いて見える。風は無つて、淡い風情を誘ふ。洵に春信の世界である。が然し、其の女の下肢は……、そして之れを抱く男の醜い姿は……。私は遂に幻滅を感じなければならぬ。あの「五右衛門」の摺物よ

ら、あれが枕繪でなかつたならばと云ふ感を深からしめる。

春畫ばかりでなく、私は春信の裸體美人をそれほど美しいものと見ない。最近に出版せられた牛山充氏の「浮世繪類聚畫集」の卷頭には「浮世繪の精華は謂ふ迄も無く美人畫であり、美人畫の精髓は裸體畫たるべきである。(中略)。人體美の繪畫的表現を理想とするものにあつては、出來得る限り、服飾のやうな附隨的裝飾物を除き、人體其の物の美の最も直接にして且つ端的なる表出を志す可きである」と說かれてゐる。然しながら、閨房中に於いて密かに行ふの外は、殆んど女性の裸體を研究するの便宜を缺き、且つ、少くも表面上に於いては愼み深い婦人の態度を尊重して居つた時代の雰圍氣中に其の畫技を練つた浮世繪師の製作中には、さまで優れた裸體畫は看出されないようである。我れ等は裸體畫以外に浮世繪の精髓を求めなければならぬ。私は矢張り浮世繪の精髓は、今樣風俗畫としての美人畫に在ると思ふ。殊に後の淸長などよりは、餘程忠實なる寫生に於いて缺くる所のあつた春信の場合に於いて然りである。春信の美人は「着物を著て居るに限る」と說いた放下房人と云ふ人の意見に私は賛成したい。

春信は又、殆んど正方形に近い所謂大形中版の版畫家と稱してもいゝやうである。勿論、大錦、柱繪、細判などにも傑作があるであらうが、彼れの製作は中版のものが最も多く、又、版が彼れの藝術の表現に最も適して居つたように思はれる。中三ヶ月以前に、或る蒐集家が或る事情の爲めに手離し度いと云ふ春信の大錦を一枚見た。先年此の品が市場に出た時、有名な某蒐集家は其の鎌倉の別莊を賣り拂つてまでも、之れを手に入れようと焦つて居つたが、終に他の蒐集家の爲めに買はれて了つたと傳へられてゐる。其の時の價格は、何でも、一萬圓とか一萬二千圓とかであつたと云ふ噂であるが、今度は八千圓で手放すと云ふことであつた。私は長く此の雪中男女の大錦版を見詰めて居つたのであるが、借金をしてまでも、此の繪を買ひ度いと思ふほどの執着心が到頭起らずにしまつた。表から見た所では、出版當時の「狀態」が殆んど完全に保持せられてゐるやうであるが、裏を返して見ると、四ツに折つて所藏されてゐた痕跡が歷然たるばかりでなく、全體に、何となく、畫面がバサけてゐるやうに思はれる。

春信が中版々畫の美人畫家であると等しく、柱繪の美人畫家と稱してもいゝと思はれるものは、春信の流を傳へて、安永期を代表する磯田湖龍齋である。私の持つ湖龍齋は悉く皆、柱繪である。柱繪以外のものでは、未だ欲しいと思ふものに出逢つたことがない。其の中の一枚に「朝顔や、水も溢る〻瑠璃の色」

[illegible]
[illegible]劇の作に傳へられ[illegible]て、一中節、[illegible]に於ける[illegible]ら、楊枝を造つて居る姿態が、未だ起き抜けの夢心地をよく現はして居る。それだけ、湖龍齋の特徴がまだ出て居ない繪であるが、衣裳の模様等、安永以降の混雜して居るに比しては、反つて感じを現はすにこの時代の作に逸品がある」と稱して居られる。

四

大錦、中判、柱繪、行くとして可ならざるなきものは、天明寛政の錦繪全盛時代に當り、名手巨匠輩出の秋に際して、尚ほ彼れ等の上に嶄然として頭角を露す偉大なる鳥居清長である。春信が到底此の世のものとも思はれぬ端麗優艶なる女性美を表現してゐるに對して、清長は現實の婦人美を、其の作る所よりも一層現實化して吾人の眼前に提示する。

鏑木清方畫伯は其の『あづま錦繪』中に於いて、氏の所謂「巨人清長」を評して「和らかではあるが、繊弱に陷らず、強くはあるが、硬からず、女を描けば、情もあり、智慧もあり、婀娜かつたりとして、こせつかず、大江戸といひ、江戸前といふ、憧憬的の讃辭は、清長の錦繪に於いて始めて象を具ふるものとい[illegible]
[illegible]は、[illegible]一[illegible]十二[illegible]通意」中の一枚である「[illegible]」は[illegible]するに、婦人の衣裳に織さびの帷子へ下着の透き通りたるさまを彫刻摺り方の工夫をなせしも清長がわざ也」と。左の年増の着てゐるのが、即ち其に所謂「藍さび」であらう。紅い下着が美しく透いて見える。

春信を通じて、浮世繪版畫の美人が、いづれも皆、夢の國の幽女なる作人であると考へた者は、清長の錦繪の女の強い力を以つて迫つて來る官能的な魅力に驚かされなければなるまい。清長の女は飽くまでも端正であり、健全である。私は大磯の海岸に水泳を試むる度毎に、必ず何人かの「清長の女」に遭遇する。哥麿の海女は現實の世界には存在しない。春信の作人が艶麗な沈默を續けてゐるに反して、清長の美人は打解けた態度で我れ等に話しかける。春信の作品が遠く現實を離れた仙宮の秘戲の如く、又、見様によつては、幼い童の遊戲の如くに觀ぜらるゝに對して、清長の其れは、藝術化せられたる現實性を以つて、強く忘我の境に觀る者を引き入れる。若し浮世繪が果して「現世享樂畫」であるならば、清長の其れは正さに浮世繪の極致と稱す可きものであらう。大錦版の「色道十二番」や、柱繪版畫繪の十二枚物を前にして、私はつくぐ\清長の持つ現實味に

嘆するのである。

私は自分の所藏する淸長の柱繪の内から特に二枚を拔く。一は靑葉影なる石の鳥居をくゞらうとする處女の姿を描いたものである。其の容貌は飽くまでも端正であつて、左手は扇を使ひ、右手は輕く褄に觸れてゐる。紫地に紫陽花を靑く染め出した振袖は地に引かんとして、緋縮緬を蹴出しながら、靜かに步を運ぶ、他の一枚は、男根を象つたとおぼしき偶像に注連を廻し、神酒を獻げた神棚の下を行く年若い下級の娼婦の圖である。左手は突き袖、右手に落し紙と共に、薄汚ない搔取をたくし上げ、白の湯卷を蹈みはだけて、逞ましい脚を内股までも露はして、大胯に廊下を行くのである。一は極めて上品であり、他は頗る下等であるが、共に堅實正確なる寫生を基礎とせるものであつて、健やかなる肉の香が畫面に漂つて、濃厚なる感情を漲らしてゐる。私は双方の女性に對して、共に人間的な親しみを持つことが出來るのである。



第三圖

五

大淸長の影響の下に集立つて、更らに自家獨特の境地を開拓せるものに、鳥文齋榮之がある。彼れは好んで遊女を題材とし、遊里の風俗を描いてはゐるが、彼れの美人畫には、鄙俗の裡に、何處となく品格の高い所があつて、「お勘定奉行、細田丹波守三世の裔、彈正時行の嫡男、名は藤原治部卿時富」と云ふ五百石取りの御直參の俤が偲ばれる。

私は彼れの「風流略六歌仙」とか「靑樓美人六花仙」とか、「靑樓美撰合」とか「若那初衣裳」とか、「福神寶合」とか、「靑樓江戶紫」とか、「風流五節句」とか云ふ類の美人畫には餘り愛着を持たない。上品であり、綺麗ではあるが、何等の魅力もないものが多い。自分の所藏する榮之の中では、複雜な畫題を取扱つた三枚續に一二面白いものがある。

彼れは當時の浮世繪師の何人よりも多く肉筆の美人畫を描いてゐるが、其れ等のもの丶中に、個性は表現せられてゐないが、恐しく美しい繪を看出すことがある。第四圖として揭ぐる所のものは、昨年十月、東京美術倶樂部で開かれた舊笠間藩主牧野子爵家藏品及び故三浦觀樹將軍遺愛品賣立の際に私の手に

入つたものである。緋に大模樣の牡丹を染め出した衣裳が巧麗に美しい。版畫が發達してから、肉筆の浮世繪は衰へたと稱せられてゐる。明和以後、天明寛政の所謂錦繪全盛時代の畫家は、多く版畫の製作に從事して、肉筆に出精する者が少なかつたのであるが、榮之は其の例外とも見る可きものである。然し彼れの絹本の美人畫は、玆に示したもの、やうに、單に纎細柔弱な美しさを傳ふるに過ぎないものが多いようである。

榮之と同じく淸長支配下の屈伏から奮起して、自己獨特の藝術境に進入し、浮世繪史上に於いて、最も光彩ある自己の時代を形成したものに喜多川哥麿がある。(彼れが自己よりも一歲の年長者淸長の影響を受くることの最も多かつたのは天明後期のこと、云はれてゐる)。



第四圖

安永、天明、寛政、享和、文化に亙る比較的長い作畫期間を通じて、彼れの美人畫は一概に云ふことの出來ぬ極めて複雜な變化を遂げた。所謂「哥麿式の美人」は決して哥麿其の人の總べての作品中に於いて看出されるものではない。永井荷風氏のいふ「女といふ肉體の感じ得らるゝ限りの快感に、惱んで、疲れて、正に斃れようとしてゐる」哥麿の女は、大體に於いて、寛政前期(殊に七八年頃)の哥麿の女のみに見られ得る所のものではあるまいか。此の時代の哥麿の美人は淸長の持つ肉體的、官能的な魅力と共に、春信に見る淸淨さ初心さが保持せられてゐる。此の時代の哥麿の女の持つ牽引力は斷じて單なる肉的のもののみではない。

然しながら、すんなりと成長した少女が、次第に其の純眞を

失ひ、其の無垢を奪はれ、愈々肉的物質的の欲求に憧憬るゝに至ると共に、彼の女の肢體は益々豐滿さを加へ、益々あぶらぎるに至ると等しく、哥麿の女も、寛政期の進むに連れて、次第に其の初々しさを喪ひ、純潔を奪はれ、野口氏の所謂「夢の如く」丈高かりし女は、背丈もつまり、著しく脂肪質と爲り、唯だ徒らに妖艶さを加へ、甚しきものは「露出狂」とすら化し、只管男子を誘惑して、自己の肉體的歡樂の犧牲たらしめんとするやうになつた。第五圖として載するものは、寛政末期の作かと思はるゝものであつて、圖柄は單に美しい母親が眠れる子供を膝の上に乗せて、若い床屋に頭を剃らしてゐるだけのものではあるが、其處には芳烈なる肉の香が浮動して、著しく蠱惑的な所のある繪である。



第五圖

然し、哥麿の女は軈て其の強烈なる肉體的魅力をすら失て、衰へた體力中に淫らな欲求のみが熾烈である老境の婦人の如くに、唯だ徒らに、異性の劣情を挑發せんとしつゝあるかの如くに見えるやうに爲つた。大體に於いて、享和文化の哥麿は、哥麿の殘骸であると云ひ得よう。晩年に畫品の下るのは已むを得ないことであるかも知れない。四十六七で歿した春信ですら、晩年には其の描く婦人の姿が稍やぎこちなくなつてゐる。殊に、晩年、相次いで種々なる不幸に遭遇した哥麿の描く美人畫が、甚しく脂氣を失つたことは當然であるとも云ひ得よう。其の外、尚ほ盛名を成した後の緩怠と、販元の強ふる濫作も、之れに與つて力があると思ふ。

哥麿時代の江戸の代表的美人は、淺草矢大臣門前の茶屋、難

[illegible]た。彼女等は獨り吉原ばかりでなく、谷[illegible]娘と謳つた。是れ等の美人のゐる茶店、殊に難波屋は、[illegible]評判の図一く、容易に其の顔もおがめぬほどの繁昌であつて、こゝに休む者は、いづれも二百文以上の茶代を置き、中には南鐐を投げ出すものもあつたと謳されてゐる。其の外、美人の譽れの高かつたものには、富本豐ひな、菊本屋おせん、本挽町新屋敷の小伊勢屋おちゑなどが居た。遊女では玉屋のまき絹、兵庫屋の花妻、松葉屋の喜瀬川、丁字屋の雛鶴、扇屋の瀧川、若那屋の若菜など、多くの美人が彼れの筆に寫された。彼れはこれ等の中の五人若しくは六人を選んで、「高名美人六家撰」とか「五美人愛敬競」とか云ふ「大首」のシリーズを出した。又、三美人を一枚に描いて、美しい雲母摺を製作した。本年四月の御成會の賣立に、おきたとお久とが首つ引をしてゐるうしろに、雛鶴と花扇かと思はるゝ遊女が「絕」「美」と書いた扇子をひろげて、それぐゝ應援をしてゐる横繪の大錦があつたが、かなりに「破れ」の多いものであつたが爲めに入札を見合せた。圖柄も餘り私の趣味に適するものではなかつた。

恰度、「當代女畫名人、此の上なし」と稱揚せられた東錦繪最盛期を飾る随一人、喜多川哥麿の中に頽廢的末期的なもの、存[illegible]一として[illegible]中に[illegible]一枚もないが、[illegible]中の[illegible]稱せられてゐる「北枕」中に存するあの[illegible]に喰ひ付いてゐる凌慘たる一枚に、後世への[illegible]したやうに考へられる。其の他、春雙紙風に仕立てられてゐるもの、中にも、往々殘忍な畫面を見出すことがある。或ひは、此處に、彼れの先輩、北尾重政の影響があつたかも知れぬ。重政の墨摺春本の中には、一冊中に一箇所位、殘忍な畫面が挿入せられてゐるものが多い。固より是れ等のものよりも更に古い春畫淫書にも變態的な局面を描いたものが存しないではないが、私は其の中に前記の哥麿は勿論、重政にすら比肩す可き迫眞力を有するものを未だ見たことがない。

六

邦枝完二氏の書いた小説「東洲齋寫樂」を讀むと、豐仙堂丸屋小兵衛の見世株を買つて、吉原の五十間道から、日本橋通油町へ乘り出した地本問屋、耕書堂蔦屋重三郎の客間で、阿波の田舍繪師東洲齋寫樂が、先客の山東京傳（浮世繪師としては北尾

政演）から「お前さんのやうな、かういふ筆の固い人は、何をおいても、二三年の間、みつちりいゝ枕繪を描いて叩き込むのが、一番の筆ならしになりますぜ」と教へられ、主人の蔦重からは、「哥麿さんでも、師長さんでも、あの武家出の細田榮之先生までが、みんな筆ならしには、枕繪をお描きなさるのでございますからなア」と云はれて、大に憤慨し、「私は眞晝眞中に、天道の下にあつても、心に恥ぢずに描ける繪を描いて行きたいが心願でござる」と鋭く言ひ放つ所がある。又、其の後同じ蔦重の茶室で、京傳が哥麿と、浮世繪師が春畫を描くの是非を論じ合ふ所がある。「繪師が繪を描く眞髓は、人を描くところにありやせう。その人を描く極致といへば、取りも直さず、枕繪の美にあるのが至當でげせう。これを恥と思ふやうな人達は、先づ借子を裝つて、己れを僞つてゐるといふより外はありやせん」と云ふのが、現代の浮世繪學者と同じやうな哥麿の説で、「繪畫は公明の美、その巧拙は別として、千萬人の前に出しても、愧づるところのない物でなければなりますまい。それを何ぞや、閨中の秘を寫して、恰も當然のことの如くにいはれるとは……」と云ふのが京傳の主張である。

京傳哥麿等が、果して春畫を以つて、裸體畫の西洋畫に於けるが如く、人物畫の入門にして、又、其の極致であると考へたか、果して京傳が之れを憎惡し、唾棄したか如何かは、固より知ることを得ないが、私は不思議と、此の偉大にして怪異なる役者似顔繪の作者東洲齋の描いた女、否、女形の姿態に、何ともいへぬ美しさを發見するのである。

藤懸靜也氏は「元來役者繪を描いたものは、誰も役者に同情を表して、頗る美しく描くのであるが、寫樂のは批評的であり、且つ皮肉で、然も其の短所缺點を、誇張的に表現するのであるから、役者の似顔は、觀客が見物席から見た役者の顔ではない。役者に近づいて、ちつと見つめて寫した役者繪である。そこに役者の個性が寫されるのであるが、いやな癖が赤裸々にかゝれる、それが寫樂の興味の一部である」と論じて居られる。然し寫樂の描いた役者の顔は、實に阿波藩お抱の能役者である。彼れが、能面の奇怪な魅力からヒントを得て描いたようなグロテスクなものに偏つてはゐるが、女の姿になると、到底、役者に接近して、其の舞臺上の扮裝の内部に存する個性を赤裸々に描寫せるものとは考へられぬほどの美しさを示してゐる。少なくとも彼れは、女の衣裳裏に存してゐる男役者の體を無殘に剔出することをしてはゐない。之れには是非とも彼れの描いた女形の全身を見たければならぬのであるが、「大首」物の小佐川常世、岩井半四郎、松本米三郎、中山富三郎、瀬川富三郎、佐野川市

松[illegible]大錦二人立の市川高麗藏と相合傘の中山富三郎の足、押絵の松本米三郎の足は如何か。春信、清長、哥麿の描く女の足よりも、却つて美しい足である。女形俳優が、全然女と等しい、若しくは女よりも美しい姿勢を現すことが出來るとしても、手足だけは男のものとして露出する。あの優にやさしい現代の市川松蔦の、あの大きな手を見て下さい。

こゝには私藏の雲母摺大錦、澤村宗十郎と瀬川菊之丞（仙臺高尾に扮するものか）の二人立を第六圖として載せる。昨年末、清水源泉堂の主人から、同じく寫樂の男女二人立の雲母摺の購入を勸められた。圖中、半四郎のお染と推定さるる女形の描き出す曲線が如何にも美しいので欲しくは[illegible]るうちに、何方へか消へてしまつた。



第六圖

七

美人畫論中に於いて、寫樂を論ずるのは、固より脱線である。然らば本道に歸つて、哥麿以後に於ける美人畫家として擧げらる可きものは誰々であるか。私は英山、英泉、國貞の三人を擧げることが至當であると思ふ。

哥麿の歿後、其の遺跡を傳へて、稍や之れよりは水準低きも、兎に角、優秀なる美人畫を多く殘したものは造花屋の菊川英山である。美人版畫の蒐集も、英山あたりになると大部、樂である。今の所、價格に比して、一番多くの

滿足を私に與へて與れるものは英山である。此の人の畫では、意地も張もない、唯だあどけない感じのする美人を描いてゐるものがいゝ。藤懸氏の著書に據ると、英山の美人畫は、手首の描寫が拙であると一般に言はれてゐるさうであるが、其の手首も私には、さほど苦にならない。

一時、英山の實父菊川英二の家に寄寓して居つた一代の奇行家に溪齋英泉がある。彼れは一時若竹屋理助と號して、自ら根津で女郎屋を經營して居つたほどで、好んで娼妓の姿を描いた。尾崎久彌氏は、英泉と春信、清長、哥麿と併稱して、浮世繪の四大美人畫家となして居られるが、之れには無論反對者が多からう。彼れの美人畫では「大首」ものに一番いゝものがあると考へる。彼れは南傳馬町三丁目の坂本屋から賣り出した「仙女香」といふ白粉の爲めに屢々御用をつとめてゐるが、其の一とも見る可き「美艶仙女香」と題する大首美人のシリーズ中にも傑作がある。全身畫になると、妙に肩幅の廣い、背の低い女が多い。百姓女か、下女あがりが花街に賣られて、すつかり、垢拔けがしたと云ふ感じである。四十餘年の長い作畫期間を通じて、彼れの描きなぐつた無數の美人畫は、今日も猶ほ多數版畫屋の店先きに曝されてゐる。概して値段は非常に安い。彼れの錦繪では、風景畫の方に、却つて値の高いものがある。吉川修氏は英泉に就いて次の如くに説いて居られる。「生れながらにして高な人格者でなかつた英泉、俗惡な江戸ッ子の血を受けて來た英泉、何等の見識も信仰をも持たなかつた英泉は餘りに人間臭かつた、餘りに弱蟲でデカダンであつた。彼れは假令、旅行しても、かの廣重の如くに、自然に恍惚として見入つて、詩趣湧き來るのに促されて、それをさながらに繪畫化したのとは違ひ、どこにも／＼人工的な、人間的な、現實的な、肉的な、いはゞ俗な心を以つて、眺めないわけにはいかなかつた。嚴密な意味では、彼れは旅行の趣味を解してゐなかつたであらう。つまり、旅行したのは、畢竟、是非もない流浪の結果であつたに過ぎない。だから彼れの畫いた「嚴島」とか、「南部富士」とか、「八丈富士」とかは殆んど嘘をかいてゐるのだ。彼れの有名な「木曾街道」は、廣重と共作してゐるのであるが、廣重のやうに、自然の美妙さに打たれて、其のリズムを摑んだのではなく、寧ろ專ら人間臭味を描き出してゐる。彼れは酒が飲みたいばかりに、女と遊びたいばかりに、手當り次第にかきなぐつたのだ。そこに藝術的良心なんぞは微塵もない」云々。尚ほ同氏のお説に據れば、英泉の最も得意とする畫題は、女の取り亂した所にあると云ふことである。曰く、「彼れの特色はばらけんの女が取り亂してゐる所である。然もそれが肉感的なればなるほど熱を帶び、

門流長く浮世繪界に榮えた歌川派の美人畫家としては、何と云つても五渡亭國貞を擧げなければなるまい。

此の流派の始祖と稱せられてゐる但馬屋の庄二郎改め新右衞門、卽ち畫家としての歌川豊春は錦繪を吾人に殘すことが多くない。而して彼れの版畫界に殘した傑業は、浮繪の製作にあると見る可きであらう。其の門人、初代豊國は無論、美人版畫にも美しいものを殘してはゐるが、彼れの最も傑出した作品は寧ろ役者繪の方にあらう。彼れと同門の豊廣の方が却つて美人畫家と稱せらるゝに適する。これ等兩畫工の美人風俗畫では、三枚續に圖柄の面白いものがある。が然し、三枚完全に揃つた保存のいゝ品を手に入れることは、さまで容易ではない。中でも豊廣の方が、品不足である。私は今のところ、保存の極めていゝ豊廣の三枚續を唯だ二組所有してゐるだけである。昨年四月、京都市外、伏見中書島の依水閣で催された入澤家所藏品入札の際には、豊國豊廣の三枚續が五組も出て、私の注意を惹いた。豊國の向島、座敷狂言猿廻し、美人の筍掘(兩畫十二候五月)、豊廣の初午(兩畫十二候二月)、四條河原夕涼(同六月)などが是[illegible]になまのいたので入手することが[illegible]

藤懸氏は豊國の畫技に就いて左の如く述べて居られる。「兩久保專光寺の土と化してゐる豊廣は、此の如き時代に墮落しなかつたであらう。豊廣は生時に於いては、其の名聲は豊國に及ばなかつたけれども、其の技術が劣つて居たといふのではない。豊廣の美人畫には、肉筆版畫の兩方面に見るべきものが少くない。其の美人はどこまでも、しとやかな、相貌のやゝ長く、身の長け稍や高く、すらりとした形である。描寫も流麗で、拮据な所はない。美人畫としては、其のあらはし方は巧なものといはなければならぬ。豊國も、若い内は、美人畫によいものがあつたけれども、後には固くなつて面白くない。寧ろ豊廣の方が、美人畫に於いては優れて居るといふべきである。(中略)。豊國と共同で作つた兩畫十二候の如きは、豊廣の作の方に優れたものがあり、豊國が豊廣の風に化せられたとさへいはれて居る位である」云々。

初代豊國の養子に歸つた豊重改め二代豊國と云ふ繪師は久しく閑却せられてゐたが、近年に至つて、其の生涯と作品とが、[illegible]戸吉三氏其の他の人々によつて精細に研究せられた。彼れは極

めて働きのある畫面の美人畫を幾枚か吾人に殘してゐる。

然しながら、歌川派の浮世繪師中に在つて、「前に古人なく、後に來者なき浮世繪の巨擘」と稱せられ、名聲一代を壓し、其の作品の賣れ行き、飛ぶが如くなりしものは、五渡亭國貞である。第七圖として掲ぐる所のものは、私の所藏する彼れの肉筆、絹本極彩色の密畫である。落款は「英一蜨國貞」となつてゐる。



第七圖

假名垣魯文の誌す所に從へば、彼れは一蝶、嵩谷の畫風を慕ひ天保四年、嵩谷の畫裔、嵩菱（或ひは曰く、英一珪）の門に入つて英一蜨と別號したと云ふことである。魯文翁は「此の頃より、雷名都鄙遠近に普く、牧童馬夫に至るまで、浮世繪とし言へば、國貞に限れりと思ひ、斗筲の畫者を五指に數へず。故に錦繪合卷の版元、門下に服從して、筆蹟をこふもの群を爲せり」と附言してゐる。

國貞は、精力絶倫、無限の製作力を有し、文化元年、十九の頃から元治元年十二月十五日、七十九歳で長逝するまで、描いて描いて描き捲つた。然しながら、彼れの畫は、「天保の末より稍や衰へたり」と稱せられ、又、橋口五葉氏は『浮世風俗大和繪』中に、彼れの『時世江戸鹿子』中の「茅場町旅宿」を掲げて、之れを文化十一年の作となし、（牛山充氏の國貞風俗百選畫集には、同圖は、文政四五年頃のものと推定せられてゐる。新橋の平六堂主佐野純氏の考證に基けるものか）、「本圖の如き作風を以つて發達したならば、優れた作品を多く遺したであらうと思はれるけれども、彼れは文政時代となつては、描線の取扱方に調和を破るやうな、技術上甚だ荒んだ作風に陷り、色彩の配色も面白くない作風となつて居る。故に文政の半以後の彼れの作品に

は、[illegible]全く[illegible]期間五十七年以上に亘り、其の多數の錦繪を遺したけれど、其の作品の觀る可きものは、婦女の風俗畫では、文化八年頃より文政四、五年頃に亘る十二年間位の間の作品に僅かに見出されるのである」と云つて居られる。

而して晩近、浮世繪版畫の蒐集熱昂まるに及んでは、彼れの作品の如きは、最も低級、卑俗、到底顧みるの價値なきものとせられた。然るに初期及び最盛期の優秀なる版畫を蒐集するの困難、益々大と爲るに連れて、末期の其れに瞩目する者次第に多きを加へ、版畫商人中にも、其の「値上り」を信ずる強氣の者出で、一昨年の頃は「五渡亭」の大暴騰を來したのである。昭和三年十月の尙美社の賣立に於ける「當世美人合」中の「身じまい强者」と題するものや、昭和四年一月の清水源泉堂の入札に於ける「美女鏡」中の「年増」などは、商賈人をすら驚かす程の高値で落札した。「五渡亭、哥麿の蹤を摩す」と叫ぶ聲が版畫市場に響き渡つた。然しながら、斯くの如き大暴騰は長く繼續するを得ずして近頃の國貞市場は大分沈靜に歸したようである。

國貞の美人畫には、如何にも、革命前の社會を思はせるような、爛熟した末期的世相が寫し出されてゐる。彼れの美人畫には、幽婉、典雅とか、健全、整備とか云ふやうな趣は、最早、[illegible]表はれてゐる。[illegible]一點に[illegible]色の白い、髮の黑い、[illegible]でも、見かけはきやしやな[illegible]黑繻子と緋鹿の子の腹合せ帶、緋縮緬の蹴出しを洩らし、膝白く、天鵞絨の鼻緒を嵌けた塗木履を穿いた江戸娘の夏姿は、春歌や哥麿とは、また別種の風情がある」と讃美して居られる。

然し、淫靡な社會相を描くに努めた國貞の美人畫は、結局、春畫への道程に過ぎないものゝように思はれる。彼れに於いてこそ、「浮世繪の極致は春畫なり」と云ふ定則が眞なるを見るやう考へられる。彼れの製作した無數の人物畫は、いづれも皆、閨中の祕畫を描くが爲めの習作であつたとさへ云へよう。彼れの藝術は、纎細、精緻なる彫工及び摺師の技術と相俟つて、艶麗無比なる祕畫、所謂「三源氏」を世に殘してゐる。

國貞と同門の高足所謂「玄冶店派」の頭目、一勇齋國芳に至つては、其の選べる畫題愈々廣く、劇的場面の上に描き出さるゝ美人畫には、低劣ながら、一種の興味をそゝらるゝものが決して尠くはない。人とも見え、狐とも見ゆる幻の如き葛の葉を描いた「木曾街道六十九次」の内の「妻籠」、白旗を口にくはへて、拔手を切る小菊を描いた同じ揃物中の「大津」、凄艶なる船上の清玄尼を描いた「源氏雲浮世の畫合」中の「篝火」など、其れぐ

に面白い。これ等のものになると、僅か、一枚、一圓か五十錢で樂めるのであるから一層都合がいゝ。國芳の錦繪で市場最も高價を呼ぶものは風景畫である。

當時の畫家は、恰も今日の畫家が展覽會に出品するような態度で、神社佛閣の掛額を描いたのであるが、國芳も安政二年三月、淺草觀音堂の繪額として、一つ家の傳説を描いて獻納した。此の掛額が非常な評判と爲つたが爲めに、拔目のない版元は、相次いで彼れに幾多の「一ツ家之圖」を製作させた。これがもとになつて、一ツ家は又、活人形に造られて、見世物となり、更らに默阿彌によつて劇化せられた。これ等の活人形や、芝居は更らに又、畫家の題材と爲つた。而して淺茅原の一ツ家は、軈がて安達原の黑塚とごつちやに爲つた。此の一つ家の傳説と國芳の繪額に就いては、寸錦亭主人の考證がある。國芳が一つ家を題材とする錦繪を幾種描いたかは不明であるが、其の內、娘を湯卷一枚の丸裸にし、青竹に縛りつけて、老婆が其の腹を裂かうとしてゐるものだけでも、私の貧しい所藏中に三種ある。この畫題は國芳以後の浮世繪師によつても亦、取り上げられた。これ等のものゝ中で最も殘忍を極めたものは、國芳の弟子大蘇芳年の縱二枚「安達原」の圖である。

豐廣門下から出た大風景畫家の安藤廣重の美人畫では、月に照された海濱や、雪の池畔を背景としたものがいゝ。然し、これ等のものゝ中にも、風景と美人とが著しく調和を缺いてゐるものもないではない。彼れは固より美人畫家として論ぜらる可きものではあるまい。

其の廣重は安政五年九月六日に、國芳は文久元年三月五日に、國貞の二代豐國は前述の如く元治元年に、相次いで死んだ。浮世繪界は甚しく寂寥を感じた。慶應二年に、幕府が、佛國博覽會に出品す可き浮世繪畫帖を、大勢の浮世繪師に、金四百兩で請負はせた時には、芳艷、芳幾、芳員、芳峰、芳虎、國輝、國周、芳年、國貞(二代)、貞秀、文祥が其の任に當つた。芳艷には、姬、武家娘、江戶遊女、女音曲師匠、田舍娘、町家下女、晒女、芳幾には禿、汐汲の海女、後室、武家妾、町家妾と云ふ風に、其れ〴〵擔任を定められた。如何にも淋しい顏ぶれである。

德川幕府の覆滅は最早、旦夕に迫つてゐた。大江戶泰平の春に培はれた浮世繪は已に凋落の秋に逢遭して、幾輪かの殘んの花も地に委した。浮世繪の世界は不氣味な闇に鎖された。其の闇を縫ふて濃厚な繪具で毒々しく塗り上げられた殘虐、醜怪、猥雜な版畫が橫行した。美人繪は唯だ唯だ劣情を徵發するの具と墮落し去つた。

私は、尙ほ明治維新後の美人畫に就いても、談りたいのであるが、餘り長くなつては御迷惑と思ふので、玆で擱筆することにする。私も少しく草臥れた。

本邦に於ける消費組合の展望

高木次郎

世界恐慌——消費組合の現勢——改良主義理論の破産——産業組合並に消費組合連合會——消費組合全國結成準備會——關東消費組合聯盟——左翼の任務——結語

（一）

『經濟恐慌の暴風は全資本主義世界市場を吹き捲つてゐる。アメリカは一九二九年高景氣の先端を行つたアメリカ合衆國を始め全資本主義世界——ソヴエート同盟を除いた全世界——は帝國主義列強も植民地半植民地も、ヨーロッパ、アジア、南北アメリカ、濠洲、アフリカ、悉く經濟恐慌の眞只中に落ち込んでゐる。』

『大衆失業の洪水は全世界を覆ひ、資本家の×××××は益々強烈となつてゐる。強力な獨占組織は中小資本を犠牲として増大しつゝある。（各國破産の激増）全世界の農民は農業恐慌の結果大衆的に破滅してゐる。國内××は××××し、ストライキは増加しまた××××を遂げる。各國の政府及びブルジョア政黨には動搖と危機とがはらまれてゐる。商品の強行的輸出による市場爭奪鬪爭は尖鋭化する。資本輸出の鬪爭は激化する。帝國主義列強の植民地（以下五十字削除）』（大塚金之助、改造八月號）

國内に於ては階級鬪爭の未曾有の激化と深化、帝國主義列強間の軋轢の増大（帝國主義戰爭の切迫）、帝國主義列強の反ソヴエート攻撃のための連合、帝國主義列強の半植民地植民地との鬪爭殊に支那問題の××的展開。

此等の要素は世界經濟恐慌の波浪の間に、[illegible] のたい希望た[illegible]吾々は資本主義の沒落期に直面してゐる。資本主義的生産様式の範圍の擴大によつて恐慌を上向線に添ふて克服し得る時代、そんな時代はもう過ぎ去つたのだ！」（ヴアルガ年報 第八卷）

かくの如く切迫した狀勢を前にして、國際協同組合聯盟の改良主義的幹部を始め、その流れを汲む日本の本位田、那須、千石から、松岡、廣田、木立等に至るまでの改良主義的協同組合理論家乃至幹部は何を云ひ、何を爲しつゝあるか？

（二）

國際消費組合デーに發表した國際協同組合聯盟の改良主義幹部の宣言を見やう。昨年は「正義、平等、友愛の原則の上に新文明を樹てる」といひ、「相互的基礎の上に公正なる價格に於て最も良質の財貨の生産分配を組織化し、

ること『自由公正なる民主性による企業の指揮監督』等を書き列べ、本年度の宣言に於ては『組合員並に事業上の着實なる進展、民衆の理解と努力の生長、國際的連帶の深化此等は現在の社會組織の害惡を和げつゝある』といふてゐる。彼等は日本に於ける消費組合聯合會の紳士達と共に、醇化せる社會的諸關係及び協同組合の新たな任務、又之れに對する新しい方向を全く理解し得ないし、理解しやうとも欲しない。そして百年一日の如く彼等の神聖なる原則(實はロッチデールの骨董)をかついでゐる。

プロレタリア××の助けなくして社會主義へ除々に『生長して入り込む』理論をふりまき政治的中立主義を唱へることによつて自己の帝國主義ブルジョアジーの手先であることを隱蔽せんとしてゐるものに帝大教授、産業組合中央會參事本位田教授がある。その確信ある著書『協同組合論』に於て『協同組合運動は……その周圍にある資本主義經濟と一定の聯絡を保ち乍ら次第に之を變化する方法を持つてゐる。』といふてゐる。

私は之等の一カラゲの理論を破碎する頁を與へられてゐない。然し此等の輝ける讚美者が、一九三〇年世界恐慌の前に如何にタワイもなく破產し、無力であるかを事實によつて示したい。

コミンテルン第六回大會の××××インターナショナル綱領第六章第一節××主義に敵對する、勞働者階級内の諸イデオロギー中「理論の領域に於ては」の一節にシャルル・ジード。トトミアンク一派の協同組合社會主義を構成社會主義の特種な形と規定し、構成的社會主義(マクドナルド一派、フエビアンの繼承者)はソヴエート同盟のプロレタリアート××の決定的な對立者であり、積極的な仇敵であると言ふている。一トカラゲの改良主義理論とは次のものを指す。本位田『協同組合論』『農村と協同組合』『大學講義プリント』外論文數篇。千石『産業組合主義論』『産業組合の原理、之に對する那須皓の批判』『産業組合の本質と將來の社會』(産業組合四年六月號)緒方『消費組合原理』(産業組合原理)松岡駒吉『勞働組合論』。總同盟パンフ安部磯雄『消費組合の話』

すべての國に於て金融資本は流通行程へ、×××侵出をしてゐる。強大な商業コンツエルンの數は増加し、從前のコンツエルンも亦より強力なものとなり、その發展のテンポは消費組合のそれを遙に凌駕してゐる。連鎖店の發達、通信販賣網の擴大、公私設市場の増加も亦消費組合の成長を妨げつゝある。二三の例を擧げやう。

消費組合の祖國といふ英國では、強大な商業コンツェルンの成立期にある。(一九二八年)之等のコンツェルンは各業の商業部門に獨占の魔手を擴げんとしてゐる。既に冷肉の販賣は二千六百の販賣店を持つ一會社に、魚肉業は約一千の販賣店を持つリーパー會社に、牛乳は二ケの大會社の合併の議が進行中でありリプトン商業に於ても亦同傾向を見る。

フランスでは主要小賣商品の全部は多數の廣汎な支店網を有する八十の會社によつて支配されてゐる。ドイツでもティートツ、カルシュタット等の主要百貨店コンツエルンが益々強大な突進力を以つて勞働者區域に侵入し、一九二八年には消費組合よりも急激な發展を示した。その他スイス、チエッコ・スロバキア

[illegible]である。

本邦に於けるデパート其他と消費組合との事業上の數字的對比をする準備をもたぬ。次に一二の資料を書きつける。(A)デパートの特價販賣、及米、木炭等の日用品取扱と送届け、大島共働社と錦糸堀白木屋、中央消線諸組合と新宿の諸デパート。當事者はデパートに押されるといふてゐる。(B)柳島消費組合は市場及附近商人の濫賣投賣に惱まされ、東京共働社は砲兵工廠内購買部と飯田橋市場とを競爭者に持つ。(C)東京共働社は小石川の本部より山手の中產階級豪德寺支部の方が發展のテンポが早い。(D)小賣商の最近の急激な沒落の傾向。資本主義機制の內にあつては消費組合經營も小賣商と同じき制約を受ける。最近小賣商の破產、窮乏。資金難。對デパート反抗運動。その數の年々の減少(東京商工會議所調査)(E)組合員の增減!工場消費組合は首切りで減る傾向にある、橫濱工信(ドック)相模共働社(紡織)南葛、モスリン外)田島

[illegible](F)[illegible]向あり。

次にかゝる大商業會社の發展と比較して、主要國に於ける消費組合の賣上高增加は如何であるかを見やう。

英國に於ては、卸賣組合の賣上高增加率は一九二七年の一五パーセントに比し、二八年には僅かに〇・一七パーセントに過ぎない。然るに消費組合の賣上增加率は約六パーセントである。併しこの增加は主として南部地方に見られるものである。この地方には一〇パーセントに上る增加を示した組合もある。之に反し北部工業地方では殆んど停滯若しくは減退してゐる。かくて消費組合は英國勞働者の生活水準の低下と失業群の漫性的增加とを反映するのである。

佛國では卸賣協會一二パーセント、消費組合二・八パーセントの賣上增加を示してゐる。が他方小賣物價は一五パーセント騰貴してゐるから右の賣上增加も物價騰貴と步調をそろえていたい。

[illegible]合は五・五パーセントで、[illegible]商品の物價は平均一五パーセント騰貴してゐる。チェコ消費組合に於ても事情はあまり良好でないことが察せられる。かくて上述の三ケ國は協同組合運動の上向的發展を示すものの中には完全に入らない。

唯ドイツのみは一千有餘の消費組合と二八〇萬の消費組合員とを擁して、卸賣りに於て一九・一二パーセント、小賣に於て一四パーセントの增加を誇ることが出來る。併しこの增加も絕對的であるに止り、巨大な營利商店の賣上增加と步調を揃えてはいない。ティーツ及カルシュタットは小賣に於て同年中實に二〇から二三・五パーセントの增加率を示した。かくして全小賣業中消費組合の手を經る部分は同年中に三・九パーセントから三・六パーセントに減じ之を戰前の消費組合の狀態に比較すると僅かに〇・六パーセントの增加にすぎない。他方ドイツの全旅業者の全小賣販賣への參加部分は一九一四－一九二八年の期間に一二・五パーセントから一五パーセントに增加し

た。實に倍加したのである。(之等の數字はユリウス・ヒルシユ教授の統計からとつた。)

最後に多くの國々における組合員の不斷の減少若しくは停滯の現象である。例へば一九二七年ドイツでは新加入者二五三、六二三に對し五〇七、四四六の脱退と除名、チエッコ・スロバキアでは一〇、〇〇〇の組合員喪失、スエーデン、ノルエー、スイスでは停滯等々。

資本主義諸國の消費組合は勞働者階級の最も搾取されてゐる層に對する索引力を益々失ひつゝある。協同組合員の社會的構成に關する統計的報告によれば、プロレタリア的部分は例へばドイツ消費組合中央聯盟では一九一四年に比し一二パーセント、スエーデンでは一一・四パーセントだけ低下してゐる。

組合員のかゝる社會的交代は全く改良主義幹部の意識的努力に基くものである。菜葉服の代りに購買力ある組合員を勞働貴族と背廣服から獲やうとするのである。商品の生産分配に關してブルジョアジーとの妥協を旨とし株式會社的經營第一主義は、協同組合員の社會的基礎を巧妙に入れ替えてゐるのである。ドイツ、スエーデン、ラトヴイア等消費組合員の社會的構成に關する統計を見ればプロレタリア組合員が斷えず排除せられ、プチブル分子が之れに置き替へられつゝあるのを見る。消費組合の全組合員に對する勞働者農民の階級分子の割合は戰後不斷に減少しつゝある。

その他英、佛、部分的にはチエッコ・スロバキアに於ても新たな消費組合賣店は勞働者街ではなく、生活の安定せるプチ・ブルジョアの住宅地に新設せられつゝあるのを見る。

神戸消費組合が、勞働者消費組合として生れたが、かくの如き社會的交代によつて今は小市民組合に變質した。昨秋、關東消費組合聯盟から脱退した東京共働社、江東消費組合北豐島協同組合、西多摩共働社、大崎消費組合等は、全くその幹部が階級的消費組合に堪たまれなくなつたからであつた。

斯くの如く何れの國に於ても新しい形態の卸賣企業が消費組合を相對的に排除しつゝある現實を見る。この種の企業は銀行の援助の下に到る所で、消費組合と競爭しつつある。あらゆる國の廣汎なる勞働人口層の購買力激減は消費者大衆獲得のため闘爭に著しい困難を加へる。かくて消費組合の競爭者は、その發展の初期に於けるが如く個々の小賣業者ではなくして、巨大な金融資本家である。個々の小賣業者と競爭してゐる間こそ消費組合は購買活動の集中化、經營の改良等によつて常に優越的立場にあつた。が金融資本と對抗する場合になると商業機關の利用に於ても劣等者の地位に下らざるを得なくなる。

改良主義者が好んでいふ所の自己生産も、かなり急速に發展していても、資本家的供給者から協同組合を解放すること、從つて消費者大衆の解放を導くことは出來ない。その理由は第一に、あらゆる資本主義諸國の協同組合の自己生産が總生産中言ふに足りぬ小部分を占めてゐるからであり、第二に原料と生産手段とが資本家の掌中にあるからである。

かゝる優勢なる競爭者に對しては消費組合の持つ武器の用を爲さないことは明である。必然的に政治的××を擴り上げなければならない。——卽ち可及的に廣大なる勞働者農民層を組織的に獲得すること、及びそれ等の大衆を獨占資本とその××に對する闘爭にまで訓練することである。

然し本位田教授を始め資本主義國の改良主

[illegible]この點である。[illegible]し一般、組合員の[illegible]することになる。先にのべた對東京[illegible]組合聯盟からの脱退[illegible]此[illegible]組合の[illegible]結成したが）深川に[illegible]ぬられ[illegible]組合と握手し、同時に同所に生れたが、深川[illegible]その他工場勞働者によつて作られ[illegible]組合の設立、當然[illegible]勞働者の[illegible]。同東消費組合聯盟がこの[illegible]勞働者消費組合と相結ばんとしてゐるのは[illegible]興味ある事實である。

（此の節の參考[illegible]イムプレコール等々—プロレタリア科學七月號）

（三）

その數一萬四千を數へ、全國[illegible]戸數の三割五分を組織してゐる天降産業組合は明治三十三年、法律先づ生れ、大臣、縣知事、郡長、村長と天降り的に人民をして組合を競ひ作らしめたものである。此は明治の官僚が中産階級特に中農の沒落を防ぐためにドイツから移[illegible]に、之を[illegible]決したのであつた。[illegible]今[illegible]し。[illegible]その階級的[illegible]、ブルジョア[illegible]である。この事を更に詳しく見やう。

我々は國家機構との結付きをA、法律的にB、具體的事實の上に、C、階級構成の上に見ることが出來る。

法律的には一、産業組合の設立は監督官廳（地方長官）の許可を要し、二、地方長官は定款變更、合併、解散等の認可を行ふ權限を持つてゐる。三、其他監督官廳は[illegible]監督上必[illegible]

[illegible]かつてゐる。[illegible]的[illegible]力を[illegible]されてゐるのではないが、ブルジョアの[illegible]であり、[illegible]に[illegible]政的に）、ブルジョア地主の政策の[illegible]たる遂行者となつてゐる。

第一は産業組合中央會である。此は[illegible]組合の監督、指[illegible]、官[illegible]の中央機關であり、その[illegible]は[illegible]村[illegible]であり、理事[illegible]に何れも[illegible]ブル[illegible]ア[illegible]地

主である。その事業の大半は農林省の補助によつて活動してゐる。

中央金庫は産業組合の金融上の中央機關であるが、その資金の半額千五百萬圓は政府の十五ヶ年無利子の出資によるものである。これによつて政府は中央金庫役員の任命權を一手に握つてゐる。全購聯、信用組合聯合會と共に、産業組合の全組織を貫く絲をたぐつて、溯れば金融資本獨裁の宮殿に達する。關東消費組合聯盟は勞働組合、農民組合と提携して中央會、中央金庫役員の徹底的公選を要求し戰ひつゝある。

最後に産業組合大會である。その本質並に役割は毎年關東消費組合聯盟の闘爭〔産業組合大會組織改造の要求〕中の規定に譲り、特に本年度大會に於て現はれた一事實を指摘するに止めたい。中央會提案にかゝる産業組合による肥料、米穀、日用品の決議の如きは、中心問題は肥料配給統制であり、之は今臨時議**會の農林省の肥料配給統制案と相應ずるものである。肥料の取引系統と、その取扱分量の統計とが示す如く、かゝる決議が三井、三菱の金融資本の政策であることは明白である。**

政府が全購聯に肥料工場を作らしめつゝあり、やがて、官吏の古手を任命し、その結び付きは一層緊密になるであらう。かくして全購聯がカナダの小麥販賣協同組合連合と全く同じく、金融資本の一機關に變質し去る日は遠くはあるまい。

また産業組合は戰時に於て食糧管制の一機關となるであらう。

産業組合員の階級構成については、ブルジヨア統計からは得べくもない。地方組合を觀察して歴史的に明かなる如く反動的な地主小資本家、又はその代辯者によつて完全に指導せられ、この事實は農林省自らが、イヤイヤながら承認してゐる。組合員の構成も、村内の地主の大部分と、中農の大部分と、貧農小作人の一部とを以つて組織されてゐる。

極めて限られたる紙面ではあるが各種組合のブルジヨア的任務を見なければならぬ。このことは本位田教授等の理論が農業恐慌の前**に如何に僞瞞的幻想的であり、ブルジヨア的であるかをバクロしたいからである。**

信用組合は數的に最も多く且つ農村に最も廣汎にひろがつてゐるものである。資金は地主富農へ集中固定してゐる。小作人が借入れた場合は、彼を「借金奴隷」として土地に縛りつける。帝國農會の農家負債に關する調査(四年六月末現在)にて小農貧農の金融は、信用組合によるよりも、頼母子講その他によつてゐることを明示してゐる。

販賣組合は農産物の商品化のための重要なる一機關である。此も亦農業倉庫と共に、貧農にとつては、有難迷惑のものであるのみならず、其に關連した出荷制度の如きは諸所の農民組合の(例へば千葉、宮城)一闘爭題目となつてゐるものである。本位田教授を初め以前の社會思想同人諸君は之に對して多くの希望(實は幻想)を持つてゐる。

購買組合は貧農的組織たり得る筈であり、また、さうであるかの如く裝つてゐるが、其は他の組合事業と兼營せられて居り、官僚的本質の故に貧農や農業勞働者には近づき得ない。またその事業も多く肥料や農具等の買入であつて、貧農に必要なる日用生活品の取扱は極めて少い。

利用組合は農村に於ては殆んど販賣組合の從屬物の如きものに轉化してゐる。

共に[illegible]ことに[illegible]農[illegible]されてゐる青年[illegible]不滿を感じ現代の[illegible]に動搖の始まつたことを見るやブルジョアジーは此をファシズムの陣營に導いて行かんとする。現在長野(千名以上)福岡、靜岡、埼玉等にあり、益々發展せんとする形勢にある。

青年聯盟内の進歩的青年は農村の大衆的基本的組織たる左翼農民組合と結合し、その指導乃至影響の下に産業組合反對の闘爭を進めねばならぬ。(部分的には既に着手せられてゐる。)然しこの青年聯盟内の反對派運動は勞働組合に於けるが如く刷新運動とはなり得ないものである。何となれば階級構成が勞働者集團でなく、國家機構の一部なるが故である。反對運動はフラクション運動として闘はれるであらう。

對産業組合闘爭の基準は從來、社會民主々義政黨によつて或時は自主化(乘り取り)或時は民主化(割り込み)或時は廢止が唱へられて來た。然し今やプロレタリアートの方針は國家機構の一部たる天降り産業組合の[illegible]である[illegible]自主化[illegible]ての要求に[illegible]に[illegible]は新消費組合を作ることも、同時に[illegible]合を解體せしむることであつた。[illegible]にはその村の狀勢により自主化で行くか××になると云つてゐた。

(四)

[illegible]に少し許り勝れた消費組合聯合會の結成は、まだ一般の注意を引いてゐないが、プロレタリアートの注目すべき事件である。

東京共働社外の少數反動幹部は、多くの勞働者組合員を誘拐して、關東消費組合聯盟より脫退天降り的産業組合の陣列――バリケードの反對側――に移つたものである。その宣言、綱領、主張は何れも階級協調的であり改良主義的である。綱領は一、我等ハ消費組合民主的經營ノ徹底ヲ期ス。二、我等ハ消費組合ニ因ル新シキ生産分配組織ノ確立ヲ期ス。三、我等ハロッチデール主義消費組合ノ全國的組成ヲ期ス。主張は一、産業組合ノ徹底的自主化。二、共同作入ノ徹底。三、共同生産[illegible]、組[illegible]內に於ける[illegible]運動[illegible]此に多くの勞働者が[illegible]し、[illegible]め、その[illegible]やがて本位田派がたりに持つて行くであらう(その形勢は既に見えてゐる)

然し乍ら此等改良主義幹部の勞働者農民の闘爭からの逃避と背反(例へば同市大會に於ける[illegible]の否決、民政黨系消費組合との握手等)は益々尖銳化しつゝある無產階級な[illegible]を得ない。現に北關東協同組合內の勞働者による強力なる刷新同盟の結成あり、此は[illegible]に連合會加盟組合に波及せんとしつゝある。また連合會內の勞働者に階級性培養のために闘ふは、彼の任務である。

(五)

勞働者農民消費組合に於て、第一に擧げなければならぬものは本年の第[illegible]國際消費組合デー[illegible]して生れた消費組合[illegible]成準備會である。[illegible]此れに[illegible]

がされた階級鬪爭の激化に刺戟されて、全國結成運動が起つたものである限り、まだ充分の注目をされてゐないが如くであるが、最も長き展望を持つは當準備會である。また之を鬪ひ、育てるはプロレタリアート、農民の任務である。

全國結成準備會員には現在、北より數ふれば小樽、青森、黑石、弘前、八戸、秋田、豐里、川房、會津、上小農民、北都留、落合、甲府、關東消費組合聯盟、城北、南千住、北郊、淸水、高砂、因幡、朝鮮等があり、尙參加者には全農關係消費組合を始めとして、多くの數に上るものと見られてゐる。プロレタリア科學硏究所協同組合硏究會の調査に從へば關東消費組合聯盟の加盟組合二十一、その支持または關係組合三九、全農關係一九、その他單獨組合六〇とあり（總同盟系卽ち消費組合連合會系二一）全國結成の外幸なるを示すものである。

目下、全國結成運動に促されて消費組合の縣聯合會組織の持ち上つてゐる所三四ある。勞働組合、農民組合產業部と消費組合との組織上の關係を如何にすべきかゞ日程に上つて來た。この關係については次の二點を注意したい。（A）「勞働組合は協同組合のために、一切の販賣業務及その他の經濟的企てを放棄すべきである。協同組合は勞働組合の經濟的企業を自らの經營中に引き移すべきである。」（プロフインテルン第四回大會）『勞働組合は……協同組合の經濟的諸機能（協同組合的商業活働）を引受けてはならない。』（プロレタリア科學五月號一二五頁資料）次に農民組合と消費組合との關係如何は問題として提出するに止めたい。「現在の農民組合は自作農をも包含する廣汎な農民協會」（無產者新聞二〇八號—產勞時報四年九月號）として農民のあらゆる經濟的政治的問題をとり上げて戰ふ所の農民組合と消費組合との組織上乃至機能上の分化を、どんな關係でするかといふ問題である。

（二）消費組合の進展が××的勞働組合農民組合の擴大强化に資するやうな關係。勞農組合の鬪爭を外らすやうであつてはならぬ。

全國結成準備會員中、最大の關東消費組合聯盟について一言しやう。組織並に鬪爭に於て充分とは云ひ得ないが、最も長き經驗を持ち、相當大なる全國的影響力を持つてゐる。今春の東京市電のゼネストに對する應援活動は本邦の階級的消費組合にとつて劃期的事件であつた。總罷業の指令を見たる當夜直ちに爭議對策委員會を作り、全市に亙つて爭議團の糧食配給の全手段を講じ、鬪爭資金を全國の消費組合に求めた。糧食配給は爭議團側の消費組合との豫めの連絡が不十分だつたのと、團員宿舍の移動とで充分には行かなかつた。然し此と同樣に重要なのは爭議團員家族會を消費組合が組織し、家族の訪問をやつたこと。一職場、一工場內の鬪爭に、その圈外の多くの勞働者農民無產市民を、まき込み支持參加にまで持つて行つたこと。ブルジョア新聞の『市民の足をもぐ云々』の逆宣傳に抗してゼネストの側面援護を行つたこと、等々である。殊に應援基金募集に當つて無產市民組合が何れも好成績だつたのは、關東消費組合聯盟が一應、無產市民の組織に成功し、プロレタリアのヘゲモニーが農民や小市民に及んで行きつつあることを示すものである。此を消費組合連合會創立大會が爭議應援を否決し、勞働者農民の敵であることを大衆の前に自ら曝露したると對照すれば興味ある事件である。更に

[illegible]ゐ見得るのである。

本年のメーデーには關東消費組合聯盟は關東勞働組合會議に參加し、[illegible]、給水等か勞働組合會議メーデー闘爭の一部署として闘つたことは階級的消費組合の任務の一端であつたといひ得る。然し乍ら恐慌の深化と共に全國各地に指導を求めつゝあり、客觀的狀勢の極めて有利なるにも拘らず組織力の比較的弱き點、殊に市電爭議その他のカムパーニアに際して出て來るのは組織上の弱味——强固なる同盟體でない點である。之等の點は速に精力的に克服されねばならぬ。

（六）

『協同組合のどんな形態種類でもプロレタリアートの××的目的に役立つとは限らない。消費組合はこの目的に最も適し得る。だがそれらの間にもブルジョア的要素からなる所の多くの組合がある。かゝる協同組合は決して××的諸闘爭に於てプロレタリアートの味方に立たないであらう。之に對しては只都市及[illegible]）

[illegible]消費組合の設立促進の件を三度、上程した。勞働組合は存在共にこの設立を可決してゐる。

ウオイツキエウイツツは『×合××勞働組合運動の諸問題』（インター六月號）に於て下部機關（ストライキ指導部、行動委員會、工場委員會、工場代表者、××的代表者）の綱の組織と共に可能なるすべての合法性を利用することによつてカモフラージユや補助機關の役を勤めるべき一系列の無害な合法的團體（救援會、啓蒙的教育團體、スポーツ團體、消費組合等）を作ることは×××的組織の活動が有力な展開を遂げるための必要的前提であると云ふてゐる。また××靑年同盟の組織全般に對して靑年コミンテルンは工場及農村に於ける補助組織の創設發展を說いてゐる。（インター七月號）

然し乍ら何れの團體に於ても設立は可決されるが、その設立前に經營の一ツ一ツの具體的技術とその組織者に於てハタと行き詰つて[illegible]民組合の擴大强化のために闘ひ得るのである。（協同組合に於ける××主義者の任務——創設）

（七）

一九三〇年世界經濟恐慌の前に改良主義的協同組合理論はブルジョア經濟學と共に破産した。失業者の闘爭と結付いてプロレタリアの闘爭は益々强化擴大するであらう。日本の社會民主々義の社會的物質的根據は動搖し失はれつゝある。（産勞時報四年十一月號）

産業組合の千石、木位田から連合會の岡田、木立に至るまで、安部、大山から××派の片淵南一派に至るまでの××××は時を得顏に躍り狂つてゐる。然しながらプロレタリアートは此等を破碎しつゝ前進するであらう。消費組合に於てもその部署につき戰ひ進まねばならぬ。（五・七・三一）

勞農黨第一主義と解消主義

山川均

（一）

わが國における、唯一の眞實の無產階級の政黨をもつて任じてゐる勞農黨は、その內部に起つた『解消運動』のために、危機に曝されてゐる。その主要勢力だつた大阪の一角は、有力な解消論者の除名や脫退によつて、旣に分裂の不幸を見たが、この危機は、大阪の分裂をもつて終を告げたものではない。

この危機はまた、勞農黨を解消すべしといふ最近の黨內運動によつて、突如として襲ひ來つたものでもない。本年の三月、勞農黨が全無產政黨に向つて無條件合同の提議を發した當時においても（この提議が單なるマヌーヴァーに過ぎなかつたにも拘らず）黨內には、勞農黨は×××の外郭的組織でなければならぬといふ見地からの、猛烈な原則上の反對があつた。かように勞農黨の內部には、この時すでに、×××とは別個の意義と性質とをもつた獨立の政黨、卽ちその他の無產政黨と異るところのない大衆的な勞農政黨としての性質と、自らを唯一の眞實の無產階級の政黨として、その他のエセ無產政黨から區別しようとする要求とが、明かに對立してゐたのであつた。

この對立は、勞農黨がその支持組合を勞働組合總評議會に組織しようとする企てによつて、遂に現在の危機に發展した。卽ち勞農黨の一つの傾向から見れば、その支持組合を全國的に結合してその足元を固めることは、その他の勞農政黨に對立してその地步を固めるために、必要と思はれた。しかるに他の傾向から見れば、これは勞農黨が獨自の組合總評議會を以つて、×××直系の傳統を把持する勞働組合全國協議會に對立することであり、それは勞農黨第一主義であり、許すべからざる僭上で

あつた。

では勞農黨内の解消論と×××又は全國協議會との間には精密な一致があるかと云へば、幾分疑はしい。現に全國協議會そのものは、幹部派と刷新派とに分れて鎬を削つてゐるし、勞農黨解消派の見解が、この兩派のいづれに屬するかは、明かにせられてゐない。これらの諸勢力の對立をさらに複雜にしてゐるものは、×××内の謂ゆる「解黨派」であつて、この一派は、勞農黨内の解消運動と特別の關係があるものと見做されてはゐるが、兩者の精密な關係については知る由もない。

かように勞農黨の現在の危機のうちには、謂ゆる勞農黨第一主義と勞農黨解消論、全國協議會の幹部派と刷新派、×××と解黨派など、いふ諸勢力と諸傾向とが入り亂れてゐることだけは明かであるが、これらの諸勢力の聯絡と關係に至つては、少くとも公けにされてゐる材料によつては、明かでない。從つて私は、不正確な材料や、風說や想像の加味されてゐる資料によつて、勞農黨の現在の危機が、如何に發展するであらうかといふ、何らの豫想をも試みない。

たゞ附け加へておきたいことは、勞農黨の首腦部自身は、この危機の性質を如何に理解してゐるかといふことである。

『彼等(三・一五事件の被告にして現在保釋出獄してゐる解黨派を指す)が實行せんとしてゐる陰謀とは何か？ それは彼等が獄中に於[illegible]………[illegible]一[illegible]、全[illegible]……[illegible]的勞農政黨[illegible]結成[illegible]……[illegible]勤政黨を「勞農勤政黨」と呼[illegible]……合法的共產黨」として宣傳してゐる…………[illegible]議會[illegible]活動を見るに…作らるべき[illegible]協議會の指導部[illegible]。それと同時に勞農黨內部に反對派を形成せしめて勞農黨を撲滅し、若き、全左翼陣營の收拾すべからざる混亂に乘じて、巧みに「日本共產黨」樹立の陰謀を成就せんとしてゐるものゝやうである……』(勞農黨指令第二十三號)。

これが謂ゆる「解黨派」に對する勞農黨のオフィシャルな見解であつて、これによれば、勞農黨內部の解消運動は、×××の「解黨派」が『國粹共產黨』を組織しようとする陰謀の現はれであつて、たほその上に國粹共產黨の組織計畫は一面[illegible]の指令によれば(は) 或る筋との默契の裡に、もしくはその援助の下に進行しつゝあるものだといふことになる。

ところが大阪における解消派の聲明書は、一方には日本××等解黨派を「××に堪へかねて逃げ出した卑怯者の一派」として排擊し、他方、全國協議會の刷新派運動と勞農黨の總[illegible]組織の計畫とを結びつけて排擊してゐることと、[illegible]點に注意[illegible]る。さらに勞農黨書記長細迫氏の意見書においては、「コミンテ

ルンが勞農黨排撃の根本態度を持し、一方勞農黨が勞農黨第一主義を押し進める場合』勞農黨の勢力下の組合が、×××の直系組合たる全國協議會に對立的に固定化せられることは『不可避に發生する傾向』であつて、勞農黨の解消は、これを避ける唯一の道として主張せられてゐるものにほかならぬ。從つて、こゝでは勞農黨の解消は、コミンテルンの根本態度に對する絶對の恭順を意味してゐる。

以上によつて、勞農黨の現在の危機の性質が、勞農黨首腦部のオフィシャルの見解よりも、一そう複雜なものであることは疑ひがない。假りに以上に引用した勞農黨の指令、大阪解消派の聲明書、東京の有力な解消論者の意見書等をそのまゝに信用したならば、少くとも『コミンテルンの根本態度』と、×××解黨派の『國粋共産黨』組織の計畫と、『左翼陣營』(?)を徹底的に破壞しようとする或る筋の目論見とは、勞農黨の解消といふ一點において、まさに共通の焦點を結んでゐるといふことになる。僅かに比類のない共同戰線である!

(二)

以上の考察によつて私が試みたことは、コミンテルンと日本×××との無意識的な共同戰線を立證することでなかつたことは無論であつて、私はたゞ、極左陣營における種々なる人的要素の對立の現はれとして見れば、勞農黨の現在の危機の性質が、極めて複雜紛糾したものだといふことの一端を暗示しようとしたものにほかならぬ。

そこで私は、卍巴に入り亂れたかのやうな對立關係から離れ、この危機の理論的方面に一瞥を與へよう。

この見地からすれば、勞農黨の現在の危機は、その樹立の提案書そのもののうちに、すでに理論上の混亂と矛盾の形において、埋藏せられてゐたものであつたことを、容易に看取することができるのみならず、この矛盾と混亂こそ、新勞農黨が舊勞農黨から『輝ける』傳統として相續した遺産の全額であつたとも云ふことができる。

大山、上村、細迫三氏の名によつて發表せられた『新勞農黨樹立の提案』(この提案を支持した河上肇氏の論文もまた)は、先づ第一に、プロレタリアートの黨は唯だ一つしかあり得ないといふ原則を承認する。この前提から演繹して、新勞農黨の創立者は、それ故に×××の外に別個の勞農政黨を組織することは、この『一つしかあり得ない』の原則の違反であると推論する。

そういふ推論によつて、新勞農黨樹立の結論が如何にして導

き出されるか？　これは如何にも有り得べからざることのごとくに思はれるが、事實は正にその通りであつて、新勞農黨の創立者は、明らかにかくの如き見解を取つてゐた。即ち新勞農黨樹立の提唱者は、×××以外に別個の勞農政黨を樹立することに、一般的原則的には『プロレタリアートの黨は一つしかあり得ない』といふ原則に反するものだといふことを、明白に承認してゐたのであつた。そしてそれ故にこそ、『新勞農黨樹立の提案』は（河上氏の前述の論文もまた）この原則に對する違反と解消の辯護陳辯にほかならぬものであつた。

ではこの一般原則に背くことを、一般原則に背かぬものに變化した條件は何だつたか？　新勞農黨の創立者によれば、それはよく有る『當面の客觀的狀勢』の變化（そしてこの『狀勢』と日和とは、日々に變化する！）であつた。即ち變化した狀勢とは（一）産業合理化に基づく資本の攻勢と帝國主義戰爭の準備とに對する鬪爭の必要がますます切迫し來つたこと、然るに（二）『最近の大暴壓』の下に、プロレタリアートの黨が壞滅狀態に陷入つたといふことであつた。

そこで問題は、プロレタリアートの黨の問題に戻つて來る。『プロレタリアートの黨は唯だ一つしかあり得ない』といふ場合、このプロレタリアートの黨とは、プロレタリアートの歴史[illegible]それに奉仕することは、[illegible]に於いて[illegible]ロレタリアート黨は、唯だ一つしかあり得ない（無論、かゝるプロレタリア黨を以つて自ら任ずる黨に、必ずしも一つに限らぬか）。

しかしながら、かような意味でのプロレタリアートの黨に唯だ一つしか有り得ないといふことは、かような意味においてゞないプロレタリア的の政黨、ないしは大衆的な勞農政黨がそれ以外に存在してはならぬといふことを意味するものではない。例へばレーニンは、英國共産黨が勞働黨に參加することを正しい戰術として要求し、少くとも當時の形勢の下にあつては、英國共産黨が勞働黨と對立する政策を、左翼小兒病と呼んだ。即ち『唯だ一つしかあり得ない』ところのプロレタリアートの黨と同時に、他の勞農政黨のあり得ること、そしてこの二つのものは、あらゆる形勢の下に、必ずしも常に對立物として理解すべきものではないのである。

そこで新勞農黨の創立者は、勞農政黨の樹立が、一般的原則的には、『プロレタリアートの黨は唯だ一つしか有り得ない』との金科玉條と抵觸するといふ見解を取つたことによつて、前衛黨とその他の大衆的勞農政黨との全く異つた任務と性質とに對

する救ふべからざる混亂に陷入つた上、さらに入念にも、前衞黨の壞滅狀態が、他の勞農政黨の樹立を正當化するといふ見解によつて（卽ち、大衆的勞農政黨によつて前衞黨の任務を代行し得るとし、また代行しようとすることによつて）この混亂の仕上げと上塗りを完成したのであつた。

かような前衞黨と大衆的勞農政黨との混同（從つてまた、後者を前者の代用物に使ふこと）は、舊勞農黨以來の極左陣營の癖であつた。そしてこの輝ける遺傳病を繼承した新勞農黨が、一方においては、自分自身を『勞働者、農民、無產市民……の利害を不斷に、强力に、現實的に、效果的に擁護伸長するために、大衆的日常鬪爭主義を全活動の基礎とする』（卽ち、前衞黨たる綱領を有しない）政黨と規定したり、その他の勞農政黨との無條件合同を提唱することなどによつて、大衆的勞農政黨たる性質を認めつゝ、同時にその先代の勞農黨と同じように、他の勞農政黨とは本質的に異つた政黨の位に自らを引上げて有頂天になり得たのも、要するに、この出發點たる根本見解の混亂に基づいてゐると云ふことができる。

（三）

この世界に類例のない××黨運動の理論の上に立つ新勞農黨が、世界に類例のない存在であつたことは疑ひがない。そこで細迫書記長が勞農黨解消問題に關する意見書のうちに、『憶ふに勞農黨は世界に類例のない極めて特殊な任務を持つて生れた』と述懷せられたのは、百パーセントに正當であつた、と云はなければならぬ。

けれども前衞黨の任務と大衆的勞農政黨の任務といふ、世界に類例のない重荷を着けられた瘦馬が、どうして蹟かずに走れようか。勞農黨の現在の危機は、新勞農黨がその樹立の當時から內包してゐたこの矛盾の發展にほかならぬ。言葉を換へて云へば、いま勞農黨を襲うてゐる危機は、勞農黨がその他の無產政黨と何ら異るところのない大衆的勞農政黨たる一面と、その他の無產政黨とは本質的に異つた（と自任する）一面との理論上の縫ひ目の破綻にほかならぬ。

ではこの危機によつて、かような理論上の混亂——極左陣營の癖——は淸算せられるだらうか？　先づ勞農黨に踏み留まる勞農黨第一主義者はどうかといへば、彼らは分裂の後までも、恐らくはこの病毒の保菌者であるだらう。勞農黨が勞農黨として存續する限り、この思想的混亂は、輝ける傳統として、いつまでも神棚に祠られるであらう。

解消派にいたつては、その解消論そのものゝうちに、既にこ

[illegible]
[illegible]解消派に對する）を否認して[illegible]
える。

解消派の聲明は云ふ——

『…勞働者、農民、小市民の合成雜炊體たる所謂合法無産黨が、その組織上の缺陷から、如何にストライキ鬪爭、小作爭議に於て無力なものであるかを、實踐を通して多くの大衆は明白に知つて來た』。

この前提から生ずる明白な結論は、合成雜炊黨でないところの内容の齊一な非合法的な前衛黨のみが、一切の鬪爭を擔當し得るといふことになる。

解消派に取つては、大衆的勞農政黨は、もはやこの前衛黨の代用品ではない。しかしもつと重要な代用物がある！

『組合は經濟鬪爭の機關であり、無産政黨は政治鬪爭の機關であるといふが如き經濟と政治との分離論は……社會民主主義である……衞達は勞働組合、農民組合の代表者より成る共同協議會を創設し、工場代表者會議を基礎とせるカンパーニア鬪爭を組織し、當面の鬪爭を果敢に鬪ひ拔かれはならない』

これが聲明書の結論であつた！

この大阪の呼びに呼應して、細迫書記長の意見書は東京から反響する——

[illegible]
し、[illegible]
る[illegible]
組合へ！」
かうして勞働組合と農民組合とは、[illegible]勞農政黨はかりでなく、前衛政黨の代用品となり、[illegible]勞働組合評議會が、大正十五年——十六年の頃にその絕頂に登りつめた謂ゆる「混合型」（組合と政黨との混合型）への傾向は、再び解消派によつて複生されることゝなる。

『勞働者、農民、小市民の合成黨たる無産政黨の形態は、勞働者獨自の鬪爭を一般無産市民、小市民の（何故にまた「農民の」でないか！）鬪爭にまで「引き下げる」といふことが、勞農黨解消の理由として強調せられてゐることも、特徴的である。勞働者、農民、小市民の合成體でない勞働者のみの團體は勞働組合であつて、かゝる合成體でない農民のみの團體は、農民組合でなければならぬ。そこで若し、解消派の理論を一貫して追及したならば、それは一種の革命的萬能主義であつて、大正八九年の頃に高潮に達し、そして今日も組合運動の一隅に餘喘を保つてゐる無政府主義的サンヂカリズムの××理論に歸着する。

これに反して、解消派の聲明書が云はんとしたところは、

衛黨をも含めての、勞働者以外の要素を構成分子とする一切の政黨の排斥ではなくて、唯だ「合成雜炊黨」たる大衆的勞農政黨の排斥であるとしたならば、どうだらうか。その構成要素の上から見て、勞働者と勞働者以外の要素との合成體であるといふ點では、前衛黨もその他の勞農政黨も、異るところはない。では何が一方を、解消派の肯定する前衛黨たらしめ、何が他方を「雜炊黨」たらしめるか？　云ふまでもなく、それは構成要素が一つであるか二つであるかではなくて、構成要素の意識である。即ち大衆的な勞農黨が、必然にその内に種々なる發展段階にある反ブルジョア意識を包容するに反して、前衛黨は、一定のプロレタリア意識を包容する。そこで解消派が、大衆的勞農政黨を「雜炊黨」として排斥することは、究極においては、意識の程度の低い無産大衆（勞働者をも含めての）との一切の共同闘爭の組織を拒否することに歸着する。この見解の上に立つならば、勞働組合もまた、意識の程度の低い勞働者を排除しなければならぬ（かういふ原則の上に立つものが、謂ゆる二重組合主義としての「左翼組合」などである）。なぜならば、意識の低い勞働者との合成體は雜炊組合だから！　そして意識の低い勞働大衆と共に同一の組織の内に留ることは、先進分子獨自の闘爭を、これらの意識の低い勞働者の闘爭にまで引き下げるものだから！

かうして吾が解消派は、政治上の組織においても經濟上の組織においても、意識の水準の低い大衆と決定的に袂を分たうとする。この點でも、解消派は舊勞農黨や勞働組合評議會の後半期における極左主義を再生するばかりでなく、大正年代の無政府主義者の實踐に復歸しようとするものに外ならぬ。

尤も無産政黨運動の範圍内においては、この理論は決して新しいものではない。舊勞農黨とその他のエセ無産政黨との合同は、輝ける勞農黨の闘爭を社會民主々義の闘爭にまで引き下げるものだといふことは、舊勞農黨を指導した當年の『前衛』分子の理論であつた。解消派は、この輝ける傳統を繼承して、さらに幾分か、これを發展せしめたものだといふことができる。

勞農黨解消への巨步

小岩井淨

一

去る八月二十九日夜開かれた勞農黨大阪府支部聯合會の擴大執行委員會は、「勞農黨解消問題」をいかに取扱ふかといふので異常な注目を惹いた。それといふのも黨内及び支持組合内に青年分子を中心としてモリ／＼と頭をあげて來た解消鬪爭の發展に對して、あわて出した大阪金屬勞働者、全大阪木材勞働、兩組合の二三ボス幹部が勞農黨支持を名として益々反動的に策動を始め、茲に解消派と支持派との對立が極はめて尖鋭化し、擴大執行委員會に於ける正面衝突は避けがたい情勢になつてゐたからである。當夜の會場である九條會館には數百の勞働者農民が押しよせた。「解消決議を鬪ひとれ！反動ボスを倒せ！」會場の内外に集つた大衆の意氣は凄まじかつた。暴力にかけてでも！

擴大執行委員會の出席者は執行委員、各支部並びに支部準備會代表、各支持組合又は有志團代表、直屬班代表等五十一名から構成される事になつてゐたが、四十名出席、十一名缺席、肝甚の金屬、全木の幹部は殆ど姿を見せなかつた。そこで緊張した會議も半ば拍子拔けのした感があり、それこそ「獨り相撲」で議事はスラ／＼と運んだ。議事の途中豫定の如く三島支部の代表者より『勞農黨を勞働者農民の手によつて即時解消す可し』との提案が緊急動議の形でなされ討論に移つた。金屬、全木の勞農黨支持派がゐないので殆ど反對論をきく事が出來なかつた。「解消には賛成だが、それから先きをどうするか、その點が[illegible]反對論なく、[illegible]たのである。結局採決の結果反對一、棄權不良分子若干、大多數の賛成によつて勞農黨の解消が決議され、左の決議が熱狂裡に讀み上げられた。

勞農黨大阪府支部聯合會擴大執行委員會は、左翼社會民主主義の合法政黨勞農黨が、その組織上の根本的誤謬よりして勞働組合、農民組合の擴大強化の任務をなし得ず、一面勞働者農民大衆の戰鬪化の妨害になる事を認めここに過去の誤謬を清算し解消をなす事を決議す。

委員會は別に宣言を發表する事にし、起草委員に一任し、尚若干の清算事務についての打合はせをなした後閉會したのである。

この大阪府支部聯の勞農黨解消決議は、勞農黨の内部に相當大きな波紋を描かうとしてゐる。だがこの果然として投ぜられた一巨石が單に左翼合法政黨勞農黨の内部に混亂の渦を卷き起こしたといふのでは問題はきはめて部分的である。だがこの解消斷行は、以

る勞農黨内部の紛擾と見る可きものでない事は云ふまでもない。何よりもそれは××的プロレタリアートの指導がいかに正しくなされつゝあるかといふ事とその影響の擴大とを示すものであり、他方勞農黨以外の合法無產政黨、殊に合同に醉うてゐる全國大衆黨等に對しても同時に徹底的排擊の鐵槌が下されたものと見る可きである。なぜならこれらの所謂無產政黨傘下の勞働者の間からも合法政黨排擊の烽火のあがるのはもう遠い事ではない——そして勞農黨解消議決はかゝる勞働者の成長への拍車となるにちがひないから。

私は今かゝる波紋をまきおこした最初の一石であるところの大阪に闘はれて來た解消運動について書いてみる事にしやう。

二

まづ何が解消決議を闘ひとらしめたか、私は第一に當夜警備を名として會場に押しかけ、傍聽席を占領し、會場の周圍を取卷いた數百の戰闘的な勞働者農民大衆の壓力をあげなければならぬ。そこには從來の勞農黨支持組合の青年部の動員がなされたのみでなく、全產や殊に全協系の戰闘的勞働者すら押しよせてゐたといふ事である。その大衆的な壓力は金屬、全木幹部の支持派に何等策動の餘地を與へなかつたのみでなく、委員會をしてひたすらに解消決議へ進まねば止まないものとした。

だが勿論當夜の會場をめぐる空氣だけで解消決議が決せられたわけではない。そして空氣は各組合の内部に於ける勞農黨の批判——合法政黨の排擊——大衆のめざましい成長の反映に外ならないのである。

かゝる大衆的な基礎の上に、更に勞農黨解消同盟の組織的な闘爭がおし進められて來た。解消問題は勞農黨大阪府支部聯としてはその正式な機關、常任委員會といふ樣なものでは、一度も取扱はれた事がない。否只一度だけ擴大委員會の直前に「常任委員會は勞農黨解消問題については何等の決定や處置をしない」といふ事がきめられたのみである。尤も黨青年部としては合法的なビラや「ニュースで解消闘爭のアヂ、プロを盛にやつたのである。

解消闘爭は解消同盟によつて積極的に闘はれた。それは各組合の青年部によつて熱支持され、工場へ職場へと、合法政黨反對、勞農黨即時解消の聲が加速度的に擴大していつたのである。だからして若しも擴大委員會で解消動議が少數否決といふ樣な事があつたとしても、勿論解消論者はその反對の多數決に服從して黨に留まるものでなく、あべこべに各組合の支持を組合の決議によつてとりけさせ、或ひは勞農黨に留まる合法主義幹部に對する反幹部運動を猛烈にまきおこし、勞農黨を全く頭だけの無力なもの（解消される前にも現にさうであつたのであるが）にしてしまつたにちがひない。

この樣な大衆的な基礎と組織的な闘爭とによつて勞農黨の解消決議はなされたのである。ところが金屬、全木に巢くふ二三の幹部は擴大委員會の前に於いても、その直後に於いても、この解消同盟の闘爭を極力中傷し、二三インテリの陰謀であるとか、左翼を分裂させて支配階級に奉仕するのだとか、或ひはスパイであるとか、さては個人的なデマをすらまぢへてあらんかぎりの低劣な誹謗を事とした。彼等は急速に自分のわづかな地盤さへ

[illegible]であらう。だがそんな事にどうでもいゝ。大衆はほんきで相手にもするものでない。併し若し彼等が解消闘爭を實際二三インテリの仕事だとのみ思ひこみ、擴大委員會の大衆討議による解消決議すら、「二三組合のわづかな靑年分子をゴマかした結果である」(彼等の聲明書)と信じてゐるとしたら、實に憐む可き認識不足である。だが認識不足は彼等だけではない。日和見主義、合法主義が骨の隨まで泌み込んでゐるといふ最大の特質の外に、一面認識不足といふ事が、勞農黨の幹部の多くを通じての一つの特色である。勞農黨の提案は、第一にかゝる認識不足の上に發足したものである。(我々は眞實に闘ふプロレタリアは正しい認識に到達する事を知つた)今日河上博士の勞農黨解消時期尙早論(?)も一つにはかゝる基礎の上に成り立つてゐるのではなからうか?

三

私は茲で勞農黨解消同盟の闘爭について、[illegible]活動については充分に知る由もない。[illegible]る重要な事はかゝる同盟の結成がいかにして生れることになつたのか、なぜ大衆にこの同盟の投げ與へた「勞農黨即時解消!」のスローガンが受け入れ、同盟の闘爭を支持したかといふ事である。この點について少しく考へてみたいと思ふ。

問題は二つの方面をもつてゐる。解消闘爭は下からもち上げよう、工場、農村から合法政黨を堀りかへせ!といふ樣に進められた。この下の大衆の成長、それがいかにしてもたらされたかといふ方面と、闘爭を大體指導する立場にあつた各組合の先進分子、戰闘的勞働者の成長、(それがつひに解消同盟に結成されたのである)といふ方面、この兩方面である。併しこの兩方面をきりはなして對立的に考へる事は勿論大まちがひである。大衆の成長が指導分子を更に戰闘化させ、指導分子の指導が大衆を益々成長させたので兩者は交互に強く作用しあひ影響しあつてゐるのである。

[illegible]ふ。

一、大衆自身の左翼化、之に就ては[illegible]勢の異常な變化に負ふものであらう、賃銀の値下、勞働強化、解雇、工場閉鎖等の嵐に吹きまくられ大衆の生活の不安と窮乏は停止する處がない。大衆は必然に左翼化する。その勢は日に日に著しいものである。そしてかゝる情勢が世界的經濟恐慌の襲來に伴ふ資本家地主政府の緊縮政策、産業合理化の酷烈な強行、帝國主義戰爭の危機の××等々の必然の結果である事は云ふまでもない。かゝる社會情勢の變化は新勞農黨提案の一ケ年前と比較しても驚く可きものがある。かくして大衆にとつては闘爭か死かである。イヤでも應でも左翼化せざるを得ない。

四

二、新勞農黨の無力さの暴露、新勞農黨は提案者等によれば如何なる任務をもつものとして生れて來たか、提案者によれば四、一六

事件はわが國の無産階級の前衛がそれまでに築きあげた全陣地を殆ど潰滅に歸せしめたばかりでなく、全左翼戰線の上に一大打撃を蒙らしめた。そしてか〻る事態の下に、變則的な形態をもつ勞農同盟の活動も、不可避的に、はたと行詰つて終つた。か〻る主體的客觀的情勢のもとに於いては、恒常的な政治組織――黨內デモクラシイの上に立ち、獨自の指導部をもつ處の合法政黨――言ひかへれば新勞農黨の樹立が絶體に必要である。か〻る組織によつてのみ政治的自由獲得の闘爭を、大衆的規模に於いて活潑に卷きおこす事が出來る、一面かくの如き政治闘爭の掩護の砲火のもとに左翼勞働組合の確立、勞働組合農民組合の擴大強化が始めてなし遂げられるのである。といふ樣な事であつた。

併しながら大阪地方といはず全國的に見て勞農黨は果して何をやつて來たか、大阪地方に於ける勞働者農民の日常闘爭に、勞農黨はどんな役目を果して來たか。勞働者にとつて最も重要な日常闘爭の一つは勞働爭議であるが、大阪地方に昨年から今年にかけて頻發した勞働爭議に於いて勞農黨は、一回一回とその無力な實體を曝露しただけではないか。

例へば今春のゼネラル・モータースの大爭議に於いて、今日も尚勞農黨の殘骸にかぢりつかうとする金屬、全木の幹部連中が全協の系統をひいた勞農黨反對派の戰闘的闘士達を爭議から叩き出した（それと共に右兩組合とも分裂した）後に於いては、爭議は全く行詰つて、結局あの慘敗に終はらせたために勞農黨は鼎の輕重を問はれざるを得なかつたのである。岸和田紡績の爭議に於いてはその指導が勞農黨系から全協系に移つてゐるといふので、前記兩組合の幹部は應援すらやる必要なしと嘯いてゐる。併し善意の分子は極力應援しようとしたが、全協系のスバラシイ指導と闘爭（たとひ多少の誤謬が指摘されやうとも）とに比べれば勞農黨の本質は太陽の前に出た星の光の樣なものであつた。

勞働爭議の應援の無力な事の外に勞農黨の闘爭といふ程のものが指摘する事は更に困難である。實際何がやられて來たであらう。帝國主義戰爭反對？ 失業反對？ 惡法反對？ どこにも之等の闘爭の強力なものはなされて來なかつた。勞農黨のやつて來た事は結局社會民衆黨や大衆黨と何等異つた處のない、市民相手の演說會で氣勢を擧げる位の事がおもである。勞農黨の指令にも、デモだとかゼネストで闘へとかいふ「アヂ」は屢〻なされるけれども、左翼化した大衆が（實はそれ故に）勞農黨の笛ではどうもをどらない。それは力のない空念佛に終つてしまつてゐる。

大阪に於ては若しも勞農黨の中心機關にもつと勞農第一主義の幹部が多かつたら、あるひはガス電燈料の値下とか、署名運動や府知事警察部長への抗議（みんな社民や大衆の幹部がいつもやりたがる事だ）がも少しは活潑に行はれたかもわからない。併しそれだけである。

大衆は經驗を通じてはつきりと學ぶ。勞農黨のいかにも無力なものであることが曝露されゝばされるほど勞農黨は無用だ、勞農黨なんかつぶしてしまへと考へ出して來たのである。

五

註、革命的プロレタリアートの指導、昨年の八月八日突如として新勞農黨の提案が大山

[illegible]によ[illegible]プロレタリアートに對手として反對の聲をあげた『今迄合法政黨をつくるなどといふことは、如何に左翼的な言辭を弄して粉飾しやうとも、所謂的裏切である。新勞農黨の行く手は必然に左翼社會民主々義以上に出るものではなく、必らずやプロレタリアートの唯一の黨に對立し、それの大衆化の妨害物となるのだ。』そして新勞農黨が勞働者農民の戰鬪的同盟であるなどといつても――尤も提案者側が「戰鬪的同盟體」といふ點を强調して新勞農黨の本質を規定しようとしたのは、布田、窪田兩氏による赤パンフレット「提案に對する批判」の現はれて以後の事である――それは全く誤謬であつて、斷じて戰鬪的同盟體でもなく、勞働者、農民、小市民の單なる寄合世帶、合成雜炊黨にすぎない。たゞその左翼的言辭の故に何等かの幻影を與へて大衆の戰鬪化を合法主義の框內に閉ぢこめようとする反動的な役目をするだけである。として痛烈な批判を下し、極力新勞農黨粉碎のために鬪つた。革命的プロレタリアートによるかゝる批判と排擊は今日までも尙つゞいてゐる事は云ふまでもない。

[illegible]に於いて、[illegible]の一部には、[illegible]情勢のもとに於いて、全く正しい。從つては[illegible]本の情勢の正確な報告を手にする以上、コミンテルンは必らずこの運動を是認し支持してくれるにちがひない、といふ樣なドンキホーテ式の夢を見てゐたものもあつたのである。併し、第六回大會で極力左翼社會民主々義の排擊を決議したコミンテルンが日本にだけ特別の例外を認める筈もなかつた。革命的プロレタリアートの新勞農黨排擊は今日まで無慈悲的につゞいて行はれて來たのである。

かゝる革命的プロレタリアートの批判、その新勞農黨排擊の意義は、大衆自身の成長新勞農黨の本質の曝露、等々と相俟つて漸次に勞働者農民大衆の意識に植えつけられて來た。大衆は自己の經驗によつてこの革命的プロレタリアートの批判を、はつきりと今こそ自分の血とし肉として立ち上がる事が出來たのである。

我々は併し解消鬪爭の大衆化のためには、革命的プロレタリアートの新勞農黨に對する批判が漸次大衆の間に浸透していつたといふ事[illegible]的[illegible]者の[illegible]勞働者農民大衆を[illegible]にとつて[illegible]れたものと見なければならぬ。

新勞農黨の提案は[illegible]をもつてゐるものと見られる。なぜならばそれは破壞された左翼陣營の再建を標榜して居り、更に合法外にプロレタリア黨の擴大强化に資せん――新勞農黨の展開する鬪爭の過程から――といはんばかりであつたからである。だが結果は反つて妨害物になつた。ところが今春の二月――三月の檢擧事件の如きは革命的プロレタリアートの組織は新勞農黨の活動とは全く別に、着々として築かれるものである事を證明したものである。勞農黨の合法活動が左翼を再建するなどと思ひこんだ夢が全く日和見主義――敗北主義傾向の上に合理化されてゐた幻影であり逃げ口上にすぎないといふ事がわかつて來たのである。或ひは又岸紡の爭議などに於ける全協系の武裝デモ、その戰鬪力と大衆的動員、といふ樣なものが力づよく大衆の頭腦にひゞいて來た。かくして××的プロレタリア

ートの批判と實踐とが――言ひかへればその直接間接の指導が大衆の心臓の中にヒシ〳〵と泌み込んで來たのである。

六

四、解消同盟の結成とその組織的活動、以上の様な諸多の原因が交互に作用して大衆は成長し、批判力は鋭くなる、合法政黨排撃の空氣が工場に農村に醞醸される。かゝる大衆的な地盤の上に、更に之を急速に發展させたものとして我々は解消同盟の組織的活動を擧げなければならぬ。

解消同盟は誰のイニシアーチブのもとに組織されたか、我々は今そんな事を問題にする必要はない。否それこそ各組合の戰闘的な青年分子の手に依て作られたものである。反動幹部の下にある支持派の金屬、全木はゼネラル・モータースの爭議の際に勞農黨反對派と分裂してしまつた。併し他の諸組合はいづれも内部に反對派を含んでゐた。かゝる反對派の相互間には從來組織的連絡がなかつた。また革命的勞働者の正しい階級的な組織とも、黨破壞についての指導連絡が乏しかつたらしい。かゝる連絡が始ると共に解消鬪爭は速に大衆化したのである。

黨反對派は支持組合の内部に提案の最初から存在したとはいふものの、それの成長、殊に青年勞働者の間に於ける解消意見の大衆化といふものが勞農黨の活動の上に起つたいろいろの問題にぶつつかつて、そのたびにすゝめられて來た事は云ふまでもない。たとへばゼネラル・モータースの場合に於ける全協系との對立、これの排撃、――總選擧戰の經驗――選擧戰直後の無産政黨合同問題、それは尚相當に信頼し來つた黨本部のあまりに社會民主々義的であることの現實曝露、それだけに無條件合同がいかにもコムミユニストの戰術ででもあるかの様な思ひあがつた聲明に就ては何だか氣のぬけた虚言を感ずるだけであつた。同様の事は同じく黨本部によつてなされた全農第一主義を粉砕しろ!の指令の場合にも感じられた。全農第一主義に含まれた合法政黨排撃の革命的な要求が解つてゐたのかゐないのか、わかつてゐて故意に勞農黨第一主義をふりまはすとすれば明かに分裂主義であり、反動的である。それだのにあたかも××黨でもあるかの如き口吻はたゞに戰闘的農民の激怒を買つたのみではなく、戰闘的勞働者の憤懣を買ひ、勞農黨に對する僅かの信頼をも消滅させていつた。――支部聯合會の第一回大會(五月)、此の時青年分子の間からボス排撃(殊にゼ・モの爭議で全協系を排撃した金屬の幹部)がなされた。之は黨内に於ける反對派運動の組織的になされた萌芽であるこの時以來ボス傾向反全協傾向と反對派、青年分子を中心とする全協支持の傾向との對立が漸次に表面化し漸次に深刻化して來たのである。岸紡爭議の頃には、はつきりとした對立になつてしまつた。かくして金屬、全木幹部によるウルトラ(!)分子排撃の四疊半會議。常任委員會との反對派分子排撃の意圖をもつた質問書の提出となり、之と前後して解消同盟の結成、その組織的活動が勇敢になされ來つたのである。兩者の對立は八月二十九日の擴大執行委員會をめがけて驀進した。結果は大衆的支持のもとに解消決議を戰ひとる事が出來たのである。

解消同盟は黨の解消を黨中央部の機關によつて、正式に決議させるといふ迂遠な方法よ

わち、[illegible]よるといふ方針をとつた（[illegible]）[illegible]につきりと大衆の[illegible]することといふ大衆にアピールする效果を重要視して大阪では[illegible]な委員會を開いたまでである。」だがいづれにしてもそれは勞農黨の内部に擡頭した潮勢であるといふ點に重要な意義があるが、併しそれは同時に又×××プロレタリアートの指導によつて闘はれたものであるといふ事が決して忘れられてはならない。だから大阪に於ける解消は消極的なザンゲの解消ではなく戰闘的な解消といふ事が出來るものと思ふ。

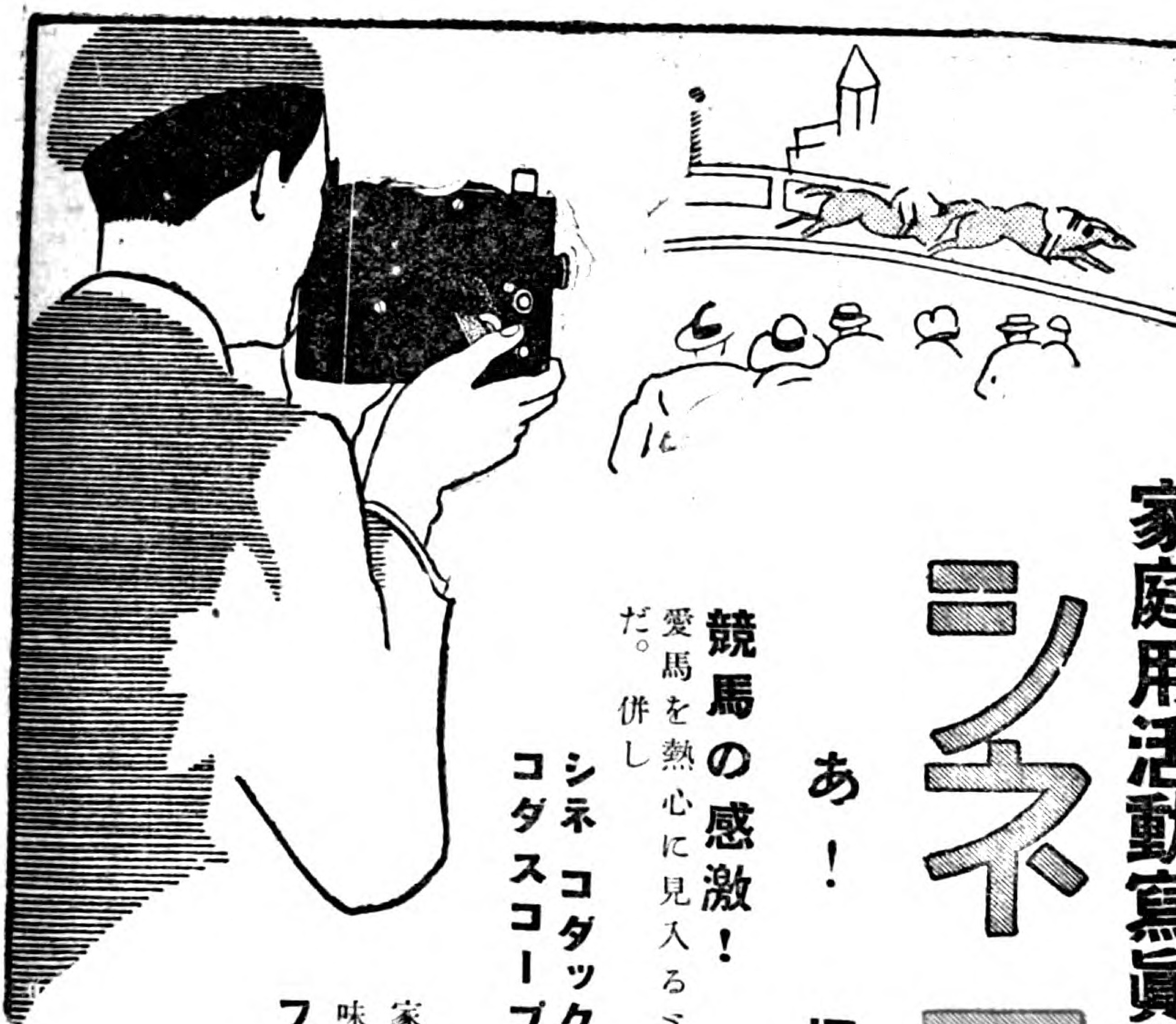
七

勞農黨を解體して大阪の勞働者農民はどこへゆく？　之は今後に殘された問題である。だが解消宣言にうたはれてゐる『最近全協闘新派だ、南喜一派だ、解黨派（合法共產黨の一派）だといふマガイモノが雨後の筍の如く出て來た云々』我々は正しく階級的に進まねばならぬ……革命的プロレタリアートの指導の下に！」といふ様な意味を考へた場合に、解消運動に解黨派の手がまはつてゐるとか何だとかいふ[illegible]に[illegible]下に[illegible]プロレタリアートの指導をうけるかぎり[illegible]

解消闘爭は分裂主義だと支持派は非難する。分裂主義者は勞農黨自身ではないか、おかした事には解消闘爭に加へるあらゆる非難が、敗北主義だ、日和見主義だ、さては闘爭の激化をおそれたのだ（笑はすな！）等々がすべて勞農黨第一主義者が天に向つて叫く唾となつてゐる事である。

誤謬は云ふまでもなく極力避けなければならぬ、誤謬は自慢ではない、否矢張り階級的な罪惡である。だからして誤謬は大衆的に、戰闘的に――實踐を通じて清算されなければならぬ。併し誤謬を知つて之を何とかつくろひ、合理化する事があるなら之こそ最も大きな階級的罪惡と云へるものであらう。

我々は勞農黨傘下の各地の戰闘的勞働者、農民が、大阪の解消決議をトップとして今後猛烈な解消闘爭を、工場から農村から卷きおこすにちがひない事を確信する。のみならずそれは全國大衆黨だ、社會民衆黨だといふ幻





日支外交秘話

(張作霖物語)

駒井徳三

序書

色の生白い、小柄な、蛇のやうな眼を持つた張、往年の馬賊仲間から「快馬張(コワイマーチャン)」と呼ばれた程馬が得意で機敏だつた張、知己親友を問はず苟も自己の利益に反する者は「殺罷(シャーバー)」の命令一下銃殺を屁とも思はなかつた張、麻雀賭博と女とが三度の飯よりも好きだつた張、一度ならず二度三度と危い瀬戸際で巧にいのち拾ひをし通した張、とう〳〵四度目に運命の神に見放されあへなく爆死を遂げた張、と張作霖に對する憶出は盡きぬが、こゝでは私が親しく彼を相手に折衝論爭した事件を思ひ出すがまゝに記して、ありし日の彼の梟雄振を追憶してみたいと思ふ。

白音太來(パインタラー)土地爭奪事件

滿鐵本線の四平街驛から四洮線に乘換へる人は鄭家屯から北すれば洮南に至り西すれば白音太來に行くことが出來る。

白音太來とは蒙古語のバインタラーで立派な畑といふ意味である。東蒙古の平原には案外肥沃な土地は少くないが白音太來一帶のみは遼河の沖積土壌で其肥沃なる事驚くばかりである。此處こそは四瀉茫漠として眼界を遮る物なく日も月も草より出で、草に入る所謂る東部蒙古草海の中心である。今は四洮鐵道支線の終點として又曾て張作霖が日本の强硬なる反對を物ともせずに敷設せし打通鐵道の終點として人口數萬を有する新成都會である。支那政府は公式にこゝを通遼と命名したが一般には昔のまゝに白音太來と呼ばれてゐる。然し白音太來今日の盛況は全く鐵道開通の賜であつて僅か十數年前には人口數百を以てしか數ふることを得なかつた遼河河畔の一蒙古部落に過ぎなかつたものである。今私の物語らんとする白音太來土地爭奪事件とは此地を中心とした遼河沿岸の蒙古王領地壹萬町歩を張作霖と我々日本人とが鎬を削つて爭奪した出來事を指すのである。

時は大正五年より六年に亘る恰も日本帝國主義の爛熟時代であり、關係人物には蒙古達爾罕王を挾んで支那側は張作霖を始めとし師長張景惠、總參議于沖漢、蒙務副局長閻廷瑞等々、日本側では當時漸く三拾歳滿鐵の一員たりし私と滿洲事業家のSとHとを表面にして裏面には滿鐵總裁中村雄次郎男(後に關東都督)、民政長官白仁武氏、奉天總領事赤塚正助氏等々。

1

蒙古人と聞けば我々日本人は直ちに剽悍なる鐵騎の一隊を從へて世界征服を企てた成吉斯汗、弘安四年の元寇と勇猛果敢な武斷的民族を想像するであらう。所が現今の蒙古人はどうだ。猫、而も毆られても蹴られても最早や抵抗する氣力も腕力もない爪なし猫である。一體何が蒙古人をさうさせたのか。支那政府多年の巧妙辛辣を極めた對蒙政策の結果だ。曰く宗教政策、蒙古民族の喇嘛教に對する信仰を極度に惡用した所謂喇嘛教政策だ。喇嘛の高遠なる教義なんぞは無智なる蒙古人の元より知る由もない所である。たゞ其御本尊を拜めと教ふ、赤や青の惡どい塗料でごて〳〵と色どつた等身大の男女交合佛が其御本尊である。肉食の爲に精力の旺盛に苦しみ稍もすれば武力を振はんとする蒙古民族に對し與ふるに男女混合佛を以てす。誰が考へたか實にすばらしい考案ではある。それからの蒙古人は隨喜の涙をながして喇嘛教に心醉した。誠に無理からぬ次第と想ふ。支那政府は北京に廣大なる喇嘛廟雍和宮を建立した、蒙古人共は吾も〳〵と自分達の財力を顧る暇もなく朔北の草原に競つて壯大を極むる喇嘛廟の建立に夢中となつた。斯くして喇嘛教は蒙古人の精力と財力とを枯渇せしむるに役立つたのみならず彼

[illegible]一の[illegible]たる[illegible]に[illegible]を分た[illegible]を迷げた。喇嘛教に帰依したる者は、一[illegible]を[illegible]に生れ出でた男子は相續人のみを殘して悉く喇嘛僧たらしめねばならぬ。喇嘛僧―讀經の一生―妻帶禁止、其必然の結果は武力の衰退、人口の減少であらねばならぬ。然しそれでは定めし蒙古には未婚の婦人が多くて困つて居るだらうと心配せらるゝ讀者があるかも知れんが、そこには佛教の所謂方便がある。未婚婦人は三々五々と團體を組んで、喇嘛廟から喇嘛廟へと巡禮をする、肉食を許され毎日有難い御本尊を拜んで居る元氣旺盛な喇嘛僧と未婚の巡禮婦人團、問題の解決は諸君の御心配を待つ迄もない、然し之が爲に恐るべき梅毒が猛烈な勢を以て彼等の間に傳播され一層此民族の衰滅を早からしめて居ることは又爭ひ難き事實である。

宗教政策と並んで行はれたものに蒙古王族に對する混血政策(結婚政策)がある。東蒙古は四十八族に分たれ一族は一王を戴いて居る、譬へ彼等の領土は小なりと雖も王は王たり、旗民に對する權力は絶對的である。老猾なる支那人が彼等王公の勢力を無視しよう筈がない。そこに考案されたものが混血政策である。滿朝の頃には蒙古各王に配するに專ら清室の公主(内親王)を以てした。此政策は蒙古王懷柔に餘程有效であつたと見えて後に[illegible]成功[illegible]北京に[illegible]は王の年番制度(參勤交代制度)と相俟つて蒙古各王の北京に住[illegible]となり、邸宅の造營に、豪奢なる生活に、王府の財政はたゞ困窮の一路をたどるの外なきに至つた。其必然の結果は各王府が支那人からの高利の借財となり、最後には旗下の人民に對する苛斂誅求となつて、さなきだに喇嘛廟に吸ひ取られて貧窮に泣ける蒙古人達の懷は、一層窮乏の度を加ふるに至つたのである。

斯くして嘗ては世界征服をさへ企てた勇猛果敢なりし蒙古民族は何時の間にか陷穽深く陷つて武力も財力も氣力も共に完全に消耗しきつた猫の如き民族となつたのである。各種の政策效を奏し蒙古人最早や恐るゝに足らずと見て取つた支那政府は愈々露骨に其本心をあらはして遂に「租地養民」と稱する飛んでもない要求を持ち出したのである。租地養民とは要するに領土の租借である。淳朴なる蒙古人が水草を追うて遊牧生活を樂んで居つた彼等の生活資源を支那人の爲に開放せよとの要求である。これには流石の混血王公連も弱つたが彼等には最早や要求を拒むべき何等の力をも有しない爲に涙を呑んで應ずるの他なかつたのである。蒙古王領の開放は潮の如き勢を以てする支那人の侵入となり支蒙人の雜居となつた。利に敏なる支那人と朴訥愚

に近き蒙古人、經濟戰場に於ける蒙古人は到底支那人の敵ではない。あらゆる譎詐、凡ゆる侮辱、凡ゆる迫害の下に蒙古民族は生存競爭に敗れて北へ北へと追込められつゝ、次第に絶滅の運命に陥りつゝあるのである。

2

こゝに東蒙古の東方遼河支流の沿岸に達賴罕(タラハン)と呼ぶ王旗がある。其領域も廣く可なり有力なる王旗であつた。四洮鐵道支線が其領域内通過を豫定された爲に私は滿鐵の命を受けて豫定線一帶の產業調査に出掛くることゝなつた。時は大正四年の暮から五年の春にかけての話である。馬賊の襲撃に對する不安と骨を刺す如き寒さのうちに、一週間にして白音太來に着いた。この宿屋で自分は始めて支那人から達賴罕旗開放土地拂下の話を聞いたのである。此邊の支那宿と云へば泊客は年番往復の蒙古王府の役人か牛馬雜穀の買出しに來る支那の田舍商人かに限られてゐるのであるが、此時に限り役人でもなく商人でもない何者とも我々には一寸想像のつかない風體の支那人がどこの宿にもごろ／＼として居つた。彼等は別段忙しい用事のありさうでもなく三々五々相集つてはひそ／＼と相談に時を過して居るのみであつた。私の隣室にも其一組が居た。試みに宿の小孩(シヤフハイ)に尋ねると買地的(マイテイデ)だと云ふ、卽ち土地ブローカーである。私は間もなく此買地先生の一人と懇意になつた。此男が得意げに話す所によると

一、達賴罕王府は今回奉天政府の懇請によつて領地の一部三千三百方地(約十一萬町步)を開放すること、

一、開放事務を司る荒務局(拂下局)は奉天政府の役人達によつて近く鄭家屯に開設せらるゝこと、

一、土地の拂下價格は土地一方約三十三町步六百兩(約金千圓)なること、

一、土地拂下代金は奉天政府と達賴罕王府とが切半收得するも手數料其他の名義を以て差引かるゝ爲め王府の收得は代金の二割にも達せざること、

一、第一次に土地の拂下を受くる者は奉天官場の特別緣故者にのみ限られ一般支那人は三次四次と多くのブローカーの手を經るの他(ほか)土地購入の途なきこと、

一、結局一般人の手に入る頃には地價は一方地約二千兩(約金三千二三百圓)内外となるもそれでも滿洲の土地に比較して非常に安價なること、

等々であつた。尙彼自身は張作霖配下の某旅長の從弟であるが今回の拂下により旅長が當然獲得すべき土地の下檢分に來て居

るすなることを話した。これで漸くブローカー連中の暗中役躍は大體了解出來たが、併し開拓は何時頃始まるのかと聞けば彼の話では今にも始まるやうであるが何しろ拾萬町歩に亙る大面積の土地を支那式に悠々と測量區劃してからの事であるから早くて半年遅ければ一年先でなければ實現困難なものと私は睨んだ。

此話を耳にはさみつゝ附近の産業調査を進めて居る内に私はふとかう云ふ事を考へついた。此邊の蒙古人達は目前に開放の迫れるをも知らず、のんきに半農半牧の生活を樂しんで居るが近く開放と同時に彼等が追放の憂目を見るべき事は云ふ迄もない、併し彼等に入代つて來る支那人も其大部分は小作人と苦力とである、彼等は又過重な小作料と超人間的な勞働を地主から強要せらるゝ連中であつて其生活は決して幸福であるとは云へない。更に開放それに續く鐵道の開通に伴つて入り來るべき日本人を想像すると苦力達を相手の淫賣屋、モルヒネ賣、高利貸と彼等の生活を考へただけでも不愉快である。蒙古の一部には白耳義の天主教宣教師によつて開設された支那人耶蘇教植民地(チャイニーズクリスチャンセツトルメント)がある、植民地(セツトルメント)内の支那農民は衞生、教育、産業其他凡ての點に於て白人宣教師の指導を受け又支那官憲からの苛斂誅求を免れて頗る幸福なる生活を營んで居る。

我々日本人もまた支那人に對しても蒙古人に對しても一種かういふ[illegible]こゝに植民地を作ることが出來ないものであらうか。蒙古人達には牧畜の得意とする牧畜を營ませ、支那人には土地を與へて農耕に從事させ、又日本人には地域内の生産物や日用品の販賣をやらせて各々其分に安んじて幸福なる生活を送らしむる如き理想郷を造る事が出來ないものであらうか。支那人と蒙古人とは容易に雜婚し得る、日本人と雖も亦彼等との雜婚は可能である。然らば此理想郷に三民族の血を集めた一新民族を創造することは亦必ずしも不可能ではない。日本は今滿洲に滿鐵を經營して居る、然し之は百年の後支那に還付すべき性質のものである。滿鐵還付後の滿蒙に日本は一體何を殘すのか。我滿蒙經營不朽の記念として千年の後に傳へ得るもの此新民族の創造を除いて他により適當なる何者があるか。血は水よりも濃い、斯くして始めて彼我民族相互の衷心よりの親善は期待し得るのではないか。

新民族の創造はかくの如く有意義である。然し此理想郷の創設には少くとも壹萬町歩の肥沃なる集團地を必要とする。それには此開放地内の形勝の地を獲得することが最も適當である。而も之が獲得には今が絶好の機會である。然し又これが實現には尠なかざる資本を要する。壹萬町歩即ち三百方地の土地を得るには少なくとも三拾萬兩(約四拾八萬圓)を要する、之に各

種の施設費、經營費等を加算すれば約百萬圓となる、百萬圓は必ずしも大金ではない。併し場所は一般日本人の想像もつかぬ東部蒙古である。此計劃が經濟的に見て完全にペイし得る事と法律的に安全確實なる事とが證明されざる限り、此百萬圓を求むることは困難であらう、要は此計劃の法律的並に經濟的價値如何にある。

此計劃をまづ經濟的に見れば一つの土地投資である。滿洲の地價は海港を起點とする鐵道の哩數に反比例して定まる、換言すれば大連に近きほど高く遠ざかるに從て安い。具體的に云へば奉天遼陽附近の畑地一反歩の價格は金五六十圓であるが長春附近のものは金二三拾圓である。今四洮鐵道の起點となるべき滿鐵四平街驛を中心とし長春驛に至る迄の距離を半徑として滿蒙の平原上に一つの圓を畫いて見ると開放地の大部分は此の圓内に收まる。開放地の大連よりする距離は長春と大差なき事が分る。殘る處は自然狀態の比較であるが、氣候風土は兩者の間に大差なきのみか土壤の肥沃なる點に於ては開放地の一部は確に長春附近以上である、仍て鐵道開通後には開放地一帶の地價が少くとも長春附近のものと同一程度に達すべき事は何人にも豫想し得る所である。現在壹萬町歩に對する百萬圓の投資は數年先鐵道開通後には、二百萬乃至三百萬圓の價値として酬ひらる、筈である。更に年々の利益は此附近の最低地代を課するとするも、尚諸般の經費を差引いた純益が投資に對して年一割に利廻ることゝなる。若しそれ自分が多年の考案である此の土地に遼河支流の水を引用して所謂灌漑耕作をやるとすれば優に年二割以上の純益をあぐることが出來るのである。經濟的に見て何と立派な一つの投資ではないか。

更に此投資の法的關係を見ると大正四年五月締結の日支條約第三條に「日本國臣民が東部內蒙古に於て民國國民と合辨により農業及び附隨工業の經營を爲さんとする時は、民國政府は之を承認すべき事」とあつて吾々日本人は日支合辨の形式によれば開放地內に於て當然農業經營に從事することが出來るのである。又投資地內に於ける從事員の生命財產は形式的には隣接地鄭家屯に駐在する日本領事が之を保護するし一朝有事の場合にはこれ又鄭家屯駐屯の日本守備隊が出動して保護の任に當るであらう。若しそれ日常出沒する馬賊輩の如きに對しては鄕內の壯丁を以て自衞團を組織して追拂つてしまへば問題はない。

これで百萬圓の資本調達に對する說明の根據は出來た、此上はたゞ此計劃を決行するか否かにあるのみである。勿論日本人の蒙古進出を喜ばぬ支那官憲は種々の妨害を試みることであらう。然し彼等の不法なる妨害に對して私は飽迄鬪ひ得る自信が

おこ、其他の障害に會つても之を物にしつゝあるに足りていた。

私は此計劃の爲に起つて立たうと遂に決心した。

3

内蒙古方面に於ける買地的の話に事業計劃の「ヒント」だけは得たが之を具體化する爲には即ち土地買入れに對する見込を確實にする爲には土地開放に關する支那側の計劃の中心である奉天城裡に於て其筋の支那人に渡りを付ける外はない。

私が蒙地の産業調査を終へて大連への歸途奉天城裡に立寄つたのは大正五年二月初頭嚴寒の頃であつた。二三知合の支那人を訪ねてそれとなく相談して見たが、未だ蒙地開放計劃そのものが張作霖の近親者の間に於てのみ極秘裡に進められて居るものと見へて一向確かな手がゝりを得る事が出來なかつた。今はまだ時期尚早として空しく大連に引上げんとしたが、守田福松君を訪問して見よう、彼ならば或は多少這般の消息を解してゐるかも知れないと想つて私は馬車を返して城内に守田病院を訪問した。こゝで本事件に關して稍重要なる役割を持つ守田君其人に就て少しく語る必要がある。先年郭松齡事件の當時反將郭松齡と張作霖との間に奔走して專ら居中調停の勞を執らんとした守田某なる一日本人があつた。此奇怪なる日本人の出現に對し一部人は[illegible]る。その守田某とはこゝにいふ守田福松君で[illegible]天城内に自然病院を[illegible]、傍ら[illegible]くし支那人の心理に通じ支那官民の各階級から多大の信頼を受けてゐる點に於ては恐らく在支日本醫中の第一人者であらう。彼は醫者として張作霖一家を始め各大官富豪の家庭に出入して其技術に無限の信頼を受けてゐるに止まらず、彼の俠氣、熱誠、親切は多くの支那人をして醫者として以外に隔意なく種々樣々の相談を持込ましめるのである。彼をして郭松齡事件の渦中に投ずることを餘儀なくせしめたのも恐らく其結果であらう。

私の久し振の訪問、殊に彼にとつては曾遊の地蒙古よりの歸途の訪問を大變歡迎してくれた。彼の自慢の火鍋子をつゝきつゝ蒙古話に花を咲かせてゐると守田君は、

「時に貴下に極内密に相談があるんですがね」

と一寸改まつていひ出した。何時も眞顔でよく戯談をいふ人だから「何です改まつて相談とは」と笑ふと、

「私の極懇意な患者に閻廷瑞といふ男があるのです。其人は張作霖の特別の信任を受けて張作霖個人の御用銀行興業銀行の總辦をしてゐる、いはゞ財布の紐の番人なんですが、先生近頃一寸出

氣を出してルーブル相場に手を出したんです、始めの内は大した損でもなかつたさうですがだん／＼深入して今ではとう／＼百萬圓近くもすつたといふんです。併し何分張作霖の金ですから萬一發覺しては大變と先生氣が氣でなく密に私の所へ相談に來たのですが、何でも先生の話によると近々自身が荒務局長に任命されて達賴罕王旗の土地拂下げをやるんださうです、就てはですね、誰か日本人で其拂下地を引當に五六拾萬圓一時融通してくれる人はなからうかと云ふ話なんです」と守田君は熱心に話終つて私の顔を見た。

私は又今日訪問の要件を語り出さぬ内に彼に先手を打たれて流石に守田君であると今更彼の支那人間に於ける信用の絶大なるに驚きながら「實は私が今日貴下を訪ふた要件はそれなのです」と私の計劃の大要を説明した。守田君は非常に喜んで、

「それは丁度よかつた、今其男を呼んで貴下に紹介しますから早速話して御覧なさい」

と既にボーイに命令しようとするから私は輕く彼を押へて、

「いや一寸待て下さい、其人の要求は金なんでせう、こちらに資金調達の見込なしに徒に會つても突込んだ話は出來ませんから御紹介は資金の見込が立つた後に御願ひしませう、併し其人は此話を他の日本人の間に持ち廻るやうな事はありませんか」

と聞くと、其の心配は絶對にないといふ。

「それでは自分は大連へ歸つて早速資金の調達に奔走します、見込が立つたらすぐ出て來ますが、どうかそれ迄其人との連絡を斷たんようにして下さい」と、後事をくれ／＼も守田君に託して病院を辭した。

私が大連の滿鐵本社に歸つて中村雄次郎總裁に蒙古調査の復命をしたのは其翌日の午後であつたが、奉天から大連へ歸る車中でも此資金問題に就て一體誰に相談すべきかをいろ／＼考究した結果、私の立場として先づ滿鐵總裁に懇請することが順序であると思つた。だから私は調査の復命を終るとすぐ引續いて

「總裁、私は今回の蒙古調査に關連してあなたに折入つて御願があるのですが」

と例の計劃を詳細に亙つて説明し滿鐵の出資を懇願した。私の説明を謹直其者の如き恰好で熱心に聽いて居られた總裁は、

「君の計劃の主旨は國家的に見ても又人道上よりしても至極結構な事であり、又其内容は君が專門的に調べられた上の事であるから正確と信じます。さういふ仕事こそ日本が滿蒙で第一に着手しなければならぬ仕事であると思ふ。わたしは個人としては是非君の目的を達成させたいが併し君も知つてゐる通り滿鐵財政窮乏の現狀に於ては、殘念ながら直ちに君のいふ百萬圓の

出資に対する[illegible]に行かない、一[illegible]ことなどさ、[illegible]に責任に[illegible]すること[illegible]ない[illegible]術の所持を以て答へられた。[illegible]時に[illegible]事業を直後の不[illegible]方針を堅へると[illegible]は、其の[illegible]況時代で満鐵の収入は日々減少する許りである、収入を見込んで経費豫算を立てゝ居る満鐵としては各課所に豫算の返上と立直しを命ずるの止むなきに至つた頃であるから総裁の拒絶は一應御尤であると聞くの外はなかつた。併し何といつても大満鐵のことである。如何に不況時代と雖も真に総裁が私の計劃を理解して其必要を認むるならば僅か百萬圓出資の如きは殆ど問題ではない筈である。現に荒井泰治の計劃にかゝる南満製糖會社に對する百萬圓出資の問題が最初否決せられたにも拘はらず後藤新平からの電命一下前説を翻して可決となつた先例があり又名もなき一利權屋の土地投機に對する貳拾萬圓の出資が數年間執拗に拒絶せられたに拘はらず寺内ビリッケンからの簡單なる電報一本によつて承諾せられた實例もある。元來中村總裁は斯種の問題に自ら責任をとつて積極的に承諾する事の出來ない人である。出資問題に關して直接重ねての懇願は徒勞であることを知つた私は即座に、

「總裁の御言葉は誠に御尤と思ひます。併しこういふ機會を再び得ることは困難と考へますから私は今更此計劃を捨てるに忍びません。就ては私が他に於て資本を調達しました場合、満鐵[illegible]きぬ、と言明された。

これで自分はおほぴらに此計劃に奔走し得ることゝなつたもの、扨其資本の調達である。

三井か三菱か、彼等の資本は如何に大であつても我利以外に鐚一文出すものではない。然らば大倉か、支那事業を生命なりと稱する彼は飛びついて來るであらう、併し其結果はたゞ巨口翁の懐を肥すに過ぎないではないか。そんなら勧銀の資本か、彼は満洲から割増付債券によつて資金をかき集めてゆくばかりで決して満洲に出しはしない。東拓はどうだ、満蒙放資は定款が許さないと來るだらう(其當時は)。正金の特殊資金は、蒙古と聞いて後へ上るだらう、といろ〳〵煎じつめるとやつぱり満鐵に縋るの外はないといふことになる。

よし私も一つビリッケンからでも電報を打たせてやらうかと考へて見たが、不幸にして自分はビリッケンには一面の識もない。當時朝鮮總督として威望鷄林八道に赫々たる彼のことである、私の如き名もなき一野人に對しては恐らく面接の機會をさへ容易に與へないであらう、況や電報をやだ。併しどう考へても此場合彼に縋る事が他の何人によるよりも一番有效である。

軍人を說くには軍人によるに限る。適々參謀本部の小磯國昭少佐（現陸軍省整備局長小磯少將）が調査班の一隊を率ひて蒙古から旅順に引上げて來た。彼は自分の蒙古研究の同志であるのみならず年來兄事せる畏友である。私は早速彼を旅順の客舍に訪うて寺内總督との面接問題を議した。話半ばに彼は「一寸相談する人がある」といつて出掛けて行つた。が間もなく歸つて來て、

「今、西川參謀長の所へ行つて君のことを賴んで來た。參謀長は近々會議の爲に朝鮮經由で上京されるさうだ、途中京城で寺内總督に敬意を表される筈であるが都合によつては君を同行して紹介の勞をとつてもよいといつて居られた」と彼は私が此間から思案に餘つた難問題を苦もなく解決してくれた。

「いや、それはどうも」といはんとするのを遮つて「いや感謝は未だ早い、その代りに參謀長は明朝君に會つて君から直接話を聞いた上で決定するさうだ。要するに明日は君のメンタルテストだ、しつかりやれ、俺も聞きに行く、明朝は七時だ、早いぞ、終り。さあ飲みに行かう」と何處迄も彼らしい話である。

翌朝彼に伴はれて參謀長官舍に西川少將を訪ねた。少將は高級參謀の田村大佐と共に愛想よく私達を迎へられた。一見重厚の感あるどつしりした人である。小磯少佐の紹介によつて初對面の挨拶がすむと西川少將は、

「君は蒙古の事情に精通して居らるゝさうだが今日は一つ蒙古の產業開發に關する君の御意見を聞かせてくれ給へ」と至極落付いた調子で問ひ出された。

私は蒙古地圖を借り受けて之をテーブルの上に擴げ得意の蒙古產業開發論を長講一席、序に之に關連したる私の事業計劃迄詳細に亘つて說明した。聽き終つて少將は如何にも同感らしい顏付をしながら、

「いや有難う。君の御意見は吾々にも非常によい參考になつた。時に君の計劃に要する資金だね、それが百萬圓位ですむのならば必ずしも朝鮮迄行く必要は無いと思ふがね」と自信ありげな話である。

「何處か御心當がありますか」私は參謀長の顏を見上げて、ふと「ははアあの金だな」と思ひ當つた。金の在處を軍人に聞く其頃の私も亦迂濶千萬ではあつた。

「君、民政長官を說きつけ給へ。無論我輩も助言はする、今電話で都合を聞くからすぐ長官官舍へ行き給へ」と軍人だけに話は早い。

白仁民政長官（前郵船社長）には豫て面識はあつた。先生身を持すること頗る謹嚴、容易に人を近けず人の言を信じない、其

代り一日信じたら最後生命を辭せない古武士のごとき性を有する六ヶ敷い人である。此の長官が何と思はうとも私は說きつけねばならぬ。旅順日露を一望の内に収め得る長官邸の二階の應接間で官服姿の長官と對座しつゝ事業計劃を前に擴げて約二時間に亘り諄々と說き、且土地買收に要する資金の支出を懇願した。私の熱心なる說明を聞いて居るのか居ないのか長官は默々としてたゞ時々顎の山羊鬚を撫でてゐるばかりである。自分の長談議が漸く終つても長官は一切可否をいはない。たゞ最後に「いや篤と熟考しておきませう」と答へたばかりである。甚だ手答がないが宜しく御願して引退るの外はない。又明日だ。

翌日は早朝からつめかけた。今度は事業計劃に對する長官の質問である。此人は其壯年時代に北海道拓殖部長を勤めた經驗がある、従つて其質問は微に入り細に亙つて容易につきない。此問題に關しては私は確信を以て一々明快に應答した。流石の長官も事業計劃にけちをつけて逃るゝのすべなきに至つた。それでも未だノーイエスとは言はない。

其翌日も押しかけた。これで三度目である。此日は土地買收の手續に就て詳細なる質問を受けた。例によつて一々明答を與へると始めて長官は莞爾として、

「いやよく了解ました、それでは土地買收資金三拾萬圓を限度として支出せらるゝことゝしませう」と私は答へた

三拾萬圓は自分の要求の三分の一にもならない、然し乍ら手に入れば經營資金は他に求め得るの方法もある。されば何とかならないだらうと思つて

「有難う御座いました。それでは其三拾萬圓は何時でも支出して頂く事が出來ますか」と尋ねると長官は

「いづれ現場を私の方の技師に見せた上其報告に基いてほんとの決定を致しませう」

自分は此答を聞いてムッとした。憤然として

「いや私は此間からの長官に對する私の御願を只今撤回致します。私は蒙古地方の産業の調査研究に沒頭して以來既に三年になります。然るに長官が私の報告を信ぜられず何も知らぬ御役所の技師を僅か一二週間出張させ其報告に基いて支出の決定をされると云ふとは私の研究に對する非常な侮辱だと信じます。元來此事業は私自身の利益の爲にやるものでない事は長官もよく御了解下さつた筈です。總成が滿鐵在職の儘私に此計劃に從事することを許されたのも、よく私の精神を理解された上の事と信じます。然るに只資金を得る前には私の研究の權威をも捨てなければならぬといふ事は、到底私の耐へ難い所であります。」

と痛言私は斷つて歸らうと思つた。長官は微笑をたゝへて

「いや君さう誤解をしてはいかん、それはたゞ形式だ。役所の金を出すには役所に機關がなければ兎に角機關がある以上それを通じておかなければ萬一の場合に申譯がない。役所の技師が現場を素通りして君の報告を引寫して出して差支がないのだ。自分からも其邊はよく技師に申付けて置くからそれに關係なく君は一日も早く土地買收に着手し給へ、君の精神はよく分つとる」と、溫言を以て訓された。聞いて見ればそれも尤な話ではある。

旅順で資金が得られようとは私の夢想だもし得ない所であつた。併しこれで自分の最も難關とした差當つての資金問題も解決された。私はそこで一應大連に引上げた。とりあへず其經過を總裁に報告するつもりで總裁社宅滿洲館に立寄ると中村總裁は快く迎へ入れて、

「二三日見えなかつたやうだが、どうぢや資金の方は」とニコニコしながら尋ねられた。自分が資金調達の苦心と經過とを報告すると總裁は破顏大笑して、

「僅か二三日の苦心で御役所の金を三拾萬圓引ぱり出したのは、そりや大成功ぢや。いやわたしも過日君の話を聞いてこりや援助せなければならぬとは思つたが、餘り簡單に引受けては却て君の爲にならぬと考へて控へとつたのぢや。然し御役所が三拾萬圓出す以上不足の分は滿鐵が補はねばなるまい」と頗る上機嫌であつた。然し最後に、金錢出納には別に人を選むこと、私自身は專ら交渉と計畫實施の指導監督に當るべきことを注意された。總裁の注意を待つ迄もなく金錢出納の責任者に就ては自分も考へてはゐた。適々鐵嶺からHとSの兩人が偶然前後して出て來た。Hは鐵嶺商品陳列館長であり、Sは三井物産の出張所主任であつた。

兩人共日露役の特別任務に服した程の支那通である。商業上の關係から蒙古に出入する內に白音太來の將來に着眼し三井を辭したSは白音太來の市街地投資を、又Hは附近の農業投資を計劃して共に資金の調達に就て私に相談に來たものである。Sは同文書院出身の青年實業家であり、Hは軍人上りの中老事業家であつた。

兩人共我利で虫のよい點に於ては敢て人後に落ちない方であつたが、それでも他の多くの滿洲事業家に見るが如き放縱な所は少なく、其上Sは計數に綿密なる點に於て又Hは一文の錢を半分にわけて使ふ程の細かき點に於て各々一種の特徴を持つてゐた。金庫を預けて金錢の出納を托するには共に得難き適材である。私は兩人を推薦してSを關東都督府關係出資の金錢責任者たらしめ、Hを滿鐵關係出資の責任者たらしめた。

計劃は既に成り資金漸く整ひ役者も亦出揃つた。さて愈々交渉開始だ。併し活動に入る前にも一つ大連で手配をして置く必要なことがある。それは新聞への諒解である。奉天官憲を相手の我々の行動は秘密の上にも秘密を要する、然し狭い滿洲の田舎では我々の活動は人の眼につき易い。私は遼東新報に大來主筆、滿日新聞に田原主筆を訪ねて計劃の大要を話し充分なる諒解を得ておいた。

尚大連に在て私の活動に熱誠なる後援を與へてくれた二人の先輩があつた。其一人は滿鐵の村井地方課長(現滿洲銀行頭取)で、一人は都督府の大内大連民政署長であつた。村井氏は壯年の頃朝日新聞北京特派員として義和團事件の際北京籠城記をものにして文名を擧げ又露滿秘約をあばいて日露開戰を促がした村井啓太郎氏である。大内氏は後藤新平幕下の逸材として早く獨逸に留學しボンメルンの政廳に於て獨逸の行政事務を見習ひ歸朝後は臺灣總督府參事官、關東都督府參事官、外事總長を經て大連民政署長となつた大内丑之助氏である。

由來大連は難治にして民政署長の更迭頻繁を以て有名であつた。之れ一に阿片其他の利權問題の誘惑による所多かつた爲であるが大内氏就任以來八年の久しきに亘つて些の醜聞なく氏が其後宮尾舜治の民政長官就任を見て其配下たるを潔しとせず官を辭した際の如き大連市民は氏の窮乏に同情し養老資金を集めて二萬圓を贈呈した。

都督府に於て[illegible]内田長官にも[illegible]して当時の支那[illegible]事を[illegible]のは一に大内氏の盡力の賜であつた。大連に於ける[illegible]我々の行動の中心を奉天に移さねばならぬ、然し既に奉天官憲の内部に土地賣却の希望者あり我々の手に周旋なる資金の用意ある以上土地買收はたゞ手續と掛引の上に多少の面倒あらんも、さ迄の難事とは實は私も想像してゐなかつた。所が好事も魔ともいふべきか明日出發の今日になつて奉天側からの情報によれば、あれほど資金難に困つて斡旋を頼んでゐた閻延瑞がけろりと斡旋を斷り土地問題を持ち掛けても何故かそれに觸れることを避けだした、其原因一切不明とあつた。今となつては一閻延瑞の向背の如きは大した問題ではないが資金調達の説明に當つて總裁や長官から「土地は必ず買へるか」との質問の際「必ず買へます」と確信を以て答へ得たのは一に閻延瑞の話があつたからである。然し我々は如何なる方法を講じても當初の目的を達する外はないのである。

私達が活動の中心を奉天附屬地の瀋陽館に移したのは其後間もないことであつた。當時我々が支那官憲を相手に表面の交渉をするには表、側の兩門があつた。表門は奉天總領事館であり側門は滿鐵の奉天公所である。其後今一つの裏門が出來た。それ

は張作霖の軍事顧問であつた。凡そ如何なる交渉でも此各ゝに適當なる諒解を得ておかなければ裏面に廻つて打こはされる恐があつた。

當時總領事館には、現スイス公使矢田七太郎君が總領事代理を勤めて居り、當今日支交渉の立役者である林出書記官が一書記生として勤務してゐた。矢田君は上海總領事時代に修業して田中俺が外相に栖つく程の支那通になつたが其頃は「君一體此邊の支那の百姓は何を食つて居るだらう」と飛んでもない質問をする程の幼稚さであつた。私は總領事館の交渉に何の期待をも持つてはゐなかつたが案の如く單に外務本省への報告をしたに止まつた。

又奉天公所には田中俺が總理の支那掛を勤めた佐藤安之助君が去つた後鎌田彌助君が所長として滿鐵關係の交渉を一切引受けてゐた。鎌田君は張作霖とは日露役以來の盟友であり張と膝を交へて談笑の中に事を運ぶには得難き適材であつた。然し滿鐵の直接の仕事なら兎に角私達の計劃は滿鐵當面の仕事ではなく殊に張作霖自身の利益に關係したデリケートな問題であつた爲めに怜悧なる彼は我々を辭令巧にあしらつて其交渉に觸るゝ事を避けた。然し屢ゝ我々に有力確實なる情報を供給してくれたものである。要するに我々は交渉機關を通しての交渉に望を囑する事を得ず自ら其衝に當つて道を開くの外はなかつた。

かくして我々が最初にぶつかつたのは奉天省の總參議W君であつた。Wは壯年時代に外國語學校教師として日本に在つた關係から日本語も巧であり又日本の事情にも精通してゐた。奉天政府部内に在ては對日交渉のリーダーとして次第に重きをなし一面無學な張作霖の智囊として彼を盛立てゐるに與つて力のあつた人である。當時彼は病と稱して遼陽城裡の自邸に引籠中であつた。自分とSとは彼に面識あるを幸に彼と昵懇の間柄なる奉天公所の横山吏弓君を介し遼陽に彼を訪ふことゝした。

便服姿のW君は我々を喜び迎へて洋室まがひの應接間に招じ入れた。四方山の話の後、私は、

「時に今日我々が御伺ひした要件は少し農業投資をやるに就て特に貴下の御盡力を御願に上つたのですが」と切り出すと

「滿洲の農業なんて、昔から六分に廻つたらよいとしたものです。そんな薄利な仕事に投資しても詰らんじやありませんか」と理財家で有名なW君は中々通な事をいふ。

「いや、所が尠くも一割以上場合によつては二割近くにも廻る仕事なんです」

「それは一體何處ですか」

「蒙古です」

「[illegible]」

「達爾罕王[illegible]」

W君は驚きの眼を見張って

「どうして貴下方はおすこを知ったのです?」と問ふから私はW君の如き從來日本人に對し常に好意を以て諸種の事件を處理して來た人に變な風の隠しだてをして氣まずい思ひをさせても惡いと考へてこの計劃其他を少しも隠す所なく一切打明けて話した。所がW君は見る〳〵困惑の色をたゝへて手をふりながら

「ほかの事ならどんな盡力でもしますが、此問題だけはどうか許して下さい」

「それは又何故ですか」と私の質問に對してW君も亦隠す所なく其眞相を語り出した。彼の話によると――

張作霖があの土地に眼を着け始めたのは、決して昨今の事ではなく彼が壯年時代馬隊を率ゐて盛に蒙地に活動した頃からであると云ふ。爾來彼は達爾罕王の歡心を買ふことに腐心し王が奉天出府の際の如き歡待至らざるなく遂に王子に配する彼の娘を以てする婚約さへも敢へてした程である。其間にも土地拂下のことは屢々持ち出したが何事も易々諾々たる王も此要求だけには頑として應じなかったさうである。とう〳〵業を煮やした張作霖は達爾罕王の北京出府を見屆けて拂下に必要なる一切の書類を準備しW君を同伴して上京した。一夕旅舍に來寄せて達爾罕王を招待し席上書類を突つけて王の調印を强求したさうである。然し王は該地の拂下は旗下人民の生[illegible]

「さう云ふ事情で拂下られる土地なんです、それを私が日本人の貴下方に密に賣る盡力をしたなどと云ふことが知れたらどうでせう。私の職務上の首でなくほんとうの此の首が飛んでしまひますよ」と君は苦笑しつゝ片手で首を切る眞似をした。

「成程御話を聞けば貴下の御斷りは御尤ですが、然し張さんは一體あの土地全部を自分で專有するつもりでせうか」と聞くと、

「いやあれは勿論一部分は張さんがとるでせうが一部分は部下の功績に酬ゆる爲に分配するらしいのです」

「それでは分けてもらった人々から其土地を我々の爲に買って頂くわけに行きませんか」

「それは先行出來ないことはありませんが、今直ぐといふわけには行きません」

「いや今直ぐでなくとも結構です」

「然し其話を一人一人に持ち出すには大部運動費がいりますよ」とW君は笑って話した。

「必要な運動費は勿論我々も覺悟してゐます」

「さうですか、それでは貴下方こゝに默って私に六萬兩を預け

ることが出來ますか。その金を何處で誰に使ふか一々聞かれては困るが。「六萬兩は約十萬圓である。五拾萬圓の土地を買ふのに拾萬圓の運動費はちと多過ぎるが、今更値切るわけにも行かない。

「宜しい預けませう、然し其金は今直ぐいりますか」と聞くと

「いや、それは限度を六萬兩と定めて置いて必要の都度に出して下さつてもよいのです」

「承知しました。それでは將來共充分の御盡力を御願します」

W君もやはり支那人である。金の話がきまると急に乘氣になり出して、

「宜しい、然し貴下方も私の誠意を疑つて心配されてもいけませんから、仕事のすむ迄私の弟を大連につれて歸つて下さい」

と支那式に人質提供を持ち出した。之には一寸驚いてSと顏を見合せたが、

「いや我々は貴下を絶對に信じて居りますからそれには及びません」と人質だけは斷つて辭去した。

W君との會見によつて張作霖と拂下地との關係が非常に明瞭になつた、それと同時に我々は尋常一樣の手段では我々の目的を遂することの容易でないのを知ることが出來た。W君は我々に盡力を誓つた。勿論彼は相應の盡力はするであらう。然し彼の力によつて贖ひ得る土地は張の取前以外の土地である。取前が拂下地中最上の土地である可きは問はずして明である。苟も我々が蒙古に土地經營を目論む以上最上の地に據らずしてどうして成功を收むる事が出來よう。我々は如何なる方法を講じても張作霖のライオンセヤー其者を狙つて目的を遂せねばならぬ。それには張の一喝に震へ上るやうな奉天官場の役人共を相手の交渉では到底其目的を遂することは覺束ない。全然別種の手を用ひねばならぬと考へつゝ、遼陽から再び奉天に引上げた。（未完）

若き學徒は戰ふ

—學生社會科學運動の横顏—

菊川忠雄

『この階級鬪爭がいよ〳〵決戰の時期に近づくときには、支配階級の内部に於ける、即ち、舊社會全體の内部に於ける分解過程が極めて活潑で明瞭な性質を帶びて來る。そして支配階級の一部分は自らその所屬を脫して、××的階級に、即ち、未來をその手中に掌握する階級に來り投ずる。故に嘗て貴族の一部分がブルジョアジーに投じたと同樣に、今やブルジョアジーの一部分、特に、この歷史的運動を理論的に理解するに到つたブルジョアの思想分子がプロレタリアートに投ずる』——カール・マルクス『××黨宣言』から。

×　×　×

インテリの黎明

1

私の記錄は、「一九一八年八月の『米騷動』に引き續いて起された、日本インテリゲンチャのブ・ナロード——人民の中へ——の運動と共に始まる。

米騷動は通り魔のやうに過ぎ去つた。ブルジョアジーにとつては惡魔であつた。だが、日本の民衆にとつては、時代の曉を告げる、愛すべき天使であつた。

民衆は、支配者の恐れるものは何であるか、民衆自身の要求するものは如何にして求めればよいか、また、求めなければならないのか——それをはつきりと、この一ケ月足らずの事件の經過の中に見拔いた。

自分自身の要求を力強く主張する組織を持たなかつた民衆、抑壓せられるまゝに默して來た民衆、彼等はロシヤ革命と物價騰貴とストライキの波に乘つて進出した。米騷動に乘り上げた。そして學んだ。彼等自身の創造力を知つた。この教訓は、民衆の心臟を力強く打つて、次の日の生長を刺戟しつゝあつた。

『この度の暴動に現はれたる由々しき思想上の傾向に三つのものがある』——ブルジョア政府の地方局長某はいふ——『一、騷げば米が下ると思ふ樣な誤れる風潮、二、富豪其他の寄附が當然の如く考へ、潛在的に富に對

る觀念な惡化した傾向、三、厭賞に馴れ其の廢止等に對して抱きそうな或る××』。『だが然し』――今度は別の政府當局はいふ――『今度の騷ぎに限り、社會主義者其他が何等煽動した形跡がない』

たしかに、日本の民衆は、社會主義の何たるかを知らなかつたであらう。しかし、日本の民衆は、社會主義を行ひつゝあつた。日本の社會は急速に變化しつゝあつた。日本の民衆はテンポを速めてゐた。

2

一九一八年の秋、東京帝國大學法科研究室の一室、そこは、その頃のデモクラシーの提唱者――法學博士吉野作造氏の研究室である。

今から一昔前の法學研究室はうすぎたないものだつた。震災に燒かれ、こはされて、そのあとにアメリカ弗で復興した今日の大學からは想像もつかないものだ。一昔の間に大學は變つた。そして、この大學の建物からは、左傾學生と赤化教授が、復興工事の人柱のやうに追放されて行く。かうして復興する大學は同時に歴史的存在、――民衆の眼から文献を隔離するに役立つ圖書館！　後世の建築史家のために役立つであらう講堂の完備！　そこで講義するプロフェサー達は『諸君、大學は國家の機關である』と前置することを忘れない。右も左も！　――となりつゝある。

しかし、一昔前のうすぎたない研究室と古ぼけた講堂は、なほ幾分かは、明日のための存在であつた。

うすぎたないなりによく整理された部屋の窓際の机に凭つて、吉野博士は、年中行事の學年試驗の答案を展げてゐる。博士は、近頃二三年來、數多い學生の論文の中から『變り種』を發見することに興味をもつて居る。教授の講義と別個の內容を盛り込み、教授の學說を無遠慮に乘り越えて進むやうな論文に出喰はしたとき、最初の程は、人好しの顏をしかめた。しかし、博士が好むと否とに拘はらず、かうした『變り種』は年と共に數を增して來た。その內容も大いに整つて來た。博士は、ともすれば、その『變り種』から、或る種の學問的な威脅を感ずることもあつた。そして、博士は『變り種』を相當の好感を以て迎へるやうになつたのである。

これらの『變り種』の論文は、博士の記憶によれば、歐洲大戰の始まる頃からぼつ／＼現はれて年と共に共通の立場を見出して、そこから一齊に、博士のデモクラシーに肉迫を試みてゐるやうに感ぜられた。これらの學生達は、最早、試驗を彼等の點取りの舞臺とも、彼等の運命を決定する生存競爭の舞臺とも考へてゐないやうであつた。そんなことは無頓着に、力强い何物かに動かされ、力强い何物かを捉へやうとして突き進んでゐるのであつた。

『一ノート三十年』といふ講壇生活の別名がある。――鐘が鳴る。學生達がめじろ押しに席を占めて居る。教授が古いノートの或る頁を開く。その日の行程をのどかに讀み續ける。學生達はペンを走らせる。教授の讀み聲が途切れる。學生達が顏を上げる。不幸にして、教授のノートのその部分は、教授が恩給のゴールに達しないうちに、早くも磨り切れ

[illegible]

今度は門松、櫻、蓮といふ學生生活の分類がある——年改つて門松の立つ頃にノートの第一頁を綴る學生は銀時計組、櫻の梢に蕾のふくらむのを見てノートを展げた學生は及第組、不忍池に白蓮紅蓮の蕾を破る音に悦しくノートを取り出した者は落第組と相場が決つてゐる。赤門の學生達は、松組、櫻組、蓮組として市場に取引されて行く。

『ノート三十年と松櫻蓮』、このアカデミーの傳統に反逆する力は何所から出るのであらう。博士は米騷動の中に正體を現はした民衆の力、米騷動の後、都市から農村へとヒタ押しに浸して行く社會運動の波、この波が大學の扉に寄せては碎ける有樣を想像した。

『そうだ！この民衆の聲に應じて大學の扉を中から開くのは彼等だ。日本のナロードニキ！』

博士は自らの青年當時、一切の反對と嘲笑を一蹴して、我と我魂をキリスト教の洗禮に投げ出したことを思ひ浮べて、これらの青年のために心から祈つた。

3

私は、ただ、幾つかの[illegible]行かなければならない。

京都は古典の都である。所が、時折そこから近代的な烽火が打ち揚げられる。これは不思議でも何でもない。勞働者の大衆と資本の搾取とそして近代的なインテリの惱みが、この古典の都のヴエール一枚下にはね返つてゐるからだ。

この京都の近代的烽火の出發をなしたものは、一九一七年の友愛會京都支部の創立であつた。この支部は、二年足らずのうちに、三千人の會員を擁して、當時の友愛會中全國有數の勢力であつた。そこでは、勞働者と學生の會合が數々行はれ、一九一八年九月には、京大基督教青年會館に集つた人々——勞働者二十名許りと學生十名許り——によつて『勞學會』が組織された。

この秋、東京帝大緑會(法科)辯論部の新任委員達は、例年の東西兩大學聯合演說會に出

[illegible]

京都勞學會の連中は、東西聯合演說會を間近かに控へて、一つの『陰謀』に耽つてゐる。大學院學生で、友愛會京都支部創立以來の運動に參與してゐる高山義三君、その協力者吉市作彦君其他の學生の他に、その頃では珍らしい開放的なタイプの青年インテリが交つてゐる。彼の物腰には、何所かに勞働者の環境から輸入せられた或るものが漂ふてゐる。彼がこの『陰謀』の中心人物らしくも見える。

『野坂君も、東京で知識階級の援助が欲しがつてゐる。よい機會だからな。東京の連中を來たときのまゝで歸すのは勿體ないよ』

彼は一座を煽つてゐる。

彼とは久留弘三君、野坂とは野坂參弍君である。久留は早稻田大學を出て、また、野坂は慶應義塾を出て、共に、大正五年以來友愛會に這入つて活動して居る。この兩君に松岡駒吉君を加へれば、之が『友愛會五年組』で、

く會内に重きをなしてゐた。野坂君は東京の本部に、久留君は賀川豐彦氏と協力して友愛會神戸支部に働きながら、傍ら、東西呼應して、青年インテリの吸收に努力してゐた。

『向ふから來る連中では、赤松、宮崎、石渡等だね。……』

久留君は一通の手紙を持ち出した。

『この手紙には、宮崎のことを、三十三年の夢をデモクラシーで染め更えしたやうな男だと書いてある。宮崎滔天式で實行的な男らしいね。』

『三十三年の夢の染め更へしはよかつたね……』

朗かな笑が爆發する。一座は東京の連中を說伏するといふアンビシヨンに燃えてゐる。

赤松、宮崎、石渡の諸君が意氣投合して、緑會辯論部とは別個に『新人會』の組織を打合せたのは、この演說旅行の歸りであつた。勞學會の『陰謀』は成功したのだ。

『都の西北』早稲田の森。そこでは『自由の學府』がブルジヨアジーの學閥に變質しつゝあつた。

赤門の教授先生達が、大學の講義半ばに閣議に迎へられて、腕車に風を切つて飛んで行く。その後姿を羨しげに學生達が見送る。これは明治時代の赤門風景の一つであつた。この官學風景に對抗した早稲田の風景――破帽弊衣、下駄をツッカケて教室を濶歩する――こそは、まさに官僚に反抗する姿であつた。しかし、日本の資本主義が急速に發展して、官僚とブルジヨアジーが握手するに應じて、私學風景の影は薄くなつて行つた。

鳥打帽の學生が早稲田の校門から追ひ返される。今度は學生の一團が、『土足嚴禁』の制札を嘲笑するかのやうに、下駄履きのまゝ教室に通らうとする。梯子段の下に張込んでゐた學生監が躍り出て來る。學生との間に取組み合ひだ。昂奮した學生の群からは『自由の學園』の校歌が湧いて來る。ブルジヨア化する自由のために逐られる若きソセダニヤンの挽歌である。

一九一八年春、早稲田の校門には鐵條網が張られてゐる。學校を占領した學生の[illegible]らは『森陰暗く月落ちて!』の悲壯な戰の[illegible]が、夜を日に次いで流れて來る。この一份の戰ひのスローガンは『大隈夫人の銅像建設反對!』であつた。しかし、大山郁夫、永井柳太郎、天野爲之の諸氏に率ひられたソセダニヤンの胸に燃ゆる憤りは、早稲田の官僚化に對するそれであつたのだ。

その頃、東京の友愛會本部に出入するインテリを中心として、勞學會の活動が始められてゐた。そこには、早大教授北澤新次郎氏、早大出身の丸岡重堯、學生の和田巖の諸君があつた。之等の諸君を通じて、早稲田の若き學徒は、ブルジヨア化する自由の學園の運命を冷やかに見透しつゝあつた。

4

同じ年の十一月半ばのことだ。都下の新聞は、この日の夕方から神田の南明倶樂部で行はれる筈の、吉野博士對浪人會の、『デモクラシー討論』立會演說會のことを書き立てゝゐる。

東京帝大二十二番教室[illegible]五、六百名の學生の熱氣で熱し上されてゐる。法科緑會弁論部の臨時總會が開催されてゐるのである。スローガンは『浪人會を葬れ！』『吉野博士を守れ！』ら。

悲憤慷慨の學生が替る替る演壇に立つ。拍手と歡聲が壁に反響する。すべての事柄に冷靜をモットーとするアカデミーには、三年に一度位襲つて來る熱狂の嵐である。

一人の學生が、彼の緊急動議の熱辯を終らうとする。

『……諸君！然り行動である。我々のなすべきことは、南明俱樂部に押しかけることである。この會場に燃ゆる、何物をも燒きつくす熱を以て、浪人會一派の暴虐を燒きつくすことである。』

『……浪人會一派は、吉野先生を葬ればデモクラシーは死滅するものとの錯覺を以て、夜となく晝となく、吉野先生の身邊に迫つて、卑劣なる行動を續けて居るのだ。我々は、今ぞ、彼等反動者流に時代を知らせてやらなければならない。一吉野の背後に無數のデモクラットのあることを見せてやるのだ[illegible]……』

拍手と歡聲が[illegible]かけて居る。

『諸君……見給へ！昨日までデモクラシーの提灯持ちをした各新聞と學者達は今何をして居るか。先日の大阪朝日新聞が筆禍事件以來、浪人會一派の脅迫に會つて縮み上つてしまつたのだ。彼等は一夜にして變節したのだ。我々の吉野先生のみは四面楚歌、反動の嵐の中に敢然戰つてゐる。浪人會一派、否、軍閥者流に對する攻擊の手を緩めないのだ。……』

『浪人會對吉野先生の戰ひは、自由の學府が軍國主義の馬蹄に蹂躪されるか、民衆の手によつて擁護されるかの決戰だ。軍國主義を謳歌する者は去つて浪人會に附け！だが、大學の文化的使命に忠實ならんとする學徒は、この時こそ、吉野先生と共に戰へ……諸君！もういふことはない。行動だ。身を以て當ることだ。一人殘らす、南明俱樂部へ行かう。浪人會を葬れ！吉野先生を守れ！』

南明俱樂部の立會演説は、吉野博士の、そ[illegible]しく。[illegible]

ここに[illegible]して[illegible]せず、[illegible]かへつた。[illegible]的な大衆的示威運動が、その後の[illegible]を中心として展開せられた。この民衆の威力は、反動勢力を縮み上らせた。そしてまた、民衆の一人々々は、今更のやうに時代の力を痛感した。恰も穴倉の中で自分の叫聲で自分の耳を驚かした人のやうに。

吉野博士を守つた群集の一部分が、引き切りなしに、お茶の水の橋を渡つて、本郷通りに流れて行く。昂奮と感激から、覺め切らない幾組かからは『吉野博士萬歲！』『デモクラシー萬歲！』『勞働者萬歲！』等の叫びが上げられ、その度に群集の流れがどよめく。

本郷通りに這入つた學生の一隊からは『デモクラシーの歌』が歡喜そのもののやうに、夜更けの街を流れて來る。

一、東方の眠り久しき國の兒等
　今燃然の新たなる
　光明に覺む嬉しからずや
二、閥族と阿[illegible]と利己と曲學の

力合せて塞ぎたる
世界思潮の濤ほとばしる
三、空ひたす世界思潮に身を乘せて
立てる姿を今見よや
至高學府の青年の意氣
四、權勢の前に土下座を強ひられし
時を去ること五十年
奴隷の夢は今ぞ昔ぞ
五、世は移り時は過ぎ行く、何時までか
意氣の青年、閥族の
奴隷となりて身をせばむべき
六、閥族の垣と呼ばれし不祥の名
今ぞ雪がん赤門の
健兒の意氣を人々よ見よ

5

その夜の群集の中には、帝大の他に、早大、法政、明治、日本、一高等の各方面から集つた學生が居た。彼等の多くは辯論部の學生であつた。彼等は今迄數多くの雄辯を聞いた。それから見れば、今夜の吉野博士の演說は、この種の雄辯とは言へなかつた。それでゐて、今夜程、熱と力を與えた演說はない。眞理を生かすために、數百の學徒が民衆の中に躍動する姿を彼等は見た。勞働者と學生が一體となつて進行する前には、一切の頑迷がケシ飛ばされた。彼等の心臟は、この夜の光景の中に、歷史の齒車が一刻み廻轉するのを經驗したのだ。

彼等は今迄『力』に憧れてゐた。それは、一切の現存する惡と不正とに抗爭する『力』である。宗教を考へ、人道を考へ、英雄を考へてゐた。日蓮、キリスト、トルストイ、ニーチェ、曰く何、曰く何。正義と眞理を生かす力を求めてゐた。だが不幸にして、その力は、彼等の思索と構架のうちには見出せなかつた。彼等はともすれば、灰色の人生、ニヒリズムの世界にさ迷ひ勝ちであつた。

しかし、今夜こそ、眞理と正義を生かす力を見たのだ。ブ・ナロード！　民衆の中に躍る若き學徒の戰ひの中に！

民衆の進出に勇躍した、リベラリストとデモクラットの學者評論家の一團が、吉野博士、福田德三博士を中心として、黎明會を組織し（一九一八年十二月創立）民衆にデモクラシーを呼びかけたのも、この思想戰からであつた。

東京帝大法科學生のうち、リベラリストとデモクラットの一團が、宮崎龍介、赤松克麿、石渡春雄の諸君を中心として『新人會』の旗を公然と揭げて、『民衆の中へ！』乘り出したのも、その頃（一九一八年十一月末）であつた。

そこには、本所永峰セルロイド工場に働く、渡邊政之輔、菴澤義夫等の青年勞働者諸君、それから、麻生久、棚橋小虎、山名義鶴、佐野學等の若き法學士諸君も加はつてゐた。その一團の進む先頭に揭げられた旗は次の綱領であつた。

一、吾徒は世界の文化的大勢たる人類解放の新氣運に協調し之が促進に努む。

一、吾徒は現代日本の正當なる改造運動に從ふ。

また、都の西北の黎明を代表する民人同盟が、早大講堂に發會式を擧げたのも、此頃（一九一九年二月）であつた。

彼等の宣言は、インテリゲンチヤの黎明を謳歌してゐた。

『…而して此等世界的使命遂行の必然的

前提として吾等は自由[illegible]
階級の協力を求めなければならぬと同時
に、彼の頑迷者流の時代錯誤の思想を撲滅
し、デモクラシーの普及及び徹底に依つて
新時代の陣頭に起たねばならぬ。最早、噴
火山上に舞踏を演ずるの愚を學ぶときでは
ない。吾等は飽くまでも此の主張の下に一
切[illegible]
る[illegible]に[illegible]
からである」
高橋清吾、北澤新次郎氏等の教授、和田巖、
高津正道、稲村隆一、淺沼稲次郎、三宅正一
等の學生諸君は、この同盟の開拓者であつ
た。

デモクラシーを越えて

1

近ごろ流行のデモクラシー
高い教壇で反りかへり
口角泡を吹きとばす
これが學者の飯の種
デモ、クラシー、デモクラシ
新聞雜誌の切抜きで
その日ぐらしのデモクラシー
解放せ、解放せ、解放せ
インテレランスだ、解放せ

こうした流行歌『解放節』が、一九一九年の夏の勞働者街を流されて行く。その勞働者街は、未曾有のストライキの波に洗はれてゐた。米騒動の後、しばらくは、デモクラシーのバリケードの陰にかくれて、徐に進出の準備をしてゐた日本の勞働階級は、今や一齊にデモクラシーを乗り越えて進出してゐた。

五月には、渡邊政之輔君等の働らく永峰セルロイド工場を中心として、新人セルロイド職工組合が組織され、七月には、その工場はストライキの波に乗つてゐた。

三月に創刊號を出した許りの新人會機關誌『デモクラシー』は、早くも六月には改題問題が起り、『先驅』といふ名稱が予告せられた。

『デモクラシー』より先驅に移るのは、單に[illegible]といふ[illegible]けでは[illegible]や本質を現に[illegible]ると考へた」——『デモクラシー』八月號所載。

それでは何んな思想を抱いてゐたか。一九二〇年一月『先驅』創刊號には、哲學理事に對論、アナキズムとサンヂカリズムの唱導が見られるのである。

京都では、勞學會の一團が第一回のメーデーの指揮者を引受けやうとした。ブ・ナロードにふさわしく、正帽正服の學生の一團が、メーデーの先頭を行進することを夢みた。所が之に狼狽した者は、警察當局と學校當局であつた。その結果、勞學會は「勞民會」と紛らはしいといふ簡單な理由(?)によつて、文部大臣により解散を命ぜられた。實際的活動はその後も續けられてゐたが。

民人同盟は、建設者同盟と曉民會とに分れ、更に曉民會からは文化會が生れつゝあつたが何れも、勞働者の間に、農民の間に、ストライキの戰線に、若きインテリの活動の部署を見出して行つた。

當時の學生運動のエピソード一つ。それは建設者同盟の事業中の『演説××運動』である。

一九二〇年の夏、日本大學講堂に開催される都下大學雄辯大會に、早大雄辯部は、三宅正一君を辯士に、和田巖君を附添に派遣した。建設者同盟は早大辯論部を占領してゐたのである。その選手に約二十名の同盟會員が社會主義的應援を試みるために附いて行つたことは申すまでもない。

建設者同盟の彌次に外國語學校の一辯士が挑戰した。彼は『池袋に巣喰ふ國憲紊亂の一團の學生』と許りいきり立つた。次に演壇に立つた三宅君が之に應戰して『只今の外國語學校の低能者の亜流は……』とやつた。會場は二派に別れた。之に、日本大學の學生監、後の政友會喧嘩惣兵衛事原惣兵衛氏が、學生界の大杉一派』をツマミ出すべく、一枚加つたから、會場は亂闘の巷と化した。

2

一九二〇年十二月十日の夕方から、神田青年會館の一帶は、物凄い光景を展開した。

小川町の電車通りから青年會館にまで、一間おきに列ぶアゴヒモ警官の垣、そして會館を包圍する幾重もの警戒線だが、通りを埋めた學生と勞働者の集團は、流れの如く、制止を押し切つて行進する。激流となつて、會場の入口に殺到する。檢束しやうとする者、檢束されまいとする者、もみ合ひが起る。群集の波は一度退いてはまた寄せて來る。檢束者を運ぶ囚人自動車を目がけて『社會主義萬歲！』が爆發する。

支配階級の禁壓を押し切つて、强力的に『社會主義同盟第一回大會』が、勞働者の先進分子とインテリゲンチヤの協力によつて、そこに開催されやうとするのである。午後六時、警官の垣をくゞつて侵入した會衆は千名を超へてゐる。

ビッコの大庭柯公氏が壇上に現はれた。

拍手と歡聲の嵐だ。

その嵐に應ずる如く、堺利彦、安部磯雄、荒畑寒村、大杉榮、岩佐作太郎氏等の十數名の社會主義巨頭の一團が壇上に居竝ぶ。怒濤の如き歡聲、そして、會場を破るやうな熱叫！

大庭氏は口を開いた。

『これから日本社會主義同盟の發會式を……』

臨監のサーベルが床を打つ音——『中止』——『解散』だ。

一瞬間——唸るやうな靜けさが場内を流れた。次の瞬間には、壇上に起る亂闘、二階から降るビラの雨、窓ガラスの破れる音、椅子の折れる音、『萬歲』の叫び、警官の身邊から發する金屬性の響、——民衆と支配者との軋轢のジヤヅだ。

この軋轢によつて數十名の檢束者があげられ、十三名は、建築物破棄、公務執行妨害の罪（それぞれ三ヶ月乃至四ヶ月）に處せられた。そのうちには、田所輝明（曉民會）、雜賀智之、竹内五郎（建設者同盟）、板橋萬吉（扶信會）の學生諸君があつた。

この禁壓は學生社會運動に社會主義の洗禮を與へたのである。

かゝる當時の禁壓の總決算には、おくれ馳せながら追加せらるべき、次の如きものが

ある。

難波大助、虎之門事件の判決は被告人の思想の變遷を叙して次の如くいふてゐる。

――『被告人大助ハ歷史上由緒アル難波家ニ生レ……又當時（大正六七年頃）大阪朝日新聞ガ皇室ノ尊嚴冒涜ニ關スル記事ヲ掲載シタル際同新聞ヲ攻擊シ父ト共ニ其不謹不實ヲ知人間ニ奔走勸誘シタルコトアリテ臣民ノ大義ヲ守リ居ル所ナカリシガ……大正八年偶々四谷區谷町ノ陋隘ナル一室ニ起居シテ通學ヲナスニ方リ親シク附近ノ貧民窟ヲ目擊シ……漸次思想ノ變化ヲ來シタルニ際シ恰モ世界大戰ノ後ヲ承ケ露獨ノ帝政崩壞シ、ソヴエート政府ノ組織セラルルアリ又歐米民主主義ノ風潮我國ニ瀰漫シ爲ニ被告人ノ精神ニ多大ノ刺激ヲ與ヘ……大正九年第四十二帝國議會ノ開會セラルルヤ當時被告人ハ衆議院ノ傍聽席ニ在リテ其ノ混亂セル議場ノ醜態ヲ觀議員ニ對スル尊敬ノ念ヲ失ヒ又普通選擧反對ノ演說ヲ聽キ我國ノ政治家ガ頑迷ニシテ民衆ノ利害ニ意ヲ用ヰザルモノトシテ大ニ憤慨シ漸ク議會政治ノ非ナルヲ感ジ……越テ大正十年ニ至リ雜誌改造解放社會主義ニ關スル著書論說ノ十數篇ヲ耽讀シ又社會主義的傾向ヲ有スル學友等ニ交ハルニ及ビ共產主義的思想ハ漸ク被告人ノ腦裏ニ浸潤スルニ至レリ……其後議會ハ、、、、、、、、クモナク社會主義ノ講演會ニ赴キタル際臨、、、、、、、場警察官ガ其演說ヲ中止シ片言隻句タモ發、、、、、、、セシメズシテ卽時解散ヲ命ジタルヲ見テ言論ノ自由ヲ與ヘザルコト既ニ斯ノ如シトセバ[illegible]者ノ[illegible]手段[illegible]足シ得[illegible]自ラ[illegible]在スルニ非ズト思惟シ又從來[illegible]ル勞働生活ニ稱フトハ現時ノ社會ハ多數勞民ヲ救濟スル施設ニ乏シキヲ以テ速ニ社會ノ狀態ヲ變革スルコトヲ努メザルベカラズト爲シ云々……』

社會科學の旗は進む

1

一九一七年のロシヤ革命の怒濤は、××の社會を眞正面から襲つて、そこに橫はる舊いものを瞬く間に破壞した。幾多のインテリはこの怒濤に捲き込まれて行つた。今度は、怒濤と入れ替りに、緩やかな滿潮が上げて來てゐた。この滿潮は、一九二〇年から一九二一年に亘つて、勞農ロシヤの南部地方を襲ふた大飢饉に對する『ロシヤ飢民救濟運動』である。

一九二二年五月、山川均氏等の社會主義評論雜誌『前衛』は、國際勞働者飢饉救濟委員會の世界的運動に應じて、『飢ゑたるロシヤを救へ……』と民衆に呼びかけた。全國の都市と農村に散在する社會思想團體と勞農組合は響きの聲に應ずる如く起つた。七月には、三浦環夫人が、讀賣新聞社主催の露國飢民救濟大演奏會のために帝劇のステージに起つた。ジャーナリズムの尖端を行く東京朝日新聞は連日に亘り各方面の意見を紙面に發表して輿論の喚起に貢献した。或る小學校の先生は、修身の一時間を割いて、ロシヤ飢民に同情を表する方法を相談した。八月に立川町の第二中學校に開かれた正教員講習會の講習生男女六百餘名は、醵金募集を決めて、

その費用をロシヤ飢民に寄附すべく、前衛社に届けて來た。

ロシヤ飢民救恤運動は、かうして輿論を動かした。勞農ロシヤの精神は、徐々にそして廣範に亙つて、全日本の民衆に宣傳されて行つた。歴史は、××運動に對しては特別の皮肉とユーモアを調理するものかも知れない。

第一次共産黨學生煽動係り（今だから發表出來ることだが）田所輝明君は、前衛社で、毎日集つて來るロシヤ飢饉救恤寄附金を記帳してゐる。彼は毎日百五十圓を下らない寄附額に對して、この運動の成功を誇つてゐる。取り分け、その成功の協力者が、大部分インテリと學生分子とであることに對して、彼のアジ的興味が刺戟せられてゐる。團體的にこの運動を支持して寄附金を送つて來る學生には、七高鶴鳴會（鹿兒島）、八高生有志（名古屋）、五高有志（熊本）、浦和高校有志、福島高商有志、六高有志（岡山）、三高有志（京都）、外國語學校露語科有志、一高有志（東京）、新人會、建設者同盟等があつた。

『これは偉大な副産物だ。これらを統一することが急務だ』

田所君は叫んだ。指令は發せられた。

一高を象徴する時計台の下に、特別に小さな教室が一つあつた。そこは、時折、ラテン語の教師が使ふ位で、何時とはなく、一高社會思想研究會のグループの集會に常用されてゐた。

一九二二年の十月の午後、私は庶務課の出頭を了へて、こゝの部屋に這入る。部屋には石田英一郎君や其他の同志が研究會を續けてゐる。

『呼出しは何かね。』

石田君は待ち構へたやうに聞いた。

『文句ぢやないのさ。僕の國元から庶務課に手紙が來たのさ。余り便りをしないので心配して庶務課に聞いて來たのだよ。所が庶務課ではね、僕は目下ロシヤ大飢饉の救恤運動に奔走してゐるから、つい御無沙汰したのだからつて返事を書いたといふのだ。それから大分激勵されて來たよ』

『そりや一寸逆ぢやないかね』

石田君の眞面目な口振りに一同は笑つた。

鹿兒島市の鶴丸城跡の七高では、鎌根城として、村尾薩男、是枝恭二、菩人郎の諸君が鶴鳴會といふ思想團體を組織してゐる。彼等は『前衛』のロシヤ飢饉救恤運動に參加してゐたが『前衛』に發表される寄附金受領報告によつて異常の昂奮を覺えてゐた。

『一高が一二二圓七七錢、八高が九六圓五〇錢、我々は拔かれた。頑張らなければならない。』

『よくやつてゐるね。やはり各地の高校も動いてゐるよ。』

こうした昂奮は、何時とはなしに、彼等を社會思想を通じての、インターカレージ運動を計畫せしめてゐた。

『五高の連中の合宿は近所迄行くとすぐわかるそうだ。その近所の子供は、學生を見るとすぐ革命歌を歌ひながら、戰さごつこを始めるといふからね』

こんな噂は、何處からともなく、我々のグループの間にも擴がつてゐた。

五高では、後藤壽夫其他の諸君が合宿して研究會をもつてゐた。FR會といふのがその

名前[illegible]て、[illegible]の組織の教育（？）をやつてゐたのであつた。

2

一九二二年九月、新人會の一行、志賀義雄、友岡久雄、黒田壽男、伊藤好道、杉野忠夫の諸君は、此機運に動かされて、全國的統一の目的を兼ねた講演旅行を、關西から九州に亙つて敢行した。八高（名古屋）、京都帝大、同志社大學、三高（京都）、六高、五高、七高、佐賀高校等の地方の研究會の間を一巡して歸つたときには、實質的には高等學校聯盟は出來上つてゐた。

早大文化會と建設者同盟は、高野實、淺沼稻次郎の諸君を中心として、都下の專門學校と大學の有志の間に連絡の手を延ばしつゝあつた。

かうして、一九二二年十一月七日、ロシヤ革命五週年記念日の夜を期して、帝大學生第二控所に於て、『學生聯合會』（F S）の發會式は擧げられた。

そこには、新人會（帝大）、文化會（早大）、建設者同盟（早大其他）、[illegible]（[illegible]）、[illegible]思想研究會（早高）、[illegible]（日大）、[illegible]會（女子醫專）、社會思想研究會（一高）、社會問題研究會（三高）、ＦＲ會（五高）、東風會（七高）、文化會（新潟高校）等の聯合體がその基礎を据えたのである。

この會合は半ば祕密裡に開催せられてゐた。アカデミーの構内は當時尚、かゝる大規模な集會を半祕密的に催すに絶好の場所であつた。

自己紹介とテーブル・スピーチに這入つた頃には、若き學徒の胸からは『半祕密的の會合』の意識はケシ飛んでゐた。拍手は無遠慮に送られる。熱は揚る。學徒の殆ど凡てが、學校生活の矛盾の揚棄を叫び、學生層を猛烈に批判する。だが、大部分は、勞働者運動、農民運動に接觸を持つもので、自分の校内の研究會の外に、何所かの思想團體に關係を持つてゐた。學生運動の團體として、その出發を意識してゐなかつたのである。

だが、しかし、時代は『無産階級の方向轉換』を要求してゐた。その方向轉換の過程に[illegible]

[illegible]

かくて、學生聯合會は[illegible]ればならない。

一九二三年一月末の或夜、一高柔道場は薄暗明るく點燈されてゐる。しかし稽古の様子もない。折々、人聲が漏れるだけである。道場の外には、マントを頭から引かぶつた學生が見張りしてゐる。

高等學校聯盟（H S L）――一種の怪物として高等學校長會議を悩ました地下的組織――を創立するための緊張した討議が、一高、三高、五高、七高、新高、浦和等の各校代表者によつて交はされてゐる。

彼等は、表面自由を高唱する高等學校の教育が、そして、各高校間の對校競技とインターカレーヂエートの文化的事業を禁制する學校當局が、思想問題丈けは特別扱ひをすることを本能的に知つてゐた。彼等の創造力は期せずして、H S Lを組織せしめつゝあつた。

初めて一堂に會して、それでゐて、十年の知己の如き信頼と感激を與へるものに、社

と人生に對する見解の一致である。地が異にしても、同じ環境と同じ時代の空氣の中に、眞劍に、社會と人生の問題でなやみ拔いた若き學徒が集つてゐる。そして、彼等が到達した共通の結論、それは××××である。彼等はそこから信念のある運動を始めるべき、基礎工事をなしつゝあるのだ。さゝやかな石ではあるが、社會進化の土臺に投じやうとしてゐるのだ。

お互はその夜の討議の結果を誌記した。規約には『HSLは高等學校學生間に於ける××主義的宣傳に從ふ』『HSL會員たる者は××主義に對して熱意と犧牲の精神を有し且つ完全に祕密を嚴守し得る者たるを要す』『HSL會員は各校研究會の中核として活動する。研究會員はABCの三種とする。Aは普通會員、Cはケルン、Bはその中間』等の如きものが討議せられ、種々の具體的戰術が討議されて行つた。この時、始めて、日本の學生、社會科學運動の方針は討議されてゐた。

（このHSLは次いでFSに合流した）

HSL創立協議の後、過激法案其他反對運動のビラが持つて熊本に歸つた後藤から、しばらく經つて通信が來た。

『ビラマキでやられた。東京に行つたことはわからなかつた。High School Language は皆にも見せたがよい土産だと大贊成云々』

とあつた。

しばらく經つ頃、三高の上村正夫君からの紹介狀を持つた三高生が訪ねて來た。

『Hauptman, Schiller, Lessing の研究をしてゐる××君です。同君は右の研究に就いては相當深く、ABCでいふなら、Cといふ所でせう。』

之が紹介狀の文句であつた。

3

一九二三年四月、學生生活の新しい年の出發である。駒込の新人會本部は、地方の高校からの新鋭鬪士を迎へて活氣を呈してゐた。

或夜更けに、中野尙夫君は辯論部の會合から歸つて來た。

『皆集つてくれ、ニュースだ、相談だ。』

中野君は――この五月五日に大學當局が期して全學生大會を開催する計畫がある。大學生を打つて一丸とする學友會の組織をやるためだ。その指導部は、辯論部と運動部の各部だ。しかも、辯論部はこの運動に新人會の潛入するのを極端に警戒してゐる。

『奴等の方が俺逹よりは學生運動の戰術を心得てやがるぜ』――といふ報告であつた。

『官僚的學友會反對……凡ての權力を學生大衆へ……だ。このスローガンでやらう』

動員計畫が立てられた。合宿の連中は各班へ傳令に飛んだ。

五月五日、學生大會は午後一時からだ。

だが、朝から本郷通りのホールと構内の溜り場には、何か珍しい出來事を期待する學生連中の雜談が盛だ。『新人會』といふフレーズが、彼等の雜談の間に、一つの謎として投げかはされてゐる。それは、その朝の新聞に、今日の學生大會には、新人會が何かの陰謀を企てゝゐるといふ事を流布したからだ。」

大會場の八角堂の講堂は三千名近くの學生

[illegible]されてゐる。室にマッチするもの、中席の円の通路に溢るもの。表門には珍らしい状態である。

演壇の前は、辯論部と運動部の部員で取り囲む如くに、座席が占められてゐる。志賀、杉野、伊藤、有泉の諸君と僕とは、その後に一團となつた。聽衆の間には、三四人宛一團をなした同志の緊張した顔が、演壇に對して散兵濠の如くに、散らばつてゐる。

議長の挨拶が始つた。議長は新人會の奇襲を抑へるために、一切の緊急動議の提出を認めない意向を述べてゐるのだ。

『議長！』杉野君は起つた。『議事進行に關して一言』彼は演壇に迫つた。

『君のやうな不眞面目な者は出て行け！』

議長は混亂して來たのだ。

『議長横暴！』『議事進行が何で不眞面目だ』『やらして見ろ！新人會が恐れる理由が何所にある！』

八方の散兵濠から一齊射撃が始つた。聽衆は之に和した。杉野は壇上に起つた。かうして、新人會は先づ發言の自由を獲得した。最[illegible]

[illegible]

[illegible]は學友會の民主化[illegible]權力を學生大衆へ[illegible]と叫んで、一切の學友會の機關の公開、學生大衆の參加の諸權を要求した。學生大衆は完全に我々の側に立つた。我々の主張は可決された。『若しも、強力的に討議を蹂躙すれば演壇を占領して最後迄戰ふ』筈であつた我々の戰ひは、案外簡單に勝利をもたらした。大衆の支持が壓倒的であつたからだ。

何か運動部の宣傳的議事が續行せられやうとする。もう我々は用事はない。

『出やう』

志賀君が立つた。各散兵濠から同志が退却し始めた。そして滿場の聽衆の殆ど全部も。

この學生大會に於ける新人會の奮鬪が何所に向けられてゐるかは、その日の學生大衆には何明確に知られなかつたやうである。『新人會は今に何か仕出かすだらう』といふ期待丈は持たせたが。しかし、其後一年足らずの間に、新人會は學内の凡ゆる自治機關に潛入して支配的な關係を確立したのである。

4

『今日は[illegible]』

私と新人會の同志とは、こんなことを話しながら、早稻田大學の講堂に急いだ。

忘れもせぬ、一九二三年五月十日の午後である。五日前には、新人會が帝大學生大會に於て指導的な戰ひ取つて、學生運動を一歩前に、大衆の面前に押し出した。その夜の學聯總會で、早大文化同盟の松尾茂樹君は『今に早稻田が擧げての思ひ切つた戰ひの火蓋を切るのだ』と報告した。その戰ひの火蓋が切られる日である。

早大の正門にかゝると講堂は直ぐ突き當りだ、二階の講堂はバルコニーまで學生がはみ出してゐる。

校門を這入ると、三頭の軍馬が馬丁に手綱をとられて厳かに列んでゐる。その隣りには三台の自動車。ヘッドに陸軍の星章が光つてゐる。講堂入口には『早稻田大學軍事研究團發會式會場』の立看板だ。

會場には、第一師團長石光中將閣下、以下十數名、出席者の下げ紙が下つてゐる。[illegible]

黑澤、青柳等の早大當局の名前も見える。乘馬ヅボンに長靴姿の早大軍事研究團員がウロ〳〵してゐる。都下各新聞社の寫眞班が招待されてゐる。演壇の傍らには活動寫眞機が立てかけてある。軍國主義の宣傳的からくりは一〇〇パーセントである。

場内はまだ靜かである。だが暴風の前の靜けさだ。

發會式は始まつた。十數名の軍裝いかめしい將官達が臨場する。その前で研究團にはふさはしからぬ宣誓式が行はれる。寫眞隊は一齊に活動する。だがこの狀景は、早稻田の學徒の胸に五寸釘を打ちつけた。『自由の學園』が××にかけられてゐるのだ。

學校當局と將官連の祝辭演説が始つた。この瞬間から彌次の攻擊の火蓋が切られた。この日の攻擊程、デスペレートな印象をうけたものを私は知らない『早稻田を軍閥に賣るのか』『そんなことは早稻田をやめてから言へ』『軍閥の犬××を葬れ』。早大當局は顔色を失つた。『師師たらずば弟弟たらず』である。研究團員は一語も出さない。彼等は完全に壓倒されたのである。

砲火に恐れぬ將官連も立ちすくんだ『現はれましたは、××の早稻田出稼ぎでござい』に始つて凡ゆる攻擊が投げかけられる。彼等に罵聲を放つた者は『少數の社會主義かぶれした學生』丈ではなかつた。滿場のワセダニヤンは、野球戰に彼等の榮冠を取ると同樣の熱狂を以て學園の自由を守つた。

會場は完全に『軍事研究團反對學生大會』と化した。自由の學園の死守を誓ふ早稻田の學徒、その間に學聯の鬪士は、都下各大學を代表して激勵を送る。會場から流れた一團は大隈侯銅像下に集つて、校歌を高らかに合唱した。かくして、早稻田の、そして、全學生聯合會の、反軍國主義鬪爭は、その××ある門出をなしたのである。

五月十二日の軍事研究反對學生大會は、隈侯銅像前を血を以つて染めた。防備なき學生大會は反動團縱橫俱樂部の奇襲を喰つたのである。爾後一ヶ月間の早稻田は、學校當局と警察と反動團體との戒嚴令下に置かれた。文化同盟と軍事研究團とは共に解散せられてこの戰ひは一段落を告げた。

軍縮――兵器と將校の剩餘――學校××主義化、この第一次計畫は、早稻田の若き學徒の肉體の運命を賭しての戰鬪によつて××された。日本に於ける反××主義鬪爭に於て早大文化同盟の同志程勇敢に戰つたものは私は見ない。この早稻田の傳統は、その後の軍事教育反對鬪爭（私は之についてはこゝに述べる紙面を持たないが）に於ても光彩を放つた。

東京帝大の學友會改革運動と早大軍研反對鬪爭は、若き學徒の戰ひを、謎から現實に押し出す第一步であつた。

暴壓に抗して

1

一九二四年秋までは、支配階級の學生社會科學運動に對する壓迫は、さまで積極的ではなかつた。少くとも組織的ではなかつた。

一九二三年と二四年は、若き學徒の鬪爭が

社會に於ける[illegible]に於てであ[illegible]全國的な統制ある地下的活動を通して、各學校機關を支配したと同時に、二四年九月には、第一回學聯大會は、廿三校を代表する六五名の代表員によつて公然とその存在を發表し、名稱を「學生社會科學聯合會」と改めた。

この前後、大阪市電罷業の際の大阪高商と高工の學生のスカツプの出現（二四年七月）、軍事教育の强制等は、學生社會運動を促して、公然たる鬪爭を全國的に展開せしめずには措かなかつたのである。

一九二四年秋開催された、高校々長會議に於て、某校長は、「新人會々報」を鬼の首を取つた樣に振り廻した。各校長は、この會報一册をひねくり廻して、自分の學校に根を張る社會科學運動の情報に身慄ひした。社會科學運動團體の解散が審議され、十二月の五高社會思想研究會の解散命令を振り出しに、他の二十二校の研究會は解散を命ぜられた。次いで、二六年四月以來は、社會思想の研究は個人にも禁止せられ、學生生活も學內たると下宿たるとを問はず、思想的戒嚴令下に置かれた。

此の方針は、高等學校より專門學校に及び、[illegible]×されて行つた。高等學校の研究會[illegible]に於いて、三・一五事件に乘じて、帝大新人會に解散され、慶大、早大等の社會科學研究會に指導教授の辭任を理由として消滅せしめられ、かくて、公然たる組織は一應その影を沒したのである。

だが絞殺されたものは「自由」の幻影に過ぎない。研究團體の解散の後には、學生の自由擁護の鬪爭が起され、その同盟に於ては、眞實の自由が見出される。凡ての壓迫され虐げられる民衆と一列の自由が、若き學徒の眼前に展開されて行く。そして、この眞實の自由のために、一切の犧牲と熱意を傾倒するのである。鬪爭の途上には××りはないのだ。

2

一九二五年七月十六日、學生社會科學聯合會第二回全國大會が、京都帝大學生集會所に開催せられるのである。

社會の進化と共に進む若き學徒からは、極めて平凡に進行した大會であつた。しかし、社會の微かな動きにも、自己の足場の崩れ落[illegible]の來るべき[illegible]であつた。

こうして、許らずも、そしてまた必然に、學生社會科學運動史のモニユーメントとなるべき第二回大會が開かれるのである。

ブルヂョア的學生が海に山に急ぐ時、酷暑の京都に集つた、全國五十九校（中等學校を除く）千六百名の若き學徒を代表する數十名の代議員は極めて安易な氣持で議席に着いてゐる。それは、恰も瀧口　向ふ水流が最後の瞬間まで落着いた歩みを運ぶやうではある。

大會は午前九時京大の菅原作君の司會の辭で始まり、議長に村尾（新人會）、副議長に鈴木（京大）を選擧し、代議員の資格審査、各地情勢報告と型の如く進んで行く。

京大學生監の注意によつて、議案二件——高等學校研究會解散抗議と軍事教育反對の二件——が撤回の餘儀なくされたことが報告せられ、議事は次の如く進行する。

一、大會テーゼの件（提案京二〇）——字句修正の上可決。

二、九州學聯獨立の件（木村忍）—時期尙早で保留。

三、規約改正の件（野呂榮太郎）—一部訂正で可決。

四、責任通信の件（橋本省三）—可決。

五、機關紙刷新の件（某）—可決。

六、全國的教程作成の件（秋笹政之輔）—委員附託。

七、其他。

翌日は代議員懇談會である。會場の都合で一半の約二十名は北白川の京大社會科學研究會本部に、他の一半約二十名は聖護院の合宿所に集つた。各校の研究會情勢報告が繰り返へされ、軍事教育反對運動、研究會解散反對の闘爭、政治研究會對策、プロレットカルト運動等が協議せられる。

若き學徒は、これらの協議の中から、今まさに、日本の無産階級運動が政治闘爭へ發展轉化しつゝある過程を見究はめ、この過程が彼等に重要な活動の分野を提供して居ることを知つた。彼等の闘爭を、かうした無産階級の發展の過程に緊密に結び付けることが、今や若き學徒の使命とされてゐる。支配階級の××が日と共に增して來るのも、この若き學徒の使命遂行を阻止しやうとする目的からだ。この××に抗してこそ、若き學徒の進出は促されて行くのである。

第二回大會に於て見出された若き學徒は、最早嘗てのブ・ナロードの戰士ではない。彼等は、今や、ナロードニキのプチ・ブルジョア的なイデオロギーを克服し、而もナロードニキの情熱を社會科學（マルクス・レーニン主義に立つ）によつて統制し、無産階級運動の一翼として闘爭に進まうとするのである。

3

暴壓と戰ふ學生社會運動史中のユーモレスク。玄人筋のスパイが若き學徒に一杯喰はされたのは、レプセ事件である。

一九二五年九月の或日、勞農ロシヤ勞働組合代表レプセ一行の列車は、警官嚴戒裡の京都驛にすべり込んだ。この年は、日本勞働總同盟の第一次分裂の年である。レプセの來訪は、左翼陣營に新鮮な刺戟を與へるためであつた。京都地方評議會は京大社會科學研究會の同志の應援を得て、この代表者にメッセージを送る決議をした。嚴重なる警戒は、このメッセージを××するためでもあつた。『レプセ萬歲！』の叫びと共に、學生の一團がレプセの車窓に殺到した。彼等は制止せられ、手にしたメッセージ（日本文と英文の二通）はまんまと警官に押收された。

レプセの列車は、何物にも勝る戰闘的な歡迎を感謝しつゝ、動き出した。

汽車が大津を發つと間もなく、一人の學生が極めて緩やかな足取りで、スパイの二等車を通り過ぎて行く。隣りのレプセ一行の列車にかゝると急に走り込んだ。

評議會のメッセージ一通（日本文と英文）が堅き握手と共にレプセに手交された。スパイが氣付いた時には、彼等學生はレプセの列車を出て、スパイの側に來てゐた。そして『檢束ですか』と聞いた。

前日本部に集合した學生達は、メッセージを強力的に京都驛頭でレプセに送ることを申合せた。一切の秘密は警察の秘密室にまで筒抜けする。スパイは勇躍した。かうして京都驛頭では、警察官にメッセージを呈したので

ある。メッセージ一通を[illegible]に作つて[illegible]不安に
かた他二人に、その時大津監獄にたつてゐた
つた。

4

一九二六年九月十五日『學界未曾有の大事件・京大學生檢擧事件』の記事差止が解除された。

その前年の十二月一日の拂曉、京都府警察部特高課は、大動員によつて、京都帝大と同志社大學の寄宿舍、社會科學研究會員の私宅、下宿、合宿等の家宅搜査を行ひ、學生二十餘名を檢擧した。十六日には、林司法次官、小山檢事總長、東京、京都、大阪、兵庫、福岡、仙臺の控訴院檢事局檢事長、各府縣地方裁判所檢事局檢事正又は首席檢事、各府縣特高課長の顔振れが、司法省に會合して祕密會議を開き、學生社會科學運動一網打盡の陣立てが張られた。明くれば二六年一月十六日付で新聞記事の掲載は差止められ、それから冬期四ヶ月間に亘り、全國に於ける社會科學研究會の學生、社會科學運動に關係をもつ學者、左翼勞働組合の闘士について、家宅搜査、檢擧、拘引が行はれ、その間に、前後三十八名の社會科學研究會に關係をもつ學生等が檢擧され[illegible]れた。

これ丈けの事件を、外形から見れば、まさにこれこそ、學界未曾有の大事件である。

曾て第一回共産黨檢擧事件で偉功をたてた警察官がある。彼は京都大學に開催された學生社會科學聯合會第二回全國大會を傍聽した。彼の或る期待に反して、大會は極めて平凡に進行した。榮達の野心と職業本能の混線した彼は、『これは臭い』と叫んだ。

『大會の翌日の懇談會は警官の眼を免れてやつた。祕密集會である。そこでは大會の席上以上の突つ込んだ協議をして居る。こんな藝當は書生連中には出來ない。少くとも、あの××黨の連中のやる藝當だ』

彼の職業本能は公式を展開したのである。

『それにしても、もう第二次共産黨は出來てゐなければならない頃だ。そうだ、書生連中を洗へば出ないとも限らない』

彼は第二次共産黨狩りの一番槍を夢みた。彼は早速部下を督勵した。確信を以て檢擧にかゝつた。

一切の私信を隈なく調べ上げた。彼は失望[illegible]

しかし[illegible]
[illegible]
その本質には、コムミユニズムーつでまつ[illegible]れども、背後に『共産黨』は居なかつたのだ。

だが、階級鬪爭に於けるブルジョアジーの參謀本部の眼界は、單に共産黨狩りを夢みる一××官のそれよりも廣い。

若きインテリの一團が、××的なイデオロギーを武器として、無産階級陣營に投じやうとするとき、この武器を奪ふことは、治安維持法のレーゾン・デートルである。

『共産黨狩り出し』のために試みられた陰謀は、かうして『イデオロギーの裁判』に變形して行つた。

京大事件の豫審決定書には次の如き個所がある。

『……大正十四年七月京都帝國大學々生集會所ニ於テ學生社會科學第二回全國大會ヲ開催シ各團體ノ代表者五十餘名出席シタル上先ヅ學生社會運動ノ方針ニ關シマルキシズム・レーニズムニ從ヒ無産階級運動ノ一翼トシテ日本勞働組合評議會其他ノ勞働團體農民學校政治研究會(大衆教育同盟ト改稱)

産業勞働調査所及ビ無産青年同盟其他ノ無産團體ト共同若クハ相提携シテ運動スベキコト少數鬪士獲得ニ力ムベキコト及ビ全國的教程統一ニ關スル件其他ヲ議決シテ其主義方針ヲ確立シタル後無産者教育機關タル京都無産者教育協會ヲ創設シ更ニ同年十二月東京ニ開催シタル全國執行委員會ニ於テ再ビ大衆獲得ニ進展スベキコトヲ強調スルニ至リタルモノナル處當時全國聯盟校數殆ド六十餘ニ及ビ其全會員一千五六百名ニ達スル盛況ヲ現出セリ而シテ是等全國聯盟ハ社會科學部ヲマルキシズム・レーニズムノ研究團體ト云フヨリモ寧ロ全國統一的組織ノ下ニマルキシズム・レーニズムヲ指導原理トシ無産階級運動ノ一翼トシテ所謂學生社會運動ニ從事スル團體タルノ實ヲ明確ニスルニ至レリ……』

一九二八年十二月の控訴公判に出廷した京大學生事件被告一同の名による檄は曰ふ。

『吾人の事件は抑々何であつた？　大正十四年當時、日本無産階級運動は、政治鬪爭への全面的進出の最初の時期を經驗しつゝあつた。自らの解放に關するマルクス主義的知識に對する無産階級の要求は急激に高まつて來た。この時、かゝる要求をみたさんとする諸運動の一つとして、學生社會科學運動並びに無産者教育運動も亦急激に發展した。マルクス主義的知識と勞農大衆との結合――これこそ支配階級が最も××した所であり、治安維持法を以て吾々に臨んだ所以である。かくてマルクス主義學說に關する討論、その普及宣傳自身すらも極惡の重罪を以て禁壓せられんとしてゐるのである。』

×　×　×

若き學徒の鬪爭は續く。だが、私の記錄は一應この邊で結ばれなければならない。

『死者をして死者を葬らしめよ。死者をして悲嘆せしめよ。躍進して新生活に突進する第一者たることは羨しき限りなるかな』

――カール・マルクス。

附記――私は日本學生社會運動史の中から幾つかの場面を拔き出して、青年インテリの動向を描いて見た積りである。私の本意なるものは近く脫稿する『全日本學生社會科學鬪爭記錄』によつて御批判願ひたい。

農村生活者の手記

此の窒息から免れたい

加茂健

我々に最早悲惨であると言ふ言葉は適しない。

朝四時に起きる。未だ夜が明けない。薄暗い電燈の下で、萎びた父と母とそして弟と私と、崩れかゝつた膳に向つて飯を食ふ。固まつた冷たい黒い麥飯だ。昨夜の殘りなんだ。

病身な父は土人の様に日焼けした顔を歪めながら、無遠慮な弟は、餓鬼の様にむしやぶり食ふ、皆追われて居る者の様な氣がして、とても落ついて食へない。

食事が終ると父は又腹痛を訴え出した。

父はむつちり屋で終日默つてゐる、時たま話すがそれは皆、歪んで行く此の小さな世界(村)と食へない者の愚痴つぽい歎きだ。

腹痛の唸りが歎息に變つた。

「ちえッ又朝ッぱらから」

俺は家を飛び出す。未だ夜が明けない。棒と鎌とを持つて、暗まぎれに村から三十町の坂道を歩いて野山に行く、草を刈りに、牛の飯料を得なければならぬのだ。夜が明け懸る、日が照り出すと刈つた草が萎びる、(萎びた草は牛は食わぬ)だから俺達は日が照り出す迄に、息もつかずに十五貫の草を刈り取る、そして擔いで又坂道を下つて歸る。家には父母も弟も最早居ない。野良に出てゐる。總動員で田ノ草取りだ。

食ひ足りない麥飯腹が早空いて來た、鍋の蓋を開けて見る、飯は無い、「ちえッ」そのまゝ俺は前の畑にもぐり込んで瓜をもぎ取つて噛る、噛りながら歩いて行く。田ノ草取りにどの田もどの田も黒い田の蟲で一杯だ、太陽は明るい、だのに此の青々たる青い田の中にうごめいてゐる黒い蟲は、暗い話しで持切りだ。八月の熱い光を受けて、俺達はこうして田の中にもぐり込んだが最後、晝の時間を知らずお寺の鐘が鳴るまで、田から一歩も出ない、晝飯の鐘が鳴り出すと、俺達は救われた様に、稲の葉ですり切られて、イライラする顔を泥手で押え乍ら田からもぐり出る、そして道にへたばつて、汗をたらしながら又黒い麥飯にありつく。こうして日が暮れるまで働いた。母は夕飯の支度の爲に一足先に歸る。養蠶期から田植時に、田植から手入に、手入から取込期に、俺達は終日こうして働いた。

汗みどろになつて、初冬の雪に凍つて、雨が降つても照つてもだ、盆と正月と村のお祭以外に俺達に休日は一日もない。

こうした單調で變化のない俺達の生活は、

恐らく何千年の昔から變りは無いだらう、だが變つたものがある。變つたものは、飯を節約しなければならない事と、村に自殺者の產出と、住み馴れた家を潰ぶして村を去つて行く村民の殖える事だ。

一ト月も前、俺の家の隣りの山田力三さんが家財道具を叩き賣りして、その明くる日、泣き喚く娘を引張つて、「南米に行くんだ」、と言つて出たまゝ未だ沙汰がない。俺達は極力反對をしたが留める事が出來なかつた。

「無理もない、彼の家には、最早五斤の米しか殘つてゐないのだ、金は一錢もない、今年の作の稅金にせがまれて、本年の食料を全部賣つてしまつたんだ。

村では三人の肺病患者と二人の胃腸病者が靑白くやせて寢てゐる。一年も前からの事だ。けれど全く手の付けられやうが無い、金が無い、金が。醫者を迎えるにも金が一文も無いのだ。家の屋根は崩れかゝつて、雨の日は滴が洩る。夏でも濕氣で不快だ、だがもうどんなになつても、只ぢつとして見て居る事だけしか出來ない。

長い一ケ年の勞働で俺の家では、秋の終りに米十二石を生產する。內六割七分、八石一斗の米を、地主が地代として搾取する。三石九斗の收益だ、四人が一年間の勞働で。

今年は繭價が暴落してしまつた、俺達の生命の綱として、最早本職にまでならうとしてゐた養蠶が、去年の不況でさへふるえ上つたのだに、嗚呼何とした事だ、今年は半價にガタ落ちてしまつた。去年の八十圓が今年の四十六圓に暴落してしまつた。

俺達四人の家族が、崩れかゝつた身體をお互に励ましながら、夜の目も寢ずに（養蠶期は平均四時間寢る）睡眠不足に惱み、血の出る樣な働きの中に戰ひ取つた尊い代價が、十六貫……七十三圓。七十三圓だ。養蠶具と桑の肥料代を差引いた殘り五十二圓……それと秋の終りに賣る米一石代、二十五圓、計七十七圓、これが俺の家の門から這入り込む收入の總べてだ。

それだのに、此の稅金を納めねばならぬ。此の肥料代を拂わねばならぬ、此の電燈料を掛けねばならぬ。我々は今、最後の一滴の血までも吸ひ盡されてゐるのだ。

一、稅金	縣稅	一圓八十錢
	村稅	二十六圓
一、肥料代		二十圓內外
一、電燈料		十一圓
計		五十九圓八十錢
差引收入		十七圓二十錢

十七圓、一ケ月一圓三十錢、此れが四人の家族の生活費だ。一圓三十錢と黑い麥飯。

それだのに、村の人達は俺の家の生活を羨んでゐる。

如何に慘めだとは言へ、都會勞働者風情はまだましだらう。俺達を見よ、人は我等を醍村の靑年だと言ふ、數年前までは、我等は貧しいたがら、盆と正月に、新らしい着物と下駄で、遠い町まで踊りと歌留多に出かけたものだ。だが俺達は今着物が無い。下駄もない、親父の古物なんだ、風呂は月に二回しか入らぬ、石鹼だつてさへ使ふ事を許されない家計ではないか、俺達の生活の中に、只寢る時間以外に幸福と言ふ一瞬の時間もない。

地主は、お前達が幸福を願ふ事は罪だ……と言ふ樣な事をよく言ふ。働いて米を作る、

米を作つて地主に貢ぐ、そして、その殘りを黒くにこ[illegible]食ふ、そして又働く、毎年同じ動作を繰り返してゐるゝだけれど、俺達は今や麥飯が芋に變つて來た。家は段々腐つて來る、過勞の爲に父は寝て居る、駄目だ、幾等働いても苦しくなる許りだ。

都會の諸君達よ……俺達農民は全日本八千萬の民を養つてゐる、だのに俺達は飢えてゐるのだ、飢じい……米の飯が食へないのだ。麥五合に米五合の黒い飯、一週間に三日は必ずオミイ（米と麥と野菜を混ぜてドロドロに煮る分量が殖える）を食ふ。瓜、柿、芋、などは俺達の第二次兵糧なんだ。

こんな不合理な事があるものか。こんな矛盾した世の中を誰が造り出したんだ。俺達は地主に拂わねばならぬ小作米に、税金に、肥料代に、一ヶ年三百六十五日の内三百日は、搾取さるゝ爲に生きてゐるのと少しも變りがない。

税金の滯納か？　當然ではないか。

教員の減俸か？　當然過ぎる程當然ではないか。俺達、食わずの苦しい生活をしてまでも、他人の裕福な生活を築き上げねばならぬと言ふ話はないだらう。

政府は近時、農村救濟なぞやかましく言ふて居るとの事だが[illegible]政府に何が出來る。農村に金を貸し付けて救濟すると言ふ。

そんな事で此の俺達を救ふ事が出來るものか、……我等に金を貸し付けて、税金を拂へと言ふのだらう。小學校教員の減俸を行ふなと言ふのだらう。

そんなものが何になる、——それでなくてさへ俺達は、借金に惱み續けてゐるのではないか、もうこれ以上そんな厄介は負ひ度くないのだ。

農村救濟、これは[illegible]
可能だ。[illegible]
は我等のものであるべきものを[illegible]
等の手から、それを取返す[illegible]にあるのだから。

我等の無智な間にも、此の苦境より一時…活路へ……とそれに對する力強い意識が既に無意識的に芽生えて來てゐる事を感じてゐるのである。

俺達の行くのは何處だ

（浚[illegible]奴隷覺え書）

青山修平

反古紙(ほごがみ)を貼つた障子を明り窓にして、氷柱の下がつた納屋で一日稼いでも三十錢がな[illegible]けるのは仲々だ。莚、繩、草履表何だつて同じだ。藁の道具の新調や修繕にかかつて居ればその安い手間にも有りつけやしない。二尺も三尺もの雪を搔きのけて泥を掘る、背負つて來て洗ふ、それを俵につけて賣りに行く。その泥が百十錢だ、一日掛りで十五俵仕末して一圓五十錢。ちやうどその日の労賃位だ。いくら泥でも[illegible]種子も要る[illegible]料も要るんだ。[illegible]や着物の買ひたい俺達だ[illegible]に[illegible]

で。さうして皺の手を米磨汁でうでた。けれど一冬掛つても帶を買ふ金は餘らないんだ。毎日菜つ葉漬が煮られた、それは味噌も醬油も要らなかつた、それでお湯漬飯を啜ると丁度水洟をすすり込むやうな音がする。

北國の冬は暗く永い。蔀戸をひん捲くつて土間に吹雪き込む雪の他には紙切一枚だつて舞ひ込みやしない。そこで『寒蠶をおく』ちう事になるんだ。「寒蠶」と言つても寒中蠶の養へる譯はない。それは來春の繭を寒中に賣つてしまふ事だ。それには價格を決めて本當に賣るのと、單に繭の賣込みを條件として内輪に金を借りるのとがある。どつち道俺達にとつてうまい取引でない事は確かだ。そこで契約の自由が製絲資本家達に依つて奪はれ、そこから、俺達の養蠶奴隷化への第一歩が始まることも確かだ。俺達の弱みを摑んでゐる製絲家は、特約組合といふ支配形式の下に俺達を動きのとれない養蠶請負者の地位にまで追ひまくるのだ。判り切つてはゐるけれど金がものを言ふ、それで默つて焦躁と希望のごつちやになつた感情を抱いて年を送り年を迎へる。雪が消えたら身を粉にしても稼がうと思ひ乍ら。

○

田圃の耕作や田植で忙しい中に春蠶の掃立(はきたて)をする。何しろ雪が消えて以來初めての纏まつた收獲ではあるし、それに何ケ月か前にもうその繭を食つてしまつてゐるんだ。部屋といふ部屋が蠶棚(こだな)でいつぱい、到るところに蠶の糞が散らばる。俺たちは、立退きを喰つた人間のやうに蠶棚の間にごろ寢をする。四眠後上簇までの一週間はまるで戰爭だ。四時間位眠つたからだで夜中に斷桑機をガタンガタンやるのは腦髓に針を打たれるやうな感じだ。六十を越した祖母はまだ養蠶の責任を擔つて皆寢てからも暖爐を見廻り寒暖計の前に立つ。桑の皮を剝く暇も菜つぱの根を切る暇もないのでそのまゝ煮て食ふ。蠶をよく育てる事だけが頭に充滿してゐるのだ。蠶が可愛いいからぢやない、結局俺達の口が可愛いいからなんだ。

掃立をして間もなく組長の家に寄合ひがあつた。「合理的な飼育をはかる」爲に製絲家の指定した養蠶技師を巡廻させるといふのだ、その費用を養蠶組合が負擔しろといふのだ。俺たち若い二三人は勿論その席で反對を唱へたけれども大勢の意見は承諾する方に傾いて結局三期間(約九十日)の給料二百圓を組合員が收繭量に應じて支出する事、代り番こに食事を供する事に決してしまつた。

その先生が次の日からのつそり家々を廻つた。そいつが實地の事など隣の嬶よりも暗い、その上恐ろしく誠意のない先生だ。蠶座には手も觸れないで聞かれただけのことを饒舌つて行く。尤も餘り世話を燒かれたら却つて迷惑するに決まつてゐるが是では毒にも藥にもならないといふものだ。餘計な負擔をしただけが損だと皆あとでわかつた。

○

俺の家では兎も角、四十三貫餘の春繭を收穫した。俺達の買手は個人經營で縣一といはれるT製絲場だ。取引の形式は繰絲試驗の結果の「成績に應じて」値段を決定する正量取引だ。で俺は選繭盤で小器用に盜をえり分ける女工にも哀訴に似た氣持を感じ乍ら、貫三圓三十錢當りの内金を不承ぶしよう受取つて來

た。こうした[illegible]の村等に[illegible]円三十[illegible]違と新聞に見えた。[illegible]一升も繭一貫と同[illegible]た[illegible]あ。しんどい。しんどい。」と俺は[illegible]一てた[illegible]

俺達には價格に對する決定權がみぢんも無いのだ。ふみつけられるまんま操られるまんまだ。それを何時もあそこで感ずる。一方は凡ゆる企業家の內でも最も統制のとれてゐる製絲資本家、一方は販賣に就て何等の組織も統制もない百姓。此の儘ではどう考へても勝目のない角力だ。だがたゞ腹を立てて見たところでどうにもならない。――最も確かな對抗手段は何か？　俺の頭は曳いて歸る荷車の音響と一緒に唸つた。

昨年の春繭は平均八圓三十錢であつた。今年は正に半値以下だ。假りに春繭四十三貫の收入で、俺の家が四ケ月の生活費に當てなければならぬとすると、昨年なら三百五十六圓九十錢で切り廻して行けばよかつた。それを今年は貫當り三圓七十錢（取引五十日後に行はれた代金決濟の結果がさうだ）と見ても百五十九圓十錢で濟まさなければならぬのだ。生産費が二割、一般物價が一割低下してゐるとしても尙、昨年より二割だけ生活を切り詰[illegible]

[illegible]スもどスの生きかへつた。

[illegible]では春繭一貫の生産費が六圓だと云い[illegible]てゐるが果たしてさうだとすれば、俺達は一貫目の繭毎に二圓三十錢缺損した事になる。だが六圓といふ生産費の中には二圓三十錢位の勞賃が計算されてゐる筈だから、自家勞力で間に合つてゐる俺達には、現金の收支はトントン位になるわけだ。勞力が報ひられないぐらひは我慢することが出來る。だが赤銅色の何枚かの紙幣が、肥料屋、吳服屋、醬油屋等と造作もなくフッ飛んでしまへば後は子供達の小使も殘らない、そして夏になつたら……と考へる時、もう夏の收穫を半分も食つてゐるんだ。

○

祖父は桑畑を掘つくり返して芋でも作つた方がましだべ、といふ。祖父達が働き盛りの頃は藍種や紅花や薄荷などが畑の主要作物だつた。さういふものは化學工業が發達して來た明治の末に滅びてしまつた。祖父達は日露戰爭の頃に養蠶を覺えた。それから三十年も

[illegible]

[illegible]たされた[illegible]

[illegible]貫六錢の[illegible]つた「[illegible]繭

つ張り損を見越して利潤を附つた「[illegible]の出來る限りの低下」それから「[illegible]勞力の自給」が、あらゆる農民同情者達の口から叫ばれた。俺たちも腐心して費を減らした。彼等の忠告は實際にはどんな風に役立つたか。俺達は一ケ月間炎熱と戰つて八月末に二十五貫の繭をとつた。そして內渡し一圓三十錢當りの假取引を濟ました。春のに較べてさへ途方もない値幅だが、暴落とか慘落とかが、繭相場の形容詞になつてゐるので安いのが當り前のやうな氣になり、それに藏つて置くわけにも行かぬので賣り飛ばす。代金五十七圓五十錢。生産費を調べて見るとそれでも勞賃がいくらか殘る。生産費の主要部分である桑代が暴落してゐるからだ。俺達の收繭に要した生産費の概算は斯うだ。

桑　代（但し平均貫六錢を見て四百八十貫代）	二十八圓八十錢
蠶種代	三圓六十錢
[illegible]代	一圓五十錢

技師派遣費その他	一圓八十錢
計	三十五圓七十錢

繭代金からこの生産費を差引いた二十一圓八十錢が、延人員約四十五人分の勞賃。それに代金の決濟がついてないからそれ以上と見てよいわけだ。だが實はこんな計算は間違つてゐるんだ。桑問屋の桑が六錢でも三錢でも自家生産の桑で飼育してゐる俺たちは桑代をいつでも生産實費十四錢で計算しなくちやならないのだ。さうすると初秋繭の代金總額は桑代にも當りやしない。序でだから桑の生産費を揭げてみやう。

▲桑畑一段歩經營費

借地料(年貢米概算)	三十五圓
肥料代(金肥自給肥共)	二十八圓
勞賃(最低見つもり)	二十圓
諸雜費(病蟲害驅除、農具損料)	十圓
計	九十三圓

▲桑畑一段歩年收量

六百八十貫(以上の投資に依る最高年收)

以上の表で桑代が十四錢であらねばならぬ理由がわかる。栽桑、養蠶どつちにしたつていくら血を搾つても足の出る商賣だ。

○

俺達の前途は暗澹としてゐる、支那絲の進出と人絹の發達及び金融恐慌に依る絲價の暴落が繭價をも安くするのだといふ。糞喰へだ。俺達の搾取の魔手は直接對手になる製絲家達のからくりにあるんだ。現にT製絲場主は昨一ケ年間で二十餘萬圓の純利を擧げた手腕を公然と誇つてゐる。「蠶種の統一」とか「飼育の合理化」とか「桑園の改良」とか全く俺達の生産行爲に對する奴等の專政的な干涉の裏には、セリプリンとかデニールとかの生絲檢査で使される企業の採算點を農民の上に轉向した狡猾以外の何物もないのだ。然も正量取引だなんて操絲試驗の日數を勝手に長びかして、都合のよい時の相場を發表し、徒らに代金の決濟を遲らし生繭賣買の投機性を完全に跳躍つてゐるのだ。昨年は六月八月九月三期分の代金決濟を年の暮までずるずる延ばして一緒くたに濟ましたので、憤慨した○○村では直ぐ組合を解體しちまつた。奴等はあわてて他の組合員に契約の改正を告げたり鼻糞ほどの奬勵金を呉れたりした。だが構はんで置けば蛾になる生繭を持つてがん張るによ

俺達は結局弱いんだ。

俺たちの窮迫は限りない借金となつて溜まつて行く　郡農會で最近發表した郡内二十一ケ町村の負債額は、信用組合貸付、無盡貯金、個人信用を合算すれば七、三〇三、二九六圓で昭和四年郡内二十一ケ町村の生産收入(米・繭・草履表等)の七、二二二、七〇五圓に較べると七萬餘圓の超過を示してゐる。

○

露に濡れて刈つた青草をリヤーカーに積んで牛乳屋に曳つぱつて行く、蠶具も桑畑も無い村の吉公の姿が賢く樂しげに見える。實際こんな古くさい道具立に縛られた俺達の行くのは一體何處だ。北海道でも南瓜や燕麥を作つてるといふし、縣北の理想鄕M農場でも生産過剩の繭や甘藷が町への十幾里を荷車と一緒に戻つて來るといふのだ。

だが重いドン詰りの空氣は、素つ裸にされた農村プロレタリアにはつきりした一つの方向を示してはゐないか。そしてそれを見極める眼が鋭い暗い蠶室の中で疲れた表情の底か

ら見聞かれてはゐないか。

惨苦農村報告書

高倉薫

農村の惨苦窮乏は、今や筆舌に絶する。

到底、貧富一様の文章では之れを如實に示現することが不可能だ。そこで凄惨たる窮苦の種々相を、先づ「數字化」して展開する。形容詞を捨て字句を綴らず、敢て、ぶつきらぼうに曝け出した眞裸體の農村報告書！ 投げつけた百姓受難記録！ 乞ふ文章滋味なき點を諒せられよ。

惨苦農村の食物

山陽線の特急の二等室で、多分大阪者らしい裕福な身裝の何々會社重役か何々商會支配人といつた資本家紳士が、その連れらしい藝者風の婀娜な女を相手に、

「わしの知合に、大地主が居るが、このあひだ會ふた時の話に――いやはや田舎は地獄同樣ぢや。泥足ども（百姓の俗言）の喰りかたといふたら箸にも棒にもかゝつたもんぢやない。何を食ふて生きとるかしらんが、この有樣では、人間の内で一番と動物に近い暮しをしとるのが泥足どもだらうと、笑つて居つたが――動物に近いといふ點は、流石に天下の名評やないか、はゝゝ」

と、無論、旅のつれづれの冗談話ではあらうが、これがどうした經路かで、軈てその列車が着いた次驛の待合室に居た百姓さん達の耳に入つた。（列車内のボーイがプラットホームの賢子にでも囁いたものかもしれない。）傍へ聞いた二三人の百姓さん達は眞赤になつて怒り出し「今出た汽車に不屆千萬な奴が乘つとるから追ひかけて引きづり降ろせ！」と猛り立てたが、及はう筈はない。

人間の内で最も動物に近い――よし花街女を相手の戯話にしても餘りにも殘酷ではないか。しかし數[illegible]ないか。それで本當にして[illegible]農村の食物がさつ[illegible]てもわかるであらう。如何に粗食してゐるかを數字化してみやう。

或る小作農（五人家内）一日食費

- 朝食
  - 粥……………………七錢五厘
  - 澤庵漬………………二錢五厘
- 晝食
  - 粥……………………七錢五厘
  - 豆腐のからい………一錢五厘
  - 澤庵漬………………一錢五厘
- 夕食
  - 麥飯（米三麥七）…十四錢五厘
  - 野菜の煮物…………九　錢
  - 澤庵漬………………一錢五厘

一日分食費約金四十五錢也

一人當り約金九錢也

一人當り一日分九錢也！ これが人間の食物と呼ぶことが出來るだらうか？ 日本の農村の中で中位にある中國地方でさへ、更にこれ以上の實例があつて、殆んど副食物を用ひないで臨なため、甚だしきは從來牛馬に喰はしてゐた道傍の雜草（すいば、さいたなの類）を採つて食べる哀れな家さへある。

青々とした野菜畑があり、黄金色の稲穂が

そよぎ、栗が弾けるがつづき、稲の香で一ぱいになつても、それが食べるものは、それが作り、そこに住む小作人の穀ではない！　しかも斯く自らは雑草や籾交りの米や鹽をなめて市場價値あるものは背戸の柿の木の柿の實さへ賣りつくしても、二束三文、賣つても賣つても迫つてくるのは飢飢飢。遂に何か食べるやうになるかは想像するさへ恐ろしい程だ！

働けば働くだけ損になる生活

窮乏に喘ぐ小作農の勞働は「働けば働くだけ損をする馬鹿らしさ」であることは、既に知られてゐるが、それを數字化してみる。

或る小作農の農業採算表

農業所得	三八七、〇九〇円
勞働賃金	三九九、一五〇
差引損金	△一二、〇六〇
資本利廻	—
農業利益	△一二、〇六〇
資本利子	一〇一、一九〇
差引純益	△一一三、二五〇

（註）農業所得の中には雑穀、蔬菜、養蠶、藁工等の副業を含む。家族農業勞働日數は、二六六、一日として計算せるものである。

これは決して極端な所謂窮村の特異例ではなく日本の中位と思はれる農村の普通小作農である。人間らしい勞働賃金の見積りから割り出してゆくと、一ケ年働いて實に百十三圓餘の損をしてゐる！　それで生きてゐるのは人間らしい暮しをしてゐないからだ！

如何に諤々の雄辯を以つて反動しても、如何に尨大な文筆を以つて辯護しても、この數字が表する勤勞をしてもなほ貧乏する嚴乎とした事實を糊塗することは不可能だ！

解り易い例でいふなら、地主から一町歩作らせて貰つてゐる小作は、約五十五俵の收穫を得、そのうち三十五俵は地主の不勞利得になり、殘りの二十俵が小作の手に殘る。その内から肥料代として六俵あてると、殘りは十四俵である。一俵十一圓としても約百五十圓だ。これに副業の雑收入を五十圓と算定して合計二百圓だが、それで一家内が一年中食べてゆかねばならない。一町歩も作るには、勿論夫婦が一日十二時間以上、汗水流して働かねばならない。子供二人を交へての四人家内の收入が一ケ月僅か十八圓位になるのだから、これでは人間らしい暮しが出來ないのが當然である。

「働けど働けど報ひはになし」あまりに殘酷！　あまりに馬鹿々々しい！

遂に娘を賣る！

窮迫農村の實體に觸れてみて、息詰るやうに胸を打つのは、極貧の極頂　ある小作農の娘さんたちの哀れな行衛である。悲劇が、まるで虐殺された死體のやうに村のあちこちに酷たらしく轉つてゐる。或る村の哀話——關西の工場に出稼いでゐた姉娘が、突然歸郷したら「うち、こないに變りましたやらう」と僅か三年の間に國の方言が全く上方辯に變つてしまつたやうな變化で、潑剌として初々しかつた田舎乙女の肌は、どす黒く汚れ顏の色は青ざめ果ててゐる。「まあ、お前は、つらかつたのぢやらうのう」と、兩親は覺えず涙ぐみ溫かい麥こがしの一杯でもと思ふけれど、一塊の黒砂糖を買ふ錢もない。

翌る朝、續けざまの咳といつしよに姉娘は赤いものを吐いた。

呼吸器病患者！

家を出る時は、新鮮な果物のやうだつた乙

[illegible]
[illegible]これだ!

迫り迫つた貧窮のなかへ、更に斯うした悲惨な姿が加へられた時、遂にその家の生活はどうたつてゆく?　信用組合や銀行はあつても、斯うした極貧者に何の功徳を齎らさうぞ!　それらを利用するものは限られたる人達では無いか!　自らの手で耕してゐる田地を貸らうにも、それは地主さんのもの。地面に頭をすりつけて頼んでも、五十錢のお金だつて地主さんは貸して與れない。村役場からは滯納の督促がくる。乳の出ない乳房にすがつて赤ん坊が火のついたやうに泣きぢやくる……

……

絶對絶命!　やうやく萌みそめたその妹の前に、この時、脂粉の裝ひをした地獄の扉が開くのである。

前借金三百七十圓也!

罪もない無垢な娘を花街に沈めることは、勿論今に始つたことではないが、これまでは大體に於て娘に身賣りなどさせる親は、その貧しさの原因が、怠惰、無賴のためであつたが、[illegible]せられないところの一般小作貧民のために身賣りさせられる場合が多いことは極めて注目すべきことではなからうか?

「おとつさん、おつかさん、心配せんでもよござんす。」とは言ひ乍ら、纖弱な胸に來る日の不安を一杯に包んで、見知らぬ町の汚辱の畑のもとにと買はれてゆく娘!　人間が買はれるのだ!　働く正直な親であるのに!　素直な心の娘であるのに!

男泣きに泣き乍ら、村境まで送つてゆく父親。すゝり泣く母親の頬は落ちくぼんでゐる。何が正直な彼等をさうさせたか?

「おとつさん、おつかさん、たつしやで居ておくれな。」

[illegible]

あゝしい日、本日そのものゝやうだ[illegible]も、今は如實に現世地獄化し、昨日も一人、今日も一人といふやうに、こうした哀れな受難者たちの姿が、村から消えてゆく。

その哀れな姿を見送る人は、決して彼女の兩親ばかりではなくて、實に彼女たちが生んだ「故郷農村」ではあるまいか。

賣られてゆく可哀そうな彼女達は、そのとき振り返つて、「たつしやでゐておくれよ、村の山や川」と、別離の挨拶をすれば、遂に耐らなくなつて、うつ伏して泣き出すであらう

「故郷農村」のその時の熱い涙を想像せよ!

「俺の村」生活素描

寺島彦市

俺ら農民はいつでも社會の下積みで一生ウダツのあがらない生活に縛られてゐる、そして俺らはいつも默々と汗と垢とに塗れながら土をいぢくり喃くんだ来た……俺らは別にそれを恥かしいとも不滿とも思つてやしない。生活なら仕方がないと考へる。それ〴〵の分

を守つて働けばいゝのだ。俺らはもつと豐富な良質の作物を惱らへたいとのみ思ふ、そのためには農耕器具の改良や耕作法の改善や新らしい種物などを仕入れたい。それが出來たらどんなにかいゝことだらう、……

だが俺らは貧乏だ、自分の生活すら辛くも喘ぎ喘いで過すのに必死だ！　どうしてそこまで手が出やう。農民にとつて充分に農耕が出來ぬといふことは、本をもたない學生よりも滑稽で悲慘だ。

いま俺らの直面してゐる「事實」はどんなことか。餘りに多くて數へあげるのが煩はしい位だ。米は慘落する、養蠶はソロバンにのらぬ、蔬菜の暴落はテンデ底なし相場でお話にならぬ、そればかりぢやない、公課税は多い、借金は嵩む、小作料は高い、ドッチを向いても八方塞りだ、マゴ／＼すると生命の綱である田畑を取上げられ、立毛まで押へられる・餓鬼はピイ／＼聲をたてる、齒拔け爺父に「濟まぬ／＼」を云はせる破目になる。一口に云へば、俺らの生活は根こそぎ倒れさうなのだ。――だが俺らは徒らに愚痴や繰り言を並べる氣持はない。

俺ら農民はどんな生活をしてゐるか、村はどんなになりつゝあるか、といふことをはつきりと見たいだけだ。

俺らの村は貧乏だ。一體に貧しい此の縣下で最も貧弱な郡の片隅にある。村は全體で二十七戸。路も何もない、只雜然と家の聚まつた小さな部落にすぎない。うね／＼とした丘と丘とに挾まれた、みんな自小作か小作ばかりの小さな貧しい村だ。六反歩の田持ちが最大の有力者なのだから推して知れやう。地主は近村の白壁の塀の中におさまつてゐる。地質も惡い、出來作も惡い、そして一毛作だ。冬はすでに十一月には來る、降雪はこの小さな村の僅かな田畑を駄目にする……

煤けた藁屋根の昔ながらの古い傾いた家に俺ら村の者は日毎夜毎の・劇しい勞働に疲れた身體を漸く雨露から凌ぐのだ。……廣い土間。肥料と藁の匂ひは何十年ものジメ／＼した濕氣を包んでゐる。雪國造りの光の透らぬ陰慘な家の中は、だだつぴろい板の間で、手製の莚が僅かな部分に敷かれる。大きな圍爐裏。疊數は六疊か八疊の佛壇の間だけが普通だ。（この地方は眞宗の「お得意地域」だ！）

晝でも暗くてジメ／＼したこんな家に、不健康と過勞のために蝕ばみ黄色んだ老人・子供・若い衆・女房以外にどんなものが想像できるか。そして病人の絶え間がないのも當然だらう。

此の間、永患ひしてゐた娘が明け冷めたくなつて死んでゐた。貧乏は前にも云つた。碌に葬式も出せない。其處の親爺は、手傳ひに來た親戚の男と二人で裏山に棺を舁いで行つた。見送りの村の女房はみな泣いた…………。裏山には村の名ばかりの燒場が赤松の疎林の中にポッンと立つてゐる。その二坪ばかりのホッタテ小屋の土間に穴が掘つてある。そこで燒くのだ。……業が深いと見えてなか／＼燃えなんだ」と翌朝山から下りて來た親爺は悲しげに呟いた。

だが「悲しい」のは娘や親爺ばかりではない、村全體だ。暮しの立たないこの村だ。みんなの顏色の惡さはどうだ。榮養不良と過勞とに疲れ疲れてゐるではないか。働き盛りの若い衆にしてからがすでにさうなのだ。老けこんだ村の人々。年齢を聞いたら皆おどろくに違ひない。若い衆と云へば、徴兵檢査には甲種合格といふのはこの數年一人もない。これは何といふ有難いことだらう、普通さへ乏しい村の勞働力が辛くも保てるといふ點で

に[illegible]
ろのだらうか。それほど[illegible]で[illegible]下
してゐるのだ。

暮しの立たない村の二十七戸の中、四軒は戸を閉ぢてゐる。街へ逃げたのだ。古い家の中に寂寥さむざむとした人の住まない家を見るのはさびしいことだ。都會の只中へ食を求めて去つて行つた彼等に、然し、何が待つてゐやう。行衛さへ判らぬその人々の噂は冬の閑爐裏ばたで人々の口に乘つた。……だが三年目の去年の冬、憔悴しきつたＮの一家が悄然と歸つて來た。都會での苦勞のために健康はすつかりメチャ〳〵だつた。そしてその敗殘の陰農者にはどんな生活があらう。女房はこの早春子供を道連れに首を縊つて了つた。……陰鬱な農村の生活、村の人々、何處にも活氣が見られない。

村の子供は、誘ひ合はせて學校へ行く。「武マ、早よ來んかいヤア」子供の甲高い呼び聲と笑ひ聲……。雨が降れば、この村の子供は莫蓙マントを被る。ピチョ〳〵と跳むのは無論ハダシだ。この村の子供は、いまだに洋服着た人を本天的に尊敬する。……曾ては都會の「エライ人」としての洋服姿を見た彼等は、[illegible]
[illegible]見てゐる[illegible]。貧しい[illegible]の村の子供に、すでに[illegible]から卑下することを知つてゐる。他村の「貧富」をもつた子供らな彼等は何と諦めてゐるのだ。可哀さうな子供たち……俺らはこうでいいのか。

俺の從弟が結婚した。嫁は近村から貰つた。だがそれは双方の親が彼を欺いて結婚させたものだつた。それほど醜い嫁だつた。——婚禮の夜初めて自分の女房を見たとき、彼は子供のやうに散々をコネた。——こんな貧しい村に、では、どんな娘が居殘つてゐるといふのだ。俺の村でも御多分に洩れぬ。都會へ都會へ！　自から村を捨てて都へ奔る娘、或は僅かな金に賣られ買はれて行く娘達は——どうなつてゐるか。稀に歸つて來る、は、眼のまわりに蒼黒い隈の出來た枯木のやうに衰へた娘だけだ。そしてやがては裏山の赤松の林で縊かれるのだ……

裏山にのぼると、川や田や畑や森にひのけられたやうにある山際の俺らの村。自分の作つた米も碌に咽喉に入れられない、そして働いても〳〵暮し兼ねる俺ら、村の生活。遠くに見える村の一際目につく白壁の地主の家を考へる。隣村の寺の坊主のずるい顔を思ひ浮べ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

俺ら農民は劇しい勞働を通ふて、大地を掻きづり廻る。それでも俺らは火の車だ。

豚小屋のやうに不健康な家、栄養のワキ出た發育不良の子供たち、働き疲りの窄い薄や娘の離村、ゼンソクで破れた笛のやうな聲を立てる老人、電燈をやめて一合四錢の石油ランプを使はねばならなくなつた村……淋しく貧しい村だ。野良犬も寄りつかぬ。ジメ〳〵した山際の俺らの村。

數年前までは、冬の仕事の中に獵があつた。それは鴨打ちである。鴨打ちと云つても鐵砲を用ふのではない。網を投げて捕へるのだ。この裏山を二つ三つ越えた小松の生えた峠に身を隱して、その奧の禁獵區である大沼に群る幾千といふ鴨が里方へ餌を拾ひに大擧して通り過ぎるのを待ち構へて網を投げるのだ。月夜が過ぎつて飛び去る黒影に手探りの網に五羽七羽、仕事になつたものだ。だが今はそれも禁止されて[illegible]

した密獵を敢てするのも餘儀ない事情からだ。――俺はふと考へる。生活の爲にする俺ら農民　仕事は、其の報酬を横合ひから俺られるのではないか。辛苦をなめ骨身を削つて働らいても食へないのは、その爲めぢやないのか。恰度、この待ち設けられた「網」にひつかゝる鴨のやうに……俺らはよく考へねばならぬ。

この間、町へ通ずる路で源衛門爺さんに會つた。空の籠を天びん棒にブラ下げた爺さんは言つた。

「今、町方へ野菜を賣つて來たンやが、どうにもかうにも、埒があかん。茄子が百で、たンだ三錢や。話になるもならんも……胡瓜や何ンかも一緒に叩き賣つたンやが……腹が立つて、泣くにも泣かれん……みんなで、ホレ二十三錢や」と大きな厳丈な掌を開いて見せながら爺さんはボヤいた。

茄子が百個で僅か三錢。――甘諸は貫二錢で飴ン玉四ツ五ツにしか較べられず、十個の玉芽は一個のエヤーシツプにも當らぬ。之ぢや俺らは、ボヤクどころぢやないのだ。生活は一體どうなるのだ。この源衛門爺さんは氣丈者で、三年前の水騷動のとき、他村の若衆を二三人傷けた、そしてその時受けたのが今でもコメカミにある疵だ！

誰が同朋を毆りたいものか。顔馴染みにも面と向つて殺氣だたなければならぬとは、俺ら農民の悲しい現實だ。そして之れは何のためなのだ。かうして血を流してまで守りぬいた俺らの農作物は、市場に出てどれだけ俺らに酬ひるのだ。

寂れて行く俺らの村――源爺さんの疵。俺らも考へなければならぬ。ほんとに考へねばならなくなつた。

實を結ばぬ勞働

御崎津多雄

今茶業地は凡ゆる動脈が脈打つて大活動の最中である。一年中に十五六日しかない書き入れの一番茶だ。此の短い期間に農民の一年の運命が決せられるのだ。それに死活線上を彷徨する農民だ。稼げる丈稼がなきア。

誰も彼も搾驅に鞭打つて、非人道的な迄に過激な勞働を續けてゐる。

僕は午前二時起床、すぐ夜勤の保一君と交代する。それから夜の八時迄、工場に入り切りだ。二人で丁度よい製造能率の機械を一人で切つて廻すのだ。食事は工場から飛んで來て、五分間でかつ込んで又飛んで行く。それで時間が不規則だ。忽ち胃を惡くする。毎年の事だ。午後八時保一君に讓つて風呂に入つて寢るのが九時、就眠五時間、午前二時再び起床、保一君と交代する。保一君は茶時丈雇む傭人だ。僕と交代してねるのが三時、就眠五時間、午前八時には起床だ。それから翌朝二時迄働き續ける。

こんな徹夜業が十五日位續く。丁度此の期間中に身體中の精力を、一分も殘さず使ひ盡す決死的勞働方法だ。終ひには僕等の身體はクタクタに弱つてしまつて中心を失つてふらふらする。立つてゐて猛烈な睡魔に襲はれてくらくらと倒れかゝる。意識は朦朧として只習慣的に手足が動く許りだ。

[illegible]

こうした自由な村だ、日本一の茶産地だ靜[illegible]

る〻等の瀬上では、年々何等の好感も挿まれずに行はれてゐるのだ。百姓達はこうしなければ生きて行かれぬものと心得てゐる。

壯年者許りではない。年寄も子供も、此の猛烈な生存渦中に捲込まれて酷使を餘儀なくされる。哀れなる老人達は、連日連夜轟々と鳴り響く機械の騒音と、空に渦卷く石炭の黑煙とに度膽を抜かれて、煤に汚れた黑い顔にオドオドと眼を光らしてゐる許りだ。

哀れなるものよ、此の世に生殘れる悲哀だ。女の活動は更に涙ぐましい。都會の有閑婦人達よ、製茶期の女の勞働を半日と見續け得るか。

製茶期はまさに生活戰線の白兵戰だ。

茶の終つた後の僕等の家庭は何と陰欝なものになつたものだ。僕は遂に一日、床から起上れなくなつた。

「葡萄酒でも飲み度いなア」

僕は靜脈の高く現れた腕に苦悶の跡を顧み

[illegible]てヨロヨロと、蒼い顔に[illegible]い、そして特殊部に黙りこくつてゐる。たまに話す聲も喉に引つ掛つて外へ出る力もない。笑聲一つ起らない。悲惨な家庭だ。

是程、家内中骨を削つて造つた茶の値段は何うだ。

農家は此の三年間立て續けに種々の打撃に打ちのめされて大きな傷手を負つてゐる。

先づ銀行のモラトリアムにつれての慘落、その翌年の山東出兵騒ぎの暴落、續いて昨年の不況だ。昨年、二番茶に入ると果然一回五十錢の安値になつたので、農家は一齊に機械を止めて了つた。横暴なる商人に對する對戰だ。前古未曾有の出來事だ。村は暴動が起つた様な騒ぎだ。だが一日經つたが値は上らない。摘んだ茶の葉は腐り始めた。矢張り農民は茶を採む(製造する)より外仕方がなかつた。

商人はそれを知つてゐた。

二日目から農家は殘念がり乍ら機械を廻し始めた。その結果は、思ふ様商人の腹を太ら

[illegible]

茶に、必然に大打撃を與へた。その上彼等は實に、弱い者いじめの商人の戰術は、更に二三割の安値を實現させて、無慈悲にも貧弱なる農家の懐を搾取した。

「畜生、あいつ等(商人)にいゝ様に取られてしまうんだ」

茶を賣りに行つた度に父は憤慨して歸つて來た。一貫目一圓だ。

茶が終へた。が收入は操業中止迄して騒いだ昨年の半分もない。肥料代と電力料金と石炭代と税金とを差し引けば後へは何が殘る。石炭殻と、戸棚の隅迄舞込んでゐる煤と、疲勞とだけだ。是が家内中骨を削つた勞働の報酬だ。百姓は悲鳴を上げた。そして憤慨した。

毎日、借金取が來始めた。肥料代と、石炭代は二年前から滯つてゐる。日用品は正月以來茶が的にすべて帳面だ。がその待ちかねた茶の金は借金へ廻す丈もない。皆やつてしまつたら後はどうして食つて行くのだ。

あゝ、又しても負債が殖えた。

それたのに茶商の儲け樣はどうだ。内地向も貿易筋も大きな處はみんな、懐がはち切れ相に太つてゐる。彼等の工場に働いてゐる仕上工の女房共迄調子づいてゐる景氣だ。

「百姓が皆して商人の身上を拵えてやるのだ」

「無慘な搾取だ。百姓は奴等の奴隷も同じことだ」――若い農民は口惜しがる。

一方肥料は絶對に高い、そして借りた金へは一割三分の利子が付く。石炭は七年以來一圓に九貫目だ。電力料は無論好況時から變らない。何奴も此奴も綺麗ななりなして百姓を食つてゐる。

農民は無數の寄生蟲に命を奪はれんとしてゐる。

其處へ農村の恐慌が起つた。

破産する仲買商人の續出だ。

殆んど無資本の彼等は不相應に大きく取引なして（農家の支拂を延してその金で米麥を買ひ西瓜を買ひ――西瓜の産地だ――商賣をしてゐる。）一度躓くと破産と稱して、買込んだ茶を賣り拂つて負債の整理をして、尙次の商賣の資本を腹へ蓄いて（すぐ後から平氣で商賣を始めるのだ）殘つた金を農民へ、振金に支拂つて（それは茶代金の二割にも當らない）突放す。惡辣非道な、儲ける爲の破産だ。此の術にかゝつて百圓、二百圓、多きは五百金もやられる農家があつちこつちに出て來た。五百圓の無意義な消失は、四十三糎砲彈の命中だ。悲慘。

茶時の辛苦は何によつて報いられるか。

債鬼に追はるゝ苦痛は如何にして逃れるのだ。思へば悲憤の限りだ。何故、百姓はこうも虐げられる。他人事ではない、農民は等しく憤激した。が如何せん泣寢入りだ。被害者の家族は涙に暮れる。

弱き者よ、汝の名は百姓だ。

善良なる百姓達、お前達が今迄信じてゐた、「百姓は働きさへすれば食つて行ける」と言ふそんな安全地帶はとつくに消えて無くなつてしまつた。

働いても働いても借金が殖えて行く許りだ。商人共は坐つてゐてずん〳〵太つて行く　彼等の肉體と同じ樣に。

成るなら百姓相手の商人になれ。

裏の家の女房が五〇錢貸して呉れと言ひに來た。そして言つた。

「うちはもう四日も煙草を切らしてゐるんで氣が拔けた樣にぼんやりしてるんです。本當に百姓程馬鹿らしい者はありあしない、汚い着物を着て不味い物を食つて正月もろくに休まず働いて、それで年中借金できゆう〳〵言つてるんだ、全く何の因果で百姓なんぞへ嫁つて來たものだとつく〴〵情なくなります」

僕はしみじみしたものを彼女の聲に感じた。

「百姓なんてやめちやつて月給取の處へ嫁きあ好いじアないか、綺麗な態をして毎日遊んでゐて奧樣で通れるんだから」父が笑ひ乍ら云つた。何事もあきらめた父。

「まさか此の年でねえ、ワハヽヽヽ、それでも百姓の女房と月給取の奧樣とは同じ女であり乍ら大した違だねえ」

遊んで暮す人間があれば、それ丈餘計に働かねばならぬ人間が一方になければならぬ。農民とは、八千萬の人間の下積にされて、その重壓に悶え苦しみ乍ら、尙必死の力を盡してその人間を支えてゐる最下層にあるみじめな

[illegible]だ、[illegible]の百姓に丁度[illegible]一人[illegible]間が強い權力と、続いて掛る[illegible]に[illegible]作ら、為す術もなく死んで行くその姿だ。

雨の降る日、近所の作さんは沈んで言つた。

「俺は田も畑も賣つて仕舞ふかと思ふ」

彼は一町五反の自作農だ。それがせつせと働いてゐて負債が殖えて行つた。今は全財產を賣り拂はねば片が付かぬ。時代の波に覆へる船。その難破船へも假借なく税金は掛る。

今の百姓には土地は何等の價値がない。何故なら、自作してゐて食つて行けないじアないか、そんな價値のない田や畑へ地租だ、何だと重税を課する國家は、百姓の財產の何處に價値を認めるのだ。何と時代錯誤の税制。

「こつくり死ねれば今死んでも心殘りはないなア」

今年四十二の作さんの聲。それは虐げられた今の農民の誰もが持つ共通の心だ。

だが農民だとて何時迄も善良でゐはしない。此の頃百姓の頭はぐれて來た。その顔には殺氣が漲つてゐる。誰も彼も自棄的に圖々しくなつた。晝飯の時、石炭屋が何て吠えた。

「去年の分でも少し入れて貰はねば困るね、若し[illegible]に[illegible]なければ[illegible]手[illegible]いても[illegible]はねばならん」

[illegible]に無愛想に[illegible]てやつた。

勝手にしろ、無いものがどうなるものか。

何處かに危險をはらんだ世相。

「今年の暮には××が起るぞ」

その聲に農民達は或る豫感を感じて、互に戒め合つて戰鬪準備をし始めた。

「もうこうなつたら入つた金は一文だつて出さぬ事だ、借金なんて放つておきア沢山だ」

捨身になつた百姓は何者をも恐れない。掛取は皆突劍呑に追返される、電力會社の集金人の脅威嚇も何等の權威が無くなつた。

「是で秋になつて米を獲つたら一俵も出さぬ樣にするんだ。そうすれアもう大丈夫だ」

分別顔の中老が叫んだ。

「年貢なんて第二の問題だ」

張のある青年の聲。

其處に彼等は初めて百姓の強さを發見して生き返つた。理屈はない。生きんが爲には手段を選ばずだ。

だが如何に出づるを制しても入るものが少い。新聞はとつくに止めた。味噌汁のダシが[illegible]に[illegible]た[illegible]たまいの[illegible]の[illegible]ばれる。[illegible]に[illegible]た。

まだよく實の入らない里芋を掘つて擔いで行つた母がいそいそと歸つて來て、

「八十錢になつた」と言つた。

「それアいゝあんばいだつた、今日日何をしたつて一錢の金儲もないのに」

祖母がよろこんで言つた。

「お茶でなけれア」と茶を信賴し切つてゐた農民達も聲をひそめてしまつた。

「此の頃では茶園なんか無い方が增しだ。有れば肥料もやらねばならん、税金も掛る、只で働いても損がいく、冗談じアない」

何時もならば施肥の人達で賑ふ牧の原の大茶園も寂として人影もない。天下の偉觀も凋落の影が濃い。

日本一の茶業者も今や大動脈が脈打たなくなつて、みじめな瀕死の姿を大きく横たへてゐる。八月の太陽がその上を、ぎらぎらと直射してゐる。息つく程の者もない。慘。

旱魃。

息づまる光景だ。

年の暮が思ひやられる。

江木翼論

馬場恒吾

濱口內閣は目下樞密院と決死の戰をやつてゐる。內閣が潰れるか、樞密院が潰されるか何れにしても、これが日本の政治史に一轉機を作る戰である事を吾々は期待し且希望してゐる。此戰ひが進むに從つて、內閣側の參謀長としての鐵道大臣江木翼の影が大きく映る。樞密院側は伊東巳代治伯が總大將として同時に參謀長を兼ねてゐる形に對して、內閣側は濱口首相の總大將と江木の參謀長が二人になつてゐる。

この戰ひの勝敗は豫言出來ない。只其勝敗が如何なる形ちに依つて決せられるかは說明して置く必要がある。戰ひの題目は倫敦に於て印されたる海軍々縮協定である。樞密院は此條約の批准に贊成するか、否かを決せんとしてゐる。樞密院が批准に反對すれば政府の負けになる。だが、實際の勝敗はさう簡單には決せられない。樞密院が條約批准に反對の決議を上奏するとする。其場合には政府は樞密院の上奏に對して、反對上奏する手段がある。其時　陛下が政府の上奏を御採用になる場合には、條約反對の樞密顧問官が任命される。さうなれば、勝利は完全に內閣のものになるからである。

だから、樞密院もまさか、條約に反對するほど單純ではあるまい。條約には贊成する。卽ち其御批准を奏請する意圖で進む。併しそれに達するまでに、內閣をいぢめる。條約調印迄の過程の上に於ける內閣の弱點を攻擊する。そして內閣を居たゝまれなくする。此間に內閣の腰が碎けて退却すれば、其後とで樞密院は涼しい氣分で倫敦條約の御批准を奏請する。此場合には勝ちは樞密院のものとなる。

樞密院が政府の弱點として狙つてゐる所は、統帥權問題であつた。政府が當時の軍令部長加藤寬治大將の反對にも關らず、

海軍の兵力量を決定する政府に回答したのは、[illegible]あると云ふのである。樞密院派の憲法解釋に依れば、それが憲法違反になるのである。

樞密院が統帥權問題の痛い所を狙つたのである。と云ふのは政府は樞密院と戰ふ決心はある。だが、樞密院を敵に廻はすと同時に、陸海軍の軍部を敵に廻はす事は辛らかつた。樞密院と決戰する丈けでも大仕事であるのに、其上に陸海軍と決戰する餘裕はなかつた。そして統帥權問題を下手に取扱ふと軍部と樞密院に共同戰線を張らす事になる懼れがあつた。

議會が開かれてゐる當時は、政府は兵力量は軍部の意見を參酌して決定すると云つた。參酌と云へば只參考にするのみ。決定は政府の權限でやると聞える。この議論は理論に於ては當然、しかるべき事であつても、事實に於ては軍部は反對であつた。政府が其意見で突張れば、陸軍が海軍と共同戰線を張るのみならず、それが延長して、樞密院の共同戰線になる。そこで、政府は軍部とは一時妥協して、戰ひは樞密院のみを敵として戰ふ作戰を取つた。この作戰は樞密院と軍部を同時に抑壓せんと欲する輿論の傾向から見れば、極めて不徹底な生半熟のものであるが、實戰の方針としては已むを得なかつたのである。

軍部との妥協の事實としては、宇垣陸軍大臣が辭意を表示したとき、[illegible]陸軍大臣の[illegible]と軍令部長の同意を要すべきものなりと云ふ申合せが内閣にかうした經緯のある故に、江木が指導方針を立てたと諒解された。これが最上の政策であるか、否かは別として、江木が參謀長である事は疑ふ餘地がなかつた。それ故に、今度の樞密院との戰ひに勝つか負けるかは、濱口内閣の運命に關するのみならず、江木自身の政治家としての浮沈を決定する。彼れがさうした戰ひを戰ふに性格的に適當な人物であるか否かは疑問であるが、濱口内閣の中に樞密院を向ふに廻はして戰ふべき人物は外にない。濱口首相は官僚出身ではあるが、あの通りの正直にして鈍重な人である。内務大臣の安達謙藏は策士らしく見えるけれども、根が黨人であるが故に、法制と慣例の技術戰では只見物として役に立つのみだ。江木は官僚から出でゝ、官僚と戰ふ。彼れはそれを使命として此世に生れたかの如き境遇に置かれてゐた。

彼れは大臣になる迄に内閣書記官長を三度も勤めた。日本の政治家で三度も書記官長を勤めた男は外にあるまい。書記官長は内閣の參謀長であつて、高等政治の中心點となる。其交渉する所が、上の方は宮中から樞密院、陸海軍の主腦部に至り、

の方は政黨の院外團から各方面の有志家に及ぶ。だから實際的政治學を勉強するにはこれほど便利な地位はない。江木が法學博士であるのは其爲めではあるまいけれども、過去の政治に關して、其内情を知り悉くして居る事、彼れの如きは他に類がない。政治家を廢業して政治史家になつたら、彼れは一種の國寶になり得る。

彼れが書記官長を勤めたのは第三次桂内閣、大隈内閣、加藤高明内閣であつた。加藤内閣の時は、前に二度の經驗を經た後であつたから、書記官長は手に入つたものであつた。其地位も親任官待遇であつた。加藤高明が生前云つた事がある。書記官長としての江木は法制と慣例に慣れ切つてゐるから、何んでも委せ切りで安心してゐられる。だからこの書記官長は手離し度くないと、其爲めに江木は大臣になる事が後れた。加藤高明内閣が成立したときは、三派聯立内閣であつたが故に、江木は大臣にならず、犬養毅が政友會に合流して、遞相を辭職した後任には安達謙藏がなり、加藤高明の憲政會單獨内閣が出來たときに、江木は初めて小川平吉の後の司法大臣になつた。今度の濱口内閣では初めから鐵道大臣になつてゐるが、同時に彼れは高等政治に關する濱口の參謀長になつてゐる。書記官長が板に付いて、其癖が取り切れないと見える。

樞密院の頭目である伊東巳代治も日清戰爭當時の伊藤博文内閣の書記官長として名書記官長の名を擧げた。後に大臣になつても、高等政治の味が忘れられず、遂に樞密院に頑張るに到つた。今は伊東と江木が對立してゐる。其思想と性格に反對な所もあるが、此二人の策戰を見るとき、蛇の道は蛇だと云ふ感じがする。吾々は法制と慣例の技術戰に殆んど何等の興味を感じないが、彼等は其所に恰か將棋の技量を競爭する如き興味を持つてゐるやうだ。

明治二十年、二十五歳で法科大學を出て、直ちに内務省の官吏になつたが、初めは官僚政治家になる積りで進んだ。其頃彼れが書いた文章に自分の一生の方針を述べたものがある。自分は政治家になる目的であるが、政治家に議會政治家と官僚政治家がある。議會から出るのは自分に適さないから、官僚から政治家になるのだと、半ば諦め的の議論をしてゐる。そして彼れは内務省から法制局と順序よく官吏として進んでゐた。それで彼れが途中で方向轉換をして、政黨政治家になつたのは、桂太郎公との交渉が原因をなしてゐる。

桂との交渉は彼れが官吏生活に最も油の乘つてゐる時に始まつた。彼れが曾つて朝日新聞に語つた處に依ると、明治四十三年四月のある日、彼れは桂首相に呼ばれて、これは極祕だが、

日本に統監府を併合する決心をした[illegible]を置く、總裁には自分がなる。實際に仕事は長官がやる。要するに云ふのであつた。拓殖局は表面は臺灣の行政改革をやると見せかけて、內實は朝鮮併合の爲めの調査や法令起草に不眠不休の努力をした。其年の八月に寺內統監から愈々併合の談判を始めてよいかと云ふ電報が來た。そのとき、桂は輕井澤に往つて居た。暴風雨で鐵道は勿論、電信電話も不通になつた。愈々談判を始めてよいか否かを桂に相談する方法がない。江木は外務大臣小村壽太郎、內閣書記官長柴田家門と相談して、直に談判を始めよと云ふ電報を打つた。これで八月廿九日には朝鮮併合が成立した。これが江木自身としては自分の腕に力の籠つてゐることを自覺する動機であつたと共に、後に彼れが桂內閣の書記官長となる基となつた。

江木が書記官長になつたのは、二個師團問題で潰れた西園寺內閣の次の桂內閣に於てであつた。此時からして彼れは政治家になると共に官僚仲間から脫出する傾向を採つた。其前に桂は明治天皇御在世中に歐洲漫遊の旅行に出掛けた。それ迄に桂は二度も內閣を組織し、政友會と妥協して政治を行つてゐたが、此頃になつて、時勢の變化は到底官僚內閣の存續を許るさぬ事を悟り出した。それで一度歐洲を旅行して、各國の政黨政治を[illegible]前に、彼れは[illegible]て、[illegible]したのである。然るに桂はモスコーに着いた時に、明治天皇御病氣の電報を受取つて、一行は急遽日本に歸つた。彼れが歸朝したときは明治天皇崩御の後であつて、彼れは內大臣兼侍從長として新帝陛下に仕へる事になつた。

政黨組織を志して、宮中に入る。それは桂としては不本意であつた。併し桂の先輩であり、當時の元老の頭目であつた山縣は、或は桂の政黨組織を嫌つて、宮中に追込めたかもしれない。其頃桂は江木に云つた。明治天皇には手を取つて敎へられるやうに指導された、だから自分は新帝陛下に一生懸命に奉侍する積りであるが、一日宮中に居るとグッタリするほど草疲れると。桂は其頃已に胃癌の病氣を得てゐたと見えた。

西園寺內閣が潰れて元老會議が屢々開かれた。山縣は西園寺に留任を奬めたが西園寺は取り合はない。松方は一度は內閣を組織する決心をした。市來乙彥を大藏大臣にする積りで、財政計畫まで立てさせたが、それも物にならなかつた。平田東助、山本權兵衞が順々に辭して、內閣を引き受けるものがなかつた。一時、山縣公自身が悲壯な調子で、誰れも出る者がなければ、自分が出る外はないと云ひ出した。桂は其時、老公を煩はして

は大變だ。其位ならば自分が引受けると云つた。山縣が桂に此難局を切り抜ける成算があるかと聞いたに對して、桂は自分は今迄とは違つた方針で行く積りだと答へた。それは政黨を組織すると云ふ伏線であつた。

桂が内閣を引受けると決心した日に、江木は拓殖局に居た。其所へ、宮中に居る桂から電話が掛つて、自分は今宮中から退出するから、君は(桂の)自宅に來て吳れと云ふのである。會つて見ると桂は内閣を引受ける決心をした事を告げ、江木に書記官長になれと云ふのであつた。そして今度は、自分は政黨を組織して政黨内閣にする積りである。併しそれは今直ちに組織する内閣の間に合はぬ。だから今組織する内閣は臨時の積りで、閣員には桂の一言で何時でも辭職させる事が出來る人間を連れて來ると、其方針で内閣の人選をした。法相松室致、農相仲小路廉、文相柴田家門は何れも大臣としては新顔であつた。桂は文相には一木喜徳郎を持つて來たかつたのであつたが、柴田も一度は大臣にしてやらなければなるまいと云ふので、文相にしたのであつた。外務大臣としては加藤高明が英國から呼戻される事になり、大藏大臣に若槻禮次郎、内務大臣に大浦兼武が据ゑられてゐる事を見ると、後の憲政會、民政黨の主腦部が此所で養成されたかの如く見える。江木は初めての書記官長として、内閣の人選に參加して居る。濱口内閣の人選に際しても、江木の建策が加味された事は、爭はれない事實である。江木は、キャビネット・メーカーの名に値する。



書齋に於ける鐵相の最近影

此時の桂内閣は大正元年十二月二十一日より翌年二月十一日に至る五十餘日の短命内閣であつたが、江木に採つては桂と共に政黨政治に方向轉換を行つた所の重要な一幕であつた。桂は内閣を組織した後に、新政黨組織を發表して、國民黨の五領袖と云はれた所の大石正巳、河野廣中、武富時敏、箕浦勝人、島田三郎と會見し、そして内閣辭職と共に同志會を組織するに到つた。之に依つて桂は國民黨を犬養毅の一派と大石一派と分裂せしめたが、同時に桂が新政黨を組織した事が後に山縣を本尊とする長州閥を分裂せしめる原因になつた。桂が國民黨の領袖と交渉を始めたとき、江木は書記官長として其方の事にも關係した。或閣議の日、江木が首相官邸に居ると、大藏大臣の若槻が獨り早くやつて來て、江木に向つて

「桂總理は此頃連りにコソ／＼やつてゐますね」

「さう、何か造つてゐます」

「寧ろ吾々にも打開けて相談されゝば、吾々も亦努力する方法もあるのだが」

内閣瓦解の日、桂は特に若槻、後藤、仲小路等に政黨組織に盡力する事を求めた。後藤、仲小路は桂の死後、同志會を脱退したが、若槻は踏み止まつて、後に其政黨を率ゆる身になつた。

議會が開かれて、憲政擁護の運動が起りかけた頃、加藤高明は英國から歸つて來た[illegible]に[illegible]を[illegible]云つた。英[illegible]れが最近に至るまで見て來た政界[illegible]の事[illegible]してゐた。[illegible]院法改正で自由黨政府と保守黨が多年劇烈な政爭をしてゐた所へでエドワード七世が崩御され現在のジョージ五世が一九一〇年に即位されたとき、新帝は暫く此政爭を中止せしめる爲めに兩黨首領を召されて、圓卓會議を開かしめられた。其結果として兩黨の妥協が行はれ、政爭が一時中止せられた。加藤は日本でも新帝御即位の初めに、政爭の苛烈なるは好ましからぬ事と考へて、英國流の黨首會見に依つて此時局に善處すべき事を提議した。桂は其意見を入れて、西園寺と會見し、西園寺に對する物語を交請した。その結果一時は政爭が中止になるかとも思はれた。併し西園寺が政友會總裁として、無理にも政友會を壓へんとはしなかつたが故に、結局、妥協は成立しなかつた。この加藤の提議が成功したのはそれから十四年後の若槻内閣の時に、若槻が三黨首妥協を試みた時である。

桂と西園寺の會見には發案者の加藤高明が仲介に立つた。加藤は第一次西園寺内閣の外務大臣であつた(内務は原敬)から、この仲介が出來た。江木は内閣書記官長として、屢々桂の命を受けて加藤と接觸した。それが後になつて加藤に唯一無二の書記官長として信頼さるゝ原因になつた。内閣辭職後に同志會が

組織され、初めの幹部が決まつた。若槻禮次郎、片岡直溫が會計監督になり、江木は安達、富田など、幹事になつた。兎も角も彼れは十幾年かの官吏生活を打切つて黨人になつたのである。

江木の政黨に入る事は彼れの養父の江木千之翁も贊成しなかつた。江木は大學を出ると間もなく千之翁の養子になつた。彼等は共に周防岩國の生れで、千之翁は初め文部省の官吏から其頃は何處かの知事をして居り、所謂長州系の官僚であつた。だから其養子が政黨に入る事を何か謀叛人の仲間入りをするかの如く思つたのであらう。

果して江木は後には長州系の大御所たる山縣と完全に分れる事になつた。又、彼れが寧ろ非常に贔負されてゐた寺內からは寺內が死ぬる迄恨まれる事になつた。併しそれは後の話しである。

桂內閣が潰れて一年餘り、江木は浪人であつたが山本權兵衛の次ぎに、大隈內閣が出來たとき、彼れは再び內閣書記官長になつた。大隈內閣には閥僚に色々の系統の人が居たから江木としては充分に手腕を振ふ事が出來なかつた。だが彼れは官僚出身である丈けに、官僚系の策動には目を放さなかつた。

山縣の腹の底には寺內正毅に內閣を組織せしめ度い希望が潜んでゐた。西園寺內閣を二ヶ師團問題で潰したときも、其意志はあつたのであるが山縣はそれを持ち出す機會を失つてゐた。其內に、桂に出られた。次には山本內閣、大隈內閣が出來て、寺內を出す機會が漸次に後れた。大隈內閣が大浦事件の爲めに途中で躓いたとき、山縣は強いて大隈に留任せしめた。茲に山縣の深謀遠慮とも云へる狡るさがあつた。山縣が大隈を留任せしめた。腹を露骨に割つて云へば、お前の內閣は一年で潰れる處であつた。それを俺れが庇つて今一年壽命を延ばさす。其代りに、お前の後には寺內が出られるやうにせよと云ふのであつた。

大隈が辭職するとき、寺內を朝鮮から呼び寄せたり、寺內と加藤との聯立內閣を提唱したりしたのは、かうした關係があつたのであらう。併し大隈は老軀其職に堪へずと云ふ理由で辭職するので、別に政策の行き詰りがあつたといふ譯でなく、且つ純理論から云へば、今更超然內閣でもないと云ふ議論が大隈の周圍で唱へられ、それが大隈の意志を動かした。そして大隈は辭表の中に後任內閣の首班として同志會總裁加藤高明を推薦した。山縣は此推薦を一蹴して寺內を推した。そして寺內々閣が出來て、加藤高明にも、江木翼にも苦節十年が始まつたのである。

江木は前にも云つた如く、寺內から贔負目に見られてゐた。

寺内々閣が出來るとき、寺内は江木に向つて書記官長の椅子を提供して來た。江木は勿論それを斷はつた。それのみならず寺内々閣の下に行はれた總選擧に於ては、江木は山口縣下に寺内反對の候補者を立てゝ、盛んに超然内閣攻擊の演說をして廻つた。寺内は子分に裏切られたかの如く、江木を憎んだ。

寺内々閣が出來た後、江木は山縣を訪問して今頃寺内に超然内閣を組織さす法はないと云つた。山縣は之に答へて自分は飽くまでも防長主義(周防と長州出身者を中心とする主義)だ。君は君の行く道を行け、自分は自分の道を行くより外はないと云つた。これから後は、山縣は一生江木に口も利かなかつた。官僚の恨みや深いと云はなければならぬ。

江木は官僚と緣を切る爲めに、かなりの犧牲を拂つてゐる。だから、其意志に於ては完全に官僚から脫退してゐる。だが、其素質と氣分は官僚の成分を多く含んでゐる。彼れは大にさうでないやうに勉めるけれども、其應對振りが何となくぎごちなく、政黨の仲間では一口に官僚だとけなされて、其不人氣なる事夥しい。育ちは爭はれないものだと云へる。

然るに一方から見れば、其處に彼れの生命が存在する。官僚の特質は明治時代の日本を建設した人々の刻苦精勵の氣象を受け繼いだ所にある。日本は東洋に夢見る國であつたのが、兎も角も實業界は[illegible]曖昧であつた時に、政府當路者が先導となつて近代文明を輸入した。それは先覺者たる苦心と努力を拂つて、初めて出來た仕事であつた。だから、官僚は後には種々の弊害を生じたが、少くとも明治時代には其時代に適する役目を果したのである。從つて官吏として出世したものは何れも一能一藝に秀いでた特長を有つてゐた。頭が良く手腕があると云ふのが彼等の通有性である。國の重要な仕事を背負つて、一人で切り捲くると云ふ抱負を持つ習慣を付けられてゐる。江木はさうした仲間で優秀なものであつた。だから、江木には人の顏色を見て、主張を二三にすると云ふ風がない。始めに自分の主張を拵らへて、是が非でも、それを頑張る。それが彼れの不人氣を增す種になるが、性分だから仕方がない。

桂が政黨を組織した當時の事を彼れが批評した事がある。桂は其前に内閣を取つてゐたときは、何日も政友會と妥協してゐた。だから、人情から云へば、政黨を作るとすれば、政友會と合流するのが當り前であつて、今迄反對黨であつた國民黨の連中と一緒になるべき筈ではなかつた。それが國民黨の先領袖と一緒になつたには一つの理由があつた。桂は平生云つて居た。政友會のやうに、主義主張もなくて、只大ぜいで押し廻はすと云ふ

のは嫌ひだ。矢張大隈黨のやうに、何か政策を決めておいて、それを買かうと云ふ政黨でなければいかぬと。江木は此主張に共鳴してゐた。それが彼れの性分を反映してゐる。

例へば此頃樞密院の問題になつてゐる海軍元帥府の海軍條約に關する奉答文の事でもさうである。樞密院は政府に向つて此奉答文を見せろと云つた。政府はそれを拒絶した。江木の説に依ると、日本の憲法は、雜然として存在する日本の諸制度を認めて、其上に乘つかるやうに出來たものだ。だから、内閣から獨立した機關が存在して、内閣の管轄外の事が多い。例へば、爵位勳章を授與する事は宮内省が行るので、内閣が口を出す事は出來ない。元帥府だつて内閣以外の存在だ。奉答文は濱口首相にお見せになつたので、政府の管轄以外だ。樞密院が見せろと云つたつて、政府の力でどうする事も出來ないのだと云ふ。理窟は其通りかもしれないが、政府が少し融通を利かして見せたらよかりさうに思はれる。一つの主張を頑張るのが江木の特長である。

だけれども、それにはよい方面もある。例へば彼れが鐵道大臣になると、官設鐵道の布設豫定線になつてゐるものを二十三線スパリと取消して了つた。地方の陳情委員が押し掛けても頑として動かなかつた。黨の方から苦情を持ち込まれても聞かない。そして自分の方針を突張つた。

鐵道省で買ひ入れる器械類で、今迄外國から輸入してゐたものを一千萬圓許り日本物を使ふ事にした。日本品で品質が少しも劣らぬものを、外國品使用の習慣に囚はれる必要はない。此不景氣の時に一千萬圓の注文が來れば、日本の工業界は何の位助かるか判らぬ。勞働者も助かるのだと、江木は方針を立てると直ちにそれを實行した。そして國産奬勵を内閣の一つの政策にした。これは商工大臣のお株を奪つた形ではあるが、彼れは超特急の機關車の如き牽引力を發揮してゐる。

時代は民衆政治の方向に向つて流れる。其一面の特長は常識以上に出でない多數の意見が世間の風潮を支配する事である。政治と政治家の平凡化である。此潮流の中に立つては、江木は少しく異彩を放つ。一つの見識を立てゝ、他人が何と云はうとも、それを固執する。その態度が專制的だ。其所に彼の不人氣が生れる。だが、それは、日本の議會政治を衆愚の政治に墮落せしめない爲めに、彼れが孤軍奮鬪してゐる姿とも見られるであらう。

蟹工船被虐レポート

——カムチヤツカ搾血制度断片記——

井上啓之

1 「沖のホテル」が近代工場になる

わづか一週間の間に罐詰機械の据付、それからベルトコンベヤー、ボイラアのカンカン錆落し、チユウブのほうたい、方々の水もりのパッキング——やせ細つたリベットの間から噴水のやうに海水が吹き込んで来る——ビイムは船のゆれる度にきゆつきゆつと音をたてゝわめきたてた。スクリユウには蛎と海藻のかさぶたがふき出物のやうにくつついてゐるではないか。雪、みぞれ、潮風と照りつける夏の太陽に、甲板は、板の合せ目がそつくり返つて、そいつを下の船艙から覗くと太陽の光りが、このドス暗い船艙へ、雨のやうにさんさんと降り注いでしまを作つてゐたではないか。

・船が利尻の沖を交はす頃から濃霧（ガス）としぶきが雑夫部屋へ流れ込んだ。

蟹工船○○丸は原価償却をとつくに済ませた三十年以上の老朽船だ。○○丸に限つたことはない、本年もカムチヤツカ東西の両海岸に、五千人の漁業労働者を乗せてゐる十九隻の二三千噸から七千噸位までの海の浮動工場——蟹工船——はみんなこんな老朽船だ。

「いつ頃だつたらうなア」

函館の街の人達にたづねても、たれもはつきりしたことが記憶にない。どぶーんと、最後の錨を沖に投げ込んで、船長、機関士、運転士、それからもつと多くのマドロス達を函館の街へ吐き出したまゝ、それから後はここの港へ出入りするマドロス達と淫売婦のよき[illegible]キヤテハイタノム」カムチヤツカの海から無電が丸ビルの本社へ飛んだ。その結果、マドロス達の「海のホテル」はかうして一週間のあひだに、堂々たる近代的な「海の浮動工場」に拵へ上げられたのだ。

2 地獄の釜

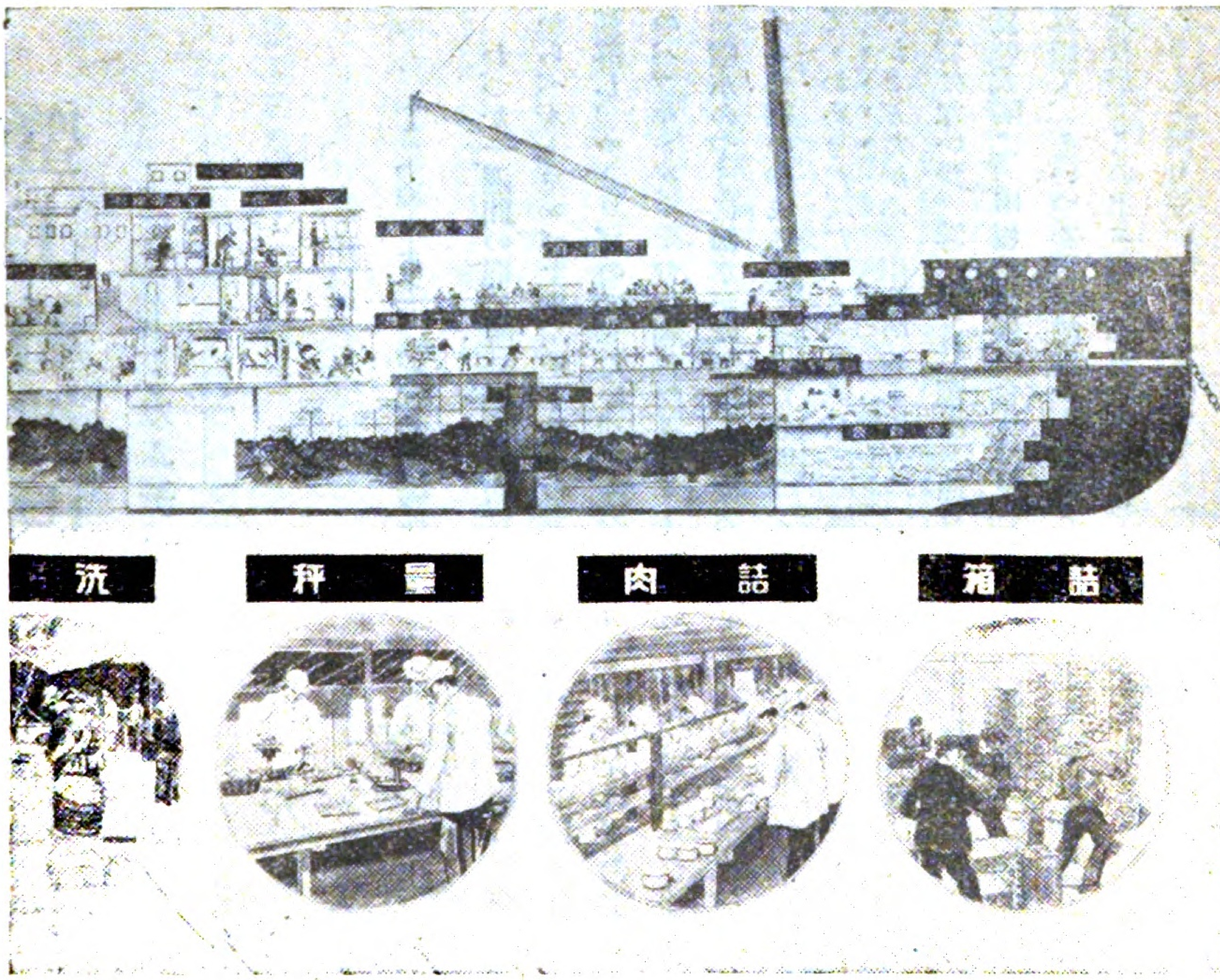
「タンクのふちへ、なにか板でもぶつといゝんだがなア」

「さうだ、これでは全く足場がないんだからなあ、危くてどうもなんねエだ。どうだ今晩仕事終へたら、大工さ相談して、なんか目論んでこさやねえか」

「監督野郎にはいくら言つたつて駄目だぞ、それよか俺達で勝手にやるさア」

「ゆんべも俺あ片脚五寸程突つ込んでよ、すんでのとこでやられる所さあ。長靴でもはいてゐなかつたらそれッ切りだ」

このタンクは蟹をゆでるやつで、月に一度か二度大嵐の後で、蟹のとれなかつた時等に



蟹工船の断面と

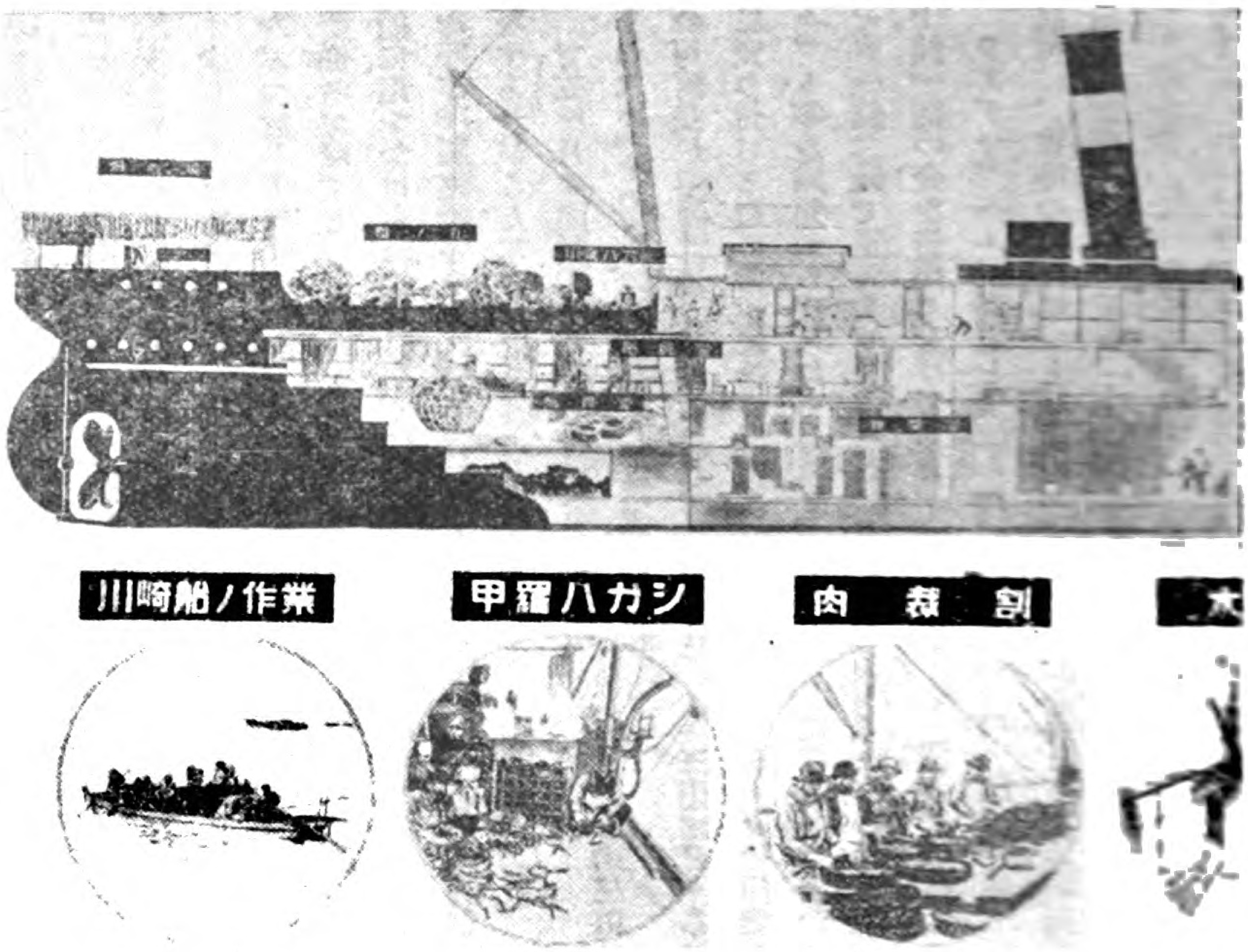
は雑夫や漁夫達に海水の風呂場にもなるんだ。

五寸程の厚みのある板をメンマストのつけ根に据ゑ付けて、機關室のボイラアから五吋の鐵管を通じて造つた生蟹を煮沸する釜だ。この釜をカムチヤッカの雑夫達は「地獄の釜」と呼んでゐる。

バルヴをひねるとゴロゴロと音響をたてゝこの老朽船中が胴ぶるひをはじめ出す。すると十分も經たない中にもう眞ッ白い泡立ちが始まる。そいつへウインチで釣り上げた生蟹を一杯つめた鐵籠をそれにつけると、つかる片ッ端から蟹は酔つぱらつた重役達のやうな恰好をして眞ッ赤にゆだつて引上げられる。そいつを、も一度ウインチで海の冷たい水の中で冷かして甲板へ吐き出すのだ。

「モモ」「ラッキヨ」「ナンバン」「バラ」といつた具合に船の上では肉の呼びかたも勞働者らしい呼方をするが、これがレッテルを貼られて市場に踊り出すとフワンシイ、チヨイス、フエアー、フレーク等に等級別されて、フワンシイとチヨイスは主に英米のブルヂヨア達が食ひ、フエアーとフレークは三四級品として内地で消費される。「バラ」は澁谷バアや本郷バアでも、クレエプ、ユキユウルなどの名前になつて十錢十五錢でプロの腸の中へも入る。

日露兩國のブルヂヨア共の蓄積慾の××になつて、十幾萬の俺達の親達が滿洲や朝鮮で鐵砲玉の代りにされると、ポオツマスでは肺病でやせこけた小村壽太郎とウイッテやローゼンがポチヨムキンの反亂を氣にしながら漁業條約に調印して以來、大正十二年の秋オゼ



生産過程圖

ルナヤの海底に死んだ三百八十の××達も入れてどれだけの俺達の仲間がカマスや米俵、それからビールや石油の空函に詰込まれてカムチヤツカの沖に沈められてゐるか。ピストルの××、棍棒の×××でなかつたら過勞と脚氣だ。

本年八月五日現在のカムチヤツカ東海岸――エトロフ丸もこの東岸にゐる――農林省監視船金鵄丸からの報告によるとエトロフ丸を除く、長門丸、昌平丸、八郎丸、神武丸の四隻だけで合せて九十六人の病氣で、内死亡者十三人とある。船一隻につき平均二一・二五人の病者と、三・二五人の死亡率だ。これ以外に重病で送還された者が三十六人ある。

これが八月五日現在だから九月十月の切上げ時までにはウンとこの率はのぼるのだ。本年の蟹工船出漁數は、

カムチヤツカ西海岸

日本工船八隻、昭和工船五隻

カムチヤツカ東海岸

林兼商店一、富山工船一（エトロフ丸）

昭和工船一、日本工船一、八木本店二

の十九隻に、それぞれ二三百人から四五百人の雜夫、漁夫達が乘り込んで二十時間の搾血の勞働に服してゐる。

3　驅逐艦と蟹工船

炭坑や鐵道、トンネルの土方、それから農場勞働の俺達を骨のずゐまでしやぶりつくし吸ひつくして街頭にほうり出すブルヂヨア社會のしかけとわなは、海も陸も變りつこはない。カムチヤツカでは晝が長いのだ。北極に近づくと白夜と云ふやつがあつて電氣の光や

太陽の光がなくても立派に仕事が出來るやうに二十時間は明るいんだ。だから日本漁業ブルヂョア共は昭和元年にとり交した日露漁業協約の「八時間勞働タルコト」を平氣で條約違反を敢行してゐるんだ。

少しでも反抗すると彼等はピストルと小銃をぶつ放して勞働者をおどしつける。すこし勞働者が騷ぐと、密漁をやつてロシアの監視船に追つかけられた時のやうに無線で×××を呼ぶ。驅逐艦等の××が平時にどんな××をするかがこんなときに一番よく判る。

で五ケ月の間蟹工船の勞働者は全く土を踏まれない。その上に野菜と糖分が缺乏する。船の司厨長が（實際は會社が）こんな時に勞働者に賣り付けるために不純物の澤山入つたビスケット等を函館から仕入れてゐてビスケット一ツ一錢二錢で雜夫達の財布の底に殘つた五十錢一圓の金を皆搾り上げてしまふ。

ラアデマッヘルが高石と競泳した。彼等の血行は、彼等の脈搏は、と明るいスポーツの科學的な研究はやつても、土を踏まずに、腐つた水を飲んで、野菜を食はずに、糖分をとらずに、カムチヤツカの沖で二十時間の勞働をやつてたら勞働者達はどれ位疲勞するか、科學的に研究する科學者はゐない。科學者がゐないばかりではない。俺の乘つた蟹工船には醫者も藥劑師も全然乘り込んでゐない。脚氣で重くなると監督が來て注射をやる。するとキットもがき苦しんで患者は×ぬ。尤とも彼等漁業ブルヂョアは日本國とソヴエット社會主義共和國聯邦との間に取交した漁業協約中の被使用者待遇條件は殆んど全部踏みつぶしてゐるのだから、醫師法違反位は朝飯前の仕事だ。

4　三田は死んだ

「三田はどうした」

タンクの向側の男は蟹の油で辷り落ちさうになるので上から垂れ下つたロオプに摑まつて叫んだ。

蟹を一つぱいつかみ上げたロオプの綱がこの「地獄の釜」にすつかりつかり込んでしまふと、向ふ側に居る筈の三田は居なくて、遙かのカムチヤツカ連峰が雪を頂いてこの白夜の空にくつきり浮び上つた。やられたなッ！

瞬間彼はさう思つた。

「ゐねえな」

タンクの側で蟹をかき集めてゐるのがさう言つて腰を伸ばした。

一沫の不安と恐怖が、ピユウッと吹きちぎる風と一緒に沖の方へ飛んだ。

「どうしたんだ、なにをしとるんだ」

彼等のキヨトンとしたなりを見て監督がさういつた。彼にも何だかしらないが、疲れた頭へピンと來た。

「ゴーヘッ」

つかんだロオプを放して飛び退くと、眞ッ赤な蟹がタンクの中から上つた。籠がタンクの湯の中からスッカリ離れてしまふと、なんだか黒いぼろ切れのやうな塊が脂の間に浮び上つた。

そつと一人が鐵のボオトの先を曲げた長い火箸で觸つて見た、と重たい感じが疲れた彼の頭と手へ這ひ上つた。

「三田だッ。三田がやられた」

「何ッー」

「これ見ろ」

ゆるくうねつて來る浪に、ゆでられた三田の××は顏をうつぶせにして地獄の釜の中で

壊れてゐる。

「手鍵持つて來いッ」

だれかが船の方へ飛んで行つた。外の四人がこの手鍵をぶく〳〵の栗ッ嚢へ穴をあけて引つ張つた。

穴の穿いた三田の服は背中のあたりで、ごぼごぼ音がして眞空が解けた。三田の背中は皺がよつてたるみゆるんだ。

「上げろッ」

ウインチでガラガラ上へ上つて來た。



工船の戸板に積み上げた蟹

一人は慌てて忘れてゐたバルヴを閉すと釜の音が止んだ。今頃バルヴを止めたつて、三田の、この膨れ上つて、むけ返つた顔も、ベラ〳〵した頭の皮もどうにもなるものではなかつた。

「それを下へ運べ」

監督が、さう言ふと彼等は三田の××をテントの破れたのにのせて、四人がタラップを下りて雑夫部屋へ運んだ。

「おい、だれかほう丁もつて來い！　このゴム靴切り裂いて脚さ出してやろ」

ゴム靴をはいたままに×××三田の脚は、中で膨れ上つて引つ張つても靴はぬげなかつた。鮭の腹を開く時のやうに上からほう丁で切り開いた。白むくれに××られた三田の脚は所々の肉がゴム靴にくつついてはげた。

「ううッ」

みんなは顔をそむけた。

「一體どうしたんだ。はたつた今こゝを降りて來る時、三田の奴ロオプに摑つて安樂さうたつてゐたに」

「監督の野郎か」

だれかがさう唸つた。

「いんにや、俺あ三田に向ひ合つて仕事してゐたんだ、すると籠が釜の中へかくれて仕舞ふと、居る筈の三田が居ねえんぢやねえか。」

「あいつ多分、軍手の破れが籠の針金にでも突つ刺さつてそいつをはづすまに辷り込んだんだよ」

「後ろにだれも居なかつたのかい」

「うん、今晩は蟹の殘りも尠いから四人でやれつて、雑夫長の野郎が言ひやがつたもんで四人切りでやつたんだ」

船が大きくゆれたので三田の屍體がころんだ。みな動いたのかと思つてゾッとした。

「板をぶちさえすれやなんともないものを、とどこんなことになつてしまつた」

「糞ッ、監督の野郎ッ」

みんなが叫んだ。

「おとなしい奴だつたになア」

炊事の親爺が、さう言つて蜜柑箱をふせた上へ、茶椀に飯を盛り上げてそいつに箸を立ててやつた。
「おいッ、出ないかッ上へ、蟹が釜の中でとろけて仕舞ふぢやねえか」
監督がタラップの上から怒鳴つた。
ガラガラ…ウゥンチは未だ鳴つてゐる。
何時だ、今日も午後十一時を過ぎてゐる。

5　レッコーせい！

何時だ？　午前三時だ。
ぼろぼろのひき割り飯を鮭のサンペン汁で流し込んで上へ出た。
夜中から吹き出した風はこの〇〇丸を又そろそろなぶり出してゐた。
深く下したチエンはひつちぎれ相に張り切つてゐた。積み上つた蟹の掩護物はみんな崩れて甲板一杯に擴つてゐた。ぴゆッと横なぐりに吹きちぎる風はアンテナと煙筒にぶつつかつて咆えた。マストはたわんだ。眞ッ黑い雲の塊がマストをすれすれに陸の方へ飛んで行つた。
　バサアッ！　船全體が横ざまに大きな浪にぶつかつた。
「今日は飯が炊けないからこれだ」
　炊事場から殘飯をボイラァの上で乾した奴をいつて雑夫達に配つた。飯は食へなくつても雑夫達はだれも不平は言はなかつた。暴風雨の時以外五ケ月の間彼等に二十時間の勞働から放たれる時はないんだから。
　夜が明けると、けろつと忘れた如くに北極の太陽が甲板に流れた。昨夜右舷に見えた山は左舷に見える。船は潮の流れに一廻轉したのだ。
　ポンポン…發動機船が横腹から紫色の煙を吐いて、船員と漁夫達が川崎船に乗つた。
「そう叩くんぢやねえ、かう輕くポンと自分の手の甲をぶつても痛くない位に、この木槌を下ろすんだ、さあやつて見な」
　雑夫長が少年雑夫の手をとつて爪肉「モモ」の出し方を敎へてゐる。
「かうだんべ」
　轉び出た肉はつぶれて板の上に落ちた。
「馬鹿ッ！　一つ潰すとでかい損だゾ」
　木槌で少年の頭をなぐり付けた。
　下へ向いてすばしつこい手付で「ラッキョなバラの中から撰り出してゐるのを連れて來た。
「かうだぞ」
　桃色をした美しい肉が殼の親づめから轉げ出た。そいつを口いつぱい頰ばつて木槌を少年に渡した。
「こうかあ」
　肉は型を崩さないままで板の上に轉んだ。
「めんこい奴」
　雑夫長は立つて向側に行つた。
「ええいッ、面倒臭え。レッコーせえ」
　バラ肉は櫻の花びらのやうに舷側から海上に散らばつた。濱猫の群が一きは大きく啼いて群がつて來た。どこに居たのか、たつた今舳へ行つた筈の監督が飛んで來た。
「こらッ」
　首筋をぐつと摑んで、腰にぶら下げた鉄の尻で頭をなぐりつけた。
「なんだッ！　この野郎抵抗しやがる。雑夫長來い、レッコーだ」
　一人で裁割臺の脚にしがみついた雑夫の手をもぎとると擔ぎ上げてデッキの上からはう

り投げた。

「アッ」

雜夫達は叫び合つた。

投げられた奴はサイドにつるしたロープを落ちる途中で摑まへて、それにしがみついた。

「棒持つて來うぃッ」

雜夫長がマストにもたせてあつた板切れを持つて來た。板切れが横なぐりに風を切るとロープに摑まつた彼の手へそいつが飛んだ。

「痛ッ」

血が船のサイドにとび散つた。だらりと下げた片手は小指の間が一寸程裂けて白い骨が牙のやうにむき出した。

「まだかッ、強情野郎ッ」

も一度板切れがななめに走ると彼の身體は海の上に落ちた。

「もういいだらう、上げろッ!」

水夫が艫からロープを傳つて後の傳馬船から引上げて來た。二人の船員が蟹網の上に寢かせて水を吐かした。

ボーン! ボーン! 船長室の上から續けざまに小銃が二發なつた。

「ハッハッハッ」

銃を持つた監督がタラップの上で笑つた。彼はさつき雜夫が水の中へ投げ込むとそのまま自分の部屋へ驅け込んで銃をさげて來ると雜夫達の樣子をヂット雜夫長と二人で見てゐたのだ。そうして沖に浮んだ濱猫の群めがけてぶつ放したのだ。



川崎船に積んだ蟹

「あれなんにするんだ」

一人がいつた。

「馬鹿、ロスケの監視船が來たらあれでやるんだ」

「へえロシアの監視船がやつて來るかい」

「來るとも、てめえ何と思つてるんだい。ここは公漁ぢやねえぞ、公漁は三浬までだ。ここは三浬どころか、一浬だつてありやしねえわい。」

「なら條約違反かい」

「そうさア、後ろは×××の××がゐるぢやねえか」

「だから圖太く構へるんだなア」

「ピストルや銃はロスケぶつためぢやねえ俺達――自分の胸を指して――をやるためさ」

そう言つてほう丁の柄で裁割臺をコツンと叩いた。

6　北洋漁業が企業化するまで

年産額六千萬圓、近き將來には一億に達する豫定だと日本漁業資本家は豪語してゐる。日露兩國の幾萬のプロレタリアートが滿洲の野に××した資本主義戰爭によつて締結さ

れた、明治四十年のポーツマス漁業條約以前は、日本人はロシヤ人名義でカムチヤツカ一帶の河川又は沿岸漁業によつて極めて少規模のもとに行はれてゐたものである。

カムチヤツカに於ける日本人漁業勞働者の××は日本漁業家が露領オホツク、ベーリング一帶の世界三大漁業中最大最優秀のものとされ、そこに棲息する魚族二十六科百五十八種の多種多様しかも多量に注目しだした明治三十三年以來行はれて來たものだ。

だがこれが近代の大資本による企業的型態によつて科學的に製産されはじめたのは大年九年に富山縣水產講習所練習船吳羽丸がカムチヤツカ西海岸に於てかなり大規模の船內罐詰（海水洗滌）製造に、好成績を擧げ得て、それが漁業資本家を刺戟する所となり、大正十年には和島貞二氏が百五十トンの帆船工船で二百八十函を得、大正十一年には三隻の汽船に工場設備をして一擧に七千二百函を得たのがそもそも企業化のはじまりである。

それが本年はカムチヤツカ西海岸に日本工船の八隻、昭和工船の五隻、同東海岸には日本工船、昭和工船、林兼商店、富山工船（エトロフ丸）の各一隻に八木本店の二隻都合十九隻の工船に漁業勞働者約八千人を乘せて出動し四十萬函を生產する豫定である。

橫濱からの輸出は生絲に次ぐ資本家の所謂國家的大產業なのである。

7　蟹工船の構成

蟹工船はたいてい三十年以上を使ひ古したボロボロの老朽船である。

二千四五百トンから七千トン位までの汽船內に寫眞にある如く、工船としての設備をなし、それに事業部長、機械監督、漁撈監督、工場長が幹部として、大船頭、漁撈長、職長、漁撈長心得がその下に準幹部として、更に船頭小頭のほかに漁夫、雜夫が二百四五十名、職工船員約百二三十名合計三百七八十名の人員が乘込んでゐる。

普通工船には獨行船（發動機を備へたもの）一隻と川崎船が八隻位は必ず備へられて發動機船には大船頭が乘込み、投網位置の指揮の其の他の漁夫の行動を指揮監督し、川崎船には船頭以下漁夫が乘込み、投網、揚網、漁獲物の運搬等に從ふ。

漁具は刺網と言つて、日本ソヴエツト漁業協約によつて、繁殖の阻止するを防ぐため網目一尺五寸以下のものは禁止されてゐるのだが八時間勞働たることと言ふ日本人被傭用の勞働時間を平氣で踏みにぢつて二十時間の勞働を强制してゐる如く實行してゐない。

これを十九隻の工船がカムチヤツカ沿岸三浬沖（實際は一浬よりもつと近くまで沿岸近く入り込む時が多い、だからブルヂョア新聞の傳へるやうなゲー・ペー・ウーの不法發砲等言ふことはそのままに信じてゐては大變だ）の兩海岸を全長九千二百浬の廣大な水域にわたつて五十尋位の深さの場所にまで約一萬平方浬に近い海底を縱橫無盡にこの網を張り廻らし、四月下旬から十月上旬までの五ケ月間卵の孵化のため沖合から沿岸に向つて大移動する蟹群はその脚をこの網に搦められて捕獲するのだ。この蟹は餌の多く棲息する所にゐるからカムチヤツカでは餌場蟹と呼んでゐる。

8　カムチヤツカの溫度

「カムチヤツカの氣象が知り度いんですが」さう言つて中央氣象臺へ行つた。

「カムチヤツカ？　そんな所の氣象統計はこつちにはありません」

「何故ですか」

「何故つて、日本との關係があまりありませ

んから」

年産額六千萬圓、毎年五萬に近い日本の漁業勞働者が二十時間の搾血制度下の勞働に従事する北洋の氣象が、中央氣象臺では「日本との交渉があまりない」のである。

東京とカムチャツカの温度比較表

カムチャツカ(ペトロパブロフスク) 月	度	日本(東京) 月	度
1	−9.9	1	+3.0
2	−9.0	2	〃 3.8
3	−5.0	3	〃 6.8
4	−0.8	4	〃 12.6
5	+2.5	5	〃 12.5
6	〃 6.6	6	〃 20.4
7	〃 10.9	7	〃 24.1
8	〃 12.0	8	〃 25.5
9	〃 9.6	9	〃 22.0
10	〃 3.9	10	〃 16.0
11	−2.07	11	〃 10.5
12	−6.6	12	〃 5.2
コノ平均温度年	+1.0	コノ平均温度年	+13.9

右のペトロパブロフスクは北緯五二、五三度東經一五八、四七度のカムチャツカ東海岸にあるカムチャツカ唯一の都會だ。東京の温度は丸ビル附近の温度である。

この表で見るとカムチャツカのペトロパヴロフスクの温度は、丸ビルの眞上を垂直に約三千メートルを登つた位の温度になる。日本アルプスならちよつと乗鞍岳か、北穂高岳の頂上と言つた所だ。

だがそれは温度の上からのみ見た現象であつて、それ以上の諸現象の比較を科學的になし得ないのは手許に資料がないために遺憾である、が右の表でも大體の想像がつく通り、カムチャツカは寒流が流れてゐること、それから太陽熱等の關係から氣候の激變が絶えずあつてこれに悩まされることは内地人の到底想像の及ぶところではない。

出版部便り

『放浪時代の世界作家叢話全集』、別掲廣告の通りその第一巻『酒場の花嫁』を九月下旬發行する。

『文壇アンデパンダン』の採用篇が決定した。三篇合冊、装幀等は極く質素にし思ひ切り廉價にして江湖に提供したい、定價は一圓以内、大體十一月初旬發行のつもり。

『勞働大衆版第二篇』は武田麟太郎氏の『我等忍びに忍びたり』遂來たる書下し長篇だ。因みに『同第三篇』は徳永直氏の『失業都市東京』と決定した。共に左翼の孤壘を死守する逸材、發行を待たれよ。

『ゴーリキーの四十年』は愈々十月初旬發賣する。四六判八百頁定價二圓の豫定。

『眞理の春』と『猶太人ジュス』と『この太陽』は何といつても一九三〇年の出版界を壟斷する大物續きだつた。今も盛んに賣れつゝある。單に書籍としてのみでなく、劇に映畫にひつぱりだこの有様だ。

『西部戰線……普及版』此の書の評判は凡ゆる理否と論議を超越してゐる。僕等も、もう何にも言ふ事がない。最寄りの書店にお立ち寄りになつて賣行き工合をソッとたづねて下されば、一切が分明するだらう。

『現代人物評論』は明後二十一日の發賣だ。樞密院對政府の關係緊迫、日本政界の特殊事情は、いつどんな波瀾を惹起すかも知れない。政界に巣喰ふ大家巨頭をひつぱりだして縦横なメスを揮つた此の評論こそ、刻下の政治季節に當面する國民の唯一の羅針盤だ。

『婦人公論大衆化』は、實に鮮やかに成功した。去る十九日の同誌發行日には、社員揃つて東京全市に一大デモを敢行した。本社が雜誌に單行本に全面進出のチャンスが來たのだ。すべてコンデイションは申分がない。中央公論社ファンよ、喜んで呉れ。

東都六大學リーグ

大選手銘々傳

當代野球界の代表的十二傑

橋戸頑鐵

大選手とは

この稿を起すに當りて、先づ大選手の定義を下さればならぬ。何をか大選手と云ふ？。私は第一に體格の人並勝れたものを採る。何となれば拔群の巨人は見るからに氣持がよい。ユニフォームが引立つて見へる、一擧一動の輪廓が鮮明に且つ深い印象を刻みつける面も應揚に、悠々として逼らざる大國民の襟度が窺はれる點等が何となく我等の本能を滿足させ、不思議と魅力に富んだ興趣を滿喫させるのである。これを力士に就いて見る、やはり大きい相撲取は氣持がよい、雙國、朝潮、常陸岩、武藏山、天龍などが土俵に登ると、何とはなしに緊張たる氣分に打たれる、されど大の里、彼は相撲の神様とさへ云はれる人であるが、あの位小さくなると、技そのものを見るのであつて、其他力士が普通人と違ふ特長、即ち偉大なる肉塊から放射するアトラクションを缺く恨みが多い。だから横綱になるには、技倆、人格の外に體格と云ふ一資格を加へることになつてゐる。昔は更に嚴格なものので、名力士玉椿が嘗て「私は身體が小さいのでどうしても大關になる資格がなかつた、それを思ふとガツカリしました」とこぼしたこともある位であつた。力士は身體が大きいと從つて體重もあるので、長續きがする。其所に横綱又は大關の資格が、具備して行くわけだらうがさうとてまんざら外見を無視した譯ではあるまい思ふ、例へば大の里が横綱を張ることを豫想しても、其所に何等かの矛盾を感ぜずには居られない。

きび〱してゐること。これ第二に來る可き大選手の資格である。いくら身體が大きい許りであつてもぐずでは困る、力士仲間にもその例は尠なくないが、野球の選手にも天稟の巨軀を賦與されながら、大選手の仲間入りが出來ぬ人々も決して尠なくない。

第三にはカラーに富むこと、米國の野球界では「カラーに富む選手が」フアンに喜ばれる。これを監督で云へば、マグロー將軍の如き、これをプレーヤーで云ふならばカツブの如き、何れも代表的の人物であつて、まかり間違へば審判でも擲りつける位の意氣込みの人々にカラーフルの文字が冠せられる。日本の野球界ではこれ程の元氣者は容れられないが一度ボツクスに立つか、走者として壘に出るならば、必ず何事を仕出かして相手を脅かす人々、これ等の選手は、形而上から見てたしかに大選手と云ふことが出來る。

私はこれ等の標準にして、現在東都六大學リーグに活躍する大選手十二人を、それ〲異つた位置にし選出し、これを尠くとも今秋の十二傑と呼んだ。無論私の十二傑であつて、見方によつては、他にこの王座を占むべき人々も澤山あるかも知れない。


宮武


小川

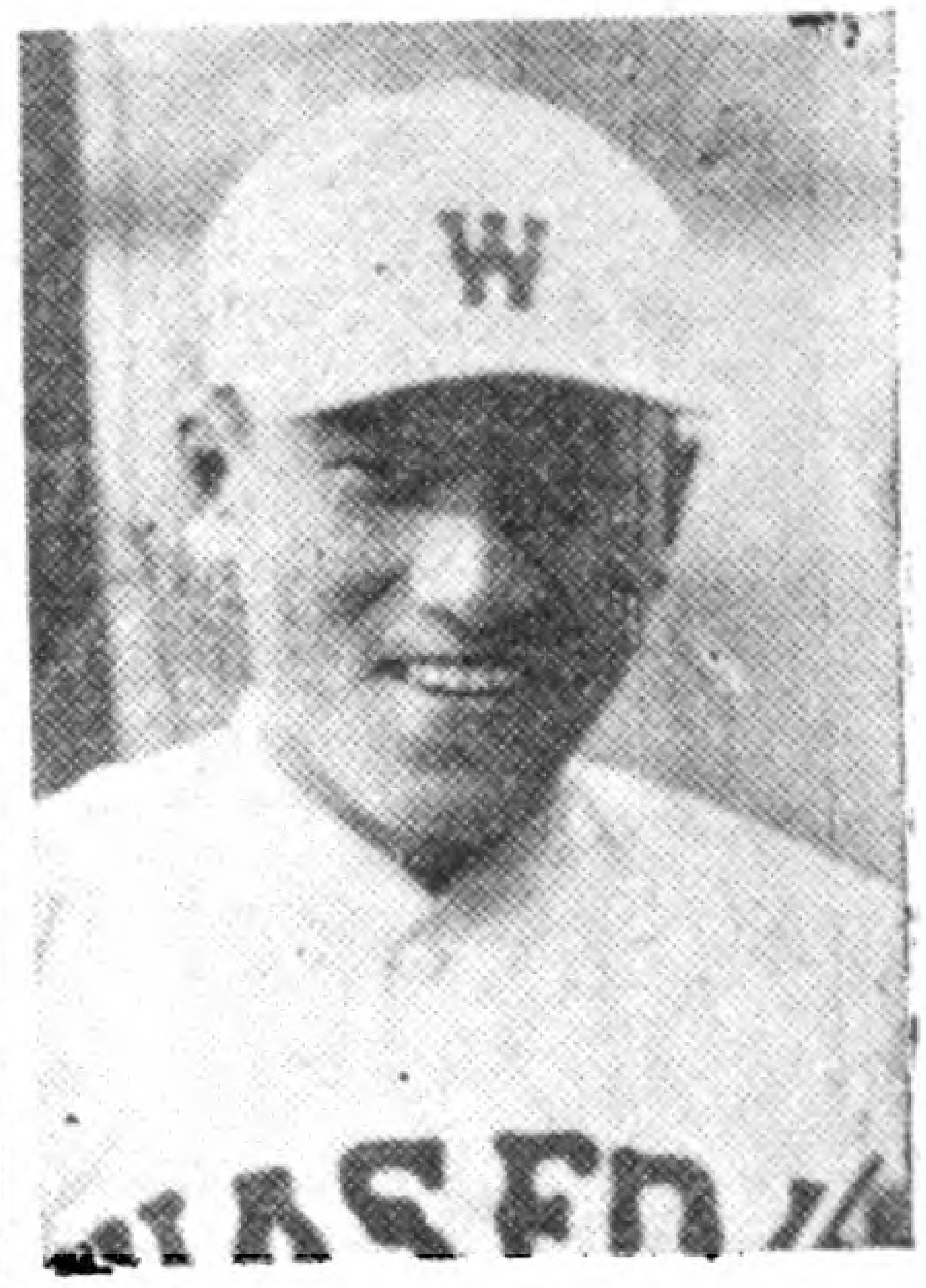

若林

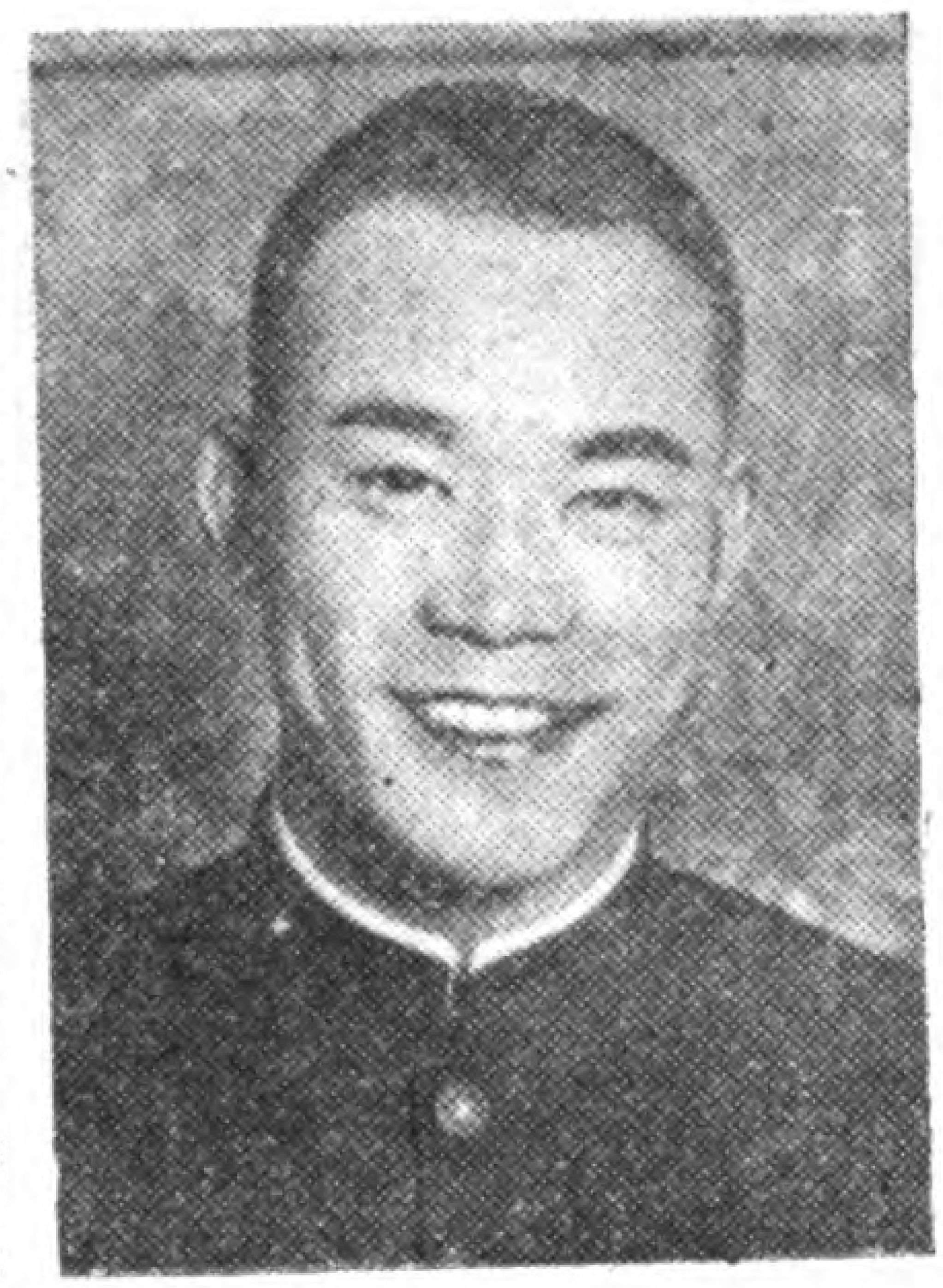
巨豪宮武投手

嘗て太刀山と云ふ力士があつた、六尺有餘の巨漢で、拔群の腕力を有し、大概の力士は彼の一突で腰を碎かれ、二突乃至三突で土俵を割つた。眞に天下無敵彼の如く多くの優勝額を國技館の屋根裏に掲げたものはない、惜しむらくは相撲社會に容れられず、廢業後別個の商賣に入り斯界から遠ざかつたが、但し一方から見ればその容れられざる點が彼の大をなした所以で、大錦と云ひ、彼と云ひ相撲も上手、世渡りにもまた如才が無かつたと云へる。

慶應の投手宮武三郎は確かに相撲界の太刀山である。名投手にして强打者、彼の價値は慶應チームの七八分を一人で背負つて立つと云ふも恐らく過言ではあるまい。彼が慶應に籍を置いたのは昭和二年の春であつて、そのシーズンの投球振りは大したものと思へなかつたが、打擊の猛烈さは、早くも群を壓して目立つてゐた。其後彼の投球振りを見るに、シーズンを迎へる每に、多少の進境を示し近來は球の緩急に非常な滋味を見せるやうになつた。而も彼のチエンヂ・オブ・ペースは他人のやうに大して目立つて見えず術語で云ふハーフ・スピードの變化であるから、これを見る人にも目立たず、殊に當面する打者も屢屢バツトのタイミングを失して凡打に終ることが多い。彼は高松時代大每の小野、湯淺二大投手の薫陶を受けたのであるが、共に圓熟期に入つた人々のことゝて、彼の授けられたる虎の卷は、小野君の肩口を衝くコントロールでもなければ、湯淺君の凄いアウドロでもなく、恐らく二者がその頃唯一の武器として使用しつゝあつた球速の變化ではなかつたらうか。但し投手としての宮武は未だ完成の域に達したものではない、先人小野君が有する香り高い藝術の領域には及ばざること遠い。彼が本領を發揮するのは、今後であつて、今迄はその過程に過ぎぬものである。

打者としての宮武は、正に戰友山下と共に天下を二分して、その一を占有するものであり、古今に獨步する强打者たることに於て何人も異議はないであらう。彼の打擊に就いて見るに、今日の大をなした所以は、柔道二段の腕力、球に向つて突進する勇氣なども理由の一部となるであらうが、最も彼の有する長所は、タイミングに勝れたことであつてバツトが球に觸れる刹那、全身の力が切先三寸に


伊達


山下


三原

籠つてゐることが凡人の企て及ばざる點なのである。だからカーンと云ふ快音が立つかと思へば、假令その球がゴロとなつて野手の眞正面をついてもこれを摑むには非常な努力を要する。明大の名手林遊撃手でさへも、大事の試合に彼の正面攻撃を二度までも止め兼れたこともあつた位である。どこから見ても日本人ばなれした打撃力の持主而も名投手たる點に於て彼は我が野球界の過去現在に超然として獨歩する者である。

讃岐の三人男

萬芽樓と云ふ人は、讃岐の三人男として三土忠造、津島壽而して宮武三郎を擧げてゐる。一つの球と一本のバツトで官界の大立物と肩を並べて盛名を競ふ、蓋し男子の本懐である。大名の裏必ず女性あり、蒲田の女優某との噂も一時は彼のホームランより有名であつた。是非もないことではあるが、女性に崇拜せらるゝは可、たゞその美に走り情に溺みつけられて「我は慶應の大黑柱」たることを忘れてはいけない。彼の名は三郎、高松商業の出身で今年二十三歳、高等部本科三年、身長五尺九寸、體量十九貫五百、最も好きなものは散歩、荒くれ男としては床しい趣味である。

早大の救世主小川投手

私學の双璧たる早慶が、それ〳〵極端に異つた色彩を有するが如く、宮武對小川の對照はまたいみじくも相反したものである。一はサウスポーにして一はノースポー、一は巍然として聳ゆる巨巖の如く一は古松の梢に息ふ仙鶴の如き趣きがある。向ふ所何物をも打碎いて進まんとするは宮武であり、鞠躬如として通路を求むるものは小川である。ホトトギスを殺す者は前者、泣かして見せんとする者は後者である。

小川が早稲田に入る前には、その進路に關していろ〳〵の噂を生んだ。慶應か三高か將又早大かと。人を迎える甚だ拙劣と云はんよりは、選手の爭奪には寧ろ無關心に近い早大は指を咬へて彼の行方に垂涎するのではないかと思はれたが、巨星は遂に早大の學園に落ちた、かくして早大の陣營は春風駘蕩一時に百花燎爛として咲き亂れる光景に浴したのであつた、昭和四年秋早大が三年振りで慶應に快勝し得たのは、これを極端に云へば一小川の隻腕に依ると云ふことも出來やう。若し早



水原



田部



楠見

大に小川なくば、彼等は果してこの復讐を遂げ得たであらうか、又宮武對小川の對峙と云ふ大きなセンセーションがなかつたならば、早慶戰の切符はもう少したやすくファンの手に入ることが出來たかも知れない。してこの救世主小川投手は、今年の春健康を害して立たず、今秋の出場も何かと危ぶまれてゐることは、單に早慶戰に於てのみならず、秋を彩るリーグ戰の爲めに惜しいことである、好漢の健在を祈るや切。

學生としての小川

どの選手もさうであらうが、野球選手は別けて揃つて練習することゝて動もすれば學業を犠牲に供さねばならぬ場合が多い。されど小川投手のみは此點に於て全く別人のやうに學業を勵んでゐる。今尚美談として殘ること は昨秋行はれたる早慶の日に早大合宿では、大概の選手は既に勢揃ひをして出發の命令を待つのみであるのに、獨り小川投手の姿が見へない。事情を知らぬ先輩はどうしたことかと思つて心配してゐると、やがて小川は大急ぎで學校から歸るや否、仕度にとりかかつて一同の仲間入りをした。

「早慶戰の日迄は怠けてもよいさ、うなしめた」横着な先輩の一人はつぶやいたとかゐるが、小川には小川の主張があり信念がある。どこまでも學生の本分を忘れないで行く、其處に彼の價値が充溢してゐるのである。

彼の名は正太郎で今年二十二歳、宮武から見ると一歳の弟、高等學院二年生、和歌山中學の出身で身長五尺八寸、體量十七貫、書物を讀むことが何より好物、合宿を訪れた人が純白のスウエツターを着け、長い足を組んで謙ましやかに新聞などを讀み耽る彼を見る時は、これが早大の屋臺骨を背負つて立つ巨人とは思はれぬ程優雅なポーズに驚かされるであらう。

快漢若林投手

法政の若林投手がプレートに立つと、何とはなしに引緊つた感に打たれる。舶來仕込みは、何處かに厭味があるものであるが、此人の投球振りはたしかに江戸前である、彼の口からは今にもベランメーが飛び出しさうだ。また技倆の上から云ふと、前記の宮武、小川二投手が持つてゐない或るものに惠まれてゐる人で内角を攻めるインシユート、大きく流


井川


桝


森

れ出るアウト、カーヴとドロップの美事さは、恐らく當代の一人者と云ふことが出來やう。去春行はれた極東大會の野球に於て、腰本監督を彼がピッチングスタッフの一人としたことは誠に賢明なやり口であつて、彼はまた精魂を傾倒してこの知遇に報ゐたのであつた。されど惜しむらくは、若し法政に相當なバックがあつたならば……と云ふ感を誰れも抱かせること程左樣に彼の努力は報ゐられてゐない。何となく氣が合はぬのであるか、これも考慮の中に入れるべき問題であるかも知れない。

彼がスタクトン・チームに加はつて來た當時の活動は素晴らしいもので、早大や大毎の打者は手も足も出なかつたことを讀者は記憶せられるであらう。後に法政入りの噂が高くなるや、一寸物議を醸して、彼は一ケ年本牧中學の制服を着けなければならなかつた、會話の先生は定めて手古摺つたことであらう。昭和四年の春、いよ／＼本物の法政選手として打つて出た時は、張目飛耳、可なりの緊張をフアンの間に漲らせ、「法政はダークホース」の聲も喧しかつた。されど彼は評判倒れして成績餘り芳ばしからず、宮武の第一シーズンを偲ばせたが、秋からは次第に擡頭し來りて今では堂々として第一流の伍列に入る力量を發揮するに及んだ。

彼の名は忠志、二十一歳で見たよりもズツと若い、豫科二年で出身は本牧中學、身長五尺八寸、二十貫五百目で宮武よりも重い。道樂は庭いぢり、おかげで法政の合宿は四季美しい花が絶えないさうだ。

伊達捕手

マグロー將軍の著はした「私の野球生活三十年」の中に次のやうなことが記されてある。

「シュミットと云ふ投手は打者の弱點を一々記憶するのが面倒なので、人から聞いたことを悉く小さい手帳に書き止めて置き、試合中でも判らぬ打者が出て來ると一々ポケットからそれを出して見るのが例であつた。或時の試合にスコーアは接近してゐる、おまけに敵は二走者を出して正しく危機である際、强打者アンソンと云ふ相手の主將がボックスに立つた。ミュミットはいきなり審判にタイムを要求し例の手帳を取り出してアンソンの名を探したがどうしても見當らない。フアンはこれを見て承知しない「オイ何をしてゐるのだ」

「こんな時にタイムはないぞ、早く投げろ」と四面楚歌の有様であつたが、定位置を整然として少しも動じない。また一しきり手帳を眺めた後、静かに捕手を呼んだ「判つたよ君、手帳にカーヴとも速球とも書いてないから、此度四球を出せばいゝのだよ」捕手は呆氣に取られて、命ぜられるが儘に四球で敬遠し、當のシュミットは「投手の祕訣はこゝにあり」と云つた風に至極涼しい顔をしてゐた。

これは例の大投手マシューソンが如何に記憶が確かであるかを説いた後、その反對の例としてミュミットを出したのであるが、これと殆んど同樣のことが先般の早市第一回戰に見られた。それは戰の後半市軍ではグレーと云ふピンチ打者を出した所、捕手の伊達はしきりにポケットを探つて紙切れをとり出し滿場哄笑する間に何事をか讀み終るや靜かにサインを出して打者を退けた。私は前記の事柄を思ひ出して、一人獨笑を禁ずることが出來なかつた。

この愛媛者伊達捕手は、大阪市岡中學の出身で、甲子園へは縁が遠かつた爲め、早くから東都の球界にはその名を知られてゐなかつたが、正[illegible]て、既に彼の[illegible]域に[illegible]た。果せるかな早大に入つてからはメキ／＼と[illegible]を擧げ、強肩と強打と相俟つて、今ではこの一流の名捕手となつたのである。

彼の名は正男、二十一歳で身長五尺七寸、體量十七貫の巨漢、活動寫眞は三度の御飯よりも好物。

和製ルース山下

頭から打者を喰つてかゝる若林投手さへも「あの人の打撃は實に恐ろしい、あの大きな體で太いバットを持ちながら、バッター・ボックスに入られると投げる方で參つてしまう」と降參した。山下選手の打力は、單に慶應の至寶たるのみならず、我國球界の矜誇である。誠に不世出の麒麟兒であつて、彼の前に彼なく彼の後にまた彼は無いかも知れない。大體中學で鳴らした強打者と雖、東都に來りて六大學の仲間入りをすると可なり氣後れがしてさううまく打てないものである。現に彼と並稱される宮武投手でさへも、初陣には一割七分と云ふ貧弱なる打率を擧げ、次いで二割八分二厘、[illegible]入ることが出來たのである。[illegible]の春も[illegible]三割八分を擧げ、[illegible]三割九分、三割三分三厘、四割一分二厘、四年春には四割三分八厘を得てリーグの最高率打者となり去年は珍らしくも二割五分一厘で不振と云ふ優秀なる記録を殘してゐる。

彼は慶應チームに對して優勝の因を貢献するのみならず、特種の人氣を呼ぶ早慶戰にあつてもヒーローの玉座を他に譲つたことはない、昭和三年秋の試合に於ける超人的の本壘打を初めとして、彼のバットにして早大の陣營は、如何に多く慘澹たる脅威を感じたことであるか、本場のベーブルースは不思議と世界選手權試合になると當らぬ日が續いたと云ふに、和製のルースは早慶戰となれば益々打力を發揮してゐる、この意味に於て「和製」の二字は速かに返還し却つて偉大なる「パンピノ」に「米國製山下」の五字を送るべきではあるまいか。

明大前主將林君は、彼を「魔物」と呼んでゐた、それ程恐ろしい彼である。

彼の名は實、神港商業の出身で二十三歳。

高等部本科二年、身長五尺七寸、體重十九貫、散歩が唯一の娯樂とある。

三拍子兼備の三原

よく打ち、よく投げ、よく走るの三拍子揃つた選手は甚だ稀れであるが、今秋早大の二壘を授けられた三原こそは、正しくこの三部合唱に及第したものである。去春の早大は、水原、伊丹、水上等の名打者を失ひて著しく寂寥を感じ、その大なる空虚を補ふべき材を得んとして苦しんだのであつたが、この盛夏、河口湖畔に於ける猛練習は、その收穫として三原、伊達、弘世、佐伯などの著しき打力躍進となり、默々たる市岡監督をして破顔一笑せしめたとある。果せるかな彼が對三田及び市俄古戰に示したる打力は大に張目すべきものがあり、守備の鮮やかさと相俟つて、正しく當代の先人山崎に優るとも劣らざる意氣を示すに至つた。高松中學時代の彼は、梶原、外山などの盛名にかくれて多く知られなかつたものであるが、今や彼の時代は來た。今秋の活躍こそは見ものであらう。

彼は名を修と呼び、二十一歳、高等學院二年、身長五尺六寸、體重十六貫、一見蒲柳の質に見へて强い所がある。讀書が好物で合宿では、小川の好伴侶となつてゐる。

水際立つた水原

アメリカに十數年も居て、米國の野球をスツカリ見極めた友人某が、日本のチームを評した中に「守備の上に於て氣のつくことは、一壘手と三壘手との拙いことだ」との一語があつた。成程さうかも知れない、米國大リーグの内野の素晴らしさは綱輞目を竊ふものがあつて、我が六大學リーグの比でないことは無論であるが、慶應の三壘手水原だけはたしかに例外ではあるまいか。あれ丈けの守備範圍、あれ丈けの强肩にして而も正確性を失はざる投球力の持主は、プロフエツショナルスを別として米國廣しと雖大學チームには一寸見當らないであらう好漢惜しむらくは近頃打擊にヒヾが入つたやうであるが、スランプとしては餘りに長い。思ふに彼はこのスランプから脱せんとして焦慮する嫌はなきか時として悪球に對してバツトを振ることの多きは確かにこの傾向を示すものである。早大の前主將伊丹君は、彼を「明るい選手」と稱讃してゐるが、筆者も大賛成である。勝敗と云ふものに拘着せず、運命に任せて思ふ存分己れの所信に向つて驀進する氣合が十分に見へる人である。

彼の名は茂、二十二歳、豫科三年高松商業の出身で、身長五尺五寸、體重十五貫活動と聞いては目のない方で、パラマウントの大なる後援者である。

八宗兼學の田部

遊擊は本職、時には投手もやる、いや近頃は投手の方が本職になりつゝある明大の田部選手は、近頃の球界に於て可なり大きな人氣を集める一人である。佐々木ふさ子女史がサインを求めたと云ふことは本當か否か疑問であるが、兎に角ふさ子女史が好きさうなカラーのある選手たることは何人も異議を挾まぬであらう。同女史は嘗て潟沼君が大好きであつた。この筆法で行けば田部遊擊手が嫌ひの筈はない。筆者も有體に云へば初め餘り感じの好い人とは思はなかつたのであるが、段々と拔目ないプレー振りを見るにつけてこれを賞讃せざるを得なくなつた。私の抱いた偏見は、彼の有する技倆によつて悉く破壞に粉碎されたのである。よく芝居の興行や講演などで

見ることであるが、[illegible]くとも、それらしさは立派であるといつしか、釣込まれて[illegible]のやうな恰れ方をして了ふのと同筆法である。

田部選手の走壘は今の所天下一品、何人の追從をも許さない。帝大などはぼんやりしてゐて時々ひどい目に逢ふがそれが、ベースボールなのであつて、競技中ぼんやりすることは斷然許されない。田部選手は一々それを克明にとがめて、そして野球はもつと敏捷に拔目なくやるものだと云ふことを敎示して吳れる點に於て筆者はその都度難有いことだと思つてゐる。投手としての田部に就いて私は世間で思ふ程の尊敬は拂ひ度くないが、遊擊としての彼、走者としての彼には絕對的の讚辭を捧げる一人である。打者としての彼はまだ研究の餘地を有するもの丶如く見へたが、極東大會の試合には、立派な打力を示して果して凡庸の士でないことを示した、彼の苗字はタベでなくてタナベが本當である。私時代の早大選手にも田部信秀と云ふ遊擊があつて、やはりタナベと呼んでゐた。

彼は名を武雄と呼び、年齡二十四歲、廣陵中學の出身で專門部二年、身長五尺三寸五分[illegible]つたその方面に入つてゐたら、今頃はリンドバーグやブロムリーの向ふを張つてゐたかも知れない。

理想の第一打者楠見

慶應の外野手楠見選手の名は、一時ドツシリした戰友梶上外野手の活躍に壓せられて、兎角スコーア、ブツクから遠かつてゐたが、昭和三年慶應が米國遠征の際梶上選手が手痛い死球を喫したのが因をなして自然常備軍の一員となり、それがキツカケとなつて、今は城南の野球王國、名譽ある慶應野球團の第一打者たる榮位をシツカリと攫むに至つたのである。選手の數が多くなるに連れてベンチの惱みは從つて增加し且つ深刻になつて行、日にすることの出來ない猜疑、心の中に燃ゆる鎬ぜり合の競爭、時には監督の頭腦を疑ひ、時には世評の自己に非なるを憤りなどする心理のもつれは、それ程苦しいものであらうか、楠見選手が今日の位置を不動のものとするに就いて拂つた努力忍苦の影には、必ずや近親[illegible]然として[illegible]ボックスに立つ姿を見る度每に「苦勞した人」と云ふ感じを深くする者は決して筆者のみではあるまい。球の選び様がうまいこと、足の早いこと、機を見るに敏なること、外野から本壘への投球に長じてゐること、これ等の要素を一束すれば、彼は正しく當代得易からざる外野手であると共に、同樣の第一打者たることが首肯される。

彼の名は幸信、二十三歲、大學部二年岡山一中の出身で、身長五尺四寸、體重十四貫、活動が大好物。

鬪志滿幅の井川

慶應強打の双絕山下、宮武の二大スラツガーに井川外野手を入れて巨砲のトリオを編成することは誰しも贊成する所であらう。この三羽烏が相呼應して活躍する時慶應は勝ち、その一を缺いてさへも全體の調和に甚だしく害はれる。慶應の現在は、この三人が攻擊の中樞をなし得點の因をなし、更に極言すれば勝利の鍵を握つてゐるのである。

井川選手は嘗て投手の生活をもした人で、強打の盛名は中學時代から謳はれてゐた。「恐るべき打者井川來る」の聲は、恐らく山下選手參加の脅威と同樣の響きを他の五大學に與へたことであらう。闘志滿幅ピンチに强いことは彼の價値を幾パーセントか增すのである。

彼の名を喜代一と呼び二十二歳、豫科三年、身長五尺七寸、體量十八貫、趣味は活動

「明大の達磨」桝

達磨さん面影九年花衣、十二傑の一人明大の桝外野手は正に明大の達磨さんである。彼は合宿にあつてひまさへあれば足を組み、兩手を膝下に置いて靜座に餘念がない。戰友は麻雀を遊び、活動に行き、玉突に夢中だと云ふに彼のみは深潭の如き心境を靜座に樂しんでゐる。正に明大の一異彩、溫厚玉の如き素質もまたこの副産物でなくてはならぬ。されど合宿の達磨和尙が一度グラウンドに立つと忽焉として、羅刹となり惡鬼と早代りする。御覽なさい、春の極東大會に於て、此人の猛打はどれ程外來チームの心膽を寒からしめたでしようか、打擊は明大の中堅に据えられ其春は三割六分二厘で第二位守備範圍も頗る廣く、先づ申分のない立派な外野手である。

彼の名は富一、二十三歳、同志社中學部の出身で大學部二年、身長五尺四寸、體量十四貫で見たよりも輕い、趣味は靜座。

ピンチヒツター森

以上一當代一流の選手を網羅し來つたが、若し戰利あらずしてピンチヒツターを出さればならぬ場合には是非早大の主將森選手を推擧し度い。彼はどちらかと云へばレギュラーの人でなくしてピンチの選手である。彼の一擊によりて戰機は何回となく逆轉された。早稻田贔負は此人をピンチの神と云つてゐる。

今秋彼は一塁となりて西村をベンチに座らせ、打擊は依然として三番の重鎭を承はるやうだ。小川、山田の出場が危まれ、多勢、松木清水、麂、福田あたりから投手を拔擢することになると、主將としての心勞も一方ではあるまい。幸ひ三原、伊達、弘世、佐伯などの打力向上が、傳へられ、また實際今秋の前哨戰がこれ等若人の進境を裏書してゐることは、彼のニコ／＼顏を一層圓滿なものにする因となつたであらう。

彼の名は茂雄、二十四歳田部選手と共に十二傑中の最年長者である、松山商業の出身で大學部三年、身長五尺六寸、體量二十一貫とは少し驚かされる、趣向はハーモニカで、長唄も少といけるとやらこれも意外。

試みに以上の十二傑で打順を造つて見れば。

(中)楠見(慶)
(遊)田部(明)
(右)井川(慶)
(一)山下(慶)
(二)三原(早)
(左)桝(明)
(捕)伊達(早)
(三)水原(慶)
(投)宮武(慶)
(補)小川(早)
(同)若林(法)
(同)森(早)

大衆科學の頁

トーキーの原理

成生利男

今世界の映畫界を風靡せんとして居るトーキーも短日月に完成されたものではなく、是等の歴史を辿れば、半世紀前に遡る。

一八六二年オースタリーのツエルマックが始めて音響を寫眞的に撮影する方法を考案して以來、歐米各國の學者達は音響撮影に苦心した。この間にあつて、エヂソンは一八八六年蓄音器に依つて音響を記錄再生する事に成功したが、それ以前、一八九三年にはキネトスコープを作つて、當時の蓄音器を兼用し所謂發聲映畫なるものを作つた。此は所謂キネトホンで、覗き眼鏡で寫眞を見、ゴムチユーブを耳にあてて音を聞いたものである。スクリーンに映寫の出來るやうになつたのは其後の事で、蓄音器も改良され同期機も考案されて、キネトホーンが完成されたのである。此キネトホンも大衆對手としては音量不足の恨みがあつた。佛國のゴーモンは壓搾空氣によつて音聲の擴大に好結果を得クロノホンと謂ふ發聲映畫を作つたけれども、世界的流行は來たさなかつた。其後米人ドフオレ博士が三極眞空管を發明し續いてオーヂヨン增幅器（弱い電流を強い電流になほす）が發明されて音聲を自由に增幅し得るに至り、一方光電池も異常の發達をなしトーキーも實用期に入つたのである。現今使用されて居るトーキーには蓄音器式とフヰルム式の二種がある。

蓄音器式（バイタホン）

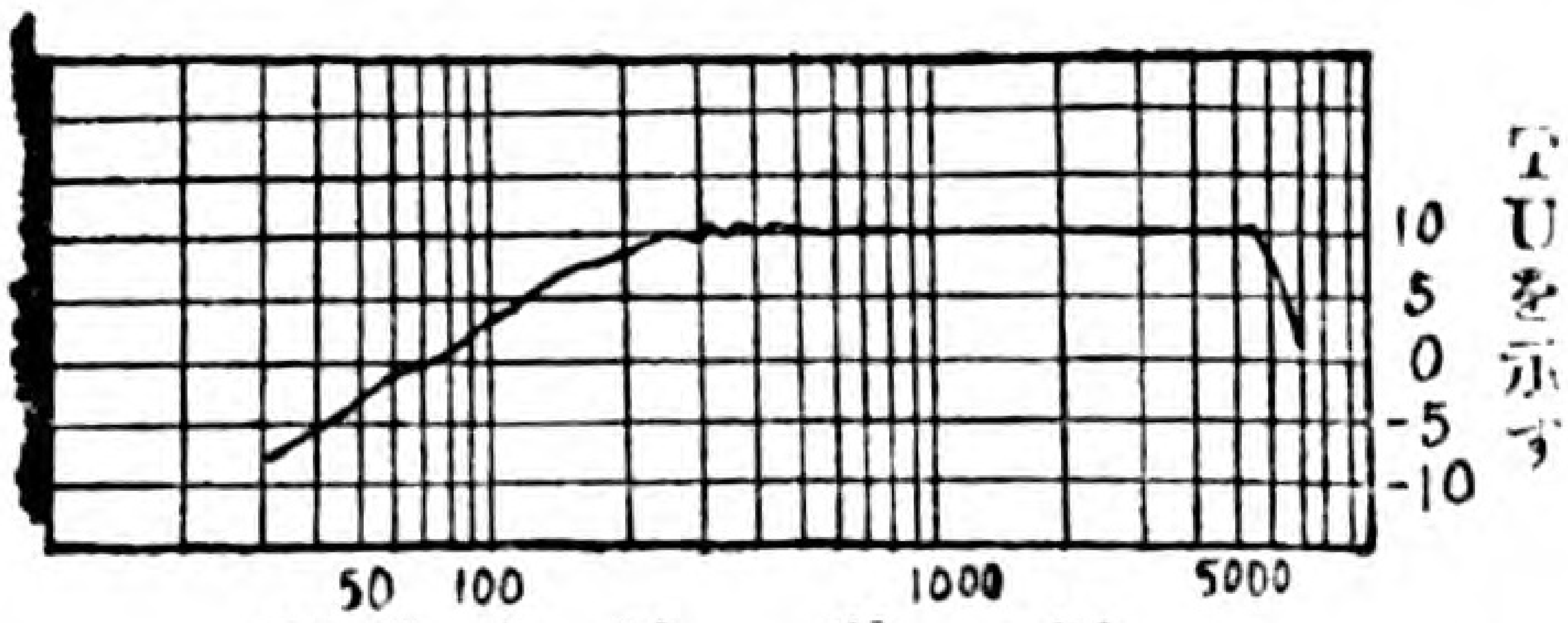
蓄音器式トーキーは蓄音器より生ずる音聲とスクリーンの畫面とを同期機（回轉數乃至スピードの）に依り、シンクロナイズして行ふものであつて、レコード面よりの振動はピツクアップにより電氣的に變ぜられ、此を增幅器にて增幅しスピーカーより音聲を發するものである。トーキー用レコードも普通のレコードと同樣の方法にて作られる。

吹込には普通靜電型マイクロホンが用ひられ、此を增幅してバランスドアーマチユアスピーカー（平衡型になつたレシーバー樣のもの）と同じ原理に基きワツクスの上をサフアイヤーの針が左右に振動して、音聲を記錄する。其後のレコードが作るまでのプロセスは普通のものと大差はない。

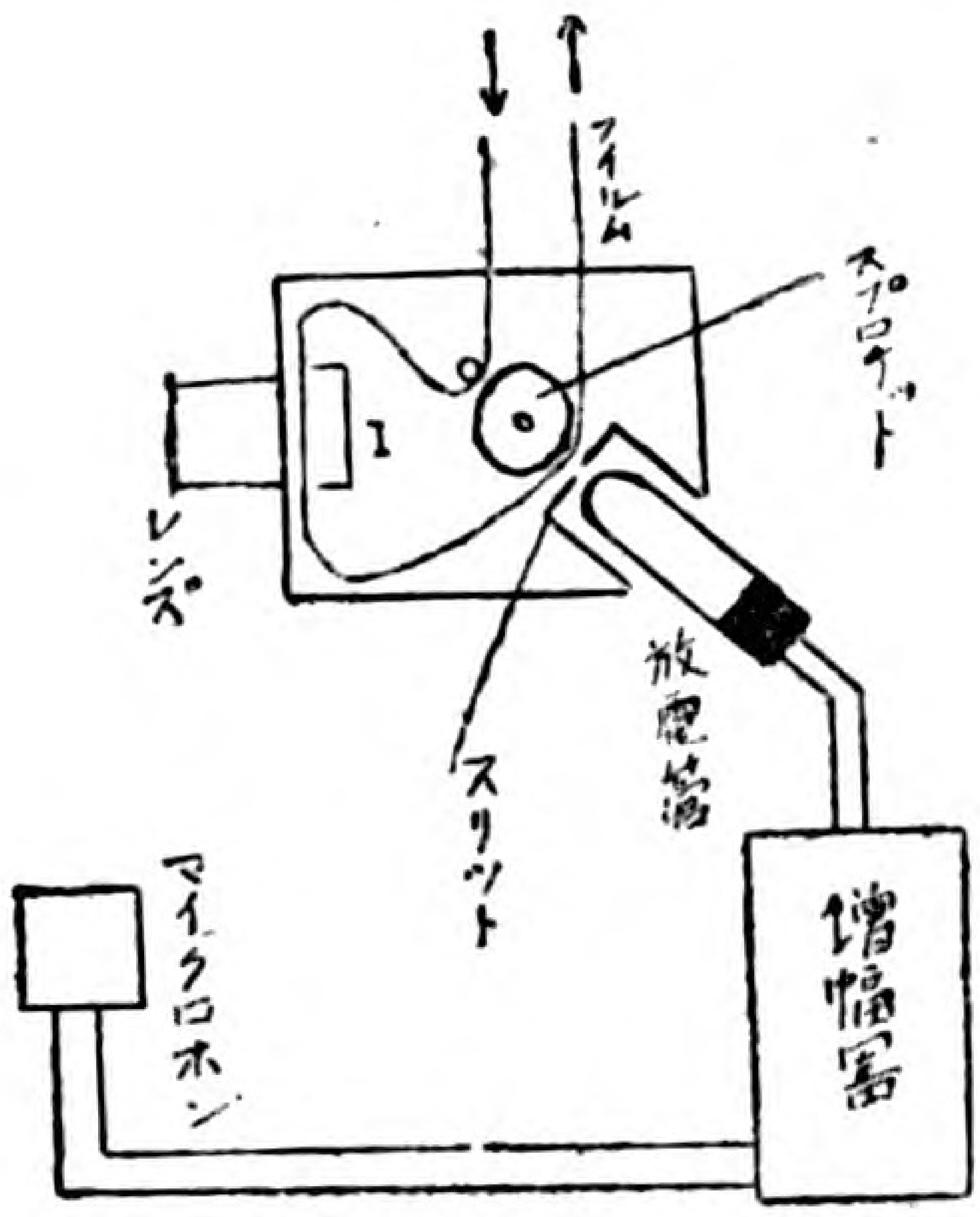
レコード面より得る音響の强さは、針先の速度（ピツクアツプの直線的速度に非ず）の函數であつて、其の速度は振動のアンプリチユード（振幅）に周波數を乘じたる積である。此は總ての周波數に於て同一なるプレツシユアを持てる原音は、是に相當する同一なる針先の速度に依て得る事を意味し又アンプリチユードは周波數に反比例する事を意味する。

1圖はバイタホンレコードの周波特性で、

（1）



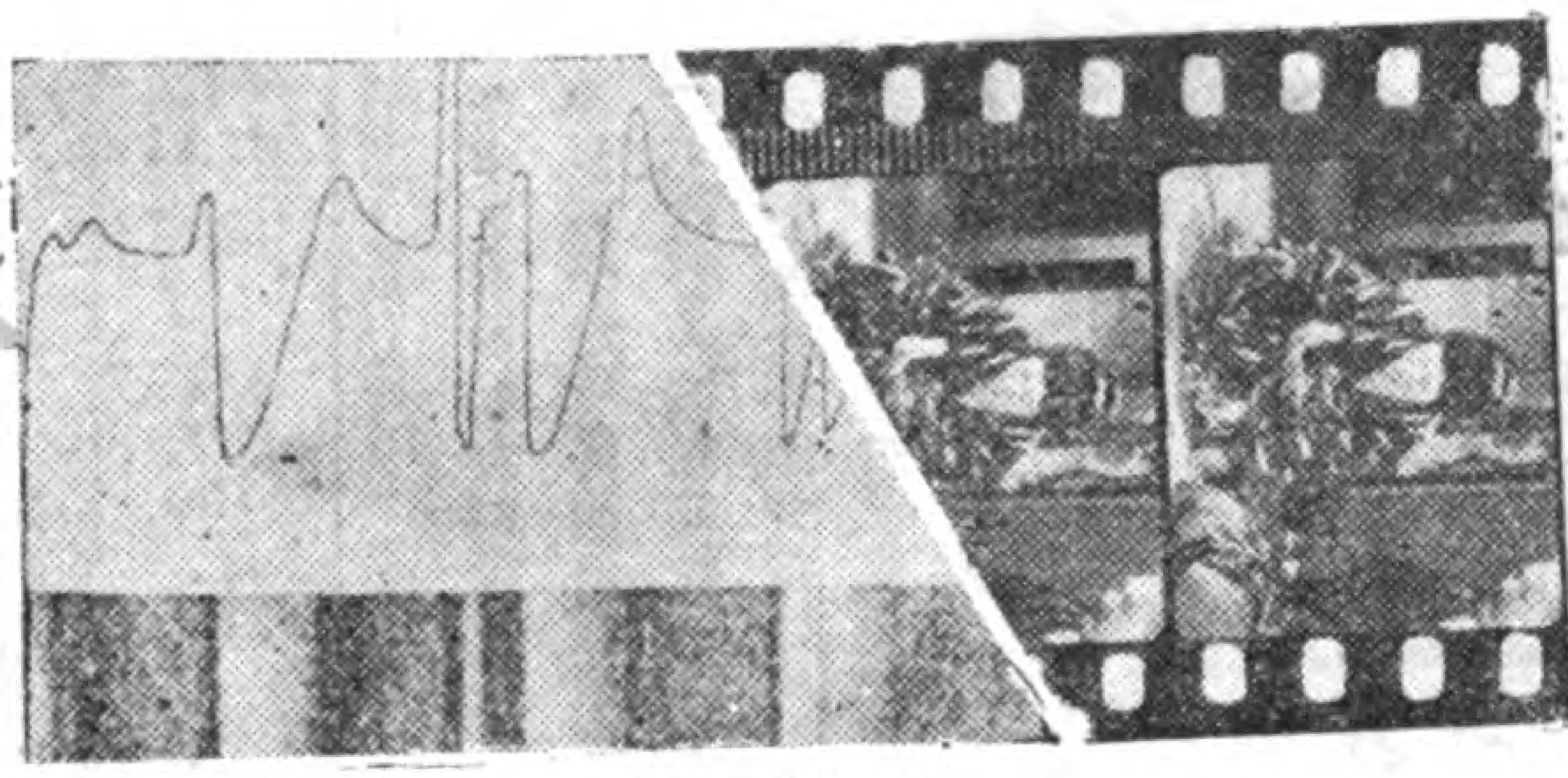
（2）



二五〇サイクル（一秒間一回の振動を一サイクルといふ）以下TU（音の力の單位）の低下してゐる理由は周波數に反比例してアンプリチユードを高めると遂には隣りの溝を壞すに至るを以て二五〇サイクル以下の周波數に於ては二五〇サイクルのアンプリチユードを限度として記錄された爲めである。

パイタホンレコードに於ては溝と溝との間隔は四ミルで、振動最大のアンプリチユードは二ミルとされて居る。二五〇サイクルに於て二ミルのアンプリチユードを有する時の針の速度は、五、〇〇〇サイクルに於てはアンプリチユード〇、一ミルにて足りると云ふ事になる。斯の如きレコードを使用する場合はピックアップの設計又はネットウオーク（或る電氣回路）に依る周波特性を矯正する必要がある。

（3）（4）

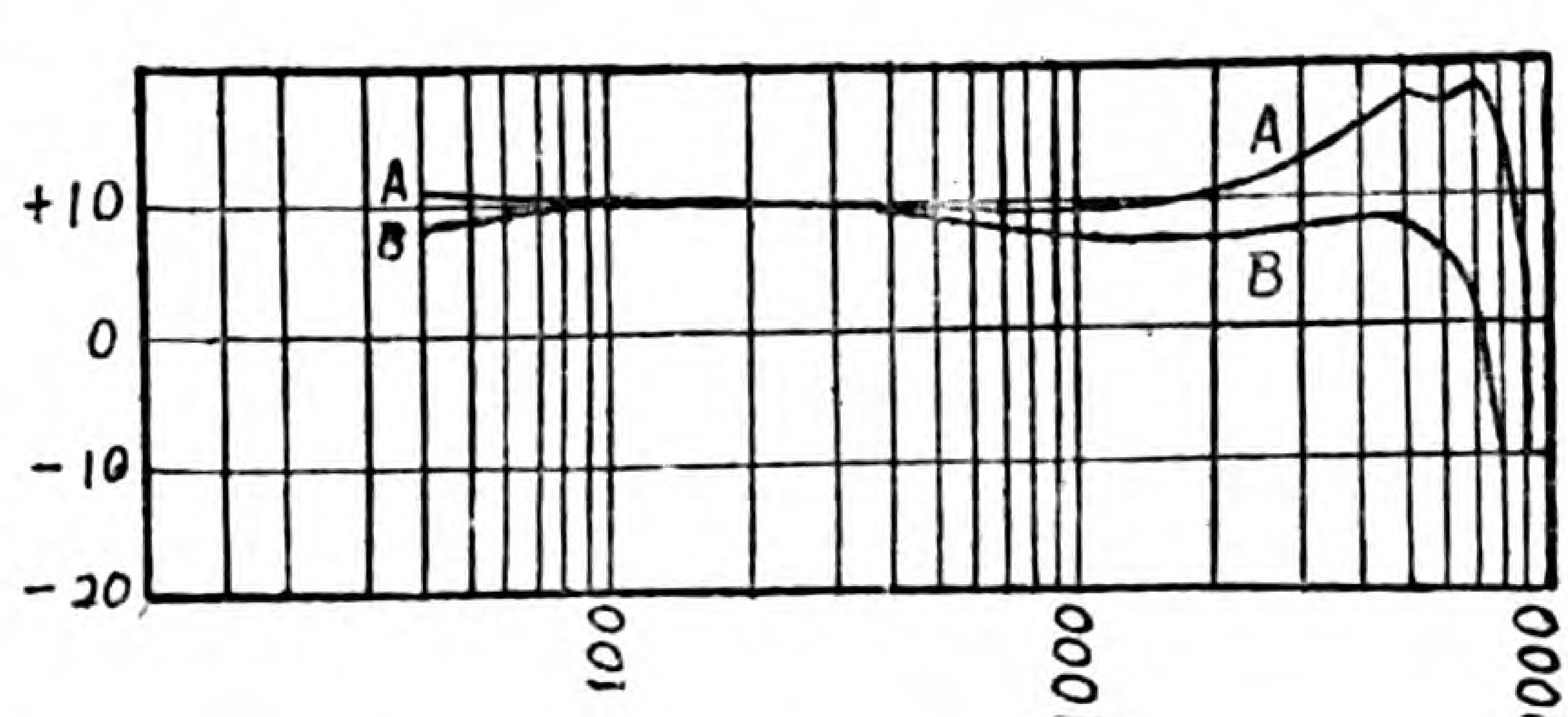


オシログラフとトーキーによる音響記錄の比較
（下部は光の密度を示す）

フヰルム式音響記錄

密度式（フオノフヰルム及ムービイトン）　2圖に示せる撮影機は其斷面にしてフヰルムは1に於て畫像を撮りスプロケット（フイルムを送る齒車）は毎分九〇フヰトの割合を以てフヰルムを送る。マイクロホンよりの電流（音波を電流にかへることは、普通電話に於て音波が電流にかはつて遠方に傳はるを考へよ）は增幅擴大され放電管に至る。

（5）



放電管は其音波電流の強さに比例して一定の光より或は強く或は弱く光を發す。此の振動的光が 0.1粍×0.001粍のスリットを通過してフヰルムに感光し第3圖の如き音響の記

疊をなす。

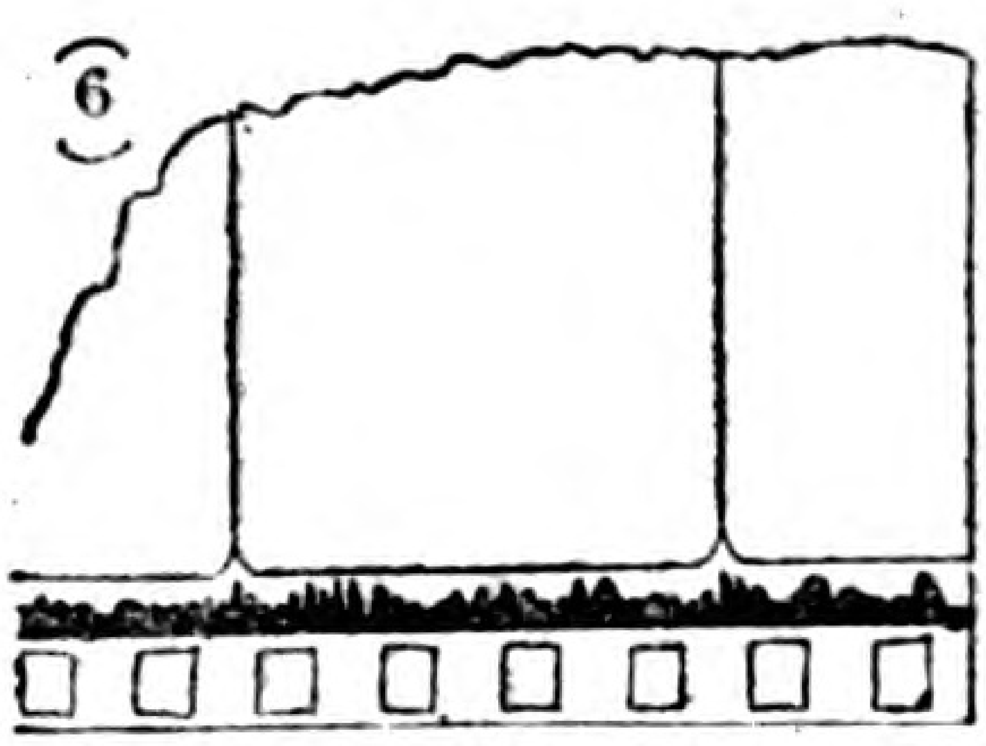
即ち、音波を電流にかへ、電流を光にかへ、光をフイルムの傍に線形（橫縞）に燒きこむ。隨つて此のフイルムを現象せば強い光によつてできた線はこく（高音）、弱い光によつてできた線（是が蓄音器のレコードに相當する）は淡い。

此方式にてはフヰルム面の光の投射面積は一定不變であつて、單位面積の光力の強弱に依てフヰルムに感光さす故密度式とも謂ふ。

ムービートンに使用するエオ放電管は石英の管の中にヘリユーム瓦斯を入れニッケル板を陽極とし陰極はプラチナ線に酸化アルカリ土類の混合物が、コーチング（塗布）されてある。此放電管は二〇〇ヴルト附近にて放電を始め三五〇ヴルトにて約一〇ミリアンペアーの電流が流れ音響記錄に可能なる光力を發す。ドフオーレー博士のフオノフヰルムにてはフオリオンチユーブと謂ふ放電管を使用して居る。感度はエオ管と同樣である。獨乙のトービスに於ても以上と略ゝ同樣なるものを使用して居る。

4圖のA曲線は前記のスリットを使用しフヰルムの速度毎分九〇フヰートの時各周波數同一の電力を與へて得た音響記錄の周波特性である。八〇〇〇サイクル附近にて急激に曲線の低下して居るのはアパーチユア・ヂストーシヨン（スリット即ち細隙は幾何學的の線を理想とするのであるが、然し事實はその縱幅に限度あり且フイルムの進行速度にも限度ある故に起る歪み）に依るものと思はれるが、計算上から云へば二〇〇〇〇サクイル附近に至つて波形のプラスマイナスが完全に重疊されて音が出なくなるに反し、斯の如く九〇〇〇サイクル附近にて急激に低下する理由は陽畫フヰルムに燒付の際の燒壞れ其他の損失に依るものと思はる。

(6)



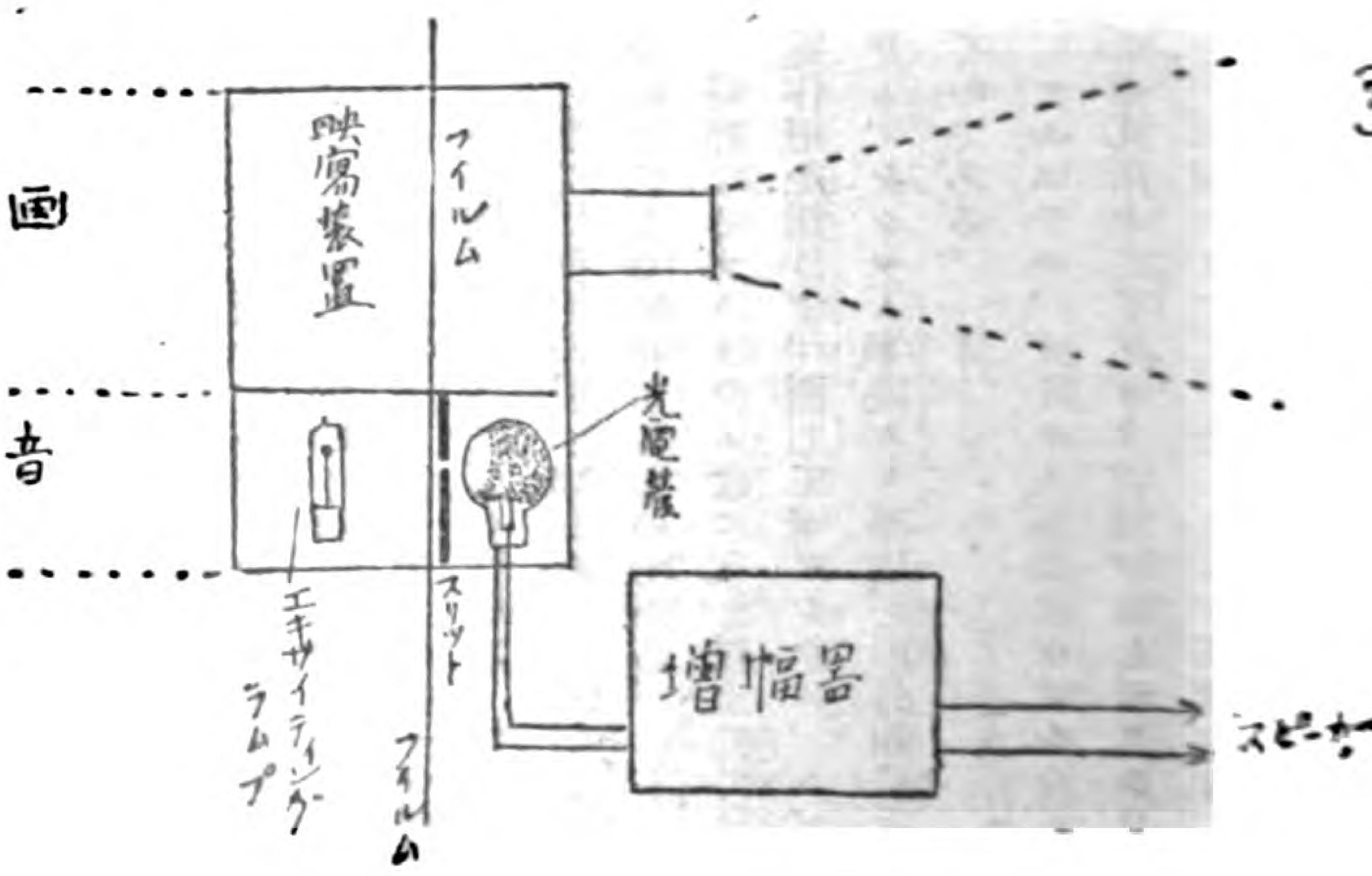
光の密度は問題でない

曲線Bは同じスリット及び同じフヰルムの速度にて發聲裝置よりの周波特性を示すものである。

ベル研究所にては放電管の代りにライトバルブ（是は眞空管ではない）を使用して居る。（專間的にわたる故障は略する）。

夢聲式（フオトホン）

(7)

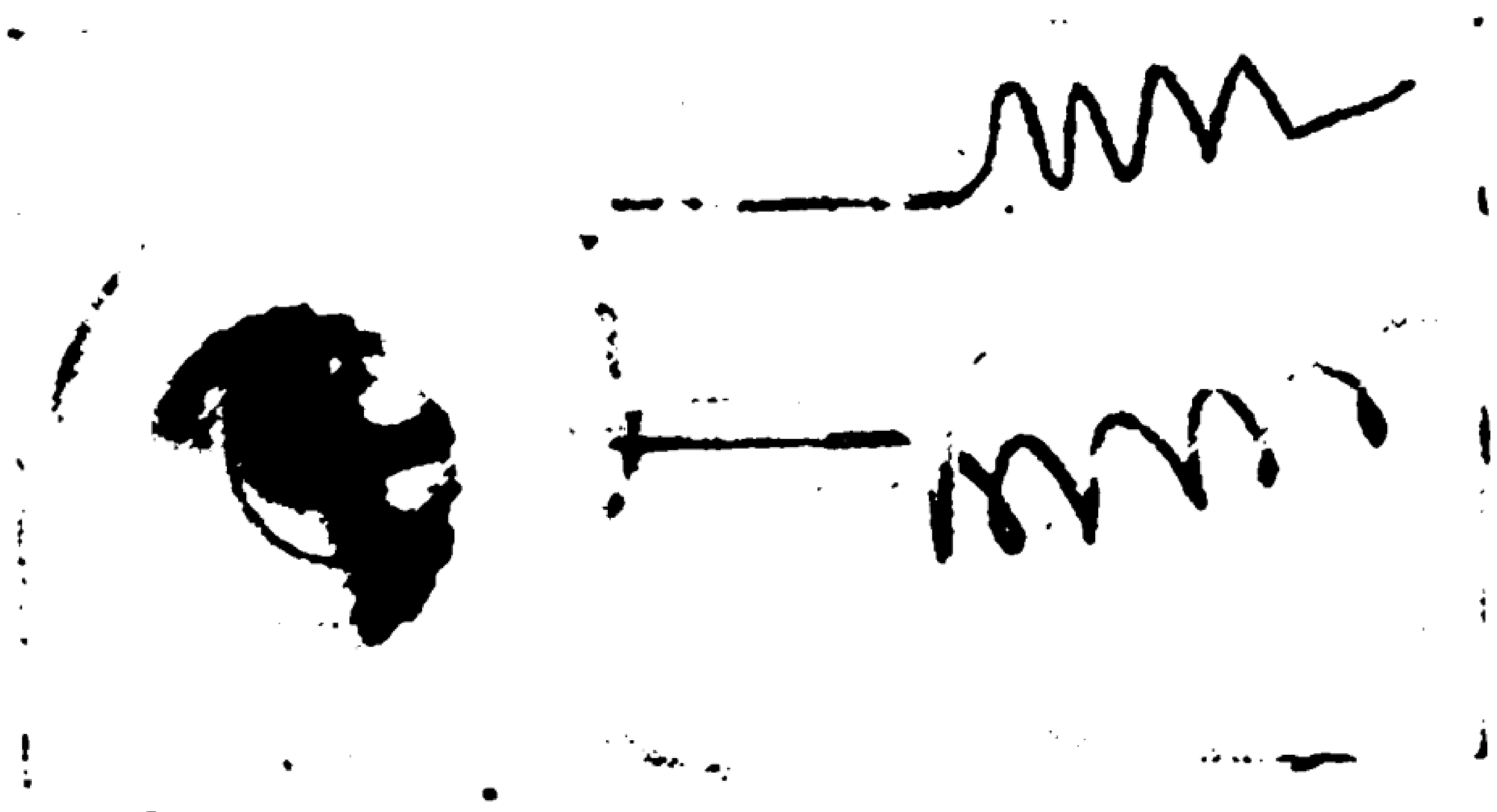


フオトホン式音響記錄裝置はオッシログラフの原理に基くものにして鏡を他の光線に依て

照し其の反射された光はスリットを通してフホルムに投射される。今音波電流に應じて鏡が振動したとすると、鏡より反射された光はスリットの中央を基として左右に振動しフホルムに音響を記錄す。而て此音響記錄は6圖の如く鋸歯状をなす。此方式に於ては（光の密度は問題でない）單位面積に於ける光力は一定不變にしてスリットを通ずる光の面積に依り光量を變化する。是を面積式音響記錄とも謂ふ。

フキルム式發聲裝置

フキルム式發聲裝置に於ては光電管、（是が光を電流に戻す）スリット、エキサイチングランプ（自動車のヘッドライトに使ふ電球の高級なもの）が心臓とも云ふべきものであつて裝置は7圖に示す如くである。エキサイティングランプよりの光はフキルムを透過してスリットの細隙より光電管に至るものにして、サウンドトラック（フイルムの音響の記錄面）の所にスリットは置かれてある。今密度式音響記錄をなしたフホルムがスリットに接して進行したとすれば、フホルムを透過してスリットより光電管に至る光はサウンドトラックに於ける横縞の濃淡に應じて光力は或は强められ或は弱められ、此光の變化は光電管に於ける電流に變化を與へて音波電流を得此音波電流を增幅してスクリン裏のスピーカーより音響を發する。



(8)

面積式音響記錄をなしたるものに於てはスリットを通過する光はフイルムの鋸歯状をなしたる音響記錄によりスリットを通する光の面積を增減して增減され此が光電管に射入されて光電流に變化を生じ音波電流が得らる。

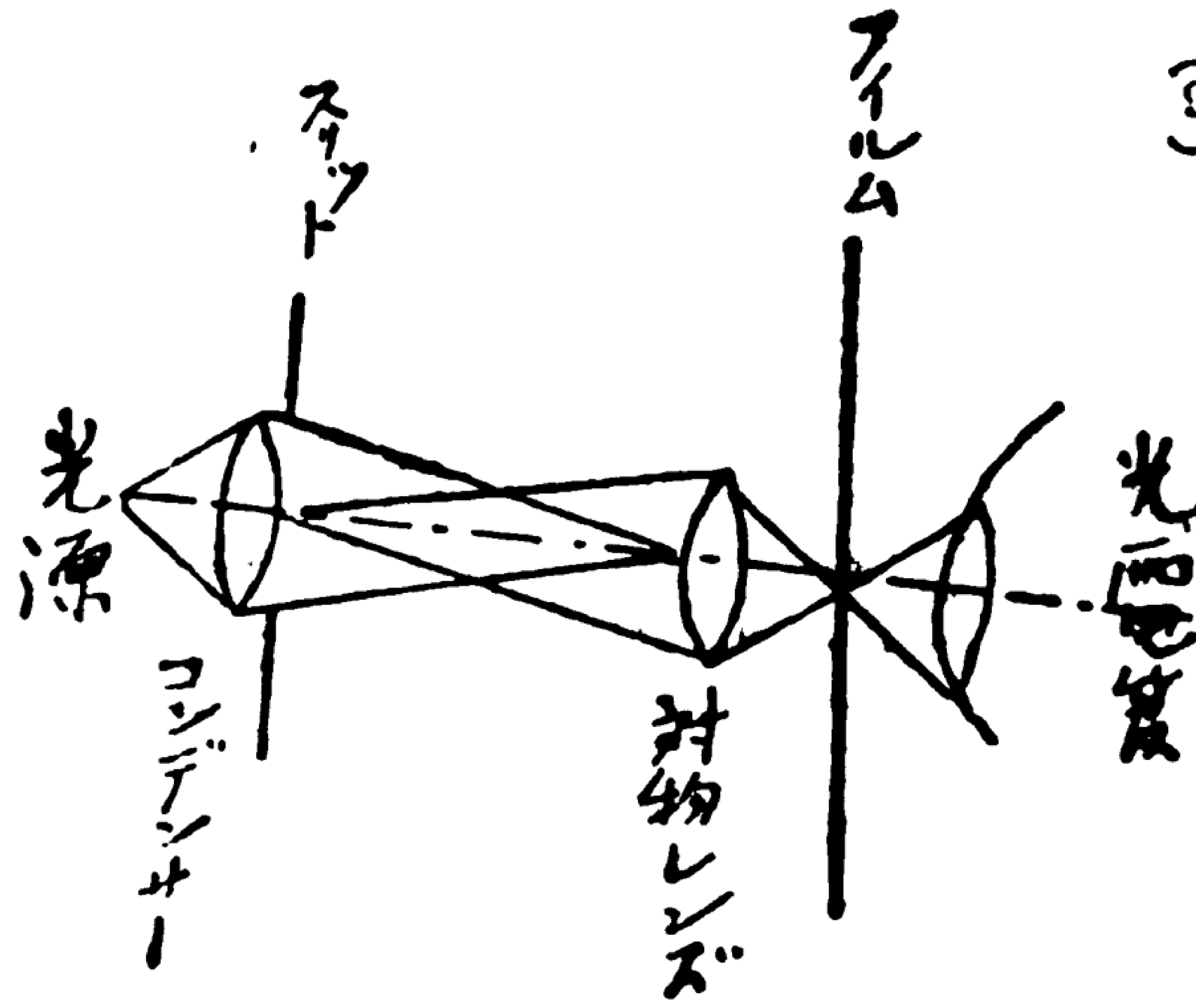
光電管は8圖に示すが如くパイレックス（曹達）硝子の管の内部を光の射入する所丈を除き銀メッキし其上にアルカリ金屬を沈澱して此を陰極となし、銀及アルカリ金屬と絕緣された金屬リングを陽極とし、管内にはネオン、ヘリウム、アルゴン等の不活性の瓦斯が封入されてある。陽極と陰極とに或る電壓を加へアルカリ金屬に光を與へるとアルカリ金屬より電子を射出す。此電子の量は或る範圍内に於ては光量に比例して增減する。管内に封入された瓦斯はアルカリ金屬より射出された電子と衝突して電離され電子流の增加を計るためである。此光電流の大さは投光角度、其面の偏極光の波長により異なる。此等のものは其光電作用を起す物質の性質及び其表面の狀態により變化するものである。

純粹なるナトリウムは0.3μ以上にては光電作用を起さず、而してポタシウム、ルビジウム、ケシウム等段々と感度が赤外線に近づくのである。

エルステル、ガイテル兩氏はポタシウムを水素瓦斯中にてグロウ放電をなしポタシウムを濃綠紫色又は紫青色に色付け感度を增大せしめた。此色付は小なるコロイダルのアルカリ粉粒が出來るが如くに見える。感度の增加する理由は色を濃くするために吸收が增加するためではなくコロイダル粒子によるものと

思はる。從來色付け困難とされたケシウムの色付方法に成功し、赤外線より紫外線に至るまで感じるケシウム管が現はれた。此ケシウム管はトーキーの如き白色電球が使用するものに對してはポタシウム水素化物光電管の二

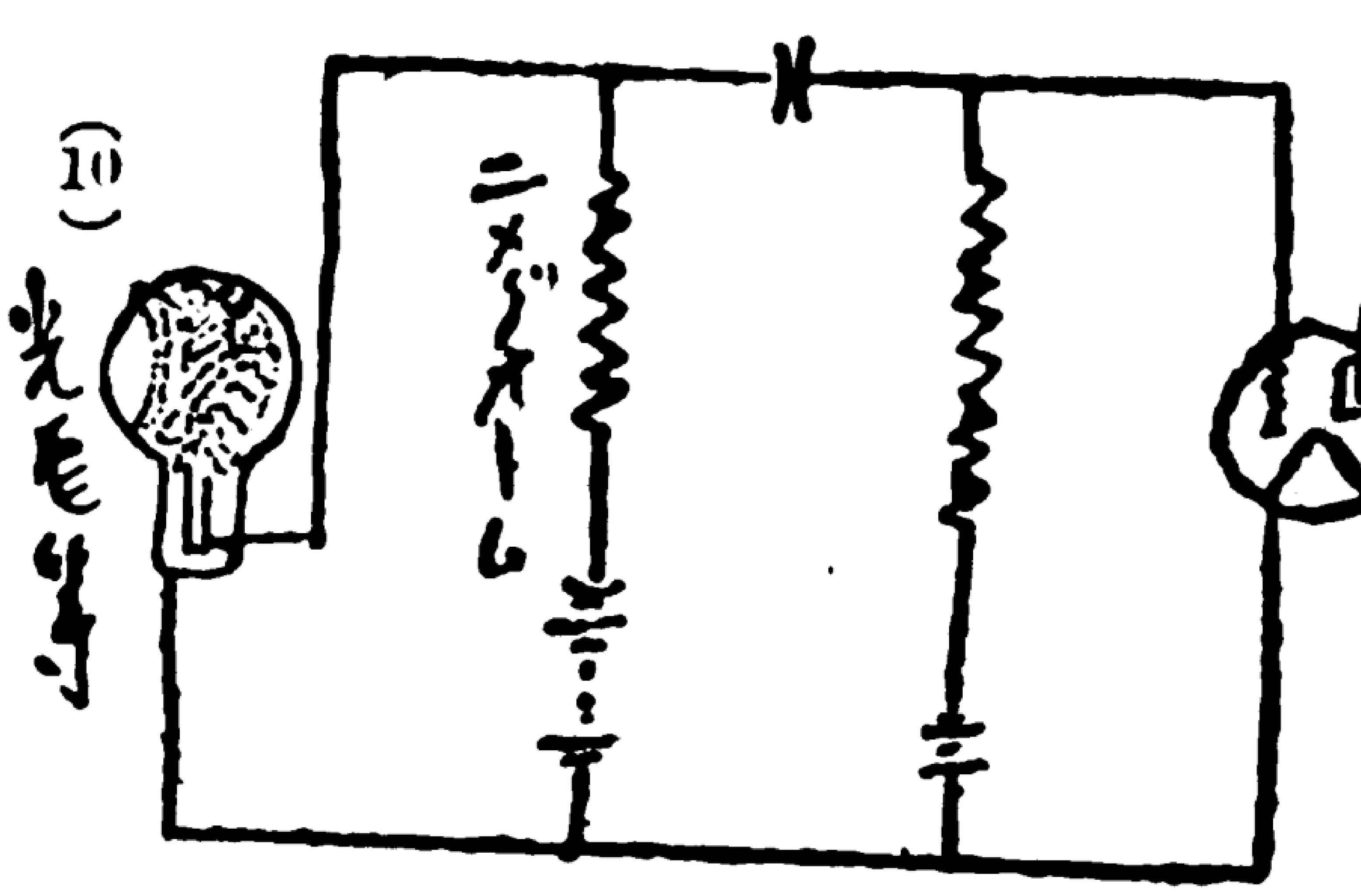
(9)



倍の感度を有している。

トーキーに使用する光電管は光束一ルーメンに就き一〇マイクロアンペアの感度のあるものが必要であつて、其以下にては增幅器の段數を增加するために光電管、結合抵抗及變壓器等の特有の雜音も倍加され不結果を來たす。光束一ルーメン〔に〕一〇マイクロアンペアの感度の光電管を使用しトーキーに適當なる出力が得るにはスリットが通じ少なくとも〇、一ルーメンの光束を必要とする。而してスリットの窓は0.1吋×0.001吋＝0.0001平方吋、即ち糎に換算すれば〇、〇〇〇五平方糎にして此窓を通過する光束を〇、一ルーメンとなさんとするには二〇〇ルーメン／平方糎の照度を以て照らさなくてはならない。是を燭光で表はせば二〇〇燭光の電球を一糎の距離に置いたものである。

(10)



9圖は實際に使用されてるスリットの部分である。此場合スリットは數倍大なるものを用ひ集光レンズと對物しレンズとの間に裝置さる。11圖に代表的なる光電管と增幅管との結合接續圖で今光電管は一〇マイクロアンペア一ルーメンの感度を持ち〇、一ルーメンの光を與へたとすれば二メグオーム（一メグオームは百萬オーム）の抵抗を通じ一マイクロアンペアの電流が流れ出力二マイクロワットが得る。此二マイクロワットの電力を七〇TU（一〇、〇〇〇、〇〇〇倍）增幅擴大し不可聽周波の二〇ワットを得る。

ラウドスピーカーの能率を一〇パーセントとすれば音響の勢力となるは四ワットにして二千人分の座席を有する一般の常設館に使用し得る。

今や世界的に流行を來たしたトーキーも本體を洗へば斯る微小なる電力を增幅擴大して數千人の觀客を喜ばしてゐるのだ。科學の力も偉大である。

血液型の話

古畑種基

一

人間の體質を血清學的に分類すると六種類による事が出來る。この體質は全く遺傳的のものであつて、同一人の臟器、組織、細胞、血液は皆同一系統に屬して居る。其中一番くわしく研究せられて居るのは血液に於ける型であつて、之を我々は血液型と呼んで居る。成程、血液型と云ふ觀念の大部分を占めて居るのは、其名の如く血液の型であるが、臟器の型、組織の型、細胞の型も其中に含まれて居るのであつて現今では血液型と云へば血清學的體質の事に解釋される。血液型は前述の如く遺傳的形質に屬し、其成立は卵子と精子とが結合した瞬間に於て定まる。一個人の持つ血液型は單に血液のみでなく其人の身體全體の持つて居る體質型であるのであるから、これは一生不變で氣候や、風土、食物病氣等によつて變化しない。

數年前迄は外國でも血液型が變化するとか或る人の血液型が病氣の後で別の血液型になつたとか報告した人もないではなかつたが、之れは血液型の意義を尤分理解して居らぬ人々の屢々陷る誤謬であつて、今日に於てはそんな馬鹿々々しい事を信ずる人はなくなつて來た。血液型は卵子と精子と結合した時から決定して居るのであるが、我々の手で證明出來る樣になるのは、胎生約三ケ月の頃からである。胎兒の血液でも注意すれば成人同樣に分るものであつて、月數を重ねるに從つて、其證明は次第々々に容易且つ明亮になり、初生兒に於てははつきりと定める事が出來る。

血液型は常に二つの因子の結合によつて出來て居る。其一つは父の生殖細胞卽ち精子によつて傳へられ、他の一つは母の生殖細胞卽ち卵子によつて遺傳したものである。

而して一個人の血液型の持つ二つの因子の中必らず一個丈けを子供に傳へる。六種類の血液型とはOO型、AA型、BB型の三種の同一合體とAO型、BO型、AB型の三種の異種接合體であつて、OO型と云ふのは父からも母からもOなる遺傳因子を傳へられたもので、AA型は父母の兩方からA遺傳因子を貰つたものである。AO型は兩親の一人からAなる遺傳因子が傳はり他の親からOなる遺傳因子が傳へられたもの、AB型は兩親から夫々AとBとの因子を受け嗣いだのである。

二、血液型の遺傳

前述の如く血液型は人類に於て發見せられたる遺傳する處の形質として甚だ重要なるものである。其遺傳の樣式も殆と完全と云つても善い位に明かになつて來た。今其の遺傳の方法に就て、簡單なる二三の例を示して見やう。

前にも述べた如く、血液型は常に二個の遺傳因子が結合して居り、遺傳に際しては、必らず分離して遺傳をする。

(一)、OO型の父とCO型の母から如何なる子供が生れるか。

OO型の人は其遺傳因子にはOと云ふ因子よ

りはないから其間に生れる子供は全部O型である。之を式で示すと

$$OO \times OO = (O+O) \times (O+O) = 4OO.$$

（二）、AA型の父とOO型の母との間から如何なる子供が生れるか。

AA型の人の持つ遺傳因子はAでありOO型の人の持つ遺傳因子はOであるから、其間に生れる子供は全部AO型である。

$$AA \times OO = (A+A) \times (O+O) = AO.$$

（三）、AA型とBB型との兩親の間から如何なる子供が生れるか。

AA型の人の持つ遺傳因子はAでありBB型の人の持つ遺傳因子はBである、從つて其間に生れる子供は一〇〇%AB型でなくてはならない。

$$(AA \times BB) = (A+A) \times (B+B) = 4AB.$$

（四）、AO型とAO型との兩親の間からは如何なる子供が生れるか。

AO型の人の持つ遺傳因子はAとOとの二種であり、從つて其間にはAA型の人とAO型の人とOO型の人が 1:2:1 の割に生れる

$$(AO+AO) = (A+O) \times (A+O) =$$
$$AA+2AO+OO.$$

（五）、AB型とOO型との兩親から如何なる子供が生れるか。

AB型の遺傳因子はAとBとの二種であるが、OO型の人の遺傳因子はO一種類であるから其間にはAO型とBO型の子供が五〇%づゝ生れる。

$$(AB \times OO) = (A+B) \times (O+O) =$$
$$2AO+2BO.$$

（六）、AO型とBO型との兩親の間にはどんな子供が生れるか。

AO型の人にはAとOとの二種の遺傳因子があり、BO型の人にはBとOとの二種の遺傳因子があるから、其間にはAB型AO型BO型OO型の子供が二十五%づゝの割合に生れる。

$$(AO \times BO) = (A+O) \times (B+O) = AB+$$
$$AO+BO+OO.$$

其他の組合せに於ても同様の原理に從つて容易に其間に生れる子供の血液型を決定する事が出來る。

三、血液型遺傳の應用

血液型が人類學上に應用せられて、「血清學的人類學」が最近勃興して來た事は人の知る盛であるが、今日こゝに問[illegible]は、[illegible]醫學上の應用[illegible]られる[illegible]の場合の應用であり、[illegible]心理學上の應用であり、[illegible]法醫學上の應用である。法醫學上には、血痕の個人識別、私生子の認知、父親又は子供の否認、假親の證明、離婚問題の立證、妻の不貞操の科學的證明等の事件に應用せられて居る。外國に於ては血液型の檢査が裁判上に採用せられたもの既に數百例に上つて居るが、今次に二三の例を引用しておこう。こゝに注意しておかねばならぬ事は血液型は最近の研究によつて本當は六種類で有る事が分つたが一般には四種類として呼ばれて居る。O型A型B型AB型である。A型はAA型とAO型とを一所にして呼んで居るのでありB型はBB型とBO型とを一所にして居る。次の例は四種類に分類したものであるから其積りで讀んで戴き度い。

キール大學のベーメル氏は氏の取扱つた事件六十例中六例は斷然父を否認するものであつた。

一例は父がA型、母がA型であるのに子供がAB型であつた。A型とA型との兩親からAB

型の子供が生れる筈はない、この子供の實父は必らずBなる遺傳因子を持つて居る人でなくてはならない。即ちこのA型の人はこのAB型の子供の父ではあり得ない。この例は妻が夫以外の人と關係した事を意味して居るので妻の不貞操の科學的證明であり、父が子供を否認する理由になる。

第二例は父も母もB型であるのに子供がA型であつた。この場合も此B型の人は實の父ではない。第三例は血液型檢査で密通の嫌疑を立派に晴した例である。父と母とがO型で子供もO型であつた。處がこゝに母と親しくして居る人があつて、其人がこの子供の實父であるのでないかと云ふ疑がかけられて居つた。其の人の血液型を調べて見るとAB型であつて、O型の母とAB型の男子との間にO型の子供の生れる筈はないので、この人は血液型の檢査によつて立派に其冤をそそぐ事が出來た。第四例は一人の女に三人の男が關係して居つた。それで其間に生れた子供の父は三人の中誰れであるかと云ふ事が問題になつた。檢査をして見ると母親はA型で、其子供はAB型であり、三人の男の中第一の人はA型第二の人もA型、第三の人がB型であつた。この場合第三の男がこの子供の實父と目され、第一、第二の男は子供の父でない事が分つた譯である。

第五例は母がB型、子供はA型であつた。處が夫の友人にこの母と親しい人があつて、この人が子供の實父でないかと云ふ疑がかかつた。處が血液型を調べて見ると夫の血液型はAであり、友人の血液型はOであつた。B型とO型との間からA型の子供の生れる事はないから、この友人は不快なる嫌疑を立派に晴らす事が出來た。こうなると血液型の檢査も中々偉大なりと云ふべきであらう。第六例は母がB型、子供がA型、其夫がB型、母の一人の友人はO型、第二の友人はA型であつた。この事件に於ては男三人の中で子供の實父を一人選み出す事になつたのであるが、B型の女と配してA型の子供を生むのはB型、O型、A型の三人の中A型の男子に限るのである。この場合の子供の父は第二の友人であると推測せられた。

獨逸のシヨイレン氏は三百廿例の事件で二十九例に於て明白なる判斷を下して父を否定する事が出來た。

其中の一例は一寸面白い例である。一九二六年或る男が、其妻の生んだ子供が自分に似て居らぬから、これは自分の子供ではない、必らず他に情夫があつて其間に出來た子供に違ひないと云ふので、其妻を離別すると云ひ出した。處が妻はどうしてもきかない。あく迄も貴方が離別を主張するのならば、裁判上に於て黑白を決し樣と云ふ事になつて、妻の方から血液型檢査によつて夫の疑の理由ない事を立證してほしいと訴へ出て來た。

母なる人はO型であつて、其の子供は二人あり、一人はA型、一人はB型であつた。所が夫なる人はどう云つても自分の血液型を檢査する事を承諾しない。唯妻と密通した男の血液型を調べて見てくれと云ふ事であつた。それで其男の血液型を檢べて見るとO型であつた。O型の男が、O型の女と配してA型やB型の子供を生む筈はないから、この男は決してこの子供等の父親でない事は明々白々である。それでこの男が子供二人の實父ではないかと云ふ夫の疑は全く根據のない事である事が明かになつて妻を離別し樣と云ふ夫の訴訟

に斷けた、この證言人に、[illegible]受けて居る男の無責の[illegible]自であるが、O型の女と配してA型、B型の子供が生む人の血液型はAB型であるから、恐らく夫の血液型はAB型に屬するものであらうと陳言をしておいた。

處がそれから二年の歳月が流れた。當時、血液型の檢査を頑として承諾しなかつた男ないゝ具合に說きふせて檢査する機會を得た。檢査をして見ると、二年前陳言した如く、果してこの夫の血液型はAB型であつた。

次はケーニヒスベルグ大學のゴロンチー氏の報告した面白い例である。Lなる男がヘレン嬢と心易くして居つた。處が他にも男があると思はれたので、此Lなる人はヘレン嬢から遠のいて行つた。處が當時二十四歳のヘレン嬢は一人の男子を分娩して、この子供の父はLに相違ないと云ふので子供の認知を迫つた。處が其子供の受胎豫想日の頃はLはヘレンと關係しなかつたと云ふ理由で、其子供を認知するを拒んだ。それでヘレン嬢はL男に私生子認知の訴訟を起して遂に勝訴となり、裁判所はLに子供を認知すべしと宣告した。

そこでL男は、ヘ[illegible]訴を起した。子供の受胎豫想日の頃にはL男とは性交なきにも拘らず、性交があつたと宣誓の上で偽證をしたと云ふのである。これで其決定を血液型檢査に求める事になつた。ヘレン嬢もLも共にA型であるのに子供はAB型であつた。A型とA型の兩親の間からAB型の子供の生れるは血液型遺傳學の許容しない處である。この子供の父は必らずBなる因子を持つて居る人でなくてはならないので、Lは斷じてこの子供の父ではあり得ない。裁判の結果Lの申立の如く、Lはこの子供の父に非ざる事が明かになる、ヘレン嬢は偽誓の罪に問はれ一ケ年の禁錮に處せられる事になつた。

[illegible]つて明白にし[illegible]受れた例は相當ある。從來は私生子[illegible]事件に於て女側の方で、男に對して無責任に[illegible]して其爲め迷惑を蒙むる人もないではなかつたが、これからは血液型檢査によつて眞實を明かにする事の出來る場合も追々と出てくるであらう。(註、血液型は遺傳する性質によるから六種類の遺傳型を以て呼ばれなくてはならぬのであるが、一般には昔しから使ひ慣れて來た血清學的分類のO型、A型、B型、AB型の稱呼を使用して居る。然し嚴重な意味に於ては四種類の分類を使用するは正確なものではない。)

自動車解說

松浦一

一、自動車の起原

自動車が今日の様な形態を備へる様になつたのは、二十世紀の初期獨乙のダイムラー氏に依るものとして廣く知られて居るが、世界最初の自動車として實驗的に成功したのは遠く一七七〇年の昔佛國の一技師ヨセフ・キューノー氏が作つた蒸汽自動車である。此の自動車は金屬製の輪を用ひ一噸半の荷物を載せて時速三哩と云ふ事だから人力車程度の

に過ぎないけれど今日の自動車萬能時代から溯つて考へて見ると佛國政府が之れを國寶として保存し、世界に誇つて居るのも然ある可きであらう。爾來二十世紀に到る迄世界を擧げて如何に多くの學者と技術家の努力竝びに巨大の費用とが之れが改善に費されたかは想像の限りでない。一例を見るに彼の小一部分品である電氣點火裝置を作るにも、英帝ナポレオン一世の心慮を傷めしめ、遂に彼は五萬フランの懸賞金を投じて佛國技術者に呼びかけたと云ふ事である。彼の物好きな米國で一九〇〇年四月世界最初の自動車競爭が行はれた。場所はメリックロード、コース五十哩。

一着—電氣自動車(所要時間二時三分三一秒)
二着—蒸氣自動車(二時一八分三七秒)
三着—ガソリン自動車(二時三〇分一秒)

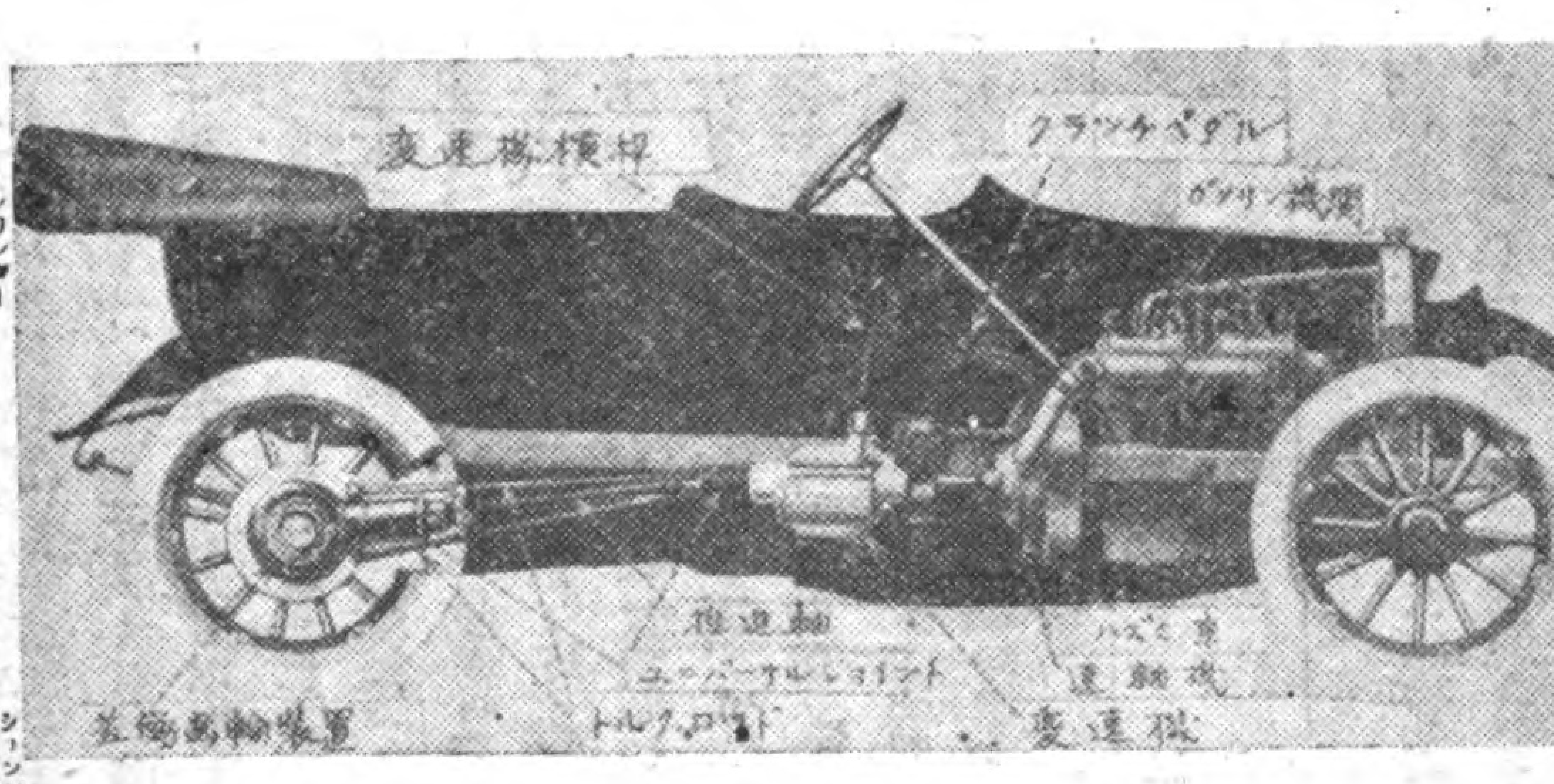
と云ふ事だ。今日の時速二六〇哩と言ふ世界記錄に比し讀者は苦笑を禁じ得ないであらう、然し我々はその中にこそ、自動車發達の幾多苦闘の跡を看過し得ないのである。

二、最近の自動車發達振り

一九〇三年にゴムタイヤーが完成されてからの自動車の進步はその質に於て、數に於て實に目覺ましく、今日三千四百萬臺の自動車が地球の各地を縱橫に馳驅して居る。その中の八割强は米國で人口五人當りに一臺の割になる。我國に於ては明治三十三年に佛國から初めて二臺の自動車を買ひ入れてから今日八萬臺に近い數になり、最近著しい需要振りを示して來たが、軍備に於ては七割率を備へる日本も、自動車では千五百人に一臺の割合で十强國中にも入れない。然し今日試みに吾々が東京、大阪等の大驛頭に立つた時、何を見、何を聞くか、所謂一九三〇年の超テンポで變轉する急鋭角的尖端を走る社會を、そして昨日迄特殊階級的專有物とのみ思はれてゐた色樣々、形樣々の高級車が只一枚の銀貨で制禦せられつゝあるを。誠に今昔の感に耐へない次第である。

三、自動車はどうして動くか

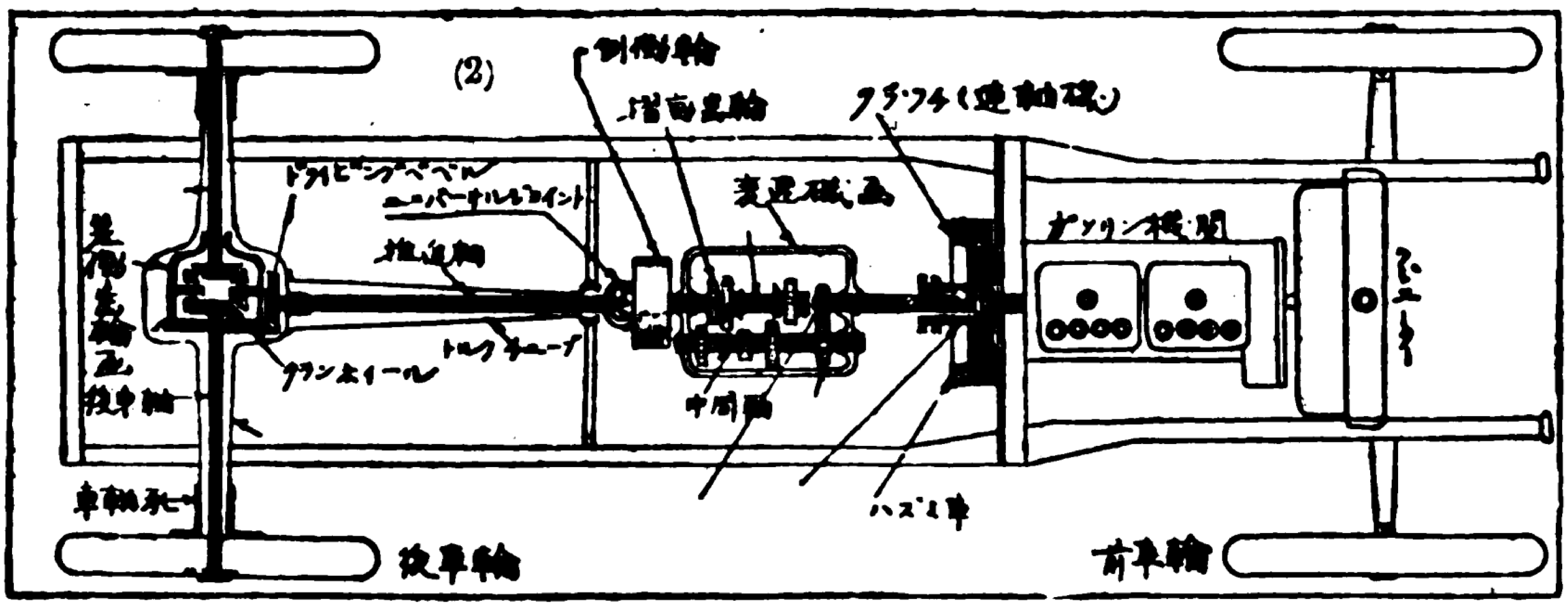
自動車の原動力である内燃機關の理論は一八六二年佛國のロシヤー卿に依て着想され、一八七七年獨乙のオットー氏に依つて實用化されたもので今日オットー機關として知られて居る。此の機關はガソリンを燃料とし、空氣との混合物を吸入、壓縮、爆發、排氣順に、即ちピストンの二往復動の間に一回の爆發を爲し、動力を發生して發動機軸を回轉するのである今日の發動機は、四、六、八、氣筩(シリンダー)のものが多く、各々氣筩(シリンダー)が交互に爆發するから運轉は氣筩數の多い程圓滑で



(1)

移動もない。[illegible]動力[illegible]れ、驅力傳達である。斯くして發動機の回轉動力は順次に連動盤、變速機、推進軸、差動齒輪裝置、後車軸、後車輪と、後部の方に向つて傳達され、初めて自動車が走る事になる。連動機は二個乃至數個の板の接觸摩擦力に依つて發動機軸と後部の變速機に到る軸との連結を簡單に斷續出來る樣にしたもので、發動機を運轉のまゝ車を停止したり、ブレーキをかけたり、變速機の齒輪を入れ換へたりするのに應用する。普通運轉臺の左側のペタルを左脚で踏むとクラッチが切れ、離すと發條の力でクラッチが入る樣になつてゐる。變速機は發動機軸と後部推進軸との回轉割合及び方向を噛合ふ齒輪比を換へて變化する裝置である。元來發動機は後車軸と直結したまゝでは車の發車の際の大なる抵抗力に打ち勝つ事が出來ないから、先づ初めは後車輪の回轉速度を減じて回轉力を大にして始動し順次に加速して行かなければならぬ。普通の乘用車では第一段、第二段と變速機の齒輪を噛み換へて第三段目で直結される樣になつて居る。車を後退せしめる場合も此の變速機の別の齒輪を噛み換へて行ふ[illegible]、是に[illegible]事に前進三段、後進一段と云ふのが普通である。此の變速機の操作に運轉臺の中央部に直立した變速機槓桿を輕く斜めに圖の如く倒せば良い。3圖の中とあるは直立した位置で此位置にある時はクラッチペダルを踏まなくとも發動機軸と推進軸との連絡は斷たれて居る。推進軸は變速機よりの回轉を後車軸に傳へる一本の長い棒で其の兩端の連結部は後車軸が道路の凹凸の爲めに搖れても依然と圓滑に回轉し得る樣に自由關節の接手になつて居る。差動齒輪裝置と云ふのは、自動車を或る方向に旋回する時に左右兩車輪に直線運行と同じ樣に同一速度で同一回轉力が發動機から傳へられてゐるとすれば曲る内側の後車輪は滑動して「タイヤー」及び道路を損傷するのみならず小半徑で曲り得ない事になる。即ち此場合は内側の後車輪より外側になる後車輪の方が多く回轉して多く進まなければならぬ。故に自動車では此の目的を自動的に行ふ爲めに2及4圖の如く後車軸は中央で二分し左右兩端に車輪を固定する。中央部には差動齒輪裝置を備へ、今或る方向に前車輪が向けられると、曲らんとする内側の後車輪[illegible]差動齒輪の働きで其抵抗が外側よりも大となるから[illegible]齒輪の働きによる小[illegible]遊星齒輪は外輪の抵抗が内輪と等しくなる丈け多く回轉速度を傳へ、内側の後車輪は只車體の動くがまゝに從ふ樣になる。勿論前車輪は車軸に固定されないで左右單獨に軸上で回轉するのであるから此の裝置を必要としない。唯曲る時四輪共或る一つの回轉中心を有しなければならない爲めにハンドルを或る方向に廻す時は前車輪を連結したタイロッドと云ふ一本の棒の作用に依つて曲る方向に對して前車輪の外輪が内輪より幾分多く曲り四輪が一點を中心として圓滑に廻る樣な裝置を必要とする。其他交通安全上の重大な役目を持つ制動裝置は今迄ペダルを踏む足の力で内輪の制動帶を締め付ける樣になつて居るが、最近大型及び高速度自動車の發達と共に強い制動力を必要とするに到り、油壓制動機及空氣制動機が次第に採用せられつゝある。制動距離は速度に關係があるが大體二〇哩位なれば十六尺以内で車は停止する。其他自動車各部の機構は一々本[illegible]に到る[illegible]代機械工學の粹の集積[illegible]い。

而も輕快、外裝、價格等の立場から極めて華奢に出來て居るから惡道路及び亂暴なドライバーに對しては甚だ短命である。



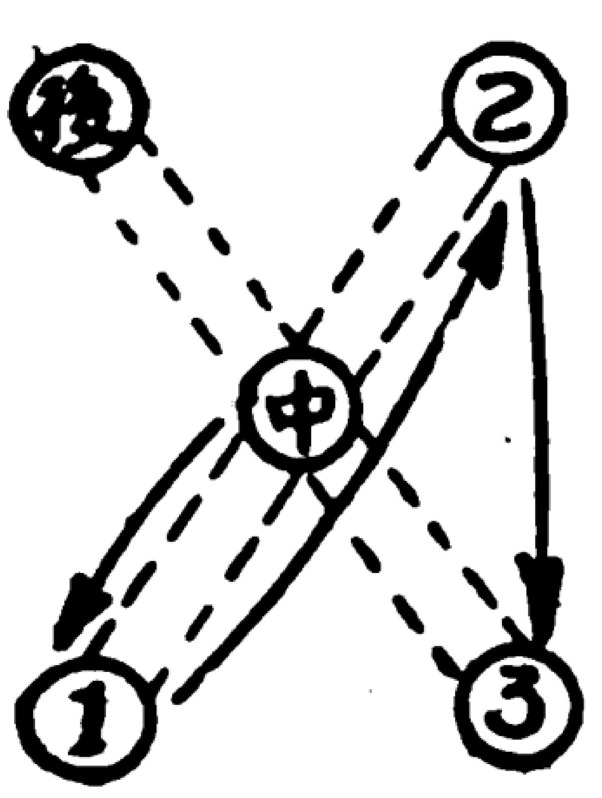
四、自動車と燃料問題

最近人口問題食料問題と齊しく論議せられて居るのは此の燃料問題、わけてもガソリンの問題である。我國のガソリンの消費量は年に約五千萬ガロン、其の中四千萬ガロンは自動車が街頭で消費してゐる。然もその中の三千五百萬ガロンと言ふ大部分は亞米利加から輸入してゐる現狀である。米國地質調査局ステビンガー氏の大正八年の調査に依ると日本の石油埋藏量は四百五十億ガロン、之をガソリンに精製して六十億ガロンのガソリンが得られる譯であるが毎年一・五割の増加率で消費して行く我國の現狀から計算すると今後二十年弱しかガソリンの壽命は無い事になる。

我々關係技術者が今日の自動車の發達を喜ぶ他面に於て、國家百年の之れが對策を今奈邊に樹立せんとしつゝあるかを少しく述べて見やう。

五、自動車とアルコール

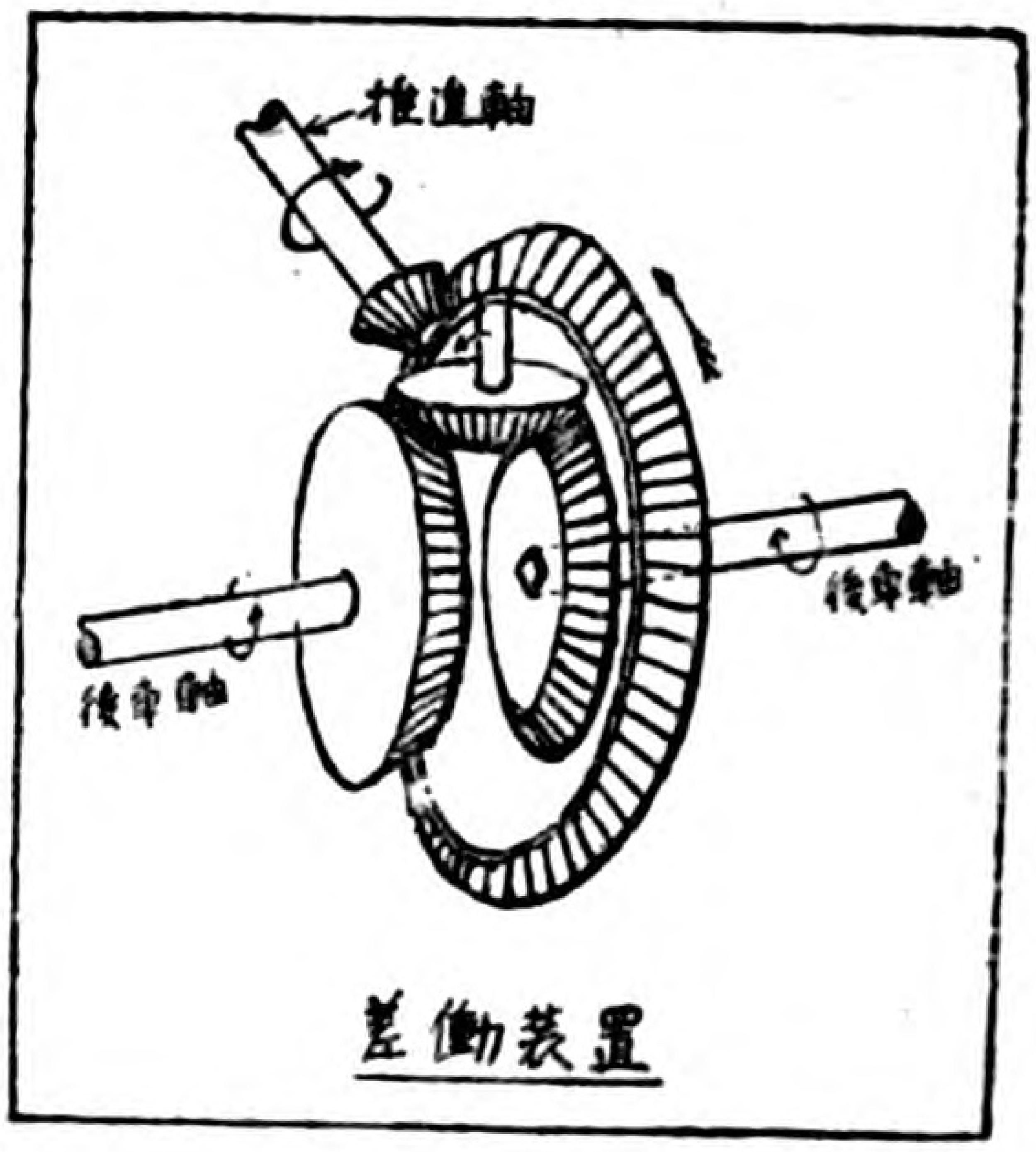
ガソリンに代る最も有力な代用燃料はアルコールである。アルコールは今日主として臺灣から排物として供される糖蜜を原料として居るのであるが、其他芋、玉蜀黍等から容易に作れる。殊に滿洲の高粱を原料にすれば年々歳々栽培する事が出來るから先づ原料としては無盡藏と言へる。今日の日本のアルコール製造能力は一ケ年四千萬ガロンと言ふ事だから恰度自動車の消費量を滿たす事が出來る。高粱を原料とする場合のアルコール採取量は約八パーセント、原價一罐二圓十錢（百ガロンに就て）と言ふ事だから決して高價ではない。扨て此のアルコールを今日の自動車に直ちに使用出來ないかと云ふに實際出來る。夏期から秋の半ば頃迄はそのまゝで使用出來る。少し面倒な裝置を施すと、零下二十七度迄は實際運轉した例がある。只もつと容易に、そして充分に動力を發揮せしむる爲めに今日世界各國で暗々裡に研究が行はれて居るのである。アルコール機關は壓縮比を高くし得て效率が良く同じ大きさの氣筩でガソリンより二割内外動力を増大すると云ふ特點を有するが唯アルコールの最大の缺點は空氣と混合して氣筩内に吸入する時の氣化が困難な爲めに發動機の始動が難しい



(3)

事、速度の順應性が鈍い事等であつて研究の主要點は大體此處に集注せられて居る。衛生上から見るとガソリンよりも遙かに煤煙が少く從つて有毒な一酸化炭素瓦斯の發生が少いが只現在の變性劑を含んだものでは排氣瓦斯は涙腺を刺戟し易いが之れが對策は容易であらう。

(4)

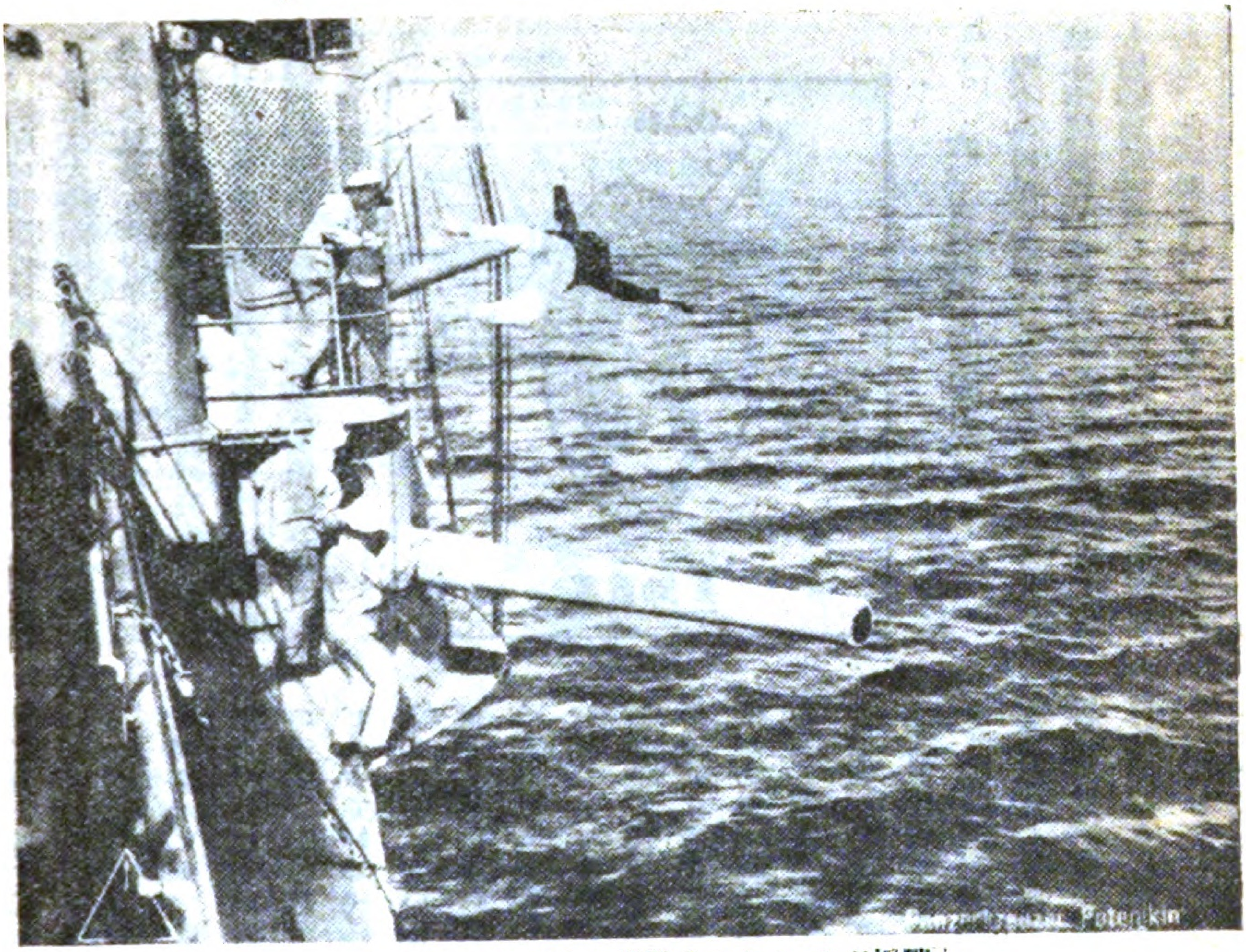


差働装置

六、自動車と蓄電池

現今の科學文明に最も要求されて居るものは小型輕量にして大容量且つ高電壓を以て最も短時間に充電し得る强力な蓄電池の發明である。此の蓄電池が完成せられた曉には自動車飛行機は勿論およそ原動力を必要とするものに對し確かに一エポツクを劃するに違ひない。現在の化學作用を應用した二次電池を用ひた電氣自動車は尙ほ幾多の缺點を有してゐて到底ガソリン自動車の敵でない。その二三を擧げれば充電に要する時間が長く且つ一回の充電で四〇乃至六〇哩しか走れず、此のスピード愛好時代にスタートの出足が鈍くて速力が遲く、惡い道路では振動の爲め蓄電池が破損し易い等の大障害があつて、おいそれと合理化は六ケ敷い。電氣自動車の合理的なのは明らかであるが、上記の新原理に基づける蓄電池が出現しない限り到底今日の自動車への追從は覺束ない。大阪でも最近一、二の實例があり、尙ほ大規模の計畫をも樹てられてゐると聞く。私は夫れ等が導火となつて、右の蓄電池の出現するを祈つて止まない。

其他の代用燃料の見地から高速度輕ディーゼル發動機、木炭瓦斯自動車等も一方から餘程實際化して此燃料問題の救策に努められて居る。近い將來恁うした自動車が確保されなければ我々は幾等安い賃金でも安閑として、あの柔いクツションにフンゾリ返る氣にはなれない。科學は進む、自動車は何處迄行く？



―戦艦「ポチョムキン」・監督エイゼンシュテイン

ロシア映畫監督論

袋一平

一、大人の映畫作者

「プウシュキンはとにかく幸せ者ぢやないかね、え、君、名聲の絶頂で夭折してさ。今日でも、かうやつて若い連中から敬意を表されて居るんだからなア……」

大監督レフ・クレショフは、かう私を顧みて、もう一度顔を上げた。途端に月の光が殆んど眞正面に落ちて、大きく結んだ唇の下に、心なしか、かすかな痙攣が走るのが見えた。モスクワの初夏の月が、恰度、プウシュキンの銅像の肩の所に掛つてゐたのである。トウェルスカヤ・プリワールに散歩の人が出盛る刻限で、長い冬から一足飛びに夏になる謂はゞ解放のよろこび、若い一組のオープン・エヤのよろこび、といつたやうな空氣が、そこにたゞよつて居つたのである。

「私はこの國に――いや、この連中に……」と、私達がさういふ群集の中にまぎれ込んだ時に、クレショフは、周圍を手で指しながら言つた。「この連中に、もう用がないのかも知れない。だが、私は、」聲が、こゝで、高く、熱にうるんだやうな調子になつて、「私は、この國を見棄

てはしない、いや、自分の藝術を意味なく葬ることは、私には出來ないのだ！」

惡いことには、それは、クレショフが、藝術映畫から文化映畫への轉向を聲明したその日の夜だつたことである。この感傷的な五月の夜が、自分が種子を蒔き、培ひ育てたソヴェート藝術映畫から別れ去らうとする四十二歳の彼に、半分の哀愁と半分の憤懣とを與えたことは、無理ではない。彼の聲を耳にし、背面に月光を浴びたプウシュキンの銅像をふりかへり、若い群集に目をやりながら、何か、私の胸を衝き上げるものがあつた。

「われひとり立つ」、さう言つて孤獨を誇つて居る偉大な映畫藝術家にチャーリ・チャプリンがある。だが、彼は「われひとり立」ち得るだけの地位財產を持つて居るばかりでなく、全世界觀衆の大きな支持をも持つて居る。その名聲を買はれてアメリカに渡り、「ウーマン」以下數々の名畫を生んで當時の映畫界に君臨してゐたフランスの監督モーリス・トゥールヌールは、いつしか時流に殘された自分を見出し、再擧の決心を抱いて故國に歸つたが、そこで、たしか昨年末日本でも封切られた空中劇「白銀の翼」を製作し、完全に彼自身既に過去の映畫作者であることを天下に語つて終に映畫戰線から沒落し去つた。



「掟に從つて」の一場面・監督レフ・クレショフ

わがクレショフはほんたうに孤獨である。無論、チャプリンではない。クレショフは今觀衆の支持を失ひつゝあるかに見える。しかし、斷じて過去の映畫作者ではない。無論、トゥールヌールではない。どんな人か。

一言で盡せば、彼は今日のソヴェートの大人の映畫作者なのである。若し、ソヴェート映畫の尖端に立つて居る監督のうち、ヴェルトフを永遠の子供と見、プドオフキン、エイゼンシュテイン、ドフジェンコ、「フ・クス」の人々、ロオム、エルムレル等を青年と見るとすれば、クレショフは正しく、偉大な大人である。しかも、十月革命生え拔きの生粹のソヴェートつ子である。この人の目から見て、今日の若いソヴェート映畫作者の仕事が如何にも危つかしく、從つて、單なるおせつかいではなしに自分の藝術を主張しつゝ、彼等を常に叱咤して居ることは、血の多い、熱情の大人で彼があることを語つて充分である。そこに、若しさう言へるならば、彼の性格の一つの悲劇が胚胎する。

二、個人製作と協同製作

「あの頃は……」と、よく世間の大人は過去を顧る。クレショフも、よく「あの頃は……」

と考へ、その考へがよく彼を寂しくさせる。けれど、彼の「あの頃」は、世間並の大人のそれとは全く違ふ。

その頃、――革命前の一九一三、四年頃から革命を通じて今日まで、同じ藝術に精進して來たクレショフの同僚で、矢張り名監督の名を馳せてゐた人に、イワン・ペレスチアニがあり、ヤ・プロタザーノフがある。一九二〇年代の初期、ペレスチアニは「赤色小惡魔」をプロタザノフは「アエリタ」の大作を送つて、革命的映畫の先頭を切り、その後に若い監督達が續いたのであつた。今、この二人はどうしてゐるだらう。ペレスチアニは「公女シルヴァンスカヤの罪」「蛇の舌」「人の噂」等の作品の後、アルメニヤ國立映畫製作所で音畫「アヌウシ」をこしらえて居り、プロタザーノフは「三百萬圓事件」「第四十一番」「ドン・ディエゴとペラゲヤ」アンドレエフ原作「縣知事」の映畫化「白鷺」チエホフの三つの短篇の映畫化「身分と人」等を經て、このほど「聖イオルゲン祭」をモスクワのメジラブポムフィリム社で完成した。

彼等の名聲を知らぬ人はない。だが、彼等の作品を期待する人もまたないのである。彼等は自分一人でコツ／＼と自分の作品を彫り上げて來た「巨匠」であつた。その頃の革命的手法が今古錆びたとしても、それを甦らす信念を只自分の内部に呼び起すより外はない。期せずして二人の巨匠は、默々と、古い型の映畫に沈んで行つたのである。クレショフは、しかし「あの頃」を呼び起す信念を外に向つて叫ぶ權利を持つて居る。彼はたゞの巨匠ではなかつた。彼は最初に「協同仕事」によつて「ソヴェート映畫藝術」を創造した人であつた。

彼の映畫學校で彼が自ら養成した若者達と協同して、最初の仕事に乘出した日は實に一九二〇年五月一日であつた。白軍の包圍攻擊に遇つてソヴェート聯邦が生死の境にさまよつてゐた、あの内亂のたゞ中だつたので資金が無く、機械がなく一般の支援も無かつたことはまだ忍べるとしても、忍び難いことは映畫が革命前の古い方法以外のものを何も持つてゐなかつたことだつた。



「母」・主演バラノフスカヤ・監督プドフオキン

クレショフのコレクチヴ（協同隊）はそこで次のやうな課題に直面した――

一、演劇の俳優の拒否、從つて自分の、映畫的俳優の發見。

二、未知の　何か新らしい映畫俳優の技術を打樹てること。

三、新らしい映畫勞働者の仕事に就て。

四、モンタアジュの新研究。

五、新らしい方法、即ち映畫語創設による映畫製作への道の發見。

早く言へば映畫に於ける技術革命を遂げなければならなかつたのである。このコレクチ

ヴは、革命當時の名優達、マクシモフ、ルニチ、ホロードナ、リセンコ、モジウヒン等のおもかげを一掃して、單なるモデル（俳優とは呼ばずに）の最も單純な運動に基いて、最初の藝術映畫、アシェーエフの小說を主題とする「ボリシェヰキ國內に於るミスター・ウェストの冒險」を製作した。この映畫で、フィルム斷片結合の方法が、その空間的形態即ち、モデルの單純な運動に從つて、發見され、應用されたのであつて、こゝに始めてかういふフィルム斷片結合の方法を「モンタアジュ」と正式に呼ぶことになつたのである。

次の作品「死の光線」で、大衆場面の組織的撮影と、勞働大衆自らが主人公となつて革命映畫に登場すること、——この三つの主要問題を解決し、第三回作品、ジャック・ロンドン原作の「掟に從つて」に至つて、このコレクチヴの赫々たる勝利が打ち樹てられた。模範的なモンタアジュ、モデルの模範的演技、最も力強い表現的な筋、之等によつてなされた最初の藝術映畫として、それはソヴェート映畫の上に重大な意義を與えたのであつた。

三、高架索の秋

この偉業が、同時に、クレショフの悲劇の發端となつたといふことは、止むを得ないとは言へ、また奇しき廻り合せとや申すべきであらう。

早く言へば、映畫「掟に從つて」の成功が一つの轉機となつて、こゝに切角彼が碎心鏤骨の苦心で仕上げて來たコレクチヴが瓦解の運命に逢著したのである。直接の原因としてはコレクチヴの各分子がそれぞれ獨立して仕事をなし得るといふ力を自分に感じ始めたこと、それから、「掟に從つて」の完成までの長い難苦の道にみなが疲れてしまつたこと——の二つを數えることが出來やう。どんなに難苦であつたか。例へば、「死の光線」から「掟に從つて」の間には、殆んど二ケ年、何事もなし得ない無援の月日が流れて居るし、また「掟に從つて」の後、休息を欲し、結婚し、或は海外に去つたりして、映畫界から姿を消した人も一人や二人ではなかつた。この邊の事情は、ソヴェート映畫史上で最も重要な且興味深い、同時に創始時代の血みどろなページを展開するものであるが、それに今茲いて居る餘裕がない。たゞ、近頃のソヴェート映畫研究家が、最近の事情の表面ばかりを見て、その本質に觸れ得ないことをこゝで少しく反省して貰へればいゝ。



「古きものと新しきもの」監督エイゼンシュテイン

その時の氣持をクレショフはかう語つて居る。

「その瞬間から、藝術家としての私の力、

しかに弱められ始めたのだ。何故かつて言へば、ソヴェート藝術家といふものは、協同なしで、自分一人で仕事をすることは出來ないし、またしてもならないものだからだ。それや、私一人でも正しく働くことは出來る。だが、貴重なものを製作することは不可能なのだ。もうコレクチヴはない――コレクチヴは分散しちやつたんだ！……」

ほんたうの孤立無援の道が始まつた。分散したコレクチヴの各分子のうち、暫らくの休息の後再び映畫界に返り咲いて、例へば、監督として今日嘖々の名聲を馳せて居るプドオフキンや、オボレンスキイや、乃至は俳優としてエス・コマーロフやヴェ・フォーゲリ（この人は此程天才を惜しまれつゝ夭折したが）等が、順風に乘つて獨立の道に頭をもたげ始めて居るのを、寂しく眺めながら、彼等の恩師クレショフは、ゴスキノ所長の無理解によつて歪められた不本意の作品「婦人記者」一本を殘して、遠く高架索の山々を越え、グルジヤ共和國に落ちて行くのであつた。

一九二七年の春が首都チフリスの空を明るく彩り始めた。その秋は十月革命十周年記念祭がソヴエート聯邦全體に亘つて營まれる。ゴスキンプロム・グルウジイ（グルジヤ共和國々立映畫製作所）はこの記念祭に捧げる大革命映畫「機關車ベ第一〇〇〇號」の製作着手に活氣づいた。クレショフもまた活氣づいた。無論この映畫の監督に任命されたのである。しかも、以前のコレクチヴの分子のうちに若干の人々が風を望んで再び彼の麾下に馳せ參じた。「彼等の數はほんの四五人に過ぎなかつた、しかも私は百萬の味方を得たやうな氣がした……」と、クレショフは述懐して居る。

クレショフはそこで全力を擧げてこの映畫の完成にいそしんだ。殆んど大半の撮影が終つた。十月革命の一斷面がソヴェート大觀衆の歡呼に應えるべくそこに組立てられて來たのである。然るに何事ぞ、それから間もなくクレショフの姿はチフリス撮影所から消え、映畫は未完成のまゝ闇から闇へ葬り去られた。豫算に對する所長の異議と、何處にもよくある例の生え拔きの撮影所員の嫉視反感、――そんな下らないものが、この大監督を追ひ出してしまつたのであつた。そしてクレショフは、モスクワに歸つて、「機關車ベ第一〇〇〇號」と同じ意企の下になされた革命記念エイゼンシテインの「十月」や、自分の弟子だつたプドオフキンの「聖ペテルブールグの終焉」やが、現實に於てソヴェート大觀衆の歡呼に迎えられて居るのを、今は佗しく眺めるより外はなかつた。

メジラブポムフィリム社がクレショフを迎えた。彼はそこで、地下室の革命運動を描く「陽氣なカナリヤ」を作り、一九三〇年には曲藝團の人生を取扱つた「二人のブウリデイ」を世に送つた。彼は之等の映畫でソヴェート映畫に生れ育つた獨特な技術の前進の道を與えたけれど、多くの專門家を擁する中央レペルトゥアール委員會が彼の功績を認めただけであつた。換言すれば、一般觀衆からのよき應答が報はれなかつたのである。

四、何を爲すべきか

――今日、何を爲すべきであるか？

ひとり離れて、騒がしいソヴェート映畫界を達觀して、孤獨の窓から投げつけられる巨人ヴェルトフの言葉は、しかし何人も故なくこれを聞き流すことは出來ない。

ソヴェート映畫の創始期に當つて、先づ問題となつたのは、何を寫すべきか、といふことではなく、「如何に寫すべきか」といふことであつた。映畫の形態の問題がそこにあつた。されば、ベレスチアニの「赤色小惡魔」、エイゼンシュテインの「同盟罷工」と「戰艦ポチエムキン」、プドオフキンの「母」などが、第一級のソヴェート映畫として現はれ、一般觀衆に最も近い眞の革命映畫の名譽をほしいまゝにした。之等の映畫の成功は正にソヴェート映畫のエポックを劃した。だが、それがソヴェート映畫を袋街に追込む機緣となつた、と言つたならば、頗ろ奇異に聞えるだらう。奇異に聞えやうとも、事實はどうも曲げるわけにはいかぬ。事實、之等の映畫で仕遂げられた方法が、その後益々多くの大監督達によつて踏襲されて居ることを筆者は親しく見て來たのである。

ソヴェート大監督と謂はれる人々とその近作とを瞥見してみやう。――プドオフキンと「チンギス・カンの後裔」、エイゼンシュテインと「十月」乃至「古きものと新らしきもの（全線）」、エフ・エルムレルと「帝國の破片」、フェクスの人々（異端俳優工場、コヅィンツェフ及びトラウベルグの二人の若年監督を中心とする尖端派）と「新ワキロン」、ア・ロオムと「歸らざるまぼろし」、新らしく出でゝ忽ちに既成監督を顏色なからしめたウクライナの至寶アドフジェンコと「兵器庫」乃至「地上」等。



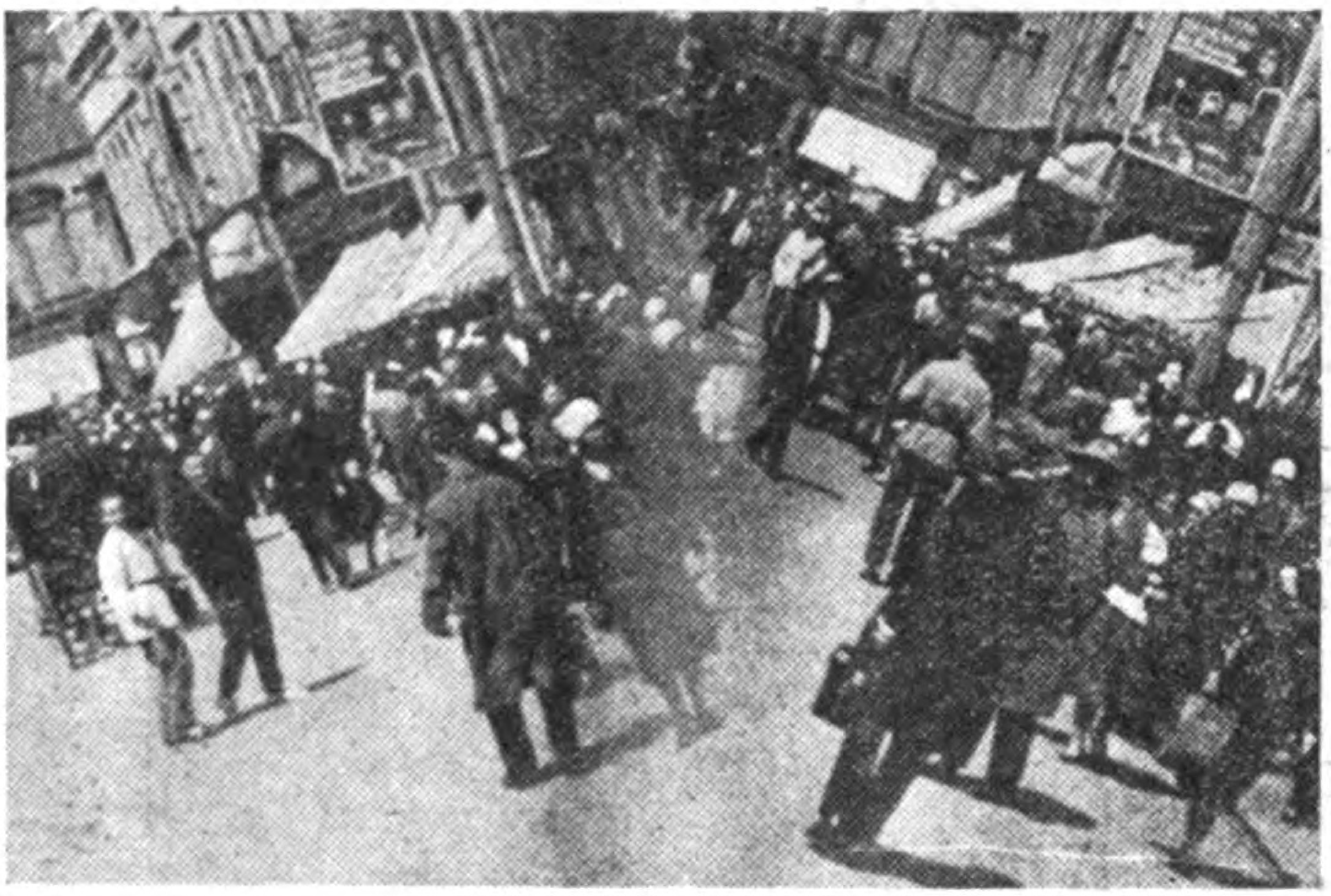
エス・エイゼンシュテイン

之等の映畫が、嘗に示した「母」や、「戰艦ポチエムキン」等の方法に從つて、そとして表象的印象主義的モンタアヂの方法によつて、所謂「智的映畫」として現れて居ることは、殆んど疑ひない所である。中でも「古きものと新らしきもの」の如き、それがソヴェート映畫の完璧を示すものであり、同時にそのイデオロギイ的內容にも拘らず、新らしいプロレタリヤ映畫としては現れてゐない、といふ奇觀を呈して居る。それは恐らくこの映畫が餘りに天才的であり、美學的でありレアリスチックではなしに詩的な方法でなされ、從つて、切角捧げられた勞農大衆によく理解されないがためであらう。

一般に、プドオフキン、ドフジェンコ、エイゼンシュテイン等の今日の大監督に略々共通して居る傾向は、彼等自身が屢々語つて居るやうに、何が畫面に於てなされるか、といふことではなく、何が畫面の後ろでなされ

即ち畫面後の概念によつて何を意味づけて居るか、といふことを示さうと努力して居る點にある。かういふ智的、或は詩的モンタアジュは、言ふまでもなく、ソヴェート映畫を世界最大の藝術とさせた根本の要因ではあるけれども、同時にそれは、極く洗練された觀衆を必要とするばかりでなく、時に純形式主義（フォルマリズム）に落ち込む危險なしとは言はれぬ。問題は、既に「如何に爲すべきか」より「何を爲すべきか」に移り、更に「何のために藝術作品を作るべきか」に進んで來たのである。

さらば今日、何を爲すべきであるか、——とクレショフは叫ぶのである。正に新らしいプロレタリヤ映畫を作るの時ではないか。そのことや平凡、だが、あらゆる新聞雜誌を通じて一般社會が常にこのことを訴えて居る事實は、それが常に平凡な眞理であることを語つて居る。よき映畫とは如何なるものであるか。一、主題内容及び形態に於て、正しく一定の觀客に對して作られたるもの。二、主題、内容及び形態に於て、何のために、如何なる政治的効果のために、といふ正しい配置をとつた、一定の目的に對して作られたるもの——。


「映畫機械を持つ人」・監督ヴェルトフ

「今日の大監督連は仲々の天才だよ、だが、またひどい無學なんだ」。——アルバート廣場まで歩いて、私がそこのソフキノ第一映畫劇場でもう一度ソヴェート音畫をみるために、別れを告げた時に、クレショフは追馳けるやうにかう言つた。「私だけは、自分の經驗からたつた一人ぼつちではなく、相互ひに責任を持ち、支持し合ふ人々と共に、新しい映畫を更に創造する必要を痛感して居るのだ。いや、私はどんなことがあつたつて、この素晴しい仕事の末席から身を退かうなどとは夢にも思つてはゐないよ……」

五、子供の映畫作者

「あれが葬送行進曲で始つて居るのは至極同感だね。ロオム先生も仲々味をやるさ。」かう言つて、監督ジガ・ヴェルトフは茶目らしくクックックッと笑つた。血色の好い顏に鼻筋がツンと通つて、身のこなしが駄々ッ子のやうに輕快で、一口で言へば、ブドオフキンの快活と熱情を小粒にして、一寸山椒を利かしたやうた男である。

革命期から内亂時代を通じて、記錄映畫にのみ働き、あの有名な「映畫眼（キノグラーフ）」團の總師として「リズムのモンタアジュ」を發見し、應用し、單にソヴェート映畫にばかりでなく、世界

の映畫にあの大きな影響を與えた偉人、ヴ・ルトフ、「レーニンの映畫眞」、「行け、ソヴェート」「世界の第六大洲」、「第十一年」、最近には「映畫機械を持つ人」等の名記錄映畫を生み今はドンバッスの石炭工業の心臟を掴み取らうとして、音畫「ドンバッス交響樂」を製作中の、ソヴェート映畫の三主流のうち、その一流の陣頭に立つ監督ヴェルトフ、——日本の撮影所などで餘りに「偉い」監督や俳優を見つけて居つた私は、この世界的映畫作者の無雜作で安直な樣子に、一寸度膽を拔かれた形であつた。その上葬送行進曲云々の變な言葉を聞かされて、何の事やら譯が分らず、ぶざまな恰好でたゞ彼の次の言葉を待つた。

「ホラ、あれさ、君見たらう？　あのロオムの音畫『大事業計畫』のことなんだよ。ひどい奴さ……」

漸やく分つた。

前にも一寸引合に出した通り、ロオムは鍬



ジガ・ヴェルトフ

そたるツユーヅキノの大監督であつて、しかも最初にソヴェート音畫を組立てた人である。技師ショオリンの發明裝置で、之等の映畫天才達によつて作られた全く獨自のソヴェート音畫がどんなに素晴しいものであるかは別に述べるが、そのロオムの最初の音畫「大事業計畫」は、例の五年計畫を主題としたもので、劇ではなく、すべて記錄的映畫から組立てられ、その中にはステパノワ女史の名作「ギガント」（協同農業の實寫）からばかりでなく、

ヴ・ルトフ」の「世界の第六大洲」、「[illegible]」の映畫眞」及び「第十一年」からも、多くの名場面の斷片が適宜取入れられ、それが非常に巧みな効果を上げて居るのである。

ヴェルトフには、しかし、それが氣に入らないのであつた。彼は徹頭徹尾如何なる「演技」映畫なも排斥して來た人だし、映畫に於ける如何なる「こしらえもの（人爲）」をも絶對に許容しない人である。彼の映畫は悉く「事實の工場」、純粹に「あるがまゝの人生」から成立つて居る。彼はそれな音畫の領域にまでも持つて來てそこに如何なる人造音——擬音音樂等——もあつてはならぬと主張する。然るにロオムは、「演技」映畫一方の大將であるばかりでなく、音畫に關しては、如何なる「記錄的音響（ほんもの、音）」も絶對に撮影不可能であることを表明し、この「大事業計畫」に於て音樂による効果を最大限に示して、現に筆者の如きも、その物凄い立派な表現法に痛く

感激させられたほどである。

　かういふ正反對な立場に立つヴェルトフが初め、ロオムが自分のフィルムを利用することに對して大反對を稱えたことは無理ではなかつた。けれどソヴェート映畫組織は、モスクワのソユージキノに悉くのネガチヴを保存し、それを國家に役立てるためには、いつどういふ風に利用しても差支えない規定にたつて居る。止むを得ないことだつた。

「……僕は最つ先きに『五年計畫』を見に行つたんだがね。驚いたよ『第十一年』の奴が今にも屠し殺されさうになつて、もがいて居るぢやないか。いや、全くさういふ感じがしたんだ。そこだよ、あの音畫が葬送行進曲で初められてる、つてことに僕が同感したのは。」

「大事業計畫」は、レーニン葬儀の感動的場面から初まるのである。あんなにレーニンを畏敬して居るヴェルトフが、その場面をさえ自分の憤懣の皮肉な捌け口として持ち出す、といふ所に、私は彼の「永遠の子供」を見ることが出來た。私は思はずそこで愉快な笑ひにはいつてしまつたのである。

　ヴェルトフの近作「映畫機械を持つ人」はその點で、最もヴェルトフらしい記錄映畫である。テクニクに於ける大きな完成、人生の研究された表現、映畫藝術に特異な魅力等、そこには多くの興味深い課題が窺えるが、しかも一番目につくことは、彼が前數作で示して來たあの頑固な片よつた傾向から、少しも成長してゐない、といふことである。この映畫では、生活が、都市の生活が、運動と變化との急流をなして飛び過ぎそこに生活の、急速度のメカニズムが眺められる。もの〻譬だが、諸君に一つ思ひ出して頂き度い――映畫若かりし頃、かういふメカニズムを、何と映畫作者が馬や人間の運動によつて示すことに突進したか。しかも尙ほ未だその社會的行動を、その深い眞の力學を、解剖して見せることが出來ないのである。

　天才ヴェルトフが、卽ち、ソヴェート映畫の「藝術家・赤ちやん」乃至は「藝術家・少年」として止つて居るわけである。

　さて、大分長くなつたので、最後に、時節柄、音畫に對するヴェルトフの意見の大要を御紹介して、一先づ引下ること〻しやう――

　記錄映畫に於ける音聲の役目に關する問題に就て、ヴェルトフはかく答へて居る。

　見る瞬間と聞く瞬間との不一致性の必要に關する意見（プドオフキン、フェクスの人々、エイゼンシュテイン、ロオム等ソヴェート大監督述の意見で、アメリカ、ドイツその他一般のトーキー論の反對）は、單に音響映畫だけ或は單に會話映畫だけを必要とする意見と同樣に正しくない。

　記錄音畫によつても、また演技音畫にとつても、見る瞬間と聞く瞬間との一致性、或は不一致性は、どつちでもい〻問題だ。

　音畫の各場面は、無音映畫に於けると同樣に、同樣な條件で編輯され、モンタアジュ的に相つながれ得、お互ひにあらゆる必要な分量に於て混合され得る。

　會話映畫、音響映畫といふやうな下らない區別は投棄てねばならぬ。音畫に於ては無音映畫に於けると同樣に、たゞ二つのカテゴリイだけを嚴重に區別せねばならぬ。卽ち、記錄的音畫（ほんもの〻會話、音響等による）及び演技的音畫（特に撮影用として用意された人造の會話、音響等による）。

　我々の「映畫眼」は、必然に、「ラヂオ眼」に移行したのである。

　大監督・青年の映畫作者に就ては、いづれ次の機會でお話しいたしませう。

新聞記者ユモレスク

日暮一夫

ピエロが世の中で一番の悲劇役者であるならば、新聞記者はピエロである。ピエロが意識しない善人であるならば、新聞記者は善人である。プロレタリア・イデオロギイのなかにはピエロは存在しないが、新聞記者はおしなべて貧乏人である。スマートは、仕立卸しの洋服、氣の利いたネクタイを締めて、キッドの靴がキユウ！　キユウ！　と微妙な音樂を奏でてゐても、玄關で脱いで上つた靴下が大きな眼玉を開いてゐたら、彼氏は正しく新聞記者である。そこでこの物語りは先づ靴下から始まる。

凡そ世の中に、新聞記者を蛇蝎の如く嫌ふ人種がある。なかでも殊に嫌ひなので有名なのは、故寺内伯、生きてゐるところでは山本權兵衛、文士では永井荷風に水上瀧太郎など代表的である、その水上瀧太郎が『大阪の宿』と云ふ醉拂ひの有閑ブルジョアの、大阪に於ける愚劣な生活を書いたなかに、日頃の新聞記者嫌ひの一端を見せて、一日彼を訪問した一新聞記者が、靴下に大穴を開けてゐた無作法を痛烈に罵つてゐる。不幸にも罵られた男は、その男の屬する大阪の大新聞の夕刊の小說欄にしかも水上瀧太郎が執筆してコッピドクやつつけられたのである。その男は所謂三面記者（今時三面なんてものは大阪では經濟記事の面で、そんな名稱は當らないが）つまり、社會部記者であつた。しかも、彼は新聞記者のなかでは、際立つておしやれで、金廻りの好い方の男で、身なりなども好い方だつたが、彼の絹の靴下が大阪一の○澤洋品店、ロンドン屋で買つた品物であるに拘らず、たき[illegible]に、[illegible]とも[illegible]たいで！る。別に新聞記者に足でもさうさ、靴下が破けに破れると云ふわけ合ひのものではないのだが、一日に何回となく他人の玄關で靴を脫ぐ新聞記者にうつかりするとそんな目に遭ひ易いのである。

◇

乃木大將が臺灣總督の時だつた。神戸西村旅館に訪問した、當時月給八圓の記者があつた。後ちにはその社の幹部になつた男だが、當時は獨身だつたが、酒と女は嫌ひな方だが煙草が好きで卷煙草に月給の大半を費してゐたT記者。折惡しく雨で、當時流行つた原色の然かも赤の縞のある靴下が、靴の底から水が滲んで、眞赤に染まつてゐたのを知らずに座敷に通された絹の座布團に、ぺつたり座つてインタービユウをやつた。

氣嫌好く語つた乃木大將は、話の途中でかしこまつて座つてゐる新聞記者が、膝と膝との中央に怪しからぬもの、覗いてゐるのを

見して『オイ、君、大砲が出ちよるぞ』と指した。物に動じないT記者も、これには流石に面喰つて、つく〴〵と巡査の古ヅボンを買つて穿いてゐた不幸を知つて後悔した。質素好きの乃木大將の氣嫌は却つて、そのために好くなつて談話はタップリ取れたが、聞いてゐる方は顔を眞赤にしてそこ〳〵にして辭した。恐縮し乍ら、腰を屈めて退出すると、絹の座布團が、濡れた靴下の赤い色に染められポタ〳〵と足型が描かれて居た。

『ホイ、座布團に繪まで描き居つた』と乃木大將が苦笑した。數ケ月の後ち、當時その社の社長原敬が、乃木大將から『もつと、あの記者に月給をやつたらどうだ』と云はれたお陰で當時破格の五圓昇給したとは、今は故人になつたがその記者の自慢話の一つでもあつた。だが今時は恁んなうれしい話は存在しない。

◇

新聞に片假名の文字が多いと批難する投書がよく來る。ウルトラモダン、エロ百パーセント、モガ、モボ、などと海の彼方の言葉や有名な著書かなにかの表題や、雜文家の洒落れ文句やが流行つて來ると、最先に新聞記者が好んで用ひる。絕えず簡潔で、清新な文字を求めてゐる新聞記者は、映畫人の流行語、女學生の流行語なども手取早く輸入する。それを、時とすると耳から耳へ受取つたまゝでやつつけるので、飛んでもない御愛嬌がある。彼等だつて、大學位は出てゐるんだから、左程無學呼ばはりされる譯はないのだが、時となると飛んでもないのが、うつかり活字になる。

或る海岸記者（海の旅客の歸朝談を專門に取る記者）の記事の『事務長、パーサー氏は語つて曰く、……』などはその昔しほんとうにあつた記事である。

『一行は、ベンチに打ち乘り、サンドウヰッチの盃を擧げたり』なんてのも往年の笑話の一つとして殘つてゐる。

震災後に突然生れた、モラトリアムなうつかりモラトリウムとリノリウムの語尾と混同して校正係りもつい氣付かずに過したなどもあり相な話だ。

或る新聞では、我等のテナーが、藤原義江孃と、フエミニン、チエンダーになつて一ト活字で眼をむき、取り返しのつかぬ笑話を殘したのもある。

昔は新聞に『ありたり記者』と云ふのがあつた。何でも結末を、ありたりと結ぶからである。因に……と云ふのも今では影を潜めたが、右に就き語ると云ふのはまだ現存してゐる。古い新聞を繰つてゐると得難い名文句に遭遇する。殊に記者が得意で、好い氣持で書いたらうと思はれるのは、一種の林言葉である。代表的なのを一つ、

『ジヤン〳〵鐘が鳴る、火事は何處かと出て見れば、煙も見えず、雲もなし、見えぬ筈だよ、府下豐多摩郡――』

火事と聞いて緊張するのは今も昔も變りはないが、毛筆を持つて卷紙に原稿を書いた、往年の達筆で、戯作者風の面影を傳へてゐた、往年の編輯記者の風格を偲ぶ嬉しい記事である。

『此奴仲々の曲者にて、容易に實を吐かず』なんてのは近頃の社會面の記事には見られなくなつたが、刑事部屋に出入する記者が、[illegible]染つてゐると、つい刑事と同じやうな心理に支配されて來るのも面白い。どうかすると

[illegible]記事に[illegible]ところであつた。或る水上署時代の記者が、「深夜、ランチ一艘を窃取逃走せり」と平然とやつてのけたのがある。須彌山を抱えて渤海を渡る――と云ふ支那の名文を彷彿せしめるものがある。

運動記事も近頃では、運動の種類が殖えたので、簡明になつて、大阪の新聞では特に小さな活字を用ひてギッシリ詰めてゐるので餘裕がなくなつたが、もとは仲々名文があつた。

「白く、柔らかき乙女の繊手に、弄ばれて、圓ろきものはそのふくよかなる胸を時々として戯れ……」など、うつかり讀んでゐると藻木じやないかと思ふのがあつたが、これはバレーボールの光景である。

鐵棍高く秋空に響けば、飛球空に舞ひ……などは野球勃興時代の名文である

飛行機の搖籃時代、徳川大尉のファルマン機が東京で飛んだ時の記事に曰く

「殘月淡く天にあり、悠々として場を飛ぶ妙技は、造化の妙に非ずんば鬼神の技、見るもの羽化登仙の思ひあり」

滿蒙問題などで陸軍大臣と云ふのと新聞記者とが一問一答をやる。

記者「貴方は××から金を受取られたと云ふことですが……」

大臣『そんなことはない、俺は知らんよ』

その記事では、新聞記者はたとへ對手が被告人であつても敬語を使つてゐるが、對手は飽くまで見下した言葉使ひがそのまゝに掲つてゐる。新聞記者は個人としては白面の青年だが、たとへ對手が一國の宰相であらうと、その屬するところの新聞社を代表して、面會する時は、對手を呑んでかゝるだけの度胸が必要だ。だが殘念乍ら驅け出しの間だと、一寸おど〳〵するのが人情だ。歸りがけに小使室へ立ち寄つて、爺さんに水を一パイ貰ふ。

『どうだい、大臣は會つたかね』

『えゝ、會つて呉れましたよ。』水をゴクンと飲み干して『どうも有難う御座いました』と叮嚀に帽子を脫いで歸る。そして彼は堪らない自分の謙遜な言葉に愉悅を感じる。

大臣も宰相も、俺には一視同仁――だと。

[illegible]な時代の自由な誕生である。

警察官や醫者に對しては、新聞記者は『先生』と呼ぶと云ふ[illegible]の手數が早い。その代り新聞記者は、[illegible]と、代議士や役人と飲む御座敷でのみ、藝妓から『先生』と呼ばれて尻を擽ぐつたくする。

金儲の案内狀を慫はせて、モーニングなどを着込み自動車で乘りつけた宴會の歸りに、おでん屋で立喰ひをやつて、始めてホッと我に返る心持ちも、堪らない野人らしい愉悅である。

或る若い記者が、財部海相を車中に訪れた。名刺を見た海相『おはん、鹿兒島じやの』と親し氣に云つた。若い記者は自分が生れたのは成程鹿兒島である事を始めて思ひ出すと同時に、彼が郷黨を愛する同郷の先輩であることを刹那に感じて、『そうで御ワス』と返答した。財部海相の顏は急に和かになつたので、しめたと思つて『時に閣下、齋藤さんは到來諸に……』とすかさず切り込むと、大先輩は『そげんこつ、聞くもんじやなか！』と一喝

してサッサと車室へ消え去つた。由來その男は同郷の先輩には、極力「他國人（よそもの）」の顏をすることにした。

◇

報知機で日獨親善歐亞聯絡飛行をやつて、日出度く代々木練兵場に到着した吉原飛行士を迎へた朝野の名士のなかに、南極探險の男士、往年の白瀨中尉の老軀が人目を惹いた。この白瀨中尉が二十數年前に、もう少しのところで死ぬところだつた。と云ふよりは殺されかゝつた。

某新聞社の外勤記者が、社の歸りに一パイ飮んで歸ると、自宅に至急報が屆いてゐた。『シラセチユウイ・ナンキヨクタンケンチユウシノホウアリ』とある。時計は最終版の〆切時間に迫つてゐることを示してゐた。

白瀨中尉、南極探險中死の報ありでは大變だと、雪の夜を仙臺市に俥を走せたM記者、固く戸を閉ざして寢てゐる白瀨家の留守宅をたゝいて、夫人に會つた。

深夜、新聞記者から、北國にある夫の死を聞かされて、夫人は流石に取り亂すところなく、感想を語つた。健氣な夫人の談話は、電話で本社へ通じられた。それを受取つた聯絡部の記者、

『何、白瀨中尉が死んだ、おい妙だぞ、一寸待つた。』引込んだ聯絡記者が電話口に改めて出て怒鳴つた。

『白瀨中尉、南極探險中止の報ありと打つたのだよ』

數年前のこと、大阪山口銀行の行員東條吉と云ふ青年が、行金數萬圓の大穴を明けた。警察へ青年が引かれたことを知つて、深夜その細君を訪問して談話をとつた。犯人の細君は小さな子供と二人で郊外の家に淋しく夫の歸宅の遲いのを案じてゐた。新聞記者の訪問が何か夫に思ひ設けぬ罪の疑ひがあると聞いて、彼女は仰天した。訪問したK記者は、『とても氣の毒だつた』と呟し乍ら、彼女の語つた夫の日常生活の樣子を書いた。夜更けの活動で終電を失つてK記者は一同と共に當直室に寢た。すると早曉、『若い女の親子情死』を郊外の通報員から知らせて來た。思はず一同がギク！と來た。殊にK記者の頭には、昨夜訪問した細君の住所とその場所とを考へ合はせて妙な豫感があつた。果して親子は、前晩の人であることが第二報で知れた。ニュースバリユウは倍加した。

『K君、君の特種だ、行つてくれ給へ。』部長の命だ。彼は死ぬやうな思ひで遊々出懸けた。せめての罪ほろぼしと彼は、同情に滿ちた文章で親子の死を報じた。歸つて來てションボリ涙ぐんでゐる彼は、更にその葬式の涙のスケッチを要求された。親子の遺骸のある家へ、家には親族知己が集つてゐた。名刺を出すと純朴な受付の人は、叮嚀に座敷へ通した。しめやかな座敷には、昨夜涙で會つた彼女と愛兒の遺骸が柩となつてゐる。その前に座らされて彼は、どうして好いか判らなかつた。心から燒香して彼は逃げるやうに歸つて來た。その翌日彼は丸坊主に頭を剃つて、僅かに心を慰めてゐた。

◇

淡路の沖で七〇號潜水艦が沈んだ。四十數名の海兵も一緒に海底に消えた。各社の記者が特派された。一番先に到着した某社のN記者艀船を傭つて、沈沒現場へ驅けつける、折

[illegible]ゆられ[illegible]

[illegible]記者はふら／＼になつてゐた。[illegible]の船もゆれてゐる。そのなかで[illegible]驅逐艇を發見して、彼は船頭にその驅逐艇へ自分の艀船を横付けさせた。やつとのことで艇に近寄り、飛び移るが早いか、司令塔の上に總指揮らしい海軍將校を認めて驅け登らうとすると、こみ上げてくる胸のつかえで、彼は思はず、ダダ……と不覺にも汚物を吐き出した。

『こら！ 陛下の軍艦に對して、無禮だぞ、何者か貴様！』

司令塔の上から士官が怒鳴つた。

『し、し、しん、ぶん、キシヤ！』と苦しい顔を上げると、

『何、新聞記者。』と呟き乍ら顔と顔が出逢つた。

『おゝ、Nじやないか』

『××君』

艇長とN記者は中學時代の親友だつた。

◇

淋しく櫻の花の落ちるやうに洛北で死んだお花さん、[illegible]かつた[illegible]お花さん[illegible]、西園寺公が平和會議への[illegible]にもお伴したそのお花さんは、[illegible]の西園寺公よりも社會部としては、彼女の方が問題であつた。

だが、お花さんには新聞記者への警戒が嚴重だつた。秘書格の御曹子西園寺八郎氏が、一切の應對をして、手を換へ品を換への新聞記者のお花さんへのインタービユウは撃退された。

『君等は、何と思つてる、お花は女中だ、その女中風情をつかまへて何を騒ぐのだ』と一喝されて、一同はほう／＼の態で引下つた。

神戸オリエンタルホテルの一室に引込んで出て來ないし、警戒は嚴重だし、流石に各社もこれには手の出しやうがなかつた。今は重役になつてゐる當時某社の支局長が一策を案じた。

若い獨身の記者の肩をたゝいた。

『君に、婦人記者一名を借すから、これで二人揃つてホテルの晩餐を仲好くやつて來給へ』と十圓紙幣を二枚手渡した。

[illegible]た。西[illegible]問[illegible]に、他い一般の客と[illegible]に食卓を持つてゐた。若い記者と婦人記者と何氣なく泊り客の如く裝つて、折好く空いたお花さんの卓の隣りに席を占めた。お花さんと看護婦はスープをすゝり、途にアスパラガスをしやぶつた。コーヒーの出る頃、婦人記者が、無遠慮に話しかけた。お花さんは婦人記者のわざとトンチンカンの矢繼早やに持ちかける話に、驚くと同時に噴き出した。で一言一言、何か云つたが、ハッと新聞記者の奇計と知つて食堂を逃げ出した。

お花さんと語る

と翌朝の朝刊がデカ／＼と[illegible]た。二人の男女記者は、ホテルで自腹の晩餐を喰つたのはその時が始めてだつた。

◇

（張番のつとめは悲し、[illegible]

記者とはなりて――。

疑獄事件が起る度に、社會部記者は老練も駈け出しも、一様に狩り出されて刑務所の塀外に張番をやらされる。入口と云ふ入口を四方八方に塞いで、名士の出るのをにらんでゐるのである。自動車を家にして、社から毛布を数枚貰つて、寒夜を戸外に交代で居眠りをやることもある。セミヨノフ將軍が日本に亡命した時には、今は左翼文壇の花形、片岡鐵兵などもこの張り番勤めをやつて、チラチラ雪の降る夜をあの弱い身體で立ち盡したこともあつた。肝心の目射さす名士？の出入のない夜がある。その時は事件だけが進行して記事は豐富でも、寫眞がない、とう〳〵窮して一同の張り番の寫眞を撮つて掲載した新聞があつた、そのなかに外套の襟を立てゝ、佇んでゐる哀れな青年の姿を發見して、せつかく進行中だつた縁談が破談となつた實話もある。

○新聞の記者となりて六ケ月、近頃少し氣のかろきかな――

この時代には一寸愉快でもある。月賦の洋服の味など知らず、親爺から作つて貰つたのを着て、ステッキついて、口笛を吹き乍ら銀座を歩いたりする。

○訪問をする記者となり、年を經ぬ、名士の顔はみな狐色――

『いよ〳〵御榮轉ですか』

『冗談云つちや困る、そんなことは初耳だ、又新聞辭令だらう』

嘘は新聞が書くのでない、世間が嘘を書かすのである。

○足で書け足で書け、足で書け、月賦の靴のみじめなるかも――

新聞記者は足が第一だと先輩は敎へる。人力車から自動車に變つたので近頃の外勤記者は餘程樂にはなつた。

○新聞は嘘ばかり書くと云ひし人、嘘をたねばかり出す人なりし――

『君は、あの事を新聞記者にしやべつたんじやないかね、困るね、君のやうにそうべらべらほんとうのことを話して了つては……』

○三面の記事を書くとて、あざけりしひとびとどもの先づ三面を見る――

『おやコレラが又流行つて來たぞ、おや〳〵說敎强盜が捕つたら、又第二世が現はれたよ戸締りをしつかりするんだよ』

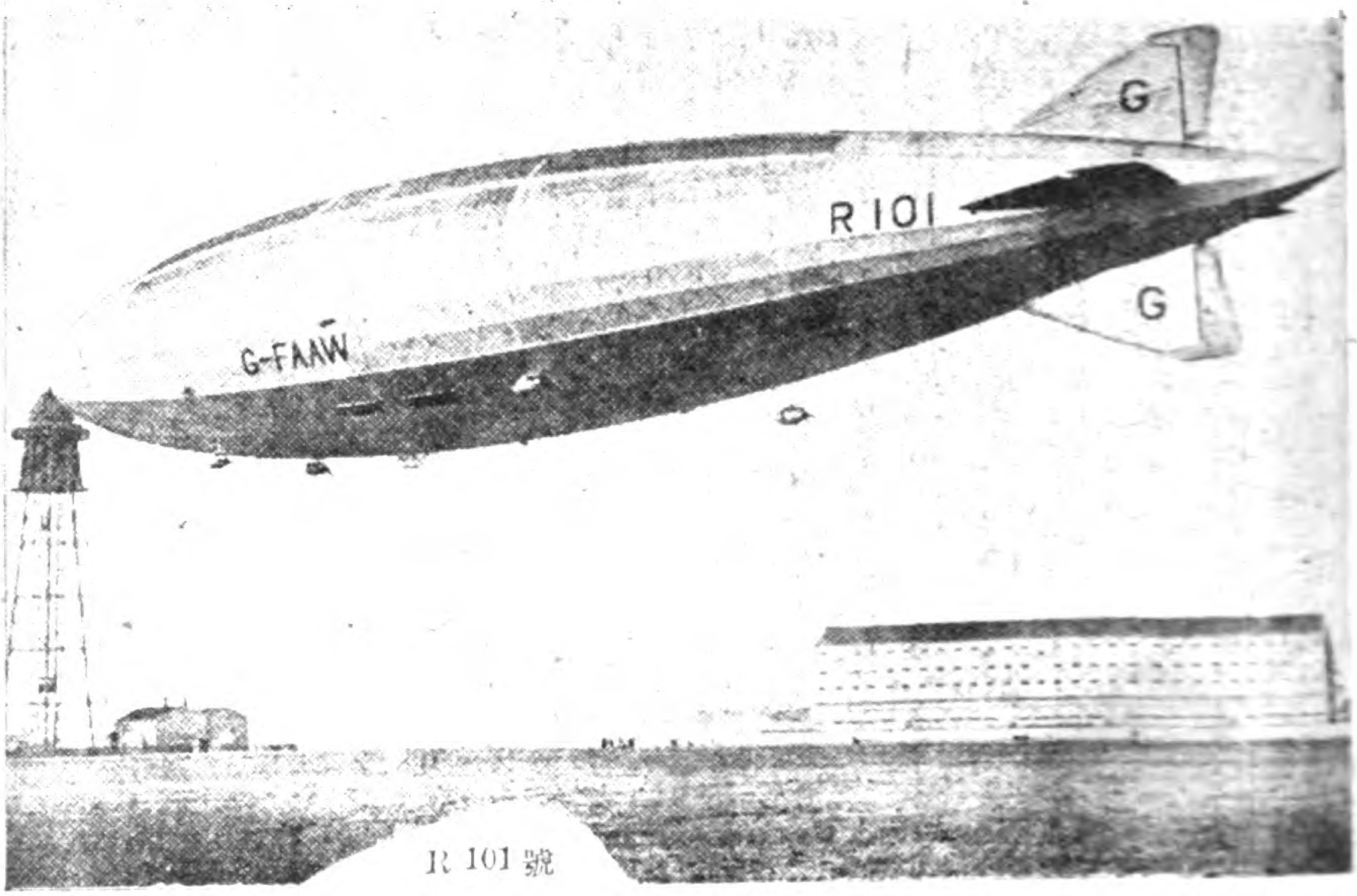
○何も蚊も、記者にしあればロハなりと、思ふ人の多き世のあさましさ――

『貴方がたは好いですね、羨ましい商賣だ、芝居は只だし、汽車だつて、でしやう』

冗談云つては困る、代議士ぢやあるまいし、三宅周太郎と云ふ有名な劇評家が、一々入場券を買つては、殆ど毎日の芝居を見て歩くのは有名な話だ。

○燒き芋の包紙となりはてし我が筆の跡つくづくと見る。

見て終へば、用をなさないところに新聞の新聞たる使命があるとは云へ、自分の天晴れ名文が、包紙になり、一貫目二十錢で、るいばくの憂目を見て、秤にかけられて賣られたりするのは餘り有難いものぢやない、殊に、それが落し紙となつて、臭いところへほうり込まれるに到つてはほんとうに涙が出て來る。



R 101號

明日の商業航空

佐藤喜一郎

1 大洋定期航空路の開設

君は西廻りにし給へ、僕は東廻りで行くから、そして一週間目にロンドンのトロカデロで會はう、なんて言ふ會話が銀座街頭で交はされるのも近いことであらう。かういふ會話を生むに至つたそもそもの根源は、ツエッペリンの世界一周である。ツエッペリンが自轉車程の危つかしさもなく、ドラモンド・ヘイをさへ乘せて、そしてそのドラモンド・ヘイをして『日本の新聞記者ツて、あんなに蒼い顔をして、何て臆病なんでせう。』と言はしめつつ、僅か二十一日間で世界を一周りした、それが今に至つて見れば、飛行船による世界定期航空路開設の氣運を、初めて、しつかりと促進したのである。

そのツエッペリン伯號より大型のR100號とR101號を有つ英國は、世界一周の瀨踏みとして先づ近いうちに大西洋の定期航空路を開設

しやうとしてゐる。船によつて海を制した英國が、今度は飛行船で空を我手に納めるべく、R100の大西洋横斷後、英國政府の發表したところによると、右の二大飛行船を以て、英國カーチントン―加奈陀モントリオール―紐育間に定期航空輸送を開始し、經由地は（1）グリーンランド南端フエアウエル岬、（2）ニユーフアウンドランド、（3）アゾレス群島の三點に決定したといふ。

ツエッペリンの家元獨逸でも、政府がハムブルグ・アメリカライン郵船會社を糾合して大西洋橫斷飛行船輸送會社の設立を企圖し、日本人だつてヨーロッパへ行けば大ていは乘つて見ると言はれてゐる有名なルフト・ハンザ會社などを勸誘して北獨逸、紐育間六日乃至十日を要する汽船の代りに僅々二日で到着する空の輸送を計畫中である。御本尊のエッケナー博士はと言へば、博士は博士で世界一周完成以來獨・米兩國の有力者達を説き廻り、大西洋定期航空路の開設に大童になつてゐたが、この春伯林で『獨米航空輸送會社は近々創立の豫定で、同會社は獨逸と米國の間に飛行船による定期航空を營み、航空所要時間は氣象の關係上、往航（米國行）は三日、復航（獨逸行）は二日である。』と發表してゐる。

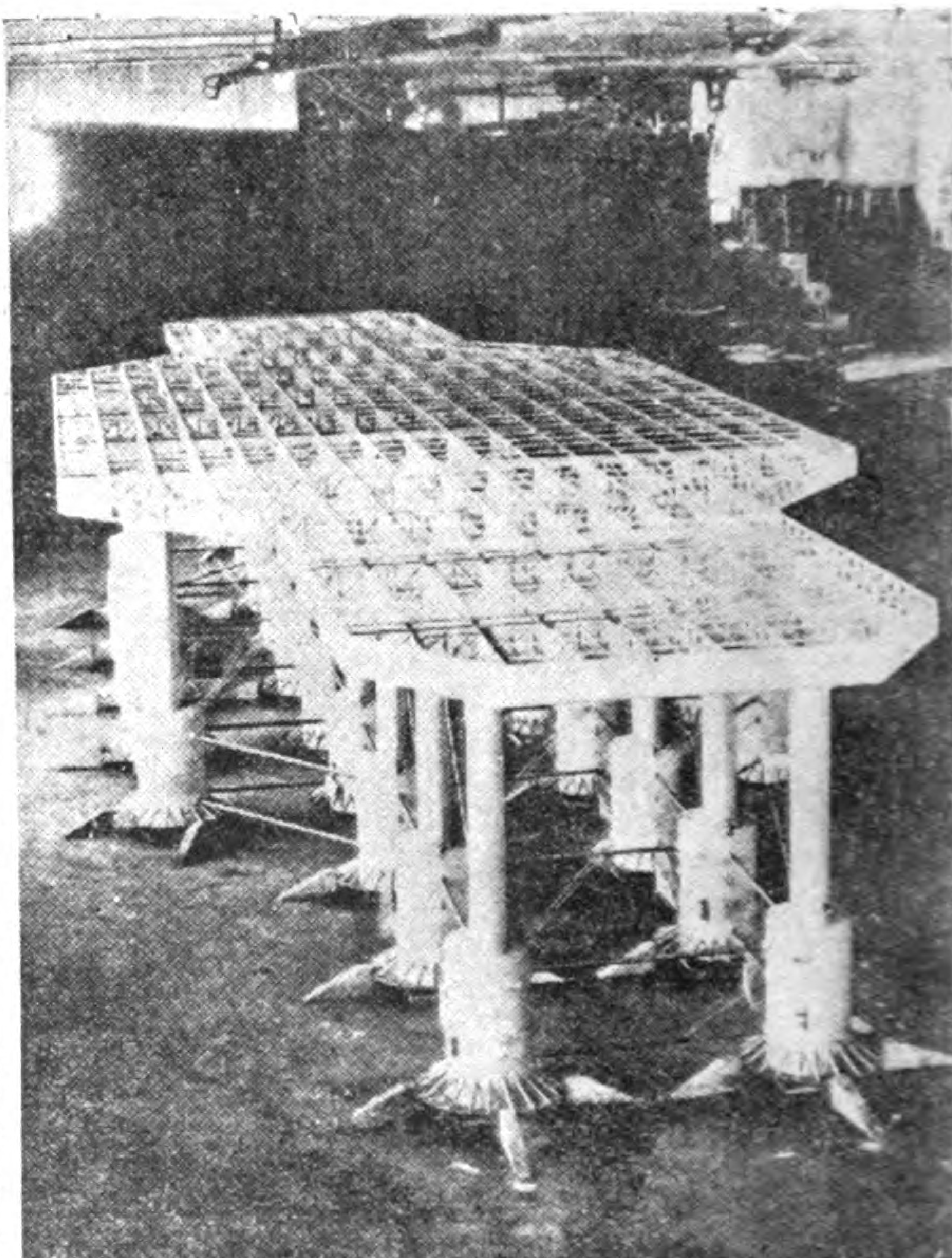
太平洋橫斷の定期航空路の計畫も可なり進捗してゐる。（資本金二千萬圓の、大飛行船二隻を建造するのと吹き捲つてゐる日本の計畫は、此の際、御想像に任せる。）昨秋、米國に設立された太平洋ツエッペリン輸送會社が、紐育グレーソン・マアフイ會社内で開いた創立重役會によると、同會社は米國西海岸加州、南部の地點（目下選定中）を起點とし、布哇經由比律賓マニラに至る定期航空路を一九三二年までに設定し、その翌年中に飛行を實施する豫定で、使用飛行船四隻は、米國海軍のZRS4號・5號や英國のR101よりも大型で、長さ八百呎、瓦斯容量六百五十萬立方呎、乘客八十名、郵便貨物十トンを搭載し得、一隻の建造費四百萬弗だといふ。これは前記の日本の幽靈會社と違ふから信用してもよろしい。

この計畫は、紐育ナショナル・シティ會社、レーマン兄弟商會、グッドエヤ・ツエッペリン會社及びグレーソン・マアフイ會社の共同出資で、飛行船完成次第、差當り毎週米國、布哇間の定期輸送を開始し、模様を見て比律賓へも路線を延長する豫定になつてゐる。

米國、布哇間の航空には往航一日半、復航二日を要し、又比律賓への航空には約一週間を要するが、途中グァム島に（定期寄港はしないが、不時着陸を考慮して）マストを建設する筈である。

ヂ・レーナン・マァフィ會社の役員で、太平洋ツェッペリン輪送會社の理事である海軍航空専門家G・O・マクドネル氏は、左の如く至極尤もなことを語つてゐる。

「太平洋ツェッペリン輪送會社は、四社共同で五十萬弗宛出資したものであるが、同會社は單に太平洋横斷定期航空路の設置に關し飛行船の建造、飛行場の選擇及びその建設等を考究した上、氣象觀測其他各種の準備的事務を遂行するのが目的で、政府から郵便輪送契約の指命を受ける爲の交渉はまだ整はない。しかし會社としては政府から財的援助を受けたい希望はもつてゐない。定期航空の開始は、飛行船の建造後直ちに着手するにしても、その完成は一九三二年だから、それ以後になる見込で、航空路完成の上は、會社は先づ第一に米國西岸より布哇に至る航



浮飛行場

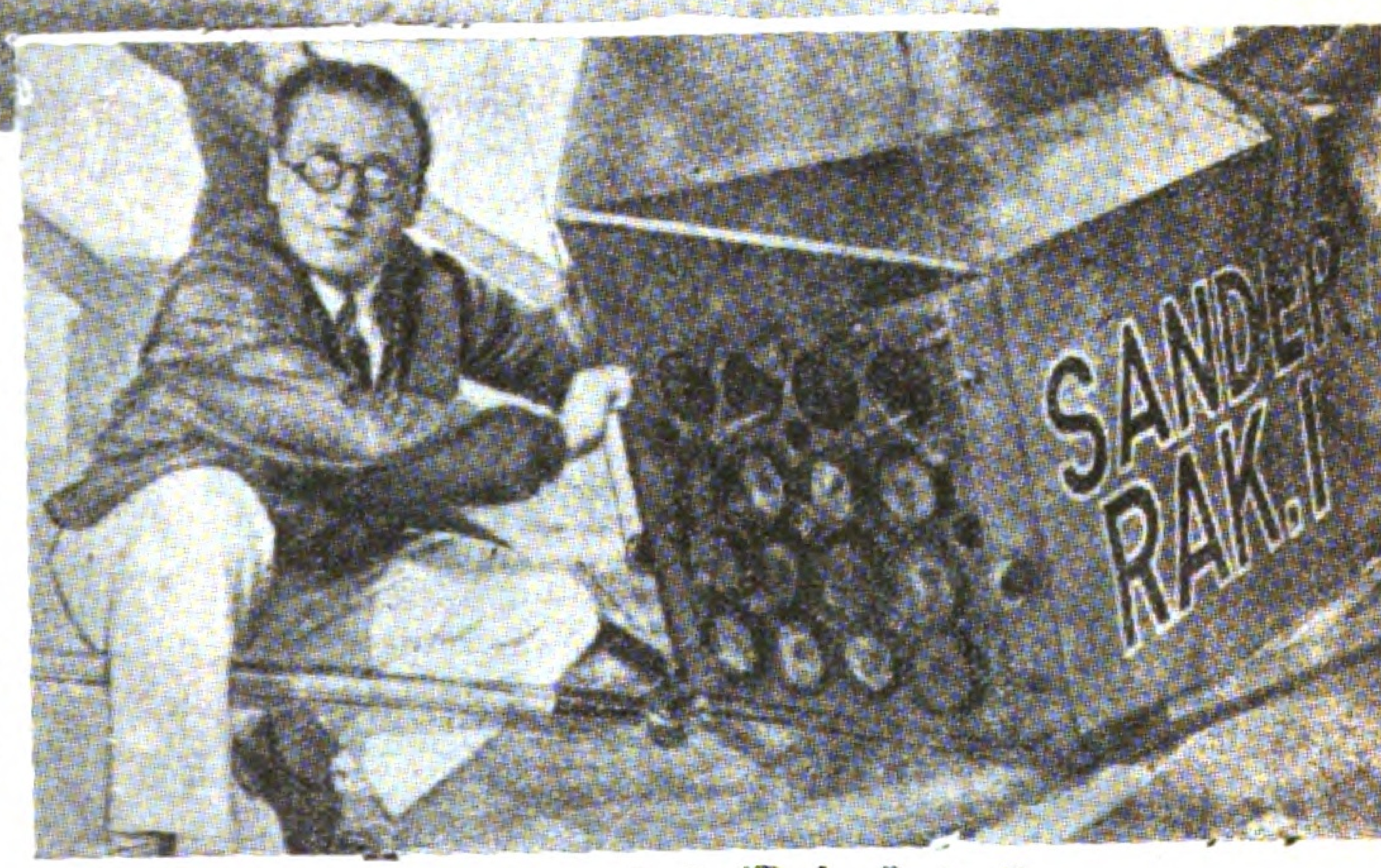
空路を開始し、冒險に堪え得るやうになつたらやがて之を延長する豫定になつてゐるが、米・布間は、風、天候等が穏であるに反し、布哇、比律賓間は非常に困難だから實現は容易でない。從つて本航空路による航空輪送に成功するかどうか、現在のところ不明である爲、日本への航空路についてはまだ考へてゐない。」

同會社の役員は、社長リッチフィールド外ダラー汽船副社長スタンレー・ダラー、ロサンゼルス汽船社長チャンドラー・マトソン、米市汽船ファーレー、合同飛行レントシュラー、桑港銀行家フライシュ・ハッカー、加州スタンダード・オイル社長キングスベリー氏等、海運、航空及び太平洋岸の財界巨頭を網羅し、汽船屋の頭株が乘り出したことが、當然とは言ひ條面白い。

　飛行船による世界一周航路は、大西洋も太平洋も大分有望でこの分なら全コースの設定も容易であるが、飛行機ではどうであらう。大陸の方は、たつた一人で羅府から飛んで來た東善作君がある程、といふより米大陸は全部、歐亞大陸はイルクックまで立派な航空路をもつてゐる程、開拓されてゐるが、大洋の方は却々左様簡單には行かない。『なぜ我我は今まで臆病だつたのか。』と、アン夫人を貰ふ前に見得を切つてしまつたリンデイの翔破以來、商業航空路の開設を目的として三度も逆に飛び越えたコストまで、大西洋の空は既に何人となく渡つてゐる。中に、空疎なヒロイズム以外に何の動機も持たぬ人がないとは言へぬにしても――。
　かうして、航空術から言つても、交通事業から言つても、兎に角劃期的な興味を帶びた大西洋の空の路が拓かれその定期輸送は算盤次第で明日にも實現を見やうとしてゐる。



オーペルの
ロッケト機



ロッケト機とオーペル

　ドックスを造つた獨逸が、大西洋の航空權を把握しやうと焦つてゐることは察するに難くないが、その最も代表的なものとして、アドレルスホーフのキエースナによる計畫を紹介する。その輪廓は、
『今日の技術は、二――三トンの有效積量と、三〇〇――四〇〇粁の時速を有つて北大西洋の嵐を飛ぶ輸送機を造れぬことはない。それには、
一、總重量約四〇トンの
二、翼荷重の大きな
三、着水可能の
四、割に大きな双胴の
五、厚翼單葉で、その翼内に客室を有し

[illegible]

一[illegible]く飛行機が考へられる。

北大西洋には、夏でも七——一〇米秒、冬なら一三——二〇米、冬の荒れ時には海面上で三五米、飛行高度で五〇米の風がすさぶのも稀ではない。こんな風の中では從來の飛行機ではとても進む事は出來るものではない。——二〇米の風でも非常な燃料を食ひ、大體その燃料を積むのが難しいし、普通の最も完備した飛行機でも低氣壓圏を迂回するのは、航路に比してその圏が一般に極めて大きなものだから。

將來の大洋航空輸送は、その運航回數が多かればこそ價値があり、といつてまた、充分な餘裕をもつ大タンクを備へることはとても出來ないから、速力を増すことだけが唯一の途であらねばならない。だが、その目的には從來の型を我々は放棄する外はない。

今、ある與へられた飛行機に新しく大きな發動機をつけるならば、成程速度は増さうけれども、假令發動機による餘分な力の分を除いても、一定航路については巨額の油を使ふから、經濟がこれを許さない。又、翼を小さくし、從つて翼の面積當りの荷重を増しても、荷の爲に與へられた胴體が抵抗の大部を占めてゐる關係上これまたあまり賴られない。

[illegible]

[illegible]したい飛行機——（[illegible]）[illegible]ユンカースによつて示されたやうに——一

そして、油の補給のための中間着陸場としてペンザレス（一番便利なアゾレスは海岸線が裂目だらけで大飛行場の設置には向かない。伯林——ペンザレス間一、三四〇粁）とセントジョンス（ペンザレス——セントジョンス間三、六〇〇粁、セントジョンス——紐育間一、八二〇粁）を擧げ、三角形の翼（平面圖で）の航空力學的計畫をプラントル流に理論的に説明し、更に不時着の確率について詳細に述べてゐる。

一方、太平洋の空は、米國のスミス等が世界一周の途中アリユーシヤンを飛石傳ひに渡つたのと、露國のシエスタコフがアツツ、ウナラスカの二着陸で横斷したのと、この二つの記録があるばかりで、ブロムリーがガソリンを排出して稍を枯らすことを止めない限りは、先づ無着陸横斷は望めない。

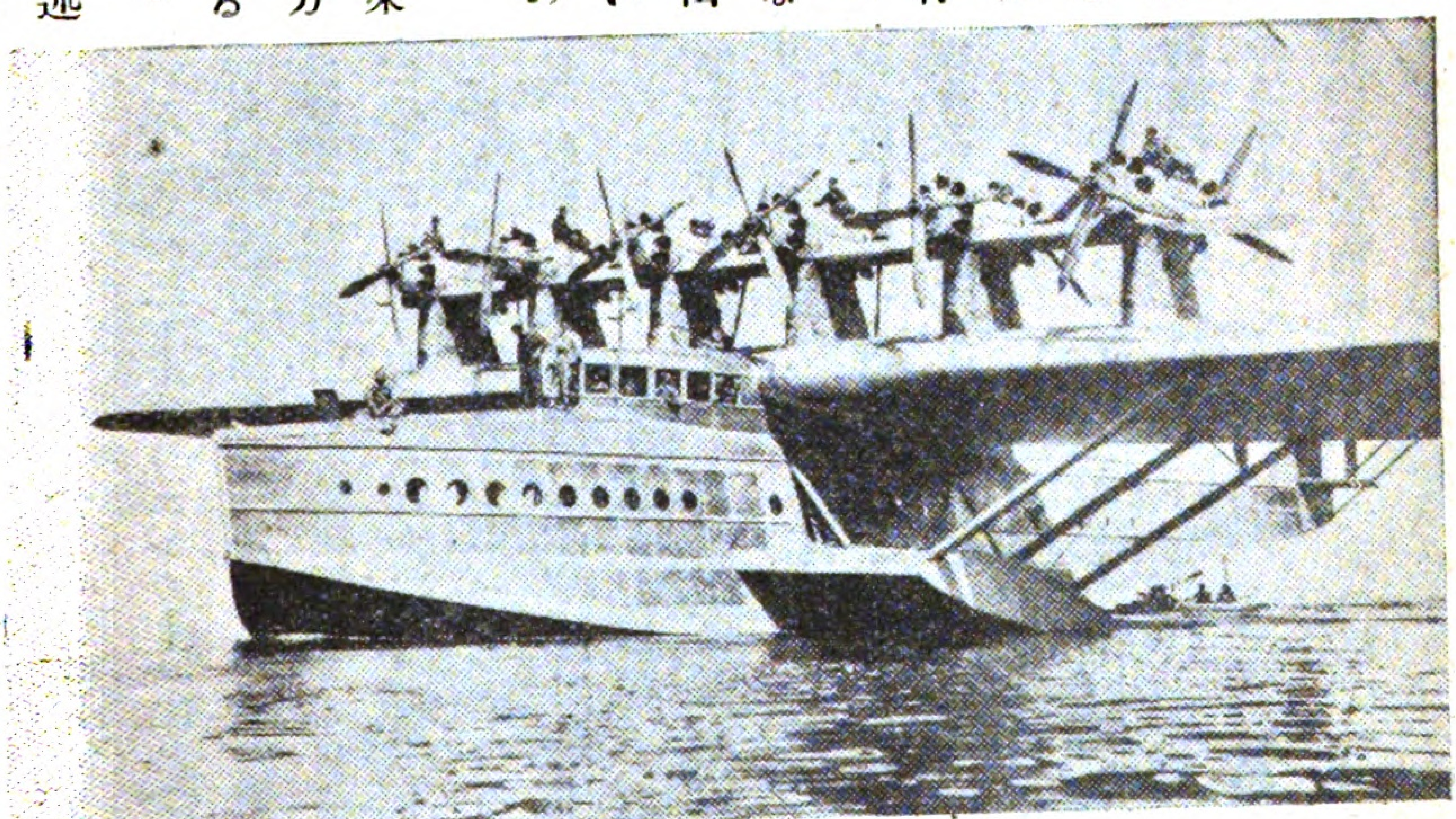
2 海の眞中に浮飛行場

大洋の眞中に、何か安全な庇護地を設けて飛石傳ひに横斷しやうとする企ては、ずつと以前から屢々試みられたが、リ[illegible]デイの成功からバードの三發動機附フオツカーの踏破に至つて漸

く話が具體化し、昨年アームストロング浮飛行場會社が米國に設立された。そのエドウォード・アームストロングの話。

——陸上の航路では大したことはないが、大洋の空中にはどんな妨害が網を張つてゐまいものでもない。今まで三、〇〇〇——六、〇〇〇粁位の無着の飛行は成功してゐるけれども、經濟的な一飛行路程といふものは大西洋や太平洋に較べると遙かに小さな四〇〇哩見當に過ぎない。油を多く積めば客を載せることが出來ないし、客を積めば少ししか飛べないやうな今の有樣では、是非とも大洋上の飛石が必要である。

抵抗力最小の地帶を攻めるのは、古來からの兵法である。それで、ある他の方面から大洋横斷商業航空の道を開拓するのは少くとも理論的には期待されやう。だが商業的の横斷飛行の最大難點は前述のやうに一飛行の經濟的路程の大小であるから、こゝに四〇〇哩づゝに島があるとすれば、その商業航空路の實現は簡單である。で、こゝに人工の島を作らうとするのである。——



ドックス號

アームストロングが、この方面の專門家を集めて大洋横斷航空路の研究をはじめたのは十五年前であつた。爾來熱心な研究實驗の結果この浮飛行場に達したので、船をステーションとし、大飛行艇から給油して貰ふことも考へられたが、洋上の嵐の日を思ふと自殺に等しい冒險だから止めたといふ。

で、この飛行場島だが、これはどんなに波が大きくとも大丈夫の高さのある滑走場を有つてゐるから陸上機を活かすことが出來る。

嵐の中の波の力は途方もなく大きい。その力がどの位あるものか實驗することは困難であるが、その軌道的運動を破るか、または互に干渉を起さなければ手のつけやうがない。浮飛行場は、だから、波の最も大きい所でも

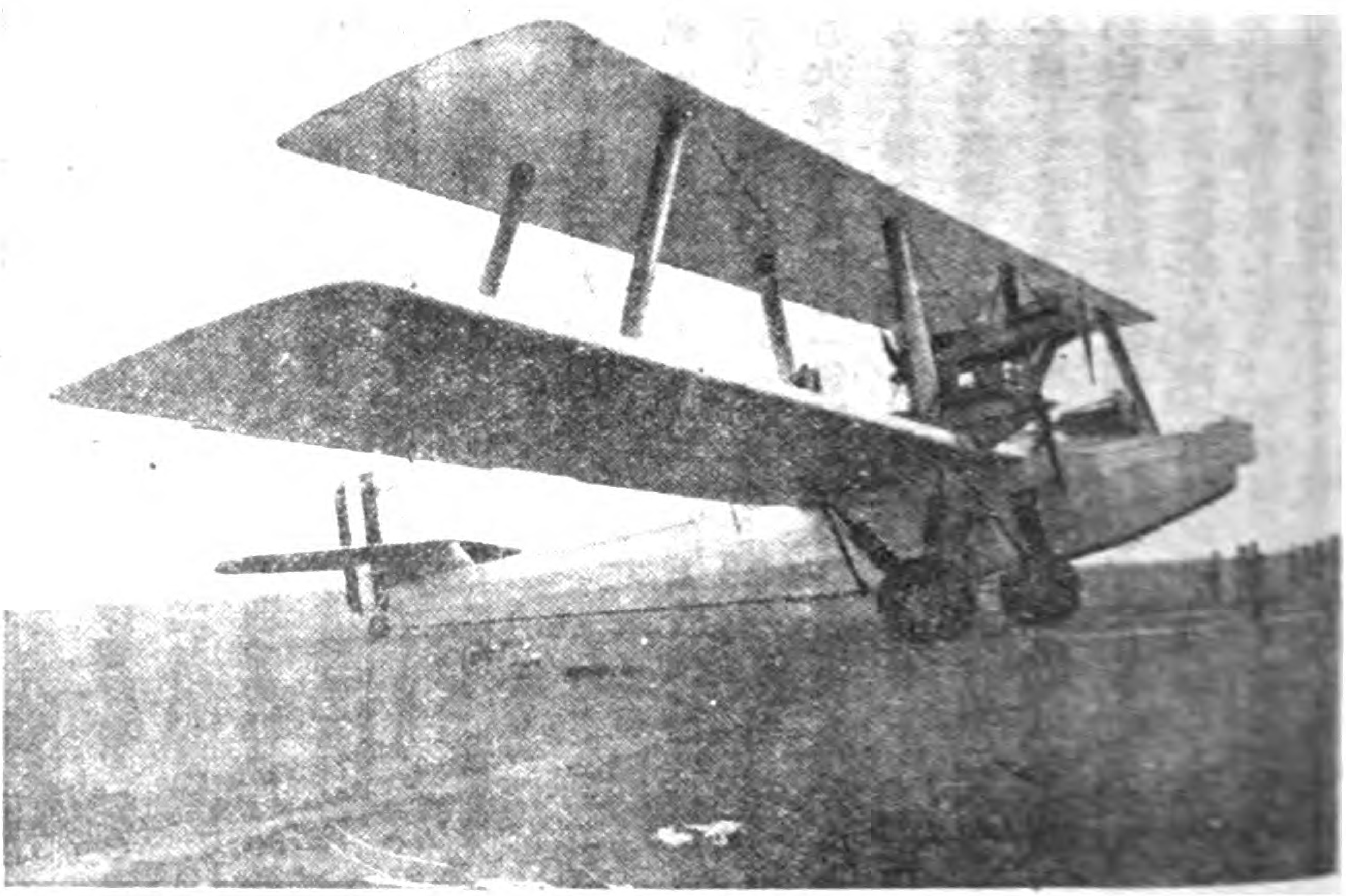
たゞ眞直ぐでなくて擴がつた大して深くない所に置かれねばならない。五〇呎位の深さでは、どんなひどい嵐の時でも靜かであること、又、陸上の普通の飛行場と違つて風向によつて向きを變へ得ることなどがその基礎になる。

波から充分に高いこの滑走場は、一方の端を繫留し風のまゝに他端を流し、他數の、波で破損されない柱で支へられ、その下に浮力を與へるタンクがあり、こゝは比較的波の影響を受けない深さに當つてゐる。その下に更に柱があり下の端にバラストタンクを備へて平衡を保ち、このバラストタンクはいろ〱の周期的運動を減衰させるために圓盤狀に作られる。

滑走場は中央の幅の廣い（四〇〇呎）、兩端の細い（二〇〇呎）長さ一、四〇〇呎の形で、普通では海面から八〇呎高い。浮力のタンクは各々排水量一、一〇〇トンで中は部分的にいろんなものが收めてある。ローリングやピッチングを殺すためのバラストタンクは淺いけれども大きな直徑（六〇呎）で、これを平に置いた眞中に集中された力が加はる。

飛行場の眞中の、幅の廣い所の兩側に格納庫や、乘員、お客に對する設備、ラヂオ、觀測所とか、そんなための建物がある。

色々の模型を作つてアームストロングが調べたところによると、長い實驗の結果、同じ割合の、同じ排水量の汽船に較べて



巨人機カプローニ90（六十四馬力）

波の衝撃は汽船の五パーセントしか受けず、ローリングもピッチングも遙かに少なく、五〇呎の高さの波と二百哩の速さの風(スケール・エフエクトの推論)では、汽船の模型は皆沈んだのに浮飛行場は平氣だつたといふ。

又、前に述べた柱は一〇〇呎づゝの間隔をおいて立つてゐるから、波はその間を危險な干渉を受けずに素通りするし、風や潮や波の合力も、飛行場の一端を支へる錨鎖で充分に支へられる。

今計畫中のものは、その模型を試験中であるが、三、五〇〇トンの排水量があり、その三分の一程がバラストになつてゐる。六、〇〇〇トンの鋼材と二、〇〇〇トンの鐵材が使はれる。鐵が如何に海水の腐蝕力に抗することが強いかは、六十年、八十年の老朽船が未だにサービス中のが少くないのでも知れる。

ジョン・レープリング會社でこの飛行場用の錨索を設計したが、この飛行場の實際設置される最初の場所の水深が三哩あるのを以て見ても隨分大きな索である。錨は一五トンの皿型で、三哩の深海では海底を六〇、〇〇〇トンの力で壓してゐる計算になる。

アームストロングの最初の浮飛行場「ラングレー」は、紐育とベルムダの中途に設けられる筈で、こゝで貨物の試験が行はれる。紐育、ベルムダ間の路程約六時間半、ラヂオ、サーチライト、ネオンランプ、イルミネーション等全部完備。

ところで、大西洋横斷線用には七つの浮飛行場が要る(約四〇〇哩毎に)。最初の例として郵便用か急行の飛行機が立てば、四つに降りるだけで間に合ふであらう。四つの浮飛行場を有する線では、一日に一方向へ五十人の旅客と三千五百封度の郵便物を扱ふ時は四百人の人員を要し、このサービスには一千萬弗の費用と一千五百萬弗の收入がある計算になつてゐる。

3　上空五萬呎の航空路

近い將來の航空路は、地上三萬呎以上の層雲帶に設定されるであらうと一部專門家は唱へてゐる。この高空飛行用として獨逸のある大會社では既に一氣壓を保つ客室のある旅客機を設計中であるとも傳へられてゐる。

高山などで經驗するやうに、高空では沸騰點が低くなり呼吸の困難を感じてくる。五千米位の上空では地上の半分程に減つた氣壓の中で酸素の缺乏に惱むといふ。そして著しく溫度は低下するが、一萬米位から反對に寒氣が緩み、むしろ仄かな暖かさに包まれ、嵐も風もなく、空は紺碧に澄み渡り、月のやうな太陽が絶えず頭上に輝いてゐると報告されてゐる。――これが

[illegible]

米國に於いて[illegible]シコルスキーは、スーパーチャージャー（發動機に供給する前に空氣をポムプで壓搾して出力低下を防ぐ裝置）をつけた發動機と、一氣壓に近い空室を有する新しい飛行機ならば、以上のやうな所謂高々度飛行に於て四百乃至五百哩の速力が出せるだらう。」と言つてゐる。

二十萬呎程の高さになると、空氣中の水素と酸素との割合が燃燒するのに適當で、スーパーチャージャーの豫壓と發動機の筒内でのピストンの壓縮によつて燃え、これから仕事を得ることが出來る。技師クラウコフスキーは語る。「もし飛行機がこれだけの高度で飛べるとすれば、空氣を燃料として三千哩の速度を出すことが出來やう。」と。

二十萬呎の高さを飛ぶなどは、しかし、流石に、近い將來の話ではない。來るべき高空飛行は成層帶の高度で、そこには飛行の強敵である雲も霧も惡氣流も何もなく、あるのは愛すべき追風だけである。

シユレーダー少佐は、輸送機の往來を待つてゐる高空の味についてかう語つてゐる。

『八哩も昇天すると、馬鹿に速力が出る。深海の底に較べると高空は殆ど知るところがなかつたが、昇つて見ると先づ神秘[illegible]

[illegible]、飛行には一番[illegible]化しないのがいゝ。[illegible]

今の飛行機は、スーパーチャージャーもプロペラもエンヂンも機體も、だん／＼高空飛行に適すやうに發達して來てゐるが、高空飛行を實現するには、密封したキヤビンを有つ飛行機が必要である。私は、陸軍にゐる時に、密封した飛行機に乘つたが、氣壓はスーパーチャージャーで地上と同じやうに出來た。四二五馬力の發動機は、一時間に四萬二千立方呎の空氣を要求するのに、人間は三百立方呎もあれば足りるから、旅客や乘員に地上同樣の呼吸をさせることは困難ではない。

高空飛行の使用機は、特殊の構造が要る。現在の機體、プロペラは少し長過ぎる。險惡な道中を昇りつめて高速力で飛ぶのだから、翼をもつと廣くし、可變節プロペラ、信頼に足るスーパーチャージャー等を用意しなければならない。スーパーチャージャーは、どんなに空氣が稀薄であつても、地上に劣らぬ空氣を供給してくれる。これは極めて大切なことで、二萬呎以上にも昇ると、空氣の濃度は地面の半分、八萬呎では二十五分の一に減る。だから、スーパーチャージャーがないと、機關は二萬呎で半分以上四萬五千呎では十分の一の力しか出せなくなる。

層雲帶の風についてはあまり知られてないが、食が非常な助けとなることは確である。三萬呎の上空では西風だけが吹いてゐて、今、羅府か桑港から紐育まで飛ぶとすれば、一時間に三百哩は充分出せるから、この大陸横斷に八時間しか掛らない。』

この風は、一萬五千呎から四萬五千呎の高空では西風、四萬五千呎から六萬呎までは東風、六萬呎から七萬五千呎まではまた西風、七萬五千呎から九萬呎まではまた東風が吹いてゐると專門家は告げてゐる。つまり四萬五千呎以上は、一萬五千呎毎に風の方向が逆になつてゐるので、これを利用すれば、東行きと西行きの輸送機は一層重寶な勘定になり、米國から歐洲へ向ふのは、一萬五千呎――四萬五千呎間を、歐洲から米國へ向ふのは四萬五千呎――六萬呎間を各々高度計によつて飛べば、丁度今日の高等飛行の領域以上が、旅客機の往來する坦々たる交通路に化すわけである。

此問題に關し、レニングラード交通學會のリーニン教授も亦研究中であるが、教授が實驗した原理は大要左の如くである。

『飛行機が層雲帶に達すると、大氣は酸素と水素が爆鳴瓦斯（水素二、酸素一）を發生するのに必要な混合比を提供してくれる。勿論非常に稀薄ではあるが、しかし、飛行機にスーパーチャージャーを裝備しておけば、出發の際携行した少量の燃料によつて始動され、その後は酸素と水素を大氣中から吸入し、必要な濃度に壓搾した上で發動機に燃料を與へる。スーパーチャージャーは發動機によつて運轉されるのである。かういふ設備を施せば、飛行機は層雲帶で無限に飛行をつゞけることが出來、しかも燃料は搭載する必要がない。層雲帶まで昇るためには、しかし、特別の裝置がなければいけない。例へば、カタパルト（飛行機射出機）とか反動機械とかロケット（火箭）とかで、これによつて飛行機が上昇出來さへすれば、濃厚な氣層に降下することなく地球を無限にまはり、時速も數千粁を出すであらう。』（現在の航空高度記錄は、本年米國のアポロ・スーセツクが作つた一三、一〇〇米）

4　ロケツトて月世界へ

ロケット（火箭）飛行機は、けふの航空の方式を根本から粉碎する。ライト以來の飛行を、空の時代の第一幕とすれば、ロケット機の出現は更に進んだ第二幕である。

昨年九月、獨逸のスポーツマンとして有名なフリッツ・フォン・オーペルは、フランクフルト飛行場に自製のロケット機を引出して百五十呎の高さに昇り、一分十五秒で一哩四分の一を美事に飛行した。この歷史的飛行の航空時間は、僅々一分餘りに過ぎなかつたが、ライトの發動機附飛行機が初めて十四秒を飛んだのに較べれば非常な成功である。

花火の爆發による反動を原理として[illegible]實現はないロケット機が實用化した曉には。世界の交通は一變することになるであらう。世界一周も高空飛行もロケットの冷笑を買ふのみで、彼自身は、遠く星と星との交遊、全宇宙の漫歩など冒險小說の筋書をそのまゝ易々と實演することになりはしまいか。天文學を究めんとして一生を研究室に送つた學者が今日までにどの位ゐるだらう。少しばかり遠距離をのぞく眼鏡の發明にすら、世界の學界は最高の賞讃を浴せてゐるではないか。

ロケット機が交通輸送機關として新裝を凝らして現れた場合、最早廣大な飛行場を必要としない。オーベルの實驗が證明してゐる如く、滑走などいふ非能率的な方式は、初期航空の嗤ふべき無駄として科學發達の小さな一過程の記錄に殘るであらう。ロケットは、長さ數米の短かい軌道トラックを出發場とし、ホテルやビルディングの屋根から、汽船の甲板から、ステーションのホームから、或は自動車からでさへ直ちに昇天出來る。そして着陸したい時には、火箭を制動機に應用して御意のまゝに停止される。

だが、ロケット機の實用化に際して第一に問題なのは、その動力であらう。オーベルは今のところ火藥を用ゐてゐるが、火藥は一時に强力な爆發をしてしまつて永續性がないばかりでなく携行する重量が大變である。さういふ火藥に代るに、今、オーベル[illegible]たとへば[illegible]が、これは微細な點火で燃燒し、おまけに燃燒に應じた[illegible]力を任意に調節出來る、安全混合瓦斯ロケットモーターともいふべきものである。これはロケットの實用化の道を開く鍵で、火藥によつて脅で驚かされた世界は、再びこの液體瓦斯に呆然とするかも知れない。

けれども、無暗に速い飛行機が出來たところで、そんな速さの飛行機は勿論そのまゝ使へはしない。人の身體の堪え得る速度が、ある限りを持つてゐるからである。その限度は未解決のまゝではあるが、また機械の進歩につれて多少の動きを見るだらうけれども、所謂、五百哩の千哩のといふ數字に較べれば問題にならぬ程小さく、三、四百哩の見當らしいと言はれてゐる。だから前にいふところのものは、高々度飛行が速力のみについてどんなに好もしいかといふことの、一つの例示に過ぎないのである。(今のところ速度記錄は五七四粁。)

次に、高空飛行の場合と同じくキャビン内の氣壓の問題が殘つてゐるが、前に言つたやうに、實現には可なりの困難が控えてゐることを知らねばならない。

5　巨人機製作の潮流

大型旅客機は、或は將來の問題ではないと言つてもいゝ程、今日の航空に觸手をかけてゐる。列國は今や翕然としてチャイアント・プレーンの製作に熱中しはじめた。

現在、世界航空界の主要な傾向は何かと問はれゝば、第一に大型機の流行を擧げなければなるまい。しかもそれらの悉くは、昨年に入つてからの總動員であつて、ドルニエもユンカースも、ローアバツハもブラックバーンも、ショートブラザースもベアドモアも、ハンドレーページもフワルマンも、一九二九年に羽搏きした驚くべき巨鳥である。

空を眞暗にするこれらの怪物は、ドルニエ・Xによつてその偉力が導かれた。ドルニエが飛出すまでは、少くも二つの議論が大型機を圍んでゐた。卽ち、安全と經濟である。

昨年七月行はれたドルニエ・ドックスの試驗の結果は、大型機の安全係數が增し、全備重量に對する有效搭載量が大きくなつた上、併せて航續距離も延長するとの理論が實證された。この主張の第一人者は當のドルニエ博士で、英國エイロノオティカル・ソサイエティの討論會に於る博士の應答振りを同協會誌で讀むと實に鮮かなものである。


巨人機フオ

大型機の經濟に關しては、昨年十一月、ドルニエ博士が各方面の疑問を解く爲に發表したドックスの操縦費を見ればはつきりする。卽ち、

――自分の計算によれば、ドックスは、一千粁乃至一千五百粁位の輸送に最も有效であつて、一千粁では、一年に七萬五千粁の飛行を前提として一トン一粁當り二馬克である。またドックスを就航させるのに最も有利な航空路は、例へば、紐育からアトランティック、シティ間の百二十哩を十二トン半の有效搭載量で、マルセーユからアルヂエール間四百五十哩を九トン（九十五人）位で飛ぶこと等が擧げられる。――

ドックスは、最初歐洲一周を目的としてゐた。そして北海や地中海あたりを悠々飛び廻つた上、アゾレスと西印度を補油地點とする北大西洋の横斷を望んでゐた。しかもこの計

畫は早晩實現されるであらう。

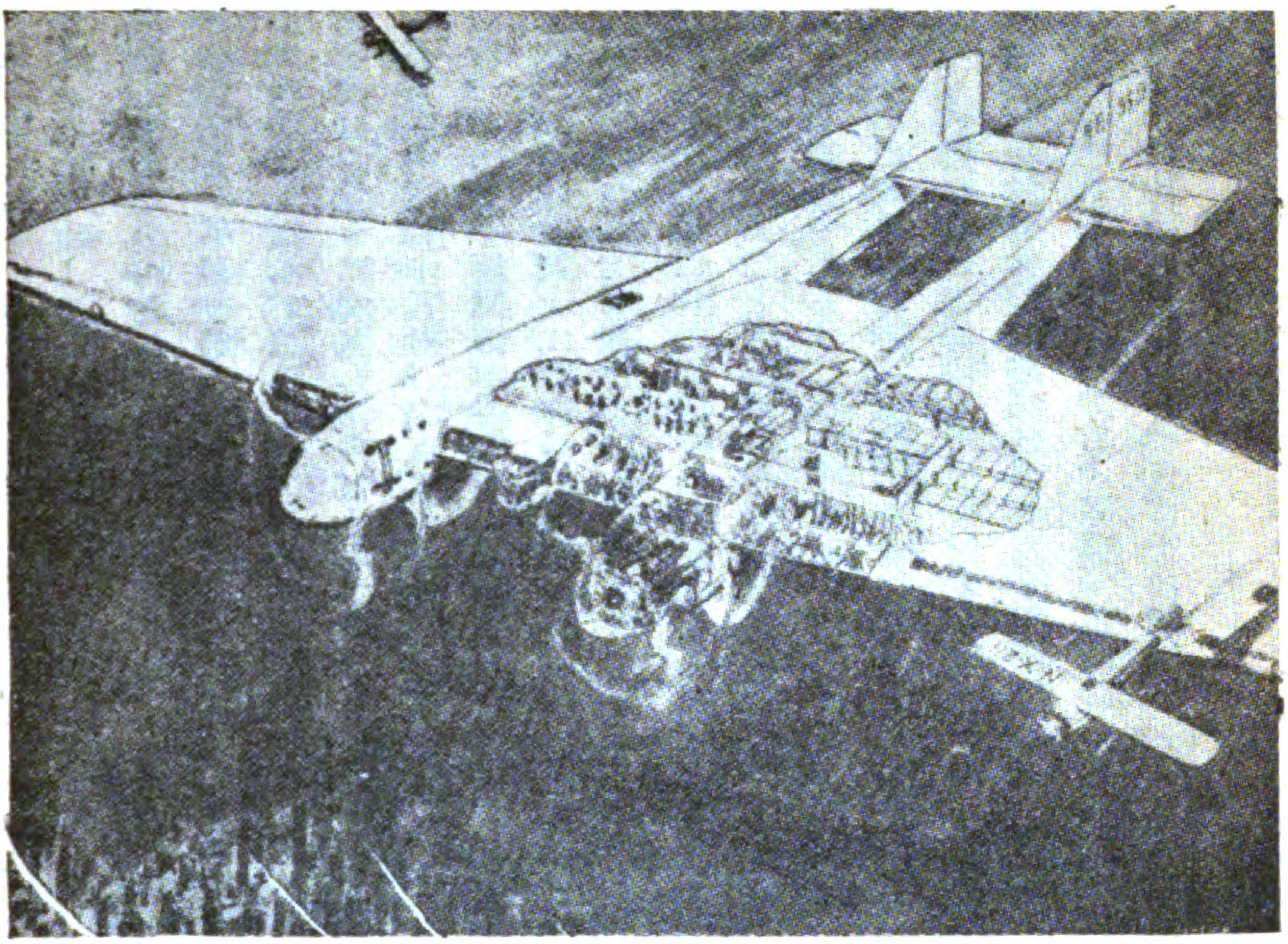
だが、百人乘、六千馬力のこれら大型機を空中の移動ホテルとしてのみ歡迎するのは、軍縮會議とか平和會議とかゞ世界から姿を消した後のことにして貰ひたい。ドックスが旅客を乘せる代りに武裝したらどうなる？

五百瓩の爆彈十五發、二百五十瓩の爆彈十七發、その上、縦體の中心線上に旋回砲塔式大砲二門、機關銃十二門の外に兩鰭と翼端に八門、この大砲は現在では二十粍だが航空用砲類兵器の進歩に伴つて四十七粍から七十粍砲まで増力することが出來るとは赤城副長松永中佐の調査である。これを昨年七月、名古屋を中心に行はれた防空演習に於てこれが實戰なら重爆撃機などを待つまでもなく百瓩位の燒夷彈を載せた偵察機だけで名古屋全市を燒きつくすことが出來る、と、軍部が言明してゐるのに比較して見ると、まるでお話にならない。

大戰中既に一千馬力の爆撃機を作つて敵味方を驚かし、爾來大型の元祖となつた伊太利のギャニ・カプローニは、最近二千馬力、六千馬力の大型陸上機を空に送つた。兩種共試驗飛行に大成功を納めたが、六千馬力の方は90型といはれ、フィアット一千馬力六基を装備してゐる。構造は鋼管。羅馬から南米までは大威張りで飛べるといふ代物。カプローニは尚目下三千馬力の單葉を製作中で、燃料を滿載すれば一萬粁は樂に飛べると折紙をつけられてゐるから、太平洋の八千キロなどは朝飯前なわけである。だが、カプローニは大事をとつて、大西洋を越すのには、アゾレスと西印度に降りて飛びたいと洩してゐるし、紐育から太平洋岸までは五トンの荷を積み二百十粁の速度で無着陸横斷が出來ると言明してはゐるが、決して太平洋をどうのかうのとは言はない。かういふ心掛の人だから、日本の帝國飛行協會や例のタコマ市號の御連中などが逆立しても出來ないい、仕事を生み出すのであらう。――このカプローニもドルニエ同樣、米國の金力を仰いでゐる。カーチス・カプロ



ヲカー F32



巨人機クリスマス號

ーニ會社が夫である。

この他にフォッカーF32がある。大きさではさまで圖抜けたものではないが、米國最大の旅客機で、三十二人乘り、十六の寢臺がついてゐるのが評判である。

ユンカースG38は、厚翼の中に客室を設けた獨特の型で、翼の厚さは二米近く、八百馬力二基、四百馬力二基、合計約二千五百馬力、胴體中に二層の甲板があつて上に三十人の客の設備と二十六人分の寢臺、下に荷物室がある。

フワルマン（一つは双發動機の二十五人乘り、他は四發動機の五十人乘り）瑞西のマノスが設計した六千馬力、西班牙の五千馬力等もそれ〴〵計畫を進めてゐる。

尚、明年中には、ドックス以上の大飛行機が米國に現はれるかも知れない。ゼネラル・デヴエロップメント會社の製作で、同社のエリオット・クリーンの設計に成り、全金屬双胴百六十人乘り（他に乘客十七名）である。

この飛行機はクリスマス號と呼ばれ、二百萬弗を投じて四機製作の豫定で、目下六十名の技師が細部の設計中である。ドックスのやうな大飛行艇に對して陸上用の巨大な旅客機が、經濟性能の點に於てどんな成績を示すか、クリスマス號は今から世界航空界の興味の的となつてゐる。

轢殺御免のスピード時代

濱尾四郎

一　動かし難き事實

機械文明の發達は正しく人類に或る種の幸福を齎して居る。然し同時に人間の生命に直接の危險を與へつゝある事も否み難き悲しき事實である。工場に於いて勞働者が、鑛場に於いて抗夫が、常に其の危險に身を曝しつゝある事は誰しも認めないわけには行くまい。

けれども、「最も尊ぶべきは人の生命である」といふ言葉が、凡ての人々にとつて動かし難き信念である限り、而してそれが動かし難き眞理である限り、あらゆる機械文明の齎す「やむを得ざる危險」は常に最小限度であるべき事は當然と云はなければならない。卽ち工場に在ては出來得る限り勞働者に危險を生ぜぬやう努力すべきであり、鑛場に於いても能ふ限り抗夫の危險を防ぐべきである。

斯の如き當然極る努力が、はたして如上の場所に於いてつくされて居るか否かは、其の方面の知識に乏しき筆者の云爲すべき限りでないが、たゞここに確に一ッだけ、全く此の努力のなされて居らぬ場所がある事を余は指摘したい。而もそれは余の考へに從へば、決して「止むを得ざる危險」ではなく「止むを得る危險」なのである。その場所とは何處か。曰く、大都市街である。我國の文化の最も發達した大都市である。例へば筆者の居住地である東京市の現狀の如き、斯の如き人命蔑視の場所が又他にありやと云ひたいのである。危險とは卽ち交通機關による危險である。

余は市民がかくの如き危險に毎日曝されながら何故に抗議をあげぬかを怪しむものである。われ等は、足一步を街路に踏み出すと同時に、全く秩序なき交通機關の混亂狀態に身を曝さなければならない。

試みに、余の居住せる區內のある町に出て見る。一つの道路を幾種のものが通るか。曰く、人間、人力車、牛車、荷馬車、自轉車、荷物自動車、乘合自動車・オートバイ・流しの圓タク、乘用自動車、電車！之等のものが全く無秩序に、他と競爭をしつゝ、而して他人の生命

は全く頓感なしに、動き廻るのである。之が危險でないと云へやうか。(余ははつきりと「無秩序に」と云つた。然り、全く秩序がないのである GO、STOPのある停車場に於いてこそ一時秩序を得て居る。けれども一たびGOのサインが出てからの彼らの疾驅振を見よ)

他に危險を及ぼさぬ(及ぼし得ざる)歩行者のみがつゝましやかに歩道を行く。然し其他に至つては、必要もないのに若くは必要以上に死物狂ひで走り廻つて居る。最も憫むべき、然し滑稽な現象として諸君は、自動車と競爭する自轉車を見出すだらう。彼等は斯の如き無意味な遊戯をやる事によつて幾多の人命を危險に曝し時に之を奪ふのである。

二 危險のバロメーター

交通事故の統計に對して一言したい。現れた數字は決して危險それ自體の正確な表ではない。危險はもつともつと遥かに大きいのである。

之は法律の建前によるのであるが現代に於いて、例之自動車が人を轢殺した場合、これは刑法第二百十一條の罪即ち業務上過失致死罪として取扱はれる。而してこの犯罪には未遂罪がない。換言すれば、今一寸で突當るところまで行つても運よく轢かないですめば之は何でもないのである。從つて統計には何もあらはれて來ない事になる。

だから例之或日或る場所で四人が自動車に轢殺されたといふ事實は、そのまゝでは、交通機關の危險の尺度にはなり得ない。四人の外に何十人が危く殺されかゝつて身をもつて免れて居るかわからないのである。

此の法律は、人を轢かなければどんなに無茶に走つてもいゝといふ考へをある人々におこさせて居る。

三 裁判所、檢事局と交通事故

次に實際上轢殺した場合の法律上の取扱ひを述べて見やう。この場合は普通區裁判所檢事局で取扱はれる。

最近東京區裁判所檢事局に於て、交通事故を專門に取扱つて居る檢事に直接きいた所によると、起訴し得るやうな事件(即ち嫌疑十分なもの)は四十五パーセントだといふ事である。即ち殘りの五十五パーセントは不起訴になることになる。

ところで起訴された四十五パーセントの確實な事件がその何パーセント有罪の判決を受けるであらうか。その點について聞洩したが、おそらく百パーセントといふ事はあるまい。從つて交通機關によつて人命を奪つてもまづ六割は無難ですむわけとなる。

(近來汽車の轢殺問題が喧傳されて居るが余は目下市内の無軌道の交通機關のみについて云ふので汽車は勿論電車も暫く問題外とする)

而て刑法第二百十一條の最高の刑は禁錮三年である。更に而て、事實上東京に於いてこの最高の判決のあつた事を余は知らない。

ここに一つの例を擧げて見やう。

ある自動車が他の自動車に追ひ越されさうになつて憤慨し、三十五哩位のスピードで市街を走つてゐる。道路上に人が道を横切らうとするの

きた。しかし[illegible]
には相手が逃げるのだとたかをくゝつて[illegible]

ところが人間の方は成程、クラクリンの音がきいたので驚いて見ると、道路上を二臺の自動車がおそろしい勢で進んで來るので途中に立つた彼は狼狽する。（此の場合、彼がそこに直立してしまへば賢明であるが、凡ての人にそれを要求するのは無理であり、而て、人間にはこんな場合にそこに直立してゐる義務は絕對にない。）それで、さきの車が一間手前まで行つた時、人がうろうろして居たために美事に之を轢殺してしまつた。

かういふ場合、これでつひした事だと一般に考へるだらうか。運轉手の過失だと信じていゝだらうか。一般の人々はたしかに、運轉手の行爲は過失だ、相手には氣の毒だが仕方がない、と思ふだらうか。

然し法律家は之を過失と考へて居るのである。檢事は之を過失致死罪として取扱つてゐる。三十五哩即ち規則違反のスピードを出してゐる事は決して過失ではない。正に故意である。けれども人にぶつけると之が過失になるのである。即ち最高三年の禁錮といふ次第である。

強盜は物をとつたゞけで、五年以上の懲役になる。自動車は割り切つてゐて人を殺しても三年、（實際こんな例のない事既述の如し）うまく行けば罰金、更にうまく行くと不起訴である。

これは法律家にとつては一見不思議でない。故意と過失の問題だからである。

[illegible]
[illegible]手の供述以外に、檢事は誰の言葉を信じ得るか。

轢かれた人間がプロレタリアートだともつと事件はうまく行く。轢き人を失つた哀れな家族の所へ若干の金包をもつて行く、目の前に金を出されたプロレタリアートの家族は拒む筈はない。而て犯人に對して如何にすべきかも知つてゐない。云はれるまゝに何か出された書面に印を捺す。之が、示談成立書、若しくは被疑者に對する歎願書となつて檢事局に來る。

被害者の方が犯人の歎願書を出してゐるので檢事も「さまでは」といふので不起訴にする。之でこの事件が終るわけである。

余はかつて檢事の職に在つた時、かういふ歎願書を問題にせず斷じて起訴したところ、公判に行つて執行猶豫になつた。その理由はやはり被害者が相手の處刑を望んで居らぬ、といふ事であつた。

四　自轉車の問題

檢事局で轢殺事件の自動車運轉手の辯解する言葉の中に、

「自分は步行者を認めてゐたが不意に横合から自轉車が飛出して來たのでそれを避けやうとしたら人にぶつかつた」

といふのが可なりある。而てこれはある程度まで事實である。

現今、往來を步いて居て、自轉車といふものにおびやかされない人間

があるだらうか。彼らは、自動車の如き強力なヘッドライトを有せず、クラクソンを有せず、突如として夕闇の小路より飛び出し傍若無人に走り去るのが常である。

幼兒の如きは自轉車につき仆されても立派に死ぬのである。

大路に在つてはさきに述べた如く自動車の横を走り廻つて間接に自動車轢殺の事故をおこしてゐる。

余の如きは銀座通りで一番危險を感ずるのは自轉車である。

而て自動車に對してはいろ〳〵の規定があるにかゝはらず、自轉車に對しては特別の法規は無いのである。

當局者は自轉車夫れ自體を危險物とは見なかつたかも知れない。けれども現代の如く、人間＝自轉車＝自動車、このコンビネーションが恐るべき結果を生じつゝある限り、この點を考へてもいゝのではなからうか。

なほ、右のやうに元來は自轉車が惹起した自動車轢殺事件に於いて、事故を惹起したる自轉車乘りは必ずそのまゝ姿をくらまし、自動車運轉手のみが被疑者となつて檢事局に現れるのが常である。

しかし之は、このまゝでいゝのだらうか。

五　危險に對する策

以上、余は目下の危險狀態と、目下のそれが法律關係とを簡單に記して來た。

市民の如何にして此の危險に對抗すべきであらうか。

余は、轢殺事件が、刑法第二百十一條のみによつて（無論他の事故に他の法規に律せられるが）律せらるゝ事につき或る疑ひをもつものである。けれども刑法そのものの問題として述べる事は到底紙數がそれを許さぬが故に今はこの點には觸れまい。（他日機會があつたら記したいと思ふ）

現代はスピード時代だと云はれてゐる。戀愛、結婚、而て離婚、悉く急テンポならざるはなしである。

交通機關もその例にもれず鐵道では超特急の出現を見んとして居る。

しかし、この急テンポの狀態を現今の大都市の交通機關に應用しやうとするに至つては實に言語同斷といふべきである。余は實に默するあたはずである。

現代の東京市街の交通機關は既に既に急テンポである。Allegro Allegro である。今ですから早すぎるのだ。之以上にされては市民は堪つたものではない。

何百萬の人の住む東京である。

碧空綠野をながめながら軌道の上を走る汽車電車とは問題が違ふ。限られたるスペースの東京市と、無限に增加しつゝある自動車。自轉車！

それが現今のやうに交通道德を無視しながら、なほスピードを增大に

せんとするに至つては、危險とも何とも云ひやうがない。

今より三年以前には東京市に於ける自動車のスピードは最高十六哩であつた。しかし昨年からこれが廿哩になつてゐる。

限られたスペースは自動車の增加によつて必ずつひに飽和狀態に達する筈である。達せずとも車の數が殖えれば殖える度に危險率は增す筈である。

此の點から云へばスピードの制限は年々少限度になつていゝ。

無論、スピードがどんなに增しても、秩序さへ整然としてゐれば必しも危險はない。

假令凡ての自動車が、五十哩のスピードを出しても、それが皆一定のスピードで走り、而て規律を守るならば、必しも危險は起らないであらう。

けれど、くり返していふが、現今の如くに交通道德が無視され、幼稚園小學校の前をすら二十七八哩のスピードで走る自動車の多い東京市で、今以上のスピードを許す事に對しては余は斷じて反對したい。

六　對策二、三

第一に各自のもつ公德心の問題である。

この點については余は最も自轉車に對して激しい抗議を提したい。

次は即ちスピードの問題である。余は現今の自動車取締令を以て一應滿足する。然し、スピード違反に對しては絕對に嚴罰を以てのぞまれたい。[illegible]く、スピード違反に[illegible]違反を是認して居るのであるから何等かれ[illegible]の代想がない。

文は交通取締規則の遵守である。取締まられる側でなく取締る側で嚴格にやるべきだと思ふ。

此の規則に於いて特に自轉車を嚴格に取締つていゝと思ふ。

七　感想一ツ

最後に一言余は云つておく。かつて或る所で余が此の說を述べた所、批難された者が大分あつたがその殆ど全部が自動車運轉手諸氏であり、而てその批難は、皆階級意識的のものであつた。

即ち、「自分等はプロレタリアートである。それを嚴罰に處せといふのは、汝はわれらの苦しみを知らないのか。たゞさへ困つて居るのに、この上嚴重に取締られては堪らぬ、汝はその點を考へぬか。」といふのであつた。

余は一應此等の立場は諒とするものである。然し、運轉手ばかりがプロレタリアートではない。吾運轉手は東京全市のプロレタリアートの一部である。而て現今の交通狀態は、運轉諸氏以外の全部のプロレタリアートを脅かしつゝある事をも考へてほしいと思ふ。

事實、轢かれる者は多くプロレタリアートなのであるから、この點を顧慮せられたいと考へる。

余は現今自動車が、或るモデレートなスピードで走つて規則を守ることによつて大なる損害を受けるものではないだらうと信じて居る。

八　終る言葉

戰爭の慘禍は多くのものが知つて居た。しかし、あの世界戰爭がおこり、多大の人命を犧牲にしてはじめて戰爭の惡を痛切に感じたのである。

交通機關によつて失はれる東京市の人命は少くはない。

しかし、この犧牲が多くならなければ、余の言は認められないのだらうか。

きくところに依れば、ニユーヨークでは、交通事故のために失はれる人命が餘りに多くなつたので、急に狼狽し、目下種々と研究中だそうである。

余はその轍を東京市がふまん事を恐れるものである。

今にして、全力を注がずんば幾多の犧牲を生ずるだらう。

而てその犧牲は餘りに高すぎるではないか。（をはり）

――一九三〇、九、五――

中央公論社代理部案内

東京市丸の内ビルデング五九〇區
中央公論社代理部
振替東京七八四七五番
電話丸の内(23)五三五番

○代理部への御注文はすべて前金に限ります。前金はなるべく一番安全な振替を御利用下さい。
、御注文、[illegible]をお忘れなく
為替でお送金の節は必ず書留郵便に願ひます。
◇切手代用は拾錢以下の郵便切手で一割増の事。その他は一切お受け致しません。

最も經濟的な 實用替ズボン

本社代理部の替ズボンは、價格に品質に已に定評あるもので、何れも地方作作の愛讀者諸君のために、特選したものばかりであります。

紺來黑サージ(ヒザ當付)	七圓五十錢
上等黑及紺サージ(ヒザ當付)	六圓三十錢
黑及紺サージ	四圓
合着用立綿黑サージ	一圓八十五錢
上等黑絹セル(ヒザ當付)	六圓
優等黑絹セル(ヒザ當付)	七圓
薄ラシャ・フラノ(濃茶、灰、紺)	五圓

◆特價提供品◆

スポーツ用白ギヤバヂン	一圓六十五錢
厚地茶褐スレン(同兵用)	一圓六十五錢

寸法(大 胴廻鯨約二・四尺 股下一・九尺
(中 同 二・二尺 同 一・八尺
(小 同 二・一尺 同 一・七尺

御註文には大中小の別と參考に全身長も御記入下さい。(股下はクルブシ迄を計つたもの)

送料内地十八錢 領土四十五錢

古書売買のお取次

これまで受付けて居りました[illegible]

[illegible]

[illegible]合さえ少くありません[illegible]

いものを合む[illegible]

せんので、今後はこれ等の類に就きましては一切お受けしない事に致します。

要するに賣買共に普通の古書のみをお扱ひ致しますのですから、左の規定を御一讀の上どしどし御遠慮なく御利用を願ひます。

規定

A、御紹介には往復端書又は返信料を添附して下さい。

B、御註文はなるべく精しく、前金御送附を願ひます。

C、送品は代金着後一週間位と御承知下さい。但古本の事ですから、御紹介後着荷迄の間に現品の移動があつた時には、再び探し出す爲に相當の時日を要する場合があります。隨つて價格等も時には變動する場合が生ずる事も豫め御承知を乞ふて願ひます。

D、評價御希望の書籍は、書名、著者、發行年月日、發行所、定價の外に、書籍にお傷や汚れ等がありましたら、それを御知らせ下さい。又時には、現品を拝見の上でなければ評價致し兼ねる場合がありますから、その旨お含みおき下さい。返送の費用は實費を申受けます。

E、御紹介の宛名は、中央公論社代理部古書案内係」と明記して下さい。

洋服の注文は今!!

◇特に二回に分割拂込みのお便宜も計ります。

◆キザな流行の支配によらず、紳士的な而も明るい感じの洋服を求めらるるなら、山間の僻地からでも居ながらにして、眞に東京型の洋服を求めらるるなら、本社代理部を利用するに限ります。

◆生地見本を御覧の上、代理部考案の用紙にす法を書入れて送れば、思ひ通りの型、思ひ通りの寸法の服が約二週間でお手に入る譯です。

◆裁縫の入念と、品質の確實な事は、所謂通信販賣洋服と類を同ふするものではありません。

◆見本ノ請求ニハ一種毎ニ郵便切手十錢添付ノ事。



◆洋服の生地見本は、御承知の通り餘りに多種多樣で、全部取揃へる事は經費もかゝり、それに伴ふ不便も少くありませんから、必ず御希望の品、例へば「冬服のB」「合服のA」と云ふ風に明確にお指定の上、お忘れなく御年齢をお書添え下さい。

◆代理部では、御年齢、御職業その他の御希望條件に最も適合した生地を見立てゝ、明確な圖入の寸法書と共に御送り致します。

〔合服〕〔冬服〕

A	35円00
B	43円00
C	50円00
D	60円00
E	70円00

中央公論社代理部洋裁係

振替東京七八四七五番

最新除毛劑

タキーは、手足、腋の下、襟、髭等任意の所に塗つて、三分乃至十分後に水で洗ふだけで、剃刀で剃つたよりも綺麗にすつかり除毛する事が出來、繰返して使用するにつれて次第に毛が發生しなくなり加ふるに皮膚の美を増すと云ふ重寳な藥は、タキー只一つです。用法は至極簡單、添附の説明書に反せざる限り、全く無害で效果は一層確實です。



定價(マムクリーム付) 二圓二十錢
送料東京市内十二錢 内地十八錢 領土四十五錢

萬能艶出布

漆器類、殊に蒔繪の器具、置物から、樂器、自動車まで、これ(原名フレッシユマン・ダスト・アブソーバー)の用途は廣く、殊に蓄音器のレコードを拭へば壽命を長くし音を非常に美しく致します。

定價(金屬製容器入) 一圓
送料 東京市内六錢 内地十二錢 領土四十五錢

スマドレ、シャンプー ヘヤトニック

シャンプーは洗髪液、ヘヤトニックは美髪液、前者でキレイに汚れを落し、後者で毛を養ひ天來の美を増すと云ふ仕組は流石にパリー、ニユーヨーク、ロンドン等で賣出してゐるものだけあります。

殊にこのシャンプーでの洗髪は實に手輕で、日々忙しい社會に立つて、男子の髪を整へる事が、重要な禮儀の中に數へられる今日、數滴スマドレシヤンプーの用意さえあれば、僅かな時間で毎もさつぱりとした髪で、自他共に氣持ちよく會談する事が出來ます。

定價 特大瓶 二圓



而も朝夕スマドレヘヤトニックを用ひて輕くマッサージする事で、一日の能率を高め、芳香邊りを包み毛髪は絹の樣に軟く日々漆黑の美を増します。

定價 婦人用 紳士用 特大瓶各二圓五十錢
送料各東京市内十二錢 内地十八錢 領土四十五錢

新産兒調節器

獨逸製オクルサトルは、海綿樣纎維質の部分と、絶對に水液の通過を妨げるゴム障壁と把柄からなる新發明産兒調節器で、他の從來品の生理的損失を一掃した良品です。

本器は永久的の使用に堪え、眼覺めたる新しき家庭の實際問題の上に輝く大いなる光明燈であるとまで多大の賞讃を受けてゐます。

一回經産婦までは ○番
三回經産婦までは 一番
四回以上の方は、 二番を使用

定價(錠劑十二錠付) 六圓
錠劑のみ十二錠 二圓
送料 内地十八錢 領土 四十五錢

草津温泉の精

本劑約二〇乃至五〇瓦は居ながらに約一石の新鮮な温泉となり、常用者は皮膚が美しくなり、色を白くします。



定價 小瓶 一圓 大瓶 二圓
特大瓶(一〇〇回用)六圓
送料 内地二十七錢 領土五十五錢
特大は 送料 先拂

浩壯 (無臭ニンニク錠)

ニンニクの效力は世人のよく知る所然し臭氣は十人が九人まで嫌やがる。效力は認めるが服むのは嫌や、服み度いが服めないと云ふ人は、このニンニク錠を召上れ。本劑は、ニンニクの原質をそのまゝ用ひながら、服後口中に臭氣を殘さないのが特長です。

肺結核、肋膜炎、氣管枝カタル、胃腸弱、神經衰弱、貧血症及無機條蟲の驅除には驚くばかりの效果があります。

藥價 十日分二圓 三十五日分五圓
送料 内地十八錢 領土 四十五錢

サユリ ヨウモトニック

藥で有名な三共の新製品です。毎朝脱脂綿につけて、頭の地肌に塗れば、所謂若禿を防ぐ事受合ひです。

○頭の痒い人、脱毛する人、○壯年禿髪の人、遺傳禿髪の憂ある人、○若白髪の人、○大病後薄毛の人、○日常ポマードを多量に使用せらるゝ人、○病床にあつて洗髪の出來ぬ人、特に婦人では○産後薄毛の人、○常に日本髷の人、○大きな添へ毛、髢を用ふる人、○束毛が苦になる人はお用ひ下さい。

定價 大 二圓 小 一圓二十錢
送料 東京市内六錢 内地 十二錢 領土四十五錢

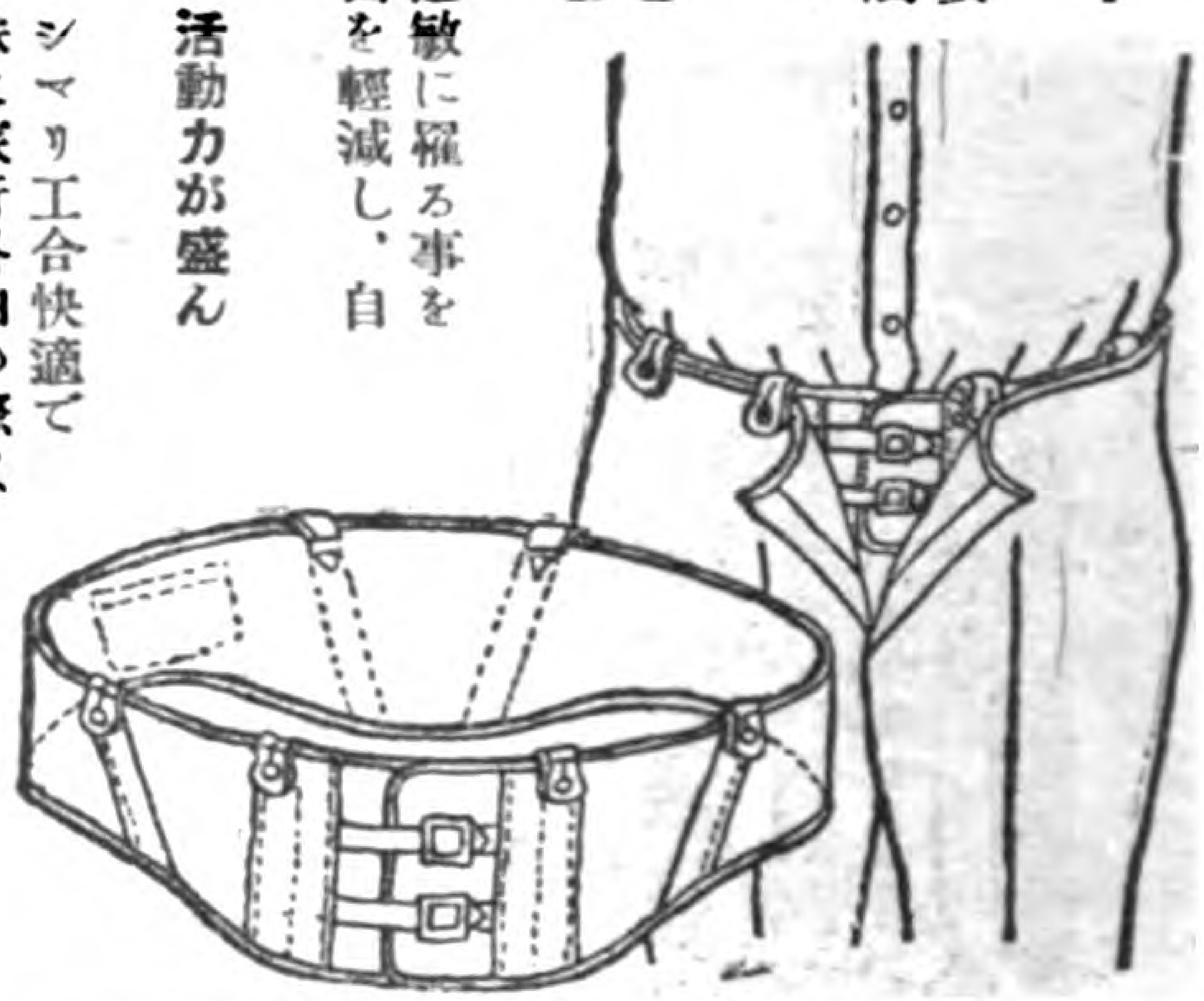
ズボン吊兼用保健整形帶　サツポーター

(一)**ズボンを腰で輕快に釣り支へます。**
ズボン吊の如く肩の凝りや、胸脊の壓迫がなく、ゆるやかな氣分で常に居られます。

(二)**姿勢を正しく、スタイルを端正に整へます。**
座臥動作は自由で、姿をスラリと見せ、前屈みの人も姿勢の正しい習慣となります。

(三)**胃の下垂を防ぎ、腸を保護し、腹力を强めます。**
疲勞を和らげ、神經過敏に罹る事を防ぎ諸種の病弱の原因を輕減し、自然健康を增進します。

(四)**執務も活步も愉快に、活動力が盛んになります。**
下腹、臆骨、脊柱等のシマリ工合快適で和服の場合にもよく、殊に旅行外泊の際は安全胴卷の代用をつとめます。



(特大)周圍鯨三尺五寸中心　(大)二尺四寸中心　(中)二尺一寸五分中心　(小)　一尺九寸中心
A純毛ネル地三圓八十錢　B混毛ネル地三圓二十錢
C麻地一重二圓五十錢
送料　東京市内十二錢　内地十八錢　領土四十五錢

◆**御注文には引き締めた腹廻り寸法をお報らせ下さい。**

誰にも愉快な野球競技盤



盤面は飛行機上から見た野球場さながらで、球にあてた指の力一つに、直球、曲球、軟球、剛球を自由自在に出す投手と選手がボックスに立つた氣持ちで立向ふ打手との敵味方緊張した氣分は、この野球競技盤ならでは、味はへぬ所です。

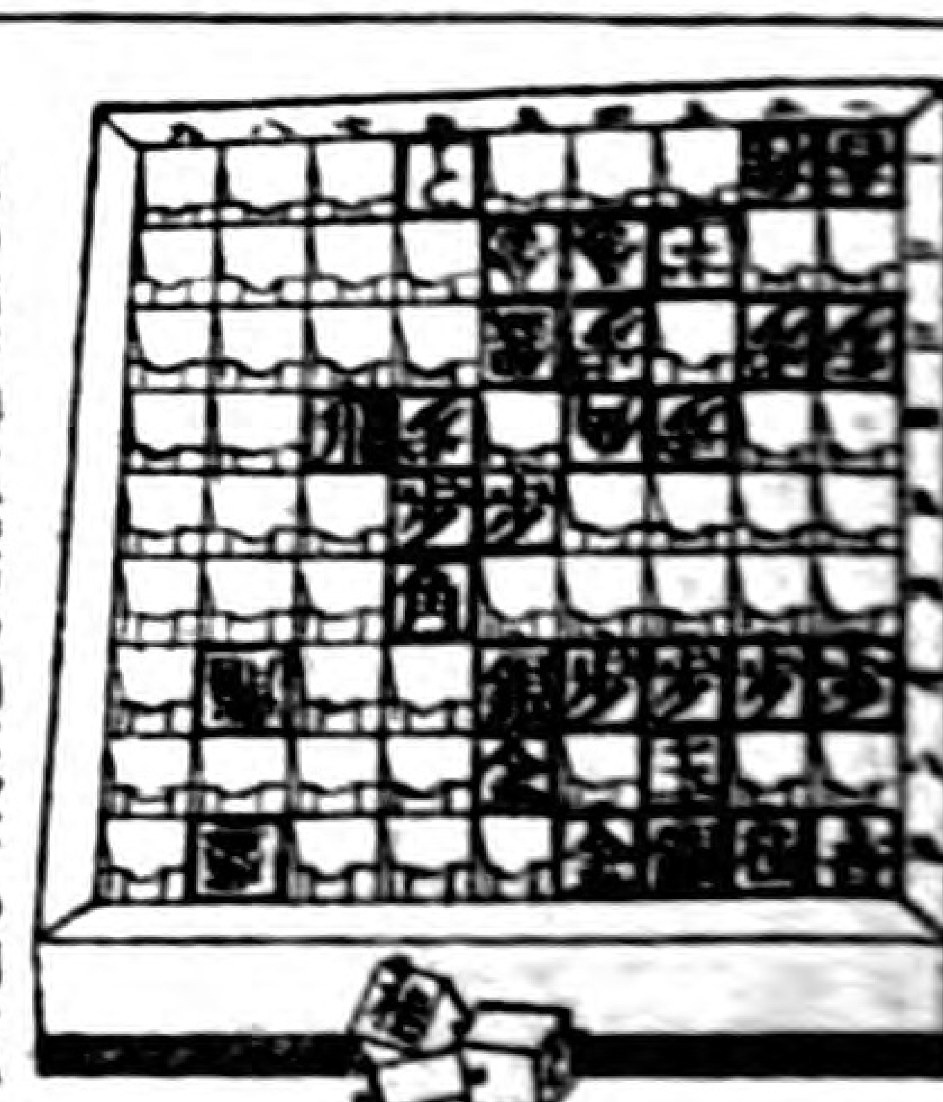
選手はもとより、春秋のシーヅン毎に野球の興味が婦人の世界にまで及ばうとしてゐる現今、高尚な新らしい家庭遊戲として、一般の家庭におすゝめ致します。

定價　小型一圓三十錢大型三圓八十錢
送料　内地小型は十二錢　中型は二十七錢　領土小型は四十五錢　中型は五十五錢

最小型將棋盤

縱三寸七分横三寸二分厚さ五分の最小型輕便將棊盤です。木とアルミニユームとで造られてありますから。ポケツトに入れて少しも重く感じる事なく。駒には一個一個蟲針が附けてある等。婦女子の眼にも可愛らしい程のものです

駒は普通文字を用ひ、更に將棋盤に數字が記されてありますから、新聞を見ながらの研究には一層便利です。



其の他繁雜な業務の間に數分の閑を得て、又は忙しい旅の車中に、或ひは湯上りの腹ばひのまゝで、或ひは机上に、或ひは病床のつれづれに、仰向けのまゝでも出來る、好棊家にとつてこれ程便利なものはありません。

定　價(駒全部附)　一圓八十錢
送料　東京市内十二錢、内地十八錢
領土　四十五錢

御注意

◇御送金には振替の御利用が一番安全ですが、地方により普通便より四日乃至十日間以上遲れますから、御註文はそれ丈一層お早くお出し下さい。

◇爲替での御送金は、必ず書留郵便に願ひます。

中央公論社代理部

中間物選集

イディオロギイに疲れナンセンスに飽きた時諸君を救
ふのはこの選集のみだ。何といふ明朗な空氣、芳醇な香
氣、多彩多角なその明暗……'それはネオンライトに照
明さるれる夜のフルーツパーラーです。其尖端的エロの
悩ましさは葉巻とカクテルに更けゆる夜のサロンです

柳澤健　巴里を語る
巴里を去りて巴里を語る、佛蘭西文藝雜景、ヷン・ドンゲン邸の夜會、流行兒ピランデロ、愛怨道事三篇等二十一篇

石川欣一　山へ入る日
山と酒、山と女、山と煙草、山に登る理由、鹿島槍の月、雪線の下にて、柳・パス・マゲノリア、中年者の幻想等四〇篇

淺原六朗　都會の點描派
蛋と美顔博士と一發師、マネキンガール點描、膝の會話、戀なのさ、タキシ、深夜の乘客、交叉點の昂奮等四十六篇

新居格　近代明色
季節の瞳、細線の秋、銀影鏡、流行問答、徴章點彩、近代型、ステッキガール抗辯、早婚者の手記、斷截美學等五十三篇

さゝきふさ　或る斷層
漫歩挿話、結婚補助、惚れられマニア、好きな男嫌ひな男、多點的存在、三面の相對性、つまらない一服等六十三篇

下村千秋　月寒の女
良人を御用心、ギプスの床、枇杷の實、狂つた人の狂はぬ言葉、私のノスタルヂア、月寒の女まで、四國遍路等十八篇

林房雄　都會の論理
明日の女性、新戀愛道、描死を嗤ふ、菊池寛に與へる、公開狀、伏字について、踊タップガール、赤い子守唄等二十七篇

小島政二郎　場末風流
大學の寢室、若葉の森の黑人、ベッドに横たはる論、食しん坊の座談、惡魔の作る美女、自尉の美女等二十八篇

片岡鐵兵　彼女等と語る時
美人論、女學と不良少女、よくない男、十二月の記憶と夢、女學生氣質、モダンガアル考、形式と速度の生活等三十三篇

下田將美　東京と大阪
道灌山附近、八石敎會の跡、根津の話、大阪を見る、高野の萬年草、關西文化の東洲、猫、倫敦と東京等十四篇

酒井眞人　映寫幕上の獨裁者
第三十九の接吻、シナリストか監督か、ストーリかマーか、映畫定石、チャップリンびいき、動く虎等七十八篇

長田幹彦　女優部屋
新東京風景、夜の歡樂場、深夜の劇タク、銀座夜曲、刀陽氣な風車、青衿の女、女優部屋、女樂土等五篇二十一章

丸木砂土　變な笑ひ顏で
女は匂ひなり、秋の兵隊、女の足、乳抑へ、タイヒスト物語、獨逸の餅飢、徴兵藝術家、龍下どめ、アヹマリア等十三篇

四六判　紙裝　三百數十頁・定價各冊八十錢　送料內地八錢　滿鮮十八錢

東京丸ビル　**中央公論社版**　振替東京三四

娼妓解放哀話

沖野岩三郎著

「フジヤマ」と「ヨシワラ」――それが等しく國粹だといふなら座敷も便所も一しよだ。併し日本人として我國特殊存在の一なる公娼制度に就いて明確な認識を持つ事は我等の義務である。人身賣買は法的に禁ぜられてゐるとは言へ、彼女等の生活が果して白色奴隷以外の何者だと言ふのだ？　農村の窮迫、工場の閉鎖、操短――傷ましい小羊は人肉市場に氾濫する。われ〳〵は拱手傍觀してゐていゝものだらうか？　本書は初めて世に送る自廢運動史であり民權史の一部、女性解放史としての文獻的價値以外に、應急對策の指導書、血涙の實戰記だ。

新吉原「吉原掟」抜萃 ――本文より――

一、遊女勤の儀は第一に、餝を専らとし、かりそめにも誠の心あるまじきこと。

一、美男、大通、心意氣の面白き客たりとも惚れることは停止致し置候故、その儀は屹度相愼み申すべきこと。

一、醜男、ひげ武者、老人、又は梅毒かきのお客なりとも、金澤山の方は惚れたるに見せかけること。

一、朝夕の食事は控へ目にいたし、客のものをたんと食べ候やう心掛けること。

一、召抱への砌、代金相濟せる上は、年明の日まで主人より一錢の合力もこれなき間、左樣心得精々主人方へ金を過分に取り入れるやう心掛ること。

一、衣類夜具頭のもの其外諸道具殘らず拵へかた致し候については、萬事客人にねだり掛け、傍輩にまけぬやう氣をつけ借金出來候ことは毛頭考へ出すまじき事。

一、定め通りの仕着せは地合あしく、値段の安い品を與へる故なるだけ自分の力で、上等の衣類を拵へ申すべく、仕着せは安物故使用致すを恥と心得、早速除け候こと勝手たるべきこと。

一、客人歸りて後は無益の酒をのむことは停止いたし候こと。

（以下略）

又と得難い珍奇な寫眞資料八葉

四六判四〇〇頁

定價一圓二十錢

送料内地十二錢

目次摘要

自由廢業の由來
自廢運動と無公娼縣
自廢と米人モルフィ
愛之助綾絹事件
蓬萊屋事件
一日四厘九毛の稼高
外出御免の新案
鈴木主水の歌にも
東雲のストライキ
救世軍の活躍
さと、ひさ事件書類
再び來る國難時代
六十圓の生命
癲狂性痴呆症
自廢可能の判決例
自廢の神伊藤富士雄
娼妓自廢九八七人

中央公論社

東京驛前丸ビル
振替東京三四番

血の三角形

—世界怪奇實話 IX—

牧逸馬

1

倫敦のボウトマン廣場——此町の三七番、No. 37 Portman Square は、日本大使館である——當時、そのボウトマン廣場十二番地に、フインドレイス醫科學研究所といふのがあつて、クリッペン博士は、この研究所の一員だつた。フインドレイス研究所は、研究所とは言つても、別に纏まつた仕事をしてゐる譯ではなく、附近の二流三流の開業醫達が漫然と出入するだけの、謂はゞ餘り流行らない醫者連中の倶樂部のやうなものだつた。クリッペン博士は、この會館に一室を借りて、辛うじて開業醫としての名目を保つてゐた。七月九日午前九時半頃、齒科の醫療機械商でウイリアム・ロングといふ男が、このフインドレイス研究所へやつて來て、朝つぱら油を賣つてゐると、滑稽なほど矮小な體軀のクリッペン博士が、例ものそゝくさとした態度で、顫くやうに這入つて來た。見ると、眞蒼な顔に、額部に汗の粒を滲ませて、何かひどく周章狼狽の態である。ロングはびつくりして、

『何うしたんです、クリッペン先生、身體の工合ひでも惡いんですか。』

彼らは、職業關係以外に、可成り親しい友人だつた。博士はどぎまぎし乍ら、息を彈ませて暫らく默つてゐたが、

『いや、何でもありません。』

そして、思ひ付いたやうに、

『君、鳥渡買物に頼まれて呉れませんか。』

ロングは、こゝのメンバアの醫師達に頼まれて、買物などの走り使ひをすることは珍しくなかつたので、この時も氣輕に起ち上つた。

『承知しました。何を買つて來るんです。』

「些細なことですが、ちよつと面白くない評判を聞かされて不愉快だつたものですから、肝心の買物を忘れてしまひました。」

さう言つて、博士は傍らの紙と鉛筆を取つて、買ひ物を書き記してロングに渡した。

茶色蘇國織の脊廣一着、六・八分の五の大きさのフエルト帽、洋襟が二つ、ネクタイ、靴一足、肌着二枚。

博士は附け足した。

「十六歳の少年が着るんですから、その心算で。」

ボウトマン廣場から一足南へ下がると、商店街の中心として殷賑を極めるオツクスフオード街である。ロングは、其處らを歩き廻つて、注文の品物を安價く買ひ集めた。それを一個の包みにして、近くのセイマア街にあるエイル歯科醫學協會へ持つて行つた。自分もそつちへ行つてゐるから、其處へ持つて來るやうにと言ふクリツペン博士の依頼だつたのである。が、行つてみると、博士はまだ來てゐないので、暫らく待つたが、ロングは其の儘買物包みを同協會の樓上に殘して立ち去つた。

このウヰリアム・ロングを初めフインドレイス研究所とエイル歯科醫學協會の人達がホウレイ・ハアヴエイ・クリツペン博士の姿を見たのは、この日が最後だつた。この七月九日の夕方から、博士は倫敦の街上から消え失せたのだ。後で判明したところに依ると、ロングと一足違ひで歯科醫學協會に現れた博士は、ロングの殘した買物の包みを受取り、一先づ半月街の自宅へ立ち廻つて口髭を剃り落し、眼鏡を外し、豫め新調して置いた洋服を着て、薄暮と緒に倫敦を後に英吉利海峡を渡つて白耳義のアントワアプへ向つてゐる。息子と稱する十六七の美少年が、ロングの買ひ揃へた服裝を着けて、博士に伴はれてゐた。この英國脱出の際のクリツペン博士の變名は Mr. R. T. Robinson で、そのロビンソン「父子」は、アントワアプからブラツセルへ行つて、直ぐまたアントワアプへ引つ返し、そこから祕かに、加奈陀キユバツク行きのロイド汽船モントロウズ號に乗り込んで、七月十二日の火曜日には、既に大西洋を西へ航海しつゝあつた。

有名なクリツペン事件である。

犯罪事實物語の代表的な一つとして、世界怪奇實話からこの一篇を除外することは出來ない。知識階級者の計畫的な、そして殘虐な殺人事件として當時大西洋兩岸の人心を衝動させ、その最も深刻な人生悲劇と、それに到る心理過程に於て獨特なものと目され、未だに犯罪研究者の特殊の興味を唆つてゐる The Case of Dr. Crippen である。殊に本事件は、話中話、劇中劇とでも言ふ可き幾多の挿話に富んでゐる點が特色の一つとなつてゐるが、就中、この、主人公クリツペン博士と、彼の息子と謂ふ「十六歳の美少年」とが、R・Tロビンソン父子と名乗つて

倫敦を逃亡して大西洋を渡る場面の如きは、正にその劇的シイン中の尤なるものであらう。

一九一〇年の七月だつた。

こゝで一言して置きたいのは、このDr. Crippen の Dr. の譯語である。勿論それは、齒醫の略で、專門家としての職業を示してゐるに過ぎなく、學位の意味は尠いのだが、しかし事實クリッペンは學位を取つてゐるし、それに、ドクタァ何なにと言ふ場合には、多分に敬稱の意を含んでゐるから、日本流にクリッペン博士として置く。全くクリッペン博士は、齒科と關聯した口腔神經の研究では、大西洋兩岸の學界に相當重きをなしてゐた篤學者で、學位論文も其の方面の開發に貢獻するところ多かつたと言はれてゐる。

あの、クリッペン博士が、ウヰリアム・ロングに依頼して少年の衣類其他を買ひ調へて急遽倫敦を去つた七月九日に先立つて、これは、六月三十日のことである。

倫敦警視廳捜査課長ウオルタア・デユウ氏――Mr. Walter Dew――は、突然 Mr. Nash と稱する一紳士の來訪を受けた。

『何ういふ御用向きでせう。』

デユウ捜査課長が訊いた。ナッシユ氏は、先づ自分の說明から始めて、

「私はトテナム・コウト街に店を有つてゐる樂器商ですが、友人に、クリッペン博士といふ名が紹介されましたのは

クリッペン博士といふ名が新聞紙上に出たのは、こゝ時が最初だが、それが、翌日を出でずして、全英吉利は勿論、歐洲大陸から亞米利加にまで一時に有名になる名前であらうとは、流石の名捜査課長も知る由もない。はあ、とか何とか好い加減に合槌を打ち乍ら、多忙を極める人だから、相手が早く要點に觸れて來るのを待つて、中腰の儘焦いらして聞き流してゐた。

ナッシユ氏は語を繼いで、

『良人のクリッペン博士よりも、私は、クリッペン夫人と親しく交際してゐます。奥さんは、クリッペン夫人としてよりも、聲樂家のベル・エルモアとして知られてゐて、私も、音樂のはうの商賣ですから、その關係で相識になつた譯で、博士とは、夫人を通して面識があるに過ぎません。これだけの事をお話しゝて置きませんと、これから申上げる事がお解りにならないと思ひます。』

さうしてナッシユ氏の語つたところに依ると、そのクリッペン夫人のベル・エルモアが、先頃單獨で合衆國へ渡航して、彼地で客死し、この倫敦に一人殘つてゐた良人博士の許へ、最近その遺骨が送り屆けられて來た。亞米利加で茶毘に附されて、灰になつて歸英した譯だが、自分は、生前ベル・エルモアと親

交があつたし、また夫人が米國で死んだといふことに對しても個人的に、些さか疑ひを挾み度い二三の事實を識つてゐるので、クリッペン博士に遺骨の一見を求め、種々詳細に訊き質さうと思つたところが、博士は、何ういふものか、自分との面會を避けてゐる。が、昨六月廿九日、やつと會つて色いろ聞いてみると、何うも腑に落ちない點が多い。言を左右に托して其の亞米利加から屆けられた夫人の遺骨なるものを見せやうとしないし、説明に矛盾があつて、自分は、故人の知友として滿足出來ないから、謂はゞ他人夫婦のことには相違ないが、そこに何らかの怪事が行はれてゐるとすれば、それは單にクリッペン夫妻間の出來事では濟まされないと信ずるので、一應博士に就いて事實を究めて貰ひ度いと言ふのである。

搜査課長も、烏渡奇怪なものを感じはしたが、要するに、ナッシュ氏の話はそれだけのことで、この、個人の單なる思惑を根據に、何う取調べを開始することも出來ない。それとなく眼を注けて置かうといふやうなことで、會見を打ち切つたのだつた。

深く氣に留めないでゐると、ナッシュは、それから毎日のやうに警視廳へ押し掛けて、愈いよクリッペン博士の行動に解し難いものがある。早速探査して呉れと矢のやうに攻め立てた。英吉利の警察はこの種の私人の情報を輕視しない制度になつてゐるので、七月八日、搜査課長ウォルタア・デュウ氏は、ミッチエル刑事を隨へて倫敦北東部ヒルドロップ・クレセント街のクリッペン邸に赴いた。博士が倫敦を脱走する前日のことである。丁度博士は不在で、博士のタイピストといふエセル・ル・ニイヴ孃が出て來たが、クリッペン夫人ベル・エルモアのことに就いては、何一つ知らない樣子なので、そこで警視廳の二人はこのエセル・ル・ニイヴに案内させて、一日置きにクリッペン博士が勤めてゐる、ニュウ・オックスフォウド街アルビオン館内の齒科醫ライランス博士の診療室へ出掛けて、そこに助手として働いてゐる博士に面會した。

デュウ搜査課長の質問に對して、クリッペン博士はすつかり度を失つてしどろもどろの答辯である。最初デュウ氏が自分らは警視廳から來たと言ふと、博士はさつとサラドのやうな顏色になつたとある。搜査課長は、電鈴のやうにぴりゝと神經に響く何物かを感じて、思はず、ちらとミッチエル刑事を顧ると、刑事も異常な緊張を示し乍ら無言で合點いた。

『奥さんの事で烏渡伺ひたいことがありまして――』

デュウ氏が、慇懃な口調で言ひ出してゐた。

2

『さうですか。家内の事でおいで下すつたんですか。それは何

うち——に

近眼で小男で、風采の上らないクリッペン博士が、この不意の警官の來訪にどぎまぎして、滿足に口も利けないでゐるところは、何故そんなに狼狽しなければならないか其の理由は第二に寧ろ氣の毒な程だつた。

『さうですか。いや、さうだらうと思ひました。』博士は、やつと言葉を發見したやうに、『で、家内に關して、何か御不審の點でもあれば、腹藏なくお訊き下さい。何でもお答へします。』

が、博士は餘程顚倒してゐたに相違ない。このデュウ搜査課長との最初の會見で、彼は實に支離滅裂の返答をして馬脚の一端を覗かせてゐる。こゝでへまをやつたばつかりに、始めて相手に眞劍な疑念を抱かせたのだ。かうしてあの一世を震撼したクリッペン事件は、皮肉にも博士自身によつて口火を切られることになつた。

『奥さんは亞米利加でお故くなりになつたさうですね。』

『さうです。ついこの間亞米利加で死にました。』

『それは何日の事ですか。』

『いや、眞個のことを申上げたはうが好いと思ひます。實は、家内が死んだといふのは、嘘なんです。私の知つてゐる限りでは、まだ生きてゐるらしいのです。』

この種の致命的な自己撞着は、博士の答辯の到るところに見られる。

『しかし、亞米利加にいらしつたことは事實なんでせう？』

『さうです。それは事實です。しかし、法律上の用事で、私の代理に渡米したといふのは嘘です。』

『嘘ですと言つて、それはあなた自身が、この頃奥さんがお宅に居ないことを說明して御友人達に仰言つたことではありませんか。私の耳に這入つたのも、その友人達の一人からです。』

『私の思ひ違ひでした。誰が何んな事を言つて行つたか知りませんが、家内が彼地で急病になつて、私の許へ其の旨電報があつたといふのも、間もなく桑港で死んで火葬されて、遺骨が送り屆けられて來たと言ふのも、全部事實無根です。』

『可笑しいではありませんか、それらは凡て、あなた自身から出たことのやうに聞いてゐますが——』

『兎に角私は何かの間違ひだと思ひます。家内は生きてゐると信じます。』

『では、奥さんは何處に居るのですか。』

クリッペン博士は、強度の近眼者に特有のおどけた眼で、暫らくデュウ氏を凝視めて默つてゐたが、漸くぽつりと答へた。

『先刻から何度も申上げる通り、亞米利加に居ます。』

駿敏な搜査課長がこれで滿足しなかつたことは言ふ迄もない。こゝに始めて一つの事件として、はつきりした探索眼を

つて觀ることになつた。クリッペン夫人ベル・エルモアの行衞といふ神祕が、明らかな色彩を採つて聳視聽の前に現れたのである。それにしても、博士の恐愕と狼狽は頂天に達して、その應答は上述の如く矛盾と混濁を極め、自繩自縛的に、即座に其筋の疑惑を速めたのだつた。Murder must out といふ言葉はこゝらのことを言つたものであらう。

搜査課長デュウ氏は、直ちに博士を促して其の場からセルドロップ半月街の家へ引つ返し、看視的に彼を案內に立てゝ、ミッチエル刑事と緒に完全な家宅搜索を行つた。もうクリッペン博士は、別に惡びれた風もなく、家中殘る隈なく見せた後、箪笥を開けて、夫人の衣類や寶石類を取り出しながら、

『勿論直ぐ歸る心算で渡米したのです。こんな物をそつくり殘して行つてゐる位ですから。』

「クリッペン博士、」搜査課長は、職業的な鋭い顏になつてゐた。「もう一度訊きます。一體奥さんは何處に居るんです。」

「亞米利加に居ますよ。尠くとも、未だ歸つて來ませんから亞米利加に居るんだらうと思ひます。」

「あなたは、これが容易ならぬ事態だといふことを、確乎と意識しなければならない。私どもは、その亞米利加に居る奥さんと直接通信して、そして凡ゆる方法で、それが確かにクリッペン夫人であると言ふ事が立證される迄は滿足出來ないのです。」

「私も同様です。」

「亞米利加に於る奥さんの住所(アドレス)は何處ですか。良人の貴方が知らないといふ法はないでせう。」

『ところが、それが判らないで困つてゐるんです。仰言る通り良人として旅行先の妻の居所や動靜を知らないといふのも妙な話しですから、それで、今まで友人連にあゝ出鱈目を言つて來た譯ですが、一體妻は、聲樂家ベル・エルモアとして知られてゐて、實に藝術家肌でボヘミアンなのです。至極吞氣に構へてゐて、何處で何をしてゐるとも報せて寄こさないだけのことです。私にはそれがよく解つてゐる。あれの性質としてありさうな事です。その內に氣が向けば、何とか便りがあるでせうし、斯う言つてゐる最中、今にもぶらりと歸つて來るかも知れません。要するに彼女は私の妻で、單に私との間の問題なのですから、御心配なさらないで下さい。」

が、この場合、さうですか。それでは暫らく待つてみませうでは濟まされない。何とか至急に策を講じて、大西洋の彼岸に藝術家的ルンペン性――博士に依れば――を發揮して迷兒になつてゐるであらうベル・エルモアのクリッペン夫人を搜し出さなければならないのだ。さう搜査課長が主張すると、博士の提案で、亞米利加の諸新聞に懸賞附きの尋ね人廣告を出すことになつた。ミッチエル刑事も加はつて、三人でその廣告文案を練

つた。

同じく七月九日、土曜日、その朝クリッペン博士は、只た一人幻様子でボウトマン廣場のウインドレイス齒科學研究所に現れ、あゝしてウヰリアム・ロングに買物を頼んで、夕方、例の十六歳の少年を伴れて倫敦を脱出したのだ。前日のデユウ搜査課長との問答で完全に怖毛が付いたものとみえる。少し逃足が速過ぎて、發覺を早めたのだつた。

以下は、其後の進展を語るデユウ搜査課長の手記である。私とあるのはデユウ氏自身だ。

「翌九日、私はクリッペン夫人を失踪者と認めて、念のため夫人の寫眞と人相書を各地の警察へ配布した。倫敦中は勿論、全英から亞米利加の主要都市の警察へまで洩れなく送附した。殊に倫敦市内の搜査に最も力を入れて、私自身各署と聯絡を取り夫人の訪れさうな個處へ種々紹介を發した。私はこれらのことをクリッペン博士には默つてやつたのである。そして次の日の十日は、その反響を待ちながら、その間出て來たナッシユ、クリッペン、エセル・ル・ニイヴ等各關係者との問答録を凡ゆる角度から改めて研究してみた。が、何かしら恐しい犯罪が行はれてゐるに相違ないといふ確信を強めた許りで、搜査方針は少しも立たなかつた。夫人の消息は依然として皆目知れない。十一日月曜日、私は再びアルビオン館にクリッペン博士を訪ねたが、[illegible]、丁度その時刻に、博士は[illegible]者モントローズ嬢に[illegible]としてゐたのだ。アルビオン館には、友誼的にクリッペン博士を助手に使つてゐる齒科醫ライランス博士と、齒科醫技術者のウヰリアム・ロング氏とが居合はせて、私はこの二人から、クリッペン博士の日常に關して種々聽取することが出來た。殊にロングが、二日前の九日に、博士に頼まれて少年の衣類を買ひ揃へたと言ふ事實が、私の探偵神經を強く刺激して、私は既に博士が倫敦を、多分英國を脫出した後であることを知つた。が、その同伴した少年が誰であるか、其處まで見當が付いてゐた譯ではない。私は、ライランス博士とロングに立會はせて、其處の診療室のクリッペン博士の机を調べてみたが、赤十字看護婦會主催の舞踏會の古い招待狀と、ロングが蘇格蘭のエデンバラから寄こした挨拶と、手紙が二つ出て來たきりで、何ら眼ぼしいものはなかつた。その足で私は、ヒルドロップ・クレセントのクリッペン家へ出掛けて、もう一度徹底的に家宅搜查を行つた。庭をあちこち掘つたり、特に地下室の石炭貯藏場に注意を集中して調べた。同時に、逃走したクリッペン博士を兎も角容疑者として、博士の寫眞と人相書を全英國と歐羅巴中の主な船着場の警察に撒布した。そして、博士の立ち廻りさうな各地に私服の刑事を派して警戒

手配を張り、その反應の現れるのを待つ一方、私はミッチエル刑事を督勵して半月街の博士の留守宅に眼を離さなかつた。かうしてクリッペン事件の幕は切つて落されたのである。クリッペン夫人の謎の失踪と、それに次ぐ博士の逃亡、新聞は既に大々的に報道し出して、そろそろセンセイションになりかけてゐた。私も、何時の間にかこの祕密とがつしり四つに組んでゐる自分を發見してゐた。

豫感といふものがある。私は何うもヒルドロップ・クレセントのクリッペン博士の家が氣になつてならなかつた。何と言つて理由はないのだが、只その家が何かの祕密を藏してゐるやうな氣がしてならない。再度の家宅搜索が失敗に終つてゐるに係らず、私は諦めなかつた。翌七月十二日――この日既にクリッペン博士を乘せたモントロウズ號は大西洋を加奈陀へ指して急ぎつゝあつたのだ――と十三日の二日、私はミッチエル刑事を伴つて三度びクレセント街の家へ出掛けて、階上階下、殊に地下室の石炭置場に最善の努力を拂つて精査した。私の第六感と謂つたやうなものが、私の足を捉へて、その地下室の石炭置場から私を出さなかつたのである。」

3

石炭置場は、煉瓦の床になつてゐた。小さな石炭の山が一隅を埋めて、紙屑や枯木の枝や、家具の古いのや損れた電氣スタンドなどが散らばつてゐた。デュウ搜査課長とミッチエル刑事は、四つ這ひになつて、その煉瓦の床を検査して廻つた。デュウ氏は、臺所で見つけた小さな火掻棒で、一つ一つ煉瓦を叩いて、下が空隙になつてゐるところはないか、最近煉瓦を起した形跡は無いかと、小半日丹念に審べた。ふと火掻棒の先が、何となく容易に煉瓦の隙際へ這入り込む個處があつた。一二枚起してみた。すると其の周圍の煉瓦が、一呎四方程譯なく剝がれた。デュウ氏は、裏庭の物置から鍬を持つて來て、その煉瓦の下を掘つてみた。白く乾いた粘土で、鍬はよく通つた。四掬ひ程土を除り退けた時、ぼろぼろになつた新聞紙の切片が鍬の先に掛つた。新聞紙の下には、ドレスらしい淡紅色の絹の端が、粘土に挾まつて覗いてゐた。間もなく、人體の一部らしい腐肉を着けた骨片が、デュウ氏の鍬に載せられて注意深く掘り出されてゐた。

腐爛して離ればなれになつた屍體の各部が續々發掘されるに及んで、デュウ搜査課長は、急遽ヒルドロップ・クレセント街所轄の警察醫アラン・マアシャル博士と、有名な警視廳C・I・D――Criminal Investigation Department――のメルヴキル・マクウトン卿の立會ひを求めた。マアシャル博士が來たのは、午後六時過ぎだつた。倫敦の初夏、薄明の長い頃である。地下室

には、もう雲霧が立つてゐた。マアシャル博士が石の階段を降りて行くと、掘り返された煉瓦と土が雑然と積まれた穴の傍に、デュウ捜査課長とミッチェル刑事が腰を下ろして、矢鱈に煙草を吹かしてゐた。煙草でも吹かさなければ、耐へられない惡臭だつたのだ。穴の周圍には古新聞紙を敷いて、その上に、掘り出した骨や肉片が並べてあつた。マアシャル博士は、薄暗い電燈の下に無言で蹲居んで、鞄から取出した金屬の棒で其の骨や肉を轉がして檢べ始めた。その姿は、傳說にある、墓を發く吸血鬼のやうに、グロテスクそのものであつたとデュウ氏は手記の中で述べてゐる。應援の警官隊が到着して、發掘は續けられた。マアシアル博士は、早速試驗のため最初の發掘物を持つて一先づ歸署し、その夜は、現場を其の儘にして、發掘物も其處に殘し、家を嚴重に閉鎖して二名の警官を見張りに置いた。

翌十四日には、マアシャル博士と、內務省囑託の法醫學者ペパア氏が現場に立會つた。兩氏の監督の下に、ばらばらになつた屍體は地下室から運び出されて寢棺に納められ、埋葬場の死體置場に移された。骨片肉塊等と一緒に土中から發見した頭髮用アイロン、紅革の上履き片方、支那風の飾り扇なども、洋銀の盆に載せて棺の一隅に入れた。かうして屍體置場のコンクリイトの床(ゆか)に棺を取卷いて、鑑定の醫師達の眞劍な研究が始まつてゐた。その間にデュウ捜査課長とペパア氏は、現場の地下室の見取り[illegible]に達する穴の深さが、六呎あつた。煉瓦で作られた三呎といふ厚さを差し引いて、僅か五呎の粘土に埋まれてゐた譯である。土は註意深く平らに固めてあつて、上に並べた煉瓦にも殆んど凹凸がなかつた。發掘物の最深位は穴の縁の煉瓦の表面から十二呎、つまり煉瓦の厚み三呎を除去した地下九呎の穴の中に、その細かく切斷した死屍の全部が發見されたのだつた。

クリッペン博士にとつて、萬事は終つたと言つてい〻。苦し紛れの嘘言は、凡て水泡に歸したのだ。そして今博士は、アウル・ティ・ロビンソンなる變名と拙劣な變裝の下に、一路大西洋を高飛びの途にある。

一體このクリッペン博士の犯罪は、可哀さうな程失敗の連續だつた。後で述べるやうに先づこの細君殺しに使つた毒藥で飛んでもないへまをやり、後始末に間誤ついて辻褄の合はない嘘言を重ね、おまけに逃亡の段になつて下手な小細工を弄して自ら袋小路に飛び込むやうな愚を演じてゐる。

この時の倫敦警視廳(スコットランドヤアド)のクリッペン博士に對する捜索は、眞に火の出るやうな劇的活躍だつた。倫敦中の警察の前に博士の寫眞(拙著「浴槽の花嫁」卷頭の寫眞集に掲げたもの)が大きく貼り出されて、何處も黒山のやうな人集りだつた。全英の警官が街上に總動員の形で、通行人の一人ひとりに嚴重な眼を据えて

た。まるで戒厳令でも敷かれたやうで、この事件程の物々しい捜査振りは前後になかつたと言はれてゐる。警視廳首腦部では、博士は倫敦の何方かに潜んでゐるか、さもなければ英國内を逃げ廻つてゐるものであらうとの意見が有力で、獨りデュゥ捜査課長だけが、鳥は既に籠を飛び去つた後であることを信じて、即時海外への手配を廻らしたのであつた。

このクリッペン狩りが如何に大變な騒ぎであつたかは、未だに倫敦の場末の寄席などで、次のやうな地口が聞かれるのでも想像されやう。掛合噺のやうなもので、下等な笑話である。

「クリッペン博士を搜して三人の探偵が、倫敦中を歩き廻つてゐると、果してそれらしい人物に出つくはした。プリンス料理(レストラン)店の前から、三人こつそり後を尾けて行く。が、ロマノ料理店の人混に紛れて、一時見失つて終つた。さては晦(ま)かれたかと三人は大悲觀、ぼんやり邊りを見廻してゐると、男は、シンプスン料理店へタキシーを走らせて往く。矢鱈にレストラン許り廻つて歩くだけでも大いに怪しい。彼男(かれ)こそてつきりクリッペンだそれ、今度こそは逃がすなと言ふんで、三人の探偵が、そのチィプサイドの料理店シンプスンの扉(ドア)を開けて勢ひよく躍り込むと、今の男が、逃げるやうに地下室へ駈け降りて行くところだ

「おいつだ！」

先頭にゐた名探偵ガルソン氏が叫んだ。三人は獵犬のやうにその殺人犯を追つて地下室へ跳び下りる。が、男は逸早くWCへ這入つて、ばたんと扉(と)を締めてしまつた。そして、内部(なか)から鍵を廻して、大いに安心したらしい樣子である。

十五分程WCの前に立つて、呼吸を凝らして待つてゐたが、何時まで經つても一向出て來さうもないので、

「おいおい、好い加減にしろ。」ガルソン探偵は戸の隙間から聲を勵ました。「そんなところに隱れたつて駄目だぞ。お前がクリッペンだつてことはちやんと判つてゐるんだ。」

「冗談ぢやあねえ。」WCの中から男が答へた。「俺はクリッペンぢやあねえ。實あクラ――。」

I din't, Crippen, I'm cra――!

と言ふのだが、説明は不要だらう。只倫敦邊りではWCを貸りによく料理店へ這入る。下卑た洒落だが、これが今だに行はれてどつと笑はせてゐるところを見ても、クリッペン事件が何んなに有名なものであり、また當時の騒動が如何に大きかつたかゞ判る。

犯人逮捕に無線電信が利用されたのは、このクリッペン事件が最初である。この意味で、一つの歴史的犯罪でもあつた。

情婦のタイピスト、エセル・ル・ニイヴに男裝させて、十六歳の息子と稱し、クリッペン博士はモントロウズ號に乘り込んでゐる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ケンドル船長は戰慄を以て[illegible]入つた。

七月十二日拂曉、加奈陀キュベックへ向けて白耳義のアントワアプを拔錨したロイド汽船 The Montrose の船長（Captain Kendall）は、出帆後二時間、既に、怪しい父子連れが乘船してゐることに氣が付いた。茶色の背廣服を着た、十六七の背のすらりとした美少年が、父親らしい四十七八のずんぐりした醜男と腕を組んで、親しげに甲板を歩いてゐるのを船橋(ブリッヂ)から認めた。これだけでは別に怪しいことはないが、何氣なく見てゐると、二人は、見られてゐるとは知らずに、頻りに父と子の間らしくない色つぽい愛情を示し合つてゐる。息子が父親の手をぎゆつと握ると、父は少年を顧みて溶けさうににつこりする。脇に手を廻す。これが新婚旅行の夫婦とでも言ふなら、船長も慣れてゐて、見て見ない態をするだけだが、男同士の、しかも父子(おやこ)といふ觸込みなので、ケンドル船長は鳥渡變に思つた。其の瞬間から、この一組の船客にそれとなく眼を付けてゐる。

尤も、注意があつた。前日の十一日に、博士の逃亡を知つたデュウ捜査課長は、萬善を期して、英國に近接した歐洲各主要港に、逮捕を依頼して博士の人相書を打電してある。これが、モントロウズ號の出帆間際にアントワアプのロイド汽船代理店へ入電(はい)つて、ケンドル船長は、特に船客の間に眼を光らせるやうに耳打ちを受けてゐた。

[illegible]
[illegible]發見の旨を報告してゐる。これがデイリイ・メイル紙の聞知するところとなり、間もなくケンドル船長の特別寄稿として、The Daily Mail 紙上に特號見出しの下に發表され、一つには、無電が實用に供されて未だ間もない頃なので大センセイションになつた。

次は、そのデイリイ・メイル紙に載つたケンドル船長の寄書である。

4

「ロビンソンと名乘る父子つれがクリッペン博士に相違ないことは、私は直ぐ氣が付いた。が、翌朝まで默つてゐて、一等運轉士ビイハン君にそつと話すと、ビイハン君も、同じ疑ひを感じてゐたところだと言ふ。そこで、騷ぎ立てては却つて不可ないと固く口止めして、感付かれないやうに注意し乍ら、二人で看視を續けて行くことにした。私達は何時も微笑して、愛想よく二人に應對した。午餐(ひる)の時、私は、食堂の外に掛けてあつた二人の帽子を檢査した。クリッペン博士の帽子には、裏に、Jackson, Boulevard le Nord と商店のスタンプが押してあつたが、ル・ニィヴの帽子には、商標紙を剝ぎ取つた跡

つて、大き過ぎると見えて緣革の間に新聞紙を卷いて詰めてあつた。男裝のエセル・ル・ニイヴは、さう思つて見る故か、何處から見ても女である。嗜みの好い、淑やかな女だ。完全に博士の掌中に操られてゐて、博士も亦一瞬間もエセルの傍を離れない。そしてそのエセルの男裝は滑稽な程、誰が見ても適つてゐないのである。臀部の周りの洋袴がはち切れさうになつて、丁度腰掛けるところに當る縫目が少し綻びてゐる。其處を大きな安全ピンで留めてゐた。

看破されてゐることに氣がつかない樣子だから、私は二人を逮捕しなかつた。何うせ海の上で、逃げやうとしても逃げるところはないのだし、他の船客を騷がせることも好ましくないので、二人にその短い自由を享樂させて置く事にした。が、クリッペン博士は狂的な心理狀態にあるに相違ないから、何時自殺するか、それとも發作的に暴れ出すか判らないので、絕えず嚴重に看視してゐたことは勿論である。ボウイに命じて船室內の所持品を調べさせてみたが、拳銃は持つてゐない樣子だ。寫眞にある口髭は綺麗に剃り落して、代りに頤髯と頰髯を生やしかけてゐる。氣を付けてゐると、博士は神經的に、日に二三度も鼻下に剃刀を當てゝゐることを發見した。食後など、甲板で他の船客達と立話してゐる所を見ると、博士は、頻りにその伸びかけた頤髯を引つ張つて大得意の態である。日增しに、醫者と云ふよりも農夫のやうに見えて來る。しかし、眼と眼の間柱に殘つてゐる眼鏡のあとだけは、少しも薄らがずに、出て來た日と同じだつた。

エセルと甲板に椅子を並べて、博士は始終本を讀んでゐる。或ひは讀む振りをしてゐる。食慾は盛んで、船醉ひの氣味も見られない。私はよく博士とあちこち旅行の話しをする。博士は可成り步いてゐて、加奈陀のトロント、亞米利加ミシガン州デトロイト市、加州沿岸など、何時も話題に上つた。息子の健康が思はしくないので、カリフォルニアへ療養に伴れて行く途中だと言つた。この「息子の病氣」の話しになると、博士はうつかり醫學の專門語を挾んで、直ぐ後で氣が付いて私の顏色を窺ふやうにした。加奈陀へ着いたら、湖傳ひに汽船でデトロイトへ出たい、さうも話した。

このH・H・ロビンソンの正體に氣がつくと同時に、私はビイハシ首席運轉士に命じて、クリッペン事件の載つてゐる船內の英字新聞全部を高級船員談話室に集めさせ、博士の眼に觸れないやうに深甚の注意を拂つた。一度、何か私の言つたことが可笑しくて、博士は大きな口を開けて笑つた。其の時ちらと見ると、案の條總入齒である。クリッペン博士が總入齒をしてゐることは、私は、人相書に依つて知つてゐた。

食卓に於る「少年」の態度は、何う見ても女である。ナイフ

とフォウクを乗せるに使ふ工合に、おちよぼ口を開いて物を嚙むところ、匙から果物を取るのに拇指と人指指とを使ふ様子など、「彼」は男裝してゐるだけで、少しも男に成つてゐない。これでは例へ船中で發見されなくても、早晩人眼を惹いて露れたことであらう。食卓では、博士は絶えず「彼」に最大級の關心を示して、胡桃を割つてやる。サラダを半分配けて與る。大變な奉仕振りだ。七月廿五日の夜、社交室に船客の音樂會が開かれた。私も顏を出すと、聽衆の中に並んで腰掛けて、「ロビンソン父子」が打ち興じてゐる。私を見つけて、「ロビンソン」は自分の横に空椅子を持つて來て私を招いた。そして素人の獨唱やピアノ程面白いものはない。今夜は大いに愉快だと言つて、「息子」と一緒に笑ひさゞめいてゐた。翌朝博士は、前夜誰かゞ歌つた "We All Walked into the Shop" の流行唄が氣に入つたなどと私に話しかけた。その唄は一晩中自分の頭の中で鳴り響いてゐたと言つて、低聲に一節歌つて聞かせたりした。「息子」も大喜びで、船室へ歸つてからも、何時迄も笑つてゐて困つた位だ。そんなことを言つて、博士は上機嫌だつた。また何時か何かの話しで、亞米利加の酒のことが出ると、博士は、倫敦で亞米利加風の酒の飲まれる所はセルフリッヂの酒場だけだと通振りを示した。

二三度私は、甲板を歩いてゐる博士の背後から、「ロビンソンさん[illegible]倒してゐた[illegible]て、振り向いた。そして、冷い汗の[illegible]だと繰り返し繰り返し辯解した。よく船の位置を示す[illegible]の前に立つて、一日一日と減る航海の日數を算へてゐるのを見た。

流石に無線電信が氣になるとみえて、始終不安な氣に空中線を振り仰いだり、電信室を覗いて、技師の指先に青い火花が散るのを、小半日も驚異をもつて眺めてゐる。何といふ素晴しい發明だらう——頻りにそんなことを言ふと技師が私に話した。

エセル・ル・ニイヴは幸福そのもののやうだ。多分クリッペン博士の犯罪を知らないのかも知れない。が、大體意思の弱い、何うにでもなる女である。船中何處へでも博士にくつ着いて行く。博士が顏を見る度びに、エセルは待つてゐたやうに、媚びの微笑を送るのだ。まるで博士に催眠術的に呪縛されてゐるやうに見える。それが、男裝してゐることを忘れての情婦の嬌態であるだけに、見てゐて此の上なくグロテスクである。

ベル島が見えて來ると、博士は急に落着きを失つて、五月蠅い程色んな事を訊く。何處に停船して水先案内を待つか、パイロットは何處から來るか、パイロット・ステイションから目的港のキユベックまで何時間費るか。そして早く上陸してデトロイトへ行き度い——つい今し方まで、クリッペン博士とエセ

ル・ユイヴは、この船長室で私と話し込んでゐたところだ。いま出て行つた許りである。合衆國のこと、昔ゐた桑港の思ひ出、博士は、いま桑港へ行つてもすつかり勝手が違つてゐて判るまいと言ふ。十八年前に鳥渡住んでゐたことがある限りで、其後一度も行かないのだから、何んなに變つてゐることか――博士がさう言つて笑ふと、エセル・ル・ニイヴも、つゝましやかに微笑する。私が、たうとうお別れですねと言ふと、博士は手を伸べて私と握手しながら、自分はカリフォルニアを愛する。此兒のために、加州に陽當りの好い小さな果樹園を買つて落付く心算だと言ふ。そして今出て行つた。

キユベックの波止場には、本船からの無電で、警官が人垣を作つて待つてゐるのだ。この稿を終るに當つて、私は何かしら彼のために祈りたい氣がする。

署名 Kendall, Commander.」

これより二年前、一九〇八年の四月、先頃死んだコナン・ドイルが、そろそろ探偵小說家として知れ出した頃、或る日倫敦ヘイマアケット街のデヴオンシヤア倶樂部へ行くと、エセックス州から出したアダムスといふ醫師の手紙がドイルを待つてゐた。

拜啓。小生は貴下の物されたる探偵小說中の毒殺事件を讀み、毒藥なるものに學術的興味を感じ居る者に候。從つて甚だ烏滸がましき次第に候へ共、將來、毒物に關する作の上に何らかの御參考にもならばやと、未知の無禮を顧みず茲に一筆啓上仕候。實は、小生目下新しき毒殺の方法と、それを題材に小說の筋を考案致し居り、近く御面接の機を得てお話し申上げ度く、貴作の材料としてお役に立たゞば幸甚に候。御面會の時日、場所等御指定に依り早速上京仕る可く候。

が、丁度その時ドイルは、一週間程して馬耳塞から埃及旅行へ上る豫定だつたので、三個月ほど倫敦を空けるから歸つて來たら改めて報せると返事を書き送つた。そして三個月後に埃及から歸つたドイルは、デヴオンシヤア倶樂部で、そのアダムスと名乘るエセックス州の醫師に會つてゐる。アダムス醫師は、不具的に小柄な男で、赤茶けた口髯と、滑稽なお凸額と、珍しく分の厚い圓い眼鏡の奧に絕えず瞬いてゐる、不思議な眼とを有つた田舍の開業醫だつた。ドイルの小說に出て來る毒藥に非常な興味を感じたと言つて、

『お作の一つに、古い羅典語の奇書「ヴエニスの秘密」のことが出てゐますが、あの本には、當時の十人會議の毒藥調製法が載つてゐると言ふことではありませんか。原本の處方は、未だにヴエニス市の記錄保存所に秘藏してあるさうですね。十人會議は、調劑師を雇つて、この藥方を授けて秘藥を練らせ、それで、オー

氣付かれないやうに長くかゝつて片つ端から政敵を殺したのだと聞いてゐます。」

「さうです。」ドイルが答へた。「稀代の珍本ですよ。私の有つてゐるのは、一八六九年のペテログラアド版で、ストックホルムの古本屋の棚で發見けたのです。今伊太利の別莊に置いてありますが――。」

「それは殘念です。實は、けふ斯うしてお訪ねしたのも、鳥渡その本を見せて戴きたいと思ひまして――それでは今度の機會に是非見せて頂きませう。」

それからアダムス醫師は、東洋の旅行談や、船醫として方々歩いた時のことや、趣味的に毒物學を研究してゐる事などを話したが、實際彼は、毒殺事件には必ず法廷へ持ち出される、あの有名なウイットハウス博士の毒藥便覽をすつかり暗記してゐる程で、その毒物に關する造詣は可成り確固したものに思はれた。

5

この會見でアダムス醫師は、ドイルの識らなかつた、最近發見された二三の猛毒に就いて種々怪奇な現象を物語つたり、その人體に及ぼす作用を說明したりしてゐる。

殊に或る新しい毒藥――其の名稱は明記することを許されない――に彼は兇器に毒藥を向けてゐて、それを皮下に注射すれば、何んな專門家が調べても、科學的方法に依つても、罪ある心臟の結滯に由る急死としか檢案出來ない様な症狀を呈するといふた。つまり、この毒を使へば、何ら危險の懼れなしに、安心して殺人の目的を達することが出來る譯である。

「尤も、死後直ぐ屍體が發見されゝば、その毒の有つ一種獨特の臭氣のために或ひは怪しまれるかも知れません。しかし、この臭ひは、死後三時間經てば完全に消え去ります。三時間以内でも、死者が喫烟常習の場合には、左程顯著な臭ひではありませんが、この些少の不安を除く爲には、その注射の痕の針孔、擦傷等を鳥渡綿繃帶で擦つて置けばいゝのです。さうすれば、何んな病理學者でも眞の死因を發見することは出來ません。」

斯ういふ前置きの後に、アダムスはドイルに、迷宮入りの殺人事件をテイマにした一つの精緻極まる小說の筋を話したのだつた。彼はその主人公の犯人に、細部に到る迄凡ゆる注意を拂はせ、實に驚く可き用心の下に、遂に何らの手懸りを殘さない巧妙な犯罪を組み立てさせたのだ。面白い思ひ付きには相違ないが、犯人が捕まらないのでは、悪魔的で、ドイル物としては不健全である。第一、萬能のシャアロック・ホルムスさへも默殺されて終ふのでは、讀者が承知しない、ドイルが苦笑した作

ら、

『それは一寸困ります。折角ですが何うも使へませんね。』

と言ふと、アダムスは笑つて、

『稀(たま)にはこんなのも可いですよ。利口な人間なら、人を殺しても斷然捕まりつこないと言ふことを公衆に知らしてやるのも愉快ぢやありませんか。』

その後、ドイルとアダムスは度び度び會つて、アダムスは何時も、用意周到な毒殺者を主人公にした、そして遂に發見されないで終る、幾つもの緻密な探偵小説の筋をドイルに持ち込んだが、ドイルは單に彼を、例のテイマ賣込病患者の一人と觀て、眞面目に相手にしなかつた。間もなくドイルは又伊太利へ旅行に出たりして、何時からともなく交際は切れた。そしてその隱れたる毒物研究者(トクシコロジスト)、愛想のいゝ小男の田舎醫師のことは、忘れるともなく、ドイルの頭腦から消え去つて往つた。

それから一年程して、一九一〇年七月廿二日、何氣なく朝刊を手にしたコナン・ドイルは、其處に大きく、往年の訪問者アダムス醫師の寫眞を發見して驚いた。が、寫眞の下には、アダムスとは無かつた。Doctor Hawley Harvey Crippen となつてゐて、細君殺しの犯人と言ふことだつた。

空想の上では、あれ程完璧だつた毒殺者も實際には、かうして他愛もなく捕まつてゐる。

これより先、一八八九年の初春、場處は紐育である。

ホウレイ・ハアヴエイ・クリツペン博士は、コウラ・タアナ——Cora Turner——と呼ぶ十七歳の美少女と戀に落ちて結婚し、聖(セント)ルヰス市に移つて新婚生活を始めた。が、女の眞正(ほんとう)の名は、Kunigunde Mackamotzi と言ふ變てこ極まる姓名。波蘭人を父として獨逸女の腹から出た典型的な移民系亞米利加人である。このやゝこしい雜種、コウラ・タアナこと本名クニグンデ・マツカモツツキ、別名ベル・エルモアこそは、後年地下室の粘土の中から手は手、脚は脚と複雜な現れ方をしたクリツペン夫人である。

クリツペン博士は、ミシガン州コウルドウオウタア(Coldwater, Michigan)の生れ。結婚した時は三十二歳だつた。重罪犯人は、犯行直後、一度は飛ぶやうに故鄕を訪れるものだと言はれてゐるが、あの「R・T・ロビンソン」が「病身の息子」を伴れて密にデトロイトへ走らうとしたのも、この公式的な心理からであらう。以前十年程倫敦に留學して、醫學を修めてゐる。歸米後は、オハイオ州クリイヴランド市の大學病院、紐育市立眼科病院(オフサルミック)など彼地此地勤め歩いてゐるし、費府やトロントで開業してゐたこともある。物靜かな學者肌で、かつて怒つたことのない内氣な性格だつた。それが、クニグンデ・マツカモツツキ孃と聖ルヰス市に新居をトして開業したのだが、相當流行つて、間もな

く市では自殺した名士諸に交つてゐる。

この儘で済めば何事もなかつたらう。が、新たなクニグンデは、些さか素人離れのした声を有つてゐた。これが御當人は大變な自慢で、結婚後六個月、飛んでもない野心を抱き初めた。紐育へ出て聲樂の稽古をして、歌劇に出演したいと言ふのである。これは以前からの彼女の夢で、この目的を遂する爲に博士を利用す可く結婚したと言つてい〻。野心は日夜彼女を燃やして、一度紐育の舞臺に立つ機會さへ與へられ〻ば、プリマドンナとしての成功疑ひ無しと自信に滿ちてゐた。實際、クリッペン博士に會つた當初から、コウラ・タアナアのクニグンデ・マッカモッツキは、私かに思ひ付いてベル・エルモア――Belle Elmore――なる舞臺名を名乘り、相當知名の藝術家を氣取つてゐる。一度も舞臺に立つたことは無いのである。

一九〇〇年に、博士は、Munyon 專賣藥通信販賣會社の支店長として倫敦に赴任した。シヤフツベリイ街に事務所を置いて、當座は商賣も好かつた。博士の人柄には持つて來いの仕事だ。その人當りの柔かな重厚な態度が英吉利人を惹きつけて、會社にも顧客にも受けが宜い。相當な人々の間に、交際はめきめき廣くなつて往く。

初め博士は獨りで倫敦へ來てゐたのだが、四個月後に紐育に、移つてゐたベル・エルモアがブランスヰック・スクエアに現れる迄に、を棄て、倫敦トテナム・コウト街を一寸入つた南クレセント街の貸人のアパアトメントに來て同棲し出した。後夫妻はブルウムスベリイ區ギルフォウド街に住んで、犯罪の五年前に、ヒルドロップ・クレセント三九番地――39 Hilldrop Crescent――に移つた。カムデン・ロウドから横に切れた、樹の繁つた静かな住宅街に、一つ飛び離れたやうに建つてゐる建物で、これが慘劇の家である。

此家へ移轉する前に、會社の急要でクリッペン博士は烏渡紐育へ歸つてゐる。夫人のベル・エルモアはギルフォウド街の下宿へ預けて行つた。二個月程して歸つて來ると、夫人が告白して言ふには、自分は博士の留守中、ブルウス・ミラアといふ男と親しくなつた、ブルウスは自分を愛してゐる。何時も一緒に觀劇や晩餐に出掛けたと言ふのだ。實際、博士の陳述に依るとその時以來夫人の態度が一變して、何度も、面と向つて、もう博士を愛してゐないと言ふやうになつた。Bruce Miller はミユウジック・ホウルの歌手で、現在も倫敦に居るといふことだつた。そのために夫婦の間には爭論の絶えた事がなく、仲中合はせの日が續いてゐる。が、友人達の手前は、夫婦とも巧みに喧嘩を隱して、仲の好い夫婦のやうに見せ掛けてゐた。

ユウラ・クリッペン夫人は、依然ベル・エルモアの舞臺名(ステイヂ・ネーム)を振

廻してゐるが、倫敦の舞臺に立つ事は始めから斷念して、その代り俳優や寄席藝人などと手當り次第に交際を結んだ。ヴァラエティで知られてゐるボウル・マルテネッテ夫妻などもこのベル・エルモアの親友だつた。ベル・エルモアは、大きな黒い眼と、漆黑の髪と、豐かな頬とを有つた肥り氣味の女で、何時も眼の眩むやうな派出な衣裳を着けてゐた。彼女のサアクルでは極樂鳥といふ綽名だつた。

ヒルドロップ・クレセントの家で、ベル・エルモアが連日連夜ミユウジツク・ホウル關係の友達を集めて、どんちやん騷ぎをやつてゐる。學究肌のクリッペン博士は、それを苦々しさうに冷たい眼で眺めてゐる。博士は、夫人に飽き飽きしてゐるのだ。その見て呉れがしの衣服、絶えず口汚たく罵り續ける金切り聲、限度を知らない虚榮――この不幸な結婚から解放され度い氣持ちは、其處に博士の前に「他の女（アザー・ウーマン）」といふ第三の存在が現れると同時に、急に博士の頭腦の中にはつきりした形を取り出した。小さな、平凡な、意氣地のない、細君の尻の下に敷かれ通して來た巷の一醫師クリッペン博士の胸に、この中年になつて、初めて戀が來たのだ。その頃タイピストとして雇入れたエセル・ル・ニイヴである。世の中の苦勞と我儘な細君の御機嫌取りに疲れ切つた小市民階級の醫者――この前後から博士は宗教に對して異常な熱意を示し出してゐる――にとつて、この突如自分の前に咲いた清楚な花のやうな處女は、彼の人生を救つて呉れる唯一の女神と見えたに相違ない。殆んど宗教的な感激で、この戀愛は一時に燃え上つてゐる。夢を追ふやうな青春の戀愛ではない。虐げられた中年者の燃燒的な戀だ。忽ちエセル・ル・ニイヴは、嫌應なしにその疾風のやうな博士の激情に完全に包み去られてゐた。斯うしてヒルドロップ・クレセントの家には、何時もヒステリカルに昂奮してゐる狂噪病患者のやうなクリッペン夫人ベル・エルモアと、反對に、表面古沼のやうに冷靜で沈鬱な博士と、この二組の生活が、何らの交叉なく營まれてゐる。こゝまでは、其處らにざらにありさうな家庭風景である。

舞臺に打つて出る事を諦めて、ベル・エルモアは失望の極自棄氣味になつてゐたのだらう。非常なお天氣屋で、また常識外れの迷信家でもあつた。訪問先の家に綠色の壁紙が張つてあると、不吉だと言つて決して其の部屋へ這入らなかつた。みどり色の嫌ひな女は西洋に尠くないが、ベルは、綠色を憎むこと病的なものがあつた。桃色（ピンク）が彼女の幸運の色（ラッキイ・カラー）だつた。半月街の家は、壁紙は勿論、カアテンも寢臺掛けも椅子蒲團（クッション）も、全部桃色だつた。地下室の炭置場からずたずたの屍體となつて發見された時も、淡紅色（ピンク）の寢卷に包まれてゐたと前に言つた。幸運の色（ラッキイ・カラー）も餘り當てにならなかつた。兎に角細君は派出な騷ぎが好き、年中着飾つて噪ぎ廻つてゐなければ氣が濟まないのに反し、良

人は[illegible]を使つてゐる[illegible]
こなかつた。

仲間(アヒ)は金費ひの荒い藝人達である。それに倣してやつて行く、ために、ベル・エルモアも隨分無理な遣繰りをした。女中の置ける身分ではないから、自宅で晩餐會のある時など、ベルは客の來る間際まで自分で料理して、きんきん吸鳴りながら博士を追ひ使ふ。そして直ぐ、貴婦人のやうにめかしこりして應接間へ出て行くといつた調子だ。こんな貧乏世帶を運轉して人に御馳走したりしてゐるうちに、段々妻は、自分に對する愛を失つて往つた樣子でした――後で公判廷で博士が言つてゐる。人前だけ仲好く見せかけて、夜更けて寢室へ這入ると別人のやうにいがみ合ふ夫婦。これも世間には珍しくないやうだが、忘れてならないことは、これらは凡て、一方的に博士の陳述だけである。死人に口無しで、ベル・エルモアの話は何ら殘つてゐない。

6

購求者氏名―― Munyon 會社內、エッチ・エッチ・クリッペン。

購求者住處――五七・六一區、アルビオン館(ハウス)

購求毒物名稱及量――非沃斯(ヒヨスシン)××××五グレン、約八厘五毛強。

購求目的――[illegible]

販賣者署名――[illegible]

年月日――一九一〇年一月十八日、

Lewis & Burrows (藥店)、108 New Oxford Street の藥舖に斯く記入してある。

クリッペン博士は、この×× Hyoscin hydrobromide なるものをベル・エルモアに××せしめたのだ。これを殺人に使つたのも、この事件の最初である。非沃斯××××は小さな結晶狀をしてゐる。

半月街の家は、クリッペン博士にとつて日増しに牢獄のやうになつて往つた。ベル・エルモアとブルウス・ミラアとの間には不義の戀が進展してゐるらしく、彼女は安價な流行に浮身を窶して、毎日のやうに外出するが、博士はこのブルウス・ミラアなる男に一度も會つたことはなかつた。後でクリッペンこの裁判の時に證人として喚問す可く警察が大々的に搜索したが、遂に發見されなかつた。ベル・エルモアの友人達に訊いても、そんな男は誰も知らないと言ふ。何うも架空の人物らしいのである。浪漫的なベル・エルモアが、小說のやうな三角關係を心に描いてゐるうちに、何時しか實在の情夫のやうに自分でも思ひ込むに到り、さも眞しやかに良人博士に告白した丈けのことかも知れない。

クリッペン博士の定收入は週三磅から四磅のもので、他の病院や賣藥會社に關係して其のコンミッションを集めても、全部で一週間に精々十乃至十五磅が關の山だつた。ソヴェレン製藥會社支配人、ドルウト療養所醫員と言つたやうに、度々仕事を更へたが、何れも泡沫會社で、間もなく失敗してゐる。株式會社耳腺病院といふ變なものへも入社つたが、これは六個月で潰れて終つた。そこで一九〇九年に又ニユウヨオクへ歸つたものの、その口も、翌一九一〇年一月三十一日に解雇されて、ニユウ・オックスフォウド街アルビオン館内の齒科醫ライランス博士の助手のやうな事をして働くことになつた。傍ら其の以前から、あのボウトマン廣場十三番地ウインドレイス醫科學研究所の建物の中に小さな診察室を有つて、名義だけは、何うやら獨立の開業醫だつた。が、患者などは何日にも來たことがなく、犯罪當時の唯一の收入の途は、ライランス博士の助手として受けるささやかな給料だけだつた。

こんなことでベル・エルモアの贅澤が滿足される譯はない、が、ベルは、亞米利加時代も倫敦へ來てからも、可成り華やかな生活を送つてゐる。その資料である衣服、寶石、その他の裝身具等は何處から來たか。如何はしい男の友達が多勢あつて、それらから始終贈物を受けてゐたと言ふことは證明されたが、何故そんなに男達がベル・エルモアに金品を呈したか、其處迄は證明されなかつた。この頃のベルは、もう人の妻として亂脈を極めたものだつたらしい。

自分でも斯ういふ結婚生活に耐へられなくなつて來た。何度も言ふ通り、博士は、安つぽい、面白くない、風采頗る上らない小男である。妻の交友等には何らの興味も示さないで、何時見ても不愉快な顏をしてゐる。博士は朝起きて、臺所で茶を沸かして妻の寢臺の傍へ持つて行つて、冷たい臺所で獨り朝飯を濟まして仕に事出て行く。夜は九時十時に歸つて日一つ利かずに寢て終ふ。夫婦關係は疾うに無くなつて、相互に石のやうに無關心だつた。

その間も、博士は每日事務所でエセル・ル・ニイヴに會つて、女の下宿してゐるジャクソン夫人の家へもよく遊びに行つてゐる。其家では彼は穩やかで快活な紳士として知られてゐた。その博士にとつて、愈〻妻のベル・エルモアは自分の幸福を邪魔する存在でしか無くなつて來た。何とかして――ぼんやり乍ら、博士はそんなことを考へ出してゐた。

ミユウジック・ホウル婦人ギルドといふものを作つて、ベル・エルモアは相變らず家を外に出步いてゐる。事態は一層惡化して、爆發期に近づいた。今まで靜的に無關心だつた間柄が動的な憎惡に變つて、ヒルドロップ・クレセントの家に、每夜激しい口論が交された。それは、利害觀念の強い中年者の間の、感

情の隔離から來る醜悪な爭ひで、其晩血腥い慘劇を暗示するものがあつた。ベル・エルモアは、衰へつゝある若さに、焦りを感じ出してゐたかも知れない。彼女は三十五歳だつた。

博士は、自由を思つた。手つ取り早い自由を思つた。そして博士が、自由を想ふことは、エセル・ニィヴとの燃焰的な愛慾生活を想ふことだつた。反射的に博士は、机の抽斗の一つを振り返つた。其處に、今年の一月買つて置いたハイオシン・ハイドロブロマイドの紙包みが這入つてゐる。弱氣な博士に、異常な破壊力が湧き起つて來た。彼は、ベル・エルモアの背中にそつと狡猾な微笑を送つたに相違ない。

ベル・エルモアは、近く自分を棄てて家出する心算だと友達に言ひ觸らしてゐる。さうだ。この女さへ居なくなれば、自分はエセル・ル・ニィヴを公然と引入れる事が出來るのだ。この女の着物や寶石や裝身具が、何故あの貧しいエセルの所有であつてはならないのか？　さうだ。妻は、一日も早く居なくなるがいい。何處かへ行つて終ふがいい、――二度と歸らないところへ。家出すると言ひいひしてゐたのだから、誰も不審を抱く者はないだらう――。

ベル・エルモアが、居なくなつた。

その晩は、寄席藝人のマルテネッテ夫妻が晩餐に招待されて來て、クリッペン博士とベル・エルモアは、仲好ささうに二人を款待した。博士は殊に上機嫌で、始終陽氣に二人を笑はせた。それは、今夜は特に、夫婦の間がうまく行つてゐることを人の前に示して置く必要から來た、博士の努力だつた。マルテネッテ夫妻は、夜遅く博士とベルの笑ひ聲に送り出されて歸つて行つたが、その時夫妻の見たベル・エルモアが、生きて見られた最後の彼女だつた。兇行は、其の深夜から早朝にかけて行はれたのだ。

次ぎの日の正午、前夜マルテネッテ夫人が少し風邪氣味だつたので、博士は態々同家を訪れて夫人を見舞つてゐる。夫人は寢込んでゐたので、主人のマルテネッテが應接間で博士に會つた。

その時、

「家内は大したことありませんが、奥さんこそお疲れでしたらう。昨夜大分晩かつたから。」

とマルテネッテが言ふと、博士は、

「なあに、あれは活動家ですから、平氣ですよ。今朝早く何處かへ出て行きましたよ。」

微笑して答へてゐる。その足で博士は、チヤアリン・クロス街の質屋へ廻つて、ベル・エルモアの指輪と耳環で八十磅を入質した。

すると、其の四日後、倫敦ミュウジック・ホウル婦人ギルド

の書記メリンダ・メイ孃―― Miss Melinda May ――の許へ、同ギルドの財政委員ベル・エルモアの自宅ヒルドロップ・クレセント三十九番から、エセル・ル・ニイヴが使ひに立つて一通の書面が屆けられた。

手紙は、タイプライタアで打つてあつた。

「親愛なメイさん――亞米利加にゐる親類の者が急病になつて、今直ぐ渡米しなければなりません。直ぐ歸るつもりですが、兎に角一時委員のはうは辭させて頂きます。徹夜で荷拵へをして、お眼に掛けたいやうな騷ぎですのよ。歸つて來たら直ぐお報せしますが、出發前はこの有樣でお眼にかゝる暇は御座いません。どうぞ皆樣に宜しく。大急ぎで、さようなら――ベルより。」

四週間程して、マルテネッテ夫妻が、今度はクリッペン博士の手紙を受取つてゐる。

「親愛なるクララとポウル――御無沙汰お許し下さい。亞米利加へ行つたきりベルから便りがないので、心配してゐましたところ、今電報が來ました。詳しい事は判りませんが、急性肺炎で危險な狀態だと言ふのです。離れてゐての病氣です、お察し下さい。私も直ぐ亞米利加へ出發しやうかと思ひますが、今其後の容態を問ひ合はせ中で、返電を待つてゐます。私どもの事でお騷がせしたくありませんけれど、若し私が渡米するやうなことがあつたら、御迷惑でも一寸あとからおひします。何の途、次ぎの電報があり次第お訪ねましすから、種々相談に乘つて下さい。私はもう行くつもりで、船など調べてゐます。お二人ともお變りありませんか。では何れ――H・H・C。」

これが忽ちベル・エルモアのグルウプの間に擴まつて、Mrs. Eugene Stratton といふ人が例のミユウジック・ホウル婦人(レディス)ギルドを代表して博士の所へ見舞ひに驅け付けたりしてゐる。

7

このユウジン・ストラトン夫人に、博士は、心勞に俏れた顏を見せて、亞米利加に於る妻の病氣を一層詳しく話した。そして、今にも死を報じて來るかも知れないと居ても起つても居られない樣子で、ストラトン夫人は慰める術も無い程だつた。

果して翌朝早く、ヴイクトリア停車場內の局から打つた電報が、マルテネッテ夫妻の家に配達された。

『ベル昨夕六時死去の旨來電。アニイにも電話賴む――クリッペン。』

この Annie といふのはユウジン・ストラトン夫人の事である。

同時に The Era 紙にクリッペン博士の名で夫人ベル・エル

モアの死亡廣告が載つて、友人連中にも一々通知が發しられた。皆無批判にこのベルの死を受取つて、ほやほやの鰥夫クリッペン博士に一同の同情が集まつた中に、こゝに何となく變な臭ひを嗅いだ者が二人あつた。其の一人が、後から警視廳にデュウ捜査課長を訪ねてこの事件の口火を切つた樂器屋さんナッシュ氏で、もう一人は Mrs. Louise Smythson と言つてクレセント街の隣家に下宿してゐる矢張り音樂好きの老婦人だつた。この二人にそれとなく試問されて、博士は、ベル・エルモアが渡米する時乘つて行つた船の名に問へたり、出帆した港を訊かれて間誤付いたり、早くもちよつぴり尻尾を出し掛けてゐる。殊に博士は夫人が客死した其の最後の居所を知らないと言ふので、ナッシュは一時に、眞劍な疑惑を感じ出した。この二人を滿足させて欺瞞を續ける爲に、博士は、二人の目前で、自分の從妹だと言ふ Mrs. Robert Mills, 773 Green Street, Brooklyn, New York なる全然假想の人物へ、次のやうな出鱈目の手紙を書き送らなければならなかつた。この手紙が附箋付きで紐育から返送されて來る前に、博士は、エセル・ル・ニイヴの手を取つて姿を晦ます心算だつたのだ。哀調切々たる文句である。

「吾が親愛なるルキスとロバアトよ——余がこの悼きものを失ひしことを、如何にして卿等に告げ可き。ショックは餘りに大きく、余は自らを鎭抑する術を知らざるなり。コウラは死せり。のみならず、心淋しきかな、余はその臨終に際し枕頭に在ることすら能はざりき。想へば數週間前、加州なる余が親戚危篤の報に接し、余等の法律的に解決す可き遺産問題起りて余等のうち一人彼地に急行して事を辯護士の手に委ぬる必要に迫られし時、余が多忙にして、寸刻も倫敦を離れ得ざるを觀て自ら代理に渡米せんことを提言せるはコウラなりき。計らざりき、彼の生別死別に到らんとは。人生のこと眞に無常なり。コウラは一路加州に赴きて用を果し、歸路、ブルックリンなる卿等が家を訪ねて逗留す可しと娯々として語りて出發したりき。當初は風邪の模樣なりし如し。旅中、殊に女の一人旅なれば、休養意に任せず、且つは勝氣の彼女とて多少無理を押切りしならん。急性肺炎を併發して夢の如く逝きぬ。

自らも輕視し、一つには余を愕かす事を好まず、死の眞際まで何らの通知無かりき。故に、急病の報に次いで死の告知を手にせる時の余の驚愕悲壯、文字のよく現し得るところに非ず。推察を乞ふのみ。余は最早やコウラを見、彼女の聲を聞くこと能はざるなり。遺骨は既に其地を發し、變りたる姿にて家路に急ぎつゝあり。長大息、また言ふ所を知らず、

——ドクタア。」

斯うなると、クリッペン博士の精神狀態そのものが疑はれ

が、兎に角、その架空の從妹ロバアト・ミルス夫婦に宛てゝこんなやうな堅苦しい手紙を書いた。そして、ナッシュ氏を安堵させる爲に、彼に依頼して投函してゐる。苦し紛れとは言へ、如何にも念の入つた惡足掻（わるあが）きだつた。

それから間もなく、ベル・エルモアの遺骨が届いたと、博士は、ナッシュを始め友人達に言ひ觸らしたのだつた。

五グレンの非沃斯臭化水素と言へば、毒藥としては可成りの多量である。事實、そのルヰス・エンド・バロウス藥店にはそれだけ持合はせがなくて、藥問屋の大英（ブリチツシユ）ドラッグ・ハウスから至急取寄せて博士に渡してゐる位だ。それが、同店毒藥臺帳の記載面と緒に、實は早くから檢査官の注意を惹いて、クリッペン博士の手許に在る其の毒藥の行衛に、それとなく看視の眼が光つてゐた。博士は醫師だし、顔見識りの間だから、何時も署名が無くても毒藥を買へるのだが、この猛毒五グレンと言ふのに藥店が大事を取つて、署名させずには賣らなかつたのである。それからもう一つ、その非沃斯臭化水素の用途が homoeopathic preparation となつてゐる事に關して、これは後日法廷で問題になつたのだが、内務省（ホウム・オフイス）技師の解剖學者W・Hウヰルカックス博士は、ハイオシンは必ず皮下注射す可きもので口から與へる藥物ではないと斷定した。聖メリイ病院の法醫學者バアナアド・スピルスベリイ卿もこれと同意見で、醫療の目的に非沃斯を使用することは聞いた事がないと言つた。これらの議論の當知らないが、あれ程の毒藥研究者である筈のクリッペン博士がこの最も肝甚な場合に、當の毒物の爲でこんな物議を醸してゐるのは、烏渡不思議な氣がする。これも矢張りあの〝Murder will out〟といふ一例なのであらう。

地下室の石炭置場から、細かく切斷された屍體が發見されると同時に、今言つたウヰルカックス博士、スピルスベリイ卿、オウガス・ペパア氏、A・Pラフ博士等によつて三週間を費し、アルカロイド瞳孔散大劑の動物試驗などの結果、クリッペン博士の犯罪は確實に立證されてゐた。只、屍體の頭部だけが發見されなかつたが、これは博士が別にして置いて、アントワアプへ逃亡の際、海峽へ投込んだものであらうと推定された。博士とエセル・ル・ニイヴは、キユベックの波止場で逮捕されたのではなかつた。ケンドル船長の無電で、デユウ捜査課長とミッチエル刑事がより速力のある船でモントロウズ號の後を追ひ、七月三十一日に加奈陀のファザア岬（ポイント）へ先廻りしてモントロウズ號を待ち受け博士があんなに氣にしてゐた水先案内（パイロット）に化けて乘船し、突如二人の前に現れて至極呆氣なく捕縛したのだつた。

ウォルタア・スコットの言葉に、

「惡行の力ある者は必ず善行の力もある。故に善行のみ賞め讃ふ可きではなく、惡行の苦しみに耐へる心の強さをも稱ふべき

「である。」

と言ふのがあるが、實際世の中には、只絞首を恐れ、法律が怖い許りに「善人」の域に止つてゐるに過ぎない者が多いかも知れない。それから觀れば、クリッペン博士など、善惡兩方に強い才腕ある士だつたのだらうが、些さか頭腦の平衡を缺いてゐた。考へ拔いてどぢを踏み續けて、他愛のない、慘めな捕まり方をしてゐる。第一、何故細君を殺したか？　何故殺さなければならなかつた？　正規の手續きを踏んで離婚する事も出來たらうし、さもなければ、エセル・ル・ニィヴと逃げて終へばそれで宜かつたではないか——この當然起る疑問に對して、一般の答へは、彼は病的に融通の利かない頭腦の所有者で、細君を殺して終はなければ全的にエセルと情交を享樂することは出來ないと言ふ風に考へたのだらうとなつてゐる。此邊に到ると、つまり博士は、日常普通人に伍して氣付かれないでゐる最も危險な狂人、「狂人でない狂人」だつたと言ふことになる。藪醫者であんまり人を盛り殺したので、人を殺すことを何とも思はないやうになつてゐたのだなどと物騷な解釋も出た。

裁判は一九一〇年十月十八日、オウルド・ベエリイで開かれた。スピルスベリイ卿の鏡を使つた砒素試驗とかと言ふ方法で、クリッペン博士はぐーの音も出なくされた。危險點に達しない菲沃斯××××で、最初の妄想昂奮狀態や、次に來る瞳孔散大、口中と咽喉の乾き等の症狀を惹き起させて、それから昏睡に入る迄延髓麻痺だつた。皮下注射に一グレンの八分の一乃至八分の三と云ふ可きこの激毒を、クリッペン博士はベル・エルモアに五グレン服ませたのだ。幾ら八笠屋のクニグンデ・マッカモッツキでも耐つたものではない。

法廷に於けるクリッペン博士は、すつかり諦めて、惡びれた風もなく、始終口の中で祈禱でも捧げてゐるやうな樣子だつた。スウプ皿にベル・エルモアの皮膚の一部を載せて、陪審官が廻して見てゐる間も、博士は平氣で、眼鏡を外して拭いてゐた。十月廿一日午後二時半、宣告が下つた。勿論死刑である。

十一月五日に辯護士タビン氏を代理に上訴したが、直ぐ棄却されて、降誕祭も押し迫つた十七日後に、ペトンヴヰル刑務所で絞首臺に立つた。遺言により、獄中でエセル・ル・ニィヴからから受取つた二通の手紙と彼女の寫眞が、屍體と一緒に埋められた。共犯として起訴された情婦のエセル・ル・ニィヴは、現在のバアクンヘッド卿、當時のF・Eスミス氏と、彼女を辯護したスコット博士の辯護によつて、事前も事後も、博士の犯罪に就いて何ら關知しなかつた事が判明して無罪になつた。この時のバアクンヘッド卿の辯論の中で、未だに有名な一節がある。

『本辯護人は、賢明なる陪審官諸氏に向つて、徒らに被告への慈悲を望むものではない。私は只簡單な正義を要求する。』

陪審員の令嬢が被告と同じ立場に置かれたら――そして、この思ひ遣りをもつて被告の悩みを判断されたら、私はそれで満足する。」

エセル・ル・ニイヴは放免と同時に亜米利加へ渡つて、それきり消息が絶えてゐる。或ひは、あれ程博士が逃げ延びやうとした加州の地に隠遁したかも知れない。まだ生きてゐるだらう。

処刑の二日前、クリッペン博士は最後にエセルに書き送つてゐる。

典獄ワヰルスン・ヤング氏が、エセルの同意を得て発表した。

「何うしたら私はこの手紙を書き終る力と心臓を得ることが出来るのか。神は吾れわれの叫びを聞いてゐる。神にのみこの最後の別れの聖なる助けは在るのだ。神に祈つて、近づきつゝある瞬間に直面する力を得やう。ペンが動く先に、書き度い事が頭へラッシュする。時間は短い。後二日が吾れわれに残されてゐる。私は明日もう一度手紙が書ける筈だし、お前は、今夜と明晩と、まだ二回訪問して来ることが出来る訳だが、私はその権利を捨てゝ、これを最後の手紙にしやう。そして、お前にもう会はないはうがいゝやうだ。いま土曜日附けのお前の手紙を読んで間もなく十時頃典獄が来て、死刑の日の決つたことを知らせて行つた。明後日である。典獄は、私を驚かすまいとして、親切に穏やかに話して呉れた。帰りがけに、私と一緒に首を垂れて「神よ、祝福を賜へ休み」と言つた。この典獄の事は何時までも美しく記憶てゐて貰ひたい。典獄が立ち去ると、私はお前の写真に接吻した。私のこの悲しみにおける唯一の信ずべき献身的なお前の写真に。

Oh how glad I am I had the photo! It was some consolation, although in spite of all my greatest efforts it was impossible to keep down a great sob and my heart's agonised cry.

How am I to endure to take my last look at you dear face? What agony must I go through the last when you disappear for ever from my eyes! God help us to be brave then. God help us indeed to be brave.

私は何時もかう祈つてゐるだけだ。しかし、いま私は感謝してゐる。私はお前を知つてから、かつて一度もお前に荒々しい言葉を投げたり、叱るやうな眼付きさへしたことはなかつた。それを思つて、私はこの上なく幸福である。凡ては神の御手にあるのだ。私はその神の御手に導かれて往く。私のこの苦しみももう直き終る時が来るのだ。明後日は神の胸に抱かれてゐるであらう。And I have perfect faith. He will let my spirit be with you always, and after this earthly separation is finished will join our souls for ever.

アメリカ通信

毒殺された大統領ハーディング

本誌特派員　ニューヨークにおいて　清澤洌

1　出版された怪著

大統領ハーディングは今まで蟹の罐詰で中毒して死んだものとばかり思はれてゐた。

その最後については、事が餘り突然であつたので、いろ〳〵の疑問はあつた。一九二三年——ワシントン會議の終つた翌年、アラスカを巡遊して太平洋沿岸に出で、アーク燈の下で群衆一面に躍る役者のやうに、全國の注視を受けながら、大統領の一行はサンフランシスコに來た。華やかな歡迎のプログラムが、かれを待つてゐる八月二日に、大統領は全然何等の前兆なしに、パレース・ホテルの一室で死んだのである。

一體、何時に死んで誰が傍に居つたかさへも、まち〳〵であつた。始めは七時三十分と公式に發表したのが、その後に七時二十分だと侍醫がいつた。その最後の枕頭にはハーディング夫人一人居つただけだと發表された直ぐ後から、侍醫のソーヤー氏も居つたとつけ加へられた。死因についても、種々な報道があつた。蟹の罐詰を食つたのに中毒したといふのが一般に傳へられた事實で、それがため一時、日本製の蟹罐詰の賣れが遠くなり、當事者は青くなつて、組合の名を以て、いろ〳〵證明やら辯解やらを發表したものである。併しその後で、實際の死因は卒中だと發表された。

かうして不思議なことは澤山あつたけれども、それは大統領の死が餘りに突然なのに取亂した周圍の者の罪として、深くこれを疑ふものはなかつた。實際、また誰が疑ひえよう、母はこれデモクラッシーの本家一億二千萬の人間を代表する大統領ではないか、その死に一點の怪しいところがあつてなるものか。

然るに今年になつて、不思議な事實が發表された。題名は「大統領ハーディングの不思議な死」といふのであるが、これによると大統領ハーディングが死んだのは、正に夫人の毒殺だといふのである。著者はハーディング内閣當時に、司法省の調査員に任命され、その後大統領夫人の專任となつて、いろ〳〵な秘密を握つて步いたミーンズ（[illegible]

Means)といふ男である。

寄らば大樹の陰といふが、米國では大統領程度な種にするも飯の料になる一二年前から大統領ハーディングの裏面生活を畫いた著書が二つ出た。一つは『大統領の娘』といつて、大統領の子供を生んだ婦人が、その際どいところを書いたものであり、他はこゝに紹介しようとするものである。いづれも大變なセンセーションを起したが、殊に後者の『The Strange Death of President Harding』は、現に本年度におけるアメリカのベスト セラーズの筆頭として、氣取つた新聞雜誌が、一切批評紹介を控えてをるにかゝはらず、枯山を燒くやうな勢ひで讀まれて居る。

民衆政治の産物である妥協的政治家がある。それに配するに米國の特長とする強い婦人があつて。それが占者のいふことに心酔して、自から米國を統治しうべしと信じてゐる。この夫人の野心を邪魔するのが、策略政治家――當時の司法長官ドガティーで、二人の間には醜い爭ひがある。そして二人ながら、大統領の弱點を握つて自己の意志に從はせようとする。二人ながら殺人を行つて、米國の法律はかれ等に及ばなかつた禁酒法と、賄賂と情實政治とゝみきたればこれ正に一個の大なる社會悲劇である。

米國のデモクラシーは司法と政治の一角から崩れかけて居る。

2　大統領夫人と占者

ワシントンに、かりに名づけてマダム・エックスといふ占者がある。こゝに四人の上院議員の夫人達が運命をみて貰ひに行つた。

『あなた方の夫の内でお一人は必ず大統領におなりになります』

四人の婦人を前において、この占者は半ば瞑目しながらいつた。

その後、ハーディングは寧ろ偶然な機會から大統領の榮職をかちえた。四人の内の一人であつたハーディング夫人が深くこの賣卜者を信じたのはそれからである。夫が大統領になつてからも、かの女は二回その門を叩いて、自分がなすべき道について觀て貰つた。

この占者訪問のことが新聞に出るのを知つたハーディング大統領は一方この記事の發表をとめると同時に、夫人に對して往復を禁止したそこで夫人はそれ以後は中間に人を立てゝ、質問を手紙に書いてやり、手紙でその返事を受けとつた。その質問の中には、大統領が如何なる人を任命し、如何なることをなすべきかといふやうな事項が多かつた。

大統領夫人の自筆の質問及び應答が、この仲間に立つた婦人の手に握られていつかな手放さないことを知つた夫人は、何とかしてこれを取りあげねばならぬことを感じた。そこで大統領の侍醫であるソーヤー軍醫少將(Gen Sawyer)を使ひとして、司法省の調査局長バーンズを訪ね、これが奪取を相談したのである。バーンズは部下の手利であるミーンズをこの仕事にあてた。

ミーンズは早速八名の探偵を派して、この婦人を遠卷きに尾行させた。かの女が夫と共にアパートメントに居る事、その家庭には黑人の女人が居る事――そういふことを行商人に仕立てた部下が報告したのは數日後のことであつた。

かれは監視人を撤回して黑人の探偵をニューヨークから呼んだ。

『君にい、仕事があるんだ、黒人の若い婦人に戀をしかけるといふ芝居さ』

『いつもの手じやないか……』

『今度は大切な仕事だ、事は迅速を尊ぶぜ』

かれに百弗の紙幣を渡して、場所と對手を話した。

四十八時間の内にかれは歸つて來て、この黒人女中が日曜學校に行つたのを從けて、同じ級に坐りこみ懇意になつたことを報告した。

『よろしい。ではあのアパートメントに這入つて夫人の鍵をかけてある抽出しか、デスクか何かを見つけてくれ』

二日の後にかれは歸つて、そのアパートメントの鍵をミーンズに渡した。聞いてみると一緒に黒人下女とダンスに行つたが、その間にその鍵をぬき出して、鍵屋で同じものを造らしたのだ。

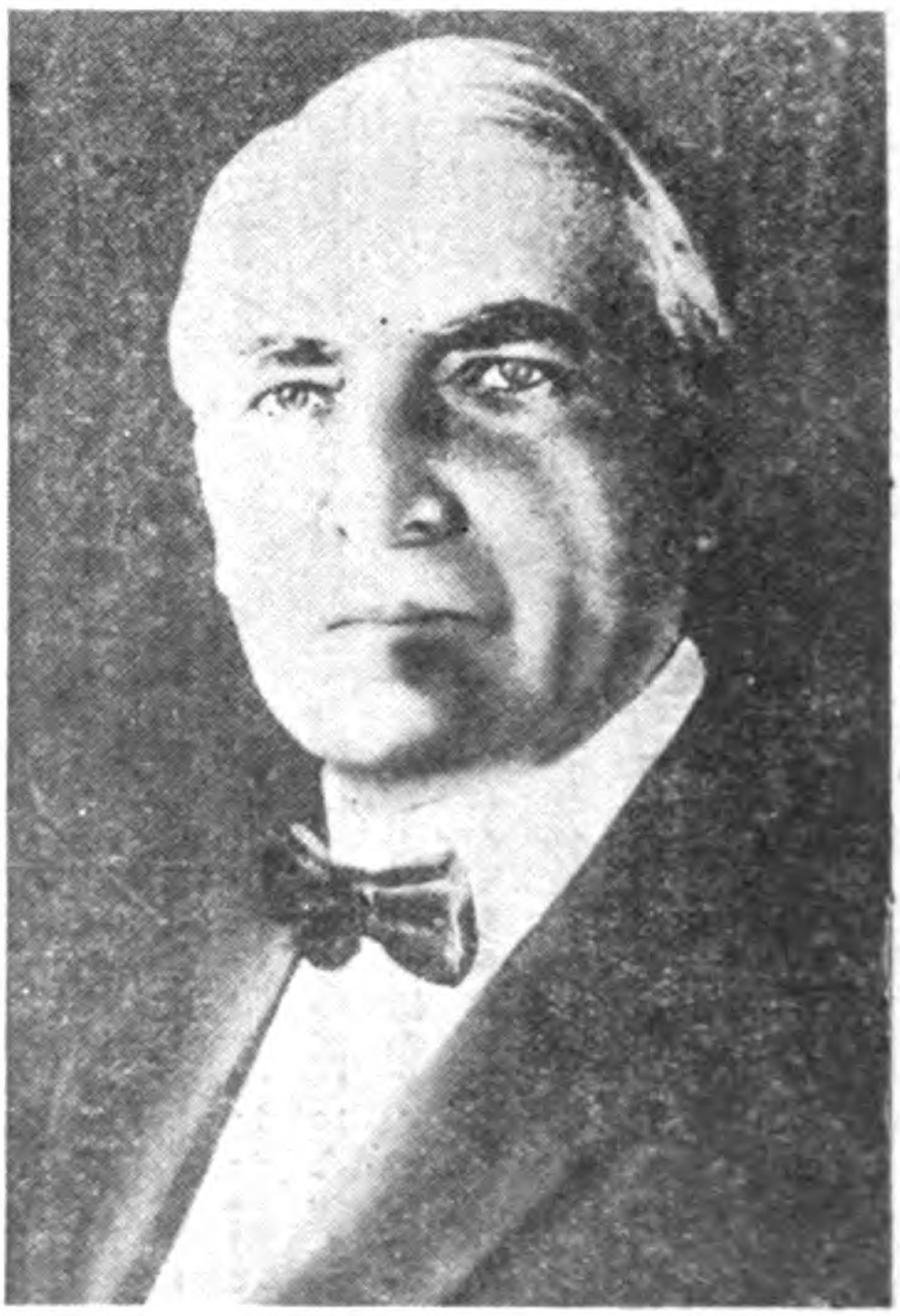
幸ひなことには二三日してその夫人が下女と共にバルチモアに行つたミーンズと黒人探偵は、そのアパートメントに這入ると、かねて睨んだ札がある。この鍵をパラフイン蠟で摸し、二時間で鍵屋に造らした。

中には金製の文書箱があつた。

箱の中には楽い錠、大統領夫人の質問書があつた。その外に侍醫のソーヤー少將とその夫人との間に交換した戀文があつた。この二人の間には醜關係が成立して居つたのである。

これ等の手紙をハーディング夫人に渡すと、かの女は非常に喜んだ。

それからミーンズはかの女の特別な信任を受けて、個人的調査をすることになつた。



故ハーディング大統領

3 大統領の若い戀人

大統領夫人は、夫より九歳の歳上であつた。歳上の妻が多くの場合そうであるやうに、かの女は常に夫に對して、征服的、指導的な立場をとつてゐた。殊に一個の新聞職工から、上院議員になり大統領になつて、その内助の功は自分だといふ確信があるのであるから、かの女の大統領を監視する眼は常に鋭かつた。

『あなたは攝理の子です』

ある時、かの女の信仰ある占者マダム・エックスが、そういつたといふので、かの女は自分の將來を固く信じてゐた。かの女は他日自から米

國を統治することの可能性を疑はなかつた。

『考へて御覧なさい、歐洲の首都を凱旋將軍のやうに旅行する光景を。わたしは大統領就任の際の華やかな光景を見て、私の野心の峠に達したと想ひましたの。が、今はそれが僅かの出發點にすぎないと考へるやうになつたんです。だから第二回目の大統領選擧には、どうしても勝たなくてはなりません。わたしは外國への大公使の人選には一番注意してゐます。だつて世界を旅行するのに、いゝ人の配置が必要ですもの。……現在は女の時代です。米國の歷史あつて以來始めて、婦人がほんとに世界を動かしたといふ記錄が殘る日が來たのです……』

大統領夫人は、さうかの女のために探偵の任にあたるミーンズに話した。この野心を實現するためには、どんな障害でも蹴飛ばすのだ。そこに女の一念があつた。

かの女はまづ大統領ハーディングが株式に手を出してゐるが、近頃、損ばかりしてゐる。それを調査するやうに命じた。

『夫(ワレン)は株のことなど知りはしないの。近頃それをやつてゐるのは、あのドガチーがワレンに金を失くさせ、その穴を埋めてやつて、自分の自由に重要書類に署名させようとしてゐるに違ひないワ。だからわたしはドガチーがその株を夫と賣る時に賣り、買ふ時に買つてゐるかどうかを調査してほしい』

ドガチーといふのは當時の司法官に檢事總長を兼ねてゐるやうな役目で。大統領とは切つてもきれぬ仲間であゐ、所謂オハイオ醜團の一人として、その後贖職罪で刑に處せられた人である。

ミーンズの調査の結果は、夫人の疑ひが根據のないことが分つた。夫人はきかない。

『そんなことがあるもんですか。では外の株式店をお調べなさい』

併しそれを調べる前に、かれは今一つ重大な調査を夫人に命ぜられた。大統領ハーディングの情婦であり、その子供を生んだナン・ブリットンに關する證據である。

『この女はハイディングと醜關係があり、子供があるといつてゐるさうですの……わたしはそんなことは信じませんよ、が、あつたら何時からその醜關係が始まつたかを調べて頂戴。手紙があつたら無論その手紙を手に入れなければいけません』

『どこに子供はゐるんですか』

『なんでもシカゴにゐる姉妹のところに預けてあるさうです』

『子供さんの年齡は?』

『二歳ぐらゐださうです』

白堊館の夫人の部屋でミーンズとそんな話しをしてゐる時に、扉を叩く音がした。夫人が戸を開けると、それは大統領自身であつた。ミーンズは飛びあがつて頭を下げた。夫人はかれを紹介した。

『ウン、君がミーンズ君か。君は天才的な調査家だつてネ。妻が話してゐたよ。妻は何でも知りたがる質だから、精々知らしてやつてくれ給へ』笑ひながら大統領はいつた。そしてゴルフに行くことを云ひ殘して出て行つた。夫人は戸口で重要な書類に、かの女に相談なくして署名してならないことをくれぐれもいつた。

[illegible]
て、大統領に代つて署名させようとしてゐる[illegible]いふ
かの女にそうミーンズについて、金に換へても出す事、この仕事[illegible]
つたらドガチー・フォール(内務長官)、ウィークス(陸[illegible])などの個人的
務をすることを命じた。

これ等の閣僚連中と太刀打ちをするのには、その生活の秘密を握る必要があるのだ。

4　大統領の戀文を窃取

證據書類窃取の目的をいだいて、ミーンズはシカゴに行つた。

大統領の情婦たるナン・ブリトンは子供と共に田舎に行つて居らなかつたが、その姉のウイレッツ夫婦はシカゴに居り、二人共音樂家で、毎日下街のオーケストラに行くことを發見した。この二人の行動を監視するために、數人の探偵をつけておくと同時に、技能ある夫婦者の部下に命じてそのアパートメントに部屋を借りさせ、この一家に近づくことにさせた。報告は毎日シカゴからワシントンにあつた。

この探偵が一家と懇意になることは困難ではなかつた。電車の上でミセス・ウイレッツが忘れものをしたのを注意してやつたことに始まつて、話してみると同じアパートメントに住んでゐるといふやうなことで近づいた。

一週間ばかりして、探偵からその夫婦の住むアパートメントの鍵が送つて來た。

[illegible]
してみましたが、そこへ[illegible]
人が入つて行きました。見ると[illegible]
出來に居られなかつたので、ポケットからかねて用意してあつたパラフィ
ンを出し二つ型を遣つて一つ[illegible]するのです」

そういふ報告が鍵と共にあつた。

ミーンズは直ちにシカゴに行つた。夫婦共、晝間ゐない上に、女中も居らないことを知つてゐる。翌日、かれは部屋の中を限なく搜した。

部屋の隅にクローゼットがあつて、固く鍵がかゝつてゐる。これが大統領の情婦ナン・ブリトンの使つたものであつた。かれはその鍵の穴からパラフインで型をとつた。

それから二日して、一方この夫婦に尾行をつけさせ、自宅の模様から電話をかけるやうにさせておいて、そのクローゼットの中を搜した。

中からはかの女の日記と、手紙が絹のリボンにつゝまれて出て來た。それから大統領が、その子供に贈つたであらう玩具や着物も發見された。かの女はそれ等を寶物のやうに藏してをつたのである。

かれの長い經驗では戀人同志の手紙は、對手に捨てることを約束しても、決して捨てないものである、かれはこれについては曾て間違つたことはないといつてゐる。

手紙を持つてホテルに歸つて、かれは部下の探偵音樂家を呼んだ。ホイスキーのびんを入れた袋を出して「それ見ろ、矢張り禁酒法違反をしてをつたじやないか」といつた。ミーンズは當時、禁酒法の調査探偵

をしてなつたので、そのために活動してゐると思はせたのだ。かうした商賣では上官の命令については盲從して、一切內容を質ねない習慣である。

大統領ハーデイングが情婦に宛てた手紙は結局夫人の手に落ちた。その上にかの女は拒むミーンズに命じて大統領が女と子供に贈つた總べてのものを盜み出させた。

かの女は――年はとつて居るけれども、若い女の美貌とチヤームを有して居ると信じて居つたかの女は、この夫の手紙に面して、狂ふばかりの煩悶を感じたのは事實である。併しそれと同時に、この證據を突きつけて大統領である夫を自分の自由にすることが出來るといふ勝利感が動いたことも否定できない。

5　大統領夫人、夫にせまる

『あの子供はハーデイングの種ではありません』

ある時に大統領夫人はミーンズを呼んでいつた。『ハーデイングは子供を持つことが出來ないんです。だからナン・ブリトンの子供はハーデイングの子ではないのです。論理的でせう?』

『そうです、奥樣の前提が正しければ……』

『わたし達の間に子供がありません。私は生むことができるのです。現に以前の結婚で一人生んだのですから』

『さア、それは論理になりますか知ら』

さうした議論をした後で、ミーンズはその事を證據だてる任務を何ぜられた。夫人は夫を窮地から救ふために懸命であつた。

かれは專門家のところに行つて、ハーデイングの過去のあらゆる記錄を調べたが、その結果は夫人の論理どうりには證明できなかつた。この事を報告すると、かの女は屈しなかつた。

『あなたは何故もつとよく調べることが出來ないの。駄目な男ね。マダム・エツクスがあの子供はハーデイングの種ではないといふのだから間違ひはないではありませんか』

かの女は誰よりも星とマダム・エツクスを信じてゐた。

かうして夫人は、一方大統領の立場を強くすることをつとめると同時に、他方集めた證據を種にして夫にせまつた。かの女は總べての證據はガストン・ミーンズの手にあるといつた。

ミーンズは白亞館に呼ばれた。丁度、大統領と夫人は、その問題で緊張しきつてゐる時であつた。

『君を斷然辭めさせる、わしは只今、司法省にそう命令した。一體君は何の權限を以て、大統領を監視するのか』

大統領は眞赤になつて、その時はガタ〳〵と怒りにふるへてゐた。

ミーンズは前に一回司法省を辭めた。司法長官ドガチーの收賄行爲が問題になつて、議會で彈劾されんとした時である。かれは司法省の當局と不和の如くに見せかけ、議員の油斷を利用して、その證據書類を盜み出し一味を救つたことがある。

『司法省をやめさせるですつて? また前と同じやうな仕事があるんですか』

不歡のミーンズが皮肉にそういふとハーディングの顔は、赤から青く變るのが見られた。拳を固く握つて、かれは唾を呑んだ。

『わたしはまだ閣下を監視したことはありません。併し閣下の奥様と、閣下のお子供さんのお母さんを監視したことはあります』

古疵の急所を突かれて、ハーディングは返す言葉がなかつた。

『お前は私の生活を滅茶苦茶にしてしまつた。お前とこの下等な探偵が……』

部屋を出がけに、拳を夫人の前で振りまはして、大統領は呻くやうにそういつた。夫人は平氣でゐた。

6 収賄の方法

『ワシントンにあるものは何でも賣物だよ議院の圓屋根(ドーム)だけを除いては』

ハーディング内閣時代には、そんな言葉があつた。議院のドームだけは、後日、骰子をふつてこれを欲しいものがあらう。ふりあてたものはこれを移して米國大資本家の住宅の記念塔にし、議會の圓塔(ドーム)の下には資本家が住んでゐることを示すことにするためだ。

この賣物の中でも、禁酒法違反で檢擧するのを大目に見て貰ふ代償などは、その賣りあげ額が少ない方ではない。司法省の役人であつたミーンズは時々これを集めに行つた。



故ハーディング夫人

それを集めるにしても現金を手から手に渡すやうな智慧のないことはしない。この方面のかゝりが二十五名あつて、この人々が全國の酒密賣者を調査して、一ケ年にどのくらゐづゝ儲けてゐるかを計算する。上官はこの報告によつて「保護」を受けるために、幾らづゝ出せと通知するのであるが、これを受けとるのに×××ホテルの何號室に何時何十分――十時五十三分とか、十二時十四分とか、正確を期するため必ず端片の時間を附する――に持つて來いと命ずるのだ。

ホテルには二つ續きの部屋を借りてゐて、一方の部屋に金魚鉢ををき、これを金入れとする。そして隣室との仕切りのドアーに穴をあけて、そこから見てゐるのである。密賣者が命令によつて部屋に來てみると、誰もゐないが、かねて通知された金入れ機はある。そこへ紙幣を投げ込むのだ。紙幣は五百弗以下のものは持つて來ないことを命じてある。

隣室からこれを見てをつた受取人は、客が去つたのを見すまして、今投げ込んだ金の額を調べるのだが、この人々の經驗によると、かつて金

額が少なかつたことなく、また一分も時間を間違えたこともないといふ。

夜になると仕事が終へる。キヤッシュ・レジスター……實は金魚鉢を見るとその日の賣りあげ額があるが、一日大概五萬五千弗から六萬五千弗ぐらゐあつた。かうして集めた金が、この著の著者ミーンズの手を經たものだけでも七百萬弗を下らなかつたといつてゐる。

かれはこの金を、司法長官ドガチーンと起居を共にしてゐたヂエススミスに渡し、スミスは帳簿に記載して、後、それをガストンの家の裏庭に掘つてある二十尺の穴の中に入れて、安全なる時期の到來を待つのだ。

かうした「賣買」は各方面に行はれたのだが、たゞ注意すべきことはこの樞機にあづかつたものは、大概「突然な」死に方をしたことである司法長官ドガチーの片腕であつたスミスは「自殺」し、サーストンといふ賄賂を集めた辯護士は同じく「突然に」死に、その他不時の死に方をした者は十指を以て數へられない。

ミーンズはこの邊のことについて、この人々が證據煙滅のために、明らかに「一服盛られた」ものであるのを強くヒントしてゐる。十五六世紀の宮廷政治、陰謀政治も、これほど大膽で、これほど殘酷ではない。

7　夫人に決心沸く

議會では部下の不始末の故に彈劾運動が起つて居る。夫人は若い情婦との醜關係を知つて、その自我的、征服的な態度でヂリヽヽ迫つて來る。雜問題は一身に蝟集した。それでも大統領ハーディングは若い戀人ナン・ブリトンを忘れえなかつた。夫人が病氣の間、かれは孫にも當るやうな戀人を白堊館に呼んだり、ボイドといふ親友の取持ちによつて、その家ではかない逢瀨を樂しんだ。

これ等の行動は無論、探偵によつて——ミーンズ以外の——一々夫人に報告された。この頃、夫人はミーンズにこんな話しをした。

『わたしは病氣だつたの、わたしはどれだけ死を願つたでせう、わたしほど死を願つたものはないでせう。この三角關係は、その三角の一角が崩れなければ解決しないのですから。わたしはこれをマダム・エックスに相談したんです。するとマダム・エックスは大統領ハーディングが死んだ後でなければ、わたしは決して死なゝいといひ、わたしが「攝理の子」であることを忘れてはいけないと注意してくれました。わたしは夫より先きに死にません』

かうかの女は吐き出すやうにいつた。夫人は昔しから毎日夫の机の上に薔薇の花を一輪さすことを習慣として來たが、病氣の間は女中にそれを命じてやらした。ある日、かの女の夫の戀人が白堊館に來たことを知つた。沸えくりかへるやうな胸を押へて我慢して居つたが、大分してその戀人が歸つて行くのを見ると、見よその胸には自分の心盡しの薔薇の花が、さゝれてゐるではないか。

『これではあの小娘に、これ見よがしにされるやうなものではありませんか。それから暫らくして私が下におりて行くと、ハーディングはきまじめな顔をして私を自動車に乘せて教會に一緒に行つたんです。一體、なんの神樣がこんな行動を許すんですか、神樣が聞いてあきれる?

わたしはこれからフロレンス・ハーディングを心から[illegible]たのです
ものなのは、ある日大統領と遊説に参加した[illegible]大統領に[illegible]
内に問題が起るやうな気がします」

といふと、大統領は

「構はない、おれは事實を語るんだ」

『彈劾退職させられますよ』

『構ふもんか。おれは明ら様にいふんだ』

『恥を天下にさらしても』

『構はん、洗ひざらしいつてしまう』

『刑務所に入れられても』

『いゝとも。おれを牢屋に送る權利は誰もない。併し牢屋が何だ。こんな苦しい生活を送るなら、牢屋の生活がどれだけいゝのか。おれを彈劾してみろ、それが喜ばしいんだ、それが私を救ふんだ……』

『あなたは氣が狂つた？』

『氣が狂ひさへすれば、こんな苦しみはない。おれは氣狂ひになりたい！』

大統領は頭をかきむしつた。

『おれを彈劾するといふのか。やつてみろ。おれがどうするといふのか世界は廣い、おれはあの子供を連れて隱れるんだ。誰があの子供をおれから取り去るものか。お前がやるならやつてみろ』

翌朝、大統領は妻の前に頭を下げて、昨夜自己を失したことを詫びた併し勝氣の夫人の胸中には堅い一つの決心が沸いた。

[illegible]事にも[illegible]ない。わたしは[illegible]来る
のです。わたしは[illegible]時
が到る時が来たのです。マダム・エッキスの言葉が[illegible]して、「運命の女」
が、ほんとに力を示す時が来たのです……」

それから暫らくして大統領はアラスカに行つたが、その時に同行する人選は全部夫人がこれに當つた。そして旅行中呼吸は全部遮ぎけて、總べての許可はかの女自身が目を通して、大統領に傳達することにした。

8　大統領の最後の模樣

大統領ハーディングが旅行の途中、桑港で急死したといふ報導は雷のやうなショックを全世界に與へた。全米には悲しみの波が漲つた。

この間にあつて、最も取亂さなかつたのはハーディング夫人であつた。かの女は慣例による大統領のデス・マスクをとることも拒絶した。當時の新聞を開いてみるとかうある——

『ハーディング夫人は平静である。今夜近く集まつた友人の間にあつて、かの女はその打擊を充分感じなかつた事、かの女がなすべき義務が殘つて居るから自から耐へ忍ばねばならぬことをいつた……大統領の葬式のことを案じて後、大統領夫人は喪服をまとつてゐた……かの女の眼は祈禱が終つた後でも乾いてゐた……ハーディング夫人の悲壯な姿が乾いた眼で立つてゐる時に、並ゐる多數の人の眼からは涙が止めどもなく流れた……ハーディング夫人は極めて平静であつた彼女は其意志強さを示した……（紐育タイムス一九二三年八月五日

大統領夫人が屍體と共に、ワシントンに歸つて來ると共に直ちにその信用するミーンズを呼んだ。かの女の說明によると旅行中二つの事件が最後の決心を固くしたらしい。一つは華府に起りつゝある大統領及び司法長官ドガチー彈劾の熱で、この形勢の切迫は、かの女が大統領の秘書として、その報告や手紙を取扱つてゐるとよく分つた。今一つはある日大統領が手紙を書いてゐたので、誰にやるのかと詰問すると『マリオンに居る父にやるのだ』といつたが、これは若い戀人のナン・ブリトンにやるのだと分つて、これを遮つたことがある。

かの女は最後の模樣を語つた。

『わたしは大統領と二人だけで部屋にゐました、さア十分ぐらゐでせう丁度藥を呑む時間でした……わたしはそれをやりましたの。ハーディングは枕の上に横になつて、眼をつぶりました……休んだんです……すると突然、大きく目を開いて……頭を動かして私を正面から見るのです。私は床の傍に立つてゐました』

『大統領は知つてゐたのですか』ミーンズは忙はしく聞いた。

『知つてゐたと思ひます……そして大きく溜息をついて、頭を横にしてあちらを向いてしまつたの。……一二分してわたしは人を呼んだのです……後は新聞にある通り』

夫人は大統領の屍體解剖をさせないためにミーンズに意見を求めた。併しそれは困難なことではなかつた。夫人が反對するのに、誰が大統領の屍體を解剖するといはう。

9　機械的速力の殺人收賄

前にも書いたやうに、『突然』の死はハーディング大統領だけではなくて十數人にも上つた。併したゞこゝで一人附け加へなければならぬのは、大統領ハーディングの侍醫であり、夫人に親しかつたソーヤー軍醫少將である。

この人は大統領の死については、總べてを心得て居らねばならぬ人であり、また大統領夫人が毒藥を用ひるやうな場合には、この人が敎へたと見る外はなかつた。このソーカーの死がハーディング大統領と同じやうな最後で、丁度それはハーディング未亡人が止宿して居つた時である當時の新聞を見るとかうある——

『ゼネラル・ソーヤーの死は、かれが桑港に一緒にあつた時に死んだワレン・ハーディングの最後と殆んど同じである。ハーディング夫人はゼネラル・ソーヤーが死んだ時に、ホワイト・オーク・ファーム（ソーヤーの家）に在つた。

かれの家族は死ぬ最後までソーヤー氏の容態が重大だといふことに少しも氣付かなかつた。（紐育タイムス一九二四年九月廿四日）

越へて同年十一月廿一日にハーディング夫人も長い病氣で死んだ。

もし大統領ハーディング毒殺に關する事實がこの書——"The Strange Death of President Harding" にのみ基礎を置いてゐるものであるならば、私は恐らくはこの記事を書かなかつたであらう。この著者は

收賄罪の故に二ヶ年の刑をきて、一昨年出獄したばかりであり、その人格は決して信用をおいて傾聽するにたらないものであるからである。

併しながらハーディング内閣の腐敗と、當時の新聞によろ前後の事情とは、この書にあげた根本的な事實において疑ふ餘地はないと思ふ。この腐敗を以て、全部の米國の政治を批判するのは非である。併しある時代の、ある一部の弊害と缺點を示すのには尤分である。

ある米人が私に話したところでは、ハーディングの戀人であつたナン・ブリテンは、その父なし子の手を引きながら、自分の著書——『大統領の娘』を自著して、公園で賣つて歩いて居るのを見たといふ。自分一生の秘事がパンに代へられるのだ。戀は腹ふくるゝものなりとはこの事をいふのであらうか。

たゞ私が氣になるのは、新聞の態度である。當時からの新聞の記事は明らかに大統領の死その他の事實について、深い疑問を有してゐた。またかうした事件が、新聞の通信網に引つかゝらないわけはない。それだのに一言のこれに及んだものがないのは何故であらうか。

一つは大統領の地位を考へて、これに對する遠慮からであらう。大統領の地位に對する米人の尊敬は、われ等にとつては寧ろ不思議なくらゐである第二は家庭の問題については、西洋の新聞はそれが法廷の問題にでもならざる限りは、これに觸れない習慣であり、これを冒すと家庭讀者を減ずる恐れすらもある。第三には無論、この種の問題は具體的證據をあげるのが困難であるからであらう。

泥足でお勝手に飛び込むやうに、無責任に家庭の秘事を發くことの苦々しさは、われ等に日本人として知りすぎるくらゐ知つてゐる。併しそれにしても、かうした事件を掘りさげずに口をつぐむことは、ジャーナリズムの正道だらうか。

いづれにしてもかうした新聞の沈默を一方にして、他方能率本位のビジネス・シビリゼーションの米國では、殺人と收賄が恐ろしい機械的速力とを以て行はれてゐる。かれ等は法律を冒すことに、痛快味をすら感じて國といふ大建物はかくして安全であらうか。

文藝時評

正宗白鳥

「新築地劇團」所演の「ゴーストップ」といふ芝居を、市村座で觀た。今春本郷座で觀た藤森成吉氏作るところの「蜂起劇」が連想された。あれは虐げられたる農民の反抗を取扱つた時代劇で、これは、狡猾なる資本家に對する職工の反抗を取扱つた現代劇である。どちらも煽動的の臺詞に富んで、見物を湧立たせるのを主要の目的としてゐるが、今度の方が、眼前の事件を舞臺に現はしてゐるらしく見物に思はせるだけ、一層の強味を有つてゐる。私は、芝居を觀てゐるよりは、演説を聞いてゐるやうな感じがした。そして、かういふ芝居では、敵役になる役者は、甚だ割に合はないだらうと推察された。昔、子供が日淸戰爭ごつこや日露戰爭ごつこをやつて遊んだ時に、誰れでも、チャン／＼やロスケになるのを厭がつたやうに、「蜂起」「やゴーストップ」では、惡代官や、社長や、反動派の親分には、誰れでもなりたくないだらうと思はれる。苟劇の敵役は、立役と同樣に技藝の上で活躍し得られるやうに、作者によつて創作されてゐるし、見物も、敵役が憎さげに見えれば見えるほど、そのうまさに感動するのだが、「ゴーストップ」などでは、作家も敵役を侮蔑し、見物も敵役を侮蔑してゐる。たゞそれだけである。ガラス工場の社長某、天川組の親分某の如きも、うまくやればやるほど見物に侮蔑されるし、また、脚本の上でも、巧みに自己の面目を發揮し得られるやうに作られてゐないのだ。殆んど役者に工夫の餘地がないと云つていゝ。作者によつて侮蔑されてゐる役を甘んじて引受けて演じる役者の量見が私には分らない。「その役に成り切る」ことが、役者の大切な心掛けであるとすると、この現代劇の敵役に扮する役者は、切實にさういふ心掛けを抱いてゐるだらうかと疑はれる。若し自分の役を自分で侮蔑しながら演じてゐたら、藝術以外だ。何のために役者として舞臺に

立つのかと疑はれる。爭議團の張本人は云ふまでもなく、爭議の犠牲となつて死んだ少年の如き、さしたる藝はなくつてもたゞ役柄の故に見物の大歡迎を得てゐる。

この劇團では、丸山が最も俳優としての妙味を有つてゐる。今度のやうな役では爲し樣がないが、柄に嵌つた役が與へられたら、喜劇役者として發展し得られさうに思はれた。

市村座の初日を觀た翌日、新橋演舞場で、曾我の家五郎の喜劇を觀た。今度のは全部新作ださうだ。自分で作り自分で演じる五郎は、類稀れなる才人である。私は、今春この一座の所演を觀て、多少の興味を感じた。少くも、この一座が近來世に迎へられてゐる所以を是認したのであつた。そして、今度も好意をもつて觀に行つたのだが、全然失望に終つた。新作揃ひの初日として、まだ搜り〳〵演じてゐるための不整頓の現はれは止むを得ないが、さういふ點を割引しても、私は、言ひやうのない嫌惡を覺えた。一作毎に、通俗の人情を捉へ、現代世相の一端を摑んで來る器用さは見られるにしてもなぜあゝ薄汚く演じるのだらう。第一篇の、五郎の出ない芝居はまだいゝ。五郎が出て來ると臭氣紛々として、たまらないのである。ことに、そのエロチシズムが鼻持ちもならない。假りに時代の好みに媚びてゐる點から見て、五郎のエロチシズムよりは、市村座芝居の煽動主義の方が、まだしも氣持がいゝ。どちらも薄汚ないにしても、後者は素朴であり率直であるだけでも、前者のいやみな色つぽさよりはいゝ。喜劇と云つても、もつとスッキリした調子を出すやうに努めたらどうだらう。老人の戀愛を現はし熱情を現はすにしても、あゝくどく汚くしなくてもよからう。女の軀を抱いて寢て女の夢を見るのも面白い趣向だが、蚊帳の中から帶も締めずにダラしなく出て來なくつてもよからう。蝶六でも大磯でも小次郎でも、皆喜劇役者としていゝ腕をもつてゐるらしいから、脚本次第、演出の態度次第で、この一座は、もつと快く見られる芝居をすることが出來ない筈はないのにと、私は遺憾に思つた。

「今の芝居なんか見るよりは映畫を見た方がいゝ。ことに西洋の映畫を見た方がいゝ」とは、多くの教養ある男女の常識

になつてゐる。私もさう思つてゐる。しかし、この頃幾たびか芝居を眞面目に見てゐると、それが何時の演劇の樣式にもとばかりは思はれなくなつた。「芝居は無學者の學問所」であると、江戸時代の劇場や徳川時代の劇場がさうであつた如く、今日の日本の劇場だつてさうである。私に取つても、劇場は一種の學問所である。何だ芝居なんかを見て、と、嘲笑する男子の心理に必しも同感出來ないやうに思はれだした。松竹の社長でも、講談社をはじめとした有名な雜誌社の社長でも、世人の趣味好尚の趨勢については、最も鋭敏であるに違ひないので、それ等の人々の感得したところを、我々は新聞や雜誌の上で教へられるのであるが、それが經營の上では、出版物や雜誌の上で見るよりは、一層明瞭直截に見られるのだ。演劇はその場限りの藝術であるため、一層時代性をよく現はす譯なのだ。

五郎なんかも見物心理については、批評家なんかの及びもつかない注意深い觀察をしてゐるに違ひない。あのいやらしいニタ〳〵笑ひは、見物のニタ〳〵笑ひと相呼應してゐるのである。多數の見物がそれに對して眉を顰めだしたら、五郎もそれを止めるやうになるだらう。私が五郎一座の臭氣紛々たるいやらしさに對する非難の一半は見物の上にかゝつてゐるのである。林長二郎に對する女性の見物の熱狂振りに、人間心理の現はれが見られるだけではなく、ゴーストップに對する罵聲怒聲讃辭勵語に、現代の一面が活躍してゐるばかりでなく、曾我の家劇の舞臺が見物と呼吸を合はせてゐるところに、人間性がまざ〳〵と見られるのである。大衆を率ゐて驚天動地の大事業でもしたい野心家は、今日の劇場を見て民衆心理を洞察するといゝ。民衆の正義觀道德觀浮薄性雷同性などが、どの劇場にでも渦卷いてゐるのである。さういふ民衆心理に適應しない劇場は興行的に失敗するのだから、これほど時世の動搖を知るに便利なものはない。

曾我の家の喜劇を見た翌日、私は、帝劇の早川雪洲の「天晴れウォング」の初日を見た。ここも滿員であつた。米國映畫の實演と云つたやうな筋立だが、豫想外に面白かつた。稽古が充實してゐたゝめでもあらうか。曾我の家のやうな兒戲だ、だらしのないところはなかつた。ここには、五郎一座の古い道德見とはちがつた新來の新愛情が中心になつてゐた。愛する女の

幸福のためには、凡てを棄て、顧みないといふ女性崇拜心理は、映畫によつて現代の男女には、既にお馴染になつてゐて、ウオングその人は、一般の見物に同情をもつて迎へられこそすれ、冷笑される氣遣ひはなくなつてゐる。雪洲は米國で映畫修業をした人だから、映畫的表情はうまい。心の深い惱みを現はす技巧も上手である。米國の劇壇で學んだ舞臺技巧をもところどころに用ひてゐるらしい。しかし、臺詞に訛があるので、聞き取りにくいところがあるのは如何ともし難い。日本人である雪洲でさへ、東京語の訓練を經てゐないと、臺詞廻しに不純なところがあつて、見物に與ふる印象に、微妙な味ひを失ふ恐れがある。日本人の外國語の運用の程度もこれによつて察せられるではないか。我々が外國の文學藝術を味ふ時に、微妙な味ひを鑑賞し得られない恐れのあることも推察される。

舞臺は、米國の支那街である。支那街といふと、野蠻的神秘境として、米國の映畫作者演劇作者の好んで用ひる材料となつてゐるが、我々も米國作者の感化によつて、米國東西諸市の支那町を見物する時、氣味の悪い神秘境として見る習慣がついてゐるから可笑しい。千餘年來支那文明を學んで來た日本人には、支那の風俗や思想が、神秘であり野蠻である筈はないのだ。西洋人が、日本の國土や美術や日本人の生活を神秘扱ひすると、日本人自身がそれにかぶれて、自分の國の美術や生活を神秘視することがあるから大笑ひだ。日本畫を歐洲へ持つて行つて展覽會を開くと、それを見た歐洲人は、神秘的な藝術味を感じて讃辭を呈したりするらしいが、それをそのまゝ受入れて、日本畫は神秘的であると、自慢する日本人があるから奇妙だ。

水谷八重子はうまくなつた。中幕の「驟雨」は八重子の出し物で、かういふ役は彼女によく適してゐて、遺憾なく演ぜられてゐる。作者岸田國士氏特有の、ある女性の氣持が、細かに明晰に、氣の利いた言葉で敍せられてゐるのに、私も多くの見物同様に、興味をもつて隨いて行つたが、題目の驟雨の音がするとゝもに、出拔けに幕になつたのが物足りなかつた。暗示を見物に與へたゞけなのは、曾我の家式あくどさと異つた藝術味のある所以であると、あとで私は理窟をつけて見た

が、舞臺にかゝつた時には、一向注目されなかつたと思ふのは、共作といふことを問題とする

二番目の「慈悲心鳥」は井上好みの、頑固な強氣な老人を活躍させたもので、私は、高岡先生といふ井上の當り役で見て知つたが、今度の老人によつて略ぼ想像された。世間や、強い個人に對して反抗せんとする悲壯味のある役柄は、いつの時代にも、見物の同感を得る性質のものであるが、今の時勢では、官吏といふ人物が大衆の心を動かすやうである。しかし「慈悲心鳥」の脚色は冴えてゐない。

それから、私は東京劇場の「牡丹燈籠」の初日を觀た。暑い晩であつたが、見物席は一杯で、廊下は押合つてゐた。この頃歌舞伎劇の衰頽が、經營者の心を惱ましてゐるやうに、新聞に出てゐたが、果してさうだとすると、今月の東劇の興行成績は、經營者に取つては、重大問題なのであらう。歌舞伎劇の存在價値は、數十年來批判し盡くされてゐる筈だが衰へさうになつては盛返すのがこの怪物である。

時間の不足のためか、俵島家の一場がすつかり抄略されてゐるばかりでなく、すべてが早目に運んでゐる。古典文學がしみじみ鑑賞される時代ではなくなつて、抄譯で早合點をされるのが常例となつてゐることは、この芝居によつても推測された。幸藏の志丈だの源之助のお國だの、衰頽した老人が、歌舞伎の殘骸の如く現はれて、全體の調和を破つてゐる。私は、五代目と秀調との「牡丹燈籠」は知らないが、この芝居は、四五回も觀てゐる。羽左と梅幸との初演を東京座で觀た時は、團菊死後の歌舞伎衰頽期で、見物席が寂寥であつた。しかし、この芝居の持つてゐるロマンチックな味ひは、青年の私の心に觸れた。梅幸のお國は凄艶であつた。その後、羽左も梅幸も圓熟して伴藏とお峰との痴話喧嘩に男女の心理の動きを如實に現はすやうになつた。今度だつてこの一場が見せ場になつてゐるのだが、少し容々しかつた。

根本な技藝の批評は別として、私が續けて見た數種の演劇を、總括して判斷すると、またしても舊劇を見てゐたが。出し物が特にいゝ譯ではないが、舞臺に意氣込みがあつた。菊五郎一座にしても、劇作の抄略をもつと嚴密にして、役者

も老朽淘汰をして、もつと身を入れて演じたら、歌舞伎は歌舞伎として、今までのやうな盛況は保てないにしても、まだ民衆を惹付けて行けないことはないだらう。この東劇の古めかしい芝居を觀ても、演劇に對する民衆の愛着が感ぜられる。劇場は昔よりも廣くなつたのに、俳優の臺詞廻しは昔のまゝなので、よく聞き取れない。三階の客などは、臺詞が半分も明瞭には耳に入らないだらうと思はれるのに、不平も云はないで辛抱してゐる。下座の音樂など歌舞伎には缺くべからざるものだが、そんな者は、かういふ劇場に於ては殆んど全く聞取れないのだから、勞して效なきものと云つていゝ。それで、容れ物ばかり綺麗になつても、歌舞伎の妙味は次第に薄らいで行くのだが、その滋味の失せた殘骸に對しても見物がこれだけ愛着してゐるのによつても、民衆がいかに芝居を好んでゐるかゞ察せられる。これで、作者や役者に傑れた者が出て來たら、一代の民衆を魅することはさう困難ではないのである。

『La Popularité, C'est la gloire en gros sous.』（通俗的名聲は一錢銅貨の名聲に過ぎず）とヴィクトル・ユゴーが云つてゐる。

「予が俳諧は夏爐冬扇の如し。衆にさからひて用ひるところなし」といつた芭蕉の言葉は、十一谷義三郎氏の文藝時評（九月の改造所載）のはじめに引用されてゐる。「入りの有る無し」「興行のよし惡し」を、最大の關心事としなければならない興行者や出版業者の心境と、如上の言葉で現はされたユゴーや芭蕉の心境との間には千里の差がある。私は、幾つかの演劇を觀て、興行者や俳優が如何に目前の大衆に媚び、通俗的賞讃を得んかと腐心してゐるのを察した。雜誌にだつて最も顧慮されてゐるのは作品の商業價値である。私は、それを非難するのではないが、一面、通俗味沒却の藝術を尊崇する氣持になるのを禁じ得ないのである。芝居のやうな通俗藝術に浸つたあとでは、ことにさう思はれる。

ユゴーは、時に感じて通俗性蔑視の激語を吐いたが、彼れの「レ・ミゼラブル」その他の小説には通俗味が甚だ豐かであ

る、通俗もこれほどになると世界を掩蔽するほどの偉大さを持つてゐるのであらうが、私は、そのユーゴーの言はれるさ、ひそかに不滿を感じてゐるミゼラブルの如き、浮世の苦惱事を陰翳に描いてゐるやうでゐながら、その實、讀者をうまく甘やかしてゐるのだ。十一谷氏が引用してゐるキエルケゴオルドの謂ふ所の「七萬尋の大水に浮べた」やう[illegible]とは違つて、この世を愛や涙でそらけることを、作者はつとめてゐる。そこに、作者の慈悲心が現はれてゐるのだが、而者がそれに甘へて、ユゴーの描寫した夢の世界を眞に受けたら、精神の頽廢を招くのである。ポピユラリテーには一種い價しがたいとは、ユゴーが自分で自分の小説を批評してゐる言葉だと思はれないこともない。佛蘭西でも、作者在世當時から引續いて、最も賣行のいゝ小説であり、トルストイのやうな氣六ケしい人にさへ、近世第一の小説として推稱され、極東の日本にまで渡來して、通俗小説のお手本のやうに珍重された「ミゼラブル」の作者は、通俗的名譽を完全に獲得した譯であつたが、宇宙に於ての一個の人間の存在について思ひを凝らしてゐたなら、さういふ名聲も、シャボン玉のやうな果敢ないものに見えるだらう。………そして、この現世離脱の心境を磨くことに於ては、西洋の文學者は東洋の文人に及ばなかつたと云つていゝ。

日本の傳統的趣味と舶來の西洋の趣味との交錯は、明治以來の現象で、この頃はそれが完全に西洋に征服されてゐるらしく見られるが、それは上つ面で、底の方は必しもさうではないらしい。現代の人氣女優水谷八重子の扮した現代劇「[illegible]田」の若き女性は、「牡丹燈籠」の舊日本の幽靈の若い女と、姉妹の如く似てゐるのを、私は感じたが、そして雪洲の相手として彼女の扮した米國生れの女は、いかに巧みに西洋式を發揮しても、それは附燒刃で、教へられた通りにお芝居をやつてゐるに過ぎないと思はれた。「牡丹燈籠」の最後の幕で、作藏が武士の脅迫に對して、啖火を切るところは、日本の傳統的反抗趣味を現はして、相變らず見物の溜飲を下げさせてゐるが、之を「ゴーストップ」の資本家反抗者の澤田の現代的啖火に比べて、まだ魅力を失つてゐないのだ。

編輯者雜記

×

昨夜、暗雲帝都の空を蔽うて、今朝、氣爽かに秋風肌に沁む。何事ぞ、樞、政、未だに相對峙して軍縮案審議行悩む。國民は狹つくに可決してるぢやないか。

×

時はさながら老人の繰言と沒交渉に流れて行く。酷熱から涼風の秋は來た。讀書シーズンの劈頭を飾るに、民政櫛田氏の大論文がある。マルクス經濟學の最高寶、反マルキスト一方の重鎭保馬高田博士に應酬して、明徹、精緻、該博、透徹、快刀亂麻を斷つの槪あり、蓋し一歲の白車精鬪の後に出でたる稀有の名論。今秋論壇これより益々繁からん。

×

勞農黨解消運動が動き初めると見るや、吾等の潜航的努力は、渦中の人河上小岩井兩氏を拉して、更に山川氏の批判をも加へることができたのは喜んで欲しい。そこに幾多重大なる問題の萌芽と契機とを孕んでゐるからである。

×

前號募集の「農村生活者の手記」は、全國津々浦々から集まるもの千餘、それだけでも既に吾等の意圖は報いられてゐる。血の慘むこれらの體驗記・選してわれらは泣いた。ピルディングの夜に更けて行く。田の草取りや蠶のひまにたど／＼しい灯影を賴りに書き綴つた此等の手記にわれらは泣いた。さうして更にまた泣いた。晤瞭たる農村光景が胸を衝つのだ。彼等のわれらへの絕對信賴が二重にわれらの胸を絞るのだ。さうして採錄し得たもの漸く五篇！　割愛せざるを得なかつた數百の手記に對して更に新たなる淚なきを得ないのである。

×

附錄「社會科學の頁」は果然學界の視聽を聳たしめた、本號第二回が斷然內容に光輝と充實を加へたことは識者の見落さざるところであらう。責任編輯諸大家の並々ならぬ忍耐努力によつて續けらるべきこの頁が、大方諸君子の社會科學理解への指針として活用せらるゝ間、われらの犧牲は何者でもないのである。

×

文藝制作の方向轉換へのトップを切つて、本誌本號には淺原・龍膽寺・久野三氏の共同制作「1930年」(百五十枚)を載せた。共同制作は合作ではない。共同制作者三人の息がどの一行一句にも吹込まれてゐるのだ。缺點も無論あらう。が、それはあつてもい、。時代は身邊雜記小說を蹴飛ばして、集團の力を要求してゐる。とまれ、小說「1930年」は一九三〇年の一大エポツク・メーキングだ。

×

本誌の誇、長編「夜明け前」愈々佳境に入る。輝かしい未來を孕む時代の空氣はいつも重苦しい。木曾の深谷に立罩める密雲の中にも明滅する一道の光明を賴りに思想と生活の轉動に惱む眞摯な時代人の悌が見られる。讀者は藤村氏の筆力の愈々出でて愈々雄健なのに驚かれると共に、メレジユコフスキーの三部作にも比すべきこの作品の時代に與へる深遂な暗示を見落されないであらう。

×

「婦人公論」はいよ／＼今月から値下げした。新秋涼風とともにわが社の出版部は益々生氣潑剌と動いて行く。「現代人物評論」もこの下旬には出る。ゴーリキイ「四十年」は久しぶりに文藝愛好家の味覺を滿たすであらう。相亞いで街に出づるもの、斯くの如くにして歡迎せらるゝこと面目此上なしである。

×

十三日校了。この日婦人公論講演會、朝日講堂に開かるゝ日。

附録

最新社會科學の頁

編輯責任者

池内宏
蠟山政道
新渡戸稻造
穗積重遠
戸田貞三
河合榮治郎
高柳賢三
高木八尺
那須皓
村川堅固
上田貞次郎
黑板勝美
矢内原忠雄
松村瞭
小泉信三
阿部賢一
美濃部達吉

（イロハ順）

目次（昭和五年十月）

▽經濟學……………三—一四

理論經濟學、學說史及學說批判 デイール「カツセルの社會經濟學理論に就て」——プルヒヤルト「景氣變動論に於ける貨幣說の發展史」

社會主義、共產主義及無政府主義 メイソン「ブランキと共產主義」——マチエ「パブウフと總裁政府」——同「パンテオン派」——同「平等者謀叛」

經營經濟學、商業、工業、商業政策及工業政策 赤松要「產業合理化とその矛盾及び綜合」——東洋經濟新報編「我國事業の資本分野」——吉田寧「我國における利益分配及類似制度」——根岸勉治「我國に於ける養蠶保險の事例」——舟地廉治郎「企業形態の經營經濟的意味」——小島昌太郎「交通事業に於る獨占」

財政學 土屋喬雄「日本財政史」——岡野文之助「東京市の公債整理」——福島信夫「相續稅の若干問題」——ゲスト「財政上に於ける經費の分類」——ハンター「財政上の經費及收入の分類」

土地問題、農業經濟及農業政策 內務省衛生局「農村衛生狀態に就て」——日本勸業銀行調査課「昭和五年度田畑賣買價格及賃貸料調」——八木芳之助「米價基準設定に就て」ベルジユ「佛國農村の一特質」——ラテイマー「加奈太農民の生產能率」——宮崎正義「ソヴエート聯邦の農業社會主義化政策」

人口論及人口問題 那須皓「人口問題の國際的展開」——モムベルト「人口減少の世界經濟的影響」

植民政策及植民地事情 矢內原忠雄「資本蓄積と植民地」

▽政治學及法律學……一四—一九

政治學及法律學の一般理論 美濃部達吉「ケルゼンの純粹法學の批評」——尾高朝雄「法律學に於ける理論と實踐」

公　法 高柳眞三「德川期缺落考」——中野登美雄「無任所大臣論」

國際法 大澤章「國際法に於ける集合的干涉の意義」——立作太郎「外國に在留する臣民に關する國家の國際法上の保護權を論す」——神川彥松「外交使節の階級及位次論」

國際事情 末廣重雄「米國移民法の改正に就て」——諸家「海洋の自由と英米關係の將來」——諸家「不戰條約有效化の問題」——ショツトウエル「三大海軍國と聯盟」

▽社會學……………一九—二一

黑正巖「明治初年の宗教的農民一揆」——汐見三郎「大都市市民の貧富の懸隔」——オルガズ「現代社會學」——ドンスパーク「哲學並に社會學に對するホブハウス教授の貢獻」——セイモーア「師範學校生徒の農村に對する社會的距離」

▽人文地理學……………二一—二三

ロックスベー「人文地理學と其の適用」——ノソコースキー「マルキシズムと經濟地理學」——ボーロースキー「地理學の研究と教授の方法」——綿貫勇彥「人文地理學の特性」——羽仁五郎「地理的史觀の批判」

▽文化人類學……………二三—二三

喜田貞吉「埴輪と其の起源及傳說に就いて」——キース「タリーム盆地の古墳墓より發見せる頭蓋」——ワシリエフ「オロツコ土俗學の基礎的特質」

▽歷　史……………二三—二六

國　史 三上義夫「圓理の發明に關する論證」——秋山謙藏「李氏朝鮮と琉球との通交」——天坊幸彥「攝津國都と上町豐崎宮」

東洋史 松田壽男「西突厥王庭考」——清水泰次「明代に於ける佛道の取締」——羽田亨「景教經典志玄安樂經に就いて」

西洋史 リツカアド「上古に於ける饑」——ベルヴエ「スパルタ」——メツシナ「摩尼教の教理と基督教の起原」

經濟學

●理論經濟學、學說史及學說批判

●ディール「カッセルの社會經濟學理論に就て」(Diehl Karl, Über Cassels System der theoretischen Sozialökonomie. — Weltwirtsch. Arch. 28(1) Jul. 1928 : 144—160)

この紹介は前記表題に於る論文の後半、主として分配理論の批判に限られる。ディールの指摘する缺陷は次の如くである。(一)資本概念は自然的、は法的個人の所有として規制せられねばならぬ。カッセルの如く資本を工學的に解釋するのは正しくない。(二)カッセルは、利子論に於て、所有關係より生ずる交換力を認めぬ。斯くて契約利子と附屬利子とが同一視されて居る。(三)地代論に於て、土地所有の準獨占的性質が看過する。(四)勞銀論に於て、團體交涉力と謂ふが如き社會學的要因が勞銀率に及す影響を全く無視する。(五)利潤論に於て、經營並に危險負擔の企業者勤勞を費用要因に變じ 利潤の概念が景氣による較差的獨占利得に限定するのは誤である。(六)彼は自然的稀少性と人工的稀少性とを區別せざるが故に、稀少性原理の貨幣理論に對する適用には缺陷がある。(七)景氣變動は自由競爭の行はれる資本家的生產の避け得ざる必然的隨伴現象なるに、カッセルは、其の變動の說明に於て、貨幣並に信用上の要因を強調し過ぎて居る。(八)國際貿易論に於て、比較的生產費の法則と關稅の影響とを適當に考察せぬ。國際貿易を對外貿易相場の變動のみに由て說明することは正しくない。(九)彼は分配と歸屬との理論を充分に論じて居らぬ。所得の社會的分配を價格構成の原理によつて規制するの結果はマンチェスタア學派の斉理論に陷つて居る。(小泉)

●ブルヒヤルト「景氣變動論に於る貨幣說の發展史」(Burchardt, Entwicklungsgeschichte der monetären Konjunkturtheorie— Weltwirtsch. Arch. 28(1). Jun. 1928 : 77—143) 景氣變動に關する貨幣說主唱者の學說がホオトレイの構想に照して檢討されて居る。先づ通貨論の時代と信用論の其れとに分つ。前者即ち「萌型の理論」の特質を列擧すれば[illegible]、(イ)[illegible]に於て代表[illegible]注意を集中した、(ロ)循環的景氣變動を生ずるものとして獨立たる諸要因を擧げる方法から最初に脫却したものは、ジュグラーであつた。(ハ)價格の騰貴は取引の物理的數量を增加すると說いたものはあるが、進んでこの共變を說明するものはなかつた。(ニ)主として價格の變動が強調された。(ホ)「地金の絕えざる流出」を生ずる不利な貿易不衡は極めて重要なる問題であつた。而して後者即ち「近代型の理論」に於る著しき特徵は、(イ)恐慌面に對してよりも全體としての景氣變動に注意する。(ロ)周期的變動は國際的に結合された現象と見られる。(ハ)價格の騰貴は、其の源泉に關係なく、購買力の增大より說明せられる。(ニ)生產上の變化は物價格の變動と等しき役割を有する。要之、非金融的要因は景氣變動に關する金融說に必要な條件としては役立つが充分な其れではない、と言ふのである。(小泉)

◆社會主義、共產主義及無政府主義

●メイソン「ブランキと共産主義」(Mason, E., Blanqui and Communism.—Political Science Quarterly. Dec. 1929. 498—527) 原著者は勞農の經驗に鑑みてボルシェヴィズムとブランキの革命理論及方法との關係を述べ、不當に閑却された彼の地位を立て直さうとする。ブランキに依れば共産主義の實現は專ら啓蒙の事業でなければならぬ。現社會の害惡は、國家、教會、資本家、地主等の無知の産物である。國民啓蒙に要する期間中、是等の非社會階級を粉砕するのは革命の使命であり、少數の精鋭果斷の革命家の獨裁に俟つべきで、此啓蒙の事業が成就すれば、獨裁は亡んで共産社會は自然に到來する。而して此所望の社會秩序の到來はマルクスに於けるが如き必然性を有つもので無く、精神と意志との左右し得べき所である。彼の戰術はボルシェヴィズムと同一であつて、專らバブウフに負ふものであるが、唯是と違ふ所はバブウフに無い階級鬪爭説である。ブランキはバブウフとレニンの中間に立つ。バブウフとレニンとの間には、工業的プロレタリヤ及其の地位、歴史的使命、機能に關する社會主義理論が介在する。バブウフはジャコバニズムの最後的表明であり、レニンは社會主義的プロレタリヤの最大の指導者である。而してブランキは半ば、十八世紀のジャコバンであり、半ば十九世紀の社會主義者である。彼等は孰れも暴力革命及獨裁を強調した。彼等は又革命成就の業を專ら少數の精鋭果敢の革命家に依賴し、無産大衆をその無知の故を以て、是に與からしめぬ。此精鋭果敢の分子は、バブウフには巴里革命家の一團、ブランキには巴里プロレタリヤ及浪人的ブルジョワ、レニンには都市プロレタリヤである。勞農革命に鑑みる時、ブランキの歴史的地位はもつと高められていいと考へられる。(小泉)

●マチエ「バブウフと總裁政府」(Mathiez, A., Babeuf et le Directoire. Revue des Cours et Conférences. Jun. 15. 1929. 450—467) バブウフの唯一の獨創性は當時行はれてゐた教義を通俗化し、是を總裁政府及テルミドル派攻撃の武器として用ひた事である。バブウフは特赦されたテロリストの機關であり、共産主義は彼の眞正の政治的目的の從屬物にすぎなかつた。メエ、ドマイヨ等の急進論者がバブウフの政府攻撃を否認したので、彼は直ちに彼等に反駁したが、是が抑々彼の政治哲學構成の機縁である。彼の共産主義はロベスピエエルの食卓からの、おこぼれを拾ひ集めたもので何等明確なる體系を持たない。彼の共産主義は職人や貧乏人用の一種の社會的煽慾論で、其理論はバラック、其手段は恐嚇である。總裁政府が彼を攻撃したのは其過激なる見解の故に非ずして、政府が其政權下に糾合した共和主義者の連帶を攪亂せんとする彼の政略のためであつた。(小泉)

◉マチエ「パンテオン派」(Mathiez, A., Les Panthéonistes. Revue des Cours et Conférences. May 15, 1929. 193—210) 總裁政府は其當初に於ては、從來の行懸かを棄てて、テロリストに政治的自由を與へ、其の發行する新聞雜誌をさへ保護し、閉鎖せられてゐた俱樂部の再開、新俱樂部の開設を助成した。新設俱樂部中最も著名のものはパンテオン俱樂部であつた。此俱樂部の建設者はバブウフ

でも無く又當局者に眞會員でも無かつた。同友當局の會員は政府の方針を遵奉する極く穩健なる、「善良なるブルジョア」であつた。然かるに當局より政府に反抗して、秘かにアマブル邸に會合して政府倒壞の陰謀を廻らしつゝあつたランデエ、シャスレ、アマアルを領袖とするアマアル委員會が解散するや、是等の解體分子は相率ゐてパンテオン倶樂部に蝟集した。是がため此倶樂部の方針は急激に左傾化するに至つたのである。バブウフは初め此倶樂部の會員でも無く又アマアル委員會にも參加しなかつたが、彼等とは密接の連絡があつた。(小泉)

●**マチエ** 「**平等者謀叛**」(Mathiez, A., Le Complot des Égaux. Revue des Cours et Conférences. Jul. 15, 1929. 609—620) バブウフの「護民官」を愛讀し、不等者謀叛に參加した人々の大部分は、テルミドオル反動の迫害に遭ひ、復讐心に燃えてゐたブルジョアジイであつた。彼等がバブウフと行を共にしたのは彼の共產主義に歸依せるためでは決して無く、彼の手に依て現政府を顚覆して、宿怨を晴らさんがためであつた。謀叛の本部たる祕密委員會の組織を理論したのはバブウフでは無くゼルマンである。謀叛の準備は着々進捗し、一時危ぶまれた山岳黨との合同問題も解決し、謀叛法は可決せられ、萬事順調に運ぶかと思はれたが、グリイゼルの裏切に逢ひ脆くも潰滅した。謀叛法は決して共產主義的で無く、唯、ロベスピエエルの綱領と同一である。當時の人々は此謀叛を共產主義運動とは考へず、唯々、恐怖主義者の最後の運動であるとしか考へなかつた。此謀叛が共產主義運動であると稱せらるゝに至つたのはブオナロッチが「陰謀史」を著してからの事である。(小泉)

◆經營經濟學、商業、工業、商業政策及工業政策

●**赤松要** 「**產業合理化とその矛盾及び綜合**」(商業經濟論叢、昭和五・七月、第八卷上冊、一—四五頁) 產業合理化の本質は自由競爭時代資本勞働の組織が無統制的循他不統一的だつたのに對し反省的統一的體系作たるに存し、[illegible]下げ原價と自由競爭の下に[illegible]原則より成る。然し此二原則の前者と後者は[illegible]陷つて後者と矛盾し、後者は又前者を裏切り、て生產品の限界的價値を比較的に高くし、フージョン、コンビネーションも此矛盾を解消し得ず、結局企業利潤を目標とする限りの產業合理化は失業、消費者の犧牲等を克服し難き矛盾を殘し、之が止揚にはより上層の合理化として社會的國家的國際的體系化による必要があり又現によりつゝある。但し生產經濟の斷る社會的統制の傾向と異り、消費經濟には個人自由が殘存し、結局人は此兩者を綜合せるものであり、「消費に於ける個人自由は迂回的に生產の社會的統制の主體となるものである」。(下田)

●「**我國事業の資本分野**」(東洋經濟新報、一四〇七、昭和五・七月、頁五九—八四) 我國の產業を支配するものは國家、公共團體、民間財閥、外國資本の四者であるも官に重要なるは民間大財閥であるから、如何なる事業が如何なる財閥に依て支配されるかを、主として株式所有、役員[illegible]し

て社債引受割當付の方面から研究したものである。株式會社を完全に統制するには過半數の株式所有を必要とするが實際には持株割合が二割以上に達すれば統制權があり、一割内外でも資本の分散せる會社ならば支配し得ると看做し、後述諸工業の各會社毎に拂込資本及株數中諸財閥の占むる高、及び其の百分率を計算する事に依て諸財閥の有する支配程度を明示してゐる。觀之、紡績業に於ては羊毛工業に於ると同じく大資本閥に比較的緣遠く小財閥との關係密接である（例之、紡績にては江州系、商總系、羊毛にては羊毛商人）が、三井は鐘紡を始め朝鮮、内海、日高、天滿等の紡織會社を支配し、斯界の二〇%を占め、拂込資本七百七十萬圓に上り、三菱の富士紡一社に比すれば遙に多い。人絹工業は新興工業であるが三井、三菱、帝銀及紡績會社の支配下にあり、製麻は帝國製麻の略ゝ獨占下に、從て安田の支配下に、製紙は王子、富士、樺工の對立が變じて三井が王子の他に富士を支配して斯界の約六三%を手中に收め三菱の製紙も遠く之に及ばず、海運業は三菱の郵船、中橋系の商船に分割され、三井は物産の所有船舶に限られ、造船は川崎三菱等に支配されて居り、石炭、鐵鋼等の基礎工業では三井、三菱の他に住友、久原、貝島其他地方財閥の明かなる對立が示されてゐる。外國資本は製作工業殊に電機製作業に著しく、人絹工業にも少くない。株式所有以外に洋灰業における三井三菱の販賣權による支配、電力、電鐵に於る金融資本家の社債引受による支配、殊に三井の東電支配は注目に値する。要之重工業に於ては大資本閥の進出目覺しく小資本閥は纖維工業等に多く活動してゐる。（上田）

●吉田寧　「我國における利益分配及類似制度」（社會政策時報、第一一八號、昭和五・七月、頁一〇二―一二〇）工業俱樂部の調査によると利益分配制、積立金制、配當金制等の名稱で利益分配制度を實施中の會社は四二（調査會社總數四三〇の一割弱、有無の判明した二〇七社の二割強）で公稱資本金百萬圓以上の中所會社がその四五%以上、從業員數百人以上千人未滿の會社が六割強を占めてゐる。又其の多くは大正五―九年の好況時の産物で勞資協調勤續奬勵或は能率增進を目的とし、内規又は工場規程で會社が利益を舉ぐることを條件として六月十二月の二回或は三月又は七月に一回現金で全從業員に分配することにしてゐるものが多く、其額は每期役員會が決定するもの、豫め想定しあるもの等區々であるが大體に於て所期の目的を達してゐる。又之に類似の制度の中では社債券又は株式の分配を行つてゐるものは過去に七社あつたが現在はない。利益金中より退職手當又は養老扶助救援の爲に定款又は重役會の決定で積立を行つてゐる會社は六一社だが殆ど一流大會社のみで明治三七―四〇及大正五―一〇年の好況時代に創立のもの多く創立後廢止又は中止したものは四社。創立以來の積立總額の判明せる三三社の合計五、三三五萬圓、一社平均一六二萬圓だが最近の三年間は事業不振の爲積立をしてゐない會社が多い。又營業費中から同様な積立を行つた會社が一六あるが此積立金には前者同様利子を付せぬものが多い（上田）

●根岸勉治　「我國に於ける勞働保險の事例」
（社會政策時報第一一七號、昭和五・六月、頁二

一―三三）我國農業中養蠶業の占むる地位は重且大で其危險率頗る大なるも之が保險制度の樹立は殆ど不可能と考へられてゐたが三重縣阿山郡長田村では昨年度から相互制度により之を實施してゐる。同村は全戸數二六〇、內農家一三七、內一七九戸は養蠶を行ひ米作には豐凶の差少きも養蠶には違作甚しき爲この實施を企てたのである。方法は二枚以上蠶種の掃立をなす者が組合員となり、一枚に付五十錢を醵金し(卽保險料)病蠶發見又は蠶兒放棄の時及び產繭處分後十日以內に明細書を提出する。組合では互選による組合長及役員が組合委員に諮問の上救助金(保險金)を査定する。救助金は收穫皆無から半作までとし最高は春蠶二十圓夏秋蠶各十五圓合計五十圓で普通作一枚につき春蠶七貫夏秋蠶各三貫五百の基準に照らして支給するが是は蠶業經營費の約四分の一に當る。三眠以前に放棄したり、能力以上飼育せんとしたり、虛僞の申告をした者には保險金を支拂はない。昨年の結果を見るに違作者が春蠶二、夏蠶十二、秋蠶十五で救助金は一戸平均各々十二圓三十錢、五圓五十錢、十二圓十二錢で違作少き爲普通作の半に達しない者にも交付したやうである(上田)

●**増地庸治郎**　「**企業形態の經營經濟的意味**」(經營經濟研究、第四冊、昭和五・五月、頁一―三八)　近時企業の法律形態と經濟形態とを分けて考へる事が行はれる。經營經濟學にあつて經濟形態を研究するの必要は勿論なるもパリイ氏の如く法律形態を無視するは危險であり、殊に我國の如く法先づ成つて後に經濟が之を利用したる國に於て然りである。扨パリイ氏は經濟上の企業形態の選擇は(一)資本調達もしくは之に關聯せる危險及利潤分配の秩序に依て(二)企業目的に適應するやうに職能を特定機關に分割せんが爲に、(三)獨占的市場支配なる特定任務に適合せしめんとして、行はれると說き、後の二者は派生的第二次的であるから、企業形態は之を純經濟的に見れば、企業が資本調達の爲に如何に組織され、如何に各參加者間に危險と利潤分配とが行はれるかの樣式方法を意味すると言ふ。所が資本調達は企業にとつて重要なる事項であるけれども其全部ではなく寧ろ附隨的特徴たるに止まる。從つてリーフマン氏や一リ・ヤ・レーマン氏の如く所有と指導、資本危險と事業指揮との分離又は合一に求める方が妥當である。かくてこれが合一せるものに單獨企業、分離せるものは多數集團企業たる株式會社にして少數集團企業たる合名會社合資會社匿名組合はその中間に位する。(上田)

●**小島昌太郎**　「**交通事業に於る獨占**」(商業及經濟研究第五七冊、昭和五・三月、頁一―二八)　交通事業に於る組織による獨占卽カルテル(海上ではコンファレンス)を論じたもの。分けて加盟會社相互間の競爭を防止せんとするもの(賃率、地域、運輸の協定)と更に其上に各加盟會社の利益迄も分配せんとするもの(プール、經營合同)の二とす。賃率協定(確定、最低、差別賃率協定)は違反され易いから地域協定を行ふが是は交通區域が獨立してゐることが必要とするから運輸協定を行ひ運輸量を各社に割當てる。然し之も工業と異り交通勞務は需要に依て決定され運輸業者の側で運送供給を差控へること不可能のため常にプールと併せ行ふ。プールには運賃の全部又

は一部を共同勘定に移して再分配を行ふ運賃合同と、運輸量の割當を行ふ運輸合同とある。後者は更に直接に共同荷扱所を設けるものと間接にシンヂケート事務所に於て調節し過多運送者より過少運送者に超過部分を支拂はしめるものとに分れる。此二合同を併用する時は加盟者相互の利害を調節し競爭による損失を略ゞ防ぎ得る。然し最高級のものは經濟合同で是は同一交通路の範圍内で同一營業政策の下に行ふのであるが、資本的に統制されない點に於てトラストと異る。(上田)

●財　政　學

●土屋喬雄著「日本財政史」(改造社版經濟學全集第三十卷、頁三三三―四七八)わが國の財政歴史が本庄博士や土屋教授によつて企てられ續々その業績が發表せられることは甚だ喜ばしい事だ。土屋教授の此の新著は第一編氏族國家の財政、第二編貴族國家の財政、第三編前期封建國家の財政、第四編後期封建國家の財政に分れる。そしてその各その時代に於て財政組織、租税制度、及び財政狀態の沿革を各章とし主として事實の手際よき叙説を試みてゐる、まゝ若干經濟史論的の斷案もあり、二千餘年に亘るわが國史上の最高權力の財政的變遷を観ふに甚だ便ならしめてゐる。而して財政の『様式及び內容は常に社會の特定の生產關係、經濟構造の、又國家の、從つて又階級關係の歴史的特性によつて制約せられるのである』となす著者の史觀がより色彩濃厚に表はれたならば、他の學者の業績とは一層特殊的な地位を、本書は贏えたかも知れぬと思ふ。(阿部)

●岡野文之助「東京市の公債整理」(都市問題、昭和五・五月、頁二七―四〇、及び六月、頁五七―七〇)東京市財政難の中心問題たる市債整理につき對策を提唱したるもの。東京市債は年々增加する傾向あり、大正八年一億二千七百萬圓に過ぎざりしもの、昭和四年十二月末日現在の未償還額は五億四千百萬を越ゆ。中、普通經濟は二億一千萬圓強。水道經濟は五千三百萬圓弱。電氣經濟は一億九千八百萬圓弱。市債累積の原因は二つ。一は市膨脹と震災。二は經常收入減。而して電氣經濟においては電燈及び乘合自動車經濟は逐年好成績なるも、たゞ電氣軌道經濟や乘車人員及び收益漸減す。對策として普通經濟の公債財源全廢。電氣軌道經濟の整理と非募債の徹底。高利の低利への借替。減債基金の確立。を提唱す。減債基金は現今電氣事業の減債金經濟と一般的の公債償還金經濟があるが基金のあるものは他に流用せられ、繰入れらるべき額が規定通りで實行せられない。減債規定の實行が強調されてゐる。(阿部)

●福島信夫「相續税の若干問題」(税、昭和五・七月、頁三四―四二)相續税は日露戰爭中新設せられ實施二十五ケ年になる。諸税は良稅の議の如く、官民之に慣れ、その間財政上の收入も三百萬圓から二千九百萬圓に上り九倍の增加を示してゐる。相續税改正は過去に於いて四回企てられたが、現代の社會事情に適應する爲に更に改正を要する點が多い。その中四、五。(一)は相續財產の課税範圍を擴張すること。現行の屬地主義乃ち稅法施行地に在る財產課稅主義を改正して屬人主義で以て施行地が、少なくとも主權の及ぶ範圍に

ある財産をも還すべし。(二)は[illegible]小作權の價格算定方法を改め、現行の法定計算(これ等の權利の存續する期間と賃貸價格とを標準として計算する)を廢して時價計算にすること。(三)課稅最低限を引下げ、特に農地負擔の輕減。人的事情の斟酌(相續人の年齢等)の必要。(四)、稅率の引上。その他相續人所有財産と相續財産を合計し、之に累進率を課し、その中から所有財産負擔相當部分を控除する。(五)、贈與稅の徹底……等。(阿部)

●ゲスト「財政上に於ける經費の分類」(Guest, Harold, W., Classifications of Public Expenditures, American Economic Review, March 1930, pp. 37—45) 財政上における經費の分類は學者毎に不同であり、その種類また從つて雜多にして混同を免れない。從來多くの財政學者は相互に經費の分類について勝手に議論して來たが未だ定說あるものを見出してはゐない。これは分類をなすに當り、その目的とするところ必ずしも同一でないから觀點自から異なるのは無論であるが、また分類が[illegible]分類の對象たる事實そのものが[illegible]的であり又動的なのである。この見解に基いて云へば分類は夫に進んで諸分類の分類を必要とするに至つてゐる。其の一は科學的分類であつてその目的とするところ事實上の客觀的關係において事物を闡明せんとするもの、其の二は實用を目的とする人爲的の分類これである。この分類點より諸家の經費分類を批判し、各分類の限界を定めんとするもの。(阿部)

●ハンター「財政上に於ける經費及び收入の分類」(Hunter, M. H. The Problem of Classification; Public Expenditure and Revenues, American Economic Review, March 1930, pp. 48—53) 今一つ分類問題に關する論文を紹介する。實は分類は學問の第一階程なのであるが財政學上においては妥當なる分類を得ることは容易でない。ハンター氏の論文は前に紹介したゲスト氏の夫れほど出來はよくないが、諸學者が從來歲出入各部において試みた分類の甚だ淺薄であることを指摘してゐる點は明截だ。歲出部において經常と臨時、[illegible]的に試[illegible]しながら、收入科目の分類が最も妥當たとなしてゐる。それは(Governmental cost payments) (Governmental cost payments exchan-ge) であり、前者は俸給、賃料、利子、諸工事の費用等を含みて一般政府の活動に係るもの、而して後者は再發見せらるべき物品支拂、公債償還、局課間の合計調整費等を含む。歲入方面においては租稅、手數料、特別賦金、價格(官業官品の)間に明確なる區別の立て難き點を檢討してゐるが、自から積極的には分類法を提唱しない。曰く財政上の分類は自然科學ほど明確であり得ないが、財政上の多くの所說そのものが果して科學的であるか如何かも疑はしい、と。(阿部)

◆土地問題、農業經濟及農業政策

●內務省衞生局「農村衞生狀態に就て」(衞生局パンフレット、昭和五・三月、頁一—二一)日本內地に於ける村の數は約一萬四百、其の住民は約三千四百萬(內地總人口の五七%に

當る)であつて、村民の大多數は農業者である。昭和二年の調査によれば、開業醫無き村數は約二千九百であり、開業産婆無き村數は約三千六百である。農村民一個年の醫療費は總額約一億一千萬圓、賣藥費は總額約二千七百萬圓と推算せられる。

内務省並に地方廳は大正七年以來十個年に亙りて百四十餘村の衛生狀態を調査し其の内約八十五個村の成績を集計したが、之によると農村は都市に比して出生率著しく高く死亡率も稍高い。而して農村民の體格は少年時代に於ては意外に惡く十五歳迄は各歳別につき男女共に都市のそれよりも劣つて居る。唯壯丁の檢査成績は全國平均よりも優つて居る。農村民の疾病は一人平均一・五五個に當り、寄生蟲病、就中、蛔蟲最も多く、口腔咽頭の病(齲齒を含む)、トラホーム等之に次ぐ。心臓、氣管支、胃腸等の病氣も特に多い。榮養狀態も宜しくなく殊に動物性食品に缺乏して居る。家居、飲料水等も缺陷頗る多大である。種々なる見地より農村衛生の改善を圖ることは刻下の急務である。(那須)

●**日本勸業銀行調査課「昭和五年度田畑賣買價格及賃貸料調」**(同調査課パンフレット、昭和五年版、頁一―一二)昭和五年三月の調査によれば田畑共に前年度に比して六分内外其の價格を低落し普通田は反當平均五二三圓より四八九圓に、普通畑は三一九圓より三〇〇圓に下つた。低落の歩合は地方的に異つて居るが東北は最も甚しくして一割一二分に及び北陸之に次ぎて八九分位である。又田畑價格が最高を示し大正十一年に比すれば今春は田畑共に約二割の低落を示して居る。而して近き將來に於ける耕地價格の騰落に關し全國郡農會の意見を徵せし結果は、下落を豫想せるもの六七、保合を豫想せるもの一九、騰貴を豫想せるもの一四であつた。田畑の抵當貸借は本年は昨年に比して多く、賣買は之に反して少なしと見られて居る。農家經濟の逼迫と金融機關が無擔保貸附を警戒することとが抵當增加の理由として考へられ、土地賣却希望者は多きも購入者少きこととが後者の理由として擧げられる。小作料は田に於ては昨年と略同一にして僅に一分内外の低落を上田及び下田に於て見るに止るが、畑に於ては八分内外の低落を來して居る。これ田の小作料が多く穀納なるに對して畑小作料は多くは金納なるに基くものである。(那須)

●**八木芳之助「米價基準設定に就いて」**(經濟論叢、大正五・八月、頁六三―八八) 米穀法發動の客觀的規準設定の必要は論を俟たざる所であるが、右基準としては、一、固定的物價指數、二、移動的物價指數及米價指數の對比、三、物價指數に米價の趨勢を加味すること、四、生産費、五、生計費等の諸案が擧げらるゝも、一の場合に於ては米價の一般物價に對する強き騰貴率が無視され、二及び三にありては過去の米價趨勢により將來を卜せんとする無理がある。四の場合、生産費中家族勞賃、土地資本利子、小作料、公租公課等は計算上問題となるべく、之に於てはエンゲルの法則に依り月、六十圓未滿所得者の生計費を基準とすべきも、米費用が全支出の二三・〇四%を占むるときを基準とするや、**飲食物費中四五・八七%に及ぶときを採るや、明かでない。かくの如く此れ等の諸基準はそれ〴〵**

[illegible]を持つが故に[illegible]標準を可とするも生產者、消費者共に滿足すべき公正なるものを得るは理論上不可能である。されば農家は米價基準改定に依る調節策と相俟ち自ら自助運動による米價維持を計るべきである。（那須）

●ルネ・ベルジュ「佛國農村の一特質」(Berge René, Symposium of the Agricultural Section of Le Musée Social. Jan. 1929 : 375—378) 多く歐洲諸國に於ては小規模自作農の創定に努力して居るが、これは自作農は大地主に比して土地を入念に耕作し、農業賃銀勞働者よりも都市に移住すること少なく、又一般に比較的大家族を支持するからである。然るに佛國では事情稍異るものがありて、都市勞働者の方が家族數が多い。又農業經營規模の大小も耕作契約の度を他國ほど明確に表はさない。佛國では農業保護立法が大いに必要なのであつて殊に農業金融を擴張しなければならぬ。多數の農村家屋は急速に修繕を必要とする有様であるが、これには資金を融通してやらねばならぬ。更に修繕不可能の程度に陥れる家屋も多々ある。（那須）

●J・ラティマー「加奈太農民の生產能率」(Lattimer, J. E., Production per man. Agr. [illegible] 1929 : 138-142) 加奈太に於ては一八八一年乃至一九二一年の四十年間に於て農業從業者の總從業者に對する比率が規則正しく可成り急速に減退した。然も一九〇一年より一九二一年の間に於て農產物の輸出超過價額は六倍となつた。又一九一一年乃至一九二一年間に從業者一人當り耕作面積は三二・七エーカーから五七・三エーカーに增大した。最近農業機械の進步するに連れて、一エーカー（我が四反餘）の耕地に要る播種し收穫し脱穀するに對して一人二時間以下の勞力で事足るに至つた。一九二一年現在カナダ農業從業者は百萬人強であるに過ぎない。（那須）

●宮崎正義「ソウエート聯邦の農業社會主義化政策」（ソウエート聯邦事情、一・二ー四、昭和五・五ー八月、連載） ソウエート聯邦の農業政策は最近に一大變革を見た。即ち昨秋十一月の聯邦共產黨中央委員會總會の決議によりて、農業に關する從來の新經濟政策なるものを棄て急進的に農業を社會主義化せむと[illegible]することである。共營農業とは[illegible]形態の[illegible]であるが、此の中、同國政府が現下最も適切なるものとして採用せるは農業小組合制であつて住宅、自家用家畜家禽等を除き土地、農具、役畜、勞働等一切の生產手段を共有化するものである。但し生產物の全部を共有化しない。この最後の點が農業小組合と農業コンミユーンとの異る所であつて、農業小組合に於ける生產物の處分及び分配方法は今日尚判明しない。一方、農村に於ける富農は之を追放し其の財產は之を沒收して共營農業中に繰り入れる。共營農業組織員として三萬人の赤衞軍々人や二萬五千人の都市工業勞働者を農村に送る計畫が樹てられ實行されたが、更に百數十萬の技術員、指導員が必要視されて居る。この共營農業化の爲めにソウエート聯邦政府が必死の努力を傾くるに至つたのは、穀物買付計畫が豫期の結果を收めず失敗せし爲同國政府はより多くの穀物を得る必要に迫ら

れたからである。現にスターリンは共營農業化の結果は在來不可能なりし數千萬町歩の未墾地を開墾し得べしと考へて居る。さり乍ら農民の自由意志を無視し强暴を以て急速に農業共同經營化の目的を達成せむとしても成功は覺束ない。ブハーリンによれば目下必要なるは農産物商取引の伸張であり平常的なる市場關係の復活である。小農經濟の安固性を認むる以上は、それが社會一般の狀勢に引ずられて自然追從的に社會主義化されるやうに仕向けねばならぬ。その準備なき中に、無理に共營農業化せむとすることは農業を破壞し飢饉を齎し、又農民と勞働階級との決裂を招くに過ぎない。ロシアに富農はない。所謂富農と稱せらるゝものも乞食の如き生活を送るに過ぎぬ。要するに本政策は都市プロの農民壓迫であり、農民の封建的軍事的搾取に外ならぬと。ブハーリンは此の反對の爲め失脚するに至つたが、併し乍ら彼れの憂ひた所は着々具體的に現はれ來りつゝあるやうである。共營農業化した農家數は一九二九年一〇月に全國農家の七%であつたものが一九三〇年二月には五二・七%、三月には五五%に達し、僅々數ケ月の中に飛躍的增加をなしたのであるが、之は强制されたこと又は紙上で製造されたことを明示するものであり、其後當局が農業界の混亂、農業經濟の破壞に當面じて態度を緩和するや、農民は大衆的に共營農業より脫退し、一九三〇年六月には半減して二五%となつたのである。殊に甚しきはモスコウ州であつて、一九二八年一〇月の二・七%より一九三〇年三月の七三・三%に上り、同六月には再び七%に下つて居る。共營農業の不成績は(一)大經營なするに必要なる機械の供給作はぬこと、(二)貧農に指導權を與へ、經濟上多大の貢獻をなす多數中農の立場を無視したること(三)貧農自身が共營農業に對し不信の念を抱くこと等に歸着する。この最後の貧農の不信は單に個人經營に對する小農の執着性に基くのみならず共營農業組織の技術的要件の具備せざることや、都市プロレタリアの農村搾取に對する農民共通の反感に立脚する。之を要するに急進的共營農業政策の失敗は既に明か。であつて、「プロレタリア政權に對する不信及商品關係が從前にも增して中、貧農大衆の間に地盤を有するに至つたことを否定し難い。」スターリンは社會化せる農業の商品穀物生産額の大なを云ふが、之は共營農業が比較的少數なりし時に之に與へ得たる殊遇の結果を現はすと同時に、他面壓迫せられたる私營農業の生産率の低下を意味するものに外ならぬ。一擧にしてロシア農業を社會主義化せむとせし夢は破れ去つた。今日に於て農業の共營化は農民の自由意志に基くべしなどと當局の唱ふるは、これ其の失政を被はむとする苦しき辯明である。(那須)

◆人口論及人口問題

●**那須皓 「人口問題の國際的展開」**(農業經濟研究、六・三、昭和五・七月、頁一五一—一六五)人口問題の國際政局的考察は世界大戰後最近十年間に現はれたる人口現象に立脚するものである。此點に於て世界各國は三國に分たる。第一は北歐中歐諸國及びその系統に屬する新開國にしてその人口は今や急速なる步調を以て民族的膨脹停止の限界に近づきつ

つある。第二は伊太利スペイン及東歐の若干の國々にして現在は人口自然増加率はさして減少せざるも近き將來に於いて急激なる減少の出現が豫想せられる。第三は東洋諸國及びロシアにして多産多死の國々である。以上の分類に對比して世界の土地及天然資源配分の狀態を見れば、その人口増加率との間に存する不合理、各國人口壓力の相違は、世界政局の危機を醸す。人口問題の國際的意義は益ゝ重大性を加ふ。之を適當に解決せんが爲めには聰明と協同とが國内的にも國際的にも強く要求せられる。移民制限の如きも之を單に國内問題として取扱はず國際會議を開いて規定せねばならない。尚、各國人口の將來の増減を比較研究する爲めには出生率によるは餘りに疎雜である、一般産兒率更に進んで年齡階級別産兒率の方法によることが必要である。(矢内原)

●**モムベルト「人口減少の世界經濟的影響」**(Mombert, P. Weltwirtschaftliche Auswirkungen einer abnehmenden Volkszahl, Weltwirtschaftliches Archiv. 32. Bd. Heft 1. 一三一—一三三、一五一—一六三)歐洲諸國の人口問題 既往に世界經濟の將來は從來主として後進國の工業化なる見地から考察せられたが、歐洲諸國民經濟の内部に於て、他の、更に之と反對の方向に働くところの要素あるが存在するものが多い。之れ即ち歐洲文明國の人口増加傾向と他國のそれとの關聯である。一國人口の顯著なる増加は海外諸國よりの食料品原料品の供給増加により、又海外諸國への過剩人口の移出により、更に海外諸國に於ける新販賣市場の開拓によりて、諸國の世界經濟的連關の基礎を成した。然るに世界大戰開始以後は歐洲文明諸國の人口増加率は退步的となり、この傾向は將來も持續し、人口増加を極めて緩漫に、或は恐らく停止的たるに至らしめるであらう。その結果、原料品食料品の輸入減少、從つて工業製品の輸出減少、かくて世界貿易の比較的縮少、少くとも世界經濟に於ける歐洲文明國の持分の相對的或は恐らく絕對的減退を見るであらう。又、工業品に對する國内市場の縮少、從つて國民經濟の範圍縮少となり、人口増加率の減少による勞働力供給の減少はこれに適應するであらう。人口減少に拘らず生活程度を維持せんが爲めには大なる技術及び經營の進步、生活程度の向上が必要とし、この爲めには資本の新蓄積の増大が必要とする。人口減少の結果、國民所得中消費部分が減少する故に蓄積部分増大する理なるも、同時に土地收穫遞減法則に束縛せられて工業資本の新蓄積に向けらるゝ部分の減少する一面もある。又その生產に及ぼす影響の利不利によりて、人口減少が資本蓄積に及ぼす影響は異る。更に、佛獨英は人口増加率減少の結果國民の移出は止み却てスラヴ系及び南歐系諸國民の移入を見るべく、そのことは勞働市場、生活程度、及資本蓄積の諸點に於て各國の政治的經濟的關係從つて世界經濟的連關に影響を與へるであらう。(矢内原)

◆植民政策及植民地事情

●**矢内原忠雄「資本蓄積と植民地」**(社會科學、六・一、昭和五・六月、頁四三—六八)資本主義にとりて非資本主義社會としての植民地への進出は如何なる根據に於て必然たりとい

ひ得るや。先づ、植民地は資本主義の成立期に於てのみならずその發展の進行後に於ても資本の本源的蓄積の有力なる源泉である。次に、植民地は資本循環の三部面、卽ち本來の生產行程部面のみならず生產手段及勞働力の購買竝に生產物の販賣たる前後の二流通部面に於ても亦、超過利潤の源泉にして、且つ平均利潤率低下傾向の有力なる阻止原因である。更に恐慌の根本的原因たる生產部門間の不均衡、生產と消費との不均衡、及び固定資本の流通に於ける償却と更新との不均衡、のいづれに於ても植民地は重要なる恐慌の回避又は緩和原因となる。併し乍ら決して恐慌を揚棄する力はない。而してローザ・ルクセンブルグは餘剩價値の中蓄積せらるべき部分の實現場所として非資本社會的環境の必要性を力說するも、その理論をば不當なりとするナヒムソン及びブハーリンの批判に與みする。但しブハーリンの力說する二點卽ち平均利潤率及び恐慌の問題の外に、資本主義社會それ自體の擴張をば資本蓄積の要件と爲し、資本が非資本主義社會に進出する歷史的事實の必然性を說明すべき理論的根據は以上三點に求むべきものと思ふ。(矢內原)

政治學及法律學

◆政治學及法律學の一般理論

●**美濃部達吉「ケルゼンの純粹法學の批評」**(國家學會雜誌、四十四・八、昭和五・八月、頁一―三六)　第一に法の本質は Sollen ではなく Sein である。ケルゼンが法を Sollen の軌範としてゐるのは、僅に法の內容に付、命令的規定に認めらるゝのみ。法律上の Können、最廣義の權利又は權能を生ずる能力的規定には全く該當しない。ケルゼンは法を純然たる他律的規範とし、法が如何にして法たり得るか、卽法の本質の問題は、全然非法律的なものとする。併し法の本質は法の內容とは直接の關係なく、且他律的な Soll-Norm だけでは法たる性質を有しない。法の本質は、其社會に屬する人々の一般的心理に於て、是を法として卽、侵すべからざる規律として認識することにある。是に違反することが、許すべからざる不法として意識せられることにある。第二に法の成立する根據は人間の天性にあり、其三要素たる習慣性、服從性、理性に基き、夫々慣習法、制定法、理法を生ずる。慣習法が法たる所以は、慣習以外の別個の法に基く爲ではなく、全く事實の軌範力で、非法律的な事實が夫自身の力により社會人心の法的認識を得る爲である。法が正義に適するのを要すとするは、包括的に社會心理の意識する所で、其結果制定法、慣習法に規定を缺く部分、種々の解釋を容れ得べき餘地ある場合、正義意識が直接法たる力を有するのである。從て、立法により定めた所が事實の力、又は正義理念により修正變革せられ得べきは當然認められねばならぬ。ケルゼンが立法行爲に依てのみ法は成立するとするのは、法律學を甚しく誤らしむるものである。(美濃部)

●**尾高朝雄「法律學に於ける理論と實踐」**(法學協會雜誌、四八・八、昭和五・八月、頁一―五一)　リッカアト及ウェバアの文化科學方法論に於て嚴密に定められた理論と實踐との境界は制定法學に於て全く無視されて居る。制定法學に於ける實踐的な制定法解釋と理論

的な制定法研究とに夫々獨立の地位と固有の名稱を與へることは論理的に徹底せる試みであるけれども事實上殆んど不可能なる故、吾人としては寧ろ制定法學を理論と實踐の複合態に留らしめ此の二方面を方法論上明瞭に指摘することを以て滿足すべきである。即ち實踐的方面に就ては、法律解釋が制定法の自己實現過程に於て法律創設的作用として有する重要なる任務を明に認識しなければならぬ。唯此の場合注意すべきは法律解釋の創設的機能も根本規範によつて論理的に定められてゐる實定性の限界を超ゆるを許されないと言ふことである。次に理論的方面に於ては制定法學が實定的に制約された法的當爲の關係を其の實質的本質の樣相に於て研究する理論的な理解の手續であることを正しく把捉せねばならぬ。理論的制定法學の根據はフッセアルの現象學に於ける實質的本質學の方法に求めらるべきである。法律の實質的本質學の樹立は法律哲學の領域の擴大に因り法律生活に於ける理想と現實との連結を可能ならしめ、法律事實學の方法論的基礎づけを遂行し、且制定法民序を[illegible]に[illegible]す[illegible]一[illegible]障するものとして、重大な[illegible]のである。(高柳)

◆公　法

●高柳眞三「德川時代缺落考」（法學協會雜誌、四十八、五―八、昭和五・五―八月）德川時代の缺落卽失踪に關する法制は著しく公法的な色彩を帶びる。之を武士について云へば缺落は其封建的勤務關係を破壞する事となる故に、家斷絕の處分を受ける事となる。百姓卽農民階級は土地經濟の基礎を爲し貢租の負擔者として封建制度の要素を爲す爲に、常に一定の土地に居住し、能ふ限り生產力を增加し貢租の負擔に餘力あらしめる事が要求せられる。其故に彼等が自己の土地を捨て失踪する時は一の違法行爲として行政法的の取締を受け、行爲者の親族及び其屬する自治團體は連帶して屆出、搜索、貢租負擔、財產管理等の義務を負はしめられる。斯の如く缺落は違法行爲ではあるが其取締の目的は農民が離村して田地の荒廢・租稅收入の減少等を來すを[illegible]し[illegible]は必しも[illegible]農村の生活の困難に[illegible]加はるに至つては、[illegible]村の[illegible]・[illegible]代・[illegible]地を給與する事すらあつた。都市に於ける町人卽商工業者は之と異り缺落に關する法制も取締を目的とするよりむしろ人口調査を目的として居る。これ一には町人は農民の如く土地と密接不可離の關係に立つ者ではなく、彼等は封建制度社會に於て附隨的地位を占めるものと考へられ、農民の如く土地に定着すべき政治的要求の下に立つものではなかつた事と、二には都市に居住し農民に對し經濟力の優れた町人が、生業を捨て地方に失踪する事は稀だつたからである。從つて彼等の缺落については取締も寬大であつたが、其と共に歸住手段を構ずる必要も無かつたから、財產の保護も薄かつた。

更に缺落の私法的效果について見るならば(1)缺落人は死亡者と看做され又は死亡の推定を受ける事なく、何時までも生存の推定を受ける。(2)遺留財產は古くは沒收されたが、犯

罪又は債務關係無き時は相續人・親類又は所屬町村の保管に移される事となつた。そして缺落日限尋の日數たる百八十日の經過により相續は開始したが、之は武士の强制隱居と同じく死亡を原因としたのではない。(3)缺落人の妻は相續開始後も妻たる身分を保有する。が十ケ月の經過に依り再婚を願出る事が出來る。(4)缺落人が歸還しても法律上身分・財產の回復請求權は無い。之相續が死亡を原因とせぬ爲である。(5)歸還に依つて其家の家族たる身分は現實的に占める事となるが既に發生した變動は恢復する事を得ない。(穗積)

●**中野登美雄**「**無任所大臣論**」(法律時報、二・八、昭和五・八、頁三五—四二)所謂無任所大臣又は無省大臣は、歐洲諸國の Minister without portfolio etc. に該當する制度で、その特質は他の國務大臣の如く特定の行政事務を擔當する事なく、單に元首を輔弼し閣議に列し議會に對し責任を負ふ等の政治的任務を有するに止まる點にある。其歷史的起原は英國にあり、ハイドを無任所大臣に任じたるに始まる。此制度を歐洲に傳へたのは佛國で、ルイ十八世の憲法がその最初である。我國憲法に於ては之に關する規定なく、その明文の根據は內閣官制第十條である。その先例は既に四回を數へ今回を加へて五回に達する。一般に無任所大臣任命の理由は對議會策に出るものが多く、その他に於ては、官僚內閣に於て、法律の規定に從ひ一定の官にあるものを之に任ずる等の場合がある。此點より見て我國の先例は何れも不當なるもので何れの場合に於てもその目的は故障ある他の大臣の職務の兼任又は代理であつて、如此は無任所大臣任命權の濫用であり、官制第八條第九條に違反する措置である。元來當局は事務管理と代理とを區別し、非軍部大臣による軍部大臣の代理には前者を適用してゐるが、兩者の間には何等性質上の區別はなく、從て今回の問題に於ても、獨りその任命が官制に違反するのみならず、他の大臣の事務管理にて足り、特に代理を設置したことは理由なき事と云はざるを得ない。(美濃部)

◆國際法

●**大澤章**「**國際法に於ける集合的干涉の意義**」(山田教授還曆祝賀論文集、昭和五・五月、頁四一一—五〇八)國際法に於ける國家主權を過當に評價する個別主義的傾向の基礎に立つ非干涉の原則は世界大戰を轉機とする國際社會の變化と共に其の意義を失ひ、新に國際法上の制度としての集合的干涉が要求せられる。集合的干涉の合理性は國家の生存權に上位する國際法團體そのものの生存權の認識に基礎を置くものであり、消極的には國際法團體の秩序維持に於て、積極的には諸國家共通の國際的利益追求に於て其の意義を有するものである。就中集合的干涉の現代的意義は積極的なる監督又は助長の作用の中に認められ、其の必要は國際的經濟的利害の連帶に伴つて益々增大する傾向にある。何れの場合にも集合的干涉の根據には國際團體の權利・利益を保護する法規が必要であり、かくして集合的干涉は國際法規の執行たる國際行政行爲の性質を帶ぶるに至る。國際紛爭解決方法としての集合的干涉は自衛權による干涉を排除して之に代替し、以て政治的動機に基く國家

の自助的手段としての干渉の危險を防止して、國際紛爭の政治的外交的調停方法より法律的基礎に於ける司法的解決への進展を可能ならしめる。集合的干渉は決して國家の獨立權平等權を侵害し國家間に段階性を構成するものではなく、却つて國家と國際法團體との段階性に基いて國家を拘束し之に自由と獨立とを保障する國際的權力の構成及其の確立に貢獻するものである。(高柳)

●立作太郞「外國に在留する臣民に關する國家の國際法上の保護權を論ず」(山田教授還曆祝賀論文集、昭和五・五月、頁一一—一七)外國に對する臣民保護權は現實國際法上國家の基本權として認めらるべきである。その理由の一は此の關係に於て國家は臣民の代表者又は代理者としてに非ずして直接に自己の權利を主張するものと認めらるるからである。理由の二は保護を目的とする談判が臣民の爲にするものなる時は對手國に於て交渉に應ずる義務を存するからである。更に此の保護權を對人主權の反映、國家生存權の延長、自衛權の作用、平等權の發現、或は國際交通權の作用又は效果等として説明せんとする學説の誤れることの論證も亦此の保護權を一の特別なる基本權として把捉すべきことを示すものである。臣民保護權行使の手段には外交談判の他仲裁々判、司法的解決、國際聯盟理事會の審査、平時復仇等の強力的手段及戰爭狀態等あるが、時に保護手段に對して條約上の制限の存する場合があるのである。(高柳)

●神川彥松「外交使節の階級及位次論」(山田教授還曆祝賀論文集、昭和五・五月、頁六六九—七三六)近時國際生活の變化に伴ふ國際法改造の趨勢は、ウィンナ及エキス・ラ・シャペル會議に於ける決議に由來する外交使節の階級及位次に關する現行規則に對しても其の修正を要求するに至つた。今國際法政策論的立場より外交使節の本質に從つて本問題を檢討するに第一に國家機關及國家官吏としての外交使節は一國家內の官制體系の一部を成し、從つて國家が官制職制上各種の種類階級を設くるも妨無く、唯それは國家の內部關係に於てのみ妥當するものである。次に國家の對外的代表者としての外交使節に就ては、國家の國際法上の平等の見地及外交使節の階級と其の權限との間に直接の關聯を認めざる今日の見解より、階級と席次が理論上拋棄せるものである。最後に國際機關及國際官吏としての外交使節に就ては、將來國際團體直屬の機關たるに至れば今日の國家內の機關の如く上下の階級別の認めらるることもあり得るであらう。(高柳)

◆國際事情

●末廣重雄「米國移民法の改正に就て」(經濟論叢、三一・一、昭和五・七、頁八六—一〇七)ジョンソン氏の米國移民法改正案提出の聲明は日米兩國に於て良好なる反響を得たやうである。然し日本人に對して入國禁止が解くときは一般亞細亞人少くとも支那人より平等待遇の猛烈なる要求が起るであらうから、移民法改正は對日的には賢明な策であるとしても亞細亞人排斥は米國の國策となつて居る今日一般輿論の支持が得ることは決して容易ではないと思はれる。恐らくは日本人の感情の緩和の爲に移民法改正が行はれても、米國は

同時に日本政府の協力を求めて新に日本人の入國を禁止する別種の方法を講ずるやうなことになるのではなからうか。之に對し、思ふに我國政府は移民法の無條件の改正を求めるのであらう。我政府としては形式的にも實質的にも差別待遇を撤廢すべきことを要求するのが正當であり、又それが眞の解決の方法と信ずる。然るに茲に尙移民法の他に、加州其他西部諸州の土地法の如き暴擧がある。更に根本的に考察すれば、米國歸化法中の日本人に對して歸化能力を認めぬ規定こそ、日本人に對する之等の凡ゆる種類の排斥の根本原因となるものであつて、此歸化法の改正あつて初めて移民問題はじめ諸種の排日問題の根本的解決、從つて日米兩國の眞の親善を期待し得るのであらう。（高木）

●ハウランド、ダッガン、ブラード、ミード、リンゲルバッハ及びカーの「海洋の自由と英米關係の將來」に關する數編。（Howland, Charles P.; Duggun, Stephen P.; Bullard, Arthur; Mead, Nelson P.; Lingelbach, William E.; and Kerr, Philip. The freedom of the seas and the future of Anglo-American relations. Ann. Amer. Acad. Pol. & Soc. Sci. 144(233) Jul. 1929: pp. 21—39）英米の兩國は、共に孤立主義の傳統を持ち又實際に當つて何とか事を處理して行く傾向を持つて居ながら、二國が大問題として、他日其一國が參加すべき戰爭に際する交戰國及中立國の權利といふ假設の問題を、熱心に論爭するのは皮肉と云ふべきである（ハウランド）。危險は心理的背景の中に存する。海を治める歷史を持つ英人は、其の全盛の過ぎた事を忘れた如く今尙振舞はんとする。彼等は若き成上り者米國の鼻柱強き横暴を憤る。一方未だ劣弱感を脫し得ない米國は、優越なる實力の確信にのみ伴ふ所の平靜な忍耐を缺く。其の反省が兩國國交上大切である（ブラード）。解決は所謂「職業病」より免れざる海軍將官の手に放任すべきでない。又法律家は政策が論爭さるゝ間は法典編成を爲す由もない。乍然英國の船舶業者は自國の海軍力によるよりも寧ろ國際協定による保障を歡ぶ傾を示す。卽米國の聲明と合致する態度である。兩國に於る感情は次第に反戰爭に傾き、中立を平和への努力の前には非道德的と見なすに傾く（ハウランド等）。戰爭を國家政策の具と觀る舊觀念は、戰は國際協定を支持する爲の諸國間の協同行爲なりとする新概念に替られつゝある（ダッガン、ミード）。（高木）

●キャッパー、チェンバレン、マイアース等（「不戰條約の有效化」問題に關する數編。（Capper, Arthur; Rogers, Edith N.; Chamberlain, Joseph P.; and Myers, William S. Making the Kellogg pact effective. Ann. Amer. Acad. Pol + Soc. Sci. 144(233). Jul. 1929: pp. 40—62）キャッパー曰、キャッパー決議案は、條約國の一が條約を破る場合に米國は其の國に對する輸出の禁止を行ふべきことを定めて、不戰條約に實效を與へんとする交戰兩國に對する不等の待遇に關する舊き理論は最早適用せぬ。米國は今や他國間の戰爭に重大の利害を有するに至つた。よろしく攻擊戰を阻止する道を講ずべきである。チェンバレン曰、現今の中立に關する制度の下に於ては、米國は結局制海權を有する強國を援く

ることゝなる。かゝる國のみ米國の供給を受け得る。事實上輸出禁止（エンバーゴー）を蒙るのはかゝる強國の敵國である。米國がより正當なる政策への改進を欲するならば、不戰條約を破り、米國に背信を行へる國に向ひ差別的處置をとるが當然の理であらう。キャッパーの決議案等を以てしては倘現狀を改善せしむるに足りない。聯盟を中心として現時の世界の平和の爲の機關は活動して居る。米國人も之に協力し其の目的を助成すべきである。マイアース曰、不戰條約は制裁を伴はないとの非難は當らぬ。却つてそこに眞價がある。其の心理的效果は大である。キャッパー決議の一大弱點は、平時に軍需品の貯藏を起さしめる憂ありとの點である。不戰條約は世界機關の背後の精神を意味して貰い。平和促進の良法は國民間の友情を確保するにある　個人的交友が肝要である。(高木)

●**ショットウェル**「**三大海軍國と聯盟**」(Shotwell, James P. The sea powers and the League. New Republic (771) Sep. 11 1929: 89—92) リチャー・・ウォッシバーン・チャイルドの日英米三大海軍國の協定による世界平和維持の提案を檢するに不備の點がある。それは米國人の世界平和の觀念卽ち其維持の爲には何國も夫々責任の分前を持つとの考に反する。日英の何れと雖、米國の提供し得る防禦同盟の爲めに、其の聯盟に於ける地位を抛つとは思はれない。然し聯盟の一員たることは平和の促進の爲にする地域的結合を妨げぬ。太平洋に關する(一九二二年の)四國條約に含まるゝ「締約國は光分且隔意なく互に交渉すべし」との協定は、不戰條約違反の場合にも及ぼし得べきかと考へる。(高木)

社會學

●**黑正巖**「**明治初年の宗敎的農民一揆**」(史林、一五・一、昭和五 一月、頁七六—八八) 德川時代約二百六十年間に六百件の農民一揆があつた。之に對して、明治初年の十年間に起つた一揆は黑正氏が蒐集した史料のみでも百五十件以上の多數に達して居る。黑正氏は此明治初年の一揆の性質を說明する爲めに之を社會的一揆、經濟的一揆、財政的一揆、行政的一揆、最後に宗敎的一揆に類別し　本論文では宗敎的一揆に就いての研究を試みて居る。宗敎的一揆は明治維新の新政府が施行した宗敎政策に端を發した。卽ち政府は信仰自由の下に廢佛を施行し、或は德川封建治下に長く傳統となつてゐた農民や細民の迷信を急に壓迫した。其爲めに僧侶其他の者が煽動者となり、愚民が屬つて宗敎的暴動を起さしめた。宗敎的一揆は他の一揆に比して其數は比較的少く只だ僅に七件の史料が得るのみである。而し此一揆は當時の農民が理性的に覺めて當時の宗敎を改革せんとして起した暴動ではなく、寧ろ傳統の破壞を好まぬ頑迷さから起したものである。此意味に於てそれは革命的進步的でなく、當時の他の一揆と共通に反動的保守的傾向を持つてゐた。(戶田)

●**汐見三郞**「**大都市市民の貧富の懸隔**」(統計時報、三〇、昭和五・三月、頁一—二五) 現代社會に於て貧富の懸隔は漸次甚しくなつて行きつゝあるであらうか、或は漸次緩和せられつゝあるであらうかの問題に就いて氏は研究を試みてゐる。氏は大都市特に大阪市に付いて之が研究を進めた。貧富の懸隔を測定する爲めに　所得税を納付する所得者戶數を算定し、之を大所得者と小所得者に段階し、

所得分配の趨勢を大正元年——昭和三年に亙つて調査し、尙大阪市民の貧富の懸隔の特徴を捕へる爲めに、累計表の分析を試み、又、Pareto 線を算出してゐる。從來、日本に於て所得税に據つて所得が如何に分配せられてゐるかの統計的研究は高野博士、高田博士士方博士等によつて發表せられてゐるが是等の全部は納税人員を基礎として討究したものである。然るに汐見氏は納税人員を基礎として所得分配統計を調査したのでは貧富の懸隔を正確に測定し得ないとし、正確に之を測定するには納税戸數を基礎とすべきを主張して以つて試論した。蓋し本論文の特長とするところは斯る納税戸數を基礎として所得分配の趨勢を檢討した統計的研究に在る。(戸田)

●**オルガズ「現代社會學」**(Orgaz. Raúl A. La sociologia actual.—Rev. de Filos. 14(4), Jul. 1928, pp. 64—77) 歐大陸では現代社會學の傾向には三派が流動してゐる。(一)は集團表象學派で、佛のデュルケム學派の事業や、現今ではレヴィイ・ヴルュール、モウス、ユーベル、ハルバックス、シミアン、ダァーヴィイブランデルの學績が之に屬する。(二)は新實證主義學派で此派は不當にも綜合的法則、原理を社會學に要求し、進んでは之が普遍性を政策に迄適用せんと試みる、ウォオルムス、リシァール諸氏が之に屬する。(三)は歷史・文化學派で、之は記述社會學の代りに組織社會學を建設せんとする、獨逸の斯學が之に屬する。獨逸の社會學界にはジムメルとテンニィースの後に戰後ヒアカント、ホン・ヴィーゼ、セラァー、ゾムバルト、オッペンハイマァー、マクス・ウェーバァー、スュパン等の鋭才が現れて、結合・社會學、文化・社會學、知識・社會學、過程・社會學等を試考した。米國では實際的・實利的な社會學が發達した。只だスモッルのみは哲學的・組織的・社會學を强調した。然るに現代では社會心理學の發達、之に隨伴して優勢なる行動學派が組織的社會學を排擊し作ら發達し來つた。かのバァーナァード、オールポートが斯る運動を代表してゐる。(戸田)

●**ギンスバーク「哲學並に社會學に對するホブハァウス教授の貢獻」**(Ginsberg, Morris. The contribution of Professor Hobhouse to philosophy and sociology.—Economica. (27), Nov. 1929. pp. 251—266) ホブハァウスの初期の學程はスペンサア、コムト、ミル、グリーンによつて强い影響を享けた。例へば彼の綜合的體系の學的傾向は明かにスペンサアの影響に、又彼の發展の觀念や宗教的人道主義の觀念は特にコムトの影響によるものである。ホ氏は心理學と社會學とに專心して、比較・社會心理學と、道德、宗教觀念、慣習等の比較制度との研究に沒頭した。尙彼の學的特徵は社會哲學と社會學との密接な關係を主張して、社會生活の完全なる說明は兩者の結合によつて可能となると考へた事である。又彼の社會觀を觀ると、社會は有機體ではない、併し有機的性質を現はしてゐる、而して社會の有機的調和の發展は合理的善に外ならない、と主張した。英國のアカデミックな社會學の現狀は大に彼に負ふところである。彼の全著作を一貫して、彼自ら制約的目的論と呼ぶ實在論的色調を帶びる根本原理が底流してゐる。(戸田)

●**セイモーア「師範學校生徒の農村に對する社會的距離」**(Seymour, John S. Rural social distance of normal school students.—Sociology & Social Research. 14(3). Jan.-Feb.

1930, Pp. 238—248) 本論文は農村生活に對する態度の一考察である。著者は米國ノースカロリナ州に於ける師範學校四校の女生徒に對し農村と都市とのいづれの生活を好むやとの質問を與へ、それ等の申告より次の結論を調査し得た。卽ち、(一)生徒の七一・四%は農村生活を嫌厭する。(二)田園生活に歸依する者は都市生活を少しも經驗した事のない生徒であり、(三)都市生活を好む者は農村生活を少しも知らぬ人々である。仍で(四)農村生活の經驗は其の生活に對する愛着を與し、(五)都市生活の經驗は田園生活への關心を減ずる。(六)都市生活の經驗は都市生活其のものに執着を持つに至らしむる事、農村生活の經驗が農村生活を愛着せしむるよりもその度合はより顯しい。以上の事實により(七)女生徒等が農村又は都市のいづれの學校に赴任を希望するかと云ふ事が明瞭に示される。(戸田)

人文地理學

●ロックスベー 「人文地理學と其の適用」 (Roxby, Percy M. Human geography and some of its application. Internat. Rev. of Missions. 17(67)・Jul. 1928 : pp. 483—494.) 人文地理學は、種々の世界問題の解決に寄與する事が多い。其の研究の本質は、自然的環境への人類集團の適應と、種々の適應に條件附けられての相互關係とである。世界到る處で近代商業は、種族や住民の環境への適應の常態を亂した事が多い。だから人種や生活樣式や經驗を異にする種々の環境に育つた諸集團の利害を調和するのが、今日政治家のなすべき事である。世界の現勢は相互依存の關係を增しつゝある。アフリカの新社會の再適應の問題は、現代での一番きはどいそして複雜したものであり、それの解決はイギリスで重大な責任を負ふてゐるもので、其の研究は本質的に地理學的である。地域的研究は有益であるが、イギリスでは、それが已に構造社會地理學への意識的努力たる地域的計畫として、著しい效果を收めてゐる。人文地理學の正確な研究は、國家的及び國際的公民へのよい訓練であり、それが正しい想像と同情ある理解への圓熟に役立つ。(新渡戸)

●ノワコースキー 「マルキシズムと經濟地理學」 (Nowakowski, Stanisław. Marxism a geografja gospodarcza. Ruch Prawniczy, Ekonomiczny i Socjologiczny 8(4) 1928: pp 452—464.) マルクスの時代には、人文及び經濟地理學は科學の部門として分化してゐなかつた。カール・リッターの地理學上の創見は、「人類は土地に土地は人類に夫々働きかけて影響する」にあつた。マルクスは一八三七年に、ベルリン大學の學生として、リッターの一般理論を學んだが、彼の見解は、地理的要因を經濟的條件への影響としてであつた。十九世紀の中葉に、多數の地理學者と經濟學者は、ある社會の經濟生活の基礎を說明しやうとしたが、十分な解決はマルクスによつてのみ與へられた。エンゲルス其の他のマルクス學徒は、社會的及び經濟的發達に於ける地理的要因の意義を高調し、プレチャノフは地理的條件は、地理的環境の多樣性を通して生產力の發達を可能にしたといつてゐる。經濟地理學への同じ態度は、ベルンスタイン、カウツキーによつて取られ、經濟的唯物論と地理的唯物論の結合を見るに至つた。マルクスの人類の物質生活への見方の寄與は、ダーウインの進化論の概念のそれと同じである。(新渡戸)

●ボーロースキー　「地理學の研究と敎授の方法」(Pawlowski, Stanislaw. O metodach geografa'a jako nauki i o metodach nauczania geografii. Czasopismo Geograficzne. 6(2―3) 1928：pp. 112―122.)地理學は、土地が其の基礎的對象であつて、土地と人類との關係の研究が次の作業であるから、自然科學と人文科學とに跨つてゐる。諸事實の研究と諸事實間の因果的關係の研究は、研究の二つの對象であり、其の歸納的方法と演繹的方法には夫々特色がある。地理學の敎授の方法に就いては舊新が比較され、綜合的及び分析的方法が特色附けられ、これらの方法の應用が論ぜられた。研究方法と敎授方法とは、はつきり區別して認識する事を要する。(新渡戶)

●綿貫勇彥　「人文地理學の特性」(地理學評論 六・七、昭和五・七月、頁二〇八―二一五)地理學の中心思想として、古來一貫してゐるものは、土地の地方性と環境との問題である。地理學でいふ土地は、物の充塡せる一定の地表空間のことで、其の地方性は、自然に於て認められるのみではなく、文化に於ても認められる。人間を不斷に支持し刺戟する自然は、比較的に不變なものであり、此の兩者を結び付けて考へるのが環境の問題である。近代地理學の特性は、ある土地卽ち物の充塡せる地表空間を、其の綜合性に於て全體として考察する事である。殊に今世紀に入つて、綜合的自然空間である風景を基礎とし、其の文化を考察する事が、人文地理學の中心を形成する事になつた。而して風景或は地方の純粹なものは鄕土であるから、全地球的見解を忘れない鄕土地理學は最も純粹な地理學である。自然空間に卽した文化空間は、そこに特有のものであるから、人文地理學の對象となり得る。(新渡戶)

●羽仁五郞　「地理的史觀の批判」(史學雜誌四一・四、昭和五・四月、頁四〇九―四四五)地理的史觀は、人間及び世界とその歷史とが何等か不可知的な超自然的なまた大神秘なる原因によつてゞはなく、自然の地理的特殊性によつて規定されてゐる事を實證する一つの唯物論である。人間と自然との關係は、地理的史觀の根本課題である。これに就いて、從來主張されて來た地理的宿命論と神秘主義とに對し、筆者は、ルシアン・フェヴルの「地と人文進化」に據つて、彼が「ラッツェル以後の地理的宿命論」を克服するに勉めたが、宿命論を免れる爲に、「必然性」を去つて「可能性」に就いた結果、「科學的統一性」卽ち「科學の法則性」をも犧牲に供したとした。根柢に於て唯物論に立つ地理的史觀は、其の根柢たる地理的唯物論の洗錬によつて新生する事が出來る。地理的自然と社會との間の絕えず變化しつゝあるこの相互關係は、一層正確に辨證法的唯物論の見地よりして、この物質的基礎の認識の上に把握せられねばならない。か〻る相互關係は社會的勞働を基礎として把握されねばならないと結んでゐる。(新渡戶)

文化人類學

●喜田貞吉　「埴輪と其の起源及傳說に就いて」(考古學、一・四、昭和五・七、頁二一三―二一四)埴輪は死者の永久的住宅たる墳墓に設備された不朽性の籬である。從つて其主體は圓筒列である。埴輪を墳丘の土止めなりとする說は當らない。人、馬、其他の物體を表したものは、埴輪の本體ではなくして、恐らく漢土の石人、石獸等の風習を模倣して、之を

埴物に應用したものであり、特殊なものである。九州地方の或特殊墳墓に見る埴輪と石人石獸等との併用は、日本固有の葬法と漢土王者のそれとを兼ねた倭人王の墳墓であらう。横口式墳を有する墳墓は、支那古代王者の葬法を模したもので、日本固有の埴輪を有する竪穴式墳墓と並び行はれ、近畿地方に於ける我皇室に於て恐らく用明天皇の頃より御陵墓の制に採用されるに至り、次第に固有の埴輪等が廢滅した。併し遠隔の地には尚後まで埴輪が行はれた所もあらう。野見宿禰に關する埴輪起源傳説は近畿に於て埴輪が廢滅し、其眞相の忘れられた後に起つたと思はれる。而して埴輪起源傳説に於て、土偶、土馬等の樹物のみを重視してゐるが、本體は飽くまで圓筒列にある。從つて其起源は必ずしも殉死に關聯しない。(松村)

●**キース「タリーム盆地の古墳墓より發見せる頭蓋」**(Keith, Sir Arthur: Human skulls from ancient cemeteries in the Tarim Basin, Jo. Royal Anthropol. Inst. Great Britain & Ireland. 59 Jan.-Jun. 1929, pp. 149—180) オーレル・スタイン卿の第三回中央亞細亞探[illegible]墳によつて、發見された考古學的遺物中には特[illegible]い時代に不住の地となつたタクラマカン沙漠(支那トルキスタン)の北部地方にある古墳墓から得た人類頭蓋が五個あつた。内四個は男子、一個は女子。夫等はモンゴル的であり、同時にコーカサス的な性質を具へてゐる。そしてキースは雑種についての見地でなく、進化の自然過程による立場から兩者の中間型に屬するものと解してゐる。彼はモンゴル系人種は南亞細亞及歐羅巴の他の系統から大派生したものだと強調する。そしてタクラマカンは其人種大派生の陥内にあり、且つそれが行はれた所であらうと云ふのである。(松村)

●**ワシリエフ「オロッコ土俗學の基礎的特質」**(Vasiľev B. A. Основные черты этнографии ороков.—Этнография. 7(1) 1929 pp. 3—22) 著者が一九二八年、樺太東海岸に於て集めた資料に基いて得た新しい事實である。此處には百五十四人のオロッコが居る。オロッコの文化はトウングース・マンチュリヤ系文化と、ギリアク・アイヌ系文化との混合せるものなることを示してゐる。彼等は牽引又は乘用の目的で馴鹿を飼育する。犬[illegible]事實上の文化は[illegible]ギリアクのそれと異り、[illegible]である。新しい市場を求めて富に移住する必要の存する所以は彼等が未だ遊牧生活を營んだからである。彼等の夫婦住居は[illegible]であつて、アムール・ウスリー地方のトウングース狩獵部族のそれと同一である。衣服は[illegible]諸族のそれと類似した要素を有つてゐる。海の漁撈及それに關する宗教觀念はギリアクと同一であるが、狩獵はトウングースの方によりよく似てゐる。熊崇拜はギリアク・アイヌ的であり、葬制はトウングース的である。併し葬制は結婚儀式と共に、多くの原始的特質を示してゐる。一附內的な部族生活に於ける特色は、異族婚、或結婚儀式及熊祭に對する嚴重な[illegible]である。(松村)

歴史

◆國 史

●**三上義夫「圓理の發明に關する論證」**(史學雜誌、四一・七、昭和五・七月、頁一一二五) 突然として考へれば、數學の如き科學が我が國に發達したのは極めて輓近の事に屬す

るやうに思はれるけれど、事實は之に反し、すでに奈良朝の昔より專門の學術として存在し、江戸時代に至つては泰西のそれに必しも軒輊なき程の發達を遂げたものといはれる。ここにいふ圓理の算法は、澤田吾一氏に從へば日本の微分積分學であつて、恐らくは和算家の到達し得たる高等數學の究竟地であらう。論文はこの圓理の發明を關孝和であるとする從來の諸說に反對したものであつて 未完であるが故に結論は尙次號以下を待たねばならないが、異色ある論文として注意すべきであると思ふ。（黑板）

●秋山謙藏「李氏朝鮮と琉球との通交」（史學雜誌、四一・七、昭和五・七月、頁二六―六三）此の如き問題は、主としてその史料を得るの困難より、從來の國史學界においては殆ど試みられなかつた研究である。著者はこの間において或は李朝實錄を探り、或は琉球の史料を求め、遂に興味ある兩國通交の顚末を明かにした。今その要旨をあげれば、南蠻諸國の物產を轉賣して利益を得んとする爲にまづ琉球が高麗に入貢したこと、高麗亡びて李氏朝鮮が興つてもこの關係の續いたこと、而して博多はそれら朝貢船の寄航地であり、然も日本人が琉球使節を率じて朝鮮に赴いたこと、琉球は又朝鮮より佛教經典を初め加工品等を贈られてそれは琉球の國家統一に對して重要な寄與をしたこと、然も此の如き兩者の友好は日本人の琉球使を詐稱して利を得んとする企て、及び倭寇の猖獗の爲に僅に百年にして消滅したこと等、これである。（黑板）

●天坊幸彥「攝津闕郡と長柄豐崎宮」（歷史地理、五六・一、昭和五・七月、頁一―二二）我が上古の帝都の位置に關しては幾多の研究があるけれども、未だ十分に闡明されたとはいはれない。有名な大化改新の時の帝都、難波長柄豐崎宮もその一である。卽ち從來は之を現今の大阪長柄の地に比定するものと、玉造方面に擬するものとの、少くとも二つの一致せざる說が存した。本論文は此の間において、所謂、闕郡の考證より味原（アジフ）郷の所在を確め、前者の長柄帝都說に新たなる支援を與へたものとして注意せられる。その要旨は、長柄宮が味經（アジフ）原にあつたことは萬葉集によつて證せられるが、今その遺蹟と考へられる味生（アジフ）村は三島郡に在つて、和名抄に味原郷を東生郡とする事に矛盾するのであるけれど、それは中世末に闕郡なるものが生じて郡の區域に異動を起した爲であつて、昔は三島郡と東生郡とは相接し味原郷はこの兩郡に跨る廣大な地域を占めてゐたと考へれば、長柄宮を長柄に比定することも更に差支ないといふのである。（黑板）

◆東洋史

●松田壽男「西突厥王庭考」（史學雜誌、四〇・一、二、三、四、昭和四・一、二、三、四月、頁四三―六三、一八五―二〇六、三三七―三五〇、四六三―四七四）突厥の西方遠征軍を率ゐた Silziboulos Kagan は、Ephthalites を滅したのち、最初の西面可汗として西方領土に君臨したが、これが實際上西突厥の起原である。東ローマの史家 Menander の所傳によれば、この王は「Ectag といふ山によつて圍まれた溪谷」に居り、その子の Tardou（支那人のいふ達頭可汗）も Ectel 山に治してゐた。Ectag, Ectel はトルコ語で白山を意味する Ak-tag の訛であるから、隋唐の史乘に見える阿羯田山卽ち龜茲（Kucha）の北の白山

もまた同じ山であつて、今の Eshek-bashi ola に相當する。Chavannes 氏はこの山によつて圍まれた Elishbolos の根據地を今の伊犂の Tekes 溪谷に比定したが、この說は無理であつて、むしろ大裕勒都斯 (Ulug-Yuldus) こそ最も適當してゐるのである。何となればこの溪谷は畜牧に缺くべからざる水草を以て豐富に惠まれ、且つ交通上極めて要衝の地であるのみならず、達頭可汗が隋に來降した當時の事情、龜玆國と西突厥との關係、及び隋書が西突厥の牙庭を龜玆の北六百里に置いてゐる點などからも證明し得るからである。隋唐の頃この溪谷は鷹娑と呼ばれてゐたが、處羅可汗はこゝを重要なる一根據となし、次いで立つた射匱可汗の居た三彌山は、張華の博物志にいふ且彌山で、Eshek-bashi ola に違ひないから、始祖以來、隋末に逮ぶ西突厥の可汗は大抵、今の Kucha から伊犂に通ずる要路に當り、天山々中の廣大な溪谷 Yulduz に治してゐたと考へて差支へないのである。(池內)

●淸水泰次「明代に於ける佛道の取締」(史學雜誌、四〇・三、昭和四・三月、頁二六三—三一〇)明朝を創建した太祖は、洪武元年に善世院(佛教の)玄教院(道教の)の兩院を設け、翌五年には僧錄・道錄の兩司を置くなど、佛道兩敎に對して甚だ熱心な態度を示したが、洪武十五年を過ぎると、やがてその熱も冷めてきて、僧道を取締り、寺觀の數を制限せんとするに至つた。これは恐らく僧道等が、妄りに議論し命令に叛くためであつたらうが、また征徭を避けたり、僧俗が混じたりするのを防ぐ目的のあつたことをも認めねばならぬ。太祖に次いで成祖の世になると、如上の制限は一層嚴重となり、其後も年と共に烈しくなつて行つた。斯く取締が嚴しくなることは、逆にそれ自身寺觀僧道の增加を語るものであり、且一方に於いて、取締そのものも次第に弛緩してきた。かくて度牒の濫賣となつて僧道を惡化せしめ、ひいては風紀治安の紊亂を產み、社會は益々混亂に陷つたのである。(池內)

●羽田亨「景教經典志玄安樂經に就いて」(東洋學報、一八・一、昭和四・八月、頁一—二四)唐代に行はれた漢文の景教經典は現在五種知られてゐるが、志玄安樂經はその一つである。著者は昭和三年北支に遊び、天津の李盛鐸氏所藏の本經典を閲覽したので、こゝにその全文を寫眞紹介し、考證を附してこの一篇を成したのである。著者によれば、本經典は彌師訶即ちメシアが岑穩僧伽の問に答へて勝法を說き、安樂道に達する道を敎へたもので、岑穩僧伽はシモン・ペテロに他ならぬ。而かもその形式は、一見して佛典のそれを模倣したこと明かであるが、その內容を檢討すれば、あまりに老子道德經の說く所と近いのに驚かされる。のみならず經題中の志玄といふ文字も道德經に出緣を有するらしい。これは他でもない。當時は唐室が老子をこの上もなく崇拜してゐた際であるから、かの景敎碑文にも好例が見出される如く、景敎士たちが宣傳のため、その敎義を特に道德經の所說に近からしめて說いてゐたためである。(池內)

◆西洋史

●リッカード「上古に於ける鐵」(Rickard, T. A. Iron in Antiquity. Iron & Coal Trades Rev. 119—3212. Sep. 20, 1929. pp. 418—419) 人類工業の發達に於て鐵の發見—即ちその鑛石より鐵を製出することは、最大事件であつた。が、鐵の最初の使用は不明

である。それは人工に成れる鐵と隕石の鐵とを區別しないで、考古學者が此の問題を研究したのも、その一原因である。著者は鐵の歐洲で知られたのは、紀元前一千年後であるが、埃及では同三千五百年頃、夙に知られて居たとの推定を否定し、製鐵の技術はナイルの流域でも、又エウフラテスの流域でも起つたものではない。兩地方は共に鑛產地方ではないからである。多分カスピ海と黑海間の山國から起つたものであらう。鐵製のナイフは、紀元前一三五〇年に遡ぼるものと考へられて居るが、實用の道具を鐵鑛を溶かして作つた明證は一二〇〇年からである。最初の製鐵はアナトリヤ地域と關係し、ケタ（Hittites）の勢力のシリヤ低地への發展が（一四〇〇年以後の）、その工業的關係を大ならしめた。（村川）

●**ベルヴェ「スパルタ」**（Berve, Helmut. Sparta. Hist. Vierteljahrshr. 25—1. Oct.; 1929. pp. 1—22）スパルタ史に關する文獻は、明かに薄弱であるが、考古學的徵證による試みも失敗したので、從來の文獻を一層精密に研究しなければならぬ。八、七兩世紀はスパルタに於て著大なる改造を見たやうである。即ち民族的分割の變改、市民平等の確立、政治上に於けるエフオルの興起、重裝隊の編成、或原始的習慣の嚴格なるスパルタ制度への發達等である。これは他の諸國が植民によつて擴大しつゝあつた時代に於て、非海國的スパルタに取つては、國防及び征服のために必要であつた。その結果スパルタは自己統制に成功したが、他の諸國は、まだその方面に於てもがいて居た。スパルタのこの過程は自然的發展であつた。スパルタに於ける外國人の文學的活躍や、其の地で發見された恐らく非スパルタ的の美術的遺物から、スパルタが五五〇年頃に文化的國家から急に後の制度の國家に變じたといふ假說は中らない。（村川）

●**メッシナ「摩尼敎の敎理とキリスト敎の起源」**（Messina G. Manichean doctrine and the origin of Christianity. Biblica 10—3. July-Sept. 1929. pp. 313—331）現存せる斷片的摩尼敎經典に基づいて、キリスト敎がその思想の幾分を採用したかも知れないメソポタミヤ地方のキリスト敎以前の民間宗敎を復構し得るや否やが論爭の點である。勿論キリスト敎が直接摩尼敎から多分に借用したことはない。摩尼敎の起つたのはキリスト紀元三世紀からである（摩尼の生れたのは二一五年頃）。然し摩尼敎は以前の多くの要素を綜合したものであるから、キリスト敎的思想の重要な根原を、其中に見出し得るかも知れぬと考へられたが、著者は、現在史料に於ては、何等かゝる根原を見出し得ぬから、今後キリスト敎の起原の研究には、摩尼敎典を考慮に入るる必要はないと結論する。此の方面の研究は支那領トルキスタンに於て、一八九〇年以後摩尼敎寫本の發見以後、新に興味を喚起し、其の翻譯は次々に出版されたが、著者は主として Waldschmidt and Lenz, Die Stellung Jesu in Manichäismus. 1926 によつて立論して居る。此の書には敦煌發見の四百二十二行の讚美歌の譯及び註を含む。これは八世紀以前に遡らざるものではあるが、それよりずつと古い摩尼敎の敎理を表はすものと考へられて居る。此の中にキリストは高い地位を占めて居るが、それはキリスト敎徒を摩尼敎に引き入れるためか、或は當初からイエスの敎が、摩尼敎の一部を成して居たかの二つであるが、著者は後說を採つて居る。（村川）



夜明け前（第一篇）

島崎藤村

第六章

一

和宮(かずのみや)降嫁のことが一度知れ渡ると、沿道の人民の間には非常な感動を喚(よ)び起した。從來、皇室と將軍家との間に結婚の沙汰のあつたのは、前例のないことでもないが、種々な事情から成り立たなかつた。それの實現されるやうになつたのは全く和宮を初めとするといふ。おそらくこれは盛典としても未曾有、京都から江戸への御通行としても未曾有のことであ

らうと言はるゝ。今度の道筋にあたる宿々村々のものがこの御通行を拜し得るといふは非常な光榮に相違なかつた。

木曾谷、下四宿の宿役人としては、しかしたゞそれだけでは濟まされなかつた。彼等は一度は恐縮し、一度は當惑した。多年の經驗が敎へるやうに、この街道の輸送に役立つ御傳馬には限りがある。木曾谷中の人足を寄せ集めたところで、その數はおほよそ知れたものである。それにはどうしても伊那地方の村民を動かして、多數な人馬を用意し、この木曾谷の大通行に備へなければならない。

木曾街道六十九次の宿場は最早嘉永年度の宿場ではなかつた。年老いた吉左衛門や金兵衛がいつまでも忘れかねてゐるやうな天保年度のそれではもとよりなかつた。いつまで伊那の百姓が道中奉行の言ふなりになつて、これほど大掛りな人馬の徴集に應ずるかどうかは頗る疑問であつた。

馬は四分より一疋出す。人足は五分より一人出す。人馬共に隨分丈夫なものを出す。老年、若輩、それから弱馬などは決して出すまい。

これは伊那地方の村民總代と木曾谷にある下四宿の宿役人との間に取りかはされた文化年度以來の契約である。馬の四分とか、人足の五分とかは、石高に應じての歩合を指して言ふことであつて、村々の人馬はその歩合によつて割當を命じられて來た。尤もこの歩合は天保年度になつて多少改められたが、人馬徴集の大體の方針には變りがなかつた。

宿驛のことを知るには、この嚴しい制度のあつたことを知らねばならない。これは宿驛常置の御傳馬以外に、人馬を補充し、繼立てを應援するために設けられたものであつた。この制度が所謂助郷だ。德川政府の方針としては、宿驛附近の郷村にある百姓はみなこれに應ずる義務があるとしてあつた。助郷は天下の公役で、進んでその御觸當に應ずべき御定の

ものであり、何等の形でもその報酬や手當を望むべき性質のものではないとされてゐた。この課役を命ずるために、木曾は時に伊那地方を見分した。そして、助郷を勤め得る村々の石高を合計一萬三百十一石六十ほどに見積り、それを各村に割當てた。例へば最も大きな村は千六十四石、最も小さな村は二十四石といふ風に。天龍川のほとりに住む百姓三十一ヶ村、後には六十五ヶ村のものは、こんな風にして彼等の鍬を捨て、彼等の田園を離れ、伊那から木曾への通路にあたる風越山の山道を越して、この勞役に參加して來た。

旅行も困難な時代であるとは言ひながら、參勤交代の諸大名、公用を帶びた御番衆方なぞの當時の通行が、いかに大袈裟のものであつたかを忘れてはならない。徴集の命令ある毎に、助郷を勤める村民は上下二組に分れ、上組は木曾の野尻と三留野の兩宿へ、下組は妻籠と馬籠の兩宿へと出、交代に朝勤め夕勤めの義務に服して來た。もし天龍川の出水なぞで川西の村々に差支の生じた時は、總助郷で出動するといふ堅い取極であつた。徳川政府がこの傳馬制度を重く視た證據には、直接にそれを道中奉行所の管理の下に置いたのでも分る。奉行は各助郷に證人を兼ねるものを出勤させ、又、人馬の公用を保證するためには權威のある印鑑を造つて、それを道中宿々にも助郷加宿にも送り、紛はしいものもあらば押へ置いて早速注進せよといふほどに苦心した。いかんせん、百姓としては何の報ひらるゝところがない。彼等は從順で、よく忍耐した。中にはそれでも困窮のあまり、助郷不參の手段を執り、山抜け、谷崩れ、出水なぞの口實にかこつけて傳馬制度に對抗するやうな村々をさへ生じて來た。

そこへ和宮の御通行があるといふ。本來なら、これは東海道經由であるべきところだが、それが模樣替へになつて、木曾街道の方を選ぶことになつた。東海道筋は頗る物騒で、志士浪人が途に和宮の東下を阻止するといふやうな計畫があると傳へられるからで。この際、奉行としては道中宿々と助郷加宿とに厳達し、どんな無理をしても人馬を調達させ、和宮供奉の面々が西から續々殺到する日に備へねばならない。徳川政府の威信の實際に試さるゝやうな日が、到頭やつて來た。

壽平次は妻籠の本陣にゐた。彼はその自宅の方で、伊那の助郷六十五ヶ村の意向を探りに行つた扇屋得右衛門の歸りを待ち受けてゐた。ちやうど、半藏が妻のお民も、半年ぶりで實家のおばあさんを見るために、馬籠から着いた時だ。彼女はたまの里歸りといふ顔付で、母屋の臺所口から廣い裏庭づたひに兄のゐるところへもちよつと挨拶に來た。

「來たね。」

壽平次の挨拶は簡單だ。

そこは奥山につゞいた田舍風な庭の一隅だ。壽平次は十間ばかりの矢場をそこに設け、粗末ながらに小屋を造りつけて、多忙な中に閑を見つけては弓術に餘念もない。庄屋らしい袴をつけ、片肌ぬぎになつて、右の手に弓懸の革の紐を卷きつけた兄をそんなところに見つけるのも、お民としてはめづらしいことだつた。

お民は持前の快活さで、

「兄さんも、のんきですね。弓なぞを始めたんですか。」

「いくらいそがしいたつて、お前、弓ぐらゐひかずにゐられるかい。」

壽平次は妹の見てゐる前で、一本の矢を弦に當てがつた。折柄雨が揚つた後の日をうけて、八寸ばかりの的は土俵の方に白く光つて見える。

「半藏さんも元氣かい。」

と妹に話しかけながら、彼は的に向つて狙ひを定めた。その時、弦を離れた矢は的をはづれたので、彼はもう一本の方を試みたが、二本とも土俵の砂の中へ行つてめり込んだ。

この壽平次は上段の方へ一手の矢を拔きに行つて、また妹のゐるところまで引返して來る時に言つた。

「お民、馬籠のお父さん(吉左衞門)や、伏見屋の金兵衞さんの退役願はどうなつたい。」

「あの話は兄さん、お聞届けになりませんよ。」

「さうかい。」

多事な街道のことも思ひ合はされて、壽平次はうなづいた。

「お民、お前も骨休めだ。まあ二三日、妻籠で寢て行くさ。」

「兄さんの言ふこと。」

兄妹がこんな話をしてゐるところへ、つか／＼と庭を廻つて伊那から歸つたばかりの顏を見せたのは、日頃勝手を知つた得右衞門である。伊那でも有力な助郷總代を島田村や山村に訪ねるのに、得右衞門はその適任者であるばかりでなく、妻籠脇本陣の主人として、又、年寄役の一人として、壽平次の父が早く亡くなつてからは何かにつけて彼の後見役となつて來たのもこの得右衞門である。得右衞門の家で造り酒屋をしてゐるのも、馬籠の伏見屋によく似てゐた。

壽平次はお民に眼くばせして、そこを避けさせ、母屋の方へ庭を廻つて行く妹を見送つた。小屋の荒い壁には弓をたてかけるところもある。彼は弓懸の紐を解いて、その隱れた靜かな場所に氣の置けない得右衞門を迎へた。

得右衞門の報告は、壽平次が心配して待つてゐたとほりだつた。伊那助郷が木曾にある下四宿の宿役人を通して愁訴を企てたのは、その日に始まつたことでもない。三十一ヶ村の助郷を六十五ヶ村で分擔するやうになつたのも、實は愁訴の結果であるが、さういふ風に用ひられた場合は稀で、これまで百姓の訴へは多く奉行の耳に入らなかつた。ずつと以前の例によると、助郷を勤める人馬は五ヶ年を平均して、一ヶ年の石高百石につき、人足十七人二分三厘三毛、馬一疋六分一厘ほどに當る。しかしこれは天保年度のことで、助郷の負擔は次第に重くなつて來てゐる。殊に、黑船の渡つて來た嘉永年

代からは、諸大名公役等が通行も繁く、その度に徴集されて嶮岨な木曾路を往復することであるから、自然と人馬も疲れ、病人や死亡者を生じ、繼立てにも差支へるやうな村々が出て來た。おまけに諸色は高く、衣食は足らず、兒を養ふことも出來ないものはそれを苦しんで、をろし（墮胎）、まびき（陰殺）をすら敢てする。こんなことで、どうして百姓の立つ瀨があらう。二百何十年來の御定とは言ひながら、今迄通り手當もなく、唯義務で働けといふやうなことでは、助郷總代としても一同の不平をなだめる言葉がない。今度といふ今度は、容易に請狀も出しかねるといふのが助郷側の言分である。

『いや、大やかまし。』と得右衞門は言葉をついだ。『そこをわたしが折り入つて賴んで、何とかして皆の顏を立てる、奉行所に願つて手當を出させる、こんな御通行は二度とはあるまいから、と言ひましたところが、それぢや村々のものを集めてよく相談して見ようと先方でも折れて出ましてね、そんな約束でわたしも別れて來ましたよ。』

『そいつはお骨折りでした。早速、奉行所宛の願書を作らうぢやありませんか。野尻、三留野、妻籠、馬籠、これだけの庄屋連名で出すことにしませう。たぶん、半藏さんもこれに贊成だらうと思ひます。』

『さうなさるがいゝ。今度わたしも伊那へ行つて、つく〴〵さう思ひました。德川樣の御威光といふだけでは、百姓も言ふことを聞かなくなつて來ましたよ。』

『そりや得右衞門さん、遲い。一體、諸大名の行列はもつと省いてもいゝものでせう。さうすれば、助郷も助かる。わたしに言はせると、參勤交代なぞはもう時世後れですよ。』

『かういふ庄屋が出て來るんですからねえ。』

その時、壽平次は『今一手』と言ひたげに、小屋の壁にたてかけた弓を取りあげて、弦に松脂を塗つてゐた。それを見ると、得右衞門も思ひ出したやうに、

『伊那の方でもこれが大流行。武士が刀を質に入れて、庄屋の衆が弓をはじめるか。世の中も變りましたね。』

「得右衞門さんはさう言ふけれど、わたしはもつと身體を鍛へることを思ひつきましたよ。御覽なさい、かう物騷な世の中になつて來ては、武勇を振ひ起す必要がありますね。」

壽平次は胸を張り、兩手を高くさし延べながら。的に向つて深く息を吸ひ入れた。左手の弓を押す力と、右手の弦をひき絞る力とで、見る／＼血潮は彼の頬に上り、腕の筋肉までが隆起して震へた。背こそ低いが、彼も最早三十歳のさかりだ。馬籠の半藏と競ひ合つて、木曾の「山猿」を發揮しようといふ年頃だ。その側に立つてゐて、混ぜ返すやうな聲を掛けるのは、壽平次から見れば小父さんのやうな得右衞門である。

「ポツン。」

「さうはいかない。」

取りあへず壽平次等は願書の草稿を作りにかゝつた。和宮下向については人馬の繼立て方も嵩むから、その手當として一宿へ金百兩づゝを借し渡されるやう。但し十ケ年賦にして返納する。當時米穀も拂底で、御傳馬を勤めるものは皆難澁の際であるから、右百兩の金子で、米、稗、大豆を買入れ、人馬役のものへ割渡したい。一ケ宿、米五十駄、稗五十駄づつの御救助を仰ぎたい。願書の主意はこれらのことに盡きてゐた。

下書は出來た。やがて、下四宿の宿役人は妻籠本陣に寄り合ふことになつた。馬籠からは年寄役金兵衞の名代として、養子伊之助が來た。壽平次、得右衞門、得右衞門が養子の實藏もそれに列席した。

「助郷に手當を出すのは至極尤もだとは思ひますが、これが前例になつたらどんなものでせう。」

「さあ、こんな御通行はもう二度とはありますまいからね。」

宿役人の間にはいろ／＼な意見が出た。その時、得右衛門は伊那の助郷總代の意向を傳へ、こんな願書を差出すのも止むを得ないと述べ、前途のことまで心配してゐる場合でないと力說した。

「どうです、願書はこれでいゝとしようぢやありませんか。」

と伊之助が言ひ出して、各庄屋の調印を求めようといふことになつた。萬一、御定を盾に執つて、百姓の訴へも耳に入れないやうなら、一番苦境に立つものは斯うした願書を受取る道中奉行その人であらうと見られた。

二

例のやうに壽平次は弓を手にして、裏庭の矢場に隱れてゐた。彼の胸には木曾福島の役所から來た廻狀のことが繰り返されてゐた。それは和宮の御通行に關係はないが、當時諸國にやかましく成つた神葬祭の一條で、役所からその賛否の問合せが來たからで。

しかし、『うん、神葬祭か――では、壽平次も濟まされなかつた。早い話が、義理ある兄弟の半藏は平田門人の一人であり、この神葬祭の一條は平田派の國學者が起した復古運動の一つであるらしいのだから。

『俺は、てつきり國學者の運動と睨んだ。ほんとに、あのお仲間は何をやり出すか分らん。』

砂を盛り上げ的を置いた土俵のところと、十間ばかりの距離にある小屋との間を往復しながら、壽平次は獨り考へた。

同時代に滿足しないといふことにかけては、壽平次とても半藏に劣らなかつた。しかし人間の信仰と風俗習慣とに密接な關係のある葬祭のことを寺院から取り戾して、それを白紙に改めよとなると、壽平次は腕を組んでしまう。これは水戶の廢佛毀釋に一步を進めたもので、言はゞ一種の宗教改革である。古代復歸を夢みる國學者仲間がこれほどの熱情を抱いて來たことすら、壽平次には不思議でならなかつた。同時代に滿足してゐなかつたところから、過去に探求の眼を向けた

先人はもとより多い。その中でも、最も遠い古代に着眼した本居宣長のやうな國學者が、最も新しい道を發見して、その方向を後から歩いて出て行く人達に示したといふことすら、彼には實に不思議でならなかつた。彼は獨り言つて見た。

「まあ、神葬祭なぞは疑問だ。復古といふやうなことが、果して今の時世に行はれるものかどうかも疑問だ。どうも平田派のお仲間の爲る事には、何か矛盾がある。」

まだ妹のお民が家に逗留してゐたので、壽平次は弓の道具を取りかたづけ、的もはづし、やがてそれを提げながら、自分の妻のお里や妹のゐる方へ行つて一緒にならうとした。裏庭から母屋の方へ引き返して行くと、店座敷の側の板の間から、機を織る筬の音が聞えて來てゐる。

壽平次の家も妻籠の御城山のやうに古い。土地の言傳へにも毎月三八の日には村市が立つたといふ昔の時代から續いて來てゐる青山の家だ。この家にふさはしいもの、一つは、今のおばあさん(壽平次兄妹の祖母)が嫁に來る前からあつたといふほど古めかしく錆び黒ずんだ機の道具だ。深い窓に住むほど女らしいとされてゐた頃のことで、お里やお民はその機の置いてあるところに集まつて、近づいて來る御通行の噂をしたり、十四代將軍(徳川家茂)の御臺所に選ばれたといふ和宮はどんな美しい人だらうなぞと語り合つたりしてゐるところだつた。

いくらかでも街道の閑な時を見て、手仕事を樂まうとするこの女達の世界は、壽平次の眼にも樂しかつた。織手のお里は機に腰掛けてゐる。お民はその側にゐて同い年齢の娵がすることを見てゐる。周圍には、小娘のお粂も母親のお民に連れられて馬籠の方から來てゐて、手鞠の遊びなぞに餘念もない。おばあさんはおばあさんで、すこしもぢつとしてゐられないといふ風で、あれもこしらへてお民に食はせたい、これも食はせたいと言ひながら、何かにつけて孫が里歸りの日を

樂しく遊らせようとしてゐる。

その時、お民は兄の方を見て言つた。

『兄さんは弓にばかり凝つてるツて、おばあさんがこぼしてゐますよ。』

『おばあさんぢやないんだらう。お前達がそんなことを言つてゐるんだらう。俺もどうかしてゐると見えて、けふの矢は一本も當らない。さう言へば、半藏さんは弓でも始めないかなあ。』

『吾夫ぢや暇さへあれば本を讀んだり、お弟子を敎へたりしてですよ。男の方もいろいろですねえ。兄さんは私達の帶の話までお燒きなさる方でせう。吾夫と來たら、わたしが何を着てゐたつて、知りやしません。』

『半藏さんはさういふ人らしい。』

割合に無口なお里は織りかけた田舎縞の絲をしらべながら、この兄妹の話に耳を傾けてゐた。お民は思ひ出したやうに、

『どれ、姉さん、わたしにもすこし織らせて。この機を見ると、わたしは娘の時分が戀しくてなりませんよ。』

『でも、お民さんはそんなことをしていゝんですか。』

とお里に言はれて、お民は思はず顏を紅めた。兎角多病で子供のないのを淋しさうにしてゐるお里に比べると、お民の方は肥つて、若い母親らしい肉づきを見せてゐる。

『兄さんには、お分りでせう。』とお民はまた顏を染めながら言つた。『わたしもからだの都合で、またしばらく妻籠へは來られないかも知れません。』

『お前達はいゝよ。結婚生活が順調に行つてる證據だよ。俺のところを御覽、俺が惡いのか、お里が惡いのか、そこは分らないがね、六年にもなつてまだ子供がない。俺はお前達が羨ましい。』

そこへおばあさんが來た。おばあさんは木曾の山の中にめづらしい[illegible]土産を置いて行つた人があると言つて、それを

お民のゐるところへ取り出して來て見せた。

『これだよ。これはお洗濯する時に使ふものだそうだが、使ひ方はこれを呉れた人にもよく分らないさ。あんまり珍しいものだから横濱の異人屋敷から買つて來たと言つて、飯田の商人が土産に置いて行つたよ。』

石鹸といふ言葉もまだなかつたほどの時だ。呉れる飯田の商人も、貰ふ妻籠のおばあさんも、シャボンといふ名さへ知らなかつた。おばあさんが紙の包みをあけて見せたものは、異國の花の形に出來てゐて、薄桃色と白とある。

『御覧、好い香氣（にほひ）だこと。』

とおばあさんに言はれて、お民は眼を細くしたが、第一その香氣に驚かされた。

『お粂、お前も嗅（か）いで御覧。』

お民がその白い方を女の兒の鼻の先へ持つて行くと、お粂はそれを奪ひ取るやうにして、いきなり自分の口のところへ持つて行かうとした。

『これは食べるものぢやないよ。』とお民はあわてゝ、娘の手を放させた。『まあ、この兒は、お菓子と間違へてさ。』

新しい異國の香氣は、そこにゐる誰よりも壽平次の心を誘つた。めづらしい花の形、横に浮き出してゐる精巧な羅馬文字――それはよく江戸土産に貰ふ錦繪や雪踏（せつた）なぞの純日本のものにない美しさだ。實に偶然なことから、壽平次は西洋嫌ひでもなくなつた。古錢を蒐集することの好きな彼は、異國の銀貨を手に入れて、人知れずそれを愛翫するうちに、そんな古錢にまじる銀貨から西洋といふものを想像するやうになつた。しかし彼はその事を誰にも隱してゐる。

『これはどうして使ふものだらうねえ。』とおばあさんはまたお民に言つて見せた。『なんでも水に溶かすといふ話を聞いたから、わたしは一つ煮て見ましたよ。これが、お前、ぐる〳〵鍋の中で廻つて、そのうちに溶けてしまつたよ。棒でかき廻して見たら、すつかり泡になつてさ。何だかわたしは氣味が惡くなつて、鍋ぐるみ土の中へ埋めさせましたよ。ひよつ

とすると、これはお洗濯するものぢやないかも知れないね。』

『でも、わたしは初めてこんなものを見ました。おばあさんに一つ分けて頂いて、馬籠の方へも持つて行つて見せませう。』

とお民が言ふ。

『そいつは、止した方がいゝ。』

壽平次は兄らしい調子で妹を押し止めた。

文久元年の六月を迎へる頃で、さかんな排外熱は全國の人の心を煽り立てるばかりであつた。その年の五月には水戸藩浪士等によつて、江戸高輪東漸寺にある英吉利公使館の襲撃さへ行はれたの報知もある。その時、水戸側で三人は闘死し、一人は縛に就き、三人は品川で自殺したといふ。東漸寺の衞兵で死傷するものが十四人もあり、一人の書記と長崎領事とは傷いたともいふ。これほど攘夷の聲も險しくなつて來てゐる。どうして飯田の商人が呉れた横濱土産の一つでも、うつかり家の外へは持ち出せなかつた。

お民が馬籠をさして歸つて行く日には、壽平次も半藏の父に用事があると言つて、妹を送りながら一緒に行くことになつた。彼には伊那助郷の願書の件で、吉左衞門の調印を求める必要があつた。野尻、三留野は既に調印を終り、殘るところは馬籠の庄屋のみとなつたからで。

ちやうど馬籠の本陣からは、下男の佐吉がお民を迎へに來た。佐吉はお粂を背中にのせ、後ろ手に幼いものを守るやうにして、足の弱い女の兒は自分が引き受けたといふ顔付だ。お民も支度が出來た。そこで出掛けた。

『壽平次さま。横須賀行を思ひ出すなし。』

足掛け四年前の旅は、佐吉にも忘れられなかつたのだ。

壽平次が村のあるところは、大河の流れに近く、評母、蘭の森林地帯に倚り、木曾の山中でも最も美しい谷の一つである。馬籠の方へ行くにはこの谷の入口を後に見て、街道に添ひながら二里ばかりの峠を上る。めつたに家を訪れることのないお民が、兄と共に踏んで行くことを樂しみにするも、この山道だ。街道の両側は夏の日の林で、その奥は川又山だ。木曾山一帯を支配する尾張藩の役人が森林保護の目的で、禁止木の盗伐を監視する白木の番所も、妻籠と馬籠の間に隠れてゐる。

午後の涼しい片影が出來る頃に、壽平次等は復興最中の馬籠に入つた。どつちを向いても火災後の宿場らしく、新築の工事は行く先に始まりかけてゐる。そこに積み重ねた材木がある。こゝに木を挽く音が聞え。る壽平次等は本陣の焼跡まで行つて、そこに働いてゐる吉左衛門と半蔵とを見つけた。小屋掛けをした普請場の木の香の中に。

半蔵は壽平次に伴はれて來た妻子をよろこび迎へた。會所の新築が出來上つたことをも壽平次に告げて、本陣の焼跡の一隅に、以前と同じ街道に添ふた位置に建てられた間口五間半ばかりの瓦葺の家を指して見せた。貫目御改め所、御出役御詰め所、御供部屋、それから問屋場、宿役人の詰め所なぞの五つの部屋から成る新しい會所は、何よりも先づこの宿場になくてならないのだつた。

壽平次は半蔵の前に立つて、あたりを見廻しながら言つた。

『よくそれでもこれだけに工事の支度が出來たと思ふ。』

『みんな一生懸命になりましたからね。こゝまで漕ぎつけたのも、その御蔭だと思ひますね。』

吉左衛門はこの二人の話を引き取つて、『三年のうちに二度も大火が來て御覧、たいていの村はまゐつてしまふ。まあ、吾家でも先月の三日に建前の手斧始めをしたが、これで石場搗きの出來るのは二百十日あたりにならう。和宮さまの御通行

までには間に合ひさうもない。』

その時、壽平次が助郷願書の件で調印を求めに來たことを告げると、半藏は『まあ、そこへ腰掛けるさ』と言つて、自分でも普請場の材木に腰掛ける。お民はその側を通り過ぎて、裏の立退き場所にゐる姑（おまん）の方へと急いだ。

『壽平次さん、君は好いことをして呉れた。助郷のことは隣の伊之助さんからも聞きましたよ。阿爺はもとより大賛成です。』と半藏が言ふ。

『さあ、これから先、助郷もどうなららう。』と吉左衞門も案じ顔に、『これが大問題だぞ。先月の二十二日に、大阪のお目付がお下りといふ時には、伊那の助郷が二百人出た。例幣使（日光への定例の勅使）の時のことを考へて御覽。あれは四月の六日だ。四百人も人足を出せと言はれるのに、伊那からは誰も出て來ない。』

『結局、助郷といふものは無給ぢや無理でせう。賃錢勤めとでもする外に、適當な方法はありますまい。』とまた半藏が言ふ。『それさ。』と壽平次も吾が意を得たといふ風に、『わたしも今それを言ひ出さうと思つてゐたところでした。一體、二百人の、四百人のッて、さう多勢の人足を通行のたびに出せと言ふのが無理ですよ。』

『そりや、助郷の賃錢勤めも結構なことは結構だがね、拂へなかつたらどうする。さうは公儀の財政が許すまいし、諸藩の財政だつても許すまいて。』と吉左衞門が言つて見せる。

『ですから、諸大名や公役の通行をもつと簡略にするんですね。』と半藏が言葉を挿んだ。『百姓が眼をさまして來たら、下の方からでもさうなりますよ。』

『だんだんかういふ時世になつて來た。』と吉左衞門は感じ深さうに言つた。『俺の思ふには、參勤交代といふことも今になくなるだらうよ。』

しかし、その結果は。六十三年の年功を積んだ庄屋吉左衞門にも、それから先のことは何とも言へなかつた。その時、

吉左衛門は俳諧場の仕事にすこし飽きが來たといふ風で、

「まあ、壽平次さん、調印もしませうし、お話も聞きませうに、裏の二階へ來て下さい。おまんにも逢つてやつて下さい。」

と言つて誘つた。

離れたところに働く家族のさまが、この俳諧場の奥にひらけてゐた。味噌納屋の前には襷がけ手拭かぶりで、下女達を相手に、見た眼もすゞしさうな新茄子を漬けるおまんがゐる。その側には二番目の宗太を抱いてやるお民がゐる。おまんが漬物桶の板の上で、茄子の蔕を切つて與へると、孫のお粂は早速それを兩足の親指のところに挿んで、茄子の蔕を馬にして歩き戯れる。裏の木小屋の方からは、梅の實の色づいたのをもいで來て、それをお粂や宗太に分けて與れる佐吉もゐる。

「お父さん、あなたの退役願ひはまだ御聞き屆けにならないさうですね。」

「さうさ。退役聞き屆けがたしさ。」

壽平次は吉左衛門のことを「お父さん」と呼んでゐる。その日の夕飯後のことで、一緒に食事した半藏はちよつと台所の方へ行つて來ると言つて、爐の側にゐなかつた時だ。

「壽平次さん、」と吉左衛門は笑ひながら言つた。「吾家へはその事でわざ〳〵公役が見えましてね、金兵衛さんと私を前に置いて、いろ〳〵お話がありました。二人とも、せめてもう二三年は勤めて、役を精出せ、さう言はれて、願書をお下げになりました。金兵衛さんなぞは、ありがたく畏れ入つて、引き下つて來たなんて、後でその話が出ましたつけ。」

そこは味噌納屋の二階だ。大火以來、吉左衛門夫婦が孫を連れて假住居してゐるところだ。壽平次はその遠慮から、夕

飯の馳走になつた禮を述べ、同じ燒け出された仲間でも上の伏見屋といふもの、ある金兵衛の假宅の方へ行つて泊めて貰はうとした。

『どうもまだわたしも、御年貢の納め時が來ないと見えますよ。』

と言ひながら、吉左衛門は梯子段の下まで壽平次を送りに降りた。夕方の空に光を放つ星のすがたを見つけて、それを何かの暗示に結びつけるやうに、壽平次に指して見せた。

『箒星ですよ。午年(うまどし)に北の方へ出たのも、あの通りでしたよ。どうも年廻りが好くないと見える。』

この吉左衛門の言葉を聞き捨てゝ、壽平次は味噌納屋の前から同じ屋敷つゞきの暗い石段を上つた。月はまだ出なかつたが、星があつて凉しい。例の新築された會所の側を通り過ぎようとすると、表には板庇があつて、入口の障子も明いてゐる。壽平次は足をとめて、思はずハツとした。

『どうも半藏さんばかりぢやなく、伊之助さんまでが贊成だとは意外だ。』

『でも結果から見て惡いと知つたことは、改めるのが至當ですよ。』

こんな聲が手に取るやうに聞える。宿役人の詰め所には人が集まると見えて、灯が泄れてゐる。何かゞそこで言ひ爭はれてゐる。

『そんなことで、先祖以來の祭り事を改めるといふ理由にはなりませんよ。』

『しかし、人の心を改めるには、どうしてもその源から改めてかゝらんことには駄目だと思ひますね。』

『それは理屈だ。』

『そんなら、六十九人もの破戒僧が珠數つなぎにされて、江戸の吉原や、深川や、品川新宿のやうなところへ出入(ではひ)りするといふかどで、あの日本橋で面(かほ)を晒(さ)らされた上に、一ヶ寺の住職は島流しになるし、所化の坊主は寺法によつて罰せられた

といふのは。」

神葬祭の一條に關する贊否の意見がそこに戰はされてゐるのだ。贊成者は半藏や伊之助のやうな若手で、不贊成を唱へるのは馬籠の問屋九太夫らしい。

「お寺とさへ言へば、無暗とありがたいところのやうに思つて、昔から澤山な土地を寄附したり、先祖の位牌を任せたり、宗門帳まで預けたりして、その結果はすこしも置いて問はないんです。」と言ふのは半藏の聲だ。

「これは聞きものだ。」九太夫の聲で。

半藏の意見にも相應の理由はある。彼に言はせると、あの聖德太子が佛教をさかんに弘め給ふてからは、代々の帝がみな法師を尊信し、大寺大伽藍を建てさせ、天下の財用を盡して御信心が篤かつたが、しかし法師の方でその本分を盡してこれほどの國家に報ひたとは見えない。あまつさへ、後には山法師などといふ手合が日吉七社の神輿を舁ぎ出して京都の市中を騒がし、あるひは大寺と大寺とが戰爭して人を殺したり火を放つたりしたことは數へ切れないほどある。平安期以來の皇族公卿達は多く佛門に歸依せられ、出世間の道を願はれ、たゞ〳〵この世を悲しまれるばかりであつたから、救ひのない人の心は次第に皇室を離れて、悉く武士の威力の前に屈服するやうになつた。今はこの國に佛寺も多く、御朱印といひ諸大名の寄附といつて、寺領となつてゐる土地も廣大なものだ。そこに住む出家、比丘尼、だいこく、所化、男色の少年、その他靑侍にいたるまで、田畑を耕すこともなくて上白の飯を食ひ、絲を採り機を織ることもなくて好い衣裳を着る。諸國の百姓がどんなに困窮しても、寺納を減して貧民を救はうと思ふ和尙はない。凶年なぞには別して多く米錢を集めて寺を富まさうとする。百姓に餓死するものはあつても、餓死した僧のあつたと聞いたためしは無い。長い習慣はおそろしいもので、全國を通じたら何百萬からのそれらの人達が寺院に遊食してゐても、あたりまへのことのやうに思はれて來た。これはあまりに多くを許し過ぎた結果である。そこで、祭葬のことを寺院から取り戻して、古式に復したら、もつとみん

なの眼もさめやうと言ふのである。

『今日ほど宗教の濁つてしまつた時代もめづらしい。』とまた半蔵の聲で、『まあ、諸國の神宮寺なぞを覗いて御覧なさい。神佛はこんなに混淆されてしまつた。本地垂跡なぞといふことが唱へられてから、この國の神は大日如來や阿彌陀如來の化身だとされてゐますよ。神職で御經をあげるところもある。』

『あなたがたはまだ若いな。』と九太夫の聲が言ふ。『そりや權現さまもあり、妙見さまもある。神職で御經をあげるところは、いくらだつてある。あらたかでありさへすれば、それでいゝぢやありませんか。』

『ところが、わたしどもはさうは思はないんです。これが末世の證據だと思ふんです。金剛兩部なぞの教になると、實際ひどい。佛の力にすがることによつて、はじめてこの國の神も救はれると說くぢやありませんか。おれは實に神の胃瀆といふものです。どうしてみんなは、かう平氣でゐられるのか。話はすこし違ひますが、嘉永六年に異國の船が初めて押し寄せて來た時は、わたしの二十三の歲でした。しかしおれを初めての黑船と思つたのは間違ひでした。考へて見ると遠い昔から何艘の黑船がこの國に着いたか知れない。まあ、わたしどもに言はせると、傳教でも、空海でも――みんな、黑船ですよ。』

『どうも本陣の跡繼ぎともあらうものが、かういふ議論をする。そんなら、わたしは上の伏見屋へ行つて聞いて見る。金兵衛さんはわたしの味方だ。お寺の世話をよくして來たのも、あの人だ。よろしいか、これだけのことは忘れないで下さいよ――馬籠の萬福寺は、あなたの家の御先祖の青山道齋が建立したものですよ。』

この九太夫は、平素自分から『馬籠の九太夫、贄川の權太夫』と言つて、太夫を名のるものは木曾十一宿に二人しかないといふほどの太夫自慢だ。それに本來なら、吉左衛門の家が今度の和宮の御小休み所に宛てられるところだが、それが評議中とあつて、問屋分擔の九太夫の家に振り向けられたといふだけでも鼻息が荒い。

思はず寿平次は半蔵の話を聞いて、中津川の一行が平田篤胤没後の諸門人から出た政策意見であることを思つた。彼は會所の周圍を往つたり來たりして、そこを立ち去りかねてゐた。

その晩、お民は裏の土藏の方で、夫の歸りを待つてゐた。山家にはめづらしく熱苦しい晩で、兩親が寢泊りする味噌納屋の二階の方でもまた雨戸が明いてゐた。

『あなた、大變遲かつたぢやありませんか。』

と言ひながら、お民は會所の方からぶらりと戻つて來た夫を土藏の入口のところに迎へた。火災後の假住居で、二人ある子供のうち姉のお粂は納屋の二階の方へ寢に行き、弟の宗太だけがそこによく眠つてゐる。子供の枕もとには昔風な行燈なぞも置いてある。お民は用意して待つてゐた山家風なネブ茶に湯をついだ。それを夫にすゝめた。

その時、半藏は子供の寢顏をちよつと覗きに行つた後で、熱いネブ茶に咽喉をうるほしながら言つた。『なに、神葬祭のことで、すこしばかり九太夫さんとやり合つた。壁を叩くものは手が痛いぐらゐは俺も承知してゐるが、あんまり九太夫さんが解らないから。あの人は大變な立腹で、福島へ出張して申し開きをするなんて、さう言つて、金兵衛さんのところへ出掛けて行つたよ。でも、伊之助さんが側にゐて、俺の加勢をして呉れたのは、ありがたかつた。あの人は頼母しいぞ。』

一年のうちの最も短い夜は更け易い頃だつた。お民の懐妊はまだ眼立つほどでもなかつたが、それでもからだをだるさうにして、夫より先に宗太の側へ横になりに行つた。妻にも知らせまいとするその晩の半藏が興奮は容易に去らない。彼は土藏の入口に近くゐて、石段の前の柿の木から通つて來る夜風を樂しみながら獨り起きてゐた。そのうちに、お民も眠りがたいかして、寢衣のまゝでまた夫の側へ來た。

『お民、お前はもつとからだを大事にしなくてもい丶のかい。』
『妻籠でもそんなことを言はれて來ましたつけ。』
『さう言へば、妻籠ではどんな話が出たね。』
『馬籠のお父さんと半藏さんとは、好い親子ですつて。』
『さうかなあ。』
『兄さんも、わたしも、親には早く別れましたからね。』
『何かい。神葬祭の話は出なかつたかい。』
『わたしは何も聞きません。兄さんがこんなことは言つてゐましたよ。——半藏さんも夢の多い人ですつて。』
『へえ。俺は自分ぢや、夢がすくなさ過ぎると思ふんだが——夢のない人の生涯ほど味氣ないものはない、と俺は思ふんだが。』
『ねえ、あなたが中津川の香藏さんと話すのを側で聞いてゐますと、吾家の兄さんと話すのとは違ひますねえ。』
『そりや、お前、香藏さんと俺とは同じものだもの。そこへ行くと壽平次さんの方は、俺の内部にいろ〳〵なものを見つけて呉れる。俺はお前の兄さんの顔を見てゐると、何か言つて見たくなるよ。』
『あなたは兄さんが嫌ひですか。』
『どうしてお前はそんなことを言ふんだい。壽平次さんと俺とは、同じやうに古い青山の家に生れて來た人間さ。立ち場は違ふかも知れないが、やつぱり兄弟は兄弟だよ。』
半藏はお民のからだを心配して床に就かせ、自分でも休まうとして、一旦は妻子の側に横になつて見た。眠りがたいままに、また起き出して入口の戸を開けて見ると、東南の方角にあたる暗い空は下の方から黃ばんだ色にすこしづゝ明るく

なつて來て、深夜の感じを與へる。

遠い先祖代々の位牌、青山家の古い墓地、それらのものを預けてある馬籠の寺のことから、そこに籠つて働いてゐた松雲和尚のことがしきりに半藏には問題の人になつて來た。彼はあの萬福寺の新住職として松雲を村はづれの新茶屋に迎へた日のことを思ひ出した。あれは雨のふる日で、六年の長い月日を行脚の旅に送つて來た松雲が笠も草鞋も濡れながら、西からあの峠の上に着いた時であつたことを思ひ出した。あの頃は彼もまだ若かつたが、すでに平田派の國學にこゝろざしてゐて、中世以來學問道徳の權威としてこの國に臨んで來た漢學び風の因習からも、佛の道で教へるやうな物の見方からも離れよといふことを深く心に銘ずる頃であつたから、新たに迎へる住職のことを想像し、その住職の信仰する宗教のことを想像し、その人にも、その人の信仰にも、行く〳〵は反對を見出すかも知れないやうな、ある豫感に打たれずにはゐられなかつたことを思ひ出した。到頭、その日がやつて來たのだ。尤も、廢佛を意味する神葬祭の一條は福島の役所からの諮問案で、各村の意見を求める程度にまでしか進んでゐなかつたが。

いつの間にか暗い空が夏の夜の感じに澄んで來た。青白い靜かな光は土藏の前の冷い石段の上にまで射し入つて來た。獨り起きてゐる彼の膝の上まで照らすやうになつた。次第に、月も上つた。

八百千年ありこしことも諸人の惡しとし知らば改めてまし

まがごとゝみそなはせらば事ごとに直毘の御神直したびてな

眼のまへに始むることもよくしあらば惑ふことなくなすべかりけり

正道に入り立つ徒よおほかたのほまれそしりはものならなくに

半藏の述懐だ。

三

舊暦九月も末になつて、馬籠峠へは小鳥の來る頃になつた。最早和宮御迎への同勢が關東から京都の方へ向けて、毎日のやうにこの街道を通る。さうなると、定例の人足だけでは繼立ても行き屆かない。道中奉行所の小笠原美濃守は公役として既に宿々の見分に來た。いかに伊那助郷の要求がこれまでの御定めを破ることであり、徳川政府の威信に關することであるとしても、木曾下四宿の庄屋が連名で出した願書をしりぞけることは、奉行としても爲し得なかつた。

十月に入つてからは、御通行準備のために奔走する人達が一層半藏の眼につくやうになつた。尾州方の役人は美濃路から急いで來る。上松の庄屋は中津川へ行く。早駕籠で、夜中に馬籠へ着くものすらある。尾州の領分からは、千人もの人足が隣宿美濃落合の御繼ぎ所(繼立ての場所)へ詰めることになつて、ひどい吹降りの中を人馬共にあの峠の下へ着いたとの報知もある。

「半藏、どうも人足や馬が足りさうもない。俺はこれから中津川へ打合せに行つて、それから京都まで出掛けて行つて來るよ。」

「お父さん、大丈夫ですかね。」

親子はこんな言葉をかはした。道中奉行所から渡された御印書によつて、越後越中の方面からも六十六萬石の高に相當する人足がこの御通行筋へ加勢に來ることになつたが、よく調べて見ると、それでも足りさうもないと言ふ父の話は半藏を驚かした。

「美濃の方ぢや、お前、伊勢路からも人足を許されて、もう觸當てに出掛けたものもあるといふよ。美濃の鵜沼宿から信州本山まで、どうしても人足は通しにするより外に方法がない。俺は京都まで御奉行様の後を追つて行つて、それをお願

ひして來る。彼も今度は最後の御奉公のつもりだとのこと。この年老いた父の奮發が、半藏にはひどく案じられてならなかつた。さうかと言つて、彼が父に代はれる場合でもない。街道には街道で、彼を待つてゐる仕事も多かつた。その時、繼母のおまんも父の側に來て、

『あなたも御苦勞さまです。ほんとに、萬事大騷動になりましたよ。』

と案じ顏に言つてゐた。

吉左衛門はなか〱の元氣だつた。六十三歲の老體とは言ひながら、いざと言へば側にゐるものがびつくりするやうな大きな聲で、

『オイ、馬籠だ。』

と人を呼ぶほどの氣力を見せた。

和宮御迎への同勢の通行で、賑はしい街道の混雜は最早九日あまりも續いた。伊那の百姓は自分等の要求が納れられたといふ顏付で、二十五人ほどづゝ一組になつて、既に馬籠へも働きに入り込んで來た。やかましい助鄉の問題の後だけに朝勤め夕勤めの人達を街道に迎へることは半藏にも感じの深いものがあつた。どうして、この多數の應援があつてさへ、續々關東からやつて來る同勢の繼立てに十分だとは言へなかつたくらゐだ。馬籠峠から先は落合に詰めてゐる尾州の人足が出て、荷物の持運びその他に働くといふほどの騷ぎだ。時には、半藏はこの混雜の中に立つて、怪我人を載せた四挺の駕籠が三留野の方から動いて來るのを目擊した。和宮の御泊りに宛てられるといふ三留野の普請所では、小屋が潰れて、怪我をした尾張の大工達が歸國するところであるといふ。その時になると、神葬祭の一條も、何もかも、この街道の空氣の中に埋め去られたやうになつた。和宮下向の噂があるのみだつた。

和宮は親子内親王といふ。京都にある帝とは異腹の御兄妹である。先帝第八の皇女であるくらゐだから、御姉妹も多かつた。それがだん／＼亡くなられて、御妹としては宮ばかりになつたから、帝のいつくしみも深かつた譯である。宮は幼い頃から有栖川家と許婚の間柄であつたが、それが徳川將軍に嫁ぐやうになつたのも、まつたく幕府の懇望にもとづく。

もと／＼公武合體の意見は、當時の老中安藤對馬などの創めて唱へ出したことでもない。天璋院といへば、當時すでに未亡人であるが、その人を先の將軍の御臺所として徳川家に送つた島津氏なぞも夙に公武合體の意見を抱いてゐて、幕府有司の中にも、諸藩の大名の中にもこの說に共鳴するものが多かつた。言はゞ、國事の多端で艱難な時にあらはれて來た協調の精神である。幕府の老中等は和宮の降嫁をもつて協調の實を擧ぐるに最も適當な方法であるとし、京都所司代の手を經、關白を通して、それを叡聞に達したところ、帝にはすでに有栖川家と婚約のある宮のことを思ひ、且は兎角騷がしい江戸の空へ年若な女子を遣はすのは氣遣はれると仰せられて、御許しがなかつた。この結婚には宮も不承知であつた。ところが京都方にも、公武合體の意見を抱いた岩倉具視、久我建通、千種有文、富小路敬直なぞの有力な人達があつて、この人達が堀河の典侍を動かした。堀河の典侍は寵妃であるから、この人の奏聞には帝も耳を傾けられた。宮は固く辭して應ずる氣色もなかつたが、だん／＼御乳の人絵島の言葉を聞いて、漸く納得せらるゝやうになつた。年若な宮は健氣にも思ひ直し、自ら進んで激しい婦人の運命に當らうとせられたのである。

この宮は婿君（十四代將軍、徳川家茂）への引出物として、容易ならぬ土產を持參せらるゝことになつた。『蠻夷を防ぐことを堅く約束せよ』との聖旨がそれだ。幕府としては、今日は兵力を動かすべき時機ではないが、今後七八年乃至十年の後を期し、武備の充實する日を待つて、條約を引き戻すか、征伐するか、いづれかを選んで叡慮を安んずるであらうといふ意味のことが、あらかじめ奉答してあつた。

しかし、この様な結婚には多くの反對者を生じた。それらの人達によると、京都に攘夷の意志のあらうとは思はれない。その意志がなくて攘夷の防禦を誓ひ、國内人心の一致を説くのは、これ人を欺き自らをも欺くものだといふのである。宮の降嫁は、公武の結婚といふよりも、むしろ幕府が政略の爲にする結婚だといふのである。幕府が公武合體の態度を示すために、帝に供御の資を獻じ、親王や公卿に贈金したことも、反つて反對者の心を刺激した。

『欺瞞だ。欺瞞だ。』

この聲は、どんな形になつて、どんなところに飛び出すかも知れなかつた。西は大津から東は板橋まで、宮の前後を警衛するもの十二藩、道中筋の道固めをするもの二十九藩――こんな大袈裟な警衛の網が張られることになつた。美濃の鵜飼から信州本山までの間は尾州藩、本山から下諏訪までの間を松平丹波守、下諏訪から和田までの間を諏訪因幡守の道固めといふ風に。

十月の十日頃には、尾州の竹腰山城守が江戸表から出發して來て、本山宿の方面から順に木曾路の道橋を見分し、和宮の御旅館や御小休み所に宛てらるべき各本陣なぞをも見分した。ちやうど馬籠では、吉左衛門も京都の方へ出掛けた留守の時で、半藏が父に代つてこの一行を迎へた。半藏は年寄役金兵衛の附添ひで、問屋九太夫の家に一行を案内した。峠へはもう十月らしい小雨が來る。私事ながら半藏は九太夫と言ひ爭つた會所の晩のことを思ひ出し、父が名代の勤めも辛いことを知つた。

『伊之助さん、御繼立ての御用米が尾州から四十八俵届きました。これは君のお父さん(金兵衛)に預かつて頂きたい。』

半藏が隣家の伊之助と共に街道に出て奔走する頃には、かねて待ち受けてゐた和宮御用の送り荷が順に到着するやうに

なつた。この送り荷を尾州藩の扱ひで、奥筋の御泊り宿へ送りつけるもの、その他諸色が澤山な數に上つた。日によつては三留野泊りの人足九百人、外に妻籠泊りの人足八百人が、これらの荷物について西からやつて來た。

「壽平次さんも、妻籠の方で眼を廻してゐるだらうなあ。」

それを思ふ半藏は、一方に美濃中津川の方で働いてゐる友人の香藏を思ひ、この際京都から歸つて來てゐる景藏を思ひ、その話をよく伊之助にもした。馬籠では峠村の女馬まで狩り出して、毎日のやうにやつて來る送り荷の繼立てをした。峠村の利三郎は牛行司ではあるが、かういふ時の周旋にはなくてならない人だつた。世話好きな金兵衛はもとより、問屋の九太夫、年寄役の儀助、同役の新七、同じく與次衛門、それらの長老達から、百姓總代の組頭庄兵衛まで、殆んど村中總がかりで事に當つた。その時になつて見ると、金兵衛の養子伊之助といひ、九太夫の子息九郎兵衛といひ、庄兵衛の子息庄助といひ、實際に働けるものは最早若手の方に多かつた。

十月の二十日は和宮が東下の途に就かれるといふ日である。まだ吉左衛門は村へ歸つて來ない。半藏は家のものと一緒に父のことを案じ暮した。最早宮の一行が江州草津まで動いたといふ二十二日の明け方になつて、吉左衛門は夜通し早駕籠を急がせて來た。

京都から名古屋へ廻つて來たといふ父が途中の見聞を語るだけでも、半藏には多くの人の動きを想像するに十分だつた。宮が出發の日には、帝にも御忍びで桂の御所を出て、宮の旅裝を御覧になつたといふ。

「時に、送り荷はどうなつた。」

といふ父の無事な顏を眺めて、半藏は尾州から來る荷物の莫大なことを告げた。それが既に十一日もこの街道に續いてゐることを告げた。木曾の王瀧、西野、末川の邊鄙な村々、向ひ郡の附知村あたりからも人足を繰り上げて、繼立ての困難を凌いでゐることを告げた。

道路の改築もその翌日から始まつた。半蔵が家の表から二尺通りの石垣を引込め、石垣を築き直させることに定まつて進んだ。道路は二間にして、道幅をすべて二間見通しといふことに改められた。石垣は家毎に取り崩された。この混雑の後には、新通行當日の大釜の用意とか、膳飯の準備とかが續いた。半藏の家でも村方中で取り込んでゐるが、それでも相應な支度を引受け、上の伏見屋なぞでは百人前の膳飯を引受けた。

やがて道中奉行が中津川泊りで、美濃の方面から下つて來た。一切の準備は整つたかと尋ね顔な奉行の視察は、次第に宮の一行の近づいたことを思はせる。順路の日割によると、二十七日、鵜沼宿御晝食、太田宿御泊りとある。馬籠へは行列拜見の客が山口村からも飯田方面からも入り込んで來て、いづれも宮の一行を待ち受けた。

そこへ先驅だ。二十日に京都を出發して來た先驅の人々は、八日目にはもう落合宿から美濃境の十曲峠を越して、馬籠峠の上に着いた。隨行する人々の中には、萬福寺に足を休めて行くものが百二十人もある。先驅の通行は五つ半時であつた。奥筋へ行く千人あまりの尾州の人足がその後に續いて、群集の中を通つた。それを見ると、伊那から來てゐる助郷の中には腕をさすつて、是非とも御輿をかつぎたいといふものが出て來る。宮も大變な人氣だ。半藏は父と同じやうに、麻の社袮をつけ、袴の股立ちを取つて、親子してその間を奔走した。

「姫君さまの御輿なら、俺も一ト肩入れさせて貰ひたいな。」

これも篤志家の一人の聲だつた。

翌日は和宮が中津川御泊りの日取りである。その日は雨になつて、夜中からひどく降り出した。しかしその大雨の中でも、最早道固めの尾州の家中が續々馬籠へ繰り込んで來るやうになつたので、吉左衞門も半藏も全く一晩中眠らなかつた。

いよ〳〵馬籠御通行といふ日が來た。本陣の假住居の方では、おまんが孫の側に眼をさますと、半藏も父も徹夜でいそがしがつて、殆んど家へは寄りつかない。娵のお民は、と見ると、この人は肩で息をして、若い母らしい前垂なぞに最早

重そうなからだを隠さうとしてゐる。

おまんは佐吉を呼んで、孫のお粂をおぶはせ、村はづれに宮を迎へさせることにした。そこへ來た新宅のお喜佐（おまんの實の娘、半蔵の異母妹）には宗太をつけて、これも家の下女達と一緒にやることにした。

「粂さま、お出。」と佐吉はお粂を背中にのせて、その顔をおまんに見せながら、「これで粂さまも、今日あつたことを――ずつと大きくなるまで――覺えてゐるさつせるずらか。」

「なにしろ、六つぢやねえ。」

「さうだらうなし。覺えてはゐさつせまいなし。」

「さうばかりでもないよ」とお喜佐は二人の話を引取つて言つた。「この兒もこれで、夢のやうには覺えてゐるだらうよ。わたしだつて、五つの歳のことをかすかに覺えてゐるもの。」

「ほんとに、けふは生憎な雨だことよ。」とおまんは言つた。「わたしもお迎へしたいは山々だが、お民がこんなおや、どうしようもない。わたしたち二人はお留守しますよ。」

佐吉はお粂を、お喜佐は宗太をまもりながら、行列拜見の人々が集まる村はづれの石屋の坂あたりまで行つた。なにしろ多勢の御通行で、佐吉等は吉左衛門や半蔵の働いてゐる姿をどこにも見出すことが出來なかつた。それに、御通行筋は公私の領分の差別なく、旅館の前後里程三日路の旅人の通行を禁止するほどの警戒振りだ。

九つ半時に、姫君を載せた御輿は軍旅の如きいでたちの面々に前後を護られながら、雨中の街道を通つた。厳めしい鐵砲、鑓、馬簾の陣立は、殆んど戰時に異ならなかつた。供奉の同勢はいづれも陣笠。腰辨當で、供男一人づゝ連れながら、その後に随つた。中山大納言、菊亭中納言、千種少將（有文）、岩倉少將（具視）、その他宰相の典侍、命婦能登などが供奉の人々の中にあつた。京都の町奉行關出雲守が御輿の先を警護し、御迎へとして江戸から上京した若年寄加納遠江守、そ

れに老女等も御供をした。これらの行列が動いて行つた時は、馬籠の宿場も暫くなるほどで、その日の夜に入るまで街道に人の動きの絶えることもなかつた。

御通行の翌日、吉左衛門は三留野の御継ぎ所の方へ行く尾州の竹腰山城守を見送つた後で、いろ〳〵後仕末をするため會所の内にある宿役人の詰め所に來た。吉左衛門はそこに來る人達をねぎらふばかりでなく、自分で自分に言ふやうに、

「御苦勞、御苦勞」を繰り返した。

「いや、御苦勞、御苦勞。」

連日の過勞に加へて、その日も朝から雨だ。一同は疲れて、一人として行儀よくしてゐるものもない。そこには金兵衛も來てゐて、長い街道の世話を思ひ出したやうに、

『吉左衛門さんは御存知だが、わたしたちが覺えてから大きな御通行といふものは、この街道に三度ありましたよ。一度は水戸の姫君さまの御輿入れの時。一度は尾州の先の殿様が江戸でお亡くなりになつて、その御遺骸がこの街道を通つた時。今一度は例の黑船騒ぎで、交易を許すか許さないかの大評定で、尾州の殿様(徳川慶勝)の御出府の時。あの先の殿様の時は、木曾谷中から寄せた七百三十人の人足でも手が足りなくて、伊那の助郷が千人あまりも出ました。諸方から集めた馬の數が二百二十匹さ。』

『金兵衛さんはなか〳〵覺えがいゝ。』と疊の上に頬杖つきながら言ふものがある。

『まあ、お聞きなさい。今の殿様が江戸へ御出府の時は、木曾寄せの人足が七百三十人、伊那の助郷が千七百七十人、この人數を合はせると二千五百人からの人足が出ましたぜ。あの時、馬籠の宿場に集まつた馬の數が百八十匹だつたと思ふ。

あれほどの御通行でも和宮さまの場合とは到底比べものにならない。今度のやうな大きな御通行は、わたしは古老の話にも聞いたことがない。』

『どうです、金兵衛さん、これこそ前代未聞でせう。』

と混ぜ返すものがある。金兵衛は首を振つて、

『いや、前代未聞どころか、この世初まつて以來の大御通行だ。』

聞いてゐるものは皆笑つた。

いつの間にか吉左衛門は高鼾だ。彼はその部屋の片隅に横になつて、まるで死んだやうになつてしまつた。

その時になつて見ると、美濃路から木曾へかけての御繼ぎ所で殆んど滿足なところはなかつた。會所といふ會所は、あるひは損じ、あるひは破れた。これは道中奉行所の役人も、尾州方の役人も、ひとしく目撃したところである。中津川、三留野の兩宿に澤山な死傷者も出來た。街道には、途中で行倒れになつた人足の死體も多く發見された。

御通行後の二日目は、和宮の一行も福島、薮原を過ぎ、鳥居峠を越へ、奈良井宿御小休み、贄川宿御晝食、本山宿御泊りの日取である。半藏と伊之助の二人は連れ立つて、その日三留野の御繼ぎ所の方から馬籠へ引き取つて來た。伊之助は伊那助郷の擔當役、半藏も父の名代として、いろ／＼と後仕末をして來た。ちやうど吉左衛門は上の伏見屋に老友金兵衛を訪ねに行つてゐて、季節柄の淡雪豆腐で二人茶漬を食ひながら、話し込んでゐるところだつた。そこへ半藏と伊之助とが歸つて來た。

その時だ。伊之助は聲を潛めながら、木曾の下四宿から京都方の役人への祝儀として、先方の求めにより三百二十兩の金を差し出したことを語つた。祝儀金とは名ばかり、これはいかにも無念千萬のことであると言つて、御繼ぎ所に來てゐた福島方の役人衆までが口唇を噛んだことを語つた。伊那助郷の交渉をはじめ、越後、越中の人足の世話から、和宮を迎

へるまでの各宿の人々の心勞と盡力とを見る點があつたが、いかに寛大な京都方でも、こんな新しい手を用ゐはしなかつた筈であると語つた。

『御通行のどさくさに紛れて、祝儀金を捲き揚げて行くとは――實に、言語に絶した遣り方だ。』

と言つて、金兵衛は吉左衛門と顔を見合せた。

若者への關心にかへては、金兵衛とても吉左衛門に劣らなかつた。黒船來訪以來はおろか、それ以前から假令いかに封度社會の墮落と不正とを痛感するやうな時でも、それを若者の目や耳からは隠さう隠さうとして來たのも、この二人の村の長老だ。庄屋風情、もしくは年寄役風情として、この親達が日頃の願ひとして來たことは、徳川世襲の傳統を重んじ、どこまでも權威を權威とし、それを子の前には神聖なものとして、この世をあるがまゝに讓つて行きたかつたのである。伊之助が語つて見せたところによると、かうした役人の腐敗沙汰にかけては、京都方も江戸方もすこしも異なるところのないことを示してゐた。二人の親達は最早隠さうとして隠し切れなかつた。

六日目になると、和宮の一行は和田宿の近くまで行つた頃で、道固めとして本山まで御見送りをした尾州の家中衆も、思ひ〳〵に引き返して來るやうになつた。奥筋まで御供をした人足達の中にも、ぽつ〳〵歸路に就くものがある。七日目には、最早この街道に初雪を見た。

人一人動いた後は不思議なもので、年も若く繊弱い和宮のやうな女性でありながらも、殊に宮中の奥深く育てられた金枝玉葉の身で、上方とは全く風俗を異にし習慣を異にする關東の武家へ縁付いて行かれた後には、多くの人心を動かすものが殘つた。遠く江戸城の方には、宮が母として仕ふべき天璋院のやうな評判なやかましやも待つてゐた。十一月十五日

には宮は既に江戸に到着された筈である。あの薩摩生れの剛氣で男勝りな天璋院にも既に對面せられた筈である。胡地に赴いた王昭君の運命にもまさる激しさだとして、宮を憐むものがある。その犠牲的な心の女らしさを感ずるものもある。宮が二十五日の木曾街道の長旅は、徳川家のために計る老中安藤對馬等の政略を助けたといふよりも、むしろ皇室をあらはす方に役立つた。

長いこと武家に壓せられて來た皇室が衰微の裡にも絕えることなく、また回復の機運に向つて來たことは、半藏にとつて奇蹟の中の奇蹟とも思はれることであつた。この島國の位置が位置で、假令内には戰亂爭鬪の殺ひの多い時代があつたにもせよ、外に向つて事を構へる場合の割合に少なかつた東洋の果に存在したことは、その日まで皇室の平靜を保ち得た原因の一つであらうと言ふものもある。過去の皇室の衰へ方と言へば、諸國に荒廢した山陵を歴訪して勤王の志を起したといふ蒲生君平や、京都のさびしい御所を拜して哭いたといふ高山彦九郎のやうな人物のあらはれて來たのでも分る。應仁亂後の京都は亂前よりも一層さびれ、公家の生活は苦しくなり、すこし大袈裟かも知れないが三條の大橋から御所の燈火が見えた時代もあつたと言はるゝ程である。これほどの皇室が、將軍家に對抗するやうな勢で盛り返して來たことは、半藏に取つて大きな驚きでもあつた。

時代は混沌として來た。彦根と水戸とが互に傷づいてからは、薩州のやうな雄藩の擡頭となつた。關が原の敗戰以來、隱忍に隱忍を續けて來た長州藩がこの形勢を默つて視てゐる筈もない。しかしそれらの雄藩でも、京都にある帝を中心に仰ぐことなしに、人の心を收めることは出來なかつた。天朝の威をも畏れず、各藩の意見のためにも動かされず、斷然として外國に通商を許したといふあの井伊大老ですら、幕府の一存を盾にして單獨な行動に出ることは出來なかつた。後には上奏の手續きを執つた。井伊大老ですらその通りだ。二藩の有志等はいづれも爭つて京都に入り、あるひは藩主の密書を致したり、あるひは御劍を奉獻したりした。

一庄屋の子としての半藏から見ると、これは理由のないことでもない。水戸の『大日本史』に、尾張の『類聚日本紀』に、あるひは頼氏の『日本外史』に、大義名分を正さうとした人達の播いた種が深くもこの國の人々の心に萌して來た南朝の回想、芳野の懐古、楠氏の崇拜——いづれも人の心の向ふところを語つてゐないものはなかつた。さういふ中にあつて、平田篤胤のやうな先覺者をはじめ、一門の國學者がだんだん帝を求めるやうになつて行つたのは、強い綜合の結果であつたが……

年も文久二年と改まる頃には、半藏は既に新築の出來た本陣の家の方に引き移つてゐた。吉左衛門やおまんは味噌納屋の二階から、お民は佗しい土藏の假住居から、いづれも新しい木の香のする建物の方に移つて來た。馬籠の火災後しばらく落合の家の方に歸つてゐた半藏が弟子の勝重なぞも、またやつて來る。新築の家は、本陣らしい門構へから、部屋々々の間取りまで、火災以前の建て方によつたもので、會所は家の一部に取り込んだところまで似てゐる。表庭の隅に燒け殘つた一株の老松も到頭枯れてしまつたが、その跡に向いて建てられた店座敷が東南の日を受けるところまで似てゐる。

美濃境にある恵那山を最高の峯として御坂越の方に續く幾つかの山嶽は、この新築した家の南側の廊下から望まれる。半藏が子供の時分から好きなのも、この山々だ。さかんな崩雪の音はその廊下の位置から聽かれないまでも、高い山壁から谷まで白く降り埋める山々の雪を望むことは出來る。ある日も、半藏は恵那山の上の方の空に、美しい冬の朝の雲を見つけて、夜毎の沒落からまた朝紅の輝きにと變つて行くやうなあの太陽に比較すべきものを想像した。唯一人の帝、その人を措(お)いて時代を貫(つらぬ)く朝日の勢に譬ふべきものは他に見當らなかつた。

鰯の頭、柊(ひいらぎ)の葉は、山家に新年を迎へるものゝ一つとして、木戸口なぞに挿す。正月早々から半藏は父の名代として福

島の役所へ呼ばれ、木曾十一宿にある他の庄屋問屋と同じやうに金百兩の分配を受けて來た。この御下げ金は各宿救助の意味のものだ。

ちやうど家では二十日正月を兼ねて、暮に生れた男の兒のために小豆粥なぞを祝つてゐた。お粂、宗太、それから今度生れた兒には正己といふ名がついて、吉左衛門夫婦も最早三人の孫のおぢいさん、おばあさんである。お民はまだ産後の床に就いてゐたが、そこへ半藏が福島から引き取つて來た。和宮の御通行前に、伊那助郷總代へ約束した手當の金子も、追つて下付せらるゝ筈であることなぞを父に告げた。

「助郷のことは、これからが問題だぞ。一度手當を出す例を造つたら、今迄のやうな御奉公ぢや百姓が承知しまい。」

と吉左衛門は炬燵の上に手を置きながら、半藏に言つて見せた。

その日半藏は御下げ金のことで金兵衛の智慧を借りて、御通行の日から殘つた諸拂ひをした。やがてその後仕末も出來た頃に、人の口から口へと傳はつて來る江戸の噂が坂下門外の變事を傳へた。

決死の壯士六人、御濠ばたの柳の樹のかげに隱れてゐたのは正月十五日とあるから、山家のことで言へば左義長の濟む頃であるが、それらの壯士が老中安藤對馬の登城を待ち受けて、先づ銃で乘物を狙撃した。それが當らなかつたので、一人の壯士が馳せ寄つて、刀を拔いて駕籠を横から突き刺した。安藤對馬は運強く、重傷を被りながらも坂下門内に駈け入つて、僅かに身をもつて難をまぬかれた。この要撃の光景をまるで見て來た事のやうに言ひ傳へるものがある。

「又か。」

といふ吉左衛門にも、思はず父と顏を見合せる半藏の胸にも、櫻田事變當時のことが來た。

刺客はいづれも斬奸趣意書なるものを懐にしてゐたといふ。これは幕府の手で祕密に葬られやうとしたが、六人の外に長州屋敷へ飛び込んで自刄した壯士の懐から出て來たもので明かにされ、それからそれへと傳へられるやうになつた。それ

には申年の三月に赤心報國の徒が井伊大老を殺害に及んだことは毛頭も幕府に對し異心を挾んだのではないといふことから書き初めて、彼等の態度を明かにしてあつたといふ。彼等から見れば、井伊大老は夷狄を恐怖する心から慷慨忠直の義士を憎み、おのれの威力を示さうがために奸謀を廻らし、天朝をも侮る神州の罪人である、さういふ奸臣を倒したなら自然と幕府においても悔いる心が出來て、これからは天朝を尊び夷狄を憎み、國家の安危と人心の向背にも注意せらるゝであらうとの一念から、井伊大老を目がけたものはいづれも身命を投げ捨て、殺害に及んだのである、ところがその後になつても幕府には一向に悔心の模樣は見えない、ますます暴政のつのるやうに成つて行つたのは、幕府役人一同の罪ではあるが、つまりは老中安藤對馬こそその第一の罪魁であるといふ意味のことが書いてあつたといふ。その趣意書には、老中の罪狀をも擧げて、皇妹和宮が結婚のことも、おもてむきは天朝より下し置かれたやうに取り繕ひ、公武合體の姿を示しながら、實は奸謀と威力とをもつて強奪し奉つたも同樣である、これは畢竟皇妹を人質にして外國交易の勅諚を強請する手段であり、もしそれも叶はなかつたら帝の御讓位をすら謀らうとする心底であつて、實に徳川將軍を不義に引き入れ、萬世の後までも惡逆の名を流させようとする行爲である、北條足利にもまさる逆謀といふの外はない、これには切齒痛憤、言ふべき言葉もないといふ意味のことが書いてあつたといふ。その中には又、外夷取扱ひのことを擧げて、安藤老中は何事も彼等の言ふところに隨ひ、日本沿海の測量を許し、この國の形勢を彼等に教へ、江戸第一の要地ともいふべき品川御殿山を殘らず彼等に借し渡し、あまつさへ外夷の應接には骨肉も同樣な親切を見せながら、自國にある忠義憂憤の者は反つて仇敵のやうに忌み嫌ひ、國賊といふにも餘りあるといふやうな意味のことが書いてあつたといふ。

しかし決死の壯士が書き遺したものは、たゞそれだけの意味にとゞまらなかつた。その中には「明日」への不安が、いろいろと書き籠めてあつたともいふ。もし今日のまゝで弊政を改革することもなかつたら、天下の大小名はおのおの幕府を見放して、自己の國のみを固めるやうに成つて行くであらう、外夷の取扱ひにさへ手に餘る折柄、これをどう處置するつ

もりであらうといふ意味のことも書いてあり、萬一攘夷を名として旗を擧げるやうな大名が出て來たら、それこそ實に危急の時である、幕府では皇國の風俗といふものを忘れてはならぬ、君臣上下の大義を辨へねばならぬ、かりそめにも天朝の叡慮に背くやうなところが見えたら、忠臣義士の輩は一人も幕府のために身命を拋つものはあるまいといふ意味のことも書き遺してあつたといふ。

これらの刺客の多くが水戸人であることも分つて來た。いづれも三十歳前後の男ざかりで、中には十九歳の青年がこの要擊に加はつてゐたことも分つて來た。安藤對馬の災難は不思議にもその傷が輕くて濟んだが、多くの人の同情は生命拾ひをした老中よりも、現場に斃れた青年達の上に集まる。しかし、その人の傷ついた後になつて見ると、一方には世間の誤解や無根の流言がこの悲劇を生む基であつたと言つて、こんなに思ひ詰めた壯士等の暴擧を惜むと言ひ出したものもあつた。安藤對馬その人を失つたらあれほど外交の事に當り得るものを他に見出せない、亞米利加のハリスにせよ、英吉利のアールコックにせよ、彼等に接して滯ることなく、屈することもなく、外國公使等の專橫を挫いて、凛然とした態度を持ち續けたことにかけては、老中の右に出るものはなかつたと言ひ出したものもあつた。

幕府には既に恃るべき人と、恃るべき實とがない。井伊大老は斃れ、岩瀨肥後は咯血して死し、安藤老中までも傷ついた。四方の侮りが競ふやうに起つて來て、儒者は經典の立ち場から、武士劍客は士道の立ち場から、その他隱者、神職、和學者、僧侶なその思ひ〳〵に勝手な說を立てるものがあつても、幕府ではそれを制することも出來ないやうになつて來た。

この中で、露國の船將が對馬尾崎浦に上陸し住屯してゐるとの報知すら傳はつた。港は鎖せ、歐羅巴人は打ち攘へ、その排外の風が到るところを吹きまくるばかりであつた。

一人の旅人が京都の方面から美濃の中津川まで急いで來た。

この旅人は、近くまで江戸櫻田邸にある長州の學習館の用掛をしてゐた男ざかりの侍である。かねて長州と水戸との提携を實現したいと思ひ立ち、幕府の嫌疑を避くるため品川沖合の位置を選び、長州の軍艦丙辰丸の艦長と共に水戸の有志と會見した閲歴を持つ人である。坂下門外の事變にも多少の關係があつて、水戸の有志から安藤老中要撃の相談を持ちかけられたこともあつたが、後にはその暴擧に對して危惧の念を抱き、次第に手を引いたといふ閲歴をも持つ人である。

中津川の本陣では、半藏が年上の友人景藏も留守の頃であつた。景藏は平田門人の一人として、京都に出て國事に奔走してゐる頃であつたからで。この旅人は惠那山を東に望むことの出來るやうな中津川の町をよろこび、人の注意を避くるにいゝ位置にある景藏の留守宅を選んで、江戸麻布の長州屋敷から木曾街道經由で上京の途にある藩主(毛利慶親)をそこに待ち受けてゐた。その目的は、京都の屋敷にある長藩世子(定廣)の内命を受けて、京都の形勢の激變したことを藩主に報じ、かねての藩論なる公武合體、航海遠略の到底實行せらるべくもないことを進言するためであつた。それよりは從來の方針を一變し、大いに破約攘夷を唱ふべきことを藩主に說き勸めるためであつた。雄藩擡頭の時機が到つたこと、は長いことその機會を待つてゐた長州人士を雀躍させたからで。

旅にある藩主はそれほど京都の形勢が激變したとは知らない。まして、そんな旅人が世子の内命を帶びて、中津川に自分を待つとは知らない。さきに幕府への建白の結果として、公武間周旋の依賴を幕府から受け、いよ〳〵正式にその周旋を試みようとして江戸を出發して來たのであつた。この大名は、日頃の競爭者で薩摩に名高い中將齊彬の弟にあたる島津久光が既にその勢力を京都の方に扶植し始めたことを知り、更に勅使左衞門督大原重德を奉じて東下して來たほど、薩摩人の活躍を想像しながら、その年の六月中旬には諏訪に入つた。あだかも麻疹流行の頃である。一行は諏訪に二日逗留し、同勢四百人ほどを後に殘して置いて、三留野泊りで木曾路を上つて來た。馬籠本陣の前まで來ると、そこの門前には諸大

名通行の折の定例のやうに、既に用意した札の揭げてあるのを見た。

　　松平大膳太夫様　御休所

松平大膳太夫とあるは、この大名のことで、長門國三十六萬九千石の領主を意味する。

その時、半藏は出て、一行の中の用人に挨拶した。

『わたしは吉左衛門の伜でございます。父はこの四月から中風に罹りまして、今だに床の上に臥たり起きたりして居ります。御晝は申し付けてございますが、何か他に御用もありましたら、わたしが承りませう。』

『御主人は御病氣か。それは御大事に。こゝから中津川までは何里程ありませう。』

『三里と申して居ります。こゝの峠からは下りでございますから、さうお骨は折れません。』

この半藏の言葉を聞くと、用人は本陣の門の内外を警衛する人達に向つて、

『諸君、中津川まではもう三里だそうですよ。こゝで晝食をやつて下さい。』

と呼んだ。

馬籠の宿ではその日より十日程前に、彦根藩の幼主が江戸出府を送つたばかりの時であつた。十六歳の殿様、家老、用人、その時の同勢はおびたゞしい人數で、行列も立派ではあつたが、最早先代井伊掃部頭が彦根の城主としてよくこの木曾路を往來した頃のやうな氣勢は揚らない。そこへ行くと、次第に頭を持ち上げて來た長州人はいちじるしい對照を見せる。千段巻の柄のついた黒鳥毛の鎗から、永樂通寶の紋じるしまでが、燃えてゐるやうに見える。

その日、半藏は父の名代として、隣家の伊之助や問屋の九郎兵衛と共に、一行を宿はづれの石屋の坂あたりまで見送り、そこから家に引返して來て、父の部屋を覗きに行つた。病床から半ば身を起しかけてゐる吉左衛門は山の中へ來る六月の暑さにも疲れ勝ちであつた。半藏は一度倒れたこの父が回復期に向ひつゝあるといふだけにもやゝ胸を撫でおろして、成

ろべく頭を悩ませるやうなことは父の耳に入れまいとした。京都の方にある景蔵からは、容易ならぬ形勢を半藏のところへ報じて來た。伏見寺田屋の變をも知らせて來た。王政復古と幕府討伐の策を立て、八人の壯士があの伏見の旅館で斃れたことをも知らせて來た。公武間の周旋をもつて任ずる千餘人の薩摩の精兵が藩主に引率されて來た時は、京都の町々はあだかも戒嚴令の下にあつたことをも知らせて來た。しかし半藏は何事も父の耳に入れなかつた。夕方に、彼は雪隠へ用を達しに行つて、南側の廊下を通つた。山口藩主がその日の泊りと聞く中津川の町の方は早く暮れて、遠い夕日の反射が西の空から惠那山の大きな傾斜に映るのを見た。

病後の吉左衛門には、まだ裏の二階へ行つて靜養するほどの力がない。あの先代半六が隱居所となつてゐた味噌納屋の二階への梯子段を昇つたり降りたりするには、足許が覺束なかつた。

この父は四月の發病以來、ずつと寛ぎの間に臥たり起きたりしてゐる。その部屋は風呂場に近い。家のものが入浴を勸めるには都合が好い。一方は本陣の囲爐裏ばたや勝手に續いてゐる。みんなで看護するにも都合が好い。そのかはり朝晩に用談なぞを持ち込む人達が出たり入つたりして、半藏としてはいつまでも父の寢床をその部屋に敷いて置くことを好まなかつた。どうかすると頭を冷せの、足を溫めろのといふ父を見る度に、半藏は悲しがつた。さびしい病後のつれ〴〵から、父は半藏に向つていろ〳〵耳にしたことの説明を求める。六十四歳の晩年になつてこんな思ひがけない中風に罹つたといふ風に。まだ退役願ひも聞き届けられない馬籠の驛長の身で、さう〳〵半藏任せにして置かれないといふ風にも。半藏は京都や江戸にある平田同門の人達からいろ〳〵な報告を受けて、その度に山の中に辛抱してはゐられぬやうな心持にもなるが、また思ひ返しては本陣問屋庄屋の父の代りを勤めた。

中津川の會議が開かれて、長藩の主從が從來の方針を一變し、吉田松陰以來の航海遠略から破約攘夷へと大きく方向の轉換を試み始めたのも、それから藩主の上京となつて、公卿を訪ひ朝廷の御機嫌を伺ひ、すでに勅使を關東に遣はされてゐるから、薩藩と共に叡慮の貫徹に盡力せよとの御沙汰を賜つたのも、六月の二十日から七月へかけてのことであつた。薩藩と共に輦下警衞の任に當ることにかけては、京都の屋敷にある世子定廣がすでにその朝命を拜してゐた。薩長二藩のこれらの一大飛躍は他藩の注意を惹かずには置かない。漸く危惧の念を抱き始めたものもある。強い刺戟を受けたものもある。かういふ中にあつて、薩長二藩の京都手入れから最も強い刺戟を受けたものは、言ふまでもなく幕府側にある人達であらねばならない。從來幕府は事ある毎に京都に向つて干渉するのを常とした。今度勅使の下向を江戸に迎へて見ると、かねて和宮降嫁の折に堅く約束した攘夷防禦のことが勅旨の第一にあり、併せて將軍の上洛、政治の改革にも及んでゐて、幕府としては全く轉倒した位置に立たせられた。干渉は實に京都から來た。しかも數百名の薩摩隼人を引率する島津久光を背景にして迫つて來た。この干渉は幕府にある上のものにも下のものにも強い衝動を與へた。その衝動は、多年の情實と弊害とを掃ひのけることを教へた。もつと政治は明るくしなければ駄目だといふことを教へた。

時代はおそろしい勢で急轉しかけて來た。曾て岩瀬肥後が井伊大老と爭つて、政治生涯を賭してまで擁立しようとした一橋慶喜は將軍の後見に、越前藩主松平春嶽は政事總裁の職に就くやうになつた。これまで幕府にあつて兎角の評判のあつた安藤對馬、及びその同作者なる久世大和の二人は退却を餘儀なくされた。天朝に對する過去の非禮を陳謝し、協調の誠意を示すといふ意味で、安藤久世の三人は隱居急度愼みの罰の薄暗いところへ追ひやられたばかりでなく、あれほどの大獄を起して一代を壓倒した井伊大老ですら追罰を免れなかつた。およそ安政、萬延の頃に井伊大老を手本とし、その人の家の子郎黨として出世した諸有司の多くは政治の舞臺から退却し始めた。あるものは封一萬石を削られ、あるものは祿二千石を削られた。あるものは又、隱居、蟄居、永蟄居、差扣へといふ風に。

この周圍の空氣の中で、半藏は諸街道宿驛の上にまでおよばれて來る何等かの改變を待ち受けながら、父が健康の回復を祈つてゐた。發病後は父も日頃好きな酒をばつたり止め、煙草もへらし、僅かに俳諧や將棋の本などをあけて朝夕の心やりとしてゐる。何かこの父を慰めるものはないか、と半藏が思つてゐるところへ、ちやうど人足四人持ちで、大きな籠を本陣の門内へかつぎ入れた宰領があつた。

宰領は半藏の前に立つて言つた。

『旦那。これは今度、公儀から越前樣へ御拜領になつた綿羊といふものです。めづらしい獸です。わたしたちはこれを送り屆けにまゐる途中ですが、しばらく御宅の庭で休ませて頂きたい。』

江戸の方からそこへかつがれて來たのは、三疋の綿羊だ。こんな木曾山の中へは初めて來たものだ。早速半藏はお民を呼んで、表玄關の廣い板の間に座蒲團を敷かせ、そこに父の席をつくつた。

『みんな、お出。』

とおまんも孫達を呼んだ。

『越前樣の御拜領かい。』と言ひながら、吉左衞門は奧の方から來てそこへ靜かに座つた。『越前樣といへば、五月の十一日にこの街道をお通りになつたぢやないか。俺は寢てゐてお目にも掛らなかつたが、今度政事總裁職になつたのもあの御大名だね。』

ちよつとしたことにも吉左衞門はそれをこの街道に結びつけて、諸大名の動きを讀まうとする。

『あなたはそれだから、いけない。』とおまんは言つた。『病氣する時には病氣するがいゝなんて自分で言つてゐながら、さう氣を遣ふからいけない。まあ、このやさしい羊の眼を御覧なさい。』

街道では麻疹の神を送つた後で、おちこちに病人や死亡者を出した流行病の煩ひから、みんな漸く一ト息ついたところ

だ。その年の澁柿の出來の時は出ても、京都と江戸の激しい爭ひなぞはどこにあるかといふほど穩かな日もさして來てゐる。宰領の連れて來た三疋の綿羊が籠の中で顏を寄せ、もぐ〳〵鼻の先を動かしてゐるのを見ると、動物の好きなお粂や宗太は大騷ぎだ。持病の咳で引き籠り勝ちな金兵衞まで上の伏見屋からわざ〳〵見に出掛けて來て、いつの間にか本陣の門前には多勢の人だかりがした。

『金兵衞さん、かういふめづらしい羊が日本に渡つて來るやうになつたかと思ふと、世の中も變る筈ですね。わたしは生れて初めてこんな獸を見ます。』

と吉左衞門は言つて、最早何となく秋めいた街道の空を心深げに眺めてゐた。

『半藏、まあ見て呉れよ。俺の足はかういふものだよ。』

と言つて、病み衰へた右の足を半藏の前に出して見せる頃は、吉左衞門もめつきり元氣づいた。早く食事を濟ました夕方のことだ。附近の村々へは秋の祭禮の季節も來てゐた。

『お父さんが病氣してから、もう百四十日の餘になりますものね。』

半藏は試みに、自分の前にさし出された父の足を撫でて見た。健脚でこの街道を奔走した頃の父の筋肉は何處へ行つたかといふやうになつた。發病の當時、どつと床に就いたぎり、五十日あまりも安靜にしてゐた揚句の人だ。堅く隆起してゐたやうな足の『ふくらつぱみ』も今は子供のそれのやうに柔い。

『ひどいものぢやないか。』と吉左衞門は自分の足を仕舞ひながら言つた。『人が中氣すると、右か左か、どつちかをやられると聞いてるが、俺は右の方をやられた。さう言へば、俺は耳まで右の方が遠くなつたやうだぞ。』と笑つて、氣を變へて、

「しかし、けふはめづらしく好い氣持だ。俺は金兵衛さんのところへお風呂でも貰ひに行つて來よう。」

これほど父の元氣づいたことは、ひどく半藏をよろこばせた。

『お父さん、わたしも一緒に行きませう。』

と彼も起ち上つた。

この親子の胸には、江戸の道中奉行所の方から來た達しのことが往來してゐた。かねて噂には上つてゐたが、いよ〳〵諸大名が參勤交代制度の變革も事實となつて來た。これには幕府の諸有司の中にも反對するものが多かつたといふが、聰明で物に執着することの少い一橋慶喜と、その相談相手なる松平春嶽とが、惜氣もなくこの英斷に出た。言ふまでもなく、參勤交代の制度は幕府が諸藩を統御するための重大な政策である。これが變革されるといふことには、深い時代の要求がなくては叶はない。この一大改革はもう長いこと上にある識者の間に考へられて來たことであらうが、しかし吉左衛門親子のやうに下から見上げるものに取つても、この改變を餘儀なくされるほどの幕府の衰へが眼についた。諸大名が實際の通行に役立つ御傳馬助鄕の聲に聽いて沿道の人民が苦痛とする公役を改めるか、多額な費用を要する參勤交代の制度を捨てるか、そのいづれかを選ばないかぎり、たゞ徳川政府の威光といふだけでは、諸國にある多くの百姓も最早動かなくなつて來た。

本陣の門を出る時、吉左衛門はそのことを半藏にきいた。

『お前は今度の御達しをよく讀んで見たかい。參勤交代が全廢といふ譯ではないんだね。』

『お父さん、全廢ぢやありません。諸大名は三年目毎に一度、御三家や溜詰は一と月づゝ江戸に居れとありますがね、奥方や若様は歸國してもいゝと言ふんですから、まあ殆んど骨抜きに近いやうなものでせう。』

夕方になると兎角疲れが出て引籠り勝ちな吉左衛門が、その晩のやうに上の伏見屋まで歩かうと言ひ出したことは、病

後初めての時と言つてもよかつた。この父は久し振りで家を出て見るといふ風で、しばらく門前にたゝずんでは、まだ耗れ切らない街道の空を眺めた。
『半藏、この街道はどうならう。』
『參勤交代がなくなつた後にですか。そりやお父さん、參勤交代はなくなつても、街道はなくなりませんよ。』
『まあ、金兵衞さんにも逢つて、話して見るわい。』
心配して附いて行く半藏に助けられながら、吉左衞門は坂になつた馬籠の町を非常に靜かに歩いた。右に問屋、蓬萊屋、左に伏見屋、桝田屋なその前後して新築の出來た家々が兩側に續いてゐる。その間の宿場らしい道を登つて行くと、親子二人のものはある石垣の側で向ふからやつて來る小前の百姓に逢つた。
百姓は吉左衞門の姿を見ると、いきなり自分の頰冠りしてゐる手拭を取つて、走り寄つた。
『大旦那、どちらへ。半藏さまも御一緒かなし。お前さまがこんなに村を出歩かせるのも、御病氣になつてから初めてだらずに。』
『あい。御蔭で、日にくいゝ方へ向いて來たよ。』
『まあ、俺もどのくらゐ心配したか知れずかなし。御病氣が御病氣だから、井戸の水で頭を冷すぐらゐは知れたものだと思つて、俺はお前さまのために惠那山までよく雪を取りに行つて來たこともある。』
吉左衞門から見れば、これらの小前のものはみんな自分の子供だつた。
そこまで行くと、上の伏見屋も近い。ちやうど金兵衞は山口村の祭禮狂言を見に二日泊りで出掛けて行つて、その日の午後に歸つて來たといふところだつた。
『おゝ、吉左衞門さんか。これはおめづらしい。』

と言つて、金兵衛は伜嫁のお玉と共によろこび迎へた。

金兵衛も吉左衛門と同じやうに、最早退役の日の近いことを知つてゐた。新築した伏見屋は養子伊之助に譲り、火災後ずつと上の伏見屋の方に殘つてゐて、晩年の支度に餘念もない。六十六歳の春を開いてから、中新田へ杉苗四百本、青野へ杉苗百本の植付けなぞを思ひ立つ人だ。

『お玉、お風呂を見てあげな。』

といふ金兵衛の聲を聞いて、半藏は薄暗い湯どのゝ方へ父を誘つた。病後の吉左衛門にとつて長湯は大の禁物だつた。半藏は自分でも丸はだかになつて、手ばしこく父の背中を流した。その不自由な手を洗ひ、衰へた足をも洗つた。

『お父さん、湯ざめがするといけませんよ。またこないだのやうなことがあると、大變ですよ。』

病後の父をいたはる半藏の心づかひも一通りではなかつた。

間もなく上の伏見屋の店座敷では、山家風な行燈を置いたところに主客のものが集まつて、夜咄にくつろいだ。

『金兵衛さん、わたしも命拾ひをしましたよ。』と吉左衛門は言つた。『一頃は、これで明日もあるかと思ひましてね、枕に就いたことがよくありましたよ。』

『さう言へば、あの和宮の御通行の時分から弱つていらしつた。』と金兵衛も茶なぞを勸めながら答へる。『吉左衛門さんはあんなに無理をなすつて、後でお弱りにならなければいゝがッて、お玉ともよくあの時分にお噂しましたよ。』

『もう大丈夫です。たゞ箒が持てないのと、箒が持てないのには——これには殆んど閉口です。』

『吉左衛門さんの庭掃除は有名だから。』

金兵衛は笑つた。そこへ伊之助も新築した家の方からやつて來る。一同の話は宿場の前途に關係の深い今度の參勤交代制度改革のことに落ちて行つた。

『助郷にも弱りました。』と言ひ出すは金兵衛だ。『和宮の御通行の時は、あれは特別の場合だなんて言つたつて、さうは時勢が許さない。一度手當を出す例を開いたら、もう助郷が承知しなくなつたさうですよ。』

『さういふことが當然起つて來ます。』と吉左衛門が言ふ。

『現に、』伊之助は二人の話を引き取つて『あの公家衆の御通行は四月の八日でしたから、まだこんな改革の御達しの出ない前です。あの時は大湫泊りで、助郷人足六百人の備へをしろと言ふんでせう。みんな雇錢でなけりや出て來やしません。』

『いくら公家衆でも、六百人の人足を出せば馬鹿々々しい。』と半藏は言つた。

『それもさうだ。』と金兵衛は言葉をつゞける。『あの公家衆の御通行には、差引、四兩二分三朱、村方の損になつたといふぢやありませんか。』

『兎に角、御通行はもつと簡略にしたい。』とまた半藏は言つた。『今度の御達しだつて、一切の人足を賃錢勤めにするところまで行かなければ、徹底した遣り方とは言へますまいがね、しかし參勤交代が廢されるだけでも百姓はどんなに助かるか知れません。いづれこんな改革は道中奉行へ相談のあつたことでせう。下から持ち上げる力も強いな。一番喜んでるのは諸國の御傳馬助郷でせう。今頃は地酒でも酌んで、祝盃を擧げてやしませんか。』

『金兵衛さん、君はこの改革をどう思ひます。今迄江戸の方に人質のやうになつてゐた諸大名の奥方や若樣が、御國許へ御歸りになると言ひますぜ。』

と吉左衛門が言ふと、舊い友達も首をひねつて、

『さあ、喜んでいゝのか、悲しんでいゝのか、わたしには解りません。――ただ、驚きます。』

その時になつて見ると、江戸から指して來る文久年度の改革には、ある悲壯な意志の下に動きはじめたあの大きな參勤交代のやうな幕府に取つて最も重大な政策が惜し氣もなく投げ出されたばかりでなく、大赦は行はれる、山陵は修復される、京都の方へ返していゝやうな舊い慣例はどし／＼廢された。幕府から任命してゐた皇居九門の警衛までも撤去された。およそ幕府の力に出來るやうなことは、松平春嶽を中心の人物にし山內容堂を相談役とする新內閣の手で行はれるやうになつた。

封建時代にあるものゝ近代化は、後世を待つまでもなく、既にその時に始まつて來た。松平春嶽、山內容堂、この二人はそれ／＼の立ち場にあり、領地の事情をも異にしてゐたが、時代の趨勢に着眼して早くから幕政改革の意見を抱いたことは似てゐた。その就職以前から幕府に對して同情と理解とを持つことにかけても似てゐた。水戶の御隱居、肥前の鍋島閑叟、薩摩の島津久光の諸公と共に、生前の岩瀨肥後から啓發せらるゝところの多かつたといふことも似てゐた。あの四十に手が屆くか屆かないかの若さで早くこの世を去つた岩瀨肥後の遺した開國の思想が、その人の死後になつてまた働き初めたといふことにも不思議はない。蕃書調所は洋書調所（開成所、後の帝國大學の前身）と改稱される。江戶の講武所に於ける弓術や犬追物なぞの稽古は廢されて、步兵、騎兵、砲兵の三兵が設けられる。井伊大老在職の當時に退けられた人材はまたそれ／＼の閑却された位置から身を起しつゝある。門閥と兵力とにすぐれた會津藩主松平容保は、京都守護職の重大な任務を帶びて、新たにその任地へと向ひつゝある。

時には、和蘭留學生派遣の噂が夢のやうに半藏の耳に入る。二度も火災を蒙つた江戶城建築の頃は、まだ井伊大老在職の日で、老中水野越前守が造り殘した數百萬兩の金銀の分銅はその時に費されたといはれ、公儀の御金倉はあれから全く底を拂つたと言はれる。それほど苦しい身代の遣繰りの中で、今度の新內閣が和蘭まで新智識を求めさせに遣るといふその思ひ切つた方針が、半藏を驚かした。

父、吉左衛門は家にゐて、例の寛ぎの間に籠つて、最早退役の日の支度なぞを始めてゐる。祖父半六は六十六歳まで宿役人を勤め、それから家督を讓つて隱居したが、父は六十四歳でそれをするといふ風に。半藏はこの父の樣子をちよつと覗いた後で、南側の長い廊下を步いて見た。和蘭留學生の噂を思ひながら、獨り言つて見た。

『黑船は殖えるばかりぢやないか知らん。』

到頭、半藏は父の前に呼ばれて、青山の家に傳はつた古い書類なぞを引き渡されるやうな日を迎へた。父の退役は最早時の問題であつたからで。

本陣、問屋、庄屋の三役を勤めるに必要な公用の記錄から、田畑家屋敷に關する反別、年貢、掟年貢なぞを記しつけた帳面の類までが否應なしに半藏の前に取り出された。吉左衛門は半藏に言ひつけて、古い箱につけてある革の紐を解かせた。人馬の公用を保證するために、京都の大舍人寮、江戶の道中奉行所をはじめ、その他全國諸藩から送つてよこしてある大小種々の印鑑がその中から出て來た。宿驛の合印だ。吉左衛門はまた半藏に言ひつけて、別の箱の紐を解かせた。その中には、遠く慶長享保年代からの御年貢皆濟目錄があり、代々持ち傳へても破損と散亂との憂ひがあるから、後の子孫のために一卷の軸とすると書き添へた先祖の遺筆も出て來た。

『これはお前の方へ渡す。』

父は半藏の方で言はうとすることを聞き入れようともしなかつた。親の讓るものは、子の受け取るべきもの。さう獨りできめて、いろ／＼な事務用の帳面や數十通の書付なぞをそこへ取り出した。村方の關係としては、當時の戶籍とも言ふべき宗門人別から、檢地、年貢、送籍、緣組、離緣、訴訟の手續きまでを記しつけたもの。

「これも大切な古帳だ。」

と吉左衛門は言つて、左の手でそれを半蔵の方へ押しやつた。木曾谷中の御免荷物として、木材通用の跡を記しつけたものだつた。森林保護の目的から伐採を禁じられてゐる五木の中でも、毎年二百駄づゝの檜、榑の類の馬籠村にも許されも來たことが、その中に明記してあつた。

「何だか俺も遠く來たやうな氣がする。」と吉左衛門は、街道の昨日、一昨日を振り返つて見るやうに言つた。「俺の長い道連れはあの金兵衛さんだが、どうやら喧嘩もせずにこゝまで來た。何十年の間、殆んどあの人と言ひ合つたことがない。唯二度――さうだ、唯二度ある。一度はお喜佐と仙十郎(上の伏見屋の以前の養子)の間に出來た子供のことで。今一度は古い地所のことで。半蔵は覺えがあらう、あの地所のことでは金兵衛さんが大變な立腹で、一體青山の慾心からこんなことが起る、末長く御懇意に願ひたいと思つてゐるのに今からこんな問題が起るやうでは孫子の代が案じられるなんて、さう言つて俺を攻撃したさうだ。俺は後になつて人からその話を聞いた。何にしろあの時は金兵衛さんが顏色を變へて、俺の家へ古い書付なぞを見せに持ち込んで來た。あれは俺の覺えちがひだつたかも知れんが、あんなに金兵衛さんも言はなくても濟むことさ。いくら好い友達でも、やつぱりあの人と、俺とは違ふ。今になつて見ると、よく二人はこゝまで一緒に歩いて來られたものだといふ氣もするね。俺はお前、この通りな人間だし、金兵衛さんと來たら、あの人はなか／＼細(こまか)いからね。土蔵の前の梨の木に紙袋(かんぶくろ)をかぶせて置いて、大風に落ちた三つの梨のうちで、一番大きい梨の目方が百三匁で外の二つは目方が六十五匁あつたと、さう言ふやうな人なんだからね。」

過ぐる年の大火に、馬籠本陣の古い書類も多く燒失した。辛うじて持ち出したもの、土蔵の方へ運んであつたものは殘つた。例の相州三浦にある本家から贈られた光琳の軸、それに火災前から表玄關の壁の上に掛けてあつた古い二本の鎗だけは遠い先祖を記念するものとして殘つた。その時、吉左衛門は『青山氏系圖』としてあるものまで取り出して半蔵の前に

置いた。

『半藏、お前も知つてるやうに、吾家には出入りをする十三人の百姓がある。中には美濃の方から吾家へ嫁に來た人に隨いて馬籠に移住した關係のものもある。正月と言へば吾家へ餅をつきに來たり、松を立てたりしに來るのも、先祖以來の關係からさ。あの百姓達には眼をかけてやれよ。それから、お前に斷つて置くが、いよ〳〵俺も隱居する日が來たら、何事もお前の量見一つで行つて呉れ――俺は一切、口を出さないから。』

父はこの調子だ。半藏の方でもう村方のことから街道の一切の世話まで引き受けてしまつたやうな口吻だ。

その日、半藏は父のゐる部屋から店座敷の方へ引きさがつて來た。かういふ日の來ることは彼も豫期してゐた。長い歴史のある青山の家を引き繼ぎ、それを否むといふことが、もとより彼の心を悅ばせないではない。しかし、實際に彼がこの家を背負つて立たうとなると、これが果して自分の行くべき道かと考へる。國學者としての多くの同志――殊に友人の景藏なぞが寢食を忘れて國事に奔走してゐる中で、父は病み、實の兄弟はなし、唯一人お喜佐のやうな義理ある妹に婿養子の祝次郎はあつても、この人は新宅の方にゐて彼とはあまり話も合はなかつた。

秋らしい日が來てゐた。店座敷の障子には、裏の竹林の方からでも飛んで來たかと思はれるやうなきり〴〵すがゐて、細長い肢を延ばしながら靜かに障子の骨の上を這つてゐる。半藏の眼はそのすゞしさうな青い羽を眺めるともなく眺めて、しばらく蟲の動きを追つてゐた。

お民は店座敷へ來て言つた。

『あなた、顏色が青いぢやありませんか。』

『そりや、お前、生きてる人間だもの。』

これにはお民も二の句が繼げなかつた。そこへ繼母のおまんが一人の遠縁にあたる男を連れて入つて來た。

『半藏、清助さんがこれから吾家へ手傳ひに通つて來て呉れますよ。』

和田屋の清助といふ人だ。半藏の家のものとは遠縁にあたる。本陣問屋庄屋の雜務を何くれとなく手傳つて貰ふには、持つて來いといふ人だ。清助は吉左衛門が見立てた人物だけあつて、青々と剃り立てた髯の跡の濃い腮を撫で〳〵、まだ福島の役所の方から代替り本役の沙汰もないうちから、新主人半藏のために祝ひ振舞の時の支度なぞを始めた。客は宿役人の仲間の衆。それに組頭一同。當日はわざと粗酒一獻。そんな相談をおまんにするのも、この清助だ。

青山、小竹兩家で待たれる福島の役所からの剪紙(召喚狀)が屆いたのは、それから間もなかつた。それには青山吉左衛門忰・年寄役小竹金兵衛忰、兩人にて役所へ罷り出よとある。附添役二人、宿方惣代二人同道の上ともある。かねて願つて置いた吉左衛門等の退役と隱居が聞き屆けられ、跡役は二人の忰達に命ずると書いてないまでも、その剪紙の意味は誰にでも讀めた。

半藏も心を決した。彼は隣家の伊之助を誘つて、福島をさして出掛けた。木曾路に多い栗の林にぱら〳〵時雨の音の來る頃には、やがてもう馬籠から行つた惣代の一人、桝田屋の相續人小左衛門、それに下男の佐吉なぞと共に、半藏等は一同連立つて歸路に就く人達であつた。福島から妻籠まで引き返して來ると、そこの本陣に壽平次が待ち受けてゐて、一緒に馬籠まで行かうといふ。

『壽平次さん、到頭わたしも君達のお仲間入りをしちまひましたよ。』

『みんなで寄つてたかつて、半藏さんを庄屋にしないぢや置かないんです。お父さんも、さぞお喜びでせう。』

壽平次も笑つたり、祝つたりした。

和宮降嫁の當時、公武一和の說を抱いて供奉の列の中にあつた岩倉、千種、富小路の三人の公卿が近く差控を命ぜられ、つゞいて蟄居を命ぜられ、すでに落飾の境涯にあるといふほど一變した京都の方の樣子も深く心に掛りながら、半藏は妻

籠本陣に一晩泊つた後で、また連れと一緒に街道を踏んで行つた。妻籠からは、彼は自分を待ち受けて呉れる人達にと思つて、念のために歸宅を報じて置いた。

壽平次を加へてからの歸路は、一層半藏に別な心持を起させた。大橋を渡り、橋場といふところを過ぎて、下り谷にかかつた。歩けば歩くほど新生活のかどでにあるやうな、ある意識が彼の内部にさめて行つた。

『壽平次さん、君の方へは何か最近に來た便りがありますか——江戸からでも。』

『さあ、最近に驚かされたと言へば、生麥事件ぐらゐのものです。』

『あの報知はわたしの方へも早く來ました。ほら、横須賀の旅に、あの邊を君と二人で歩いて通つたところなんですがね。』

武州の生麥と言へば、勅使に随行した島津久光の一行、その歸國を急ぐ途中での八月二十一日あたりの出來事は江戸の方から知れて來てゐた。あの英人の殺傷事件を想像しながら、木曾の尾垂の澤深い山間を歩いて行くのは薄氣味惡くもあるほど、まだその噂は半藏等の記憶になま〳〵しい。

『壽平次さん、わたしはそれよりも、あの薩摩の同勢の急いで歸つたといふのが氣になりますよ。あれほどの事件が途中で起つたといふのに、それをうつちやらかして置いて行くくらゐですからね。京都の方はどうでせう。それほど雲行きが變つて來たんぢやありませんかね。』

『さあねえ。』

『壽平次さんは岩倉様の蟄居を命ぜられたことはお聞きでしたかい。』

『そいつは初耳です。』

『どうもいろ〳〵なことを纒めて考へて見ると、何か京都の方に起つてゐる——』

『半藏さんのお仲間からは何か言つて來ますか。今ぢや平田先生の御門人で、京都に集まつてる人[illegible]分[illegible]る[illegible]でせう。』

『しばらく景藏さんからも便りがありません。』

『なにしろ世の中は多事だ。これからの庄屋の二年は、お父さんの時代の人達の二十年に當るかも知れませんぞ。』

二人は話し〳〵歩いた。

一石栃まで歸つて行くと、そこは妻籠と馬籠の宿境にも近い。歩き遲れた半藏等は連れの伊之助や小左衛門なぞに追ひついて、峠の峯まで歸つて行つた。

『へえ、旦那、お目出たうございます。』

半藏はその峯の上で、そこに自分を待ち受けてゐる峠村の組頭、その他二三の村のもの丶聲を聞いた。

清水といふところまで歸つて行つた。馬籠の町内にある五人組の組頭が半藏を出迎へた。陣場まで歸つて行つた問屋の九郎兵衛、百姓總代の庄助、本陣新宅の親次郎、その他半藏が内弟子の勝重から手習子供まで、それに荒町からの組頭なぞを入れると、十六七人ばかりの人達が彼を出迎へた。上町まで歸つて行くと、問屋九太夫をはじめ、桝田屋、蓬萊屋、梅屋いづれも最早髮の白いそれらの村の長老達が改まつた顏付で、馬籠の新しい驛長をそこに待ち受けてゐた。

五

『あなたは勤王家ですか。』

『勤王家かとは何だい。』

『その方の御味方ですかツて、訊いてゐるんですよ。』

『お民、どうしてお前はそんなことを俺にきくんだい。』

半藏は本陣の奥の上段の間にゐた。そこは諸大名が宿泊する部屋に宛てゝあるところで、平素はめつたに家のものも入

らない。お民は仲の間の方から、そこに片付けものをしてゐる夫を見に來た時だ。

『どうしてといふこともありませんけれど、』とお民は言つた。『お母さんがそんなことを言つてましたから。』

半藏は妻の顏を眺めながら、『俺は勤王なんてことをめつたに口にしたこともない。今日、自分で勤王家だなんて言ふ人の顏を見ると、俺は吹き出したくなる。さういふ人は勤王を賣る人だよ。御覽な――ほんとうに勤王に志してるものなら、かるぐ\しくそんなことの言へる筈もない。』

『わたしはちよいときいて見たんですよ――お母さんがそんなことを言つてるましたからね。』

『だからさ、お前もそんなことを口にするんぢやないよ。』

お民は周圍を見廻した。そこは北向で、廣い床の間から白地に雲形を織り出した高麗緣の疊の上まで、茶室のやうな靜かさ嚴肅さがある。厚い壁を隔てゝ、街道の方の騷がしい物音もしない。部屋から見える坪庭には、山一つ隔てた妻籠より溫暖な冬が來てゐる。

『さう言へば、これは別の話ですけれど、こないだ兄さん(壽平次)が來た時に、わたしにさう言つてゐましたよ――平田先生の御門人は、幕府方から眼をつけられてゐるやうだから、氣をおつけッて。』

『へえ、壽平次さんはそんなことを言つてゐたかい。』

將軍上洛の前觸と共に、京都の方へ先行してその準備をしようとする一橋慶喜の通行筋はやはりこの木曾街道で、舊曆十月八日に江戶發駕といふ日取の通知まで來てゐる頃だつた。道橋の見分に、宿割に、その方の役人は既に何回となく馬籠へも入り込んで來た。半藏はこの山家に一橋公を迎へる日のあるかと想つて見て、上段の間を步き廻つてゐた。

『どれ、お大根でも干して。』

お民は出て行つた。山家では澤庵漬の用意なぞにいそがしかつた。いづれもう冬支度だ。野菜を貯へたり、赤蕪を漬

けたりすることは、半藏の家でも年中行事の一つのやうになつてゐた。その時、半藏は妻を見送つた後で、彼女のそこに殘して置いて行つた言葉を考へて見た。深い奥にのみ籠り暮してゐるやうな繼母のおまんが、しかも『わたしはもうお婆さんだ、お婆さんだ』を口癖にしてゐる五十四歲の婦人で、いつの間に彼の志を看破つたらうとも考へて見た。その心持から、彼は一層あの賢い繼母を畏れた。

數日の後、半藏は江戸の道中奉行所から來た通知を受取つて見て、一橋慶喜の上京がにはかに東海道經由となつたことを知つた。道普請まで命ぜられた木曾路の通行は何かの都合で模様替へになつた。その冬の布告によると、將軍上洛の導從が東海道を通行するものが多いから、十二月九日以後は旅人は皆東山道を通行せよとある。

『半藏さま、來年は街道もごた〱しますぞ。』

『さあ、俺もその覺悟だ。』

清助と半藏とはこんな言葉をかはした。

年も暮れて行つた。明ければ文久三年だ。その時になつて見ると、江戸へ、江戸へと向つてゐた多くの人の足は、全く反對な方角に向ふやうになつた。時局の中心は最早東を去りつゝあるやに見えて來た。それを半藏は自分が奔走する街道の上にも、將軍の上洛と聞いて心配する人達の顔にも讀んだ。彼も責任のあるからだとなつてから、一層注意深い眼を旅人の動きに向けるやうになつた。

本馬六十三文、輕尻四十文、人足四十二文、これは馬籠から隣宿美濃の落合までの駄賃として、半藏が毎日のやうに會所の問屋場の前で聞く聲である。新しい年の二月には、彼は京都行の新選組の一隊をこの街道に迎へた。一番隊から七番隊までの列をつくつた人達が雪の道を踏んで馬籠に着いた。いづれも江戸の方で浪士の募集に應じ、盡忠報國をまつこうに振りかざし、京都の市中を騒がす攘夷黨の志士浪人に對抗して、幕府のために粉骨碎身しようといふ劍客揃ひだ。一道

の達人、諸國の脫藩者、それから無頼な放浪者なぞから成る二百四十人からの群の胸が馬籠の問屋場の前で鳴つた。

二月も末になつて、半藏のところへは一人の訪問者があつた。宵の口を過ぎた頃で、道に迷つた旅人なぞの泊めて呉れといふ時刻でもなかつた。街道もひつそりしてゐた。

『旦那、大草仙藏といふ方が見えてゐます。』

圍爐裏ばたで藁造りをしてゐた下男の佐吉がそれを半藏のところへ知らせに來た。

『大草仙藏？』

『旦那にお目に掛れば分ると言つて、圍爐裏ばたの入口の方にお出だぞなし。』

不思議に思つて半藏は出て見た。京都方面で奔走してゐると聞いた平田同門の一人が、着流しに雪踏ばきで、入口の土間のところに立つてゐた。大草仙藏とは變名で、實は先輩の暮田正香であつた。

『青山君、君にお願ひがあつて來ました。』

と客は言つたが、周圍に氣を兼ねて直ぐに切り出さうともしない。この先輩は歩き疲れたといふ風で、上り端のところに腰をおろした。ちやうど圍爐裏の方には人もゐないのを見すまし、土間の壁の上に高く造りつけてある鷄の鳥屋まで見上げて、それから切り出した。

『實は、今、中津川から歩いて來たところです。君のお友達の淺見(景藏)君はお留守ですが、ゆふべはあそこの家に泊めて貰ひました。青山君、こんなに遲く上つて御迷惑かも知れませんが、今夜一晩御厄介になれますまいか。青山君はまだわたしたちのことを何もお聞きになりますまい。』

『しばらく景藏さんからも便りがありませんから。』

『わたしはこれから伊那の方へ行つて身を隱すつもりです。』

客の言葉は短い。事情もよく半藏には分らない。しかし變名で夜遅く訪ねて來るくらゐだ。それに樣子もたゞではない。

『この先輩は幕府方の探偵にでもつけられてゐるんだ。』その考へが閃くやうに半藏の頭へ來た。

『暮田さん、まあこつちへお出下さい。しばらく待つてゐて下さい。委しいことは後で伺ひませう。』

半藏は土間にある草履を突ッかけながら、勝手口から裏の方へ通ふ木戸を開けた。その戸の外に正香を隱した。

兎に角、厄介な人が舞ひ込んで來た。村には目證も滯在してゐる。狹い土地で人の口もうるさい。どうしたら半藏はこの夜道に疲れて來た先輩を救つて、同志も多く安全な伊那の谷の方へ落してやることが出來ようと考へた。家には、と見ると、父は正月以來裏の二階へ泊りに行つてゐる。お民は奧で子供等を寢かしつけてゐる。通ひで來る清助はもう自宅の方へ歸つて行つてゐる。弟子の勝重はまだ若し、佐吉や下女達では用が足りない。

『これはお母さんにかぎる。』

その考へから、半藏はありのまゝな事情を打ち明けて、客をかくまつて貰ふために繼母のおまんを探した。

『平田先生の御門人か。一晩ぐらゐのことなら、土藏の中でもよろしからう。』

おまんは引き受け顏に答へた。

暮田正香は半藏と同國の人であるが、曾て江戸に出て水戸藩士藤田東湖の塾に學んだことがあり、東湖歿後に水戸の學問から離れて平田派の古學に眼を見開いたといふ閱歷を持つてゐる。信州北伊那、小野村の倉澤義髓を平田鐵胤の講筵に導いたのも、この正香である。後に義髓は北伊那に於ける平田派の先驅をなしたといふ關係から、南信地方に多い平田門人で正香の名を知らないものはない。

この人を裏の土藏の方へ導かうとして、おまんは提灯を手にしながら先に立つて行つた。半藏も蠟燭や床蒲團なぞを用意してその後についた。

『足許をお氣をつけ下さいよ。石段を降りるところなぞがございますよ。』

とおまんは客に言つて、やがて土藏の中に用でもあるやうに、大きな鍵で錠前をねぢあけ、それを靜かに拔き取つた。金網の張つてある重い戶があくと、そこは半藏夫婦が火災後しばらく假住居にも宛てたところだ。縁でも敷けば、客のゐるところぐらゐ設けられないこともなかつた。

『お客さんはお腹がおすきでしたらうね。』

それとなくおまんが半藏にきくと、正香はや、安心したといふ風で、

『いや、支度は途中でして來ました。なにしろ、京都を出る時は、二晝夜歩き通しに歩いて、まるで足が棒のやうでした。』

それから晝は隱れ、夜は歩くといふやうにして、漸くこゝまで辿り着きました。』

おまんは提灯の灯を片隅の壁に掛けた。その土藏の中に二人のものを置いて立ち去つた。

『半藏、お客さんの夜具を後から運ばせますよ。』

との言葉をも殘した。

『青山君、やりましたよ。』

二人ぎりになつた時、正香はそんなことを言ひ出した。その調子が半藏には、實に無造作にも、短氣にも、突飛にも、また思ひ詰めたやうにも聞えた。

同志十人、その多くは平田門人であるが、等持院に安置してある足利尊氏以下、二將軍の木像の首を拔き取つて、それを三條河原に晒しものにした。それには、今の世になつてこの足利等が罪狀の右に出るものがある、もし舊惡を悔いて忠節を抽んでることがないなら、天下の有志はこぞつてその罪を糺すであらうとの意味を記し添へた。ところがこの事を企てた仲間のうちから、一人の幕府方の探偵があらはれて、同志の中には縛に就いたものもある。正香は二晝夜兼行でその難を遁れて來たことを半藏の前に白狀した。

正香に言はせると、將軍上洛の日も近い。三條河原の光景は、それに對する一つの示威である、尊王の意志の表示である、死んだ武將の木像の首を晒しものにするやうなことは子供らしい戲れとも聞えるが、しかしその道德的な效果は大きい、自分等はそれを狙つたのであると。

この先輩の大膽さには、半藏も驚かされた。「物學びするともがら」の實行を思ふ心は、そこまで突き詰めて行つたかと考へさせられた。同時に、平田大人歿後の門人と一口には言つても、この先輩に水戸の學者の影響の多分に殘つてゐることは爭へないとも考へさせられた。

『誰か君を呼ぶ聲がする。』

正香は戸に近づく人のけはひを聞きとがめるやうにして、耳のところへ手をあてがつた。半藏も耳を澄ました。お民だ。彼女は佐吉に手傳はせて客の寢道具をそこへ持ち運んで來た。

『暮田さん、非常にお疲れのやうですから、これでわたしも失禮します。お話は明日伺ひます。お休み下さい。』

そのまゝ半藏は正香の側を離れて、母屋の方へ歸つて行つた。何程の人の動き始めたとも知れないやうな京都の方のことを考へ、そこにある友人の景藏のことなぞを考へて、その晩は彼もよく眠られなかつた。

翌日の晝過ぎ。半藏はこつそり正香を見に行つた。御膳何人前、皿何人前、箱書きのしてある器物の並んだ土藏の棚を

背後にして、蓙を敷いた座蒲團の上に正香がさびしさうに座つてゐる。前の晩に見た先輩の近づきがたい樣子とも違つて、気感で正直な感じのする一人の國學者をそこに見つけた。

その時、半藏は腰につけて持つて行つた瓢簞を取り出した。木盃を正香の前に置いた。くたぶれて來た旅人をもてなすやうにして、酒を勸めた。

『これは馬籠の酒です。伏見屋と桝田屋と、二軒で今造つてゐます。一つ山家の酒を味つて見て下さい。』

『ほ。』と正香は眼をまるくして、『君はめづらしいものを御馳走して吳れますね。』

『どうも瓢簞のやうに口の小さいものから出る酒は、音からして違ひますね。コッ、コッ、コッ——か。長道中でもして來た時には、これが何よりですよ。』

まるで子供のやうな歡び方だ。この先輩が瓢簞から出る酒の音を口眞似までして歡ぶところは、前の晩に拳を握り固め、五本の指を屈め、後ろから髻でも摑むやうにして、木像の首を引き拔く手眞似をして見せながら等持院での現場の話を半藏に聞かせたその同じ豪傑とも見えなかつた。

それはかりではない。京都麩屋町の染物屋で伊勢久と言へば理解のある義氣に富んだ商人として中津川や伊那地方の國學者で知らないもの、ない人の名が、この正香の口から出る。平田門人、三輪田綱一郎、師岡正胤などのやかましい連中が集まつてゐたといふ二條衣の棚——それから、同門の野代廣助、梅村眞一郎、それに正香その人をも從へながら、秋田藩物頭役として入京してゐた平田鐵胤が寓居のあるところだといふ錦小路——それからの町々の名も、この人の口から出る。伊那から出て、公卿と志士の間の連絡を取つたり、宮廷に近づいたり、婦人ながらに鐵胤の門下としてあらゆる方法で國學者の運動を助けてゐる松尾多勢子のやうなお婆さんとも正香は懇意にして、その人が帶の間に挿んでゐる短刀、地味な着物に黑繻子の帶、長い笄、櫛卷にした髮の姿までを話の裡に彷彿させる。日頃半藏が知りたく思つてゐる師鐵胤や

同門の人達の消息ばかりでなく、京都の方の町の空氣まで一緒に持つて來たやうなのも、この正香だ。

「さう言へば、青山君。」と正香は手にした木盃を下に置いて、膝をかき合せながら言つた。「君は和宮さまの御降嫁あたりからの京都をどう見ますか。薩摩が來る、長州が來る、土佐が來る、今度は會津が來る。諸大名が動いたから、機運が動いて來たと思ふのは大違ひさ。機運が動いたからこそ、薩州公なぞは鎖攘に向つて來たし、長州公はまた長州公で、藩論を一變して乘り込んで來た。見たまへ、和宮さまの御降嫁だつても、この機運の動いてることを關東に教へたのさ。ところが關東ぢや眼がさめない。勅使下向となつて、慶喜公は將軍の後見に、越前公は政事總裁にと、手を取るやうに言つて教へられて、漸くいくらか眼がさめましたらうさ。しかし、君、世の中は妙なものぢやありませんか。あの薩州公や、越前公や、それから土州公なぞがいくらやきもきしても、名君と言はれる諸大名の力だけでこの機運をどうすることも出來ませんね。まあ薩州公が勅使を奉じて江戸の方へ行つてる間にですよ、もう京都の形勢は一變してゐましたよ。この正月の二十一日には、大阪にゐる幕府方の名高い賢者を殺して、その片耳を中山大納言の邸に投げ込むものがある。二十八日には千種家の臣を殺して、その右の腕を千種家の邸に左の腕を岩倉家の邸に投げ込むものがある。攘夷の血祭だなんて言つて、そりや亂暴なものさ。岩倉樣なぞが恐れて隱れる筈ぢやありませんか。まあ京都へ行つて見たまへ、みんな勝手な氣焔を揚げてゐますから。中にはもう關東なんか眼中にないものもゐますから。こないだもある人が、江戸のやうな開けたところから來て見ると、京都はまるで野蠻人の巢だと言つて、驚いてゐましたよ。諸國から入り込んでゐますからね。そのかはり活氣はあります。參政寄人といふやうな新しい御公家樣の政事團體も出來て、どんな草深いところから出て來た野人でも、その方の建議で、學習院へ行きさへすれば時事を建白することが出來る。今の京都には、何でもある。公武合體から破約攘夷まである。そんなものが渦を卷いてゐる。ところでこの破約攘夷ですが、こいつがまた曖昧なものですて。どうもわたしたちの見るところでは、破約攘夷の期するところは幕府打倒であつて、必ずしも王政復古を目的とはしてゐ

ません。かういふ状態が續いて行つたらどういふことになりますかさ。考へたばかりでも心が寒くなつて來ますよ。一方に公武合體、一方に破約攘夷、こんな曖昧な二つのものが對立してゐるやうな現狀は破つて出なければ嘘ですね。そこですよ、わたしたちは笑はれても何でも王政復古の旗を高く掲げたい。ほんとうに機運の向ふところを示したい。足利尊氏のやうな武將の首を晒しものにして見せたのも、實を言へばそんなところから來てゐますよ。』

『暮田さん。』と半藏は相手の長い話を遮つた。『鐵胤先生は、一體どういふ意見でせう。』

『わたしたちの今度やつた事件にですか。鐵胤先生にそんな相談をすれば、笑はれるにきまつてる。だからわたしたちは默つて實行したんです。』

『待つて下さい。王政復古を求める心がほんとうに下のものに動いて來たら、上にある武將の政治なぞはひとりでに壞れて行きませう。そこが暮田さんといくらか違ふところです。わたしたちは上から行かないで、下から行きたいと思つてる方です。』

『さういふ君のやうな意見もあるひは成り立つ。兎に角、王政復古に道を開けるのが本居先生の古事記傳を書いた本志なんでせうね。』

沈默が續いた。

半藏はさう長くこの珍客を土藏の中に隱して置くわけに行かなかつた。暮れないうちに早く馬籠を立たせ、すくなくもその晩のうちに清内路までは行くことを敎へねばならなかつた。清内路まで行けば、そこは伊那道にあたり、原信好のやうな同門の先輩が住む家もあつたからで。

半藏は正香にきいた。

『暮田さんは、木曾路は初めてゞすか。』

『權兵衞街道から伊那へ入つたことはありますが、こつちの方は初めてゞす。』

『そんなら、かうなさるといゝ。これから妻籠の方へ向つて行きますと、橋場といふところがありますよ。あの大橋を渡ると、道が二つに分れてゐまして、右が伊那道です。實は母とも相談しまして、橋場まで吾家(うち)の下男に送らせてあげることにしました。』

『さうして頂けば、ありがたい。』

『あれから先はかなり寂しい山の中ですが、ところ〴〵に村もありますし、馬も通ひます。中津川から飯田へ行く荷物はあの道を通るんです。蘭川について東南へ東南へと取つておいでなさればいゝ。』

おまんは着流しでやつて來た客のために、脚絆なぞを母屋の方から用意して來た。粗末ではあるが、と言つて合羽まで持つて來て客に勸めた。佐吉も心得てゐると見えて、土藏の前には新しい草鞋が揃へてあつた。

正香は性急な人で、おまんや半藏の見てゐる前で無造作に合羽へ手を通した。禮を述べると直ぐ草鞋をはいて、その足で土藏の前の柿の木の下を歩き廻つた。

『暮田さん、わたしもそこまで御一緒にまゐります。』

と言つて、半藏は表門から出ずに、裏の木小屋の方へ客を導いた。木戸を押すと、外に本陣の稻荷がある。竹藪がある。石垣がある。小徑(こみち)がある。その小徑について街道を横ぎつて行つた。樋をつたふ水の奔り流れて來てゐるところへ出ると、靜かな村の裏道がそこに續いてゐる。

その時、正香はホッと深く息をついた。半藏や佐吉に送られて歩きながら、

『青山君、篤胤先生の古史傳を伊那の有志が上木してゐるやうに聞いてゐますが、君もあれには御關係ですかね。』

『さうですよ。去年の八月に、漸く第一巻を出しましたよ。』

『地方の出板としては、あれは大事業ですね。秋田(篤胤の生地)でさへ企てないやうなことを伊那の衆が發起して呉れたと言つて、鐵胤先生なぞもあれには身を入れておいでゞしたつけ。なにしろ、伊那の方はさかんですね。先生のお話ぢや、毎年七八十人からの門人がふえるといふぢやありませんか。』

『ある村なぞは、全村平田門人だと言つてもいゝくらゐでせう。そのくせ、松澤義章といふ人が行商して歩いて、小間物類をあきなひながら道を傳へた時分には、まだあの谷には古學といふものはなかつたさうですが。』

『機運止むべからずさ。本居、平田の學說といふものは、それを正しいとするか、あるひは排斥するか、すくなくも今の時代に生きるもので無關心ではゐられないものですからねえ。』

あわたゞしい中にも、送られる正香と、送る半藏との間には、こんな話が盡きなかつた。

半藏は峠の上まで客と一緒に歩いた。別れ際に、

『暮田さんは、宮川寛齋といふ醫者を御存じでせうか。』

『美濃の國學者でせう。名前はよく聞いてゐますが、つい逢つたことはありません。』

『中津川の景藏さん、香藏さん、それにわたしなぞは、三人とも古い弟子ですよ。鐵胤先生に紹介して下すつたのも宮川先生です。あの先生も今ぢや伊那の方ですが、どうしておいでゞせうか――』

『さう言へば、青山君は鐵胤先生に一度逢つたきりださうですね。一度逢つたお弟子でも、十年側にゐるお弟子でも、あの鐵胤先生には同じやうだ。君の話もよく出ますよ。』

この人の殘して置いて行つた言葉も、半藏には忘れられなかつた。

最早暖かい雨がやつて來る。二月の末に京都を發つて來たといふ正香は尾張や仙臺のやうな大藩の主人公までが朝命に應じて上京したことは知るまいが、ちやうどあの正香が夜道を急いで來る頃に、この木曾路には二藩主の通行もあつた。三千五百人からの尾張の人足が來て馬籠の宿に詰めた。あの時、二百四十五の繼立ての馬を殘らず雇ひ上げなければならなかつたほど、伊那助郷の態度も強く變つて來た。木曾街道筋を初めてと聞く仙臺藩主の場合にも、時節柄同勢や御供は減少といふ觸込みでも、千六百人の一大旅行團が京都へ向けてこの宿場を通過した。しかも應接に困難な東北辯で。

「半藏、お前のところへ來たお客さんも、無事に伊那の小野村まで落ち延びていらしつたらうか。」

こんな噂をおまんがする頃は、そこいらは桃の春だつた。一橋慶喜の英斷に出た參勤交代制度の變革の結果は、驚かれるほどの勢でこの街道にあらはれて來た。舊暦三月の好い季節を迎へて見ると、あの江戸の方で上巳の御祝儀を申上げるとか御能拜見を許されるとか、又は兩山の御靈屋へ參詣するとかの外には、人質も同樣に堅固で嚴重な武家屋敷の内に籠り暮してゐた何處の簾中とか何處の若殿とかいふやうな人達が、まるで手足の鎖を解き放たれたやうにして、續々歸國の旅に上つて來た。

越前の女中方、尾州の若殿に簾中、紀州の奥方ならびに女中方、それらの婦人や子供の一行が江戸の方から上つて來て、いづれも本陣や問屋の前に駕籠を休めて行つた。秋田の佐竹右京太夫の姫君、尾州の家中成瀨隼人正の女中方、肥前島原の女中方、因州の女中方なぞの通行が續きに續いた。これが馬籠峠といふところかの顏付の婦人もある。漸く山の上の空氣を自由に吸ふことが出來たと言ひたげな顏付のものもある。半藏の家に一泊ときめて、五六人で比丘尼寺の蓮池の方まで遊び廻り、谷川に下帶洗濯なぞをして來る女中方もある。

上の伏見屋の金兵衛は、半藏の父と同じやうにすでに隱居の身であるが、持つて生れた性分からぢつとしてゐられなかつた。きのふは因州の分家にあたる松平隱岐守の女中方が通り、けふは岩村の簾中方が子供衆まで連れての通行があると

聞くと、その度に舊い友達を誘ひに來た。

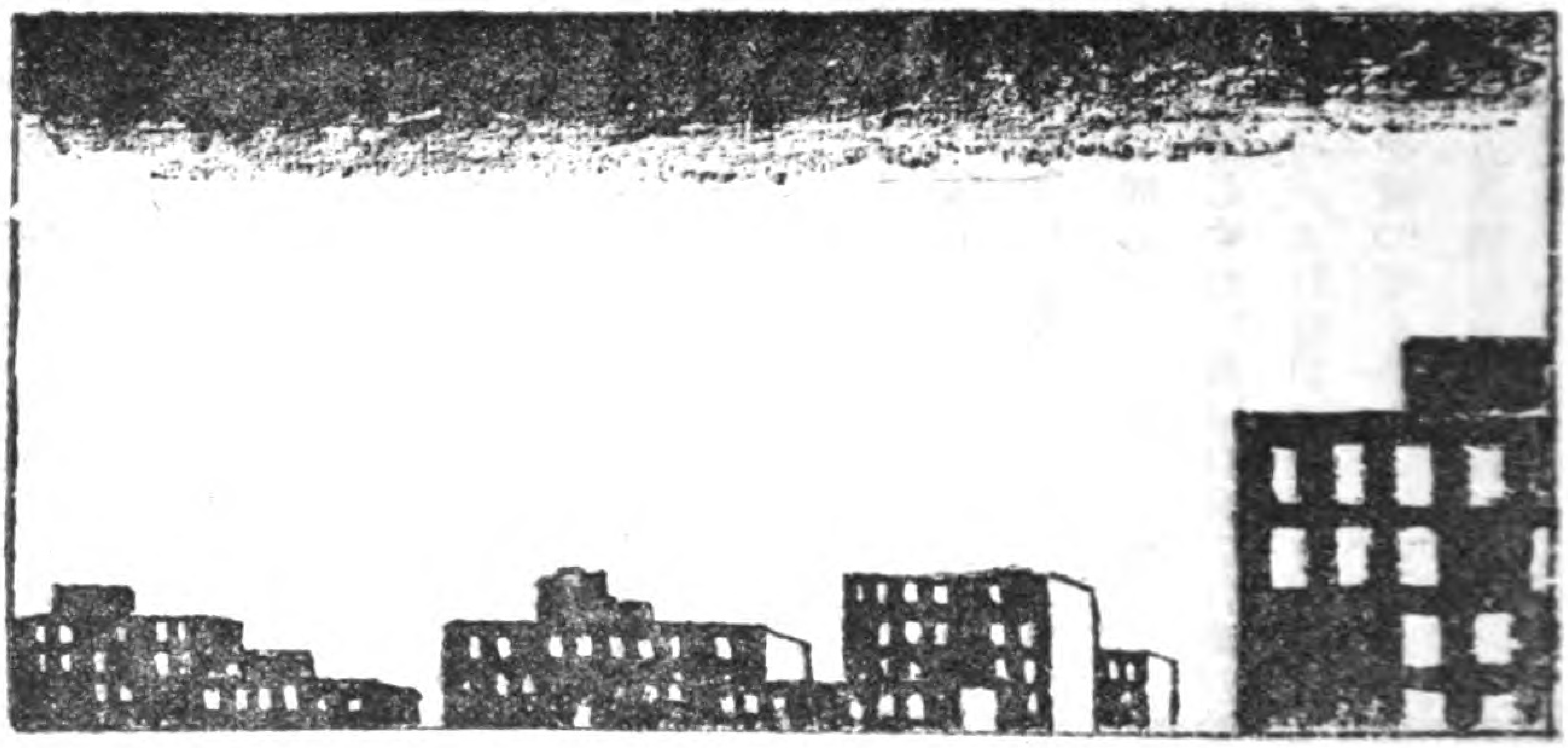
『吉左衛門さん、いくら御靜養中だつて、さう引つ込んでばかりゐなくてもいゝでせう。まあすこし出て御覽なさい。御奇麗と言つていゝか、御見事と言つていゝか、わたしは拜見してゐるうちに涙がこぼれて來ますよ。』

毎日のやうな女中方の通行だ。半藏や伊之助は見物どころではなかつた。この歸國する人達の通行にかぎり、木曾下四宿へ五百人の新助郷が許され、百人ばかりの伊那の百姓は馬籠へも來て詰めてゐた。町人四分、武家六分と言はれる江戸も後に見捨てゝ來た屋敷方の人々は、住み慣れた町々の方の財界の混亂を顧みるいとまも無いやうであつた。

『國許へ、國許へ。』

その聲は――解放された諸大名の家族が揚げるその歡呼は――過去三世紀間の威力を誇る東照宮の覇業も、最早内部から崩れかけて行く時がやつて來たかと思はせる。中には、一團の女中方が馬籠の町のなかだけを全部徒歩(おひろひ)で、街道の兩側に群がる普通の旅行者や村の人達の間を通り過ぎるのもある。桃から山櫻へと急ぐ木曾の季節のなかで、薩州の御隱居、それから女中方の通行の後には、また薩州の簾中の通行も續いた。

(第六章をはり、次回來る新年號に。この稿、例により年四回――正月、四月、七月、十月本誌分載)



ある失業者の話

廣津和郎

一

例の我々の事務所につめかけてゐる時、大澤藤三郎が、こんな事を私の耳に囁いたわけなのです。

『ねえ、君、うまい事があるんだよ。昨夜僕はひと晩中寝ずに考へたんだ。それの相棒に乘つてくれないかな?』

『うまい事?――又例の一億圓の口ぢやないのか?』

『いや、そんなんぢやない。そんなんぢやない』大澤は頭を掻きました。『あの時は、全く君の一言で助かつたよ。それでなければ、今頃飛んでもない事になつてゐるからね。ぶる、ぶる、ああ、桑原、桑原!』

『さうさ、今頃は日の目も見られない暗い刑務所さ。――併し日の目を見られない暗いところに打ちこまれるまでには、二日でも三日でも、或は金持の幸福が味へたかも知れないよ。――ははは、それを思ふと、なまじ止め立てなどしな

い方がよかつたかも解らないよ。こんなみじめな生活を毎日してゐるよりはね』

『冗談いつちやいけない。——實際ああ云ふ時は、それ、何と云ふ奴かな、錯覺、さうだ、錯覺といふ奴だよ。全くうまく行く筈のないことが、うまく行くやうに思はれるからね。——ああ、考へて見てもぞつとする』

それはかういふ出來事なのでした。大澤藤三郎が丁度丸ビルの前をほつつき歩いてゐたわけなのです。何かうまい事はないものかと考へながら。實際何かうまい事はないかといふのは、大澤ばかりぢやなく、この私も、又大澤や私のやうに、中年になつて一定の職業のなくなつたもの、つまり中年の失業者ですな、かういふ連中の誰もが、朝起きた時から、寢る時まで、日がな一日中考へてゐる事なのです。それで大澤はそれを考へながら、丸ビルの前を歩いてゐたわけなのです。さうしたら、いきなり彼の肩を輕く叩いた男がありました。

『大澤君ぢやないか』

多分うつむきながら歩いてゐたに違ひない大澤は、吃驚して顔を上げました。すると、そこに彼が七年程會はなかつた大阪の友人の高田といふ男が立つてゐたのです。

『おゝ、高田君か』さう云ひながら、彼は相手の樣子を見ると、威壓を感じたさうです。洋服と云ひ、靴と云ひ、一見して何かの會社の重役然とした立派さとおちつきとが、その舊友の身體に現れてゐたからださうです。彼は自分の見すぼらしさが、恥しかつたさうです。

『暫くでしたね』彼は自分の言葉が妙に丁寧になつて行くのが、自分でも業腹だつたさうです、『近頃は東京ですか?』

『いや、一寸した引つかかりが出來てね。妙な事の板ばさみにあつて、困つてしまつたんだよ。——實はね、神戸の方で、ボロ船を賣つてくれといふ男があるのでね、それを東京の方に賣つてやつたんだ。ところが、その手形が不渡りになつてね。十五萬圓なんだけれど。——それで僕に責任がある事なので、その交渉に東京に來てゐるんだがね』

『十五萬圓……ほう、併しこの不景氣ぢやなかなかうまく拂つてくれないでせう』

「いや、さうでもないんだ。その東京の男といふのは、なかなかの資産家でね。今度がやりかけてゐる仕事があるんだが、それがうまく行けば、十五萬圓を三十萬圓にして拂つてくれるといふんだ。兎に角、二ヶ月待つてくれといふので、待つてゐるんだが、さうなると、僕も十五萬圓といふ自分の使へる金が浮くので、神戸の方の催促を待たせて、かうして待つてゐるわけなんだが……」

『十五萬圓を三十萬圓にして……この二ヶ月以内に。へえ、そんなにうまい儲け口が、この不景氣にあるもんですかね？』

『それがあるから不思議さ』高田は得意氣に北叟笑んださうです。それからおちつき切つた樣子をしながら、久しぶりだ。このまま君に別れるのは惜しいね。一寸僕の事務所に寄つて行き給へな』

『へえ、東京に事務所を持つて……』

『いや、僕も東京で一つ旗上げしたいと思つてね。それで兎に角、事務所が借りてあるんだ。東京に出て來て見たら、このまま大阪に歸つて行くのが厭になつたものだから。……僕が使へるやうになる十五萬圓をアテにするわけではないが、出版でもやつて見ようと思つて』

『出版は一時はよかつたさうですが、近頃はよくないさうぢやありませんか』

『まあ、一寸僕の事務所に寄つて行き給へ。……君は今何をしてゐるんです？』

『いや、何と云つて纏まつたことは……』

『さう、それなら、君がその氣なら、僕のやらうと思つてゐる事に手傳つて貰つてもいいんだが……兎に角、僕の事務所に一寸寄り給へ』

景氣の好い高田の話に、大澤はつい釣り込まれて、舊友の事務所に行つて見たさうです。それに浪人者の常として、職にありつけさうな話には、直ぐ惹きつけられる、さもしい心も手傳つて。――それは丸の内の△△ビルディングの三階の、南向きの二十坪もあらうかと思はれるやうな、相當に立派な事務所だつたさうです。机も椅子も、なかなか上等なもので、

殊に『社長室』と別にドアがついて仕切つてある小さな部屋の中には、ソファもテーブルも堂々たるものが並んでゐたさうです。もつとも、大澤が後で氣がついたさうですが、不思議と云へば、その相當な事務所に、給仕も事務員もゐないで、五十位のさう人相のよくない男が、たつた一人で事務を取つてゐたといふ事です。

『社長室』で彼は舊友と向ひ合つて腰かけました。そしていろいろ昔の話などしてゐる中に、高田はふと思ひ出したやうに、鍵のかかつた卓子の抽斗から、何かを取り出して、それを笑ひながら、大澤の前に並べました。

『君はこれをどう思ふね?』

見ると、それは二枚の壹千圓の公債でした。

『どう思ふつて?……これは壹千圓の公債ぢやありませんか』内々壹千圓と印刷された金額に驚異を覺えながら、併しそんな驚きは顏に出さないやうにして、答へると、高田は更に意味ありげに笑ひながら、

『壹千圓の公債は解つてゐるが、併しその二枚が全く同じに見えるかね?』

大澤は一枚づつ手に取つて、仔細に見較べました。

『僕には同じに見えるが、違つてゐるんですか?』

『ははは。その中の一枚が僞造で、一枚が眞物なんだが、その區別が君には解らないかしら?』

『解りませんな』

すると、高田は眼鏡を出しました。

『これで見て見給へ。これは五十倍の眼鏡なんだが、これで見ると、よく解るから。……それ、一枚の方は細かいポツポツがみな字になつてゐる。ところが一枚の方はそれが唯の點になつてゐる……』

眼鏡で見較べながら、大澤は感心したやうに云ひました。

『なるほど、一枚は字になつてゐるが、こつちの方は點になつてゐる……』

『その字になつてゐる方が眞物で、點になつてゐる方が僞造なんだよ』

『なるほどね』大澤は暫く眼鏡で見つめ、それから眼鏡をはづし、改めて肉眼で見直しながら、『僞作がよく出來てゐるものですね。眼鏡を取つてしまふと、全く同じに見えますからな』

『よく出來てゐるだらう。僕も實際驚いてゐるんだよ。何といふ巧みな事をするものかと思つてね。さう云つて、急に高田は聲をひそめて、『實はこれをやつてゐるんだよ。その男が……』

『その男つて、船を買つた人が……』

『さうさ、ボロ船を買つた奴さ』高田は眼顔で、『叱ッ！』と云つた意味を現して、益々聲をひそめながら、『これは絶對秘密にして置いてくれ給へ。君だから打明けるんだからね。――その男は今どしどしこれを作つてゐるんだよ。――そしてもう大分市場に出てゐるんだ。――實に拔目のない奴でね。僕も驚いてゐるんだよ。……それだから、十五萬圓を三十萬圓にして返すといふ意味も解つたらう』

『なるほどね、えらい事をする男ですね』と大澤も釣込まれて、聲をひそめました。『でも、發覺しないものでせうか？』

『それは大丈夫さ。――何でもその男によると、これが一億圓出てしまへば、もうしめたものださうだ。さうなると、もう解つても、政府は默認してしまふさうだ。何しろ一億圓僞造が出てゐるといふ評判が立つと、公債相場が混亂して、外國に對しても、日本の信用問題に係るさうだからね。――それで早く一億に達させよう、一億に達させようと、それを目當にぐんぐん僞造してゐるわけなんだよ』

『ほう、一億圓になると、政府も默認しますかな。……大きな事を考へてゐる奴もゐるもんですね。』

『ははは、ほんたうにどえらい事を考へてゐる奴がゐるものだらう』高田は得意になつて笑ひました。『我々氣の小さな連中は、かういふ男の考へてゐる事は解らないよ。まあ一種の豪傑だなあ』

『實際豪傑ですな』

「時に、君は今小遣に困つてやしない？」

「困つてゐない方でもありませんが……併し」

頭を掻きながら、大澤が不得要領な顔をしてゐると、高田はさも何でもなささうに、再び机の抽斗から今のと同じやうな壹千圓の公債を五十枚取り出して、

「小遣に困つてゐるなら、これで拵へ給へ。取引所で直ぐ引取つてくれるから。――額面が五萬圓だから、まあ四萬圓にはなるね。それで君の要るだけ使ひ給へ。何か仕事の足しにでもなるなら、するがいゝと思ふね。若しかしたら、その中で一萬五千圓程僕のところに持つて來てくれると都合がいゝんだが……」

「……」

丁度その時なんです。大澤がその五十枚の僞造の公債を大切さうに抱へて、「我々の事務所」にやつて來て、そして嬉色を滿面に溢らせながら、

「小西君、小西君、おい、おい、俺達にも運が向いて來たぜ……」かう私に囁いたのは！

私は彼の話を少し聞くと、直ぐその飛んでもない危險に氣がつきました。

「おい、おい、此處ぢや話せない。一寸食堂まで行つて、珈琲でも飲まうぢやないか」

さういふ間にも、その「我々の事務所」の向う此方の椅子に、何かうまい汁はないかと、聽覺と嗅覺とを異常に働かしてゐる連中は、いつにない大澤の嬉しさうな樣子に、既に眼をつけてゐました。そして彼等は何氣ない風をして、我々の近くの椅子に腰を据ゑかへようとしてゐるのです。

「我々にも、一口乘らして貰ひたいもんだな。そんなうまい話があるなら？」さう云つた顔をしながら。

「我々の事務所」といふ言葉を、私は前から説明なしに使つて來ましたが、此處でこの「我々の事務所」なるものを、少しばかりお話しして置くのが順序だと思ひます。

この「事務所」は或ホテルのパーラーなのです。といふと、大層聞えがよい。併し實際は我々はこれを金を出して借りてゐるわけでも何でもない。このホテルは詳しい事を云へば直ぐ誰にでも想像がついてしまひますが、兎に角、東京驛に近い、從つて、丸の内のビルディング街——つまり日本の首都大東京の事業の中心地に近いところに位置する、まあ、東京では大ホテルの一つです。九階建の鐵筋コンクリートの、と云つて、その鐵筋コンクリートは、出來るだけ手を拔いて、最も安い金で、最も多く坪數を取るといふ事を目的として建てられた建物なのですが、併し兎に角、鐵筋コンクリートの大ホテルである事には違ひありません。正午頃から午後の五六時まで、もし諸君がお暇でしたら、そこのパーラーに行つて御覽なさい。そこは往來と同じですから、誰だつてそこに這入つて行つて、とがめ立てを食ふものはありません。すると、諸君の眼には、その裝飾のない、三十坪ばかりの、併し光線のおちついた坐心地の好いパーラーの、椅子といふ椅子に、三十五六から四十五六位の、背廣服を著た紳士——確に彼等は紳士に見えます——達が、腰かけてゐるのを見かけるでせう。帽子や外套が側に置いてあるところを見れば、彼等がホテルの宿泊人でない事が直ぐ解ります。彼等はぼんやり何ものかを待つやうに腰かけてゐるものもあれば、壁の新聞掛から綴込を持出して、それに讀耽つてゐるものもあれば、又二三人づゝ、ひそ〳〵と何やら密議を凝らしてゐるものもある。かと思ふと、將棋盤や碁盤を持出して、暢氣さうにパチパチやつてゐるものもおります。彼等は毎日此處にかうしてやつて來ます。そして何かうまい話の報告を待つてゐるのです。私は心ひそかに、これ等の人物を「高等千三ツ屋」と名づけてゐるのですが、彼等自身は、自分等のことを、「ブローカー」の一種と呼びたいと思つてゐるに違ひありません。

一體かういふ連中は、どういふ人種かといふと、一口に云へば、みな中年の失業者なのです。中學卒業位の學力はみんな持つてゐて——中には、無論大學卒業生もゐますが——銀行、會社、商館等に勤めてゐたのが、中年になつてお拂ひ箱になつたものなのです。そも〳〵中年で失業したら、今の日本にどんな職業がありますか？　何もない。全く何もない。お拂ひ箱になる時、千や二千の金は退職手當として貰ふが、そんなものでいつまで生活の立つて行くわけのものではない。

直ぐ使ひ果してしまひます。かくいふ私自身も四年前、或會社を退めた時には、二千圓程の金を貰ひました。その金で今後食つて行かなければならないと思つた時の、その心細さと云つたら。丁度その頃大澤も亦彼の勤めてゐる會社をお拂ひ箱になつて、同じく二千圓程の金を貰ひました。そこで彼もそれで今後食べて行かなければならない心細さに、すつかり悲觀してゐました。そこで前から知合だつた彼と私とは――これは十年程の玉突友達だつたのですが――相談して、二人で出資し合つて、或建築の新聞を起しました。つまり建築家及び建築材料商の提灯をもつて、廣告を出して貰つて、その廣告料で計算を立てようといふ奴なのです。これは案外成功して、儲かるといふ程でなくとも、彼の家と私の家との生活費位はどうやらそこから生み出せてゐました。云ふのを忘れたが、彼も私も家族持ちで――もつとも四十前後になれば、誰だつて女房や子供のあるものですが、彼は女房と子供が二人、私は女房と子供が彼よりも一人多く三人ゐました。それが、どうやら食つて行けたが、併しだん／＼不景氣の深刻さ、それで前ほど廣告料が集まらなくなつてしまつたのです。廣告は出してくれる。併し料金が集まらない――そんな具合になつてしまつたのです。

金解禁の呼聲が高くなる少し前、たうとうその建築新聞も瓦解してしまひました。金解禁の前に止めたので、まだしも損害が尠かつたのですが、瘦せ我慢して、あれをずつと續けてゐたら、今頃はもう莫大な借金で首がまはらなくなつてゐたでせう。

そんな具合で、たうとう落ち込んで來たのがこの「我々の事務所」なのです。もつともこんな身の上は、誰でもの身の上と同じ事で、此處に集まつてゐる連中の大部分は、大概我々と同じやうな徑路を取つて、この「我々の事務所」に落込んで來てゐるのです。

我々知識階級――といふと口幅つたい事を云ふやうですが、我々の運命は今や大概かういふところに落込んだやうになつてゐます。實際我々には專門といふものは何もない。だからたとひ昨日まで鐵に關係した商賣をしてゐたとしても、翌日は、瀬戸物で飯を食はなければならないかも解らない。昨日は中學の先生をしてゐたとしても、急に何處からか出資者が

現れゝば、カフェのマネージャーとならなければならないかも解らない。何でもござれです。何でもそれが少しでも金になるなら、直ぐ首を突つ込まうとする。もつとも、いろ／＼な話が持上つて來て、又跡方なくも消えて行つたり、何處とかの資産家が二萬圓位の金を出して、銀座にほんたうにうまい洋食屋を作りたがつてゐると聞いて、その二萬圓が欲しさ、そつくり自分が使へさうな夢を見て、わたりをつけて、その金持に會つて見ると、それは洋食屋ではなくて、銀座の或時計屋の商品を抵當にして、二萬圓を貸したといふ話が、間違つてそんな風に傳はつたのだつたり、みんなそんな事ばかりです。それでもありもしない事を當にして、この我々の事務所に毎日やつて來る連中が、實際何人位ゐるでせう。

諸君が小柄で、年は相當に食つてゐさうなのに、童顔のために若く見える、鼻の低い、併し人の好ささうな、近頃は始終霜降りの背廣服を著てゐる、さういふ男を、このパーラーで發見したら、それが卽ち大澤藤三郎だと思つて間違ひありません。それから私は――自分の事を自分で云ふのは、一寸をこがましいが、併しでつぷり肥つて、八字髭を生やして、濃茶の背廣を著てゐる、一寸中年の辯護士といふ風采の男がゐたら、それをこの私だと思つて下さつても、さう見當は外れないと思ひます。

いや、これだけでは、まだ我々の事務所の事を、ほんたうには理解して頂けないかも解りません。我々はこのホテルのパーラーを、誰に斷る事もなく、めい／＼勝手に自分の事務所と心得て、使つてゐるわけなのですが、併し月に一日か二日位、一寸した金でも這入る時には、客室を借りる事にしてゐるのです。さうして置くと、帳場とも顔馴染になり、從つて、何處からか電話などのかゝつて來た時、直ぐ知らせてくれますから。

かういふ具合に、公共の場所――一種の公共の場所に違ひありますまい――を事務所にするといふ事は、今は一般的で、このホテルのパーラーなどを使つてゐるのはまだしも好い方です。東京驛の一二等待合室、三越、松屋、白木屋、その他のデパートの喫煙室、そんなところを事務所と考へてゐる連中がどの位ゐるか解らない程です。それから……いや、益々條談になりますが、諸君は新聞で、電話給仕付事務所一ヶ月五圓などゝいふ廣告を、御覽になつた事があるでせう。あゝ

云ふのは大きな事務室に卓子が澤山並んで、その卓子の上に卓上電話がそれ〴〵ついてゐます。その一つの卓子を一ヶ月五圓で貸すので、その外に共同の應接室が一つあり、訪客とはその應接室で面談する事にする。――つまり正確に云へば卓上電話のついた机と應接室との使用料が一ヶ月五圓といふわけになるのです。

中年になつて一定の職のない「高等千三ツ屋」――考へて來ると、東京市内にかういふ連中が充滿してゐるといふ氣がします。

さう云つた工合で、大澤がその「五萬圓」の公債を持つて來た時、何しろ四邊にうろ〳〵してゐる連中の聽覺と嗅覺との恐ろしさに、私は直ぐ彼を食堂に誘ひました。そして紅茶を啜りながら、

「直ぐ返して來給へ。そんなものは持つてゐるだけで、どんな災害が君の身にふりかゝつて來るか解らないよ」

「さうか知ら」

「さうか知らも何もないよ。――さういふものは、いつか發覺するに極つてゐるんだからね。冷靜に考へれば解り切つた事が、渦に捲き込まれると、解らなくなつて來るんだ。總ての犯罪といふものは、みんなそんなものだよ。――その瞬間「これは解らないだらう」さう思ふところから來るんだよ。隨分冷靜な人間でも、時々さういふ錯覺を起すんだ。早く返して來給へ」

「うん」最初の意氣込に似合はず、大澤は叱られた子供のやうにしよげ切つて、默つてゐましたが、併しその顏には、十分未練が殘つてゐました。

そこで、私は更に強く突つ放すやうに云ひました。

「これだけ僕が忠告して、それを君が聞かなければ、それは君の勝手だよ。併しどんな事になつても僕は知らないから。――君がそれを返さないで、その高田君の云ふ通り、仲買店にでも出かけて見給へ。早速僞造國債行使で捕まるから……」

「いや、返して來ないとは云はないよ」

淺々大澤はそれから直ぐ高田のところにそれを返しに行きました。

それから十日も經たない或日でした。新聞の社會欄の一番上に、三段ヌキの大標題で、『大仕掛の國債僞造團檢擧』の記事が掲げられたのは。——その記事の筆頭には首魁として、高田の名が出てゐました。

何でもそれは横濱の仲買店で不審を起したのが最初ださうです。一千圓の四分利公債が餘りに盛んに賣りに出る。そこで不審に思つて、その一枚を安田銀行の横濱支店で鑑定させたので、直ぐ解つたのださうです。

その記事を見た時には、大澤は今更のやうに蒼くなつて、慄へ上りました。

『あゝ、よかつたね。——實際君の忠告に從はなかつたら、僕も一網打盡でやられてゐたんだ』

『それ見給へ。實際直ぐ君が返しに行つたので、どんなに好かつたか知れないよ。——併し高田が首魁だつたとは驚いたね。實に巧みに誘惑するものだね。ボロ船の話まで作り上げて。——』

『あゝ、僕も驚いたよ。あの男が僞造の張本人とは思はなかつた。——昔はそんな大膽な男ではなかつたんだけれど……』

その話は併しその後は我々の間での笑ひ話となりました。

『一億圓に達すれば、政府でも手がつけられなくなる、とは吹いたものだね』

そしてその後何かうまい話があると、『例の一億圓ぢやないのか?』といふ風に私達は云つたものでした。

二

そこで、大澤が『うまい事を考へ出した』と云つた時、私は先づその一億圓を持出して、彼を揶揄したわけなのです。

『いや、そんなんぢやない。あの時は參つたが今度のは違ふ』頭を掻きながら、彼は小聲になつて、私の耳に口を寄せて、

『ねえ、君、「神様」をやらうと思ふんだよ』

『神様を?』

「神様」さ。ほら、靈術さ」
「靈術？　ああ、さうか」
　私は彼の云ふ意味がやつと解りました。
「併しその靈術を一體どうするんだね？」
「つまりそれで地方に治療に出かけるんだよ」
「君がか？」
「ああ、君と僕とがだよ。第一僕では風采が上らない。そこで僕が助手の形になつて、最初に患者を治療してしまふんだよ。その後で君が大先生と云ふ顔付をして、唯厳かに、僕のやつた通りをやればいいんだよ。さうすれば助手の僕のやつた事を大先生の君が仕上げをしたといふやうに患者は思ふよ」
「あつははは」と私は笑ひ出しました。「大膽不敵な話だね」
「僕は自信があるよ」と大澤は大眞面目で、「昨夜一晩寢ずに考へたんだよ。もうその外には今のところ行く道がないからね。東京もこの不景氣ぢや、毎日足を棒にしてほつつき歩いても、實際一文にもなるやうな事はありやしないぢやないか。――僕は先月と今月とで、やつと四十八圓、金が手に這入つただけだからね」
「それはもつともだよ。――僕にしたつて、二ヶ月でやつと五十圓位にしかなつてゐないからね」
「だから、僕は眞劍に考へたんだよ。冗談半分ぢやないんだよ。ひと頃不圖した事から研究した心靈術でも、若し役に立つならこの際役に立てるべきだ、と」
　私はまだ彼程眞劍には彼の計畫を考へられないので、笑ひながら、
「なるほど、さういふ彌次喜多も面白いかも解らないね。昭和の彌次喜多も。――」さう云ひましたが、併しさう云つてゐる中に、ほんたうにそれも面白いかも知れないといふ氣になつて來ました。實際大澤の云ふ通り、東京でこんな事をや

つてゐても、仕方がありません。毎日大抵この事務所で顔を見合はせ、何かうまい思ひつきはないかと額を鳩めて考へ合ひ、それから丸の内街をほつつき歩くのですけれども、益々洋服を着た働き盛りの四十男二人のふところを合はせて見ても、十銭は愚か五銭と纏まつた金がある事は滅多にない始末なのです。それがお互ひに妻子を持つてゐるのですから、我々の蔭の面——家庭生活が、どんなに逼迫してゐるかを御想像願ひます。まことに妻子を困らせてゐる所などは、餘り意氣地がなさ過ぎて、他人に話して氣持の好いものではありませんから、詳しい事は云ひませんが、何しろ毎日の我々の交通費——一口に云へば電車賃ですが、それだつて、互に妻の着物を融通したりして、それでやつと間に合はせてゐるわけなのです。夕方疲れて歸つて行つて、何かうまい餅でもはこんで來てくれたかと、首を長くして待つてゐる女房や子供の前に——おお、我々だつて、かう妻子を呼んだつて、差支へなからうではありませんか——、今日も一日中步いたのだが、お前達にみやげにするやうなものは、何もなかつたといふ事を知らせなければならないのは、どんなに苦痛でせう。これは無論親父に働きがないんだ。けれども、親父も働きはないのだが、併し又實際この世の中に、こぼれた餅などといふものは、今やなくなつてゐるのだ。それをどうか考へてお呉れ。そして我慢してお呉れ。併しその中には、何かうまい事があるよ。屹度とてもどえらい獲物にありつくよ。——無論一々そんな事を云つて聞かせるわけではない。そんな事を云つて聞かせてゐたら、こつちが悲しくなつて、泣きたくなつてしまひますからね。併しそんな事を腹の中で思つて、女房や子供の前で、ひそかに私はあやまつてゐるわけなのです。——併し、子供はえらいものですね。世の中のかういふ事を、ちやんと知つてゐますからね。私は早婚だつたので、長男は今年から中學に通ひ始めたんですが、それがどうでせう、『戰旗』といふ雜誌を友達から借りたと云つて讀んでゐますからね。……全く次の時代には、何か來ますな。このままでは納まりませんな。納まる筈がありませんよ。我々こそからもうこの世の中に虐げられて、意氣地がないけれども、正直に働いても働いても食へない、働かうと思つても働く事がない、さういふ世の中だといふ事を知つたら、誰だつて、じつとしてゐられやしませんからな。

そこで私は『大澤の云ふ事はほんたうにやつて見ても好いかも知れない』と思ひました。それに大澤の靈術といふものが、又決して莫迦にはならないものなのです。何でもそれを彼が覺えたのは妙な動機からで…それは今から十數年前、彼が新婚早々、彼の細君が悪性の關節炎に右脚をやられたのです。無論これは彼から出たもので、彼は花嫁をさういふ病氣にしてしまつた事に、我ながら戰慄すると共に、非常に責任を感じました。それでいろいろの専門醫に治療を乞うたが、餘程の悪性と見えて、少しも好くならない。そして或醫者などは、これは右脚を切斷しなければ、全身病になるとまで云ひました。大澤は罪のない花嫁を、彼の昔の放蕩故に、不具にしてしまふ事は、どう考へても不憫でした。それで醫者に殆んど見放された彼女のために、加持祈禱のやうな事も片つ端からやつて貰ひました。それも何の效果もない。ところが、或日、或人から勸められて、その頃有名だつた或心靈術の先生の門を敲き、その先生の治療を乞ふと、どうでせう、愛妻のさすがの頑固な悪疾が、だんだん快方へ向ひ、遂に五ヶ月ばかりで全快してしまつたのださうです。そればかりでなく、その後細君は子供までも生み、生まれた子供も何の故障もなく、よく育つて行つたわけなのです。

その事が大澤の心に強い感動を與へて、彼はその心靈術の先生に弟子入りして、三年間もその修業をやつたのです。私なんかは彼からそんな話を聞いても、てんで莫迦にしてゐましたが、或時——彼と一緒に例の建築新聞をやつてゐた頃の事ですが、突然私は齒が痛み出しました。すると、大澤が『よし、俺が癒してやらう』さう云つて、それから彼の心靈術を、私に施したのです。何でも彼は私を横に寢かせて、その側に坐つて、眞面目な顔をして、精神統一をやりました。そして下腹に力を入れて、うんと力味返つて、顔を眞赤にして——大澤の顔がそんな風になるかとはそれまで思ひもつかなかつたやうな、一種威嚴のある顔をして、それから彼の右の掌を私の頰の一寸側まで持つて來て、じつと呼吸をはかつてゐます。不思議な事に一種の電氣に似たやうな一つの感覺が、彼のその掌から私の頰に傳はつて來るやうな氣が確にしました。十分ほどさうしてゐる中に、私の齒の痛みは忘れたやうに何處かへ消えて行つてしまひました。

その時から彼は、社員の誰が胃痙攣を起したとか、頭痛がするとかいふと、直ぐその心靈術を持出して、それを療しま

した。

「どうだ神様の腕前は？」と彼は得意になつて云ひました。

そこで彼の心靈術で、若い社員達が「神様」といふ名をつけて、何か故障が起ると「それ、大澤さんの「神様」にやつて貰へばいい」さういふやうになつたのです。

だから、私は大澤の心靈術には、相當の價値を認めてゐたわけなのです。もつとも、それが飯の種になるなどとは、今の今まで考へた事はなかつたのですけれど。

「いや、なるほど、考へて見ると、それも好い考かも知れないな」

『僕の師匠なども、始めは地方ばかり歩いてゐたらしいんだよ。その中に腕もきまり、東京に信仰者も出來て、今では大久保で立派にやつてゐるからね。――數萬の財産も出來たといふことだよ」

大澤は希望に溢れた眼を光らしながら云ひました。

『これは君、こんな事から、どんな風に道が拓かれて來るかも解らないぞ」

そこで今度は私も乘氣になつて、二人で具體的な相談に取りかかりました。前にも云つた通り、大澤はどうしても私が大先生に化けなければいけないといふのです。彼は身體の小さい彼では、地方人をおどかすのに、貧弱すぎると自分で主張するのです。

『君は唯えらさうに構へ込んでゐて、さつきも云つた通り、助手の僕がやつた事を、仕上げるといふ顔付をしてゐればいいんだよ」

『さうかな。何だか可笑しいな」

さう云ひながらも、私は自分の肥つた身體や八字髭や、それから眼にキツい光のあるところは、適任かも知れないといふ自信を、ひそかに湧かせてゐました。

併し背廣といふのも變なものです。そこで二人が智惠をしぼつて、考へ出したのが、辯護士が法廷で著る、例の黑い辯護服、あれの古著がないかといふ事です。そこで東京中の古著屋といふ古著屋を漁つて歩いて見たんですが、流石は東京は廣いところですね、やつぱりそれが見つかりましたからね。下谷の入谷に近い方の一軒の店で。――それの形を少々變化させて、そしてそれを施術服として著ることにしました。

もつとも、こんな話はうまく行つた後なら話せるが、前以て話したら、『まあ、あなた、そんなにまで零落れなければならないんですか？』――から女房に決めつけられさうなので、私は家には、うまい仕事があるので、十日程出張して來るやうに云ひました。――心靈術の田舍廻りなんて云つたら、女房は香具師かなんぞのやうに思ふに極つてゐますからね。

併し大澤の方は大威張りで、細君に打明けたさうです。心靈術の有難さを十分知つてゐる大澤の細君は、寧ろ彼の思ひ付を賞讃して、彼を激勵したさうです。

『それはうまく行つてよ、そんな事からあなたも心靈術の大家になる道が拓けてよ、――女房はこんな事を云つて、今日は首途の祝ひだと云つて、赤の御飯など炊いてくれたつけ』

大澤がかう云つたのは、この東京にゐたたまれない二人の彌次喜多が、信州に向つていよいよ旅立つた汽車の中でした。

汽車に乘つて見ると、旅行に出るのも久しぶりだといふノンビリした氣がして來ました。私は嘗て木曾福島から中央線で名古屋に出た時、三留野から信州の飯田へ出る八里の山越しには、木曾峠、大平峠の二絕勝があるといふ事を車中で聞いて、是非行つて見たいと思ひましたが、時がなくて行けなかつたので、今度はそんなところも見て來たいといふやうな事を考へてゐました。

「兎に角、飯田に行つて見よう」

私は有名な天龍峽も見たいといふやうなところから、「飯田」を主張しました。それに飯田は山の中の町でありながら、人口が三萬もあるやうなところなのですから。

汽車の中で、二人はこのスタートを切らうとしてゐる新職業について、色いろいろな相談をしましたが、何しろ心靈術といふからには、大澤某、小西某では安っぽすぎる。そこで何とか威厳のある、響の好い名をつけなければならない。扨てどんな名をつけたらいいかといふ事で、いろいろ意見の出た末、これは何としても人の頭に印象し易いためには、地名——それも名所々々に因んだ名が好いといふ事になりました。

二人は手帳を出して、あれこれと日本の名所名を並べてゐましたが、やっと二つの名を選び出しました。

宮島雲海

阿蘇靈嶽

前者は無論安藝の宮嶋から取り、後者は云ふまでもなく九州の阿蘇山から取ったものでした。そして大澤が宮島雲海となり、私が阿蘇靈嶽となったわけでした。

「いよう宮島雲海氏」

「いよう阿蘇靈嶽氏」

二人は顔を見合はせて、笑ひ合ひました。

三

飯田は小都會といふ感じのする、纏まった、好い町でした。日暮れ方、そこについた我々は、町の中央どころに在るA旅館の、八疊二間つゞきの、少々立派過ぎると思って、内心びくつくやうな室を占領することが出來ました。

「心靈術師、阿蘇靈嶽、同宮嶋雲海」と麗々しく書いた宿帳に見入ってゐた番頭は、ふと顔をあげて、我々の様子を不審さうに眺めながら、かう訊いたものです。

「心靈術師と仰つしやいますと……つまり先生方はやつぱりお祈りをなさる方で？」

『いや、祈禱ではない。精神療法を以て如何なる難病をも癒す靈術だよ』

『ではつまり呪ひですな。――扨てこの間は姓名判斷で人の吉凶を占ふといふ大先生がいらつしやつて、この町で大仕掛に廣告なんかなさつたけれど、一向人が集まらないので、さんざんな目にお會ひなすつてお歸りになりましたがね。お蔭樣で手前共では宿料も頂けなかつたやうな次第でして。――さあて、さういふお方は帳場で何て申しますか？』

『いや、我々のはその呪ひとか姓名判斷とかいふものではない。さういふものと混同されては困る』と宮嶋雲海は早口に、番頭を納得しようとして喋り出しました。

『はあ、一寸下で伺つて來ますから』

番頭が立ちかけましたので、私はそこで大先生らしいおちつきを見せながら、

『これこれ、一寸待つて。――あんたにもいろいろお世話にならなければならないから、これを、少しばかりだけれど』

さう云つて、五圓札を一枚番頭の手に握らせたものです。

『へへえ、これはどうも』番頭はそれを握ると、現金にぺたりと坐つて、丁寧に辭儀をしました。

番頭が階下に下りて行くと、二人は顔を見合はせて、淋しく笑つたものでした。新職業の突つ端に、宿を斷られたりしたら、それこそすつかり意氣沮喪してしまひますからね。

『大丈夫だよ』

『結局大丈夫だよ』

このまま東京に直ぐ歸らなければならなくでもなつたら、今番頭に與へた五圓が、非常に重要な金だつたのですから。

やがて、二三人の足音が階段を昇つて來るのが聞えましたが、さつきの番頭に案内されて這入つたのは、此處の主人でした。五十五六の頭の禿げ上つた、見るから人の好ささうな人物でした。

『手前此處の主人でございます。毎度御ひゐきに預りまして、有難う存じます』さう云つて、丁寧に頭を下げて、『あの、

先生方は心靈術とかをおやりになりますさうで。……恐れ入りますが、頭痛を惱んで居るものでございますが、一つ御治療願へないものでせうか？」

その言葉に、大澤と私とは顏を見合はせて、互に安堵の胸を撫で下ろしました。

「それは御安い御用です。——宮嶋君、一つ施術して上げてくれ給へ」

「はあ、その位の事でしたら、先生でなくとも、私でも出來ますから」大澤は如何にも私を師と崇めてゐるやうな調子で云ひました。

「ありがたうございます。——清一、先生方が診て下さると仰つしやるから、御免蒙つてお這入りさない」障子の外に向つて主人が云ふと、二十位の顏色の惡い若者が這入つて來て、辭儀をしました。これは手前共の伜でございます。どうぞ何分よろしく御願ひいたします」

さういふ間に、宿のどてらの上から、例の黑い施術服を纏つて、改まつた樣子になつた宮嶋雲海は、端然と坐つて、

「此處にいらつしやい」さう云つて、若者を彼の前に呼びました。

雲海は眼をねむり、腹に力を入れ、呼吸の平靜をはかつて、所謂『精神統一』をはかつて居りました。やがて、彼の顏が紅潮して來て、例の不思議な威嚴が溢れて來ると、始めて眼を開き、右の掌に力を籠めて、若者の腦天の上一寸ばかりのところに、置きました。——それは見てゐるだけでも、力の這入つて來るやうな光景でした。

若者の顏は見る見る中に、生氣がついて來ました。十五分ばかりさうしてから、大澤は云ひました。

「これでよろしい。一二時間靜かに横になつてゐれば、すつぱりします。又明日もう一度診て上げるから」

「ありがたうございます。お陰樣で、輕くなつて參りました。ありがたうございました」

この出來事は、思ひ設けない幸運を我々にもたらしました。番頭の言葉にどうなる事〃と思つてゐた我々は、今や家中から歡迎され始めました。——全く宿の息子が、よくも頭痛を惱んでゐてくれたものです。

それから齒を痛がつてゐる女中が一人と、肩が凝つてゐるかみさんと、それぞれ大澤が施術してやりました。

「何分この不景氣でございますから、如何かとは存じますが、手前共も、極力町中を吹聽いたしまするでございます」

主人はさう云つて、上機嫌で室を出て行きました。不安が一遍に去り、乘氣になつた我々は、愉快に晩酌をやつて、早く眠りました。

翌日は町の印刷屋がビラの事でやつて來ました。その日中にビラを作つて貰ひ、それから新聞にも廣告を出して、その次の日からいよいよ本式に一般の施術に取りかかる事になりました。――併しその日の中にも、宿の主人の吹聽から、四五人の患者が、我々のところにやつて來ました。

東都靈心術の泰斗來る

如何なる難病痼疾と雖も、即座に快癒す。醫師に見放されたるものは來れ。施術期間は一週間なり。この機を逸して、悔を千載にのこす勿れ。

まあさう云つた意味を、もつと誇張した廣告ビラと新聞廣告なのです。

それが町々に配られ、新聞に載ると、朝からぽつりぽつりと患者はやつて來ました。

それに宮嶋雲海は一々施術し、それから彼の施術が濟んだ患者は、今度は私のところに廻つて來るのです。私は此處でボロを出すわけに行かないので、一生懸命になつて、彼がやる通りの眞似をしました。彼がやる通りの眞似をしてゐるといつか滿身に力が籠つて來て、十一月末のこの寒い土地にも拘らず、身體中が汗ばんで來ました。

「どうです、これで大分樂になりましたらう、お氣をつけてお歸んなさい！」さう云つて雲海の口眞似までしなければなりませんでした。

寒い土地の常として、慢性の神經痛が最も多い患者でした。頭痛や、齒痛ならば、大澤の一回の施術によつて、ぴつたり止りますが、慢性のものは、一回や二回ぢやさうすつぱりとうまく行くわけには行きませんと

「あなたのは慢性ですから、今直ぐぴつたり痛みが止るといふわけには行きませんが、併し大分よくなつたやうでせう」

「ありがたうございます。お蔭様で大変よろしいやうに思はれます」

「他の土地にまはらなければなりませんので、一週間しか此處には滞在出来ませんが、併しその間精出して御出で下されば、冬になつても、決して痛まないやうになります」

「ありがたうございます」

私も亦彼から黙つて来た患者に向つて、彼と同じ事を云ひました。

さうして初日には、どうでせう、約六十圓の上り高がありました。その中から二十圓宛を、彼と私とは、早速東京にのこしてある家族のところに送つたものです、當分の小遣として。その晩は晩酌の時に、二人は意氣軒昂として云つたものです。

「明日は今日の倍来るぜ。今日はまだ宣傳がそれ程行きとどいてなくてあれだから、明日はどう少く考へても、あれの倍来る。——あれの倍来ると、百二十圓か。併し二回目からは施術料が割引してあるから、初回と二回目の虚中となり合はせて、先づ百圓といふのが好いところかな。百圓——悪くないな」

「悪くない」

實際東京にゐたら、百圓だの百五十圓だのといふ金を、二日やそこいらで儲けるなんていふ事は、今ではや夢にもありはしないのですから。——二人は得意の絶頂でした。

翌日になつて見ると、併し豫想通り、昨日に倍する程の患者は来はしませんでした。略前日と同じ位の数でした。収入は約五十圓程。

だが、此處に不思議な事には、二日間約四十名の患者に、大澤のやつてゐる事と同じ事をやつてゐる間に、私はへんなおちつきと自信とが自分に出来て来たのを感じました。つまり一口に云ふと、何といふ事なく、自分の事からも、大澤と

同じやうに、靈氣が發し始めたのではないかといふ氣がし始めたのです。

『これで大分氣分がよくなつたでせう』

「ありがたうございます。お蔭で大變輕くなりました」

どの患者ともどの患者とも、かういふ挨拶を交はしてゐる間に、それが單に形式的な挨拶ではなくて、ほんたうに實感が籠つてゐるやうな氣がして來ました。

私は嘗て太靈道の田中守平氏の實驗を見た事がありました。みなさんも多分覺えておいでの事と思ひます。新聞一面の大廣告をした太靈道、有田ドラックと新聞廣告上で宣傳を競うたあの太靈道の田中守平さんです。あの田中守平さんが、都下の各新聞記者を呼んで、その實驗を見せた事があります。偶然私の友人の或新聞記者が、私を誘つてくれたので、麹町番町にあつた太靈道本部の道場に、私も新聞記者に化けて、這入り込んで行つたのです。そして田中さんの所謂『靈子發動の實驗』を見せられたのです。

悠然と演壇の上に立つた田中氏は、長髮白皙で、貴公子然とした風貌の美丈夫でした。彼は人間は總て靈力を有するものである事、各人は先天的に、程度の差こそあれ、それを持つてゐるものであるから、合理的方法によれば、それを外部に發揚出來る、つまりそれが靈子の發動であるといふ事を、いろいろ例を引いて、說明し、扨てそれから實際に取りかかりました。その實驗の一つとして、彼は部厚な百科辭典を卓上に置いて、その上一尺ばかりの空間に掌を置き、何か呼吸をはかるやうな樣子をしてゐましたが、『えいッ』とひと聲氣合を掛けて、掌を上に動かしたかと思ふと、その百科辭典が操りか何かのやうに、その掌の動く通りに動き出したものです。上に上げれば上について來、右に動かせば右について來、左に動かせば左について來る。それから今度は卓子に對しても同じ實驗をしましたが、卓子でも、彼の思ふがままに動いたものです。――私はそれを見ながら、驚嘆した事を覺えてゐます。

猊下などと人に呼ばせてゐた彼に反感を持つて、アラを搜さうとしてゐた記者達も、それには舌を卷いて、翌日の新聞

に彼の靈力を天下に向つて紹介しないわけに行かなくなつたものでした。

私はその時の田中氏の不思議な力を思ひ出して、全く我々でもさういふ力があるものなのだといふ事を、患者に向つてゐる間に信ずるやうになつて來ました。

「つまり自分がそれを信じ、相手にもそれを信じさせれば、僕自身の掌からも、靈氣が出るに違ひない、

さう大澤に向つて云ふと、

「そんな簡單なものぢやないよ。かう見えて、僕などは三年間も修業したのだからね」とまるで彼の專賣特許であるかのやうな事を彼は云ひました。

序でに云ひますが、一時御殿のやうに盛んだつた、あの麴町の太靈道の道場が、いつの間にか消えてしまつた事に、お氣づきの方はお氣づきでせう。あれは田中守平さんが通力を失つてしまつたとかいふ事です。何でも今は故郷(くに)に引つ込んでしまつたとか。通力を失ふ……とは、さう云つては何だけれど、面白い現象ではありませんか。

四

兎に角、私はその仕事がだんだん面白くなつて來ました。自分にも通力があるといふ事が、確かに信ぜられて來ました。自信が出て來たのです。

ところが仕事が面白くなり、自信が出て來たのに引換へて、患者は毎日激減しました。最初の日の工合では、日延べまでしなければならない位の豫算だつたのが、三日目からガラリと減つて來ました。これには弱りました。

併しよく考へて見ると、それも無理もありません。初囘の施術料は金參圓也なのですから、歯の痛みや頭痛のやうな簡單なのはやつて來ません。歯の痛みなどは、二十錢も出せば、歯醫者で直ぐ止めてくれますし、頭痛ぐらゐなら、何も金參圓を拂つてまで、我々のところに來る筈はありません。そこで前にも云つた通り、慢性神經痛が主で、その他は肺結核

患者、胃が〻患者、それからいろ／＼の雜病痼疾――そんなのは、どんな奇蹟が行はれるのかと思つて、この不景氣にも、參圓も拂つてやつて來るが、少し位心持は好いにしても、すつぱり一囘や二囘の我々の施術で全快するわけでない。だから一囘來て來なくなる。中に二囘までは來た患者はあるけれども、三囘來たものは一人もない。――それ等の事が町に傳はつて行つたら、益〻新患者は來なくなる。

それでも三日目にはまだ十人程來たのが、四日目には五人になつてしまひました。それから後三日間に、一體どれだけの患者が來るでせう。――四日目の晩に、我々は晩酌をやつた時には、醉もなかなか發して來ないやうな心細さでした。さうなると、宿の手前もびく／＼者です。新聞廣告料（田舍ですから僅ですが、僅と云つても、今やそれも重要なものになつて來ました）や、ビラ代もまだ拂つてはゐません。宿賃が後三日もゐたら、どういふ事になるか、考へれば考へる程、じつとしてはゐられない頼りなさです。

番頭が最初に小首を傾けた顏つきが、眼にちらつき出しました。姓名判斷の男が這々の體で逃げて行つた光景も、今は人事とは思へませんでした。

「これは打切るなら早く打切つた方がいいぜ」

「明日の午前中だけの樣子を、兎に角、見る事にしよう」

そんな事をひそひそと話し合つてゐました。

その晩は酒が却つて、二人の氣を沈ませるばかりなので、二人はぶらぶら町でも歩いて見ようといふ事になつて、どてらのままでぶらぶら出かけて見ました。

寒い晩でした。町には人通りも殆んどありませんでした。それでも、なるべく明るい灯のついた方へと歩いて行くと、だらだらと坂を登り切つた上に、小さな劇場や活動小舍が竝んでゐました。多分この邊がこの町の盛り場なのでせう。その附近には料理屋風の家もポツポツあつて、三味線の音がぽつんぽつんと不景氣に聞えて來ます。併し大體の樣子から察

すると、この町も日本國中の何處の町とも同じ事で、今や沈滯のどん底にゐるやうに感ぜられました。

どてらだけでは、寒過ぎました。と云つて、その邊の料理屋に押上つて、一杯やらうといふ事も、ふところの都合に、中々氣が出ないので、二人は又宿の方へとぼとぼと歸りかけました。

丁度その時、活動がはねたので、一と塊りの群集が、蜘蛛の子を散らすやうに、小舍から出て來ましたが、その中に二人の藝者をつれた一人の男が、我々と出會頭に

「やあ、これは先生方」と聲をかけました。

見ると、それは我々と同じ宿屋の、我々の部屋から三つばかり部屋を隔てた部屋に滯在してゐる男でした。五十位の、一寸見ると人品の卑しくない、眼がギヨロリと光つた男でした。我々は宿の廊下ではよく顏を合はせてゐましたが、併し挨拶したのは今日が始めてでした。何ものであるかは解りませんが、午前中は俥を呼んで何處かへ出かけて行きますが、午後からは大概藝者を呼んで、大きな聲で笑ひ聲を立ててゐる男でした。

「好いところでお目にかかりましたな。一度お近付になりたいと思つてゐましたが、どうです、これからその邊まで一寸おつきあひ願へませんか。飯田の町も、これで又ひなびた面白さもあるところですぜ」

「いや、折角ですが、これから宿に歸らうと思つてゐたところですから」

「まあ、いいぢやありませんか。先生方は餘り固過ぎますよ。晝間はそれは患者を前にして、暢氣な顏もしてゐられないでせうが、夜ぐらゐ少しはハメを外したつて……浩然の氣をたまには養はなくつちや、全く身體が堪りませんや」

大分醉つてゐる樣子でした。

「いや、併し失禮しませう」

「まあ、さう仰つしやらずに」

「又明日早いですから」

我々とても、飯田の料亭の一軒ぐらゐ、上つて見たくない事はなかつたのですが、兎に角、ふところがふところたのと、それに知らぬ他郷で、知らぬ男からの振舞酒なんかには、ありつきたくはありませんからね。

『さうですか、それぢや私も御一緒に宿に歸る事にしませう。是非ひとつあなた方とはお近付になつて、お話ししたいとかねがね思つてゐたのですから』

『あら、きーさん、宿にお歸りになるなんて、ひどいわ』と藝者の一人が云ひました。

『もうお前達の顏を見てゐるのにも飽々したからな』

『あら、そんなひどい事を云つて。――御覽なさいな。小絲さんが泣きさうな顏をしてゐるぢやありませんか』

『あつははは、だが、今夜はこの先生方とどうしてもお話がしたいんだ。――又明日の事だ〳〵』藝者達に向つて手を振つて、彼は我々の方を向いて『あつははは』とひと聲高笑ひをして、『田舍に來てゐますと、こんな莫迦をやつてゐなければ、退屈でやり切れませんからな』

『いや、大した御景氣で結構です』と大澤は仕方がなささうに云ひました。

宿に歸ると、その見知らぬ男は、是非彼の部屋に寄つてくれと云つて聞かないので、餘り否む事も出來なくなつて、一寸立寄る事にしました。それはこの宿屋での最上等の部屋に違ひありません。八疊と十疊との二室續きで、家具調度が我々の部屋よりは大分上等です『大した豪勢振りだな』と弱つてゐる時のさもしさで、この男の生活程度を一寸胸算用したりしました。

女中が酒肴をはこんで來ました。女中なんかの親しみを持つた馴々しい態度からも、この男が餘程の歡迎を受けてゐる事が解りました。

世間話で盃のやり取りをして、大分氣分が熟して來ると、その男は何か上から見下すやうな調子になつて、

『時に先生方の御商賣は如何です？』

「いや、どうも不景氣で、一向面白くありません」

「毎日二十人平均はありませんかね？」

「二十人平均あればいいんですが、それは最初の二日だけで、だんだん惡くなるやうです」

フム、フムと彼はうなづいてゐましたが、急に顔を上げて、

「さう云つちや失禮ですけれど、先生方はまだ旅は一向素人ですな」

「さう見拔かれたら仕方がありませんが、地方に出て來たのは、今度が始めてなんです」

「さうでせう、さうでせう、私は始めからさう睨んでゐましたよ。何しろ先生方のやり方は餘り正直過ぎますからね」

「さうでせうか」

「ああ云ふのは、かうしなけれやいけませんや。初回の施術料三圓はいいとして、その上に特に念入りの施術といふ奴をひとつ拵へて置かなけれやいけねえ。齋戒沐浴して施術するとか、香を焚いて、別室につれて行つて、上に引つかける衣――さう云つちや失禮ですが、あの黑い衣ですな、あれぢやない、別に何か緋の衣でもこしらへて置いて、それを引つかけて、嚴かにやらかすんですな。その特別の施術料は二十圓とか三十圓とか吹つかけるんですよ。どうせ一度こつきり來やしないんだし、效いたか效かないかだつて、さう云つちや云ひ過ぎかも知れませんが、云ひ過ぎたら、こいつは酒の上だと思つて、どうぞ御勘辨下さい……」

「いや、どう致しまして。却つて大いに參考になると思つて、謹聽してゐます」

「ねえ、さうでござんせう、效いたか效かないか解らないとなりや、三圓でも高うござんすよ。その代り效いたとなりや、二十圓だつて三十圓だつて廉うござんすよ。それに特別施術までやつて、二十圓も三十圓も出して見れや、そこは人情から云つても、二日や三日は效いたやうな氣のするもんでさ。……此處に氣がつかないといふところが、先生方の正直すぎるところですよ」

「なるほど、もつともです」

「三圓で釣つといて、少し難症には特別施術と吹つかける。難症だから、今まで隨分お醫者にも金を取られつけてゐまさあね。お金を多く取られるのは當り前だと思つてまさあね。ですからそんなのは、二十圓でも三十圓でも出したがりますよ。それだけ出して效かなかつたとなれば、それはそれで又あきらめが好いもんだ。隨分いろいろ手を盡したが、結局業病で效かなかつたと、そんな風に本人も思ひ、その一家の者も思ふもんですよ。手を盡すだけは盡したんだから、かういふ廻り合せと思つて、あきらめるより仕方がない。心殘りもない。——と、まあ云つて見れば、病人なんていふものはみなんさうでさあ。ですから、三圓の外に特別施術料と吹つかけたつて、五人に一人や十人に二人は、屹度それを拂ふ奴が出て來まさあ。一人さういふのが出りや、十人分につつかふんですからね、大きいもんでさあね」

「なるほどね」

我々は彼の一理ある言葉に全く感心しました。その意氣で行くのがほんたうなのかも知れない。旅を渡るのには、さうなければならないのかも知れない。彼の云ふ通り、今まで見た患者の中でも、五人や十人、その特別施術を拂つてくれたのがゐたかも知れない。——若し五人でもさう云ふものがゐたら、それだけでも、今頃こんなに心細がつてなどゐないで濟んだかも知れない。——何ものとも知れない旅の男の前に、我々がまるで子供のやうに他愛ないものに思はれて來ました。

「それに、さう云つちや何だけれども、心靈術なんてえのが、もう古い手でさあ。かう不景氣になつちや、そんなものを信ずるものはありやしませんからね。——私や二十年もかうして旅で暮して隨分いろいろな事をやつて見ましたが、さういふものは、はやりすたりがありましてね」

一體この男が何ものであるかに興味を惹き起されかけてゐた私は、そこで彼に訊きました。

「失禮ですが、あなたはどういふ御商賣で？」

「いや、儲けた事をやつてゐますがね」口ではさう云つてゐながら、彼の顏は一層に得意に輝いて來ました。「どうも君から自力といふ奴は、骨が折れるばかりで、うまくは行きませんでね。やつぱり他力に限りますよ。あつはははは——他力本願ほど樂で、往生出來るものはありませんからね。一つあなた方にも御利用なさいますかな。いや、つまらない冗談ですけれど、御覽なすつてお笑んなさい」

彼は机の下の籠の中から、紺の風呂敷に包んだ、まるで小學校の免狀の小形なやうなものを取り出しました。

「これなんで」

我々の前に置かれたその紙片は、長野の善光寺の建立の寄附募集の書付でした。それにこれを持參の寄附金募集人は、寺より派遣したものであるから、御信用下さいといふ事を書いて、役僧の署名捺印があり、その上に大きく善光寺といふ判が捺してありました。

「如何です。簡單なものでございませう。これは極く内證の事ですが、一ケ月につき三十圓宛の金を拂つて、あすこの役僧から買つてゐるものなのです。この書付に日限が切つてありませう。その三十圓の月謝が滯ると、次の免狀をくれないといふわけなんですよ」

「なるほど」

「その月謝さへ月々送つてやつて置けば、集まつた金は、みな此方の使ひ放題ですよ。ああ云ふところには、建立の寄附といふ事になれば、寺から云つて直ぐ寄附するものがちやんとあるんですからね、こちとらの集めるものなど待つてやしませんや」

「ほう、それはなかなか惡どいものですね」

「惡どいも惡どくないもありやしませんよ。善光寺樣に寄附した氣になつて、お金を出した連中は、善光寺樣の土臺石の一つに自分の寄附がなつてゐるものと信じてゐれば、それでいいんですからね。それであの世に行つたら、浮ばれると思

つてりや、それでつまり浮ばれるものなんですからね。——善光寺樣の土臺石になつたつて、ならなくつたつて、そんな事はどつちだつて同じぢやありませんか。早い話が、善光寺そのものがそれで善男善女からへそくりを掻き集めようが、この私がそれを掻き集めようが、結局は同じ意味ぢやありませんか。要するに寄附者の心持が、それで有難ければ、それでいいんですからね』

『……世の中には、なかなかいろいろな商賣もあるものですな』

『隨分いろいろな商賣が全くあるものですよ。併しこの寄附募集も、心靈術も、さう云つたら、あなた方は違ふと仰つしやるかも解りませんが、根をたづねれば、人の弱味につけ込むといふ點で、五十歩百歩ぢやありませんか。——さうはお思ひになりません？　一つは現世で苦痛を鎭めたいと思ふところにつけ入り、一つは來世の不安から逃れたいと思ふところにつけ入つてゐる點で。……あつはは、氣をお惡くなすつたら、勘辨して下さい。私や晝間から飲つてゐるものですからね』

この雄辯な、我々に想像もつかないやうなこの『利口な男』から、我々は壓倒された形でした。大澤も私も憂欝になつて默つてゐました。

『いや、時に先生方、先生方も一つ宗旨を御變へになつたら、どんなもんですな。現世で苦しがつてゐる者を相手にするよりは、來世の事を氣にしてゐる連中を相手にしてゐる方が、氣が樂ですぜ。それにさつきも申した通り、これは總て他力で行きますからな。こつちも善光寺樣をかつぎ出して、何もかも善光寺樣に責任を負はせてればいいんだし、相手の方でも、唯善光寺樣をありがたがつて、それで末世が浮ばれると思つてればいいんですから。——つまり此方も他力本願、先樣も他力本願でさあ』

『……………』

『どうです、御宗旨をお變へなさい。惡い事は云ひません。——若し御宗旨を御變へになるなら、五十圓宛御出しになれ

ば、明日でも直ぐ善光寺に行つて、取つて來て上げますよ。彼奴なかなかの奴ですからね、三十圓の外に二十圓位の鼻藥をやらなければ……」

我々はそこで暇を告げて、彼の部屋を出ました。我々の部屋に歸つてからも、我々は暫くぼんやり顔を見合はせてゐました。我々は確に彼から煙に卷かれてしまつたのです。

ほんたうに彼の云ふやうな商賣があるのかないのか知りません。長野の善光寺ともあらうものが、あんなものを出してゐる筈はないだらうとは思ひます。だから、あの免狀も好い加減のものかも知れません。併し彼が確にそんなものを持つて、それで贅澤ざんまいに暮してゐるのは、我々がこの眼で睨んだところなのです。

『いや、若しかすると、あれはみんな唯のカラクリで、我々から五十圓づつ捲き上げようといふのが、奥の手だつたかも知れないぞ』暫くして私が云ふと、大澤も、今自分も丁度さう思つたところだと云ひました。

二人は暫く顔を見合はせて、眉唾物を警戒するやうな微笑を交はし合ひました。

翌日、我々はその町を立つて、東京に歸りました、這々の體で。どうやら宿賃その他は拂へましたが、併し行く時無理算段した旅費は、遂に歸つて來ませんでした。



高原

宇野千代

高原

汽車が着いた。山の溫泉はまだここから十里奥だ。乘客はみな降りた。一番あとから、一人の若い紳士と四五人の若い淑女たちとの明るい賑やかな一團がゆつくりと降りて來た。小さな停車場はびつくりして眼をみはつてゐるやうに見えた。

實際、彼らは間違つてこんな邊鄙な土地へ遊びに來たのに違ひない。山道はとても險はしいのだ。何に乘つて彼らは山を越すつもりだらう。——古ぼけた箱馬車は遠くから彼らを見てゐた。それにはもう一ぱいに、やはり古ぼけたお客たちが乘つてゐた。馬車はごつとんごつとん動きだした。

曇り日のひるであつた。彼らはまだ、茶店の前に立つてゐた。

「あ、來てよ。」

汝女の中の一人がさう言つた。停車場の向ふの往還から一臺の自動車が走つて來た。山の下の町から、彼らのために廻つて來た自動車だ。

われ勝ちに汝女たちはそれに乘つた。

「加田さん、もう乘れなくつてよ。とても乘れないわ。」

「ねえ、おねえさま。加田さんおいてきぼりにするんでせう。」

「ほんたうよ、加田さん、運轉臺じやアなきア空いてないわ。」

口口に言ふのが聽えた。若い紳士は却つて愉快さうに、

「構ひませんとも、幌の上にだつて何だつて乘れますよ。」

「旦那ア、」

すぐ背後から、一人の馬子が聲を掛けた。「馬はどうだね？」

若い紳士は振返つた。馬子は素晴しい栗毛の馬を曳いてゐる。それには鞍がおいてあつた。

「やア、こいつア巧いや、」

「馴れとるだからね。平氣で乘つとれば好いだ、平氣で、」

「冗談じやアない、口をとるのかい？」

若い紳士は笑ひ乍ら馬子の手から手綱をとつた。彼は馬の名手なのだ。片足を鐙にかけてひらりと跨ると、輕く一鞭あてた。乾いた蹄の音と一緒に鈍く砂塵が上る。馬子は背後から驅け出し乍ら叫んだ。

「旦那ア、馬ア、向ふの茶店へ預けといて臭らつせえよオ、」

見る見る、馬は砂塵の向ふに消えて了つた。道は山懷を廻つてゐて、丁度そこから杜の中へ見えなくなつてゐるからだ。

「ずるいわア、加田さん、」

「競爭よ。ねえ、おねえさま。あんな、馬なんか、すぐ拔いちやつて好いでせう？　ねえ、好いでせう？」

「面白いわア、面白いわア、」

美しい騷音をのせて、自動車もまた同じ方向へ疾走した。海拔一千六百米の頭上に、空は雲をもつて低く垂れてゐた。霧が一ぱいこもつてゐるのだ。ただ疾走する空間だけが霧の中を裂いてゆく。道と山肌の斜面と樹とが見えた。里程表はチヨークのやうにぽきぽきと折れ乍ら背後の方へ見えなくなつた。

馬車が見えた。道ばたに立ちどまるのが見えた。それは丁度驚いて行人を見送つてゐる田舍の人のやうであつた。自動車はすれすれに、その側を追ひ拔いて行つた。

「お、見えてよ。」

淑女の一人が叫んだ。「加田さんが見えてよ。あそこに、ほら、あそこに見えてよ。」

霧の中に動いてゐる影が見えた。すぐ近くに見えた。忽ち、馬の背中と鞭とそれから光る拍車とが見えた。若い紳士の幅の廣い肩が見えた。それからは霧と、自動車のセルロイド板とを透して、夢のやうに朧ろげに、けれどもはつきりと浮いて見えた。

「加田さアん！」

「おうオ！　――ステキだわア、ステキだわア、」

「ごらん遊ばせよ、おねえさま。綺麗なんですもの、綺麗なんですもの、」

淑女たちはもう、競爭のことを忘れてゐた。どこまでもこんな風にして一緒に行くやうに思つてゐた。何と言ふ愉しいドライヴだ。――夫人はさう思つた。（さうなのだ。それはきつとどこかの高貴な夫人に違ひない。）若い淑女たちの中に、その夫人だけが、くすんだ色の和服を着てゐた。彼女と若い紳士とは熱烈に愛し合つてゐるのであつた。けれども、誰もそれを知らない。世界中の誰もそのことを知らないのだ。彼女の胸には、あの、大切な持ちものを讃められてゐるときの

やうな歡喜が水のやうに流れてゐた。あのひとはあたしのものなのよ。彼女の心の中でさう言つてゐるのであつた。彼女はその溫和な頰に美しい微笑を浮べてゐた。彼女は全く靜かであつた。

「あ、拔いてよ。」

叫び聲と一緒に、自動車は馬の橫手を掠めて疾走した。若い紳士は鞭を上げて、何か短く叫んだ。上氣した顏が振り向いたのが見えた。追ひぬいた。ゆく手にはもう何にも見えなかつた。

高く歡聲が上つた。そして直ぐ靜まつた。淑女たちはちよつとの間ものを言はなかつた。風が出たのだ。見る見る、霧が晴れ上つて、靑い空が見えた。山が見えた。山を廻つてゐる道が見えた。ふいに谷底から凄じい水音が聞えて、おり重つて繁樹の下に瀧が見えた。あんなところに谷があつたのだ。

「千仭の谷」と言ふのはあのことだ。淑女たちは驚いて體を寄せあつた。

「おうォ！」

狹い、ほんの二間とはない道なのだ。どうして、誰も怪我をしないでこんなところを通り過ぎるのであらう。——だが次第に道はゆるやかになつた。谷もまたゆるく傾斜して、低い低い、パノラマのやうな遠景に、靑い田圃だの家だのが見えた。そこには陽がさしてゐた。

「おうォ、こはかつた。」

淑女たちはもう一度くり返した。

軈て、廣い高原に出た。自動車は、がつ！　と車體をのめらせて、それからゆるく辷つて行つた。ふいに道が平坦になつたからだ。空はすつかり霽れてゐた。見る限り、空と草原であつた。一面に丈の高い茅萱が繁つてゐた。躑躅が咲いてゐた。自動車は茶店の前で停つた。

淑女たちは車から下りた。彼女たちの顏は美しく上氣してゐた。運轉手は急いで茶店の裏の方へ廻つて、筧の水をのん

だ。ごくごくと音を立ててのんだ。

「あ、鯉がゐてよ。おねえさま。大きな、とても大きな鯉ですよ。」

和服の夫人はひとりでおもてに立つてゐた。眼をこらして、空と高原との線になつてゐる一點を見詰めてゐた。

「あ！」

ふいに短く叫んだ。彼女は見た。遠い茅萱の地平線に一匹の裸馬が、それはあの若い紳士を乗せてゐた栗毛の馬が、鞍を地面に引摺り乍ら、まつしぐらに疾走して來るのを見た。

悲劇

あのひとはおととひの晩歸つて來たの。あのひと、このごろよくどこかへ行くのよ。でもあたし、どこへ行くんだか訊いたことなんかないの。あたし、あのひとのことちつとも氣にしてなかつたの。いつ出て行つたのか知らないことがあるの。あのひと、それは靜かなんですもの、うちにゐたつてゐなくつたつて、同じやうだわ。あたしちつとも氣がつかなかつたの。長いこと一緒にゐると、どんな夫婦だつてさうなるわ。そいでね、うつかりしてあたし、ゆふがたまで着物ほつといたの。

あのひと書齋へ脱ぎつ放しにしてるんですもの。このごろはあのひとも、それからあたしも、ひどくもの臭さになつたのよ。あたしひとりで唄を唱ひ乍ら、着物たたんでたの。するとね、袂の中に何だかごろごろしてるの。何だか詰んない紙つきれが這入つてるの。

あたしひとりで燥いでたの。やつぱり唄をうたひ乍ら擴げて見たの。可笑しいことが書いてあつたわ。そオりや、へんてこなことが書いてあつたわ。

「先生」つて書いてあるの。「先生のお美しいお心は神さまのやうでございます。」つて。ね？ 可笑しいでせう？ 神さま

のやうなんですつて。「先生のお姿からは眩しい御光がさしてゐるのでございます。哀れなみよはその御光に包まれて、やつと生きてゐるのでございます。」そんなことが書いてあるの。先生つて言ふのはあのひとのことなのよ。とてもお可笑しいわ。ね、可笑しいでせう？　あたし唄をやめて笑つたの。だつて可笑しいんですもの。御光がさしてゐるなんて可笑しいんですもの。

「きぬ、きぬ。」つて、あたしばあやを呼んだの。あんまり可笑しいからあたし、あのひとをかまつて遣らうと思つたの。「旦那さまはゆふべお出ましになりました。」つて言ふのよ。あたし知らなかつたの。――何だかあたし、ステキなことが始つたやうな氣がしたわ。だつてあのひと、そんな可笑しな祕密をもつてゐるんですもの。それをあたし知つたんですもの。

「おい、」つて聲がしたの。あのひとが歸つて來たのよ。裏庭から廻つて、窓のそとから呼んでゐるの。「好いものを買つて來たよ。」「なアに？」「ショール。青いショールだよ。」あのひとはあたしにショールを買つて來たのよ。窓のところからそれを擴げて見せたわ。あたしの好きな色なの、ステキなラクダの無地なの。あたし、わざとすねたやうな顏をして遣つたのよ。「そんなものいらないわ。」さう言つて遣つたわ。あたしまだ膝の上に、手紙を持つてたの。「そんなもので胡麻化さうと思つて、」あたしさう言つたの。そんなこと、どうしてあたし巧く言へたんだか分らないわ。あたしまた言つたわ。「だまされやしないわ、もう。」「何を言つてるんだ。」あのひとはさう言つたの。慄へ聲でさう言つたの。

そりやア可笑しかつたのよ。あたしたち、ついぞ、そんなこと言ふことなんかなかつたんですもの、とてもあたし、面白かつたわ。「白つぱくれたつて駄目だわ。」わざと怒つたやうな聲をしてさう言つたの。「そんなもの、誰かに遣ると好いわ。」

「何を言つてるんだ。」あのひとは同じことを言ふのよ。前よりもつと低い聲で、もつと慄へ聲で言ふのよ。ばさつて音がしたの。あのひとショールを落したのよ。窓のすぐ下のところへ落したのよ。あたしちらとその方を見たの。それか

ら、じつとあのひとの顔を見たの。あのひとのそんな顔、あたし一度も見たことなかつたわ。見てる間に、だんだん蒼くなるの。頬だの唇だのが慄へてるの。そいで、眼だけとてもおつかないの。可哀さうなひと。あたし、あのひとが可哀さうでしようがなかつたわ。だのにあたし、めちやくちやを言つて遣つたの。「ひとを馬鹿にしてるわ。馬鹿にしてるんじやァなくつて？ あたしみんな知つてるわ。どうしてそんなものを買つて來たんだか知つてるわ。そんなこと一度だつてなかつたわ。一緒になつてもう三年にもなるのに、一度だつてそんなもの買つて呉れたことなんかなかつたわ。」

あたし出鱈目を言つて遣つたのよ。「あなたはまるで變つたわ。とてもお愛想がよくなつたわ。とても親切になつて來たわ。」あたし憎らしくつて堪らないつて言ふみたいにさう言つたの。あたし何ともなかつたのよ。あのひとのこと、これんばかりだつて憎んでやァしないのに、さう言つてるうちに、あたし、何だかほんたうにあのひとが憎らしくなつて來たの。「何を言つてるんだ。」あのひとはまたさう言ふのよ。何だか、肩で呼吸（いき）をしてとても蒼い顔をして無理に笑はうとしてるやうなのよ。」

「あたしみんな知つてるわ。このごろ、どこへあなたが行つてるんだか知つてるわ。書齋だなんて、あたしちやんと知つてるわ。あなたは女のひとと家をもつてゐるんだわ。その女んとこで泊つて來るんだわ。こないだの書物卓子だつて、—」

あたし、めちやくちやに、あてずつぽうに言つたのよ。書物卓子だなんて、あたし、どうしてそんなことを思ひ出したのか分らないの。あのひと、いつだつたかさう言つたのよ。書齋だけ、もつと靜かなところへ移すつて。ここはとても騷々しいの。おもてにギャレーヂが出來てからとても騷々しくなつたの。こんなとこで書きものなんか出來ないのよ。あたし夢にもそんなこと信じてやァしなかつたの。そんなことあるもんかつて、一言あのひとが言つて呉れたら、すぐあたし笑ひ出して了つてよ。あんな手紙のことなんかで、あんな可笑しな手紙を書く女のひとのことなんかであたしが妬くなんて、あたし、これんばかりだつて妬いてやしなかつたわ。あたし、あてずつぽうにめちやくちやに言つたんだわ。あのひと、こないだ書齋へ書物卓子を運んだのよ。その書物卓子のことをあたし、出鱈目に言つたんだわ。

「せい子、」あのひとあたしを呼んだわ。あたし、あのひとが怒つていまにも飛びかかつて來るかと思つたのよ。だのにあのひとは怒らないの。「せい子、」あのひとまた呼んだわ。「俺はどうしたら好いのか言つて呉れ。自分で俺は自分の氣が判れないのだ。お前の言ふことはみんなほんたうだ。だけどせい子、俺の言ふことも信じてお呉れ。俺はあの女と一緒になる氣なんか夢にだつてなかつたんだ。俺はさう思つて馬鹿にしてかかつてゐた。よさうと思へば直ぐ止せる。俺はさう思つてたんだ。ほんの氣紛れだと思つてたんだ。さうなのだ。それ以上の何でもありはしなかつたんだ。――だけど、もう遲い。」あのひとは低い聲でさう言つたの。「いまになつてはもうどうすることも出來ないのだ。」

「寄つちやアいや！」ふいにあたし、窓のところから飛びたつてさう言つたの。あたし、いまにもあのひとが、みんな嘘だつて言ふのを待つてたの。あたし、大きな聲でさう言つたの。「そこに立つてちやアいや！　そこに立つてちやアいや！　さア、早く行つて了つて頂戴。あの女のところへ行つて了つて頂戴。」「せい子、許してお呉れ。俺は何でもするよ。俺は手を切るよ。あした、いや今夜、いますぐに片をつけるよ。」「行つて！早くどこかへ行つちまつて！」あたし、あのひとのことを見るのも可厭だつて言ふみたいに言つて遣つたの。「大嫌ひよ。あんな女なんか、あんな汚い女なんか、」その女のひと見たこともないのに、あたしさう言つたの。あたし、その女を見たやうな氣がしたんですもの。とても大きな、ぶくぶくに肥つた女のやうな氣がしたんですもの。ばああつと、お部屋一ぱいにその女が見えたのよ。

「じやァ行つて來るからね、」あのひとは優しい聲をして言つたわ。「待つてるんだよ。好い子だから待つてるんだよ。すつかり片をつけて來るから待つてるんだよ。」「時計を持つてつて！」あたし、うしろからさう言つたの。「あたし、一時まで待つてるわ。一時よ。一時までに歸つて來なかつたら、あたし、死んじまつてよ。」

あのひとは出て行つたの。帽子も冠らないで出て行つたの。

いいえ、苦しかないの、ちつとも苦しかないわ。だけど、もう駄目なの。あたし、もう駄目だわ。さうなの、藥をのんだ

の。あたし、さう言つたんですもの。一時までに歸つて頂戴つて。一時までに歸つて來なかつたら、あたし死んで遣るからつて。おのひとは歸つて來なかつたの。二時にあたし藥をのんだの。――あのひとが歸つて來たらさう言つて頂戴。あたし、あのひとのこと、とても好きだつて。世界で一とう好きだつて。――

大工の話

おくさん、あの、植木屋の手間の殘りを頂いて參りませうか。幾らでもありませんよ。一圓二十錢だとか家内が申してをりました。いや、植木屋の家内がでございますよ。

へい、確かにございます。お有難うございました。長い間の患ひでね、家内もへい零しぬいてをりましたよ。あの病氣はあなた、體は利かなくなる、それでご膳は結構頂けるんでございますからね、ご膳はおいしいんでございますからね、亡りました者をさう申しては何でございますが、あれではたゞの者が可哀さうでしてな。へゝ へい、さうですよ。四五日まへに亡りましたのですよ。

あのときも、手前はさう申してをりましたのでございますよ。植木屋はまだあのころ、晩かたになると手前どもへ風呂を借りに參りましたのでな。折角お仕事を頂いて、そのまゝにしておくのは勿體ない。象さんが行けなきアおらが行つて來ようつてね。へい、吾妻象吉と申しますんで。するとね。そんなことを言つちやア悪いよ、おじいさん。植木のことは植木屋にさせなきアいけないよつて、倅の嫁もさう申しましたのでな。たうとうあなた、次の朝のこと、サア・カアを曳いてこちらさまへ參りましたんださうですが、その晩は、風呂へも來ませんでございましたよ。うちへ歸つて厠へ參つたと思ひますと、それつきり、腰が上げられませんでしたつてね、家内がさう申してをりましたよ。いえなに、それがもとで亡つた譯ではございません。ございませんとも。もうあなた、植木屋は、體をつかひ過ぎましてな、若いときからあなた、評判の働き者でね、血氣に任せてつかひ過ぎたのでございますよ。力の強い男でございましたよ。

何しろあなた、貼り紙を出した男でございますからね。へ？　いえなに、貼り紙でございますよ。あの男の親爺さまが亡りまして、家督を嗣ぎましたときにね、親爺さまと言ふのがあなた、賭博が好きで、たいへんな借錢を殘して死んだのでございますよ。それをあなた、吾妻藤吉の借錢は、一錢あまさず、當方吾妻兼吉が支拂ふ、つてね、さう言ふ貼り紙を戸口へ出したのでございます。そいで、拂ひましたよ。すつかり拂つて了ひました。感心な男でございましたよ。

ゆふべも家内がその話を致してをりました。男は小さいけれどもあなた、片腕で、らくに四斗俵を持ち上げましてな、普請があると、もうあの男でなくてはなりませんでした。えい、えいつてあなた、棟の上へ擔ぎ上げたものでございますよ。――へい、その植木屋の家内が手前のところへ參りましたので。さようでございます。手前の家内になつてをりますので。

では、お有難うございました。ごめん下さいまし。

びい玉

いつでも僕、そのころに眼がさめるんだ。厠へ行くんだよ。半分眠つたまんま、ふら／＼して廊下を歩いて行くんだけど、そりやァ暗いよ。おじいさんはさう言ふんだ。男の兒は灯なんかなくつたつてこはがつちやァいけないつて。僕、こはかないんだけど、でも、そのときはとても吃驚したよ。雨戸が少しあいてるんだ。きつと泥棒だと思つて、僕もう少しでおばあさんを呼ぶとこだつたんだよ。

でも呼ばなくて宜かつた。おじいさんはきつと僕を叱るからね。おじいさんは狼狽てるととても怒るよ。それに僕ほんとに、ほんとの泥棒がゐたつてこはかないや、僕いつでもお腹の下んとこにうんと力を入れてるから、――それに、直ぐ分つたよ僕。二郎は白い寢卷を着てるからさ。僕たち、寢卷お揃ひなんだ。

僕、呼吸もしないで見てゐた。ほら、あの石燈籠のとこにうんと木賊が生えてるだらう、あそこんとこにしやがんでる

んだ。しやがんで一生懸命、地面を掘つてゐんだ。二郎はとても小さいよ。しやがんでると赤ん坊のやうに小さいよ。赤ん坊は屈るとこはいだらう、小さいからこはいだらう。僕すぐ裸足で下りてつて見たかつたんだけど、何だか僕、見るのこはかつたの。

だから僕、さうつとさきに歸つて寢てゐた。でも眠れなかつた。するとね、すうつと雨戸をしめる音がしたの。とてもよく聞えるよ。夜中だからさ、どんな音だつてよく聞えるよ。僕、寢ないで眼をあけて見てゐたの。するとね、眞蒼な顔をして二郎が戻つて來たんだ。そしてすぐあつち向きになつて蒲團の中へ這入つちやつた。二郎はすぐ寢たんだよ。

僕、どうしても眠れなかつたの、だん〳〵眠れなくなつちやふの。胸んとこがどつきんどつきんして、それは苦しくなるんだよ。いつでも僕、眠れないとさうなるんだ。僕、とても痩せてゐる？　おばあさんがさう言ふんだよ。一郎はこのごろとても痩せたつて。僕、痩せてなんかゐないね。だけど、眠れないと苦しいよ。呼吸がつまりさうになるよ。僕、とても見たかつたんだもの。

そいで僕、たうとう起きちやつた。僕そうつと出て行つたの。雨戸をあけて裸足で下りて行つたの。蟲が鳴いてたよ。だのに、電車の音も聽えたよ。もう驛の屋根の上のとこが明るくなつてたよ。だからもう、夜中じやァなかつたんだね。僕すぐ見つけちやつたよ。そこんとこだけ、土がぼこぼこになつてるからさ。僕、がり〳〵掘つて見たんだよ。手で掘つて見たんだよ。――そしたら植木鉢がさかさに埋めてあるの。その下にね、ね、君、何があつたと思ふ？　びい玉だよ。びい玉だよ。とてもきれいな、ちつとも缺けてない奴が、七つも、埋めてあつたんだよ。小さいんじやない、ほら、滑つこいとても大きな奴があるだらう？　彼奴さ。

僕、顔がまつかになつたよ。僕、もうせんから、とてもびい玉ほしかつたんだ。とても欲しかつたんだ。だけど、うちじや駄目なんだよ。おじいさんが怒るからね、おじいさんはとても怒るよ。ね、君。あれはばくちだつてさ。君、知つてる？　あれがばくちだつてこと。子供はばくちなんかしちやァいけないんだよ。だけど僕、誰か僕にびい玉

くれたつて、ばくちなんかしないや。ただ賭るだけだよ僕。ただ持つてて、いつでも自分の好きなときに出して見るだけなんだ。——だけどおじいさんは、あんなものに賭つちやいけないつて言ふんだ。賭つたら、ばくちしたのもおんなじだつて言ふんだ。おんなじじやないや。ねえ、おんなじじやないや、ねえ。

でも、駄目なんだよ。おじいさんはとても頑固だからさ。さうだよ、おじいさんは頑固だつて、おばあさんがさう言つたよ。——もうせん、二郎はどつかから拾つて來たことがあるの。ううん、とても缺けた奴さ。あれ、缺けてると駄目なんだらう？　だのに、とても怒つたよ、おじいさん。

だから二郎は埋めたんだ。めつかつたら大變なんだもの、どこから持つて來たんだか訊かなかつたかつて？　訊くもんか。いまだつて僕、訊かアしないよ。びい玉のことなんか、二郎は何にも知らないんだ。僕が見たなんてちつとも知らアしないんだ。僕そうつと土をかぶせといたんだ。僕そうつと土をかぶせといたんだよ。植木鉢で蓋をして、もとの通りにかぶせといたんだよ。だけど僕、とても嬉しかつたよ。僕、とても嬉しかつたよ。——そいで僕、たうとう寢なかつたの。直ぐ夜が明けちやつたんだもの。

——それからね、僕、學校へ行くのがいやになつたの。二郎の方がさきに歸つて來るからね。僕、いつでも二郎のことが心配になつたの。夜ちつとも寢なかつたの。眠くなかつたの。胸んとこがどつきんどつきんするんだよ。二郎だつて寢ないにきまつてるよ。僕、ひる間だつて夜だつてとても氣をつけてたの。

君、知つてる？　ほら、蛙になつちやふ話さ。どこかのお婆さんがお金を埋めとくんだよ。そのお婆さん、とても慾張りなんだ。だから誰にもめつからないやうに地面の中へ埋めといたんだよ。あとで掘つて見たらね、みんな蛙になつてたの。お金が蛙になつてたんだよ。——僕、その話を二郎にして遣りたかつたの。よつぽど話して遣らうと思つたの。だのに二郎は僕のことを、うるさくしちやアいけないつて言ふんだ。兄さんがうるさくしてしようがないんだよ、つて、おばあさんに言つつけるんだ。僕とても、腹が立つたよ。するとお婆さんはさう言ふの。このごろは二人ともとてもへんだ

て。何だつてそんなにそはそはしてなんかゐるもんか。おばあさんは何にも知らアしないんよ。だけど、大丈夫だつたよ。お金なら蛙になつちやふけれど、びい玉だらう？ びい玉は決して蛙にならアしないよ。ゆうべね、僕たうとう掘つて見たの。——

　僕、掘つて見たんだよ。おじいさんとおばあさんは中の間で寝てゐるんだよ。おじいさん、とても遅くまで本讀むけど、すぐ分るよ。寝るときは灯を消すからさ。僕まつてたの。そいでお庭へ下りてつたの。お月さまが出てたんだよ。とても明るいの。僕、手で掘つて見たの。やつぱりあつたよ。そつくり七つあつたよ。僕、すぐ數へて見たの。お月さまが光るだらう？ びい玉も光つてるの。僕とても嬉しかつた。そいで僕、穴の中へ手を入れたの。手を入れて觸つて見たの。一つだけ僕、出して見たの。上へ出すと穴の中んときよりもつと光るよ。

——どうして君、そんなに僕を見てるんだい？ 僕、とらアしないよ。だけど僕、もう埋めとくの可厭になつたんだ。朝になつたら僕、二郎にそ言はうと思つてたんだ。二郎はとてもよく寝てたんだもの。さうだよ、僕、ポケットの中へしまつたよ、あとのもみんなしまつたよ。

　さうだよ。僕、一郎にそ言つて、もつと、穴ん中じやないとこへしまつとかうと思つたの。そいで僕、おうちへ持つて來ちやつたの。僕、考へてたの。僕、そいで、寝ちやつてたの。とても疲れてたんだもの。——するとね、一郎！ 一郎！つておばあさんが呼んだの。僕、びつくりして起きたの。おばあさんは大きな聲でさう言つたの。二郎がゐなくなつたんだから早く起きてお呉れつて。

　おじいさんはお庭に立つてた。やつぱりお月さまが出てたよ。そいだのに、おじいさんは提燈をともしてたよ。ばか！つて、おじいさんはおばあさんに言つたの。子供を起してどうするんだつて。おばあさんは泣いてたよ。おじいさんはとても腹を立てたよ。おばあさんが泣くと、おじいさんはいつでも腹を立てるんだ。でもおばあさんはだまつてたの。一郎！ここに下駄があるよ、つて、小さい聲で言つたの。僕下駄を穿いた。それから、おばあさんのうしろからついてつたの。

おじいさんはもう何とも言はなかつた。僕とおばあさんはおじいさんのうしろからついてつたの。お風呂場だの、井戸端だの、椋の木んとこだのを探したの。おしまひに、物置をあけて見たの。

二郎は物置の中に寢てゐたよ。乳母車の横んところに寢てゐたよ。どうしてそんなところに寢てゐるんだつて、おじいさんが訊いたの。おじいさんは優しい聲をして訊いたよ。僕、とても悲しかつたよ。ね君、僕、二郎は死んだのかと思つたよ。さァお歸り！ つて、おばあさんが言つたの。でも二郎はだまつてたよ。じつとして、とても大きな眼をしてたよ。とても大きな眼をしてたよ。

歡喜

十二時を過ぎてゐた。そのアパルトマンの中のただ一人の日本人である青木は、いつものやうに微醺を帶びて階段を上つて來た。階段は螺旋になつてぐるぐると上つてゆく。中庭は洞穴のやうに暗かつた。もう誰も起きてはゐない。ただ青木の靴の音だけが、かつ！ かつ！ と建物中に響いてゐた。

石造の古い建物だ。ホヤのない瓦斯の灯りがぽつとともつてゐるけれども、足もとには屆かない。青木はまるでバネのやうに、けれども鼻唄を唱ひ乍ら上つて來た。と、微かな呻き聲が聽えた。若い女の聲なのだ。青木はちよつと立留つた。暗い中庭の向ふに、ぼうつと一つうす灯りのともつてゐる窓が見える。聲はそこから聞えて來た。

ふいに青木は向きを變へた。その聲の中には若い男の心を搔き亂す或る響がこもつてゐた。青木は足音を忍ばせて、その部屋の前まで來た。そしてぴたりと壁に體を貼りつかせて呼吸をころしてゐた。醉つてゐる青木の胸は壁を押へつけるやうなのだ。聞える。優しい、男の心を搔きむしるやうな細い聲で、何か訴へてゐる女の聲が聞える。――誰も青木の前を通らない。ただその部屋の内部の灯りが扉の塡め硝子を透して、それはもう見えるか見えないかくらゐの、霧のやうな白いものになつて暗い廊下へ流れてゐる。聲もまた、そんな風に部屋のそとへ洩れるのだ。青木の眼にはその女の髮の毛

やそれから裸の體やが見えるやうに思はれた。

「畜生！」

さう日本語で呟くと、青木はそうつと壁を離れた。それから、ゆつくりと自分の部屋へ上つて行つた。

ひとりで長いあひだ外國にゐる若い男には、そんなことはよくある。自分の部屋の前まで來て、青木はもう一ぺん街まで引返さうかと思つた。だが、扉をあけると、朝出たときのまま、そこら中、汚れたパジャマだの、アルコールランプだの、それからナイフだの、新聞だのが一ぱいに散らかつてゐて、ベッドの中まで酒壜が轉つてゐるのである。青木は勢よく上着を脱いで、そのベッドへ飛び込んだ。――

翌々朝、青木はいつもの朝のやうにむつつりして階段を下りて行つた。朝はいつでも青木は機嫌が惡い。ひとり暮しの青木だ。朝になると或ひは、前の夜の上機嫌であつた自分に對して腹を立ててゐるのかも知れぬ。こと、こと、と下りてゆく。と表玄關のところから、門の前に二頭立ての葬式馬車の停つてゐるのが見えた。ははア、誰か死んだな、青木はさう思ひ乍ら、御者の顔を見上げた。御者は動かないでゐた。陽があたつて、馬車と御者との金ぴかがぎらぎらと光つてゐた。

「お早うございます。」

「お早う、」

老つた門番の親爺が、門番の片手間にコップ酒を賣つてゐるのだ。青木は臺の上へ白銅を一つ置いた。

「誰か死んだのかい？」

「へい、イヴォンヌさんが死にましたんで、ほら、あの三階にゐました若い女教師の、」

「へえ？」

青木は鈍い無表情な眼を上げた。

「手紙、屆きませんでしたか？　ひどく困つてたぢやありませんか、おととひの晩。」

「おととひの晩？――」

忽ち青木はその晩のことを思ひ出した。歡喜と苦惱の頂點は同じだと言つたヴォルテエルの言葉を思ひ出して、苦笑した。

雨

雨が降つてゐた。それにもう、じきに日が暮れさうなので、私は急いで舗道を橫ぎつた。けれども銀座は人がおほぜい歩いてゐて、その澤山の雨傘の向ふから、やはり雨傘を高く揭げ乍ら私を呼んでゐる島の姿が見えた。私は急いで近づいた。

「ひとり？」

「ううん、子供とね、」

島は胸に一ぱい買物を抱へてゐた。そのために背中が少しまるく見えた。

「昌ちやん？」

「うん、それからお袋とね、」

ちらと私にうす笑ひの眼ざしをくれた。そのとき、背後の玩具屋から、島の息子の昌ちやんとそれから明るい洋服を着た若い娘とが連れ立つて出て來た。私はすぐ分つた。娘は、ついこのごろ島と一緒になつたちか子であつた。島は洒落のやうにそんなことを言ふのだけれども、全くちか子は、ちか子自身まだ子供のやうに小さく見える。ちか子はついこの間まで女學生であつたのだから。

みんなで私たちは喫茶店へ這入つて行つた。板壁に雨傘をもたせかけ乍ら、それでも話し込んでゐる客が多かつた。私

たちは奥の方へ腰をかけた。

「君、なに？」

島はちか子に訊いた。

「昌ちやんは？」

ちか子はまた昌ちやんに訊いた。

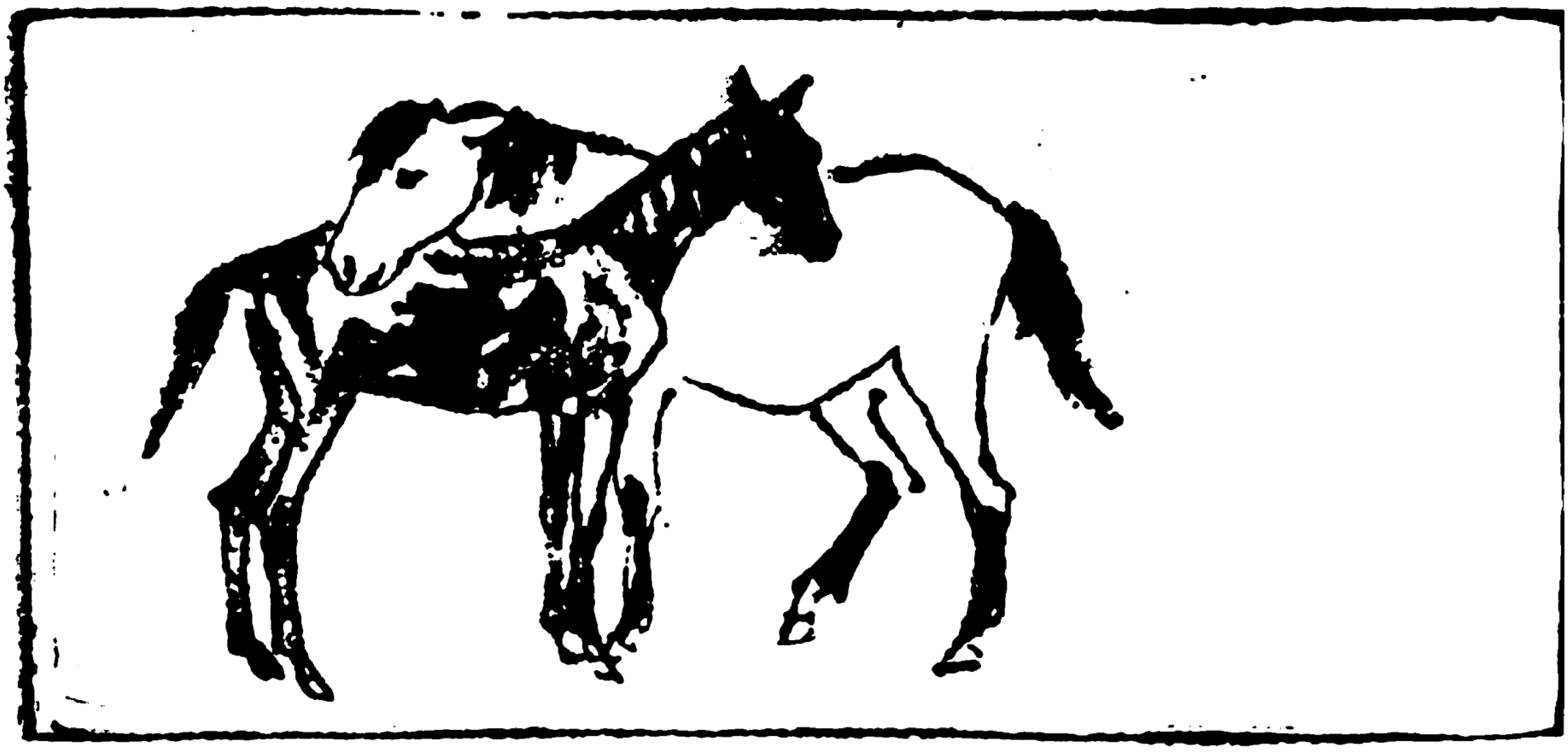
昌ちやんはだまつて、大きな眼で見た。それから直ぐ下を向いた。睫毛のびつくりするほど長いのが、何だか、黒い蝶が羽をひらきそれから閉ぢるときのやうな、素速いのろさで動いた。そのまま、昌ちやんの母である島の先妻の、つね子の眼だ。雨が降つてゐるので店の中がとても暗いのだ。

「プラムケーキだわね、昌ちやん、」

私は快活にとり次いだ。この風景全體に、私は微かな痛痛しさを感じたのだ。そのときまで私は、非常に注意深く彼等を見詰めてゐたことに氣がついた。

菓子と紅茶が來た。私と島とちか子とは直ぐ私たちの話題の中へ這入つた。昌ちやんはだまつて菓子を喰べてゐたが、腰をかけてゐると、やつと卓子のところに頭が見える。そんな子供は誰の眼にもつかないのだ。灯がついた。客は出て行つたり、また新しく這入つて來たりした。濡れた舗道は全く暗くなつた。

軈てそとへ出た私たちは、すぐ店の前で別れた。まだ雨が降つてゐた。見る間に、みんなの傘は雨の中に見えなくなつた。



1930年

共同制作

浅原六朗
久野豊彦
龍膽寺雄

江東の工場街には、彼方から黎明が迫つてきてゐた。夜と朝とのけじめの中から、ぱつと、近代的な鐵筋コンクリートの大工場が、姿を現はしかかつてゐた。亂立する煙突、澎湃たる波浪のやうに捲きあがる煤煙、煙のなかに掻き消えてゆく太陽、サイレンと音響と鐵と油と筋肉とが交錯する機械の廻轉。

沈默の中から、いまにも爆發しさうな瞬間に、工場地帶の溝川に沿つた貧民窟は、貨物列車のやうな黒ずんだ長屋を幾本となく、路次をへだてて並べてゐた。じめじめした路次は、ゴム足袋だの、下駄の歯あとだのの上に溜水がたまつてゐて、

その路次からひよいと空を仰ぐと、淡い一筋の青空が、昨夜から洗濯竿にぶらさがつたまま天ざらしになつてゐた襤褸や、色の褪せたチャンチャンコや、穴のあいた股引だのの間から風の搖ぐたびに辛くも覗けるのだつた。

この貧民窟の一棟の長屋のうちに、章子とその老いぼれた母親とは、かぼそい暮しを立ててゐた。が、それでも、他の棟の長屋の職にあぶれた貧民たちにくらべるとまだよかつた。他のそれら貧しい人たちは、枕さへもないために、どこからか太い材木を一本拾ひだしてきて、これを枕に、一家のものたちがずらッと頭をならべては、——子供たちは高い材木の枕のために、幾度も這ひ上がるやうにして、材木を抱へながら花蓙の上にはかない眠をむさぼつてゐるのだつたが、章子は、有樂町の第百五十五銀行へタイピストとして勤め、その母親は、これはまたなんと氣恥しいことだらうか、これから述べる樣な商賣をして、それがために、しかし、どうやら彼女たちはその日の暮らしだけはたてることができてゐたのだ。

「章子や！悪るくおとりでないよ。かうしてでもして、毎日働いてゆかなければ、二人が食べることはできないのだから。」

と母親は章子に氣兼ねをし、章子はまた章子で、母親の云ふことを、こともなげに聞き流してゐるといつた風だつた。

つまりその商賣と云ふのは、東京なる都會の一角だけででも、一夜のうちに、何千となく一瞬のうちに消費されては、そのまゝ化粧室（トイレット）のなかへ。優しげに投げ棄てられてゆく——あのハアト美人！この怪しげなゴムの袋を老母は、終日、せつせと拵へあげてゐるのだつた。

「お母さん！もうお寢みにならない！」

章子はときどき、寢床のなかから首をだして、母親の忙しげな指先をちらッと盗見しては、かう呼ぶのだつた。

すると、母親は、

「もう少しで、濟むのだから」

と、なほも、丹念に夜業（よなべ）をつゞけるのだ。すると、それがなに故だか、不思議と章子の腦裡にむづかゆく、云はゞ青春の盲目な痴情とでもいつたものを明滅させながら、やがてその中から、灰色のソフトをかむり、縞柄のワイシャツから艶

なネクタイを翻へして、紺色の背廣姿となつて現れて、章子と同じ銀行に勤務してゐる同僚の志村宗一が、そつと、章子に手をのばして、囁くのだつた。

「きつとあなたも、僕を愛してゐてくれるんでせう？」

すると章子は、自分もまた志村を愛してゐて、どうやら、彼とのスヰート・ホオムを夢想してゐるのぢやなからうかしらなどと思つたり、だが、また、その刹那に、なんだか、母親の指先でうごめいてゐる怪しげなゴムをあんまり變りばえのしない痴情が彼女の腦裡に閃めいて、なんとなく章子は、母親に濟まないやうな氣がして、志村を蹴飛ばしながら、母親の胸のなかへ顔を突込んだまま、烈しく、母親に甘えかかつてみたいやうな、そんな衝動にもかられたりするのだつた。

「章子！まだ、寢つかれないの？」

「ええ！」

彼女は氣恥しげに、ちよいと蒲團の襟のなかへ半分顔を隱しながら、そつと母親の波うつ後姿を眺めるのだつた。

同じ長屋つゞきの隣りの部屋では、東洋内燃機株式會社の第二工場に勤めてゐる勞働者服部顯吉の家族のものたちが、いまはこの夜更けに、深い眠りのなかに陥ち入りながら、あるものはキリキリと齒ぎしりをし、あるものは峻烈な寢言を叫び、あるものはまた悲しげな夢でも見てゐるのだらう、ときどき泣きじやくりをしながら、これらの地に脚のついてない怪しげな音色が不思議と交錯して、壁ごしに章子が耳をそばだててゐると、これはどうしたつて秋冷の夜、草叢のなかにすだく昆蟲類としか思はれなかつた。

――顯吉さんは、蟋蟀だらうか。

顯吉の齒ぎしりを耳にしてゐて、ふと、章子はクスリと笑はずにゐられなかつた。いつだつて顯吉は青じやくれた尖鋭な顔をして、章子に逢へばどんなところでだつて、場所柄などちつとも考へずに、マルクス主義を鼓吹する。顯吉は現段階だとか、客觀的情勢だとか、階級鬪爭だとか、プロレタリア・レアリズムだとか、プロレタリア・イデオロギイだとか

いつた言葉を口癖に使つてゐた。さうして、顯吉がかうした言葉を熱烈な語氣で吐きだすたんびに、章子には、顯吉が現代の英雄のやうな氣がしてならないのだつた。

男のなかの男とは、顯吉さんのやうな方なのだ。――あるときはこんなにも、章子は顯吉に感激してゐた。すると、妙に不思議な嫉妬が、顯吉の女房に感じられて、これはわたしどうかしてるにちがひないと、自分の膝を抓つたりして、顯吉の魅力から遠退かうと悶えたりするのだつた。さうして、銀行員の志村と勞働者の服部とを心のなかで見較べながら、章子はいつでも顯吉が叫んでゐる、――沒落してゆくインテリゲンチャの階級に屬する志村に、なにだか落日の太陽のやうなある美しさを瞬間的に見出して、やつぱり顯吉よりは、志村の方を愛さずにはゐられない氣もするのだつた。

「ねえ、顯吉さん！」

と、あるとき章子は顯吉にきいたことがあつた。

「あんたが、いつだつて仰有るインテリゲンチャつて云ふのは、どんなスペルなの？」

すると、顯吉は急に當惑しながらも、しかし、勇敢に云ふのだつた。

「スペルつて、なんだい？」

「あなた！スペルを知らないの？」

「そんなことは、インテリの云ふことだい！」

「それア、惡るかつたわね」

それから數日すると、顯吉は路次でぱつたり章子の湯歸り姿に出逢つてゐた。

「おい、スペル！」

と、章子のことをスペルだなんて、ひやかし半分に呼びながら、小さな赤いマルクス主義の本をさしだした。

「これを讀んでみな！」

「とても、きれいな表紙ね」

「なかに書いてあることの方が、とてもきれいなんだぞ。今では德性は、貧民窟にしかなささうだ。われわれは團結して戰ふんだぞ」

會社にゐても家へ戻つても、いつだつて鬪爭意識に燃えてゐる顯吉のことを、蟋蟀だなんて呼んだら、顯吉は齒を露きだして怒るだらう。――と、章子はなほも、きりきりと齒をならしてる顯吉を聽いてゐると、なんだか彼は夢のなかででも、資本主義者と勇敢に鬪爭してゐるさうにも思はれて可笑しかつたが、いづれにしても章子には、顯吉のこの日常の熾烈な態度は、彼の熱烈な信仰が齎らしたものだと批判せずにゐられないのだつた。

どうやらこれでみると、顯吉の方が同じ棟の長屋に住んでゐながらも、章子よりは信ずることが厚かつたが、しかし、批判する力は顯吉よりも章子の方にありさうだつた。

顯吉は、表面（うはべ）はあんなに強がりを云つてても、皮膚の奥の方では女のやうな弱音を吐いてゐるのではなからうか。さうして、顯吉のあの英雄的な風格も、その半分以上は顯吉のグロテスクな容貌によるのではなからうか。

――目ざまし時計で、章子の眼はさめた。電氣はまだ消えてなかつたが、雨戸をくると外には、朗らかな朝があけてゐた。掌ほどの名ばかりの前庭を眺めると、すると虐げられた三尺ばかりの太陽の光が、工場地帶の煤煙をあびて、黑々した蘇鐵の葉つぱの上に落ちてゐた。小さな自然を構成しながら。さうして、路次のところをガラガラ廻轉してゆく車輪が半分ばかり見えてゐた。

貧民窟の長屋から路次の中に霧のやうにかかつた煤煙を突いて、おかみさんだの子供だのが、茶碗や箸を鷲掴みにしながら胸をはだけて飛びだしてきた。ガヤガヤと殘飯の車へ群がり寄つてゆきながら。

章子は思ふのだつた。

章子とその母親とは、これらの殘飯の奪ひ合ひつこをしなくても、どうやら細々と生活だけはできるのだつたが、それにしても章子の銀行での仕事は、銀行が今日の生産者と勞働者とを自在に支配して、次第に今日の社會經濟生活を畸形的なものにしようと爪に磨きをかけてゐるところを見ると、章子も生産生活の内面で、怖ろしく毒牙をふるつてゐる片割れであり、母親はまた母親で怪しげなる消費生活の裏面で、いよいよ、夜の巷を大きくひろげようと意圖してゐるやうなものだから、いづれにしても、章子の仕事も、母親の内職も、考へよう次第では、なんとも厭はしい仕事でしかなかつたのだ。

さうかと云つて、今これらの仕事を母子が放擲したら、さしあたりその日の生活にも彼女たちは困り果てて、それこそ長屋の他の連中のやうに、殘飯を奪ひ合はなければならないのだ。

章子は機械的に洗面をすますと、小さな鏡のなかで、紅と白粉とクリームとで、すばやく化粧なすまし、もう一度鏡のなかで見直して、微かに笑つてみるのだつた。と、章子はふと、自分の微笑から志村を聯想するのだつた。なんだか自分の笑つてゐるのが、自分ではなくつて、志村ででもありさうに。——。

長屋を出て土橋を渡ると、都會の上層には秋らしい雲が流れてゐた。朝なので、都會へ蝟集してゆく勤人が、敏活な歩調で省線電車の停車場へ急いでゐる。章子も改札口からプラット・フォムへ階段をのぼつてゆくと、今朝もまた彼女の母親がいつのまにか磨いておいてくれたピカピカ光る靴尖が瞳に映つて、それがまた何か朝らしいおるすがすがしさを感じさせるのだつた。

有樂町の省線電車のガアドの脇に、近代的な灰色のビルディングが傲然と聳えてゐる。それが、資本金が一千萬圓の第百五十五銀行なのだ。

九時を時計がうつと、銀行の扉が開かれて、營業場の係員へは、それぞれの役割をもつ行員が登場してくる。

「お早よう〜」

章子は、タイプライタアの前に腰をかけて、出納係の志村源一の朝の挨拶に、美しい瞳で、答へるのだつた。

志村源一は毎朝、銀行へ出勤してくるたびに、道すがら、さまざまな、空想といつたらいいか、それとも理想と云つたがいいか、いづれにしても、現在の自分の職務について、大きな不滿をもつてゐて、これが打開策について、くよくよと考へてばかりゐるのだつた。

尤も、彼が何より不滿に思つてゐるのは、年が年中出納係ばかりをやらせられてゐることだつた。金の計算が間違へば直ちに、責任が彼の身にふりかかつてくるし、それでゐて、出納係などと云ふものは、行員間でも一番に莫迦げる役として、輕蔑されてゐるのだ。志村が憂鬱になるのも、無理もないことだつた。

第百五十五銀行が、ある政黨と密接な關係のあることは、同行が日々に沒落しつつある上海の日支合同の取引所と、今も腐れ縁をつゞけてゐることだけでも、すぐにそれと分ることなのだ。上海取引所が、上海に亂立する銀業公所だの金業公所だの、交易所だの、錢莊(チンチャン)だののためにひどく壓迫されて、今や、昔日の面影もなくなりつつあるとき、最近またしても風雲急を告げてゐる支那の政情に乘じて、蔣介石の南方政府と日本の某政黨と、それの手先となつた上海取引所とが、暗中飛躍を始めてから、急に第百五十五銀行も敏活に活動しだしたのだつた。

頭取の百合瀬剛造は、ほんのしばらく朝の間に銀行へ顏をだすと、いつも直ぐに、丸の内の工業倶樂部へ自動車を飛ばしてゆくか、さもなければ、ゴルフをやりに駒澤のリングへ出掛けたりするのだが、今日は朝から重役室で何事か密議を凝らして、室の扉には門衛を立たせて、嚴重に警戒したりしての、物々しい緊張ぶりなのだ。ときどき扉が開くかと思ふと忽ち閉ぢられて、十一時ごろになると、東洋内燃機製作株式會社の支配人が、頭取の息子で營業課長をしてゐる百合瀬剛(つよし)に導かれて、這入つてきた。

——また、一と芝居うつんだらうか。

こんな豫測が、電光のやうに階下で働く無數の行員の腦裡へ閃めいた。

すると、執務中の若い行員たちが、志村の背後でペンを休めて、囁き合ふのだつた。

「へたばつてる銀行は、こんなことをしてでも、この不景氣を切り拔けてゆかなきア、浮ぶ瀨がないだらうからな。」

「全く、この不景氣ぢア、投資する餘地が第一ないんだ。」

「世界の不景氣にもよるだらうが、何んと云つたつて、日本ぢア金解禁のせゐだよ。」

「僕は、舊平價で解禁するのは、飽くまで反對だつたんだ。」

「それは、僕も同感だ。それに、一般民衆を對象としての金解禁ぢアないんだからね。」

「勤儉節約をしろツたつて、僕らのこの生活で、これ以上の勤儉が出來やしないぢやないか！」

「あれは、經濟にまでも道義的精神を織り込んだ、馬鹿げた標語だよ。」

「だが、それにしても、今も內燃機會社の例の支配人が堂々と乘り込んできたが、今日ぢアどんな生產會社の社長だつて、その社長がどんな偉い華族だつたところで、勞働者には威張つても、銀行にはペシャンコだからね。」

「銀行が生產部門に强靱な潛在力を持つてるんだから、それは仕方もないことだよ。銀行にとつちや、伯爵だらうが勞働者だらうが、確實な生產事業をしてなきア問題ぢやないんだから。」

「銀行が、貨幣を貸出さなきア、全くそれまでだからね。」

耳にしてゐる志村にも、どうして現代の社會が何んの統制もしないで、銀行に自由に信用貨幣を發行し創造させてゐるのかも理解ができないのだつた。志村には今日のマルキシストなどが、遠い未來の理想にばかり狂奔して、徒らに、階級鬪爭を强調しながら、案外、銀行金融業者の行爲を無視したりしてゐるのは、合點がゆかないのだ。つひ先日も、市電の從業員を煽動してストライキを始めさせたのだが、一時の興奮と一時の策略のために、全線にストライキを敢行させて、

さてその結末はどうなつたか。熱烈で純情な從業員のなかの尖鋭分子を馘首させて、その日から家族のものを路頭に迷はせ、殘りの從業員には、市長の人格を信頼させて、ストライキの結末を糊塗してゐるのだ。これは一體どうしたと云ふのか？

われわれ賃銀だとか俸給だとかで生活してゐるものの願はしい理想の社會は、さて、いつになつたら到來するのだらうか。

現下にさし迫つた不景氣問題にしても、徒らに遠い將來の理想社會の幽靈に氣を取られて、無爲無策のまゝなんら恢復の手條も主張せずに、彼等の味方なる大衆を慘澹たる苦悶のなかに陷し入れて、それを傍觀してゐるなんて、講壇マルキシストなどに、どれだけの敬意を拂へやう！

タイプをうつてた章子が、ふと手に書類をもつて立ちあがつて、――ちらッと志村の横顏を眺めた。あの人もなんと退屈さうに、札束を勘定してゐるのだらうか。そんなことを腹でつぶやきながら、やがて金潤のところへ頬をすり寄せて、彼女は囁くのだつた。

「支配人が今日飛行機で上海の方へ旅だつんですつてね。」

「そりア本當？」

志村は指先を休めて訊ねるのだつた。

「さうと見えますの。そんな噂なんですもの。」

「ぢア、いよいよ、蔣介石のために、支那へ乘りだすと云ふんだね。」

「よくは、妾も知りませんけれども……」

章子は、微笑しながらあわただしく、階段を昇つて行くのだつた。

街々の朝のどよめきが清澄な初秋の空へつつ拔けて、――やがて、白けた陽を下町のコマコマしい家並の上にかしげた頃、多摩アパアトのコンクリートの窓にはポツポツとカアテンがくられて、さまざまな種類と階級の生活者の顔が、腫れぼつたい瞼をのぞかせるのだつた。

「あツ!……」

悲鳴にしてははればれしい艶めかしい叫び聲が、東側の二階のちひさな露臺(バルコン)のあたりから響いて、そこから流星のやうに落下してきたカルセオラリヤの鉢が、したたかな音を立ててしたの小園の砂利路の上に碎けた。

續いて二つの若い女の顔が、毛布を擴げてかけた露臺の勾欄(てすり)のところに現れた。

「どうしたの?」

一人が勾欄からしたを覗くと、一人は眞ッ赤な絹のピジャマの袖で顔を覆うて、クックッと肩をふるはして笑ひながら、毛布に凭れて云ふのだつた。

「あたしこゝでダンスをしようとしたら、ちよいと手が觸つて、あんたの鉢をあの通りよ。……ね?」

「まア。……」

「朝から天晴れ稼いだぢやない? ホ、ホ、ホ!……たまに朝起きなんぞすると、ま、こんなもんよ。」

――部屋の中では朝ッぱらから蓄音器が陽氣なフォックス・トロットを奏でて居た。赤いピジャマの女は、片手にかけろふのあがる髪鏝(ヘア・アイロン)をもつたまゝ、腿根をヅロオスのきはまでしだらなくピジャマの裾にむき出して、一人で笑ひこけるのだつた。

「御免なさい紅子(べに)さん。」

「堪忍しない!」

淡い臙脂の外出着らしいワンピースを輕快に肩からまとつて、華奢ではあるがどこか牝鹿の様な強いしなやかな線を肢

瞳に見せた一人の少女は、冗談らしく断髪を横に搖さぶつて、
「朝起きの功徳をあたし主張はしたけど、露西亜で朝ッぱらからダンスを踊れなんて云ひやしなくつてよ。……まア何て恰好？厭やな類子さん。……」
「でも、」
と、ビジャマの女——三島類子は、モシャモシャと大きく波打たした断髪を指で掻いて、昨夜の名殘の口紅が無節操な血紅色をにじました大柄な唇を、紅子に向つて尖らせるのだつた。
「……あんたこんなとこへ大事な鉢を置いとくから悪いのよ。課長さんに頂戴した時のまんまちやんとリボンを結んで、お机の上へ供へときアいゝのに。……でも、大事な贈りものを壞したんでそれで愛想盡かしをされるなんてハメになるんでしたら、可愛いゝあたしの紅子ちやんのことですもの、何とでもあたし辯明してあげるわよ。よくて？」
「まア御親切ね。」
紅子は朗かに、
「……でも、愛想盡かしなんて、そんな心配はいらないのよ。」
「そりアさうでせうッて！」
「あら。……」
紅子はすんなりした指で相手の鼻をつまんで引ッ張つて、
「なら云ふけど、課長さん近いうちご婚禮なさる筈なのよ。あたし今日は正式にその橋渡しをしに行くの。相手のお嬢さんとこへ。わかつて？」
「テナことおッしやいましたわね、だ！」
「まア信用しないのね。」

「信用してるわよ。」

「本當よ。」

「だから本當によ。」

紅子がもう一度相手の鼻をつままうと指をのばすと、類子はヒラリと身をかはして、そのまゝそれをいゝ機會に、鉢のことはうッちやつて、髪鏝（ヘア・アイロン）をアルコホル・ランプの焰にかざしに、部屋の中へ逃げるのだつた。

「鉢もう一つおねだりなさいよ。ね？」

「レコオドもう切れるわよ。」

「あんたとめてよ。後生だから。……」

「あたしもう出かけるのよ。」

「それは御自由に。……」

「よくッて？」

さう云つて、紅子はコンクリートの壁に匍はした非常階段口の鐵の梯子へ、細い靴の爪先をかけるのだつたが、唄の切れたレコオドの面にズウズウと針の音をきくと、仕方なしもう一遍部屋の中へ引ッ返すのだつた。

「有難う。……課長さんによろしくね、お逢ひでしたら。」

煙の立つ鏝を髪にからましながら類子が、鏡の中で紅子の顔にひやかすと、彼女はしなやかな手のひらで相手の眞赤なピジャマの肩を痛いほど叩いて、そのまゝ生き生きした足どりで、ドアの外へ身を消すのだつた。

「あら、ちよいと！」

不意に用事か何かを思ひ出したらしい類子が、アルコホル・ランプの焰をそのまゝに床を横切つてドアを開けたが、紅子の跫音はとうにもう階段の下に消えて、空をよぎる旅客航空機の爆音が、巾廣い空氣の震動を窓から傳へるのだつた。

ひとりぼつちになつて改めて櫛を手に鏡に向つた類子の眉には、何か空虚な乾いた陰が沈んで、——紅子と相對した時のあのはしやいだ華やかさなどは、かけらほどももうない。これは不健康な生活に耽溺して居る人間にいつも見られる悲しい二重性だ!

紅子とは幼なじみで、同じアパアトの一つ部屋に寢臺を隣り合はして、姉妹も及ばない親味な生活をして居ても、健康な職業をもつて生き生きと社會を泳いで行く紅子とは、何とうらはらな類子の生活だらう。

表はダンサア。裏は?

踊、酒、さうして、男から男への荒みきつた生活!

「この方が、でもあたしらしい生活よ。」

時折清純な紅子の眼が、とがめる樣に彼女の生活を見詰めたりすると、彼女は乾いた哄笑と一緒に嘯くのだつた。

「少なくも、山の中の發電所で電氣の技師と一緒に暮らしてるよりは、あたしのがらに合つた生活よ!」

實に、彼女——三島類子はさうした見解から、電氣技師だつた彼女の夫を棄てて、巷へ飛出た女だつたのだ。妻の愛情に最初溺れて暮らした彼女の夫は、今だに甘い思出を斷ちきれなくつて、執拗に復縁を彼女に迫つたりして居るのだつた。

「もう結婚生活だけは眞ッ平!」

彼女はよく紅子に云つた。

「……あんたもその點は考へた方がいゝわ。戀愛まではまアいゝ! 許しておけるわ。でも結婚だけは斷然あたし反對。結婚なんて、一人の女を人生から完全に眼かくしするだけのことよ。それつきりよ。」

花房紅子はこの正月から、大實業家——第百五十五銀行の頭取をして居る百合瀬剛造の秘書に雇はれて、身に餘るほどの優遇をそこで受けて居たのだ。さつき彼女が紅子を冷やかした時に云つた例の花鉢を贈つた課長と云ふのは、實はこの

頭取の息子で父親の銀行に課長をして居る百合太郎のことだつた。

ドアが遠慮深くノツクされて、やがて部屋へ這入つて來た受付の少女が、郵便物を二三通壁際のテエブルのところへ置いて行くと、追ひかける樣に類子はドア口へ引ッ返しかけた少女に云ふのだつた。

「No. 13の君島さんをちよいと起こして！　まだきッと寐てるから。アイロンのお手傳ひをして頂戴ッて。……さう、そこのレコオド裏返してかけてよ。さうすりア彼女、やつて來るから。……」

東洋内燃機製作株式會社では、どの工場も、今や朝の作業の最中だつた。

鐵と硝子と鐵筋コンクリイトから構成された明るい巨大な工場の一隅で、一臺の飛行機がすさまじくプロペラアを廻轉させると、三十米ばかり後方の鐵の壁に、濛々たる砂塵が渦巻きあがつて、プロペラア用材のスプルースの樹を擔いでゐた類吉も、思はず二三歩、たぢたぢとなつて、隅つこへ飛びのくのだつた。飛行機は、工場のなかを百米突ばかり滑走すると、鐵の扉が自然にギイッと左右に開いて、工場から廣い飛行場の方へ疾走して、そのまゝ太陽の彼方へキラキラと舞ひあがつてしまつた。機械の美しい匂ひをのこして。

かうして、この工場では朝から何臺となく新らしい飛行機が、空を飛びまはりながら、機體の性能試驗が行はれてゐるのだつた。ここに働くものは誰しも、飛行機が飛んでゐるとは感じなかつた。時折、明るい硝子窓がプロペラアの音響に微搖しながら、飛行機の翼のために、太陽の姿が遮斷されて、一瞬陰ばんだりすると、なんだか工作機械そのものが空を飛んでゐるさうな氣がするのだつた。或は、さう云ふよりも、自分が太陽を隱して空を飛んでゐるやうな氣のするものもあつた。それほど、飛行機が飛んでゐると、これらの飛行機の製作に從事してゐるものたちは、機體に愛着を感じてゐるのだつた。

「また、メカニズムが飛んでゐやがるな。」

こんなことを談笑しては、發動機課の設計係の若い技師たちは、頑丈な机の上で製図を引いたりしてゐた。

風洞試驗場では、巨大な音響の中でプロペラアが幾組も物凄く廻轉して、係の者が風速を計量し、機械工場では第一仕上工場から第二仕上工場へと、機體が分解されたまま、運搬されてゐるし、鍛冶工場では、火熱のなかで、熟練勞働者がハンマアを振りあげて居り、機體課の木工場と金屬工場とでは、質の異ふものが巧に調和の世界を求めて歩み合つて作業が進行してゐるし、別な工場では、何枚とも限りない薄いスプルースの板で貼り固めたプロペラア用材を老練な職工が鉋をかけては首をひねつてゐたりするのだつた。ちよいと、鉋で削りすぎたら微妙なプロペラアは忽ちバランスを失つてしまつて、一瞬にして、飛行機は墜落の憂目をみなければならないのだ。

「おめえ！獨逸のあの工場では、奴ッこさんこんな風にして、ここのところに鉋をあてたよ。」

「俺も隨分考へあぐんでるのだが、それで巧くゆくかな。」

つい一二ヶ月まへに獨逸へ技師につれられていつて、彼地の工場で製作技術を盗んで歸朝した老練な職工たちは、鉋をもつ手を休めてはしきりと研究し合つてゐた。

服部顯吉はこのプロペラ製作場で、スプリールの木を運搬したりする不熟練勞働者にすぎなかつたのだが、それでゐて、章子に飛行機の話をしたりするときには、一流の技師のやうな口吻を漏らすのだつた。さうして、いつも彼は、こんなことを云つて、話を結んだ。

「俺らの工場へ見に來てごらんよ。尤も、なかなか見せはしないんだが、門衛が鐵砲の代りに、木銃をもつてやがつて、社員たちの出入には、捧銃をやるんだよ。ところが俺らが通ると、銃で撃たんばかしの構へをしてゐやがるんだ。それに工場のなかでは、陸軍の飛行將校が、監視にきてゐやがるし、全く、俺らの工場は、とても帝國主義的な感じがして厭やなんだ。」

「それであんたは、だんだん、マルクス主義者になつてしまつたの？」

「いや、さうばかりでもあるまい。だつてさ、俺らの工場では、一朝戰爭でも突發したら、その日の朝には、もう何千臺といふ飛行機が飛行場に竝らぶ仕掛けになつてるんだからね。」

「そんなにあるの？」

「みんな、それぞれに、分解して隱してあるんだよ。」

「ぢア、いつか、近いうちに戰爭でもあるといふの？」

「さうだ。現段階では、遠からず帝國主義の戰爭がありさうな情勢を誘發してゐるんだ。さうして、この機會に、帝國主義も資本主義も沒落してしまふんだよ。」

「それぢやその時のために、今から賣れもしない飛行機を拵へては、それをまた、分解して隱しておくのね。でもそれで、よく會社が維持されてゆくのね。なんだかをかしいわ。」

「ちつともをかしくないよ。それが帝國主義と資本主義の結びついてゐるところなんだ。」

顯吉は、こんなことを云ひながらも、その實、工場の內部さへもろくろく知つてはゐなかつたのだ。內燃機製作會社は、巨大な工場が、小さな都會のやうに羅列してゐるのだが、どの工場の部屋にも、嚴重に鍵がかけられてあつて、みだりに出入が禁じられてゐた。わづかに顯吉の働く工場からは、塗裝工場の一端が見えるばかりで、そこでは、可憐な娘たちが飛行機の翼を丹念に調べては、針の穴ほどの穴も見逃がさずに手をいれてゐるのが、遠望されるだけだつた。

いまも、顯吉は、スプリールを擔いで來て、工場の隅へそれを積み上げてから、硝子窓の前にぼんやりと立つて、塗裝工場の內面をのぞいてゐた。風のやうに娘らの頭髮が翼のかげに、搖れて、顏は見えなかつたが、頭髮のなかに造花の薔薇が藻搔いてゐるのさへ見えたりするのだつた。

麻布の高臺にある神保伯爵の邸では、朝のうちから、ボンボンボンボンボンと、陽氣なセルロイドの球のやうに、ピアノの

音がとんでゐた●

光りが秋で透明なやうに、神保伯爵の邸の窓ガラスも透明だ。

窓ガラスから、鞆子の顔が半分ほど浮きあがつて、また白い雲のやうに消えてしまつた。

「いやなのよ。だつて、シユウベルト・ソナタつて硬い感じだわ、コンクリートのやうだわ、彈きこなせるものですか。……たつた二日ばつかしで。……」

——オチヨウサン、オチヨウ……サン！

「はい。」

——オチヨウサン、オチヨウサン●

「はい。」

——オチヨ——

「まあ、お前は、いつも同じことね、オチヨウサン、オチヨウサンつて、いやだわ。誰かがあたくしに呼びかけるときのやうよ。もつとほかのことをお習ひ。もつと樂しい言葉を覺えて置くものよ、鸚鵡つて。

鞆子の細い指が、あふむの籠にのべられたとき、

「おじようさん。」

「あら。」

鞆子の眼は指環の石のやうにひらめいた。

「まあ、あなただつた？あたくし、また、鸚鵡がもう一羽お部屋へとびこんできたのかしらと思つたの……」

「もう、今朝はシユウベルトおすましになりましたの？」

ずんぐりと脂ぎつた家政婦の吉村エイ子は、ポストのやうにずんぐりと、立つてゐた。

「少しばかり。でもむづかしいわ。あたくしピアノには、才分がないのかとも想ふわ。」
「いゝえ、先生は、お賞めになつて居りました。お孃さまは熱心だから有望だつて。」
「まあ、熱心だから有望？オホホホホ！その位のとこよ。だけど、その熱心も少し疲れてきてゐるの。だから、先生も、今度はお賞めになる言葉にもつとお迷ひになるわ。」
とつぜん、ワイシャツ一枚の泡だらけの顏が、この室をのぞいた。
「鞆子、どうもピアノつて奴は、朝ぱらからはまづいね。」
白い泡を吹いた顏が、室のなかをぐるぐる歩きだした。
「だつて、お父さま。木曜日の今の時間は、いつもピアノの練習時間になつて居りますのよ。」
「ともかく、俺は夕べ遲かつたのぢや。遲かつた夜の朝は、當然睡眠が不足してゐる。そこにピアノの音だらう。俺の神經過敏は、當然、眼をさますことにならうぢやないか。」
「オホホホホ！」
鞆子は、急に笑ひだしてゐた。この朗らかな笑ひは間もなく、吉村エイ子までその中にひきこんだ。二人の眼は、泡をいちめんにふいた伯爵の顏に氣がついたのだ。
「オホホホホ、どうして、そんなお顏のまゝいらつしやいましたの？」
「いらつしやいましたもなにもない。鏡のそばでシャボンをつけてゐたのぢや。シャボンをつけたまではよい。ところが、剃刀の刄がないぢやないか。俺はベルを押した。だが、誰れも來さうにもない。」
「どうも失禮いたしました。すぐに御用意いたします。」
吉村が、太い胴をまげると、
「いや、いや、吉村さん。あんたは別ぢや。あんたはそんなことをなさる必要はない。」

伯爵は泡だらけの顔のなかで、特殊な視線を吉村にさしむけたのだが、吉村は寝室とこの室との相違を、明瞭に區別させた。

「いゝえ。そう云ふことについては、凡て私の責任でございますから、どうぞ暫くお待ち下さいませ。」

吉村の分厚い臀部が動きさるのを見送りながら、伯爵はタオルで顔を拭いた。

「どうも、シャボンと言ふものも、乾くと、强ばつてくるものだ。ときに鞆子。」

タオルを顔からとつて、伯爵は睡眠不足な眼に、少量の威嚴を加味して呼びかけるのだつた。

「お前の結婚についてだね、百合瀬君の方でも、大分準備を進行さしちよると云ふ話ぢやが、俺もこの秋には、是非お前の結婚式を盛大に擧げたいと考へてゐる。について、支度調度その他のことはだね。お前にも母がないことなのぢやから、全部吉村に相談することだね。吉村はよく心得てゐる。親切ぢや。近頃、感心な女ぢやと俺は考へとる。萬事吉村に相談することぢやね。吉村に。……よいかな？」

鞆子は鸚鵡の籠に指をかけてゐた。不平なものが體のなかを走つた。だが、この不平を、どう云ふ言葉で云ひ現すべきものか、鞆子はそれを知らない。で、言葉の代りに、ピアノの前に腰を降してゐた。

「考へて置きますわ。」

ピアノのキイは、この令孃のパッションをうけて、急速度なソナタを、演奏しだしてゐた。

小間使ひが、名刺盆に小型な名刺を一葉行儀よくのせてやつて來て泡だらけの伯爵に恭々しくさしだした。

花房紅子、

この名前は、どこかで聽いたことがある。彼は鼻のさきで名刺に附着した香料をかいで、小間使ひに大きくうなづいてみせた。

「應接間にお通しなさい。」

花房紅子、この女性がどう云ふ種類に屬する女性であらうと、ともかく、この名刺に附隨した連想は、香料の様に華かだつた。

應接室で、伯爵は聲をあげてゐた。

「あ、あ、あ、あなたでした。あなたでしたな。」

第百五十五銀行の頭取百合瀨の秘書で、主として貴族倶樂部へ出入りしてゐる女であることを、伯爵はその聰明さうな赤い唇のうごきに思ひだした。

伯爵は、自分が何んと莫迦げた健忘症であるかと云ふやうに顏をしかめ、やがて、彼だけが所有しゐる妙な笑ひで、表情を歪ましてゐた。

「俺はあなたをよう知つとる。うむ、起きたばかりでまだよう眼がさめんのぢやつたらう。はははは！」

「度々、お目にかかりましたわ。クラブの方で。」

「さうぢやつたさうぢやつた。俺はいつもあんたのことを眼にとめてゐた。あんたのやうな艶麗な人を、俺はよそで知つとらん。で、俺はよくあんたを記憶して居つた。」

伯爵は好色なものを唇で嘗めた。好色と同時に伯爵の頭は、機敏に事業の方に動いてゐた。

この女も一つの材料だ。少くとも、東洋内燃の金融に關して、百合瀨を口説き落すためには。——

伯爵はゆつくりと煙を吐いた。煙のなかで伯爵は、三百萬圓の金融とこの女から發散する豐富な好色性とを、巧みな料理人のやうに料理して、それを味つてゐた。

「わたし。……」

女秘書は、體を豹のやうにまげて、唇をかるく動かした。

「さつきはお宅の支配人さんがお見えになりまして。……あたし、百合瀨さんから御返事をもつて參りましたの。あら、

云ひ遅れましたけれどお嬢さまおめでたうございます。」

「や、有難う有難う。」

伯爵は上機嫌に渡された手紙を膝に擴げて、

「ふむ。ふむ。……よろしい。いや。御苦勞、御苦勞。この返事は、今日俺が直接貴族倶樂部で、百合瀨君にあつてお話するからよろしい。ところで、娘の結婚よりあなた御自身はどうぢやな？は、は、は！俺は、一體あなたのやうな方と、お話をするのが、非常に好きでな。いや、誤解されてはこまる。たゞ、俺はあなた方と話をしとることによつて、精神の若がへつてくるのを感ずるのぢや、俺にはもう立派な娘もあるんぢやし。だから、かう云ふたとて別に何んでもない。」

「わかつてますわ。」

「解つてゐて下さる？それはきわめて愉快なことぢや、御存じの通り、俺には妻がない。會社とそうして勞働者どものあふれてゐる工場とに俺の生活は包まれてゐる。油と汗臭いことだらけぢや。だから俺にとつて、あなたのやうなかたは云はゞ花束のやうに明るい存在に見えるのぢや。」

「伯爵は、毎日、愉快な生活をなすつていらつしやるのでせう？」

「愉快？さう。人生に對して俺は一つの哲學をもつてゐるのでな、その哲學と云ふのは……」

こゝで伯爵は時計をだしてゐた。

「十一時！俺の人生哲學は、面白い。一つあなたにもゆつくりお話したい。が、ともかく自動車のなかででもお話することにしませう。殘念ながら一寸出かけなきアならんところがあるので。途中まで御一緒に。……俺は一體近代のスピードなるものの愛好者ぢや。またそのスピードのなかで、哲學などについての談話をするのがとりわけ好きな人間ぢや。」

自動車の中で花房紅子の體は伯爵の體と、多量な接觸面をもつてゐた。この接觸面について、女秘書は全く無關心であるのに、伯爵はクリスマスの七面鳥のやうに表情を變化させ、例の哲學について聲ゆすぶらせるのだつた。

東洋内燃機製作株式會社は、十年ほど前にお臺場の彼方から吹きよせる東京灣の潮風に、機械金屬類まで赤錆びて、どうやら工場には不向きな地域らしいといふので、移轉説まででてゐたのが、好況時代に乘じて新時代の工場を増設すると同時に、これまでの時計會社を飛行機製作會社に塗り變えて、ここに、面目一新して乘りだしたのが今日の盛況を導いたので、つい數年前に伯爵神保次郎氏が、某政黨を背景にして、同會社を乘つ取つてからは、政黨を通じて陸海軍省との間に契約が結ばれ、以來殆んど工場の作業は、軍用飛行機の製作にばかり向けられてきてゐたのが、最近になつて名古屋築港の三菱航空機製作場が異常な製作能率をあげ始めたので、同會社も可なりな壓迫を受けはじめてゐたのだつた。

資本金一千萬圓の東洋内燃機製作株式會社も、これまで生產品の註文者が、確固たる陸軍省や海軍省だつたので、背後でこれを支配してゐた第百五十五銀行は、一〇〇パアセントの能力をこれに向けてゐた。これはある意味で第百五十五銀行が同會社を手玉にとつてゐたので、言葉を換へれば、それは陸軍省や海軍省を手玉にとつてゐるも同じだつたのだ。

陸海軍省から夥しい仕事が殺到して來ても、同會社の資本能力では、生產された飛行機を兩省に引渡す前に、二千人の工場員たちに勞賃や俸給の手當をし、上下の決算期の配當などを果たすべき資力に缺けてゐた。こゝに第百五十五銀行の存在が重要な意義をもつてゐたのだ。

屢ゝ巨額な金額が第百五十五銀行から、頭取百合瀬剛造の快諾と行員のペン先の一走りとで融通され、それが新らたに健康な事業を展開する。――更に、東洋内燃機製作株式會社側から支拂はれた巨額な月々の利子は、銀行の利潤となつて損益勘定に繰り入れられ、ペン先から生れた假想信用が引きあげられて、これを相殺すると、東洋内燃會社へ融通した莫大な金額は、新たな貨財として銀行の手に抱擁され、しかもこれらの貨財に對して、銀行は、全然等價貨幣さへも所有してはゐないのだ。かうして、第百五十五銀行の場合ばかりではないのだが、假想信用によつて、莫大な貨財を銀行は握りながら、次第に生產業者の咽喉を絞め、勞働者の腕を、はるかな彼方から扼ぢあげてきてゐるのだつた。

しかし、神保資介にしてみると。これまで、陸海軍省の仕事を媒介に、どうやら辛辣な百合瀬鬪造を操縦して來たと考へられたのだつたが、百合瀬の側から見れば、神保資介のごときは殆んど眼中にはないのだつた。わづかに、神保の背後に存在する陸海軍省の偉力によつて、その存在を認めてゐるにすぎなかつたものだ。云はゞ工場は月末がくると、工場員たちに勞賃や俸給を支拂ひ、銀行に支拂ふべき巨額な利子を生産された單葉飛行機の生産費に巧妙に織り交ぜながら、どうにか、陸海軍省の鼻息を窺つてきてゐるのだつたが、一歩離つて見ると、これらの取引のなかで巨利を占めてきた百合瀬鬪造にしても、神保資介にしても、陸海軍省の美名に隱れて、その實は、民衆から絞りあげた零細な税金によつて私腹を肥やしてきてゐることに變りはないのだ。

だが、それにしても、かうして製作された飛行機に搭乘して、はしなくも、機體の故障から墜落慘死をした飛行將校とか、製作中はプロペラアが空廻轉して、腕を切斷された職工たちなどこそ、なんと浮ぶ瀨のない立場に置かれてあることぞ！　彼等こそは云はゞ、銀行員のペン先の一走りによつて、さうして、また、彼等みづからの納税によつて、慘死し、腕を切斷されたに他ならないのだ！

が、悲慘なのは、彼等ばかりではない。東洋内燃機製作株式會社に働く下積みの職工たちも、日給はわづかに一圓たらずで、朝から晩まで骨の髓の痛むほど働かなければならないのだ。宣誓書をとられて、工場内の秘密を嚴守させられながら、その實秘密らしいものなんぞ、何一つ窺ふ機會も與へられないのだ。

東洋内燃機製作株式會社は、發動機課が設計係と工程係と檢査係とに分れ、機械工場が第一第二の仕上工場と鍛冶工場とに區分され、機體課は金屬飛行工場係と木工場係に分れ、その他、風洞試驗係、塗縫工場係、飛行係、その他特設の研究所まであり、これらの工場の組織と併せて、營業方面も確固たる組織の下に、原價係はたえず原價を計算し、職工係は不斷に、勞働組合の動きを觀察し、販賣係は、いつも販賣について考慮して、システマティックな活動が續けられてゐるのだつたが、最近、三菱の飛行機製作場に壓迫されてからは、事業の不振とともに夥しい職工の一團が思想的背景ある若い

技師の一群と氣脈を通じて、ストライキを敢行しようと畫策してゐた。それに、第百五十五銀行も、以前ほど全力をこの會社にそそがなくなつてゐたことも、陸海軍省と同會社との最近の關係によつて、充分に窺ふことができた。

社長神保貢介は第二の發展策として、上海取引所を通して南方政府と密議を凝らし、再び同會社の黄金時代の出現を夢想してゐるのだつたが、顯吉たち一群の職工達の方では、すでにこの機會に會社へ、賃銀の値上げを强要して、受諾しなければ斷乎たる手段に出ようと腹をきめて、適當な指揮者の指導のもとに着々準備をととのへて居たのだつた。

丸の內ビルディングの屋上で、正午のサイレンが長い咆哮をこの宏壯なコンクリートと煉瓦の街の隅々に反響させて、數分して。――とあるビルディングの食堂に、無帽で、背廣服のサラリイ・マンたちが、大きなテエブルを圍んで、鼻の先に水盤の紅い盛花の匂ひを感じながら、しきりとナイフやフォークをあやつりながら、赤いトマトだの魚のフライだの牛の舌だのを頰張つてゐた。すると、田園の風景だの、波浪の高い海だの、湖水の遠くに見える牧場だのが、咽喉の奥でひらいて、味覺のなかに無意識ながらも旅情を感じたりするのだつた。

志村も同僚と食後に紅茶を啜りながら、卓子をかこんで漫談をしてゐた。

「なにもかもこんなに行詰つちまつちや、仕様がないぢやないか。株は慘落するし、貿易は不活潑だし、失業者群は氾濫するし、この調子ぢや働いてたべてゆくつてことが、だいたい間違つてゐるんぢやなからうか。」

「働かなくとも食べられるやうになんとか、社會を改造でもしなきア、どうにもならないだらうね。」

「どこかの國と戰爭でも、おッぱぢめるかな。」

「戰爭しようにも、戰爭する國がないんだからな。」

「それぢや、この苦境を救ふのには、例の正統派の經濟學者の云ふやうに、より多く生產し、より少なく消費して、その餘剩に輸出しようとでもする以外に仕方がないのかな。」

「だつて、在荷は堆積されてゐるし、生活必需品を得る途はなくなつてゐるし、この上、何處へ輸出しようつていふのかい？」

「支那でも巧く懷柔したらどうかな。」

「飛行機が二臺や三臺賣れたつて、しれたもんだし、うちの銀行だつて、そんなにうかうかとは、支那へは手をだすまいよ。」

「しかし、今朝も重役室では何か重大な相談か何ぞをしてゐるらしかつたぢやないか。」

「あれァ、苦しまぎれの謀議だらうよ。」

「さうかもしれないね。第一、貧しいものを富ますのは、富めるものをより貧しくすることによつてのみ可能だといつたあいつらの考へ方が、間違つてるんだからね。」

「さうだ。彼奴たちは共同社會の富は限定せられたものと思つてるんだよ。共同社會の富は貨幣から成立してゐると馬鹿正直に信じてゐるんだよ。だが、貨幣なんて、富の分配の機械にすぎないぢやないか。」

すると、志村は何か、皮肉な微笑を浮べて云ふのだつた。

「さア、そろ〱歸つて、ぢやまた、富の分配の機械でも、いぢくるかな。」

「いや全くだよ。」

一人が云つた。

「畜生！共同社會の富の唯一の源泉は生産する能力でなくつて、産出物だなんて思ひ込んでる彼奴たちが、生産機關を把握してゐる限り、どんなに働いたつて俺たちに、幸福な日は來さうにもないから！」

同僚は、演說口調で立ちあがると、力なく歩るきだすのだつた。が、ふりかえると、食堂の出口のあたりで、志村が章子と優しげに、何か囁いてゐた。

「これは、僕にでも呉れると云ふの？」

志村は、章子が小脇にしてゐた洋菓子の箱を指さしてゐた。すると、章子も笑ひ崩れながら志村の耳元へ囁くのだつた。
「あなたぢやなくつて、これうちへのお土産よ。お母さまへの。……」
「お母さんへ？」
「一ン日、あたしのかえるのを待つてゐるんですもの。」
「だが、僕たちは一ン日中、ひとのために錢いぢくりをして、富の分配をやつてゐるんだもの、半分くらゐその御土産を僕に分配してくれたつて、よささうなものぢやないか。……」
章子は、ますます、笑ひ崩れるのだつた。
「いけませんわ。こればかしは。でも、あなたにはあたし、一番大事な魂を分配しちまつてゐるんですもの。」
志村は章子と階段を昇りながら、互に笑ひ興じてゐるのだつたが、それにしても、いつになつたらこの富を分配するための機械の上で、彼女と結婚することができるだらうかと、苦しい生活と曲者の戀とのなかで、志村は悶えるのだつた。
章子は云ふのだつた。
「お土産なんかどつちだつていいんですけれど、今日の試合は、どちらが勝つんでせうか。」
「いや、どつちだつていいどころぢやないんだが、まァ今日は、勘辨しておくとして、勝つのは、僕の方さ。無論慶應だよ。」
食堂から街頭から銀行の内部までも、今日の午後は、慶應と早稻田とのゲエムの豫想で、殺氣だつてゐた。
本來速度のなかにあるべき自働車が三十臺ほど、貴族倶樂部の正面玄關の前に、大多數のその主人たちと同じ樣に、欠呻をしてゐた。
待合、料理店、倶樂部、會社、銀行、貴族院、それらの壯麗な建築の前で、彼等の自動車はブルジョアらしく欠呻をし

てゐることが必要なのだ。欠伸はどうやら彼等のプライドに屬してゐるものと見える。

この贅澤で不幸な退屈のなかへ、何か彈力のある自動車が一臺滑り込んで來た。中には七面鳥のやうな神保伯爵が、燃えあがる花束を傍らに置いてゐた。扉があくと、花束はヒラリと飛び除りた。百合瀨商店の女秘書紅子だつた。

「では御免下さいまし。」

ホオルをあがると、紅子は輕く緋の絨氈を踏んで、燕のやうに姿を消してゐた。

伯爵は階段の下に立つてその後姿に暫く呆心した。

K銀行の常務取締が、ドイツの哲學者のやうな顏で降りてきた。伯爵は瞬間、この重役と顏を合はせることを逡巡した。しかし、相手はすでに階段の中途に足をとめて、伯爵に揶揄の眼を動かしてゐた。

「や。」

伯爵はやむを得ず、彼の慣用手段である微笑を口邊に浮べた。相手は一步近付いた。

「神保さん。こんな處で失禮ですが、近く私の方の課長があなたの處に、御伺ひすることになつてゐますから、どうぞよろしく。」

「……。」

伯爵は、愼重に言葉を使ふため首に火をつけた。

「と、…多分あの件についてでせうが、俺の會社でも最近金融については少なからぬ有利な道がひらけましたから、あなたの方の例の債務については、萬御迷惑をかけることはありますまい。」

「そのやうに御配慮願はれましたら何よりです、この二三日來、金融一般が非常に硬化模樣でしてな。手形の貸付や割引手形なぞは殆どこでも中止狀態にならうとさへしてゐる處ですから。」

この色の蒼黑い銀行家に別れたとき、伯爵は腹の中で舌を力一杯に鳴らしてゐた。しかし、暗憺としたものが、起重機

のやうに重くさがつてくるのを彼は感じずには居られなかつた。

伯爵は麻雀室に入つてみた。

牌が肌膚のこまかい白さに朱や綠の文字を浮かせ、兵列のやうに竝らんでゐた。四方からのびた白い手が牌をとつては捨てる。敏活に神經的に。昂奮と快談のなかで、勝負はどのテエブルにもつゞけられてゐた。

H伯爵の二番息子とそのグルウプ。一隅では貴族院の交政會の連中が。彼等は日常生活に於ては、敢て敏活にならうとはしない。むしろ敏活でないことが、貴族人の態度と心得てゐるくらゐだが、ゲームと女の場合にだけ敏活なのだ。

ゲームが終つてティ・テエブルに引上げた二組の連中に混つたとき、伯爵はやうやく、先刻の銀行家から與へられた暗澹たる起重機を棄ててゐた。彼の血液と同種類のものをこゝに見出したからだ。伯爵は感情が快適な時ほどいつも饒舌をする習慣だ。

「僕は諸君。……」

伯爵は、貴族俱樂部に居るかぎり、俺と云ふ言葉を、このグルウプにむかつて使用しなかつた。彼はこの點について、これは階級性を打破した新らしい精神だと考へてゐた。

「僕は諸君、現代に實に大きな不滿をもつてゐるのだ。それは何かと云へば、才能のある人間が少ないと云ふことについてだ。卽ち天才がゐなさすぎると想ふのだ。この言葉は平凡だ。平凡なことは、僕も承知してゐる。だが、これから說く僕の言葉に注意してくれ給へ。まあ、諸君、現代の一般社會狀態を見給へ。萬事が行き詰つてしまつてゐると言ふ。經濟界を見ても、思想界を見てもさうだ。それは諸君、何に原因してゐると思ふ。經濟界に於ては世界的不景氣のためだとか、思想界に於ては、ブルジョアとプロレタリアの對立のためだとか云つてゐるが、僕はこれが、凡て行詰りの原因とは思つてゐないんぢや。では何が原因か？ 才能のある人間がゐないことに原因があると、僕は考へてゐる。經濟界を見ても、見くらぞろひだ。思想界を見てもぼんくらぞろひぢやないか。僕は今から七八年前に、ある船渠會社に關係してゐたこと

がある。その際にだね。賃金値上げの要求で、從業員の間にストライキが起つた。ストライキと云ふものは、スペイン風のやうに一寸した弱味につけ込んで這入つてくるものだが、ストライキが起つたとなると、社長から重役から、一同野菜のやうな顔色になつてしまつたのぢやないか。僕はその時つくづく意氣地のない連中もあるものだと思つたね。僕は、取締役の一人にすぎなかつたのだが、重役會議で强硬な主張を述べたものだ。現在に於ける會社の狀態では、ともかく從業員の要求を入れるわけには行かない。斷乎として鬪へ。從業員全體を解雇するだけの勇氣をもつて鬪へとね。並び大名の連中のことだから、初めは僕の蠻勇意見に驚いたものだつたよ。と云つて他に方法もない。結局、僕が從業員と鬪ふことを會社から委任されたんだね。委任されると同時に、ストライキの首腦者の奴を五人ほど呼んで、會社は君たちがストライキを續けるならば斷然、諸君全體を解雇するとともに會社自身も當分閉鎖して、無期限に作業を休止するつもりだと云ふ徹底的な意見を告げてやつたのだ。さすがにそれには首腦者の五人も愕いたやうだつたね。彼等が愕いてゐる。その際に僕は先じてやつたんだ。若し、君たちも會社の作業休止を好まないならば、今迄通りにやつてくれ。これは少いが、君たちの慰勞金だと云つて、手の切れるやうな紙幣を五百圓わたしてやつた。つまり武道と同じく、その時の狀勢に應じてのコツだね。これが必要なんだ。このコツさへ心得て居れば、どんな場合のストライキだつて、少しも恐しいものではない。經濟界の問題だつてそうだ。深刻な不景氣になつたからとて、速成の國產奬勵なぞをしたとて、追ひつかない。現代の銀行家もさうだ。高利貸し根性でありすぎる。景氣のいい時代には、高金利で貸しだし、不景氣になると、慌てふためいて、是が非でも回收しようとかかる。彼等は國家及び事業の永遠性を、少しも考へては居らん。目前だけで走る。現代は目前だけで走る者が多すぎる。だから困る。また、現代の貴族階級にも罪はあると、僕は考へてゐるね。彼等は酒と女についての智識以外には、何にも持ち合せがない。そのくせ權力だけは豐富にもつてゐる。これはあまりいいことではないと考へる。もつとデモクラティックな精神で、自らも一般民衆と同じやうに働くことが必要だね。——働かざる者は喰ふべからず。と、レエニンと云ふ男は云つたさうだが、あれは近代人の常識であるべきぢやよ。」

暫くして伯爵は、いつもの習慣で食事にやつてきた百合瀬剛造と食堂で逢つてゐた。伯爵は相變らず機嫌のいゝ饒舌で娘の結婚について話を進めた。正式の媒酌人として財界の巨頭某氏を承諾させたこと、月が變つたら匆々に結婚式を擧げること。——

伯爵の頭の中では、娘の稱子と百合瀬の財産千五百萬圓とが、何かなし兩秤の上に不衡な重さをもつて描かれるのだつた。

都會は晝の活動の渦中にあつた。

華麗な消費生活の面と重苦しい生産生活の面と、この二つが東京市の西と東とに對峙して、しかし、さすがに眞晝の生活の喇鳴りは騷然と空を覆うて居るのだつた。

江東に林立した煙突の過半は、昔の活躍をもの語つて黑く煤けて居るきり、今や煙も途絶えて空に沈默し、壞れた工場街は白晝の陽射し以外に心なしか人影も乏しく、深刻な事業界沈滯の面貌をむき出して居るが、さすがにそれでも空は煤煙で薄ら曇り、機械の騷音が江東一帶を地響きのやうに搖るがして居るのだつた。

罅割れた電柱に貼られて無慘にひきちぎられた「勞働者團結せよ！」の赤ビラ。

露骨な餌で失業者を釣る監獄部屋行きの勞働者募集ポスター。

嘘八百の内職の廣告。

獸じみた風丰に血色の惡い自由勞働者の群れ。

埃を蹴立てて道路を驅ける空なトラック。

聲の嗄れ／＼なサイレン！

工場員の整理、職工△百名の無斷馘首、隔日交勤制、就業時間の短縮と賃銀低減、勞働爭議、思想の彈壓。——

生産市街のかうした險惡な空氣と河一重隔てて、東京の消費生活の心臓ギンザは、この内臓にあらゆる近代的な交通機關網の中心で、人間の洪水をみなぎらして居た。大扉をひろげて數萬の顧客を呑吐して居る百貨店は、大資本制度の傲岸な威厳をもつて群小の商店を威嚇して居たが、舗路に秋の陽射しを覆うた陽覆ひさへ、心なしか深刻な不景氣に萎えてぐつたりと垂れて居た。

大時計店のウヰンドウの高價な寶石にぢつと見入る顔の蒼い失業者。

輕快なダンスのステップが歩調に感じられるシイクな私立大學生。

夏の頃の海焼けを鳶色に肩にみせた斷髪の少女。

無刺戟な瞳をしたサラリーマン。

秋の陽射しに甲蟲(かぶとむし)の様に背を光らした圓タクの珠數。

虹を噴く撒水車。

疲れた GO STOP の笛。——

丸の内のビルディング街では、陽覆(スクリーン)をおろした窓々の内に、夏のやうにけだるく扇風器を廻して、タイプライタアのキイの音が錯綜し、エレベエタアが昇降した。

新聞社の高層な白亞館の屋上にキラ〱と輪を描く傳書鳩の一群は、遠い空に雁行する軍用飛行機の銀翼と軌道を交へ、眼に見えない電波に充満した空間に一種の巨大な立體感を與へて居る。

高架線の軌道を噛んで絶間なく行き交ふ高速度電車の一聯。

鋼鐵製の電氣機關車。

ビルディングの鐵骨が空間に大森林を現出して、空氣鐵槌(エアハンマア)のものすごい反響がまるで野獸の遠吠えだ。

午後の銀行では、相變らず敏活に仕事がつゞけられてゐた。細いペン先から見るまに無數の數字が描出され、やがて無限に巨大な數字が算出されたりして、これら無限の數字の中に、深刻な不景氣に刻々と苦悶しつつある現代の社會經濟生活が浮沈してゐるのだつた。さうして、これらの浮沈しつつある生活の一角では、そんなこととはまるで無關係にいましも、白熱的なゲエムが開始されて、全市民を快い興奮の中へ誘つてゐた。神宮球場に於ける早慶第一回戰！

ときどき機械的に扉がひらく。銀行のボオイが、頻繰りに手に紙片を握んでは飛びだしていつたり、興奮して走り込んできたりしてゐる。

そのたびごとに行員たちは、帳簿から眼を離しては、ボオイの報告にいらいらしながら、刻々に變化してゆく戰況に、手ではペンを握りながらも、思ひは球場の物凄い情景のなかで、馳けまわつてゐた。

「山田の投球はとても、今日は凄味があるんですつて。この調子でいつたら、ワセダの勝ちかしれませんよ。」

「さうですね。あと三回、山田が頑張つたらこのままのスコアで、勝つかもしれない。」

「僕の方が勝つたら、銀座で御馳走してくれるでせうね。」

「それア、僕の方が敗けなきア、君に神樂坂でおごつて貰ふより仕方ないね。」

と、突然、またボオイが扉を押しあけて飛び込んで來て、大きな聲で叫んだ。

「慶應がツウ・ダウンの後で、三壘から楠見がホオムを狙つてたとき、水原が、ストライキ二つ見送つたあとで、火のでるやうな熱球を三壘（ホット・コオナア）へ打つたんです。すると、三壘手がちよいとハンブルした隙に、楠見はあの駿足でもつて、ホオムへ辷り込んぢまつたらしいんです。アナウンサアが叫んでましたよ。濛々とあがる砂塵のなかから、いましも、楠見は貴重な一點をあけてベンチへ戻つてくるところだつて。……これでこれから先スコアがどうなるか。……」

「これア、いよいよ、銀座かな。」

「いや、まだ分りませんよ。ラツキイ・セブンにどんなチャンスをワセダが摑むか分りませんからね。」

すると、また街頭からラディオの報告をもつて飛び込んできたボオイが、紙片をひらいて叫ぶのだつた。

「水原のチエンヂ・オブ・ペエスに惱まされて、からツきしワセダは振はないんですよ。ツウ・アウトのあとで、やつと四球で、杉田屋がでたんですが、ピンチ・ヒツタアにでた今井が、つゞけざまに邪飛球を三つも右翼線上へ打ちなげたあとで、たうとう、水原のアウ・ドロにひつかかつて三振してしまつたんです。慶應のスタンドからは、拍手の嵐に送られて、三色旗を翻がえした白鳩が空へ舞ひあがつたつて云つてましたよ。」

インニングが進んでゆくたびに、行員たちも悲喜こもごものなかで、ラインの上を巨大な數字を、ペンの先から吐きだしてゐた。

「いまのところ、どんな貸借關係にあるんですか。」

頭髪の禿げた營業部の次席までも、よくは野球を理解できないのに、戰況をききただしたりしてゐた。

「どうも、慶應が後半になつてからは押し氣味ですよ。」

「ぢア、剛君の得意の壇上ですね。」

營業課長の百合瀨剛は午後になると、指定席を二つも持つてゐるので、仕事をうつちやらかしにしたまゝ、球場へかけつけていつてゐた。

第八回まで兩軍ともに、死力を盡しながら、二對二のクロス・ゲエムのまま進行してゐたのが、偶然ラスト・インニングになると、慶應のベンチから秘策がナインに授けられて、形勢は急に一變しだした。一死後、水原が快足を利用して、セーフティ・バンドを試みると、これが巧く成功した。觀覧席は萬雷の拍手のなかで渦をなして、百合瀨剛もそれに揉まれながら飛びあがつてハンカチを振つてゐた。

百合瀨剛は、この指定席へ婚約者の神保柄子を誘つてきてゐた。熱狂したゲエムは柄子の頬にも汗ばんだ薔薇をのぼしてゐるのだつた。

事務が終ると志村源一は、アルコォルのなかへ指をいれて消毒してゐた。
「貨幣ならいいけれど、紙幣はとても厭ですね。一杯何かの細菌がついてゐさうな氣がして。」
志村は、章子をふりかへるのだつた。
「そんなに細菌がついてゐるんでせうか。わたしの方の長屋の女房さんたちは、よく、紙幣を口にくわえたりしてゐますよ。でも滅多に病氣になんぞかからないんですけれど。」
「それア、たまさか紙幣にありついて、口にでもくわえたりしてゐるんだからでせう。だが獨逸で檢査したら、驚くべく細菌が紙幣に附着してゐることが分つたさうですよ。」
「それでも妾したちのところでは、紙幣よりもづうッと長屋の方が不潔ですわ。あそこには何がゐるかしれないッて云ふやうな不安な氣がしますわ。」
「今日はこれからどこかで、晩飯でもたべて、序にダンス・ホオルへでも踊りにゆきませんか。僕はワセダが敗北したんで、氣がムシヤクシヤするんです。」
ダンス・ホオル？――章子は足が硬直してしまつた。
「踊れやしませんもの。」
「ぢきに踊れますよ。」
「それに、わたしは踊りたくもないんですから。」
「だが、自轉車の乘り始めのやうに、踊れると面白いもんですよ。」
「でもわたし、觀念的にだけでも嫌ひなんですもの。」
章子は街角までくると、サッさと志村と分れてしまつた。互ひになんだかそれだけでは物足りなささうな氣がした。志

村からすれば章子がすなほに、ホォルへ行けばいいにと云ふやうな、章子にすればまた志村がホォルへなんか行かねばいいのにと云ふやうな、云はゞ彼と彼女とは、プラスとマイナスから構成された空虚な寄に似た感情を抱いて、互ひに不満な思ひをしてゐるのだつた。

「やつぱりあの人は、いつまでたつてもプチ・ブルな根性がぬけないんだらうか。」

一方がかう思ふと、一方もまたかう思ふのだつた。

「章子は一體ダンスをブルジョアの特有物のやうに考へて居るんだらうか。そしてあんなに自分でひねくれてゐるんだらうか。」

章子は貧民窟へ續く土橋を渡ると、もう老いた母の姿がはげしく感じられるのだつた。と、その母の姿はいつかなつかしい志村の幻影に變つて、ホォルで數々の女性が紅い口唇と鮎のやうにすらッとした靴とをジャズの渦の中に輕快に翻へしてゐる中で、彼がその一人々々を抱きながら、ときには甘ッたるいことを囁いたり、頬ずりをしたりなどしてゐる情景を描いたりして、なんだか志村なんぞふりちぎつて母の胸へ縋りたいやうな、そんな衝動にかられるのだつた。

夕暮の貧民窟では、女房が髮をふり亂して、仕事もなしに一ン日ぶらぶらして戻つてきた亭主と、取ッ組合つて大喧嘩をしたり、空腹を訴へる子供の頭をはり飛ばしては、泣くな泣くなと叱りつけて、自分も泣いてゐる女房がゐたり、かと思ふと、食べるもののないのに諦めて、フトンを頭から冠むつて、空腹に齒ぎりしてゐる男がゐたりして、營養不良なこの貧民窟の長屋は、どうやら、食慾を痛感するこの夕ぐれを、なんとかしなければ越すにも越されなささうにしてゐるのだつた。

「そら、坊や！　長屋のお孃さまがお歸りになつたよ！」

章子の靴音が路次に聞えると、女房たちは子供をすかしながら、皮肉ともなんともつかないやうなことを、囁くのだつた。章子はそんな時いつも靴を懷中にでも捩ぢこみたいやうな氣恥しさに胸を詰まらせるのだつた。

イルミネエションとネオンサインとが寶石の樣にきらびやかな宵のギンザには、圓タクの群れが洪水の樣に溢つて、强烈なヘッドライトでめいめいのお尻を照し合ひながら、ペエヴメントの左右を流れてゐた。

白晝の樣な店舗の燈を浴びて織るやうな行人の雜閙！

「あら。」

GO STOP の廻轉を待つて、尾張町の十字路の片側を流れて來た一塊りの群集の中に、汚れた灰色のソフトを額にかしげて、片手をポケットに入れたまゝ、しよんぼり一人で步いて居る丈高い陰氣な青年を紅子はみとめて、そのまゝ輕快な足どりをそつちへ向けてゐた。

「瀨見さんではいらつしやいません？」

「は？」

瀨見と呼ばれた例の青年は、瞬間不意を脅かされたやうな瞳をして、ペエヴメントの一點に足をとめたまゝ、ぢッと相手の女を見つめたが、すぐに伸びた口髭のあたりに陰氣な微笑を擴げるのだつた。

「やァ、暫く。……」

青年は紅子の前の夫――發電所技師の瀨見伸一だつた。

「お珍らしうございますわね。いついらッしやいました？」

紅子は生き生きと懷ッこく、

「すッかりあたしも御無沙汰を致してしまひまして。……」

「どう致しまして。」

瀨見は善良な青年らしく卒直に、

「御無沙汰はお互ひですけれど。……でも、いつもお元氣で結構です。本社の方に用事があつて昨夜こちらへきつたんですが、つい今しがた友人とその邊で夕御飯をすまして、そして別れて、ちよいとこの邊をぶらついて居たところです。……」

「あなたもお元氣でいらッしやいまして何よりでございますわ。」

紅子は相手を促すやうに先に立つて、雜閙から身をよけながら、

「東京の御滯在はあのいつもの、……？」

「え〻。小石川の兄貴のところです。」

瀬見はどこか都會に慣れない不骨な態度で、

「いづれあんたんとこへもお伺ひしようとは思つて居たんですが、……でも、こ〻でお眼にか〻らうとは思ひがけませんでしたよ。どうです。そこらで一緒にお茶でも呑みませうか。」

「さうですね。」

紅子はちよつと腕の時計を灯にすかして、

「おつきあひ致しますわ。どこにしませうかしら。果物でも召上がりますか？」

「結構です。一つ適當なところへ案內して下さい。田舍者はすつかり怖氣がついちやつて。は、は、は！」

――數分後、彼等は千疋屋の二階の街路に面した窓際に小卓をはさんで、いくらか寛いだ氣持で相對してゐた。

信州のある火山の麓にある水力發電所に勤めて、年の殆ど三分の二をそこですごして居る瀬見伸一には、たまに見る東京の、しかも清涼な秋の夜氣を通して人の出盛つて居る宵のギンザの絢やかさは、どこかエトランゼエに似たもの〻珍しさを感じさせるのだつたが、しかし、彼の腦裏に屈托して居る憂欝な惱は、科學者らしく清澄な瞳の底にもにじみ出て、それが紅子の敏感な神經にも、すぐに纖細な蔭りを投げるのだつた。

三年間の結婚生活が破綻して、妻と別れてからの二年。彼女の幻影が未だに彼の脳裏を去つてはゐない。科學者の智的な性格と、夏きり賑はない山間の避暑地の、單調な發電所の生活に飽き飽きして、到頭勝氣女の癇癪から新婚の家庭を破壞して去つた彼女が、その後どんな荒みきつた生活を追つて居ることか。――

「類子さん、ね。」

と、紅子は幾分遠慮深くきりだしてゐた。

「相變らず元氣でいらつしやるのよ。あんな勝氣なかたですから、無論へこたれたつて弱味は見せないでせうけど。……でも、御免なさい。あたし正直を云ふと、あの生活が健康だとはどうしても思へませんの。」

「云はゞ、一番健康な生活を、自分で破壞して行つたんですからね。」

と、瀬見は歎息とともにパパイヤの種子を吐出して、

「弱音は容易に吐かないでせう。けれど、落ちつくところが僕に見え透いて居るんです。要するに、その時にならなければ、……」

「さうね。……」

「人間は誰の云ふことでも勝手に拒絶することは出來るけれど、運命の云ふことにだけは從はなければならないんですからね。……あいつは勝手な道へ自分で飛出しては行つたが、つきあたるところまで行つたら戻つて來るだらうと、まアそれを、僕は信じて居るわけなんです。」

さう云つて、しかし彼は空虛な眼を窓の下へ投げ、心の底で歎息を漏らすのだつた。

外は街路の灯にうごめいてゐる行人の雜閙が、何やら不思議な昆蟲群の移動を思はせてゐた。燦然たる都會の夜景が人間離れのした印象を與へるのだつた。

嘗て紅子は類子に云つたことがある。

しかし都會を夜の闇から輝かして居るこれらの夥しい街の灯の裏側に、遠い山間の淋しい發電所とそこに夜を働いて居る人々の存在を想像しない？　と。

その時類子は云つてゐた。

「瀨見はあんたのやうな人と結婚すりアよかつたのね。科學者のくせに彼は誤算をしたわ。……」

瀨見を結婚の相手に想像する？

これはまた紅子にとつて何と云ふ突飛さだらう。彼女は瀨見の地味ではあるが堅實な、さうして科學者らしい緻密な性格に好意と尊敬とは拂つて居るが、それは云はゞ機械に對する愛情に似たものだつた。

（あたし、いくら何だつて機械とは結婚出來ないわ。）

「結局しかし。」

と、紅子は窓の外の夜の灯を見おろしながらつぶやくのだつた。

「類子さんが最後に行きつくのはあなたの懷ろへよ。問題はたゞ時機だわ。そしてさしあたりのところは、とてもまだまだよ！……」

「………。」

紅子は瀨見の眼を空虛な絶望が雲蔭りのやうに掠めるのを敏感に認めるのだつた。

窓の外では蒼い電車のスパアクが花のやうに空間に散り、閃々の洪水を瞬間綠青色に彩つてゐた。

「それはさうと、あんたはこんなところにいつまでも僕のおつき合ひなどをなすつて居て、差つかへがないんですか？」

さう相手に促されたまゝ、紅子は腕の小さなクロオムの時計を覗いてみた。八時半。——さうだ！　神保伯爵に赤坂のダンス・ホールへ誘はれて、新橋驛で落合ふ約束の時間だッけ。

「あたし、」

と、彼女は事務家らしくテキパキと椅子を立つて、でも遠慮深く相手に、
「では失禮致しますわ。一寸時間の約束がございますものですから。……ではきつと、アパアトの方へお訪ね下さいましね。お待ち致して居りますわ。」

赤坂のダンス・ホオルは、ジャズの狂噪の中に夜が更けてゐた。
「青い天國」のサキソホオンを耳にからみつかせながら、髪の長い男と青白い神經の男と、もう一人頓狂に肥滿した男との三人が、悠々と會話をかわしてゐた。
「ダンスホオルは、一面現代のレビユーだよ」
と一人が云つた。
「あの女を見給へ、あの女はエロチシズムの飽和だ。そしてあの男はどうだ。リユウマチスの老人のやうに脚をひきずつて、女の腰にしがみついてゐるぢやないか。斷然グロだよ。」
「ナンセンスはあのオカッパの男か。」
「要するに都會の象徵だよ。善惡ぢやないんだ。事實の象徵なんだ。」
さうしてこの三人は、サルンにでもゐるつもりで、勝手な藝術論などをたゝかはし始めるのだつた。
細長いダンサーが、草のやうに首をたれて踊つてゐる。この鼻息にもなびきさうな細い草を、鐵のやうなヤンキーが、下からガッチリと受けとめて、ブンブンふり廻してゐる。
四角な顏にハアト形の脣をつけた女が、——どうもハアト型の紅はいゝ連想ぢやないが、ともかく、この口紅に對してモミ上げを殘酷に短かくした男が、ゲラゲラと顏の筋肉をゆるませてゐる。さうして、サキソホーンの頓狂な音階、むせるやうな香料、體臭。——

志村源一は螺旋形の階段を孤獨にホオルへあがつて行つた。譽子と心なく別れて來たことが岩のやうに孤獨で、彼の後ろにくつついて歩いて居る。

　床を擦る靴の音と、吠えるやうなヂャズの喧騷と、何かなし落ちつかない人の氣配とが、コンクリートの階段にふつてくる。しかも、志村にとつてこのダンス・ホオルはまだ近附きが淺いのだ。華やかなダンス・ホオルも、志村のやうな場合には、冬の避暑地のやうな寂寥なものだ。

　志村よりも二十分前に、課長の百合瀨剛が、神保鞆子とこの階段をあがつてゐた。鞆子はこの課長のキザなモダアンボーイ振りに充分な好意は寄せられなかつた。と云つて、全く嫌つてゐるわけでもないが。——

　彼はかうした社會の人間によくある樣に、一時間のうちに一度は、自分の親父のことを口にするのだ。なるほど、彼の親父は有力な銀行の頭取りだ。肩書なしに百合瀨剛造で通る人物だ。資本に對する權力をもつてゐるにちがひはない。で彼もこの若さと無經驗さとで親爺の銀行に課長の地位を與へられて居るのだ。要するに彼はこの父親を時々賞讃したり、嘲笑したり、ともかく一時間のうちに一回は、こんな風に父親について口にする習慣なのだ。

「父は馬鹿ですよ。」

とか。

「父はその點一寸偉いですよ。」

とかと。——鞆子にとつて、これは微笑ものだつた。また、苦笑ものでもあつた。

　彼はさつきこの階段をあがりながらも、すでに二回、父親について口にしてゐた。

「今日の野球は、スコアとしてはまア詰らない方だつたでせう。しかし內容はあの八回あたりがちよいと味があつて面白かつた。處が親爺と來てはてんでおれが解らないんですからね。低級なものですよ。云つて見れば經濟の勘定しかしらないもんです。」

もう一度は、

「親爺はダンスホールを全く知らないんです。ダンスホールと云ふものは、何か淫蕩な市場か何ぞのやうに考へてゐるんですからね。笑はせますよ。」

なべてダンス・ホールの階段と云ふものは、都會人の通路だ。この階段は、サラリイマン、學生、店員、ストリイト・ガール、モダン・ボーイ、モダン・ガアル、好色な中年紳士、船員、貴族の漁色家、髪の薄い醫者、新聞マン、時に煙管をもつた下町の親爺さん、不良外人等によつて無階級に使用される。

神保伯爵の自動車が、このビルディングの玄關口に乘りつけられたのもそれから間もなくだつた。伯爵の片側には花房紅子が、さうして、――片側には三島類子が、豹のやうな眼を光らしてゐた。伯爵はすばらしい機嫌だつた。三島類子はつい今しがた、階段の下で紅子から伯爵に紹介されたばかりだつたが、既に二人の感情的な距離は、紅子と伯爵との間以上に進められてゐた。これが彼女たちの習慣なのだ。

伯爵にとつては、女友だちが紅子でなければならないと云ふ理由はどこにもないのだ。要するに新鮮な刺激をあたへてくれる女性であれば、それは誰れでもいゝのだ。

紅子は、客觀的な淡泊な微笑で、この二人を見てゐた。

彼女たちのアパートで、類子は口癖につぶやいて見せたものだ。

「あたしすばらしいデカタンな生活がしてみたい。プロレタリアやプチ・ブルとの戀愛には、全く飽きちやつたわ。するんなら大ブルジョアと、火のやうなデカタンな戀愛冒險をしてみたい！」

紅子は、大ブルジョアなんて云ふものは、いかに退屈なものであるかを知つて居る。そんな世界はもう充分彼女の鼻について居るのだ。それを話してきかせた。しかし類子は承認しない。自分勝手な強い主觀性をもつた女なのだ。紅子の頭には全然球のやうに、好色らしい伯爵の顔がうかぶのだつた。で、紅子が伯爵を紹介しようかと云ひ出した時にも、類子

はゲッゲッと蛙のやうに笑つて一人で思を焦したりしたのだつた。

「すばらしいわ、あたしその伯爵と戀に陷つたのよ。やがて、私が伯爵夫人にならない限もないわ。伯爵夫人になつてから、そしたらまたそこから新らしい戀を展開させるのよ。どう？　この考へは？」

紅子はそツけなく微笑むだ。

「わるくもないわ。」

類子はその時居合はしたダンサァの友だちに云つた。

「私、貞淑な妻の生活にも三年の經驗はあるのよ。水力發電所の技手の妻、まア、何んて乾燥したつまんない生活だつたでせう。水力發電所なんてものは、名前だけがロマンチックで、あとは何んにもないものなのよ。女學校の出たての此のあたしは、何んにもしらないお莫迦さんだつたのね。」

類子は、白い腿をのぞかせて脚をあげた。しかし顏にだけは注意ぶかい化粧をほどこしはじめた。

ホオルのキソホンで、伯爵は類子の腕をとつた。類子は踊りながら彼女の體全體を、伯爵のワイシャツに挑情的にすりつけるのだつた。

「ねえ、伯爵、あたし淋しい女なのよ。けれど、可愛がつて下さる人があると、雲雀のやうに囀つて幸福になれる女なのよ。あたしを幸福にしてよ。」

ダンスホールから歸つた鞆子は、いきなりピアノを叩きはじめた。ピアノはこの女主人と同じやうに、不機嫌な音をたてた。

家政婦の吉村が入つてきた。

「お孃さま、まあ十時過ぎるにピアノをおひきになるなんて。」

「いやなのよ。吉村、あたくしあの剛さんが。」

「あら、また、どうして急にそんなことをおつしやいますの。」
「だつて、嫌ひなものは嫌ひなんだもの。つまんない男だわ、あの人。」
「でも、お父さまは大變おほめになつていらつしやいますのよ。今時の青年にしては珍らしいと。」
「珍らしいでせうよ、あゝ云ふ人は。」
神經のチリチリしたものが、鞆子の體には一杯になつてゐた。
「あたくし、何だか、今日一緒に遊んで歩いて、全く厭や氣がさしてしまつたわ。あたくし結婚のことはお父さまにお斷りしようと思つてよ。」
家政婦は困惑の表情を、顏にうかべてみせた。しかし、鞆子はその表情を少しも見ようとはしない。家政婦は仕方なく鞆子の耳に感じさせるために、太い溜息をした。
「それは我儘と申すものですわ、お父さまがお困りになりましてよ。」
「お父さまがお困りになつても、氣に入らない結婚はしたくなくつてよ。」
「どんな點がお氣に入りませんの？」
「みんな嫌ひ。何から何までみんな嫌ひになつたのよ。あんな埃ツぽい！」
「けれど、お孃さま。」
家政婦は、自分の永い經驗を語るやうに、愼重な聲をだした。
「氣に入らないとおつしやいますが、殿方つて、すべて我儘なものでございますのよ。この我儘をお嫌ひになつたら、どんな人の處にもお嫁に行かれなくなりはしませんかしら。……」
「いいのよ。お嫁になんか無理に行かなくツても、男だけの我儘をすべて許さなければならないやうなら、お嫁に行かなくつていいわ。それに。……

柄子は、次の言葉を吐かうとして躊躇した。今度の結婚は、結局、父親の利害による政略結婚の犠牲にしかすぎないことを彼女も識つて居るのだ。

家政婦は柄子の感慨を受けながら、その肥満した體をゆすぶつた。と、炭酸水のやうに沸騰するものを血液のなかに感じるのだつた。伯爵の放蕩、それに體をまかしてゐる現在の自分に、いつたいどんな報ものがあるのか。これと云つて何一つ與へられて居はしないぢやないか！

酒臭い息を吹きかけては、伯爵は夜ごとに彼女を抱擁した。さうして云ふのだつた。

「お前には五萬圓の小切手を書いて渡してやらうと思つとるんぢや。五萬圓の小切手を。……」

しかし言葉だけでかつて伯爵は實行したことがない。實行は寢室に於ける脂ぎつた淫蕩だけだ。

「ほんとうでございますわ。」

家政婦は、急に言葉に實感味を加へて繰返した。

「男ツてみんな悪者ですわ、みんな畜生のやうな悪者ぞろひですわ。だから、そりアお嬢さまも御注意なさつた方が、およろしいわ。え、そうですとも、充分御注意なすつた方が、およろしいわ。」

ジリジリジリ。——

玄關の呼鈴がなつた。家政婦は立上がつた。

「あら、お歸りでいらつしやるわ。」

伯爵はしかし、二人の出迎へをもまたないで、小間使ひに帽子と外套とをもたせて入つてきた。

「おゝ、二人ともまだ、起きとつたのか、俺は今夜、すばらしい激務のなかで、酔つぱらつてしまつた、あははは。」

伯爵は類子の體臭を、げツぷと一緒に吐きだした。彼は待合の寢室で類子が砂に投げあげた魚のやうにはね廻つたことを思ひだした。

「ふむ、人生と云ふものは、なかなか愉快なものぢやよ。二人は今夜、あまりいい御機嫌ではないらしいな。いかん、うむ、そんなことぢやいかん。」

伯爵はアアム・チエアロ・ボオルのやうに、體を投げだして、

「俺は、この頃事業上のことで、繁忙また繁忙の生活ぢや。ぢやが俺は愉快ぢや。事業上の活動ほど身にとつて愉快なものはない。納子、お前は幸福ぢやぞ。百合瀬には少くとも一千萬圓の財産がある筈ぢや。財産に眼をつけるのはよろしくない。しかし、お前にも將來は解る。財産があると云ふことは、決して惡いものではないとな。おははははは。」

伯爵はもう一度類子のげッぷを吐きだした。

「で、ぢや、俺は考へとる、現代はあまりに道徳の腐敗した時代でありすぎると。俺は、お前がその最後まで、道徳と貞操とに堅固な女性であつてもらひたいと考へとる。高い德性ほど、人間に必要なものはない。殊に女性に於て、それが貞操とならんでもつとも必要なものだと、俺は考へとる。わかるか？」

伯爵の瞼は半分くつついて居る。

彼は葉卷を喫へてマッチでもさがすのか、トルコ織のクッションの上にだらしなく手を伺はしたが、ポタリと口から葉卷をおとすと、それを拾はうともせず、半分口の中で云ふのだつた。

「いや。人生は、人生はなかなか愉快ぢやよ。はははは。‥‥おい吉村！そこに聽いとるか？人生は愉快ぢやよ。えゝ？」

酒焼けのした猪頸が萎えると、伯爵は巨大な頭をクニャリと前へたらして、そのまゝ崩れる樣にだらしなく半身をクッションへ横たへるのだつた。

納子は床の一隅に立つたまゝ、冷たい眼をして父親の醉態を見つめて居た。

彼女の瞳が吉村にさゝやいた。

（これが今しがた人間の徳性について論じたわたくしの父さまなのよ！）

世界の經濟的困厄と正統經濟學の無力とのために、東洋内燃機製作株式會社ばかりでなく、すべての生産工場が、いまや刻々と不安焦慮のなかに、夥しい失業者群を排出させて、混亂してゐた。

これらの慘憺たる現實は、これに對する理想的な改造方策よりも、はるかに速かに動きつつあるのだつた。マルクス主義者たちは、勞働問題をこれまでの勞働運動の理論によつて、即刻解決しようと努力してはゐるのだが、さて、勞働がすべての富を創造するとは考へられないし、勞働が富の生産のほんのわづかばかりの部分にしか寄與しないとすると、この問題が片付いても、現代の社會の困厄が解決されるとは考へられないのだ。

現代の政府と彼等の專門相談役とが、この經濟的疾患を、信用のなくなつた仕方でいかに救濟しようとしても、過去數十年間、使ひ古した形式と無能な現代政治家の手腕とでは、救濟さるべくもないのだ。それでは、どうしたら、これらの經濟的疾患を解決することができるか。それは、現實の事情を新らしい方法で新らしく分析して、そこに新しい方策を立てるより外に、すべはないのだ。

それでは一體どうしたらいいか。

權力が所有者から財政へ退却しつつある今日、新らたに生産機關の財政的解剖、――ここから新らしい方針をもつて、出發をし直さなければならないのだ。

例へば、――東洋内燃機製作株式會社でも、或は他のどの工場でもいい。財政的立場から工場を分析してみると、次のAとBとの二つの群から工場が構成されてゐることが、明瞭な事實となるだらう。

A群。――個人へ支拂はるべき、賃銀、俸給、配當。

B群。――他の組織へ支拂はるべき原料品、銀行決濟、その他への外的費用。

分析せられたA群は、直接に消費者としての個人の受取る購買力だが、しかし、工場の支拂として見れば、ひとりA群ばかりが、その全額ではない。工場は他の工場へも支拂はなければならないものがある。卽ち原料品や他の機械の購入に對して、更に、銀行に對して借入金の利子支拂その他の決濟もしなければならないのだ。が、それらはいづれも、消費者の購買力には關係のないものばかりだ。しかし、個人の持つ購買力の流れの割合は、Aによつて現はされるが、しかしすべての支拂は物價に變身しなければならないので、物價の流れの割合は、A+Bより小ではあり得ない譯だ。

してみると、生産費に等しい購買力——賃銀俸給配當でもつて、生産費以上の物價をどうして支配することができるだらうか。生産物が賣れ殘れば、生産は制限せられよう。生産が制限されたら、失業者が輩出し、生産費が減退することも分りすぎた話だ。生産費が減退したら、ますます生産物が賣れ殘つて、失業者群が増大するばかりだ。さうして、これらの生産品の輸出に血眼になつてゐるのだが、そのはけ口が、どの國に今日あるだらうか。

現に、東洋内燃機製作株式會社も、全力をあげて支那南方政府と交渉を進めながらも、裏面に飛躍してゐるアメリカの財團に壓迫されて、殆んど手も足もでずに、支配人は旅客機上で嘆息をもらしては、むなしく立川へ戻つて來るやうな有樣だつた。

今や、何處へ飛行機を輸出すべきだらうか。工場は日毎に沈滯して、徒らに二三臺の飛行機が、巨大な人氣のない工場内に翼を休めてゐる、青空を戀うて居るのだつた。翼にわびしく塵をためながら。

數日後だつた。

麻布の神保の邸に柄子を訪ねた百合瀬剛は、秋らしく黄ばんだ庭の芝生に、柄子と向き合つて立つて、肩からかけろふを燃やして居た。

輕快なゴルフ服に、競馬用の鞭をふりながら、剛は云ふのだつた。

「どうしても、それではおいやなのですか、競馬が。……」

「厭と云ふこともないのよ。けれど、今日はどこにも出たくないの。」

剛は神經的に鞭を鳴らして、

「我儘なことを言ふお嬢さんだ。競馬がどれほど壯快なものだか、あなたは知らないからです。」

柄子は目黒の競馬場は知つてゐた。父と二三回行つた記憶をもつて居り、賭け馬に熱狂してゐる人たちの顔か、きれぎれに今に彼女の網膜に殘つてゐた。失望で歪曲したさもしい顔、群集の中に脣をあけて馬のやうに走つて行く女、紙幣を汚いハンカチのやうに握つてゐる男たち。――

「今日は僕の持馬がでるんです。例のユング・フラウです。今日は斷然優勝しますよ。その光榮を僕はあなたにも分けたいんです。」

「ありがたう。」

柄子は冷淡に、この高慢な紳士の誘ひを拒絶しきらうと考へて居た。拒絶そのもの、なかに何かなしに、快感に似たものがひそんでゐるやうに想はれた。

「どうしても行かれないんですか？　ぢや、仕方がない、さようなら。」

剛は玄關わきの砂利石をけつて、表に待たしてあつた自動車に跳乗つた。

剛の自動車が見えなくなると、柄子は室に行つて、鸚鵡の籠へ指をかけた。

「ハレルヤとおつしやい、ハレルヤと。」

鸚鵡は無感動な眼を柄子に注いだ。嘴を輕く動かしながら、

「ハレルヤとおつしやい、ハレルヤと。」

[illegible]さ舍で籠をうごかすと、鸚鵡は揺れるまゝに揺られてゐる。

鞆子は急に涙が眼頭にしみてくるのを感じた。

「吉村さァん。」

廊下にでて、鞆子は疳高い聲をあげた。

「あたくし一寸出かけてくるわ。多分競馬へ行くかも知れないわ。」

一時間ほどして、――彼女は競馬場の巨大な楕圓形をとりまいた人の輪のうごめきの中に居た。フランス製の華奢な女持ちの双眼鏡が、鞆子の手の中に時折きらめいて居たが、それは疾走する馬の群れに注がれては居なかつた。彼女はレンズを透して何か別なものを競馬場の雜閙の中にさつきから求めて居るのだつた。

歪曲した眼、陽のさしこんだ鼻、秋らしい婦人帽、花の樣なパラソル、紅の濃い唇の擴大、雜多なものが、明確に、またぼやけて、レンズのなかを擦過した。

レンズが到頭彼女の求めて居るものにタッチしたとき、鞆子は双眼鏡を引き剝くやうに、眼から放してゐた。

「あたくしはまァ、あの男を求めるためにこゝにきたのかしら?」

鞆子は、自分の奇矯な神經コオスを吟味しようとした。が、それは狂噪な人間の渦の中では不可能だつた。

彼女の理性以上のものが、再び双眼鏡を鼻の上にあてさしてゐた。

レンズの中ではゴルフ服の剛が、さつき麻生の邸の芝生と同じく鞭をふつてゐた。その傍に一人の若い女が、剛と同じ方向に視野を走らせて、同じ程度の熱狂さで息をはづませてゐた。剛のそばに女を見出したことは、何故か鞆子を冷靜にした。冷靜な感情で、しかしレンズを彼女はこの二人に凝結さしてゐた。

「あたくしは、…けれど、一體あの男に、どんな感情をもつてゐるのかしら。」

鞆子は疲れたレンズを、競馬場全部にクルリと一廻轉さした。

ユング・フラウが出場した。ユング・フラウはその純白な毛並を陽にかげろはしく、颯爽とその印象を場内に强めてゐ

た。

——ユング・フラウ。

——ユング・フラウ。

四方に聲が起つてゐる。

鞆子は、このユング・フラウのスマアトな形に、女性らしい好みを感じた。しかし、今、このユング・フラウが優勝することは、彼女の自尊心が傷けられることのやうに想はれた。

スタアトはきられた。

張りきつた線が、コオスにひかれた。レンズのなかで、馬と人とは全疾走の塊りとなつてゐた。

第二コオス、

第三コオス、

そのタアンで、白色の一點が一馬身をリイドしはじめてゐた。栗色の一頭がそのあとに迫つて居た。

レンズを持つ細い指に汗がにじんだ。緊張と昂奮とが、鞆子の血を燃えたゝした。

「栗色、栗色。」

鞆子の唇はひとりでに動いた。しかし、白色と栗色との距離は、ゴオルまで同一の形で連續した。

「わあッ！」

聲があがつた。

鞆子は指さきをふるはせて、もう一度、憎惡のレンズを剛の場處に注いでみた。しかし剛も女も、いつかその場處から姿を消して居た。剛と女との代りに、レンズは思ひがけない新らしい發見を鞆子に提供した。

父親の神保伯爵と三島類子の姿だ。——

類子は、このレンズに映つた頰紅の濃い女が、どんな種類に屬した女だかを知つてゐた。レンズの中で伯爵は、女からハンカチを受取つて、何か上機嫌な笑顏と一緒に巨大な禿げ頭を拭いてゐる。女の嬌態。――

「この白晝に、場所もあらうに。お父さまもお父さまだわ。恥づかしくもない！……」

類子は、レンズを力一杯コンクリートにむかつて叩きつけた。レンズは彼女の感情を反映しない。拍子拔けのした音を立てて、コンクリートに轉がつた。何かしら意味のない笑ひがだしぬけに彼女の喉から押上げて來た。――

類子は、四杯目のヂン・カクテルに唇をつけてゐた。

彼女の皮膚は豐滿に白く、眼だけが毒蛇のそれのやうに赤く光つてゐる。

伯爵はこの女との關係には、もう敗勢しすぎてゐた。しかし女の感情は伯爵の敗勢とは反比例に高まつてゐた。

「俺は一體、少年時代から、嚴格な家庭でしつけを受けたので、云はゞ血液が僧侶の様に植物性になつとるんぢやね。」

さう云つて彼が笑ふと、女は反駁するのだつた。

「で、どうしたとおつしやるの？　あたしはあなたを一生はなさない積りなのよ。私は元來執念ぶかいたちの女なんだから。」

「俺は素浪人ぢやなくて、社會的地位と云ふ様なものを背負つとる。俺はあんたとの關係が、巷間に流布されるのはともかく好まないので。……」

「わかりましたわ。あなたは私たちの關係を、整理なさらうと考へていらつしやるんでせう？」

「いや、俺はその點德性を重んじる人間ぢやよ。あんたに對しても、俺は冷淡な態度をとらうなどと、もちろん思つてやせん。ぢやが、噂さの流布についてはお互に相應注意せんならんのでな。」

「伯爵。」

ソフアから類子が腰をあげたとき、伯爵は喜劇役者のやうな恰好で手をあげた。

「聲が、聲が、類子さん高かすぎるよ。こゝはカフエーぢやよ。俺の身分に關してどうかう云つて貰つては困る」

「いゝえ、何もあなたの身分を宣傳しようなんて考へてはゐませんわ。けれど、あなたの薄情が口惜しいのよ。あたしは女性として捧げられるだけのものを、あなたに捧げてきたんですわ。それをあなたは、御自分の名譽心と交換なさらうとしていらつしやるんですもの。」

テーブルの下では類子の靴が、伯爵の膝をけつてゐた。伯爵は迷惑さうに、顔をしかめたが、次の瞬間には、類子ののばした脚を、その膝で强くはさんでゐた。

季節の颱風が雨をともなつてゐた。雨は銀座をのぞかせる窓ガラスを、劇しく叩いた。

雨をよけて、ネクタイのない四人づれの男が、何か興奮した口調で言葉の應酬をしながら入つてきた。伯爵のとなりのボックスはこの四人の男でしめられた。

伯爵は女に煽てられて、チンをまた口に注いだ。伯爵には隣りのボックスの四人が、不氣味な浮浪人か何ぞのやうに考へられた。

伯爵と類子は、會話の言葉をひくめた。

隣りのボックスの聲は、斷片的に高められた。

資本家、勞働爭議、ビラ撒キ、――潛行運動、――デモストレエシヨン、――細胞問題。

この斷片語を耳にした、伯爵と女は、何かなし眼を見合はした。

「……だが、俺は、こゝで云つとくが、」

一人が聲をひそめて云つた。

俺たちの陣營には、ちよいと信用出來ない奴が一人まぎれ込んでゐる。云はゞ憎むべきスパイだ！

「異議なし！」

一人が應じた。

「俺もそのスパイを知つとる。こなひだの會合は、我々四人の同志で計畫したことなんだ。それがちやんとボスの手に握られてゐたんだ。我々は同志を裏ぎる憎むべきスパイを制裁する必要がある。」

「すると……」

一人の男の聲が金屬のやうに響いた。

「よし！　君らの眼は俺を見てないな。すると、俺がそのスパイだつて云ふのか？」

「そうだ！」

三人の聲が一齊に亂射された。

と、一人の男がいきなり靴をけつて起たうとする氣配がした。この氣配につれて、無言のうちに、力と力が、火花のやうに格鬪して、切迫した感情の雲行を傳へた。

伯爵が起ちあがつた時、隣りボックスでは、ナイフのやうな悲鳴があげられた。悲鳴とともに一團の者が、階段を疾風のなかに逸走してゐた。

血をふいてソファによりかゝつてゐる男を見ると、伯爵の膝は、急速度に戰慄し初めてゐた。

「類子さん、類子さん、俺たちはこゝに居るべきではない。ともかく早く！……」

ボオイ、ウエトレス、バアテンダァの馳けつけるのとすれちがつて、伯爵は卓子の隅にヒラリと紙幣を飜へすと街路を洗ふ雨沫のなかにぱつととびだしてゐた。

颱風の接近は高原地の空にも何か不穏な雲行を示して居たが、さすがにこゝには都會生活のあわたゞしい人間葛藤の渦

卷ちなく、千古の原始林を埋めた夜の闇の底を、淙々たる溪流の響が縫ひ、いち早く秋更けた夜の冷涼が、硝子のやうに天地に張りきつて居るのだつた。

　雲の間に覗くまばらな空の星のほかには、避暑客に見棄てられた山麓の別莊部落が、蟲の隨のやうに淋しく落葉松林の傾斜を遠く點々と綴つて居るきりなのに、この森林の溪谷の底には、立方形のコンクリートの建築が闇の中に數々の窓を寶石の樣にきらめかして、微かな機械の唸りをあたりに反響させてゐるのだ。

　T川電力株式會社の第二水力發電所。

　凄じい奔流に洗はれて居る排水口のコンクリートの閘門のきはに、うら枯れてわびしく月見草が花をひらいて居る。この中に脚を投出して、時折啣へた紙卷の頭を赤くしながら、瀨見伸一は菜ッ葉服をまとつた夜勤姿の同僚の一人と、現代の結婚について論じ合つてゐた。

　話の發端はT川電力株式會社の株主で、第百五十五銀行の頭取をして居る百合瀨剛造の息子――剛の結婚問題が新聞に取沙汰されて居たので、財界の裏を綴るこの明らかな政略結婚の風習について、瀨見が辛辣な見解を述べたのから出發したのだつた。

　丁度結婚の相手がたである神保伯爵家の別莊が、この火山の麓の落葉松林にとりまかれた別莊部落にあつて、ついこの夏も伯爵の一家が數日こゝに滯在したし、相手の同僚は伯爵のその令孃さへ見覺えがあると云ふくらゐだつたので、ひどくこの結婚問題についての論議は、二人の興味をそゝつたのだ。

「しかし、」

　と、同僚は云つた。

「僕の考では、……現代では結婚と云ふ形式が社會生活の他の形式と調和出來なくなつたんぢやないかと思ふんですがね。早い話が、……あんたはまァ別としてですね。僕など三十でまだ獨身ですが、大體男が三十の齡をきかなければ結婚

生活について物質的な安定がまだ出來ない。ところで・・・・結婚生活以外の性生活は社會倫理の上で一概に否定してかゝつて居る現在の狀態ですね。つまりこのことは男に三十まで童貞を守れつてことになるわけでせう？ これが一體合理的でせうか？」

「しかし君」

と、瀬見は紙卷の殻を奔騰する水の中へ投げて云ふのだつた。

「僕一人の經驗ではすべてがさうだとは主張出來ないが、僕なんぞ自分で結婚生活の本當の資格が出來たのは、・・・・物質的にぢやないよ。精神的にも肉體的にもだ。やつと三十になつた今日だと云ふ氣がするからね。僕の結婚生活なんててんで無自覺だつたんだからね。破綻するのがあたりまへさ。」

「だから、」

と、相手は身を起こして、

「何よりもその結婚生活についての概念が、今ぢや昔と變らなきァならないと云ふんだ。私はリンゼイの友愛結婚て奴の原理をよくは知らないが、一體結婚によつて生じた一組の夫婦が、斷じて生涯一組で居なければならないつて云ふ倫理は、どこから發生したんだらうね。こいつは宗教ぢやないのかね、一種の。」

「しかし君子供の問題があるぜ。」

「子供があつたら問題は若干こぐらかるよ。」

相手は草を掩りながら、

「が、少なくも子供がなかつたらどうだ？」

「すると君の意見は亂婚主義かい？」

「行詰まつた結婚生活はいつ解體してもいゝつて云ふのと亂婚主義とは無論違ふよ。亂婚主義ははじめから亂婚を意識し

て、手あたりばつたり結婚生活と取つ組むんだらう？　さうぢやないんだ。結婚そのものはやはり嚴肅に愛情を基調とするんだ。つまり、私は結婚生活の結果について考慮してるんだ。」

「愛情を基調とするつて？　君。」

と瀬見は微笑んで、

「ぢや、さつきの政略結婚肯定説とはどうやらうらはらぢやないか！」

——實に彼はさう云ふ意見を、百合瀬の息子の結婚について主張したあとなのだ。相手は薄闇でこめかみを掻いた。

「どうも論理がうまく逆轉しちやつたが、……でも、結婚生活は愛情を基調としても、政略を基調としても、やはり、相互間の巧利に出發して相互間の巧利に終るもんだと云ふ私の意見は間違つてないでせう？　俺はお前を愛するからお前と結婚した。これはやはり自分の巧利ですからね。まア大體精神的ではあるだらうけれど。いや、肉體を愛することだつてあるぜ。……俺はお前の持つてる財産を愛するからお前と結婚する。やはり巧利の點では同じぢやありませんか。」

「いさゝか詭辯に類するね。で、つまり結果は？」

「結果はだから、相手に愛情がなくなつたら……つまり、こまかく云へば精神的にしろ物質的にしろ、相手にこちらから愛される資格がなくなつたら、その結婚生活は潔く解體してもさしつかへないつてわけになるのさ。」

「ぢや君にきくが、」

と、瀬見はいくらかまじめに、

「ある一人の男を君が假りに今純粹に精神的に愛したとする。純粹になんてことは現實的にはあり得ないかも知れないけれどもね、ともかくまア世間一般のいはゆる愛情を感じたとするよ。そして君たちは結婚した。不幸にして何年かして愛がさめて破婚したやうな場合に、元來その結婚が今のやうに純粹な愛情から出發した時と、もう一つ相手の持つて居る何か物質的なものへの巧利觀念からそれが出發した時とでは、卒直に云つて君自身の良心に何か異つた影響を與へないかい？」

「あんたは唯心論的な見解に立つて居り、僕は唯物論的な見解に立つて居るんだ。これアこの議論は結局ものわかれになるほかないよ。」
「相手の金をめがけて結婚した。金を使ひつくして相手が不用になつたら離婚した。どうだね君？」
「相手が可愛いゝから結婚した。相手が可愛いくなくなつたから離婚した。違ふかね？」
「恐るべき詭辯だよ。そりア。」
「詭辯ぢやないよ。第一あなたは相手がなぜ可愛いゝか、そこに斷じて物質的根據以外のものがないかどうか、それを考察しなきやアならない。性（セックス）そのものが第一に物質であるところの肉體から發生するんだぜ？」
「君の意見が可なり近代的な結婚觀を語つてゐることはわかるがね。アメリカのいはゆるヤンキーガールなんぞ、ほんのまだ十四五の子供の頃からお金持との結婚だけを夢想してるさうだからね。前の妻（ワイフ）がよく君の云ふやうなことを云つた。やはりこれも尖端ガアルつて奴かね。だが君、彼女等がどこへ行くか？　問題はそれを見てから解決するほかないよ。」

――夏の登山期から再三もの凄い爆發活動を繰返して、數名の犧牲者をさへ登山客の中に出した山は、この二三日また不氣味な鳴動を示して、避暑客の去つた山麓の別莊部落を不安に搖るがして居た。

落葉樹林の傾斜のはてに高く天蓋を被つたまるい禿山。

地球の心から胴慄ひをするやうな地搖るぎが、その方向から低くまた傳つて、二人の會話を途切らせるのだつた。

「またこの二三日山鳴りがひどいね。」
「今夜あたりまたドカン！　ぢやないのかい。」
「危ないもんだね。」

さう云つて、同僚は油に冷えた菜ッ葉服のからだを、草生からもたげるのだつた。

「さて、九時だね。そろ〳〵引上げないか。」

發電所のコンクリートの明るい室の中では、床に並んだ巨大な水力タアビンが鐵の皮をいかめしく黒く光らして、交流機の滑らかな廻轉とともに油の樣な唸りを壁に反響させて居た。

山間の溪谷の闇に不斷に水力で廻る巨大な電力機。東京市の輝かしい夜の光源は實にこんなところにあるのだ！

丸の内のＩ・會館大ホオルは、盛裝の紳士と淑女にあふれてゐた。

燕尾服の伯爵は、コツプを配ばるボオイのやうに、愛嬌を客人の一人一人に配布して歩いた。

「ともかくも……」

伯爵は幾度か腹のなかでうなづくのだつた。

「ともかくもこれで、……」

これには二つの意味が含められてゐた。一つは、拒絕し通した娘が、最後に、ひるがへる燕のやうにこの結婚を承諾したこと、他の一つは、もちろん不況のどん底にある自分の會社に對して、百五十銀行からの金融が可なり有利な條件で保證されるだらうと云ふことだつた。これは云はばこの結婚問題に對する交換條件だつたから。

ある男には鷹揚に、ある夫人にはいんぎんに、伯爵は愛嬌を聰明に配布した。

結婚マアチが、むれあがるほどにかざられた花束の香氣のなかから起つた。

純白なクロース、銀のナイフ、華麗な玻璃器。

鞆子は、美しく冷めたい顏をしてあらゆる注視の焦點であるメエンテエブルの正面に、剛と椅子を並べてゐた。

貴族院公政會の勢力のある常務が、デザアトに入ると、うどんのやうに長いスピーチをはじめてゐた。

百合瀨家を、又神保伯爵家を推賞するマンネリズムが終ると、この常務は突然口調を變へて、

「要するに……」

と聲をたかめた。

「日本の經濟界は、今や全く行きつまりの狀態にあるのであります。この原因には、もちろん、世界的不況もありませう。また、金解禁によつて影響された處のものもありませう。で、この不況を、我々は慢然と、傍觀するだけでよろしいか、と云ひますのに、それは甚だ國家百年の大計上よろしくないことなのであります。私はこの日本財界の不況に對して、敏腕と信用の高い神保伯爵により、また重厚にして熟慮、日本金融界の中樞權力を握つて居られる百合瀨剛造氏によつて、明るき將來にまで打開して頂きたいと思ふ者であります。令息令孃の此度の結婚が、誠に琴瑟相和したものであると同様に、兩家も、日本財界のため、堅く相提携して進まれんことを希望する者であります。……」

このスピーチに對して、大分もう醉ひ加減の伯爵は割れるほどに手を叩いた。このスピーチの內容は、あらかじめ伯爵から、この常務に依賴してあつたことではあるが、伯爵は始めて聽く卓說でもあるかのやうに、感動してしまつてゐた。

饗宴ののち二人は、信州の高原にある神保家の別莊へホネームーンに出發するため、幾らかの見送人たちと自動車をつらねて、I・會館をあとにした。鞆子は剛と並んだまゝ、月光のやうな顏をしてクッションに搖すぶられてゐた。

宴席場に隣つた喫煙室では伯爵が、感動的な力で百合瀨剛造の手を握りしめてゐた。

「百合瀨さん、俺にはこんな嬉しいことはない。久しぶりで俺は淚をこぼしましたよ。」

「神保さん。」

百合瀨は能の面のやうな顏で、眉だけを動かした。

「神保さん、いや、これは今夜のやうなめでたい晩に話すべきことではない。しかし、神保さん、あなたに少しばかり忠告して置きますが、あなたは、俺と俺の銀行とを大變に信用していらつしやる。これは有難いことです。銀行家にとつて、信用は一番大切なことだから。……しかし、あなたのお望みのやうなことが、度々俺の銀行で叶へられるかどうかと云ふやうなことは、少し疑問ですぞ。」

「…………。」

「あなたは、少し悟いていらつしやるやうぢや。しかし、あなたの會社も、社會的には、きはめて有力な、內容の充實した會社として見られてゐるのだが、それは會社の考課狀の上のことだけで、俺には、あなたの會社が、どんな困難な立場に置かれて居られるかがよう解る。いや、この話は、ともかく後日にまたお互ひが納得行くやうに語り合へる機會があるぢやらうが。……」

二人の話は、居のこつた泥醉者たちに包まれたことによつて中絕された。

伯爵は屋上から地下室に落されたやうに憮然として、痩せてしまつた。彼は取り散らされながらも華麗な大廣間の宴席場を灯の下に眺めながら何か絕望的なものを、苦く嚙みしめてゐるのだつた。

夜の東京市街は失業者群でうようよしてゐた。圓タクが何十臺も空のままで、街路を照らしてはノロノロと這つて行く。こんなにのろまなのも、ひとつは、產業の停滯がスピードを奪つてしまつたからなのだ。

志村は丸の內のペエヴメントを幽靈のやうに步いてゐた。彼もまた、數日前に到頭章子と一緖に馘首されて、今では云はゞ路頭に彷徨してゐたのだ。時折り彼は闇のなかで立ちどまると、空手のままで札束を勘定するやうな手眞似をしては、カラカラと狂的な笑ひ聲をたててゐた。

「これで、一杯、飲ませろ！」

志村は、バアのなかへ飛び込んでゆくと、ポケットから、破れた扇子をとりだして、サッと展いた。

「志村さん！　大變、お醉ひになつてますのね。」

顏見知りの女給が、しけしけと志村の顏を眺めてゐた。

「酒に醉ッちァゐないんだ。僕は、失業に醉ッぱらつてゐるんだ」

「あら、あんなことおつしやつて――」

「だから、この扇子で飲ませろッと云つてるんぢアないか。」

志村は、卓子の上で、また札束を勘定するやうな恰好をして、扇子を展いてゐた。

「何か召し上りますの？」

「水でいいんだ。」

「お水（ひや）？　かしこまりました。」

失業者は志村ばかりでなかつた。酒場の隅々の卓子には、彼の學生時代の友達たちが、彼等もまた失業して、暗澹としてゐた。あるものは、商事會社で馘首され、あるものは、漁業會社からお拂ひ箱となり、あるものは、また製薬會社を馘られたりして、これらの仲間や彼等の家族を併せただけでも、實に夥しい失業者群が、烈しく飢餓線上で苦悶してゐるのだつた。

志村たちは、小さな卓子に蝟集して、今日の慘澹たる經濟生活とその根本的の疾患について論じあつてゐた。

あるものは、云つた。

「これらの不景氣は十年目又は二十年目に週期的に來る一の自然法則で、こればかりは避け得られない現象かもしれないよ。」

また、他のものは云ふのだつた。

「これらの恐慌も素を洗へば、結局はヨオロッパ戰爭の結果だ。失業は、どうやら不可避的のものでもあるし、また非救濟的のものでもあるのだ。」

また、あるものは云ふのだ。

「さうぢやない。これらの不景氣は通貨の膨脹にあるのだ。」

ところが、これらの異說に對して、志村自身は極力反駁するのだつた。彼はかう云ふ見解を持つて居た ――つまり就業への機會は貨物に對する實際の需要によつて創られ、實際の需要に比例的であるからだつた。貨物に對する實際的需要は、公衆の手にある購買力に依るし、且つその購買力の分配に比例的であるからだ。生産に於いて、かく分配せられた購買力の量は、かく生産せられた貨物の小部分より以上に多くを買ふことが出來ないからだ。さうして、彼は云ふのだつた 購買する公衆に分配せられた購買力の分前が、充分に増加せしめられ、生産せられた貨物の全量を提起せられた價格に於いて購買する事ができるやうになるまでは、かうした商業停滞の時期は幾度となく繰返されるにちがひないと。

彼等は論じ合ひながらも、ときどき、棚の上を眺めては、美しい洋酒のレッテルに憧れながら、購買力のないために、こんなに酒はいづれのビンにも滿々としながら、これを鯨飲することのできないのが不思議に思へてならないのだつた。經濟制度は人間の利益のために作られたものであつて、決して、人間を經濟的制度の奴隷であるやうに創られたものではない筈なのに、いまは一杯の洋酒にさへも彼等は征服されてゐるのだ。

すると、一人の青年が、卓子から躍りあがつて、洋酒のビンを掴んで來て、コップのなかへなみなみとつぎながら、大聲で志村に叫ぶのだつた。

「何より君の勤めてゐた銀行つていふ奴がけしからんぞ。貨物を購買する公衆の能力は公衆のポケットの中を流れる購買力の量と率と提出せられた貨物の物價に依るんだ。然るに、おい、志村！ どうだつて云ふんだ！ 此等の條件の上に、一般公衆は、何等の直接の統制を持つてはゐないのだ。購買力はすべて政府と銀行家とによつて統制せられてゐるんだぜ。そして、どこの國だつて、政府は銀行家にペシャンコになつてゐるんだから、結局は、購買力の究極的統制をなす奴は、銀行家なんだ。彼奴が誰よりも天下の惡漢なんだ。さうだらう。志村！」

「すると、僕は惡漢の子分とでも云ふんだらうか」

「子分どころぢアない。連累者だぞ。その上に金貨本位制の罪惡を知らん顔して、自責、せつせとソロバン珠を彈いてる

たりしやがつて。」

いつとなく、彼等の卓子の上でも、不景氣問題の根本にさかのぼりながら、金融界をいつでも健全に保つためには、本位となる貨幣の量は絶えず調整せられてゐなければならない筈なのに、かうしたことは、全く金貨のやうな有限的なものには望まれないのだから、金貨を廢止して、これに代へるに紙幣をもつてすることについて、論じ合ひだしてゐた。

すると、一人が、

「その紙幣は交換せらるべき金貨を持たないから不換紙幣となり、だから不換紙幣を本位とした金融制度こそは、われわれの一番に望ましい制度なのだ」

ところが一人はこれに反對して、

「そんな信用のならぬ紙幣が流通すると君は思ふのかい。」

だが、大體に於いては、紙幣はそれが過量に發行せられたときこそは有害であつても、それ自身不換紙幣は有害なものではないのだ。

志村はかうして、失業者の友人たちと卓子をかこんで議論をしたりしてゐるうちにだんだん不幸なのは自分ばかりではなささうに思はれて、俄かに、彼は社會的義憤を感じだしてゐた。

その晩、失職した章子は老母と一緒に小さな机の上で、ハアト美人のゴム袋をこさえてゐた。始めは、不恰好な手つきのなかで煩らはしい思ひをつゞけてゐたが、だんだん器用にできあがつてゆくと、ふと、彼女は、志村を聯想しだすのだつた。彼女は頬が紅らんできた。夜の部屋のなかで、志村が籐椅子に凭れては、レコオドをききながら、彼女の就寢前の化粧の濟むのを待つてゐる。すると、彼女が紅い口唇をひらいて、

「隨分お待ちになつて？」

と、彼に甘えかかる。

――あら、これがスヰート・ホオムなのだわ。

章子は指のなかで、夢想してゐるうちに、急に、現實の悲慘な生活のなかへ突き陷されてしまふのだつた。志村との交渉も、銀行時代で終つてしまつたのかしれないと思ふと、章子は恥を忘れてせつせとハアト美人のゴム袋を拵へだすのだつた。生きるためには、これぐらゐのことは仕方もないことだと云ふやうな顏つきをして。

章子が就寢したのは、この頃これも失職した隣りの服部顯吉が夜店で古本を賣つて、僅かばかりの賣上げ高を握つてガラガラと車を路次のなかへ引き込んできたそのころだつた。

横濱市の外人街に近い海岸通の一廓には、ペンキ塗りの怪しげなHOTELが軒なみに竝んで、特殊な雰圍氣を形づくつてゐる。

NIPPON、HOTEL

HUSO、HOTEL。

KIMI、HOTEL。

HOTELは、ペンネームででもあるかのやうに、どれも飛びきり豪華だ。

安い塗料のドアを排して入ると、ジャズのレコオドと、臙脂の口紅とで、女たちが裝飾されてゐる。

體は小さいが鼻は高塀のやうに顏の眞中を遮斷してゐるヤンキーが、ドテラに細い革をまきつけて、十六七の少女と踊つてゐる。

卷舌の英語が下級船員らしく、この遮斷されてゐる鼻の下から洩れる。

踊りの途中でヤンキーは、鼻を横にそらし、少女を抱きあけて下脣に接吻をする。

周圍の女たちと、この女たちを膝にのせた男たちは、ビールの豆をかみながら、手を叩くのだ。

ヤンキーには、この拍手が嬉しいのだ。彼はステエヂの演技者のやうに、拍手をあびながら、極めて愉快さうに、二度、三度、例の少女を抱きあげて、腰をハワイの土人ダンスのやうに動かしては、少女の下唇を盗むのだ。

SHORT、TIME　二圓

LONG、　TIME　五圓

不景氣は、港の船を少くした。したがつて經濟原則により、こゝの貞操も下落したのだ。

銀座裏のカフエーで、スパイの心臓に短刀を與へたあの浮浪少年じみた社會主義者の一人が、ビールを苦くこのホールで飲んでゐた。

彼も廣間の隅で女の一人を膝にのせてゐた。のせたのではない、乘つてきたのだ。重い女の臀部をじツとりと受けて、彼は苦いビールを重ねてゐた。

「どうしたのさ。ちつともあんたさつきから笑はないぢやないの？」

「うむ。」

「笑ひなさいよ。こゝは教會ぢやないことよ。笑つたつて誰れも何んとも言やしないわ。」

「笑はうか？」

「え、笑ひなさいよ。大きく。」

「よし。」

彼は女を突きとばすと一緒に、コツプをテエブルで碎いてゐた。一同の視線が集まつたとき、彼は突然、爆裂彈のやうに笑ひだしてゐた。

彼は知つてゐた。このドアを一歩でたとき、彼の體はもう警察の手にあることを。

彼は再び女の首に抱きついて行つた。

「どうだ、笑つたらう、大きく笑つたらう。金はこゝにあるんだ、金は……」

蝦川は、テエブルの上に、裸の紙幣と銅貨とを投げだしてゐた。

「あなたはすごい方ね。でも、少し面白いわ。」

「面白いことはまだあるよ。話してやるから、こゝにお出で、こゝに。」

彼は女を抱くと、その耳もとに囁いてゐた。

「君、君はまだ人を殺した經驗はないだらう。人を殺した經驗は。」

「まあ、何を云ふの、あんたは！」

「今話してやる。な、君、俺は人を殺してきた人間なんだぜ。どうだ、面白いだらう。」

「まあ、怖しいわ。この人、」

女は男のそばをはなれてしまつた。

彼は頭を抱へた。頭のなかに、火花のやうなものが散つて行つた。三・一五事件以來いさゝかも手をゆるめない當局の彈壓のもとに、同志の一人一人が、苗をむしられるやうに檢擧されて行く光景が、火花のなかにうつつたのだ。

「俺は、俺は……。」

彼がうつろな眼をあげたとき、とうに見知り越しの仲の刑事の一人が、きわめてにこやかな顔で、扉を排して入つてきてゐた。

何かしら氷のやうなものを、相手の視線のなかで彼はしばらく味つてゐた。

高原地らしい深い朝霧を鋭い氣笛で蹴割らして、汽車は寂れた避暑地驛の濡れたプラットフォームへ、エネルギッシュな巨軀をよこたへた。

霧に濡れた車室の窓のなかではとうにもう灯は消えて、旅に疲れたものうい人の顏が點々と花びらのやうに瞼を閉ぢて居た。山岳地列車の車室の朝はまだ睡り深い。——

中形の赤革鞄を片手に、籐のステッキをかかへた瀟洒な靑年が、神經質な足どりで煤けたステップからプラットフォームへ跳降りた。續いて、——毛皮のコオトの襟から雪白色の肩の皮膚をむきだしたブルジョワの若い女性が一人。

新婚の一夜を汽車のなかにすごした新郎新婦、——百合瀨剛（つよし）と納子とだつた。

「いらツしやいまし。」

別莊番の木田が改札口から身を乘出して恭しい會釋を投げた。

「どうぞ。……こちらに自動車が廻してございますから。」

——蜜月旅行をするのなら、騷々しい旅館泊りなどより、靜かな山の別莊の方がいゝ。

これが納子の氣のなさゝうな主張なのだ。しかしそれでも世事に疎い貴族の娘だつた。結婚生活そのものがどんな具體性をもつて、彼女の明日に繰展げられるものか、何かそこに恐怖ともつかない好奇に似た氣持が湧くのだつた。ともかく、大して、氣に染まない相手ではあつても、妻と呼ばれて自分は一人の男に身を委ねたのだ。

處女にとつて結婚は云はゞ一つの祕密箱だ。蓋を開けて見るまではそこに恐怖と好奇とがつながる。——

「どうです？」

賑やかな見送人の顏を昨夜窓の外へ送つて、汽車が上野驛のプラットフォームを滑り出し、いよいよ二人だけの世界が展けられた時、最初に剛が彼女に云ひかけた言葉はこれだつた。

「どうです？」

之はしかし、新婚の感想を相手に訊いて居る言葉ではなくて、自分で自分にそれをたゞして居る獨り言にすぎなかつた。

納子は答の代りに處女らしいつゝましい微笑を相手に返しただけだつた。

結婚式場で彼女の脳裏を充たしたさまざまな複雜な感情は、少しづつ彼女のうちに整理されて、今度は反對にひどく蒼ざめた純粹な、――何か涙つぽい悲みに似た感情が淸水の樣に透明に湧いてきた。

(あたしはもう神保の娘ぢやない。結婚したんだわ。――この人の妻なんだわ。)

剛は時折、獲物を前にした獵師のやうな眼で新婚の妻を眺め、ふとまた運命を自分の掌に全く掛らした一個の可憐な女性に、純粹な愛情を感じたりした。

ともかく俺は、このもぎりたての果物のやうな、純潔な貴族の娘を手に入れた。今までの泥沼にあがいて居たやうな酒と女の世界から、少しは脚を洗はなくつちや。――

それにしても親爺は高價な花嫁を伜に買つてやつたもんだといづれこぼすだらう。神保はともかく今金のいりどきなんだから。――

が、新婚の二人は汽車が始發驛を五十哩と離れないうちに、もう感情をこはしかけて居た。それは、――剛が二人の結婚に對して神保家が抱いて居た政略的な意圖を、それとなく打開けたためで、父の伯爵に對して殆ど尊敬も親子らしい愛情も持つて居ない柄子もさすがにこれには自負を傷付けられずには居なかつたのだつた。

「つまりあなたはお金であたくしをお買ひになつたとおつしやいますのね。」

柄子は白眼を神經的に燃やして云つた。

「誤解しないで下さい。」

剛はあわてて、

「僕のあなたに對する氣持の純粹さは、充分おわかりになつて居る筈だと思ふんですがね。……たゞ僕の云ふ意味はあなたのお父さん、つまり伯爵が一般から解釋されて居る立場について僕が感情をたち割つてみせただけで、これは感情をま

じやない客觀的な事實なんだから、僕らはお互ひにある程度までこれを理解して置く必要があると云ふんです。」

「なぜ理解して置く必要があるんですの？」

「それはさうぢやありませんか。神保と百合瀨と兩家の直接な關係ですもの。」

「つまり」

鞆子は益々感情を歪めた。

「あたくしのお父さまがあなたのお父さまの要求をいれてあたくしを嫁がした。その代償として、神保の財政が百合瀨によつて保證される筈になつて居る。この關係をあたくしに理解して居ろとおつしやるんでせう。……同じ意味ですわ。」

「何が同じ意味なんです。」

「あたくしを奴隷のやうにあなたは買つたつもりなんです。」

「莫迦云つちやいけない！　誰が奴隷だなぞと云ひました？」

「奴隷であることを覺悟して居ろと今おつしやつたのはあなたぢやありません！」

無論鞆子は自分と剛との結婚の動機がどこに出發して居るかを識つてゐる。父の事業は今救はれない不況のどん底にある。どうしてそれを救ふか？

當事者よりも父の伯爵がこの結婚に懸命であつたのは、むしろ悲慘すぎた滑稽だつた。

だが、それが自分の氣持にだけわだかまつて居る間はまだいゝ。結婚の相手から、しかも、こゝ半歳うんざりするほどしつこく自分をつけ廻して、自分の愛をかち得ようとあせりにあせつて、やつと今やその望をとげたところで、而もなまなましい新婚の夜にこんな事を赤裸々にその相手から云ひ出されて見れば彼女の自負が、鋭く傷付けられるのは當然だつた。

かうした感情の齟齬は、人眼の多い汽車のなかで腹一杯の言葉の應酬がお互ひに許されない立場にあつたゞけ、二人の

氣持によくない内訌のしかたをした。

高原地の霧深い朝の停車場に降りて、落葉松や白樺に綴られた山麓の傾斜路に、快く自動車を疾驅させながらも、二人の態度にはあの新婚者の希望に充ちた、歡びや輝しさなどはなかつた。

(何と云ふ自負の高い貴族の娘だ！)

快速なスピードが男の氣持を棄鉢に導いてゐた。

それに反して、――女の氣持にははじめてしみじみとした後悔の念が頭をもたげかけて居るのだつた。

(あたしは結婚をしたんだわ。あんな大勢の人々にそれを披露したんだわ。――結婚！ 女にとつてもう取返しのつかないことをしちやつたんだわ。)

霧が薄れると、落葉松林の傾斜の上に、火山らしい擂鉢形の禿山が頭をもたげて、淡い噴煙を低く焼石の傾斜へ向はして居るのが何か自然のもつ狂暴な威厭をもつて、額に迫るのだつた。

「寒かありませんか？」

剛がきいた。

「え丶。」

鞆子は冷たく答へた。

(おとなしいお婿さんぢや。)

同車して向き合ひの補助椅子にかけた別莊番の木田は、腹でこツそりつぶやいた。自動車が傾斜の砂利路へ轍を深く喰込んで、速力をゆるめた時松林の間を綴つた贅澤な別莊部落の一連が淋しく門を閉ざして、窓の兩側に流れてゐた。

翌日の暮れかた頃。——

山麓の部落々々からは青年團員や在郷軍人の一團から組織された臨時の救護隊などが、ものものしい身ごしらへで火山灰に覆はれた落葉松林の傾斜道を山へ向つて居た。

山頂はもの凄い噴煙に包まれて、おどろおどろしい地鳴りが時折山麓の部落や森や林を氣味悪く搖るがして居た。

午後一時頃に一度、三十分ほどして一度更に三時頃にもう一度都合三囘ほど續けて、凄じい爆音と共に山頂から熱灰を噴上げて、山麓の部落一帶に拳大の燒石を降らした。間もなく中腹の火山觀測所から通知があつて、折柄三名の登山客が頂上で爆發に遭遇して居る。一名の死骸はすでに噴火口ぎはに熱灰に埋れて居るのを發見したが、他の二名はまだ不明だ。捜索隊を至急派遣する様に。——

「若檀那さまはまだお歸りになりません？　どちらへ今朝お出かけになつたのでございます？」

さつきの爆音と地搖ぎとはやはり山の爆發だつた。三名の登山客が頂上で遭難したさうだ。——さう云ふ消息を持つて別莊番の木田が鞆子を離れの彼女の居間に訪ねた時、霧の様なひどい降灰に氣をとられて、不安さうに庭を眺めて居た鞆子は、不意に凝つた様な蒼ざめた眼をして別莊番の爺やの顔を見返した。

「遭難したつて？」

と、彼女は息をつめて、

「山へぢや誰か登つて居たの？」

「へえ。……今こゝからも救援隊を山へ向けるんださうでございますが、爆發の時何でも三名ほど噴火口の近くに居た筈なんでございます。……つて一名だけはもう死骸を發見しましたんださうでございますが、あとはまたあの……」

さう云ひかけて、彼は女主人の異常に強ばつた蒼ざめた表情から何かしらはツとして、息を切るのだつた。

「若しかして、あの、若檀那さま、山へでも？」

柄子は知らず識らず座から立つて居た。からみ合はせた兩手の纖い指がそのまゝピクピクと蒼白く痙攣した。

「……？」

「お前どこで、どこでそんなことを聞いて來たの？　三人遭難者があつたなんて。……」

「駐在所のところへ今大勢人が集まつて居まさア。でもお孃さま、一體若檀那さまは、ど、どちらへ今朝がたお出かけになつたのです？……」

柄子はだしぬけに木田の老人にすがりついて、ヒステリックな泣聲を立てて居た。

「爺や。あたくしを駐在所へ連れて行つて。…山には電話があるの？　遭難者ツて誰だかわかつたの？」

「ぢやァ若檀那さまは、……？」

「今朝、山、山、山へ、ひ、一人で……」

木田老人の岩疊な胸へすがりついた柄子は、ヒステリックなすゝり泣と一緒に腕の力を弱めると、そのまゝズルズルと脚の方へずれて、疊の上へ崩れてしまつた。

（あの人を山へやつたのはあたくしだわ。一晩ぢゆう喧嘩をして、あの人は夜があけるとステツキを一本もつて家を飛出しちやつた？――「山へでも登つて來よう。」一言だけあたくしに云つて。――もしかしたら、あの人を殺したのはあたくしだわ。）

駐在所の前で勢揃ひをした救護隊の一團の中には、蒼白い緊張した顏をしたT・川第二水力發電所の勤務員たちが四五名まじつて居た。機械技手の瀬貝伸一郎が偶然その朝一人の同僚とあけがたに發電所をたつて山へ向つた。三名の遭難者のうちに彼等の存在が豫想されて、同僚の間に異常な衝動を與へたのだつた。

白は噴煙と降灰の中にたそがれかけて居た。

山頂を呑んだ深い灰色のたそがれの中に、人々は暗澹な自然の悲劇を感じるのだつた。

星のない闇夜がすつかり山をのんだ頃、火山觀測所の下の粗末な山岳ホテルに、葬列の樣に靜かに降りて來た先發の救護隊が硫氣に窒死した灰まみれな死體を三箇運び込んだ。

熔岩に見るかげもなく頬を爛らした瀟洒な洋裝の紳士がポケツトから發見した紙幣入れの名刺で百合瀬剛であることがわかつたのは、それから間もなくだつた。

あとの二人は想像した通りT・川第二水力發電所の所員瀬見伸一郎と同僚の友人とだつたことは云ふまでもない。

山麓の部落々々から山へ向けられた幾團かの救護隊も灰まみれのまゝ續々と山小屋へ集まつて、この不慮な遭難者の死骸をとりまくのだつた。

丸の内のT・劇場の夜の舞臺は、日本レビユウ劇團の初公演によつて、まぶしい五色の彩光の中に更けて居た。灯を映した大理石の圓柱、金の勾欄に縁取られた三層の觀客席、そこにぎツしり詰まつてうごめいて居るあらゆる雜多な階級を網羅した觀客、オウケストラボツクスから渦卷き上がる虹のやうなジヤズ。――

絹のスタツキングを透かした幾十の女の脚が、眩しいフツトライトの中に狂噪なリズムをもつて泳ぎ、裸の胸と裸の肩とがむせる樣な獸肉の香を舞臺から觀客席へと撒けてあらゆる近代感覺の興奮をもつて人々を醉はして居た。

都會の裏側の陰慘暗鬱な空氣などは、この燦爛たる歡樂の世界には微塵もない？

行きつまつた資本主義の捨鉢なあざ笑も勞働街を洪水の樣に流れてゐる失業者の跫音とすゝり泣も、破滅した工場の亡靈も、金庫の底に沈滯して居る不換紙幣のうめきもこゝにはない！

あるのは、——

陽氣なジャズ、赤く青く紫に旋轉する強烈なスポットライト、絢爛たるコスチュウム、浮氣な秋波、淫らな唇、乳房の肉感、さうして裸の脚、脚、脚。——

「ちよいと君、二番目のあの女を見たまへ！」

三階席の一隅での會話だ。

「……？」

「そら。いやにあすこでチピチピ手脚をはねかへてる奴があるぢやないか！」

「ふむ。……」

「どうもあのあがり過ぎる脚が氣になるね。え？　土間席のあの第一列目の禿げ頭連中を見たまへ。氣が氣ぢやねえッて恰好ぢやないか！」

「きはどいとこ見せァがるな。……」

「ははは！」

「絢爛たるもんぢやね。」

二階席の一隅での會話だ。——

「……これがいはゆるエロエロダンス云ふもんかね？」

「凄い脚の行列ですな。」

「脚の林ぢやね。」

「つまり酒池肉林て奴かね？」

上衣のポケットに手巾を覗かした若い會社員、おかッぱの女學生、ブルジョワらしい大きな禿頭、盛裝を華の樣に眼ゥたした令孃、白髪頭と水々しい丸髷、オオルバックを油で光らした大學生。

土間席を埋めた觀客は舞臺の彩りにも負けない絢やかさだ！

「どうだい？」

三階席のてッぺんへ塊つた學生の一群の中で、一人が遠い脚下の舞臺を見おろしながら一人に囁いた。

「マルクスの美學とこゝの美學とは君の見解では？」

「崩壞美だね。……第一この劇場自身がだよ！」

「なぜ？」

「この大理石と黄金とはおよそプロレタリヤからは遠いよ。」

「ところで、最近のロシヤの消息によるとだね。モスクワの大劇場は帝政時代と變りなく金色燦爛として、けちな日本の旅客なんぞその豪奢さに眼を廻してるとあるぜ？このプロレタリヤ美學はどうしたんだね？

――舞臺は終幕に近付いて居た。

ふと舞臺の隅の重たげな緞帳の陰に人の氣配がして、大理石の壁にひそめた小さなスヰッチを白い指が押すと、水色の四角い灯の中にはッきりと、筆太な文字が壁の刳り形の中に、

神保資介樣事務所まで。

「あら、」

三階席の勾欄のはなから、斷髮の若い女が一人身を乘出して、舞臺の彩光の反映を受けた薄暗い一二階の觀客席の邊を忙しく物色した。

「なァに？」
連れのもう一人の見識らない若い女が彼女の視線を追つてかう訊いた。
「神保さんが來てらッしやるのよ。」
「どこに？」
「どこにッて、あそこに書いてあるわよ。そら、ね？……もう席をたつてらしつたのかしら。」
云ひ終らないかに、土間席の中頃からきちんとしたフロック姿の肥つた中老の紳士が立上がつて、あたりの視線を多少氣遣ひながらプロムナアドへ降り立つた。續いて、――眞ッ赤な夜の衣裳を着飾つた妖艶な女が一人。
神保伯爵とさうして、――
紅子は小さく叫ぶのだつた。
「あ！　類子さんだわ。」
――彼女はすると聲明したやうに伯爵をすでにとりこにしたのだらうか？
二人の樣子はまさにさうだ！
閉幕に近付いて、舞臺はそのあらゆる照明をもつて眩しく耀き、心臟の湧立つ樣なジャズの渦の中に、レビユウ劇團全員のとりどりなコスチユウム姿で花苑の胡蝶のやうに亂舞して居た。
「何ぢやね？」
舞臺の上の夢幻的な色彩の渦からまださめやらぬ眼で、事務員に導かれて廊下を幾曲りした伯爵は、とある簡素な事務室のドアロに思ひがけない家政婦の吉村エイ子を認めるとやゝ苦がい口調で云ふのだつた。
「何か用かね？」

「は。」

彼女は蒼ざめた緊張した眼をして、

「たゞ今山の別莊からお電話がございまして、あの、あの百合瀨の……」

火山の爆發。

百合瀨剛の慘死!

實に今の瞬間まで思ひ設けもしなかつた出來事だ。——

「で、」

と、伯爵はあやふく重心をなくしたからだを、片手で卓子の隅にささへて、膝をガタガタ慄はせながら、言葉をどもらせるのだつた。

「鞆、鞆子は?」

「お電話はお孃さまがおかけ遊ばしましたので、……」

「な、何で剛はまた、一人で、一人で山へなぞ登つたんぢや? 新婚匆々。……」

「お孃さまは泣いていらしつて、電話がはツきり致しませんのですけれど、何か別莊で御不和なことがございましたさうで、それで、……」

「莫、莫、莫迦!」

伯爵はこめかみの邊に眞つ赤に血をのぼせたが、すぐに紙の樣に額を白くして、

「ゆ、百合瀨へは知らしたか?」

「いゝえ、」

家政婦はおどおどと、

「ま、まだでございますけれど……」

——類子はドアロに凝然と立つて居た。時も時何と厄介なことがもちあがつたものだ！

今夜こそこの好色な貴族の夫人にならうとする計畫を巧みな説話で承諾させようと思つてゐたのに、

「ぢやァすぐに、」

と、打碎かれた伯爵は、わづかに身をさゝへて、空虚な聲で云ふのだつた。

「百合瀬にすぐにその旨を知らせろ。こゝから電話で。……」

「は。……」

[illegible]の死と共に當然もたらされる結婚の破壊、百合瀬家との、いや、第百五十五銀行との關係の決算。

「だが、柄子と不和だつたなぞと云ふでないぞ。」

あらゆる計畫が今や急旋回をなして彼の眼前に挫折した！

伯爵は眩暈を感じた。

家政婦は電話を求めて部屋を去らうとして、何かなしふと部屋を振向いた。その刹那、椅子を蹴倒し、したゝかな音を立てて伯爵はコンクリートの床へ埃の渦と一緒に横たはつた。赤黒い鼻血が見る見る無氣味な斑紋を鬚の下に擴げた。

深夜の闇に身を忍ばせるやうにして、一臺の自動車が麻布の神保の邸へ滑り込んだ。内燃機製作株式會社で決行した思ひきつた從業員の整理が、遂に全從業員の勞働爭議に惡化して、險惡な空氣を漲らしはじめたので、支配人が應急手段について伯爵と打合はせに急遽彼を訪ねたのだつた。

呼鈴を押しても出てくる者がない。いらだつた感情のなかに支配人は何かなう不吉なものを豫感した耳をすますと、森閑とした邸には、ただ電話のベルだけがあはたゞしく鳴りひゞいてゐた。

共同制作1930年に就いて

共同制作に關する幾多の文學理論が、昨今文壇の各方面に於て論議された。さうしてそれらの理論に基いて、今や當然實際作品が示される時期に到つた。

文壇に於けるこの論議より以前に、我々は共同制作に就て獨自な理論と見解とを有しこれの實際制作について、種々に考究の結果はからずも一致するところのものを多く持つた。

我々は共同制作の可能性に對して、充分に光輝と希望を感じ、具體的方法について、數旬協議の結果、いよいよ大きな抱負をもつてこれの執筆にかかつた。

1930年はかくして提供された第一回の作品なのである。

旣に屢々論じられたやうに、社會主義文學に對して我等藝術派の作家は、この作品のもつ個人的特異性を重じてきた。これは實に共同制作を實行するに際して充分に警戒しなければならない危險性であつた。しかしこの危險性をよき協調のなかに切拔けうるならばそこは燦然たる共作品の生れうることを自信した。

例へば、淺原六朗、久野豐彦、龍膽寺雄、この作家のもつ、獨特な藝術的雰圍氣を、一應制限して、次に共作の法規のなかで、百パーセントに表現する。この點に成功するならば、個人の作品以上の作品が、ここに成功しうるわけである。

一個人の作家によつて制作された作品は、いかに精緻雄渾を極めたものでも、一箇のビルデイングを、それ自身完成せしめることは文學者としての畢生の大事業である。しかし文學が、作家個々の經驗から發生する以上、作家一個人の經驗よりは集團的作家の經驗の總合が、よく内容に於て豐富であり、形式に於て多彩であるべきかは、言を俟たない。つまり、集團作家による共同制作品は、その點

ビルディング街に該當する。我々は個々に於て、それぞれ一箇のビルディングを提供してきた。我々はこのビルディングを、整然と協調とによつて、更に有機的に連絡融合せしめ、齊然たるビルディング街を構成してみよう。論議のみ多く、未だかつて何人も試みなかつた文學的冒險を試みてみよう。

かくして、實際創作の具體的手法について眞摯愼重に協議するに到つた。

１９３０年は、とにかく我々のトリオが提供される第一回の私作品でない、ある意味では試作に屬するとも云ひうる。

從つて、まだ幾多の未完成と缺陷とをもつてゐる。しかしこの未完成と缺陷にもかかはらず、狹少なる經驗範圍から一歩突きぬけて各社會層にわたつて、共作のみのもつ特徴をも把握し得たことを信じてゐる。我々はまたこの著作品に於て高度の大衆的興味を附與すべく努力した。

我々のトリオは、各自が新興藝術派に屬する作家であること、モダニズム文學に對する率先提唱者の立場にあること、社會思想の傾向に於て共感するものを多く持つてゐること等に強力な共通をもつてゐる。

各作家の作品は、既に個人に於て多く示めされてきてゐる通りだ。我々は、今後個人としての私作にも激しく精進すると共に今後このトリオに於て、第二第三第四の共同創作品を提供して、その價値を世に問ふだらう。

淺原六朗
久野豐彦
龍膽寺雄
（ＡＢＣ順）

投稿規定

一、投稿は今後書留郵便にて送附されたし。尚返信用書留郵券を必ず封入の事。

此規定に反して萬一紛失したる場合あるも本社はその責に任ぜず。

一、投稿は「中央公論編輯部、投稿係」宛に郵送されたし。その場合必ず「中央公論原稿」と傍書ありたき事。

個人に宛てゝ發送せらるゝは差支なきも一度必ず係の手に渡るものなれば直接係に送らるゝ方便利です。

尚個人の私宅に宛てゝ送らるゝ事は絶對にお斷りします。

一、今日までの投稿で宙に迷つてゐる原稿が山積してゐます。お心當りの方で返送を希望せらるゝ方は、書留郵券を添へて早速申込まれたし。今後三ケ月を經て何等の交渉に接せざるものは燒棄します。

定價

	定價	送料
一冊	八十錢	參錢
六冊	四圓八十錢	送料共
十二冊	九圓六十錢	同

毎月一回一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます

△外國行送料は普通號一冊に付十六錢申受けます

△御購讀は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割增の事

△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料

△御照會次第詳細御回答申上ます

昭和五年九月十八日印刷
昭和五年十月一日發行　（禁轉載）

編輯兼發行人　島中雄作

印刷人　竹內喜太郎
東京市牛込區榎町七番地

印刷所　日清印刷株式會社

東京市丸ノ內ビルヂング五八八區

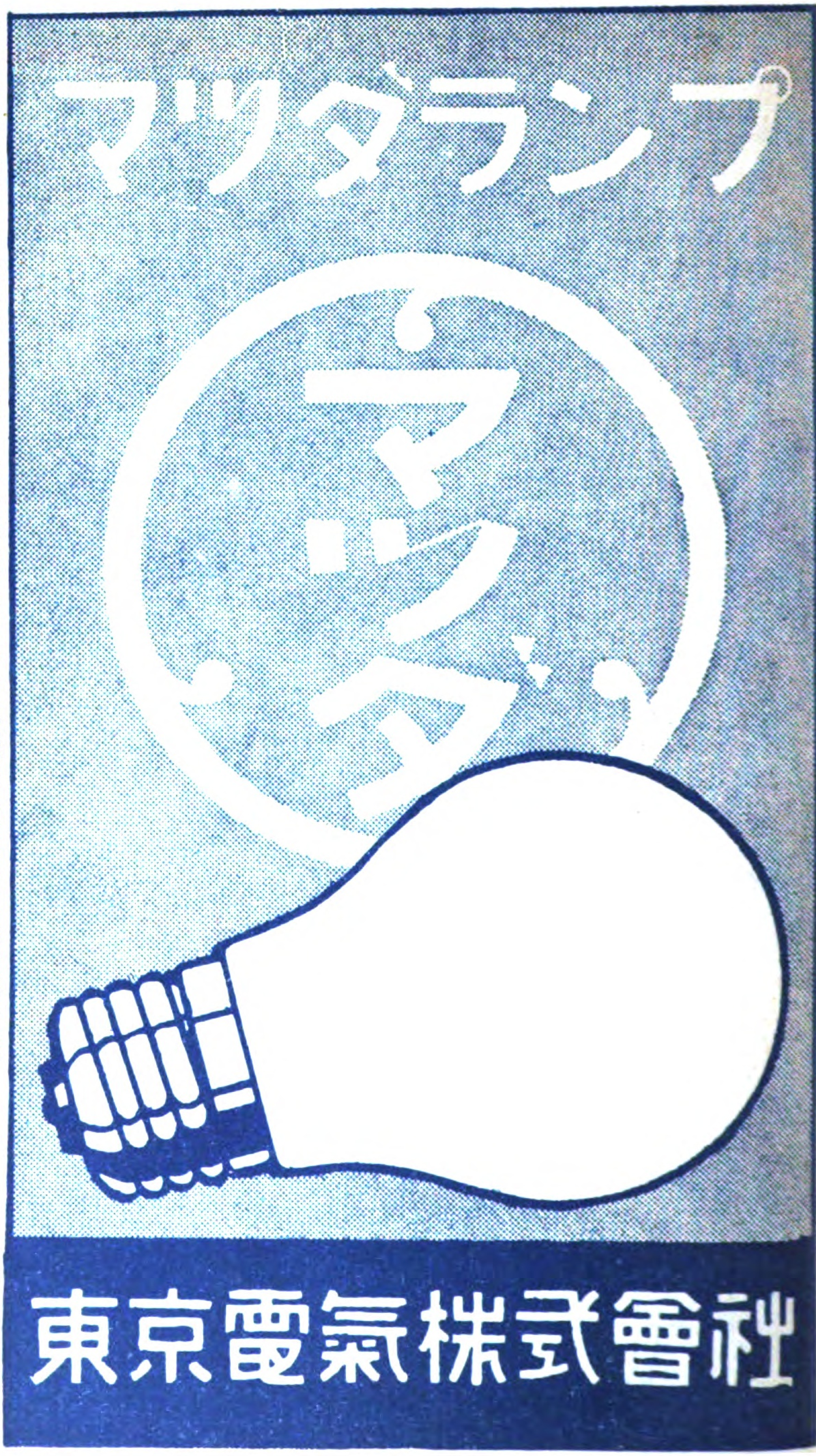
中央公論社

電話丸ノ內（〇〇〇）五三五・五三六・五三七番
振替東京三三四番
同　長野三二〇五番

登録商標

新包裝

マツダランプは今回左圖の新商標で市場に現はれます。一層の御愛用を願ひます。



マツダランプは強くて上品でいつまでも明るく電氣も御德でありますから電球はマツダランプと御決め下さい。

CHUO KORON (*The Central Review.*) **Published Monthly.**
By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co. TOKYO JAPAN.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48, Single copy 80 *sen* including
postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

